眠狂四郎孤剣五十三次

柴田錬三郎



新潮文庫

カバー 東 啓三郎

眠狂四郎孤剣五十三次

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎孤剣五十三次 柴田錬三郎

新潮文庫〔草〕一五〇 =21=

600

水野越前守忠邦の側用人武部仙十郎の密命により、徳川幕府に対する薩摩など西国十三藩の謀議を探るため東海道を西へ向う眠狂四郎。江戸日本橋で、岸和田藩主の懐中より謀議の連判状をまきあげたのを皮切りに、五十三の宿駅ごとに待ち受ける各藩のさまざまな刺客と対峙し、京都三条大橋に最後の強敵を倒す秘剣円月殺法の冴え！ 各宿駅の風物・人情を背景に狂四郎の活躍を綴る快作。

ISBN4-10-115021-4 C0193 ¥600E 定価600円

〜〜 新潮文庫 〜〜

柴田錬三郎の作品

- 剣は知っていた(上)
- 〃 (下)
- 江戸群盗伝
- 続江戸群盗伝
- 美男城
- 眠狂四郎無頼控(一)〜〃(六)
- 眠狂四郎独歩行(上)
- 〃 (下)
- 眠狂四郎殺法帖(上)
- 〃 (下)
- 孤剣は折れず
- 赤い影法師
- 運命峠(前)
- 〃 (後)
- 剣鬼
- 眠狂四郎孤剣五十三次
- 眠狂四郎虚無日誌
- 眠狂四郎無情控
- 眠狂四郎異端状
- 徳川浪人伝(上)
- 〃 (下)

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

眠狂四郎孤剣五十三次

柴田錬三郎著

新潮社

新 潮 文 庫

眠狂四郎孤剣五十三次

柴田錬三郎著

新 潮 社 版

2477

眠狂四郎孤剣五十三次

初春日本橋

節季が来ていた。

煤払いをおわった江戸の市中は、正月を迎える準備で、あわただしくなっていた。

この月、十五日を区切りにして、諸方の遊び場、物見の場が、すべて休みになってしまう。遊山見物もおわりである。代って、市中いたるところに、年の市が立つ。

各町内では、鳶の者が、辻に小屋を建て、〆飾りを商う。これは、大晦日夜半までのあきないで、元日の朝には、小屋の跡もとどめず、きれいに掃除も行きとどいている。

餅搗きの音が、きこえる。

割竹をさわがしく叩きたてて、節季ぞろ、と喚きたてて行く乞食の姿も多くなる。

通行人の足どりも、なんとなく、あわただしい。

その雑沓の中を、眠狂四郎が、ゆっくりと往く。

旧い年を送り、新しい年を迎える。この行事に忙殺されている市巷にくらし乍ら、この男は、次元の異った世界にいる。

煤払いにも、餅搗きにも、門松飾りにも、この男は、無縁である。

いま、通りすぎようとしている佐久間町河岸は、松市が立ち、往還の左右は、大小無数の松で、森林と化した観がある。門を飾る大松は、年の市では売らず、この松市で需めなければならない

ので、群衆の殺到も、もの凄くなる。

眠狂四郎にとっては、武蔵野の森が、ここへ移されたような光景も、べつに興味のないことであった。

ただ、一年ぶりに飄然として、江戸へ戻って来たこの異相の浪人者には、別の用事が、正月には待ちうけているようであった。

その用事というのは、何か――。これから老中・水野越前守忠邦邸へおもむいて、側用人武部仙十郎から、きくことになる。狂四郎は、越後の雪ふかい湯宿で、仙十郎の手紙をもらったのである。

常盤橋御門を入ると、視界の様子は一変する。

大名屋敷のならんだ内桜田は、正月が近づいていても、流石に、その多忙ぶりは、往還にまでみせてはいなかった。

門松もまだ飾られてはいない。

歳の尾の祝賀の使い番が、白く一重に咲いた室咲きの梅を、進物として、従者に持たせた姿などが、わずかに、節季らしい景色となっている。

「眠狂四郎殿、とお見うけつかまつる」

背後から、声がかかり、跫音がすたすたと近づいた。

狂四郎は、べつに振りかえりもせぬ。

つと、右脇へ肩をならべたのは、どこか小藩の家中、それもあまり身分の高くない定府、とみえる男であった。

笑いかけて来た顔は、大層愛嬌のあるものだった。目も鼻も口も、顔ぜんたいが、すべて、丸

かった。狂四郎よりも首ひとつ低く、小肥りで、武士としては、およそ威厳がない。
「結構な日和でござる」
男は、云った。
云われるまでもなく、狂四郎の痩せてとがった肩に当っている陽ざしは、節季のものらしくない、あたたかさであった。
「卒爾に、声をおかけ申したご無礼、お詫びつかまつる。実はな、昨夜、吉原の角万で、お手前と、部屋をとなりあわせたのでござる。お手前は、吉原などは、どの店の天水桶のかたちはこう、とまで知りつくされて居られようが、身共は、これで二度目でござってな。それが、なんと、この矮小の、野暮もきわまる醜男が、吉原芸妓に、もてたのでござる。……なんだそうでござるな、吉原芸妓というのは、座敷へ出るにも、二人ずつ、組んで出て、絶対に枕席には侍さない規則が、あるのだそうでござるな。もし、枕席に侍したことが露見すると、見番の札が削られ、その茶屋は提灯を止められるのだそうでござるな。それが、どういう風の吹きまわしか、四人呼んだ芸妓のうち、柳のようにほっそりした、どこやら影のうすい、おとなしい女が、身共のからかいを、真に受けてな、諾と申したのでござる。いやはや、身共の方が、びっくりつかまつってな——」
よく喋る。
すてておけば、とめどなく、喋りつづけそうである。
狂四郎は、道三橋の脇を過ぎ、大名小路の入口に来た時、その饒舌を止めることにした。
「お主！」
その語気に、鋭いものを含ませた。
「なんでござるな？」

「刺客であろう、お主？」
「………」
急に、男は、口をつぐんだ。
「わたしを殺すのに、手数をかけて、わざと右わきに竝んだり、喋りたててみたりしているが、徒労のようだ。お主の手の内が見えて居る」
「………」
「お主は、わたしが、お主を刺客であることを看破るのを、あらかじめ計算していたらしい。およそ刺客らしくないお主が、それだけの要心をしたのは、結構だ。ただ、わたしが、お主の手の内まで看て取るということまでは、思いいたらなかったようだ。……お主は、わたしが、抜き討とうとするのを待っている。その刹那に、お主は、わたしの右手を押えておいて、脇差を抜いて、刺すつもりであろう。……無駄だな」
男の足が、停った。
狂四郎は、そのまま、同じ歩調で、大名小路に入った。
ものの十歩も、はなれたろうか。
「眠狂四郎殿！」
男が、呼んだ。
「身共は、都田水心と申す。近い将来、必ず、お手前を、討ち果してみせ申す！」
もとより、狂四郎の返辞はなかった。振りかえりもしなかった。

水野邸内表長屋の、側用人宅の書院に坐った狂四郎は、しめったにおいのこもっている冷たい空気に、なつかしいものをおぼえていた。

老人は、この自分を死地におもむかせる依頼を、この書院で、いくど、したことだろう。生きては到底還れぬ、と思われる仕事を、小犬かなにかをすてて来て貰おう、といった、ぬけぬけした口調で、老人はたのみ、それをなしとげて報せに来ても、まるでそれが当然のことのように、

「あそこには、美人が揃っていた筈じゃが、一人ぐらいは抱いたかの」

などと、笑っている老人であった。

狂四郎は、五尺足らずの、額と顴骨が異常に突出した、およそ風采のあがらぬ姿が、ひょこひょこと入って来て、座に就くと、

「老人も、来年は古稀か」

と、云った。

「年寄の冷水は、いい加減にせい、というのかな。なかなか、そうは参らぬ。あと十年は、ご奉公いたさねばならぬの。公儀にも人は居らぬが、当家にも人は居らぬ」

狂四郎は、無表情で、老人を視ている。知り合ってから十年になる。全く同じ貌をしている。この老人は、三十年も前から、すでに年寄であったか、と疑われる。

「このたび、殿は、本丸に入られた」

武部仙十郎は、云った。

これは、越後の湯宿にいた狂四郎の耳にも、つたわっていた。今年五月に、忠邦の強敵であった本丸老中・水野出羽守が逝っていた。

老中筆頭・大久保忠真が、出羽守が空けた座へ、はたして、西丸老中の忠邦を据えるかどうか、

大名・旗本たちは、それぞれの不安と期待をもって、眺めていたのであった。
「殿が本丸に入られても、先月までは、べつに、殿中に波も埃も立たなかったな。ところが、この月に入って、妙なことが起って参った」
「…………」
「西国十三藩の大名衆が、一斉に、正月に帰国を願い出た。これまでにあり得なかったことじゃ。……薩摩をはじめ十三藩の大名衆が、ひそかに一堂に集って、謀議したふしがある。本丸に入られたわが殿に対する、ただのいやがらせであれば、なんのことはない。もっと腹黒いこんたんが、うかがわれる」
「…………」
「貴公に、ひとつ、十三藩を対手にしてもらおうと思ってな」
「わたし一人でか？」
「助っ人が欲しければ、何十人でも、付けるが、それは、貴公の性分に合うまい」
老人は、にやりとしてみせた。
「ご老人――。わたしは、公儀庭番でもなければ、甲賀伊賀衆でもない。べつに忍びの術を修業もして居らぬし、そういう行為も好まぬ」
「なんの……、貴公に、謀議の内容をさぐる隠密のまねをしてもらいたい、と申して居るのではない。……白昼堂々と、振舞ってもらって結構だ」
「たとえば？」
「たとえば――そうさの、天下の大道で、大名に赤恥をかかせる、などというのは、どうであろうの？」

「…………」

「まず、手はじめに、対手にえらんでもらいたいのは、正月元旦、年始の賀儀もせずに、帰国する者が二家ある。萩の毛利と、岸和田の岡部——。公儀もなめられたものだの。これが、五十年前なら、たちまち、改易の処分をくらう振舞いだが……」

十一代将軍家斉は、すでに晩年を迎えて、幕府年中行事を煩しがるようになり、最も盛観である べき歳首の儀式も、ここ三年ばかりは、不例を理由にして、御座の間へも、白木書院へも姿を現していなかった。したがって、献上太刀目録の披露も、呉服下賜も、月番老中が代りにつとめ、賜盃の式も挙げられてはいなかった。

今年もまた、出座がないことは、わかっていた。それにしても、元旦の拝賀を黙殺して、早々に帰国するとは、よほどの僭上と云わねばならぬ。あきらかに、初春の月番をつとめる水野忠邦に対するいやがらせであった。

「どうであろうの、岸和田の岡部あたりは——。当代は、男盛りで、智慧もまわるし、野心も強いし、癇癖でもあり、対手にまわして不足はない」

「…………」

「わしが、察するところ、十三藩の大名衆それぞれ、謀議の連判状を、懐中にして、帰途につく模様じゃな。そいつを、岡部長慎殿の懐中から、まきあげてもらえれば、幸甚じゃ。……元旦の朝ぼらけ、場所を日本橋の橋上あたりにえらんで、堂々と、大名衆の懐中から、大切なしろものを、まきあげる、などという趣向は、また格別の愉快ではないかの」

途方もない難事を、平然と口にして、老人は、にやにやしてみせた。

狂四郎は、依然たる無表情で、老人の顔をじっと見まもっていたが、

「釣りあげるには、餌が要るが――」

と、云った。

この老人が、餌を用意してくれていない筈はないのだ。

はたして、老人は、

「うむ。いま、これへ――」

と、こたえて、手をたたいた。

女中にともなわれて、入って来たのは、武家娘であった。

美しかった。鼻梁がやや高すぎる難点は、ふっくらとした頬の丸みが救っていたし、二重頤の輪廓の薄さは、ほっそりと長い頸すじの線の綺麗さがおぎなっていた。肌の白さ、肌理のこまかさは、無類であった。

「理江、という。これの父親は、岸和田藩の小納戸頭取であったが、三年前に、殿の癇癖にふれて、手討ちにされて居る。……餌にならぬかの？」

狂四郎は、しかし、それには、すぐこたえず、娘へ、冷やかな眼眸をくれていたが、

「そなた、まだ、男を知らぬ生娘か？」

と、妙な質問をあびせた。

「はい」

理江は、頷いた。

「父の讐を復つためには、肌を衆目にさらしても、堪える覚悟がなければならぬ。それができているか？　苦界に身を沈めて、敵をさがした女もいるぞ」

「はい。覚悟は、できて居りまする」

狂四郎は、その返辞を待って、老人へ視線をまわした。

「餌になるようだ。……どんな趣向にするか、大晦日まで、どこかで、酒をくらい乍ら、思案いたそう」

狂四郎は、無想正宗を携げて立ち上った。

書院を出て行こうとして、ふと思い出したように、

「ご老人。ここへ参る途中で、刺客に出会った。わたしを、貴方に会わせまい、としたところをみると、十三藩がたにも、すでに、貴方の邪魔だてを、かなり気にしている者がいることだ」

そう云いのこした。

元旦明け六つ——江戸の空は、雲影ひとつとどめていなかった。

ただ、風が鳴って、寒気はきびしかった。

市中は、ひっそりとしている。町家の板戸はみな閉じられて、往来には人影は絶えている。

東雲がたなびく頃までは、熱鬧のちまたであったものが、夜が明けるとともに、嘘のように、しーんとひそまりかえって、急に往還の幅が広くなったのをおぼえさせる。

ただ、町毎の辻に、葭簀がこいの辻店だけがひらいている。紙鳶売りである。正月元日に、あきないをするのは、紙鳶売りだけであった。

しかしまだ、この時刻には、子供たちも、屠蘇を祝っていないので、おもてへ駆け出して来てはいない。

江戸の中央——日本橋が、二十八間の橋上に、人影を絶っているのは、この朝だけである。

六間の幅が、十間にも見え、霜を置いた葱宝珠高欄が、高く感じられる。

北方に上野の山、西方に江戸城、南方に富嶽が、そびえたち、そして東は海づら近く、初陽は、波を渡って、さしそめている。

まさしく、風色真妙、絵となって動かぬ眺めであった。

平常なら、もう、数百艘の漁船、槇船が、ひしめくように入って来ている頃だが、この朝ばかりは、一艘も漕ぎ寄せられてはいない。橋下には、数十艘が、ひっそりとねむっている。

と——。

「は、はっくしょっ！」

不意に、ちょうど橋の真下の一艘で、大きなくしゃみをした者がある。

豆しぼりを泥棒かぶりにした巾着切の金八であった。

「ちょっ、寒いや、骨が鳴らあ、こん畜生！　武者顫いも、半刻つづくと、いいかげん、志気やら小便やらを、そそうすらあ。早く来やがれ、五万三千石野郎！」

ぶつぶつ、独語している折——。

室町の方角から、かなりの早さで、行列が近づいて来た。

華美に流れ、分限を超え、異風を凝す風潮のこの時代にあっては、ひどく地味な行列であった。

槍、打物、挟箱、長柄傘、乗物——いずれも黒色を基調としている。

岸和田藩は、初代岡部宣勝が、寛永九年、摂州高槻より移封されて、入城して来たその日に、飢えた農民の大集団の強訴に遭って以来、代々、領内いたるところで、一揆、逃散が起っている藩であった。

貧乏藩として、下からかぞえた方がはやいくらいであった。そのために、藩の方針は、節約ひ

とすじであった。行列が質素なのもやむを得なかった。
下座触れ役の先徒が、橋袂に達した時であった。
突如——。
京橋がわから、ツツツ……と橋上へ奔り出て来た者があった。
美しく正月の晴着をまとった武家娘であった。
凛と、柳眉を張りつめた貌は、武部老人が眠狂四郎に餌として与えた理江のものにまぎれもなかった。
なかばまで駆け渡ると、裳裾をわけさばいて、ピタリと正座した。
「あれは？」
「なんだ？」
先徒や、それにつづく小人目付らは、不審の眉宇をひそめたが、次の瞬間、理江の右手に懐剣がひらめくのを視て、ぎょっとなった。
さらに——。
供連の面々を、仰天させたのは、次に為した理江の振舞いであった。
懐剣の切っ先を胸に当てるや、胸高に締めた帯を、さっとまっ二つに切きはなして、晴着の前を左右に押しひろげ、胸の隆起から腹部まであらわにした。とみるや、切っ先を、腹部の左わきに擬した。
すなわち、切腹の身構えをとったのである。
燃える緋色の下着の中に、白い柔肌を、惜しげもなく、初陽にさらしつつ、理江は、声を張って、行列へ呼びかけた。

「岡部美濃守様へ、見参！」

供連のうちから数人が走り寄って来ようとするや、理江は、さらに声音を高くして、

「寄られるな！　寄れば、元旦の日本橋の上を血でけがしまするぞ！」

と、叫んだ。

藩士たちの足は、その場へ釘づけになった。

正月元旦には、不吉の一語を口にしても、烈しい非難をあびなければならない程、慣習が隅々までゆきとどいた時代であった。

江戸の中心——五街道の起点である日本橋の橋上が、元旦早々に血でけがされたならば、いかなる騒動になるか、想像にあまりある。

藩の破滅をまねく原因にならぬとも限らぬのである。

庶民すべての非難攻撃が、岸和田家に向って集中したならば、公儀と雖も、すててはおけまい。今は、幕府が、庶民の機嫌をとらねばならぬ時世なのであった。

「おのれ、物狂いか、それとも、意趣か！」

小人目付が、呶鳴った。

「意趣に候。三年前、殿より、理由もなくお手討ちに遭いし小納戸頭取大塚三郎兵衛がむすめ理江にございます。中有にさまよう亡父が霊魂を鎮めんがため、思案の挙句、斯様にしてお行列をさえぎり、殿様じきじき、わたくしに向って、許せ、と一言、お言葉を賜りたく存じまする。もし、拒否あそばすに於ては、前例もなきこと乍ら、この場にて、見事腹をかき切り、父娘の無念を、世間にひろめる存念にございますれば、何卒、殿様には、お乗物よりお出ましの程を、願い上げまする」

理江は、おちついて、云いはなった。
家老の中兵左衛門が、橋袂まで出て来て、この口上をきいた。
「やむを得ぬ」
急いで、乗物のところへ、ひきかえして、美濃守長慎（ながちか）に、報告した。
「推参な！　よし、参ってくれる！」
長慎は、草履を揃えさせるのも、もどかしく、乗物から出た。
「殿――。お手討ちの儀は、おさしひかえ下さいますよう……。峰撃ちにて」
兵左衛門が、忠告すると、
「わかって居る！」
長慎は、小姓から差料をひったくると、一人で、ずかずかと、橋板を踏み鳴らして、理江に近づいて行った。
二間に距離が迫った――瞬間。
葱宝珠高欄を、鳥の迅（はや）さでおどり越えた者があった。
長慎が、抜刀するいとまも与えずに、体当りをくれて、ぱっと跳び遁（に）げた。
「曲者（くせもの）っ！」
長慎が、白刃をかざした時には、もう理江の横あいまで逃げていて、
「お嬢さん、にげろ！」
と、叫んでいた。
「おのれっ！」
長慎は、猛然と追った。

藩士一同も、どっと橋上へ殺到した。
金八は、理江をさきに奔(はし)らせておいて、逃走し乍ら、小面(こづら)憎く、
「へへへ……、金八船々(ふねふね)、追手に帆かけて、しゅら、しゅしゅっと来らあ」
と、へらず口をたたきつつ、いま、長慎の懐中からすり取った十三藩の藩主連判状をかざして、ひらひらさせてみせた。
長慎は、完全に逆上してしまった。
しかし――。
橋袂まで追って、長慎は、ぎくっ、となって、足を停めなければならなかった。
理江と金八が、遁(のが)れ去ったあとに、異相を持った黒羽二重(はぶたえ)の着流し姿が、ふところ手で、うっそりと立ったからである。
岡部藩百七十余人を対手にする鋭気が、その冷たい双眸(そうぼう)にも、痩せてとがった肩にも、湛(たた)えられていた。

品川女郎衆

正月元旦は、人影もなく、ひっそりとしていた往還も、二日になると、織るような人出になる。
まず、初荷がどっと出る。車力も新しければ、印半纏(しるしばんてん)も新調の、揃いの染手拭いで、鳶頭(とびがしら)を先頭に、威勢のいい掛声をひびかせて行く。
町家の旦那衆が、黒羽二重紋付き小袖に、麻裃(あさかみしも)をつけて、今日ばかりは飾りの脇差を佩(お)びて、

丁稚を供にして、年始まわりに出かける。大工の棟梁も料亭の女将も、幇間も、それぞれ、きまりのいでたちで、道をいそぐ。

そして――。

空には無数の紙鳶が舞っている。

町かたでは、往来遊びのうち、子供たちに年一度、この正月だけ、紙鳶あげが許されているのであった。立春の季に、空を仰ぐのは、養生のひとつ、とされていたので、紙鳶あげは、市井の狭い路上でずいぶん通行の邪魔になったが、武士たちも、夢中になって走る子供にぶっつかられても、笑って許すならわしであった。

女子たちが羽根を突く音も、紙鳶の紙箏の音に加えて、のどかな正月景色であった。

これに加えて、鳥追いの三味線の音、三河万歳の飄逸な懸声、獅子舞いの笛太鼓――。

眠狂四郎は、その平和な江戸の街をあとに、高輪の大木戸を抜けて、東海道を西へ向って、歩いて行く。

御世泰平は、昨年につづき、今年も、と思わせる。

高輪の大木戸からは、朱引外（市外地）になり、眺めは一変する。

町屋も片側町になり、海に沿うて牛町、車町――その裏側は、荷車を挽く牛の宿屋が竝ぶ。

誰の句であったか、

　芝浦や車のうへにはつ霞

というのがある。

正月の装いも、牛があるじで、頭に注連飾りをかけてもらい、草鞋も新しくはきかえさせられ、もうと啼く声も、なにやら、目出度げに、ひびかせる。

往還には、初大師詣での老爺老婆にむかって、立場の馬子が、どなりたてている。
「馬をやらんけえ、馬を——」
赤ふんどしを、地面すれすれまで垂らした極道面が、
「おうおう、そこの御隠居、馬をやらんけえ。初乗り、って縁起がいいぜ。どうせ、女には縁がなくなっていいるんだからよう、せめて、馬に、初乗りとしゃれてくれろ」
「初乗りには、どんな功徳があるかの？」
「いろいろ、あらあ。往来は、牛と馬と犬の初糞だらけよ。踏んづけて、すべって、ころんで、三月も寝込んだ婆アがいらあ。……第一、富士のお山だって、地べたから見るよりは、馬の背中から、ふり仰ぐ方が、高くならあ」
「子曰く、山高きが故に尊からず」
「臍まがりなことを云わねえで、乗ってくんねえな」
「わしの国は、信州での。山の高いのは見馴れて居るし、馬にも女にも乗りあきて居るわさ。民謡にもあるのう……お前に乗鞍、わしゃ槍嶽、といってな」
「ちょっ！　くそ爺め、ばば色を踏んづけて、腰っ骨でも折りやがれ」
馬子は、口ぎたなくののしっておいて、次の客を物色していたが、ふと、近づいて来る眠狂四郎の姿をみとめると、急に顔色を変えて、馬の首を、ぐいと向けかえさせると、品川宿の方へ、大急ぎで、行ってしまった。
それと気づいた振りもなく、狂四郎の常に変らぬふところ手の着流し姿は、いかにも行く先のあてもないものにみえた。
品川宿の入口に来て、狂四郎は、眉宇をひそめた。

立場茶屋のお茶汲み娘を対手に、羽根をついているのは、金八であった。

「どうした、金八？」

声をかけると、金八は、

「おっ！　先生、待たせやすねえ。嘘をつく羽根、待たせておいて主はどこかへ外れたやら、って——気をもんでいたんですぜ。待つこと久し、二刻半」

「ここで待って居れとは、命じたおぼえはないが……」

「そっちにおぼえはなくても、こっちには、大あり名古屋のこんこんちきだあ。……先生、惚れられちまったんでさ、足駄をはいて首ったけ、というやつだ」

「……」

狂四郎は、黙って歩き出した。

金八は、跟いて来乍ら、

「理江様って——あのお嬢さんが、どうしても、先生にくっついて、東海道を上る、ってきかねえものだから、武部の爺様に相談し奉ったら——金八、供をせい」

「……」

「先生のあとになり、さきになり——って次第に相成ったんだが、ご迷惑ですかい？」

「……」

「返辞がねえや。……しかしね、先生、元日早々、日本橋の橋の上で、腹を切る覚悟をしたくれえの勝気なお嬢さんですぜ。こうと思いきめたら、テコでもあとへ退きやしませんぜ。……この品川宿の、相模屋って旅籠で、鳥追い姿で、待っていまさ」

ものの二町も行くと、右側にずらりとならんだ紅殻格子（べんがらごうし）の中から、かまびすしく嬌声（きょうせい）が、往還へとぶ。

「ちょいと、そこのいなせなお兄哥（あにい）さん。刷毛（はけ）先の曲げっぷりといい、振り分けの掛けっぷりといい、様子がいいよ。おまけに、その着物、古渡（こわた）りだろ、渋くて、ふるいつきたいやね」

ほめられて、金八は、紅殻格子へ寄って行き、

「恋の品川女郎衆に袖ひかれ――って、うめえことを云やがる」

「あがってくれるんだね」

「それが、あいにく大森に急用があってな。戻りに寄らあ、大森細工の松茸（まつたけ）を土産に持ってな」

「細工物はごめんだよ。本物の方を、おくれな」

「品川女郎衆は、去年から三割がた高くなったって噂（うわさ）だぜ。本日天気、青楼なれども、金高し、か」

狂四郎の方は、すでに半町もさきを歩いていた。

と――。

とある店の格子から、ぽんと、長いものが、投げられた。

帯であった。

巻紙がめくれるように、狂四郎の前を、するするところがって行き、往還の幅いっぱいに、ひろがった。

狂四郎は、黙って立ちどまった。

浅黄の更紗（さらさ）帯に、大きな文字で、

晴れてうれしゅう相生獅子を待って交さんまくら獅子と、記してある。

金八が、いそいで追いついて来て、

「へえ、道に帯を締めさせるたァ乙なまねをしやがる。どんな面相だい？」

と、格子へ寄って、覗き込み、「おっ！」と叫んだ。年増であったが、朱引外の女郎屋などに置くのは惜しい眉目のすっきりした、肌の綺麗な女であった。

「びっくりさせやがる。いくら、おめえ、三界に家がなくったって、苦界にまで降りることはなかろうぜ、この器量でよ」

金八が、云いかけたが、女は、眉宇も動かさず、無表情であった。

「金八──」

狂四郎が、呼んだ。

「へい」

「おれは、この女を買う。お前は、相模屋へ行って、理江をつれて、先に行け。小田原あたりで待って居れ」

「先生、そんな殺生な──。いくらこの女郎が渋皮がむけていたって、理江様とは比べものになりませんぜ。生娘が据膳据えて、待っているというのに……」

狂四郎は、金八にかまわず、暖簾をくぐって、入って行った。

壁も天井も汚染だらけの、薄暗い部屋にあがった狂四郎は、床柱を背にして坐ると、目蓋を閉じた。

長襦袢姿になった女が、酒と肴をはこんで来て、猫足の膳を前に置いたが、狂四郎は、盃を把ろうともしなかった。

「下戸でござんすか？」

「いや。元日に屠蘇をくらいすぎて、宿酔だ。牀をとってもらおう。ひとねむりする」

「あい」

女は、押入から、夜具を、とり出して敷きはじめた。

狂四郎は、薄目をひらいて、ゆっくりとした動作の女の肢体を、眺めやった。

肩の線も、胴の線も、崩れてはいなかった。三十を越えている大年増だが、女郎になってまだ日が浅いのか。

狂四郎は、黒羽二重を脱がずに、そのまま、牀に就くと、

「添寝は無用だ。暮れ六つになったら、起してもらおう。用足しに出かけて来る。お前を抱くのは、そのあとだ」

と、云った。

女は、ちょっと、ためらっていたが、

「あの……では、まことに勝手でござんすが、お前様がおやすみのあいだ、近所へ行かせて下さいまし」

「こっちも、その方が都合がいい」

「子供を、近所の漁師の家に預けて居ります。元日に、女郎の外出は、世間様をはばかりますので、屠蘇を祝うてやることが、できませなんだ。……今日、祝ってやりたいと存じます」

「行って来るがいい。ゆっくりでよい」

「有難う存じます」
女は、礼を述べると、出て行った。
狂四郎は、それからすぐに、ねむりに陥ちた。

「もし――」
掛具の上から、ゆさぶられて、狂四郎は、目蓋をひらいた。
「いま、暮れ六つの鐘が鳴りました」
女が、告げた。
狂四郎は、起き上ると、女が茶漬けでもとすすめるのをことわって、無想正宗を左手に携げた。
出て行きがけに、ふと、気がついたように、
「お前の子は、男児か？」
と、訊ねた。
「はい」
「では、子供に、土産を持って来てやろう。子供が、びっくりするような珍しい品を――」
「本当でござんすか？」
「嘘は云わぬ男だ、と思ってもらおう」
狂四郎は、階下へ降りたが、まっすぐに、おもてへは出なかった。
厠へ入るとみせて、台所を抜けると、裏手から出た。そこは、崖下になって居り、人一人やっと通れるほどの狭い通路であったし、墨を流したような暗闇の中を辿ることになる。

それきり……狂四郎の姿は、闇の中へ没した。

高輪から品川の宿に入るまでの往還は、殆ど人影が絶えていた。

高輪の大木戸は、暮れ六つの鐘を合図に、閉じられるし、この時刻から旅へ出る者もいなかった。旅人がいなければ、馬子も姿を消すし、立場茶屋も店を閉じる。

ひろびろとした往還を、海寄りの側をひろって、一列になって、普化僧(ふけそう)の一団が、進んで来た。

大木戸が閉じられる寸前に、通って来たのである。

池上の本門寺へ行く道と岐(わか)れる辻へ来た時であった。

常夜灯の蔭から、幽鬼のように、黒影がひとつ、辻の中央へ歩み出て、普化僧団の行手をさえぎった。

普化僧団は、一列のままで、立ちどまった。

「十三人か。この三ヵ日のうちに、江戸を発つ大名行列が十三藩。恰度(ちょうど)、一人ずつ、護衛役として配分されるわけか。そうなのだな、薩摩隠密衆？」

眠狂四郎は、云いあてた。

返辞はなかった。返辞の代りに、一斉に、深編笠をぬぎすてた。

当然――。

狂四郎の八方分身に備える包囲の陣形がとられるものと、思われた。

しかし、それは、為(な)されなかった。

並木のごとく一列の隊伍(たいご)を一歩も乱さず、左拳(こぶし)を額にあてて、切っ先を天に直立させる上段の構えをとった。

これは、寛永のはじめ瀬戸口備前守が編んだ自源流の構えであった。

渠らは、薩摩藩が、百年の長きに亘って、組織を完備した隼人隠密党と称する暗殺団の面々であった。

多剣をもって、一刃を襲うのは、薩摩隼人の面目にかけて、これは択らぬところであった。それだけに、天稟をそなえた異数者がえらばれ、その修業も尋常一様ではなく、修業中途で半数が斃れ、生き残った者が、党士に組み入れられ、さらに、幾段階に分かれた序列を、凄じい競争によって昇って行くのであった。

公儀庭番などが到底及ぶべくもない異常な手練者揃いであった。

狂四郎と雖も、これら十三人に、一挙に襲われたならば、あるいは、勝味はないであろう。

隼人隠密党は、いかに多勢の隊伍を組んでいても、一騎討ちを厳法とし、一人が仆れれば、また一人、その屍をのり越えて来る、と知っていたからこそ、狂四郎は、渠らの面前に出現して、決闘を挑んだのである。

狂四郎は、常夜灯を後楯にとり、おのが孤影を、長く地面に延ばしておいて、無想正宗を抜いた。

まず、切っ先を、地面すれすれの地摺りの構えにとることは、円月殺法という妖気の一閃を生むこの男の、起刀の常法であった。

ただ――。

いつもとちがっていたのは、地摺りに構えた瞬間、燦と刃を煌めかせて、峰をかえしたことであった。

自ら進んで、決闘を挑んだこの男が、峰撃ちをする道理はなかった。刃を上に向けたのは、自

源流に対する工夫とみえた。
ゆるやかに白刃の円を描きはじめたのは、これは、これまでの決闘と変りはないことだった。
直立上段に構えた薩摩隼人は、狂四郎が、完全な円を描きおわるまで、能く満を持した。
無想正宗が、再び元の地摺りに還った刹那、隼人の五体は、剣と一如になって、地を蹴った。
「とおっ！」
氷結した湖面を裂く神渡りに似た白光が、宙をつらぬいた。
同時に、無想正宗が、地面から、目に見えぬ迅さで、はねあがった。
よろめいたのは、隼人の方であった。
「……むっ！」
呻きを口腔内で殺して、左の耳を掌で押えると、数歩しりぞいた。
「一個」
狂四郎は、ひくく呟いて、元の地摺りの構えに戻った。
狂四郎の足もとには、切断された耳朶が、ぺったりと、落ちていた。
二番手は、一番手より、さらに半歩踏み込んだ間合をとって、狂四郎を、かっと睨み据えた。
狂四郎は、再び、円月殺法を起した。
無想正宗が、地摺りに戻るのも同じならば、隼人が、一髪一唾までも闘いにかりたてた気合を噴かせて斬り込むのも、同じであった。
そして、その耳朶は、狂四郎の足もとへ、落ちた。
「二個――」
狂四郎は、冷たく、かぞえた。

三個。
四個。
五個。
狂四郎の足もとに、切断された耳朶の数が増した。
敗れた者は、遠くへ退き、直立上段に構えた者は、おのが順番を待って、狂四郎の前へ進む。
凄じい懸声が、宙をつらぬくほかは、沈黙は、深くまもられていた。
ついに――。
狂四郎の足もとには、十個の耳朶がちらばった。
十一番目の隼人を迎えた時、狂四郎は、急に眉宇をひそめた。
常夜灯の明りに浮きあがったその貌は、彫深く、あきらかに、異邦人の血が混ったものだったのである。まだ二十歳を越えたばかりの若さであった。
おのれと同じ混血の兵法者を視て、狂四郎の胸中は、微かに波立った。
はじめて――地摺りの剣は、そのまま、動かなかった。
剣は動かずとも、眼光と眼光が宙でぶっつかるうちに、汐合は、きわまる。
その刹那――。
懸声を発して、撃って出たのは、狂四郎の方であった。
隼人の太刀は、高く夜空へ飛び、渠は、左手くびを押えて、よろめいた。
「十一個」
と呟きすてられるのは、十二番手との闘いの後のことになった。

楓（かえで）という源氏名の、その女郎は、薄暗い部屋に、ひっそりと坐っていた。
――あの浪人者は、いまごろは、凍（い）てた路傍につめたくなって、横たわっているのではあるまいか。
その想像が、胸の裡（うち）に、疼（うず）きを生んでいた。
楓は、ただの女郎ではなかった。
薩摩藩の小姓組番頭であった者の妻であった。後家となって、間者にしたてられ、昨秋から、品川女郎衆に売られて、紅殼格子の中から、往来する各藩の士を、見張る役をつとめていたのである。
「眠狂四郎という、異相の浪人者が通るゆえ、引きとめて、登楼させせよ」
江戸藩邸からの密命があったのは、元旦の宵であった。
今日――二日、午後に入って、薩摩藩の手先にしている馬子から、「眠狂四郎が来た」と急報があるまでは、まだ、どのような手段で、引きとめるか、思案がついていなかった。
咄嗟（とっさ）に、帯を投げて、狂四郎の足を停めさせたのは、自分自身、思いがけずに湧（わ）いた智慧（ちえ）であった。
狂四郎は、暮れ六つに用足しに出かけて来る、と云って、起すのを命じたが、偶然であろうか、隼人隠密党が、人目を避けるために、暮れ六つに、高輪の大木戸をくぐって来るのは、楓にもあらかじめ報（し）らされていたことだった。
楓は、狂四郎と隼人隠密党が、往還上で出会い、悽惨（せいさん）な血闘をくりひろげるに相違ない、と予想せざるを得なかった。

奇妙なことに――。

枕も交さなかった眠狂四郎という浪人者が、なぜか、楓の脳裡に、強い印象をのこしたのである。

いつの間にか、藩敵である男のことを、想っている自分に気がついて、狼狽した楓であった。

――無事に、遁れてくれればよい。

思わず、そう念じた瞬間もあった。

想いをひそめて、じっと坐りつづけているうちに、楓は、わが身の置かれた状態に、惨めな哀しみさえおぼえていたのである。

不意に――。

襖がひきあけられ、視線を擡げた楓は、はっとなった。おどろきをかくすいとまもなかった。

狂四郎は、にやりとすると、携げていた革袋を、楓の膝の前へ拋った。

「約束通り、子供に土産を持って来てやった。受けとっておけ。……別の用事を思い出したので、今夜は、ここには泊らぬ。……二度と会うことはあるまい」

襖が閉められた。

「あ、あの――」

楓は、あわてて、走って、襖を開けた。

しかし、もう、跫音は階段に移っていて、姿は見えなかった。

楓が、革袋を披いてみたのは、一刻も経ってからであった。

中には、十二個の血まみれの耳朶が入っていた。

厄除(やくよ)け川崎

今日も、晴れて風もなく、佳い日和であった。

朝陽のさしそめた街道上に、人影は多い。乗掛け馬で往く伊勢詣での隠居、それの供らしい若夫婦。亭主は、半合羽(かっぱ)の蔭に帯びた道中刀が窮屈そうだし、女房は、白足袋に結付けた草履を、内股(うちまた)にはこぶのが、聊(いささ)か辛そうである。ともに、生れてはじめての長旅とみえる。

六十六部(ろくぶ)や旅商人が、足馴れた歩調で、追い越して行く。白衣に、まっ赤な天狗(てんぐ)の大面を背にした金比羅(こんぴら)詣での一団が、ガヤガヤと陽気に喋りたて乍ら、道幅いっぱいに占領している。

眠狂四郎のふところ手姿は、これらの街道風景をいろどるには、およそふさわしくないものだった。

素姓をかくせぬ彫の深い異相、蒼白(あおじろ)く沈んだ皮膚、そして、痩躯(そうく)に漂わせる冷たい孤独の翳(かげ)は、他の旅人たちと同じように、明るい陽光を受けているのが、ふしぎなくらいである。

無数の敵から不意に襲われているうちに、しぜんに、そうなった音を立てぬ独特の歩きかたが、一層その姿を、妖(あや)しいものにみせているのであった。

急ぎの旅らしい町人が、狂四郎のうしろに長くのびた影法師を、踏もうとして、あわてて、避けて、遠まわりして追い越して行ったのも、その妖気を、おそれたからに相違ない。

品川を出て、はじめての一里塚の一本榎(えのき)が、すぐそこに、そびえ立っている。

一里塚は、江戸日本橋から、一里毎に築かれた塚で、目印に植えられているのは、榎であった

り、松であったり、楡(にれ)であったり、さまざまで、一本もあれば、夫婦樹(めおと)の場合もある。人馬賃銭の支払いの目安になる。

その一本榎の根かたに、十二三の少年が、蹲(うずくま)って、膝小僧をかかえていた。

近くの漁師の伜(せがれ)と判る、日焼けた顔の、粗末な身装(みなり)であった。

狂四郎が近づくと、ピョンと立ち上って、

「おさむらい――」

と、心安だてな呼びかけをした。

狂四郎の冷たい視線を、おそれずに受けとめて、人差指で鼻の下を、ひとこすりすると、

「おさむらいは、午(うま)ではないけ？」

と、問いかけて来た。

「どうして、わかる？」

「やっぱり、そうけ。カンじゃ」

少年は、にやっとしてみせた。

この年は、午であった。

「わたしが、午であったら、どうするというのだ？」

「おらが歳のお人に、たのみがあるんじゃ。肯(き)いてくれなせえ」

「何をだ？」

「海苔(のり)を食うておくれんけ？」

「……？」

「たのんます」

少年は、ペコリと頭を下げた。

「海苔を喰べるぐらい造作はないが、どういうのだ？」

「すまねえがよう、道をひきかえし、鈴ヶ森の八幡様へ行ってくれろ。……行き乍ら、話すべ」

これが、大人の依頼であったら、狂四郎は、にべもなくことわったに相違ない。この男の盲点は、子供から親しげに寄られると、これを冷たく突きはなせぬ弱さを露呈する。

狂四郎は、踵を返した。

少年は、人なつっこい口調で、仔細を語りはじめた。

このさきの大森の海辺は、一帯が海苔場である。名産浅草海苔の大半は、ここで採るのであった。少年は、その海苔作りの一軒の伜であった。

海苔を採るのは、秋の彼岸にはじまって、春の彼岸におわる。

秋の彼岸前に、小川の流れに長く浸けてあく抜きした柴や竹を、遠浅の沖あい十町ばかり、時には二十町も一里も遠くへ小舟ではこび、狼牙棒というもので、海底へ孔をつくって、植林のあんばいに、海中に整然と植えておく。これをヒビという。このヒビの枝に、海苔のほうしが止って、生える。

粗朶にからんで生えたこの海苔を、むしりとって、戻ると、清水で揺り流し、ちりなどを取り除いて、葭の簀の上に、紙を漉くように流し、簀のまま天日に干す。干あがったのを荒藺の海苔といい、たたみ重ねて、浅草の海苔問屋に売るのである。

ところで――。

海苔は、霜月、臘月など、寒気のきびしい季節に採ったのが最上とされている。

「ところが、ようー―。今年は、去年の半分も、ヒビに生えよらんのじゃ。秋の暮に、大嵐が三

度も来よったせいじゃ、と爺どもは云っとるが、わしらは、八幡様に願かけせなんだ罰じゃと思うとる」

少年は、分別顔で、首を振ってみせた。

毎年、海苔作りたちは、豊作を願って、鈴ヶ森八幡の境内で、秋の彼岸に、踊りを奉納するならわしであった。ところが、酒をくらいすぎて、境内をよごす、という理由で、昨秋は、踊りを中止させられた、という。

「……つまりよう、神様にお詫びするために、おさむらいに、生贄になってもらいたいんじゃ」

鈴ヶ森八幡は、石清水八幡を勧請した社であった。社内に、鈴石があり、撃つと鈴の音がする、といって神宝にされている。

その程度の、あまり有難い利益の期待できぬ神社であった。

社前にそびえる磯馴れ松も、神木にされているが、一向に威厳のあるかたちもしていない。

少年は、その磯馴れ松に近づくと、

「あれじゃ」

と、指さした。

高い枝に、紙鳶がひとつ、ひっかかっていた。まっ黒な紙鳶であった。

「わしら子供十人が、海苔浜で、上げた紙鳶のひとつじゃがな。お祈りして、糸を切ってな、飛んで行って、この神木に、落ちるのを、ねごうたのじゃ。そうしたら、わしの紙鳶が、落ちよった」

そう語っておいて、少年は、身軽に、幹をよじのぼって行った。

枝から、その紙鳶を取って、降りて来た少年は、狂四郎にさし出して、

「たのんます」

と、頭を下げた。

それは、海苔を貼って作った紙鳶であった。

「今年は、午歳じゃから、午生れの強そうなおさむらいに、この紙鳶を食うてもろうたら、神様も免じて下さって、今年の秋には、大嵐なんぞ、吹かんようにして下さるにちがいないんじゃ。……たのんます。おさむらい、食うて下され」

「これが、生贄になることか？」

狂四郎は、少年を視た。

「そうじゃ」

少年は、真剣な面持で、まばたきもせずに、狂四郎を仰いでいる。

「これは、お前ら子供が、考えたことか？」

「いいや。爺からきいていたまじないじゃ。さ、はよう、食うて下され」

少年は、もどかしげに、紙鳶の海苔をひき破ると、狂四郎に、さし出した。

それを、口に入れて、狂四郎が、松の根かたへ、倒れて、死んだように動かなくなるまでに、今日の時間にして、三十秒も要しなかった。

それから程なく、六七人の少年たちに担がれた一挺の駕籠が、街道をいそいでいた。

先頭を往くのは、眠狂四郎に、まんまと、毒塗りの海苔をくらわせた少年であった。

並木に向って立小便していた乗掛けの馬子が、頭をまわして、怪訝そうに、

「三吉、なんじゃ、その駕籠は？」

と、訊ねた。

「へへ……、売物よ」

「餓鬼のぶんざいで、娘っ子をかどわかしたかよ」

「おっさんよ、てめえの寸法で、人の着るものを計るな、と云うぜ」

「きいた風なことをほざくねえ。いってえ、なんだ、そりゃ？」

「開けてびっくり玉手箱よ。十両になるんだぞ、十両に――」

やがて、駕籠は、松並木を過ぎて、出茶屋のならんだ蒲田村に入ってから、脇道にそれた。

野の中に、風除けの樹木にかこまれた家があった。郷士の構えで、古びた冠木門が、旧家であることを示していた。

庭に入ると、三吉は、少年たちに駕籠をおろさせておいて、縁さきへ近づいた。

「先生――」

三吉の呼び声に応じて、姿を現したのは、旧臘、内桜田の路上で、眠狂四郎を討ち取ろうとして果さなかった都田水心という人物であった。

「とらまえて来たよ、先生」

「ほほう……、やり居ったか。天晴れ、天晴れ」

水心は、庭へ降りると、駕籠のたれをめくってみた。

深くうなだれて、睡りつづける狂四郎を一瞥して、

「いささか、あっけなさすぎるのう。眠狂四郎ともあろう手練者が、小わっぱの策略にうかうかと乗せられるとは――」

と、首を振った。
この時、三吉が、
「先生。ことわっておきてえことがある」
と、云った。
「なんだな？」
「こんな、丸太ン棒みてえになった者を、殺すのは、止めてもらいてえ。先生が、まさか、そんな卑怯なふるまいはしねえと思うがよう、念のために、ことわって置かあ」
「懸念には及ばぬぞ。獲物は、殺してしもうた奴よりも、生捕った奴の方が、高く売れる」
「先生は、あきないをするために、わしらに、この浪人者をとらまえさせたのけ？」
「そうだ。お前から十両で買って、百両で売る」
「こすいや、先生」
「商法というものは、そういうしくみに相成って居る」
水心は、高笑いした。

その日――。
江戸を発って、帰国の途に就いた大名の一人に、福知山藩・朽木綱条がいた。
その行列は、元旦早朝、日本橋を渡って帰ろうとした岸和田藩・岡部長慎のそれと、大差のない地味なものであった。
丹波山間の、いわば壺中の小天地のような三万二千石の福知山藩は、岸和田藩などよりも、さ

らに貧しかった。

その半分の土地は山嶽であり、中央の福知山盆地にしても、城の天守閣からは、掌（たなごころ）を指すごとく全容が見渡せる狭さである。

のみならず、山陰から流れ落ちて来た由良川（ゆらがわ）は、南から来た土師川（はじがわ）と、福知山の脇腹に当る地点で合流して、ほぼ直角に曲っているために、豪雨が降ると必ず堤防が決壊して、大洪水を城下一帯に氾濫（はんらん）させているのであった。

寛文九年、常陸（ひたち）土浦から朽木稙昌（たねまさ）が入封して以来、この壺中の小天地には、天災の起らぬ年の方が珍しかった。初代稙昌の治世四十年の間にも、城下全焼の大火、由良川の氾濫七回、城壁の崩れる大地震、旱魃（かんばつ）、冷害がひきつづいた。

当然、追いつめられた農民は、徒党を組んで、城下に迫り、施米を乞う事件を、くりかえしていた。

享保（きょうほう）の中頃には、大旱魃につづいて、蝗（いなご）の大襲来に遭い、餓死者が千余も出た、といわれている。

福知山藩が、他藩に比べて、殊更な重税を課しているわけではなかったが、あまりの天災の連続に、領民の生活はその底をつき、苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）の様相を呈さざるを得なかった。

享保の末には、福知山領内四郷六十二カ村の庄屋・惣（そう）百姓たちが、城下町内の土師屋に集結して、強訴（ごうそ）に及んでいる。

このたびの百姓共の願い、天下の御老中に訴え出ても、という決死の訴えであった、といわれる。

そして――。

この疲弊、荒廃の飢餓状態は、いまもなお、ひきつづいているのであった。

藩主が帰国すれば、領民たちは、必ず強訴、暴動を起すに相違なかった。

乗物の中の朽木綱条の顔色が冴(さ)えぬのも、無理はなかった。綱条は、まだ二十五歳であった。

綱条がじっと閉じている目蓋の裏には、三年前、帰国した時に起った騒動が、甦(よみがえ)っていた。

むしろ旗を押したてた、数千人の農民が城の大手門ぎわまで迫った恐しい光景が、まざまざと思い泛(うか)べられていた。

藩庁が出す倹約令に対して、農民が応えるのは、必ずこの強訴であった。

綱条には、百姓たちの窮迫は、よくわかっていた。しかし、強訴に及ばれると、無性に腹が立った。

藩主である自分でさえ、一汁一菜、麦飯を喰べ、江戸では下屋敷をひとつ減し、参覲(さんきん)の行列も、世人の物嗤(ものわら)いを覚悟で、このように地味にしているのではないか。

百姓どもは、まるで、城内には米があふれてでもいるかのように、強訴をくりかえして、税をまぬかれようとしている。百姓どもの狡猾(こうかつ)は、千年来からのものなのだ。必ず、納屋の奥、地下倉には、米をかくしているに相違ないのだ。強訴は、米をかくすための手段のようにも受けとれるのだ。

享保の頃には、首謀の者どもは、入牢(じゅろう)、打首にし、家族を領外へ追放し、病死した者など、墓をあばいて首を刎(は)ねる見せしめまでしたものであったが、近年は、藩庁の方が弱くなって、穏便に事を収拾するようになったので、百姓どもは、つけ上っているのだ。

祖父昌綱が、蘭学を勉強して、西洋の政治を摸倣(もほう)して、領民に慈悲をかけすぎたために、後代の藩主は、さらに苦しむ結果を招いたのだ。

——こんど帰国して、百姓どもが騒動を起したならば、首謀の者はもとより、主立った庄屋どもは、一人のこらず、首を刎ねてくれる！

綱条が、かっと双眸をひき剥いて、心で、そう叫んだ折——。

「殿——、お出ましの程を」

側用人の声が、呼んだ。乗物は、いつの間にか、停められていた。

戸が開けられたので、綱条は、首をのぞけてみた。

六郷川の仮橋ぎわに着いていた。

この仮橋は、毎年九月に架けられ、三月にとりはらわれる。

「なんだ？」

綱条は、側用人に訊ねた。

「殿には、川崎大師にて、厄をお払いあそばさねばなりませぬ」

側用人は、こたえた。

二十五歳と四十二歳の厄年の男は、必ず川崎大師へ詣でて、厄払いをするならわしであった。

綱条は、乗物から降りると、近習を三人つれただけで、仮橋を渡った。

厄除大師をまつった平間寺は、梨畑の中をしばらく辿って行くと見えて来る。

急ぎ足に抜けて行こうとする綱条の行手に、不意に、立ちふさがった者があった。

「朽木公とお見かけいたし、見参つかまつる。それがしは、公儀大目付鮫島左近殿の付人にて、都田水心と申す者。朽木公が厄払いのご参詣に当り、恰好の生贄いっぴき、お買い上げ賜りたく、お待ち申上げて居りました」

水心は、そう云って、梨畑の中へ、手を挙げて合図した。

少年たちにはこばれて来た駕籠を、綱条の前に据えた水心は、そのたれをあげてみせた。

「何者だ、これは？」

「眠狂四郎と申す浪人者でござる。すでにおきき及びの名と存じますが……」

正月を期して一斉に帰国する十三藩の藩主たちが、それぞれ懐中にした謀議の連判状のうち、岸和田藩の岡部美濃守長慎の所持していたそれが、眠狂四郎という素浪人に奪われた、という急報は、綱条の耳にもとどいていた。

「こやつか！」

綱条は、駕籠の中で正体もなく昏睡をつづけている男を、睨みつけた。

「水野越前守殿の側用人武部仙十郎が放って参った稀代の手練者でござる。金子百両が程で、お買い上げの儀、お願いつかまつる」

「百両！」

綱条は、眉宇をひそめた。

水心は、にやりとした。

「十三藩の盟主は、薩摩島津公とうけたまわる。こやつを、三田の薩摩屋敷へ送りとどけられるならば、その苦労代として、五百両は、御当藩へ贈られて参ること、疑いの余地はありませぬ」

「……………」

「何卒、お買い上げの程を――」

「五百両になるならば、その方、なぜじきじきに、薩摩屋敷へ送り届けぬのだ？」

「それがしは、大目付の付人でござる。大目付より、この眠狂四郎を討ち果せ、と命じられて居

りますが、生捕って売れとは命じられて居り申さぬ。されば、殺さずに、生かして居ることとすら、すでに、命令にそむいていることでござる。……付人などという役目は、手当の安さはお話にならぬものでござる。月せいぜい五両にもなり申さぬ。そこで、このような、あさましい思案もつかまつる。……百両でお買い上げの儀、お願いいたす所以でござる」

その時であった。

「百両は、安い」

突然、駕籠の中から、その声がひびいた。

水心が、愕っとなって、視線を転じた時、正体もなく昏睡をつづけているとばかり思っていた狂四郎が、駕籠のむこう側へ、抜け出て、立った。

冷やかな薄ら笑いが、その口許にあった。

「都田水心――といったな、お主。この眠狂四郎を、わずか百両で、売ろうとしたとは、見くびったものだ。せめて、千両とでも値をつけてくれて居れば、狸寝入りを、もうすこしつづけて、あとで、分け前を貰うことになったろうが、百両では、話にならぬ」

水心の顔面に、朱が散った。

狂四郎は、水心が抜刀するのを待った。尋常でない腕前をそなえていることは、すでに見てとっていた。

強敵といえる。

水心は、一瞬、殺気をほとばしらせたが、どうしたのか、すぐに、身の内へ納めてしまった。

「こんども、また、それがしの不覚と、みとめ申す。行かれい」

水心は、云った。

奇妙な男である。これまで出会った刺客とは、どこやら、異質な、憎めないところがある。

「三度目は、もうすこし工夫をこらすことだ」

狂四郎は、そう云いのこした。

川崎宿に入って、万年屋という立場茶屋に、腰を下した時であった。

小さな影が、物蔭に、チラと動いた。

狂四郎の視線が、そちらへ投げられると、怯ず怯ずと、歩み出て来たのは、三吉であった。

「十両、儲けそこねたな、三吉」

狂四郎は、笑って、云った。

「わからねえ」

三吉は、当惑の表情で、首を振った。

「どうしても、わからねえ。……おさむらい、あの紙鳶の海苔に塗ってあった毒は、都鳥なんぞ、コロリと参るんだぜ。おさむらいは、なぜ、ピンピンしているんだい？」

「喰べなかっただけのことだ」

「へえ。ど、どうしてよう？」

「お前が、松の枝から取って降りて来た時、蜂がいっぴき、とまって、すぐに、地べたに落ちるのを見た」

「ちぇっ！　そうか」

三吉は、地べたに坐り込んだ。

「負けた。……すっぱり、やってくんねえ」

三吉は、自分の頸すじを、掌でピシャリと叩いてみせた。

「覚悟はできてら。このままじゃ、どの面下げて、乾分（こぶん）どものところへは、戻れねえや」

きいた風に胸を張る三吉の前へ、小判が一枚、投げられた。

「なんでえ、こりゃ？」

目を剝（む）く不良児に、

「大森から、ここまで、はこんで呉（く）れた駕籠賃と思え」

そう云いすてた時には、もう街道上に、後姿をみせていた。

神奈川無情

江戸から七里、京へ百十八里半――神奈川宿は、まだその時代は、飯盛（めしもり）や留女（とめおんな）を置いた旗亭が数十軒、竝（なら）んでいるだけの、静かな土地であった。

神奈川は、狩野川（かのがわ）という小さな流れから、その地名が起っている。その川は、街道を横切って、すぐそこまでうち寄せる海へ落ちている。

漁師の家は、川をはさんでちらばって居り、そこを抜けて坂になり、これを神奈川台という。

旗亭は、坂沿いに竝び、留女が、旅人の袖を、せっせと引きとめることになる。

その一軒の『たるや』という店で、一夜を明かした眠狂四郎は、宿酔（ふつかよ）いの物倦（ものう）い眼眸（まなざし）を、腰高障子を開けはなって、海へ投げていた。

凪（な）いだ海原に、幾艘（そう）かの白い布帆が、ゆっくりと動いている。霞（かすみ）をへだてて、遠く、黛（まゆずみ）のよう

にかすんでいるのは、上総房州の山である。

初春の、のどかな海景色を前にして、珍しく、この孤独な男が、一種の痴呆状態に陥ちていた。

われにかえったのは、小さな影が、音をしのばせるようにして入って来て、片隅にかしこまったためである。

視線を移して、狂四郎は、無断の侵入者を、見た。

三吉という悪童であった。

殊勝な表情で、じっと、狂四郎を瞶めたが、黙って、ペコリと頭を下げた。

「こんどは、なんのたのみだ？」

「乾分にして、くれなせえ。おねげえします」

「乾分にしたら、どんな役に立つ？」

「わからねえ」

三吉は、正直に、かぶりを振った。

狂四郎は、対手にせず、床の間から、無想正宗を把ると、出て行こうとした。

飯盛たちは、まだ寝穢く睡りこけている時刻であった。

客を呼ぶ紅殻格子の出窓ぎわには、女たちが手あぶる小火鉢が、冷えて、ちらばっているばかりである。

そこへ出て、狂四郎の足が停った。

格子越しに、しずかに通り過ぎて行く普化僧の一団を、眺めたのである。三歩の間隔をとって、一列にならんで行く。

――十三人！

かぞえおわって、狂四郎は、眉宇をひそめた。

品川の宿はずれで、薩摩の隼人隠密党が、大木戸を出て来たところを、先手を打ってその行手をふさぎ、決闘を挑んで、一人をのこして十二人の片耳を刎ねた狂四郎であった。

それは、二日の夜であった。今日は、五日である。

隼人隠密党ともあろう面々が、片耳を殺がれた手当に、三日も無駄に費すとは、考えられなかった。

渠らは、すでに、箱根を越えているものとばかり思っていたのである。手当は、道中をつづけ乍らでも、できることとであった。

――いったん、三田の薩摩屋敷へひきかえして、出なおして来たのか？

納得しがたいが、そうだとしか解釈の仕様がなかった。

「三吉、といったな」

「うん――」

「いま行った虚無僧たちを、気づかれぬように、尾けて行くことができるか？」

「合点！」

三吉は、脱兎のように、とび出して行った。

それから、小半刻も経った頃であった。

『たるや』へ、一人の漁師が、ころがり込むようにして、とび込んで来て、息をはずませ乍ら、大胡坐をかくと、

「おうっ、おうっ！　誰か、いねえか。一杯、ひ、ひっかけさせろやい！」
と、呶鳴った。
汚れた長襦袢に、つぎはぎの半纏をひっかけた飯盛の一人が、出て来て、生あくびを嚙み締め乍ら、漁師の前で立膝すると、
「いったい、どうしたってんだい、源さん？」
「どうもこうもねえぞ。一杯ひっかけなけりゃ、人心地がつかねえや。大どんぶりに、持って来い」
漁師は、はこばれた冷酒を、ひと息に飲み空けてから、ふうっ、と溜息をついた。
「なんだってんだよ？　強力源といわれるお前が、まるで、幽霊にでも出会ったみたいに、顫えあがってさ、ざまはないね」
「幽霊なら、漁に出た時、ちょいちょい、出会っていらあ。大漁の前ぶれになるから、こっちから手招きしてやらあ。ところがよう、おめえ、十人以上の虚無僧が、砂浜に、ずらりとならんでよう、次から次に、切腹するところを、見せつけられちゃ、びっくり仰天もしようじゃねえか。……いいか、最初の奴が切腹すると、二番目の奴が、その首を刎ねるんだ。そいから、二番目が切腹すら。その首を刎ねるのが、三番目でよう、三番目が坐って、短刀逆手に摑んだら、四番目が、うしろにまわって、刀を振りあげる、といったあんばいだあ。岩の蔭から、眺めて、おらあ、悪い夢でもみているような心地がしたぜ」
その言葉が、おわらぬうちに、奥の部屋から、眠狂四郎が、すっと入って来た。
「その虚無僧たちは、片方の耳を、包んでいたか？」
「へえ――」

漁師は、浪人者の冷たくひきしまった蒼白い異相に、ちょっと首をすくめたが、

「天蓋を、かむったままの、切腹なんで……へい」

「場所は、どこだ？」

「湾の南かたで、あっしどもの舟のある浜との間に、鬼岩ってえ大岩が据って居りやす、へい」

狂四郎は、急ぎ足に、『たるや』を出て、そこへ向った。

——なぜ、三吉は、このことを報せに駆け戻らなかったのか？

その疑惑が、脳裡をちらと掠めていた。

成程、鬼岩と称ばれるにふさわしい巨巌が、そのむこうの砂地をかくしていた。

鬼岩は、絶壁から突出したかたちになって居り、むこうの砂地は、隔絶された場所になっていたのである。

鬼岩の頂きに立った狂四郎は、絶壁寄りの砂地に、すでに、白木の墓標が、十二基竝んでいるのを、みとめた。

そして、その前に、孤影を長く匐わせて、生き残った普化僧が、尺八をかまえて、たむけの一節を奏していた。

なんの曲か、うち寄せる波の音が高く、ここまでは、きこえなかった。

——一人だけ、切腹をしなかったとは？

狂四郎は、不審に思ったが、次の瞬間、直感が働いた。

——あの若者ではないのか？

十三人のうち、狂四郎が一人だけ、その片耳を斬らなかった者がいる。その貌が、彫深く、あきらかに、異邦人の血が混っているのをみとめたためであった。

おのれと同じ混血の兵法者を視て、狂四郎は、その片耳を刎ねるにしのびず、左手くびを傷つけて、白刃をとばすにとどめたことであった。

生き残ったのは、あの若者のような気がした。

狂四郎の直感に狂いはなかった。

鬼岩を跳び降りて、砂地を踏んで近づく狂四郎に気づいた対手は、天蓋をすてて、身構えた。

狂四郎は、二間の距離を置いて、立ちどまると、

「隼人隠密党は、たかが片耳ひとつ喪って(うしな)も、役目はっとまらぬと思いなして、自裁するのか？」

と、問うた。

混血の若者は、狂四郎に殺意がないと看て取ると、構えをすてて、

「左様——」

と、頷いて(うなず)みせた。

「薩摩隼人は、屈辱を忍んでまで、おめおめと生きのび申さぬ！」

「では、お主だけは、なぜ、腹を切らなかった？　耳は残っていても、屈辱は受けて居るぞ」

「それがしは、十二人の遺髪を、国許(くにもと)へ持ち帰り、遺族に渡したのち、自決いたす」

若者は、昂然(こうぜん)と頭を擡げて(もた)、こたえた。

「判らぬことだ。犬死に等しい切腹をして果てる覚悟ができた時、なぜ、お主らは、この眠狂四郎を冥途(めいど)の道連れにしようとは、考えなかったのか？　この眠狂四郎を、どうして、憎まなかった？」

「貴殿には、われら悉く(ことごと)、敗れて居り申す。腕前が劣ればこその敗北でござる。貴殿を憎む道理が、どうして、ござろうか」

若者の双眸が、澄んで、無色なのを視て、狂四郎は、名状し難い感動にとらわれた。
「失礼つかまつる」
若者は、一礼すると、歩き出した。
「待て――」
呼びとめたが、狂四郎には、咄嗟に、かけるべき言葉が見当らなかった。
やむなく、
「姓名を、きいておこう」
と、云った。
「梅津一郎太」
若者は、こたえて、二三歩行ったが、こんどは若者の方が、足を停めて、狂四郎を視た。
「貴殿の尊父は、オランダのばてれんとき申した。まことでござるか？」
狂四郎が、黙って頷いてみせると、梅津一郎太の貌に、微妙な、そして複雑な表情が湛えられた。
「それがしの母は、屋久島奉行の女でござった。父に従って屋久島へ渡り、二年後、帰国した時、それがしを抱いて居り申した。それがしが物心つかぬうちに、祖父も母も逝き申し、それがしは、ついに、おのが実父が何者であるか、知る機会を失い申した」
「…………」
「ごめん――」
若者は、足早やに、遠ざかって行った。
狂四郎は、その後姿に向って、

「死ぬな！」
と、叫びたかった。
叫んで、心をひるがえさせることができるものなら、声を惜しむものではなかったが、無駄とわかっている以上、狂四郎の口は、ついに、ひらかなかった。

『たるや』へ戻ると、昨夜の敵娼であった飯盛が、目くじらをたてて、待ちかまえていた。
「旦那！　いくら、おれが、人三化七だからって、ゆんべ、抱きもしねえでおいて、今朝になって、ここを逢曳きの宿にするなんて、ちイと、没義道というものじゃ、ござんせんかねえ。うちは、旅籠じゃないんだ。ちゃんと、こうして、枕を交す女が、いるんだよ」
金切り声をきき流して、狂四郎が、部屋へもどってみると、ひっそりと、理江が、坐っていた。
理江は、飯盛の罵声を耳に入れていて、畳に両手を置くと、
「お邪魔の儀、おわび申します」
と、頭を下げた。
狂四郎は、無言で坐ると、昨夜飲みのこしの酒を、盃についで、口にはこんだ。
かなり長いあいだ、重い沈黙が、部屋を占めていた。
偶然――狂四郎が眼眸を向けると、理江も伏せていた顔を擡げた。
狂四郎は、口をひらいた。
「わたしは、これまで、身近に来た女は、のこらず、犯して居る。心を動かさずに、抱いたことだ」

「…………」

「せめて、そなただけは、生娘のまま、遠くへはなすことを、考えていたが……、何故、従いて来る？」

「…………」

理江は、すぐには、こたえようとしなかった。

「そなたが、わたしのような罪業にまみれた無頼者に惚れてくれた、などと自惚れては居らぬ。ほかに、理由があろう？　なんだ？」

理江は、それでもなお、しばらく、ためらっていたが、そっと、片手を胸にさし入れると、なにやら握って、ぬき出した。

狂四郎は、膝の前に置かれたのが、金色にかがやく十字架であるのを視て、眉宇をひそめた。

「そなた、切支丹か」

「はい」

理江は、岸和田藩士の娘であった。

岸和田は、大坂湾に面し、大坂と紀伊の中間に在り、摂津との接点に、堺の港を持っている。禁制の宗門が、藩内に、隠れ継がれていたとしても、べつに、ふしぎはない。

貧乏藩として、下からかぞえた方がはやく、窮迫した農民が、しばしば法度を冒して逃散する土地であった。

農民ばかりが貧困にあえいで、藩士は裕福、ということはあり得ない。上下ともに、岸和田の難儀は、まさに底をついて居り、藩内には、紙屑に等しい銀札が、いたずらに、流通しているばかりであった。

この窮乏が、寛永年間から、ひきつづいているとなれば、士も農民も、神にすがりつきたくなるのは、人情であろう。

堺の港にもたらされた異邦の宗教が、あるいは、いったん絶えていたものが、藩の彼処此処に、ひそかに、復活したものか、とも想像される。

狂四郎は、理江を見据えていたが、

「そなたも、わたしの貌が、ぜすす・きりすとに似かようている、と思ったのか？」

曾て、狂四郎は、幾人かの切支丹帰依者から、そう云われて、烈しい嫌悪感に駆られたことがある。

理江は、怯じずに、狂四郎を瞶めかえして、

「はい！」

と、頷いた。

狂四郎は、十字架を摑むと、すっと、立った。

「あっ！」

理江が、悲鳴をほとばしらせた。

「なにをなされます！」

すがりつこうとしたが、もう、その時は、おそかった。

十字架は、狂四郎の手からはなれて、この家の塀ぎわまでうち寄せている波の中へ、きらと光をのこして、落ちていた。

理江は、両手を胸で組むと、目蓋を閉じた。

口のうちで、ひとしきり、御主でうすの無量無辺の御慈悲にすがる祈りの言葉を、となえてい

狂四郎に向けた。

「貴方様は、わたくしを、妻となさいませ」

理江は、云った。その語気は、おちついて、さわやかであった。

狂四郎は、じろりと、理江へ一瞥をくれた。

理江は、感情を殺した無表情で、言葉を継いだ。

「わたくしは、十二歳の時から所持していた大切な十字架を失いました。そのかわり、貴方様に、おすがり申します」

狂四郎が、それに対して、烈しい冷酷な言葉を、むくいようとした時であった。

おもてに、せわしく馬脚をあおって来た乗掛け馬が、停められ、

「大変だあっ！」

という叫びとともに、三吉が、とび込んで来た。

「先生っ！　斬りあいだあっ！」

破れ唐紙をひきあけて、息をはずませて告げる三吉を、狂四郎は、怪訝の面持で、視やった。

「誰と誰が、斬り合って居るのだ？」

「虚無僧と虚無僧がようっ！」

「なに？」

三吉に尾けさせた十三人は、すでに、あの浜辺で、ただ一人を残して、白木の墓標と化している筈ではないか。

「どういうのだ？」

「お、おれ、あの十三人を尾けて行ったらよう、柴生の茶屋で、ひと休みしてやがってよう……」

——そうか。あの十三人は、別の組であった。

「それで、どうした?」

「そうしたら、あとから、同じ恰好の虚無僧が、一人やって来てよう——」

——梅津一郎太だ!

「なんやら、問答してたっけが、十三人のうちの一人がよう、その虚無僧をつれて、柴生寺の境内に行ってよう、斬りあいを、おっぱじめやがったんだ」

狂四郎は、もうすでに、腰をあげていた。

「お前の乗って来た馬は、早いか?」

「明け三歳だあ、小田原までも、一気にとばせら」

双方ともに、左拳を額にあてて、切っ先を天に直立させる上段の構えであった。

距離を九尺に置いたこの対峙は、もう半刻ちかくもつづいていた。

梅津一郎太の対手は、竜堂寺八郎という。薩摩藩若年寄の嫡男であったが、敢えて、その家老職の身分をすてて、隼人隠密党の副頭取になった男である。

一郎太は、この竜堂寺八郎に、五年余の指導を受けて、党士に及第したのであり、いわば師弟の間柄であった。

柴生村入口の出茶屋にさしかかった一郎太は、そこに、おのが一行と同じく十三人で組んだ隼人隠密党を見出し、渠らが、眠狂四郎に敗れたおのが一行の討手であることを、直感したのであ

った。
一郎太は、わるびれず、すでに、十二人は切腹して果て、自分はその遺髪を持参して帰国するものだ、と告げた。
それに対して、竜堂寺八郎は、冷やかに、
「その儀には及ばぬ」
と、拒否したのである。
他藩ならば、一郎太は、その場で切腹を命じられるところであったろう。
隼人隠密党は、あくまでも武士道の吟味に叶った処置をえらぶ。一郎太には、一騎討ちが許された。対手は、竜堂寺八郎であり、もし一郎太が、勝てば、そのまま、帰国がみとめられる。
もとより、一郎太は、竜堂寺八郎に、到底及ばぬことを、知っていた。
敵わぬまでも、一郎太は、斃れる一瞬までは、総身すべてに闘志を燃えたたせて、互角の力を示さんとしていた。
と――。
竜堂寺八郎が、遽に、汐合きわまった剣気を、顔面にみなぎらせ、つと、右足をすべり出した。
距離は、四歩に縮まった。
竜堂寺八郎の双眸が、細められた。渠が、必殺の一撃を下す時は、常に、そうであった。細められた双眸から放たれる光は、かえって、妖気を湛え、これを能く受けとめる者は、一人もいなかった。
一郎太は、その光に堪えようとして、かっと、眦を裂いて瞠った。
その時――。

どうしたのか、竜堂寺八郎の、まさに一撃を放たんと鋭気をこめた顔面が、わずかに、色をみだした。

刹那（せつな）——、一郎太の後方から、

「死ぬな！」

鋭い一声が、飛んだ。

その一声にあおられたように、一郎太は、地を蹴（け）って、竜堂寺八郎めがけて、斬りつけていた。

竜堂寺八郎は、脳天から、血汐と脳漿（のうしょう）を噴かせて、声もなく、のけぞり、地上に、にぶい音をたてた。

……しばらく、茫然と、虚脱のていで、血刀を下げていた一郎太は、一瞬、はっとわれにかえって、頭をまわした。

竜堂寺八郎と自分が対峙した線を、まっすぐに、後方に引いた地点に、眠狂四郎の姿が在った。

眠狂四郎が、竜堂寺八郎の鋭気を乱したのである。

一郎太は、何か云おうとした。

礼をのべようとしたのかも知れなかった。

しかし、いったんひらきかけた口は、すぐ、つぐまれた。

助勢を受けてはならぬ一騎討ちであったのだ。

礼をのべれば、助勢をみとめたことになる。

狂四郎の方は、決して、助勢した、とは云わぬであろう。

一郎太は、厚い感謝の意を、眼眸に湛えて、深く頭を下げると、その場をはなれた。

狂四郎も、黙って、山門を出て行く後姿を見送った。

――あの足どりで、まっすぐ、鹿児島まで、歩いて行くのか。
鉛のように重い感慨が、狂四郎の心の底に湧いていた。

程ヶ谷長者

「やあ、これは――眠殿！」
あかるい声音で、呼びかけられて、眠狂四郎は、坂をのぼって来た足を停めて、右脇に建つ古びた地蔵堂へ、視線を向けた。
ここを、さかい木、という。武蔵と相模の国堺である。むかしは、帷子の里、とか、軽井沢、とかの名称で、程ヶ谷は、二つの里であった、という。
いまは、ひとつになり、この信濃坂を境にして、大きく国がわかれている。このあたりに来て、ようやく、江戸が遠ざかったのを感ずる。
地蔵堂の濡縁に腰かけていたのは、身装をかまわぬ中年の男であった。
総髪に、托鉢僧から貰ったような古笠をあみだにかぶり、鬚ものび放題、黒羽二重の紋付も臭気が立っている程よれよれで、それを尻端折りして、毛脛をみせている。
蘭学医師として、江戸ではその名を知らぬ者はないほどの人物であるが、突飛な奇行が多く、なかば狂人扱いされているため、大名旗本の屋敷や大きな町家の招きが尠く、狂四郎が知りあった五年前から、貧乏である。入って来る金は悉く蘭学書にかえ、書籍の重みで裏店を傾けて、追い出されたこともある。

曾田良介。

もとより天涯孤独で、飄々として、自由に生きているので、こうしたところで、ひょっこり、出会っても、べつに、なんのふしぎもない。

狂四郎も、この医師には、微笑をかえした。

「長旅の戻りか？」

「いや、そうではないのですよ。長患いしていたこの在所の大分限者が、昨夜、三途の川を渡って行くのを、看とって来たところです。……お、そうだ。眠殿もご存じの人物ですよ。程ヶ谷長者――あの御仁でした」

「斎藤佐兵衛が、亡くなったのか」

狂四郎が知る数尠い風流人の一人が、この世から消えた、という。

斎藤佐兵衛は、徳川の治世になってからも残る少数の豪族の一人であった。

その先祖は、三浦・鎌倉両郡にひらけた七つの湊をわがものにする海賊であった、という。源頼朝が、伊豆に兵を挙げた時、これを扶けて、十艘の軍船を贈ったおかげで、頼朝が鎌倉に幕府をひらくにあたっては、その町造りを命じられた、という。

頼朝が、開府の当時は、鎌倉はさびれた一漁村にすぎなかった。この僻陬に大路、小路を通し、地相人の法師の意見によって、まず将軍の亭館を築き、これを中心にして、政所、侍所、問注所、そして諸侯の別邸を建てる大事業を完成した斎藤佐兵衛は、もはや、眇たる海賊ではなく、相模から伊豆にかけての山嶽の支配者でもあった。

頼朝が、佐兵衛に、どの山から勝手に伐り出してもかまわぬ、という権利を与えたのである。

そして、この利権は、戦国時代を経て、徳川幕府に至っても、斎藤家にひき継がれていた。

徳川家康が、江戸開府のみぎりにも、斎藤佐兵衛は、嘗て先祖が幕府に奉仕したのにならって、箱根、伊豆一円の山林の伐採権を所有する斎藤家は、山分限者として日本中に比肩を許さぬ存在であった。

先代佐兵衛の世になって、本邸は、江戸青山に移されたが、しかし、もはや、公儀をはばかって、その構えはつつましいものであった。当代佐兵衛もまた、父の教訓にしたがって、表面のくらしは、目立たぬものにしていた。

しかし、吉原をはじめ、深川遊里七場所に遊ぶ佐兵衛の粋人ぶりは、一頭地を抜いて見事であった。

狂四郎が、深川新地で知己となった頃の佐兵衛は、すでに、五十を越えて、容子人柄ともに俗臭を去って、枯淡のおもむきをみせていた。

嘗て、元禄の頃、紀伊国屋文左衛門は、吉原に文字通り黄金の雨を降らせて豪遊し、江戸中の話題をさらったが、すでに時世がちがい、程ヶ谷長者の粋な遊びは、紀文や奈良茂が、節分に、豆のかわりに小粒金を蒔くとか、友人に蕎麦箱二つを贈るのに、吉原五町、山谷近辺の蕎麦屋から残らず買い占めるとか、引手茶屋の入口も通らぬ程の巨大な饅頭をつくらせ、それを割れば数百個の饅頭が出て来るしかけにして、友人に贈るとか、といったばかばかしい遊びではなくなっていた。

なにげなく着流している古渡りの唐桟が、実は百両以上もする珍品であるとか、ごく無造作に知人にくれる万年青の盆栽が、実は三百両もするものであったり、といったあんばいに、その高価をかくす趣向を好んでいた。

ただ、佐兵衛の風流ぶりは、遊里に遊んだり、友人知己をよろこばせるだけではなかった。江戸火消し四十八組に、纏を贈るのは、佐兵衛が一手に引き受けていたのである。のみならず、纏屋は、江戸にたった一軒、神田竪大工町の石田治郎右衛門店しかなかった。したがって、一本の纏を仕上げるには、日数を要し、価も大層なものになったが、佐兵衛は、黙って、毎年四十八組に贈りつづけたのである。火事は江戸の花であり、その火元の屋根に生命をすててまっさきに纏を立てるのを、江戸っ児の意気地と面目にしている町火消を、扶けるのは、粋人としての快感であったろう。

また。

庶民が、日頃の苦労を忘れる行事には、佐兵衛の援助の手が、必ずさしのべられていた。正月には貧家に餅をくばり、祭礼には神輿を寄進し、川開きには、数千の提灯を蝟集の人々に手渡すなど……。

しかも、その場合、おのが名を秘すのを、常とした。

三年前、佐兵衛は、江戸青山の本邸をひきはらって、程ヶ谷に六百年の歴史を誇る旧屋へ還ったが、町火消への纏の寄贈をはじめ、かずかずのふるまいは、ひとつも中止してはいなかった。

曾田良介は、地蔵堂の濡縁から腰を上げると、

「葬式は坊主の役目ゆえ、一足さきに、屋敷を出て来申した。貴方がその足で辿られるならば、あるいは葬列に出会う時刻です。……では」

一礼して、小さな薬函ひとつ、ぶらぶらと提げて、歩き出していた。

曾田良介の言葉通りに、狂四郎は、柏尾のてまえで、その盛大な葬列に行き会うた。

白張無紋の高張提灯、迎僧、竜頭の六角灯籠、幡、そして棺が、しずしずと、街道を横切って、大山への近道である柏尾通へ向っていく。

上流のならわしによって、輿に乗せられ、天蓋をさしかけられた棺を、じっと見送り乍ら、狂四郎は、斎藤佐兵衛の滋味豊かな風貌を思い泛べた。

四年ばかり前のことである。吉原で五日あまり流連て、大門を出がけに、無想正宗を受けとった時、携げ心地がちがった。よく観ると、前と全く同じ黒塗りの、一瞥粗末な造りにも拘らず、その鞘が別のものになっていた。その時は、誰の好意か、思いめぐらしてもみずに、そのまま大門を出た。

日が経つにつれて、鞘の漆が、ただの黒ではなく、ひと拭き毎に鮮やかな艶をおびて来るのに、心を奪われたことだった。

それが、斎藤佐兵衛の贈りものと判ったが、対手が知らぬ顔をしている以上、こっちも敢えて礼を述べなかった。

贈ってくれた人は、あの棺の中に横たわっているが、贈られた鞘は、なお、狂四郎の腰にある。

延々三町に亘る葬列が行き過ぎてもまだ、狂四郎は、同じ場所に、佇立していた。墓地まで跟いて行くのは、この男の性分に合わぬことだった。

われにかえったように、歩き出そうとした折であった。

長者屋敷の方角から、一散に奔って来る者の姿が見えた。つづいて、声をあげて、これを追跡して来る数人。

遁げる者は、凍った田面をななめに掠めて、狂四郎の間近で、追手にとり押えられた。

必死にもがき乍ら、街道上の狂四郎に、助けを求めた。無我夢中で、見知らぬ者に救いを乞うたのではなかった。
「眠様っ！　眠狂四郎様と、お見受け、つかまつりますっ！　お、お願いでございます！」
呼びたてられた時には、狂四郎の方でも、それが誰か、気づいていた。佐兵衛の供をして、吉原や深川へ来ていた利助という男であった。
佐兵衛が、子飼いの中から、わざと遊里には向かぬ朴念仁（ぼくねんじん）をえらんだように思われた。いつも、キチンと片隅にかしこまって、身じろぎもせずにいた。主人の財布をふところに預り、一文のまちがいもせぬ信用をもらっているようであった。
狂四郎の仮住いにも、二三度、使いに来たことがある。一度は、主人が招くところへ、狂四郎を案内したこともあるが、その道連れに交した二言三言の短い会話で、ただ融通のきかない実直朴訥（ぼくとつ）な人柄だけではなく、主人に見込まれるだけの頭脳も持っていることを、示したものだった。
狂四郎は、寄って行った。
利助をとり押えたのは、代官所の手代とその小者たちであった。
手代は、狂四郎の蒼白い異相を警戒すべきものと看て、
「余計な邪魔だては、罷（まか）りなり申さぬ！」
と叫んだ。
狂四郎は、それを無視して、
「どうした、利助？」
と、訊（たず）ねた。
「わ、わたくしが、盗みを働いた、と申されて……、夢にも、おぼえのない、濡れ衣（ぎぬ）を――」

利助は、喘ぎ乍ら、こたえた。
狂四郎は、自分が、田舎の小役人に対して、効果のある品を所持していることに、気がついた。
武部仙十郎から手渡された老中水野越前守忠邦の署名捺印の令状であった。これは、普通江戸城庭番に与えられるもので、これを勘定奉行指定地付近の代官にさし出せば、必要なだけの金額が支給される。道途用費の不足に備えるものであった。
眠狂四郎という奇怪な姓名も、この場合は、隠密が変名するならわしによって、疑惑を抱かれない。
代官所の手代は、令状を手渡されて、一読すると、遽に、態度をあらためた。
程ヶ谷長者佐兵衛は、江戸を引払う際、五つの倉に蓄えた掛物、置物、家具、刀槍、茶道具、食器、三味線、燭台から、目貫小柄の類まで、悉く売りはらい、屋敷を駿河町越後屋へ譲った金子と合せて、これを残らず、窮民救済の資金にと、江戸の町年寄（樽屋藤右衛門、館市右衛門、喜多村彦右衛門）へ渡してしまったのであった。
佐兵衛が、程ヶ谷の旧邸へ持ち帰った品は、たったひとつ、一尺一寸の金無垢の十一面観世音菩薩であった。これは、佐兵衛が、わざわざ、四十函の慶長大判を、斑鳩の里の仏師の許に運んで、これを鋳潰し、十一年の歳月をかけて、作りあげさせた施無畏であった。
佐兵衛は、この三年間、朝夕、この十一面の御像の前で、誦経を欠かさなかった、という。
御像を安置した厨子は、佐兵衛が寝ついてからは、その病室の床の間に置かれていた。
また、佐兵衛が、牀から起き上れなくなってからは、その扉は閉じられたままであった。
本日、葬列が、屋敷を出ようとするにあたって、佐兵衛の妻が、御像の慈悲を仰ごうとして、

厨子の扉を開くと、影も形もなく消え失せていた。
仰天した佐兵衛の妻は、ひそかに、代官所から手代の出張を乞うて、詮議をすすめた結果、この七日あまりのあいだ、病室からものの半刻も離れなかった利助以外に、下手人は考えられぬ、と結論が出た。
嫌疑を蒙った利助は、必死に抗弁して、兎も角、公の取調べは、明日にのばされることになった。
ところが、その直後、利助は、置手紙をのこして、人目を掠めて、江戸へ趨ろうとしたのである。これによって、利助が、下手人であることは、明白となった。
手代がそう主張するのを、黙って、ききおわった狂四郎は、利助に、
「利助、お前が疑う者の、心当りはないか？」
と、訊ねた。
「ございませぬ」
利助は、かぶりを振った。
狂四郎は、ちょっと考えていたが、
「お手代。下手人は、亡くなった当人かも知れぬ」
と、云った。
手代は、咄嗟に、意味がのみ込めぬ表情になった。
「つまり……、当人が、愛着措きがたく、棺の中へ、一緒に持って入った、ということもあり得る」
狂四郎が、告げると、手代は、「成程！」と合点した。

遺骸を棺に納めたのは、屋敷の者たちではなく、菩提寺の納所ら数人であった、という。
「では、拙者が、埋葬前に、棺の中を調べ申す」
手代は、云った。
「わたしは、この男を預って、屋敷で、待って居る」
狂四郎は、手代が小者たちを率いて、葬列のあとを追って行くのを見送ってから、利助を促して、歩き出した。

狂四郎は、利助に案内させて、長者館の門をくぐった。
成程、関東随一と称される豪族のすまいにふさわしい構えであった。宏壮さもさること乍ら、六百年という永い歳月を経た古雅の雰囲気が、はじめて足を踏み入れる者の心身をおし包む。
利助は、狂四郎を書院へ通しておいて、佐兵衛の妻に来訪を告げて来る、と出て行った。
やがて、入って来た佐兵衛の妻は、意外にも、まだ三十にも満たぬ、匂いたつような美しい女性であった。
利助から、代官所の手代に態度をあらためさせた浪人と報らされていたので、作法正しく挨拶をし、
「利助が、下手人ではない、と証人におなり下さいますれば、この上の幸せはございませぬ。館内から、縄つきを出しとうはございませぬし、まして、利助は、あるじが生前、いちばん目をかけた者でございますゆえ――」
と、云った。

「棺の中に、仏像が入っていれば、よろしいが……」
狂四郎が、云うと、佐兵衛の妻が、にわかに、柳の眉をひそめた。
「代官所のお手代は、棺の中を調べに行かれましたのか？」
このことは、利助から、きかされていなかったのである。
「左様――」
狂四郎は、佐兵衛の妻へ、冷たい眼眸（まなざし）を当てたまま、頷いた。
「棺の中に、入れたとすれば……、そ、それは、お寺の坊さまたちの仕業ということに相成りますが……」
「長者が、住職に、そう遺言されたのかも知れぬ」
「そのような遺言をしたとは、万に一つも、考えられませぬ」
佐兵衛の妻は、なにか思案する気色であったが、
「どうぞ、ごゆるりと――」
と、頭を下げておいて、出ていった。
入れかわって、利助が、怯（お）ず怯（お）ずと入って来ると、狂四郎は、ふと思いついたふうに、
「利助、お前の主人は、江戸を引払って来る時、箱根や伊豆の山林も、手ばなしたのではないか？」
と、訊ねた。
「はい」
利助は、目を伏せて、こたえた。
「実は、斎藤家には、このお屋敷しか残って居りませぬ。旦那様は、それはもう、おみごとなば

かり、きれいに財産を整理なさいました」
「そうか。それで、読めた」
「え？　なんと仰言いました？」
利助が、顔を擡げて視ると、狂四郎の口辺には、冷たい薄ら笑いが刷かれていた。
「残った宝が、金無垢の観世音だけだとすれば、これが欲しくなるのは、人情だろう。お前が、濡れ衣をきせられるのも、やむを得ぬ仕儀だ」
「で、では、誰のしわざだと、お思いなされます？」
「仏像をかくしたのは、故人だな」
「えっ?!　旦那様が！」
「かくされたのを知って、取りもどそうとしているのは、わたしが名を差すまでもなかろう」
「眠様！　観世音像は、棺の中にあるのでございますね？」
利助が、息をはずませて、訊ねた。
狂四郎が、それにこたえるよりさきに、墓地へ奔った代官所の手代が、あわただしい足どりで、書院へ入って来ると、険しい気色で、
「お手前の推測は、はずれ申した。棺の中には、遺体のほかは、何もござらぬ！」
と、告げた。
それをきいても、狂四郎は、べつに態度を変えず、
「左様か――」
と、頷いただけであった。
「やはり、この者を下手人として、捕えねばなり申さぬ！」

「それは、ことわる！」

「では、お手前が、まことの下手人を捕えてみせる、と申されるか？」

「おまかせして頂こう。明朝までには、解決いたして置く」

狂四郎の返辞は、きっぱりしたものであった。

時刻は、四更をまわっていた。

程ヶ谷長者の菩提寺の墓地は、寒夜の細月に照らされて、文字通り死絶えた静寂を保っていた。

ひそやかな跫音がふたつ、境内からつたわって来た時、新仏を葬った土饅頭のかたわらから、黒い影が、すばやく動いて、庫裏の方へ、奔った。利助であった。もう半刻も、まるで墓碑のひとつと化したように、じっと蹲って、凍てつく寒気に堪えていたのである。

墓地に入って来たのは、お高祖頭巾と宗十郎頭巾でおもてを包んだ男女であった。女が、提灯を持って、先に立っていた。

男は、浪人ていで、大小を佩びていた。左手に、鍬を携げていた。

新墓の前に来て、男が、

「まことだな。金無垢は、死人の腹の中にあるのだな？」

ここへ来るまでの途中、いくども念を押したらしい口調で、訊ねた。

「くどいね。あたしは、この目で見とどけたのさ」

その声音は、佐兵衛の妻のものに、まぎれもなかった。狂四郎と応対した時とは、うってかわった伝法な口調であった。

「あれだけの巨財を一文のこらず、一代でばらまいただけあって、死に際も変って居るな。蘭学

るとはな」

医師に、おのれの臓腑をくれてやり、空になった腹の中へ、仏像を容れてもらって、棺に横たわ

「さ――愚図愚図せずに、掘っておくれ」

苛立たしくせかされた瞬間であった。

男が、抜きつけの一太刀を、女にあびせた。

よほどの手練とみえて、佐兵衛の妻は、絶鳴もあげずに、仆れた。

男は、冷やかに、地べたに動かなくなった女に向って、

「それがたしかならば、一人占めにしたいのが、悪党の料簡と申すものだ。お前は、亭主と仲よく抱きあって、骨になってもらおう」

と、あびせておいて、鍬を、土饅頭めがけて、ふりあげた。

それを待っていたように、背後から、

「あいにくだった。毒婦と抱きあって、骨になるのは、お主だ」

と、皮肉な言葉が、投げかけられた。

はじかれたように、一間を跳んで、向きなおりざまに、抜刀して、青眼に構える男を、じっとすかし視乍ら、眠狂四郎は、言葉を継いだ。

「お主、どこの馬の骨か知らぬが、無縁仏になる人間が、果てるには、おあつらえ向きの場所だ。自身がえらんだ、とあきらめることだ。墓穴を掘る鍬もある。お経をあげてくれる坊主もいる。そして……おれが、帰りの夜道を照らしてくれる提灯も、ある」

戸塚雁書

戸塚の宿に入るには、小さな川を渡る。これに架けられた橋を、五太夫橋という。徳川家康が入国時に架けられ、いくどかの修築はあったが、慶長の頃の面影を、そのままのこしている。

この橋を渡ると、右手に『こめや』という、米の小売りを兼ねた掛茶屋がある。

いまにも白いものが、ちらちらと落ちて来そうな、鉛色のひくい空の下を、橋を渡って来た眠狂四郎は、檐からさし出された『こめや』の看板の下につりさげられた木札に、おのれの名を視た。

『眠狂四郎殿　捧白』

一面に、筆太に記し、その裏面には、

『某女来りて、貴台に拝芝の上必死の歎願の儀、これある由。もとより、貴台の往くところ、血を啑んで、鹵を漂よわす。此地もまた例外に非ずと懸念せらるるも、美しき女子の泪を視て、敢えて、誘うもの也。

朝比奈切通　台上
山賤天心坊』

そう記してあった。

狂四郎は、苦笑した。

天心坊は、修験道であった。自ら山賤と称しているだけあって、どの宗派にも属さず、飄々と

してひとり日本全土を漂泊している。その棒術は、狂四郎の円月殺法に対して、互角の迅業（はやわざ）をそなえていた。

狂四郎は、茶屋の老婆に、この札は、いつかけられたか、と訊ねた。

「一昨日のことでございましたのう。……天心坊さんは、むかしから懇意にして頂いて居りますのじゃ」

狂四郎は、東海道を左に折れた。

朝比奈切通は、鎌倉から金沢へ出る道である。左右が屏風（びょうぶ）を立てたごとく、高さ五丈ばかり、山を切り通してある。

道の北に鼻欠地蔵が建つ。相州・武州の国堺のしるしである。

ここから、山の頂きに向って、長い石段が通じている。鎌倉幕府が盛んの頃、据えられた石階礎石で、なかば雑草に埋れていた。

途中に、華表（とりい）の跡も見える。登るにつれて、老杉（ろうさん）が、蔚然（うつぜん）として半天を掩（おお）う。

――浮浪の山伏のすまいにしては、いささか立派すぎる。

頂上に立って、狂四郎は、いかにも古びてはいるが、鴟尾（しび）のはねた大棟がすこしも崩れずに、曇り空にそびえているたたずまいを、眺めやった。

しかし、近づいてみれば、広縁には、いたるところ孔があき、障子は破れ放題であった。

狂四郎が、案内を乞うまでもなく、跫音をきいて、天心坊が、六尺の巨軀（きょく）を、広縁にあらわした。

「見えたの」

笑って、頷いてみせた。

跣で庭に降りると、「案内しよう」と歩き出た。
「女人というのは、御坊の知りあいか？」
「大垣藩の定府で、物頭の娘での。わしは、亡父と親しかった。二言めには、武士道の吟味を口にする頑固一徹な藩士で、伜にも娘にも、ひどくきびしい躾を強いて居った。……ところで、お主は、十三藩の大名をむこうにまわして、大芝居を打って居るそうだの？」
「素浪人一人がやることだ。たかが知れている」
「お主は、ただの素浪人ではないわさ。……ひさしぶりに、お主の剣を観とうなって、招いた。但し、対手はわしではないぞ」
天心坊は、そう云って、声を立てて笑った。
小松の林の中に、天心坊が案内する草庵があった。これは、もう立ち腐れかかった殆ど廃屋であった。
天心坊は、指さしておいて、
「旧知の娘だが、お主がどう扱おうと、かかわり知らぬ。当人は、覚悟して、お主を待っているのだ」
と、云いのこした。
狂四郎は、一歩入ってみて、ぼろ畳の上に正座している女を一瞥して、眉宇をひそめた。
路考という丸髷に眉を落した武家の女房姿だったのである。まだ三十にはなるまい。項が美しかった。
さしたる美貌ではないが、女盛りの、しっとりと紫縮緬の被布が身についている品のいい風情は、町方女房が真似て真似られぬものだった。

狂四郎が対座すると、女は、畳に両手をつかえ、
「大垣藩戸田采女正家中、物頭小泉弥一郎妻いとと申します」
と、名のった。
「…………」
狂四郎は、黙って腕を組んでいる。
「お願いの儀と申しますのは……、明日、おそくとも昼までに、お手前様が対手になされて居りますお大名がたのうちの数藩から、定府の家中よりえらばれた若ざむらい衆が、討手として、寄せて参ります」
「…………」
「その中に、わが良人も加わって居ります」
「…………」
「わたくしは、お手前様のお腕前の程は、天心坊殿より、うかがって居ります。たとえ、それぞれの御家中で随一を誇る御仁たちが、党を組んで、寄せられても、お手前様には、到底敵うべくもない、と存じます。……何卒、わが良人に、太刀をお加え下さることを、ご容赦下さいませ。お願いの儀とは、このことにございます」
沈黙が来た。
やがて、狂四郎が、口を開いた。
「そなたは、父親から、武士は、家を残すことを第一とするように、教えられたのか？」

「はい」
「そのためには、わが身を犠牲にすることもはばからぬ、と教えられたのだな？」
「はい」
「立派な心掛けだ、と申しておこう。素浪人の性根は、いやしい。据膳は、遠慮なく、頂戴する。そこへ、仰臥してもらおう」
いとは、命じられた通り、そっと仰臥すると、袂で顔を掩うた。
狂四郎は、寄ると、右手で、その足くびを握った。そして、五指をゆっくりと脛へすべらせて、纏うたものを捲しあげていった。
膝の上へ、その右手が達した瞬間であった。
顔を掩うた袂のかげにひそめていた懐剣が、閃いて、狂四郎の咽喉を襲った。
苦もなく、利腕を掴んだ狂四郎は、
「刺客になるには、修業が足らぬ。……そちらが、殊勝に、操をすてることだけを覚悟して来たのであったら、この右手は、この膝から上へは進まなかった筈だ。刺客に対しては、容赦せぬことにして居る」
と、あびせた。
いとは、衣服の乱れもかまわず、烈しく抵抗しようとした。
四ツ匐いにさせられた時、裳裾は大きく背中へはねあげられ、白い豊かな臀部は、狂四郎の眼下に、在った。
半刻あまり経って、狂四郎は、天心坊が坐っている炉辺へ、姿をあらわした。

「今夜あたりは、雪かも知れぬの」
天心坊は、云った。
「雪はご免を蒙りたい。雪に散る血汐は、鮮やかすぎて、後日まで、目にのこる」
「お主の不敵さにも、おそれ入ったものよ。お主が、このまま、東海道を歩いて行けば、いたるところで、刺客の陣が張られることになろう。いかにお主が不死身と雖も、手負わずに、三条大橋まで行き着けるとは、考えられぬ」
「そういう御坊が、ここへ刺客どもを呼び寄せて居るのではないか」
「久しぶりに、お主の剣の冴えを、見るためにの。……ところで、お主、いと、いとをどうしたの？」
「はずかしめて、すてて来た」
「自害するかも知れぬぞ」
「死ぬような女ではない」
「どうかの」
「女については、いささかの経験を積んで居る。死ぬ女か、死なぬ女か――これまでの経験が、わたしに教える」
「良人の生命を救おうとして、おのが操をすてる。まさに貞女の亀鑑だの。亀鑑は亀鑑だが、どこやら、狂って居る。人間本来の姿が、歪められて居る。ま――それもよかろう。わしの興味は、据膳をくらったお主が、どう出るか、それじゃの」
「据膳はくらったが、斬らぬとは約束しなかった、と思ってもらおう」
「操のすて損か。小ざかしゅうして、牛ぐらい売りそこねてもかまわぬが、操のすてそこねは、いかんのう」

天心坊は、そう云って、高笑いした。
この時、狂四郎は、女は死なぬ、と明言したものの、遽に、不吉な予感におそわれた。
――過去に、同じ情況の下に、おれが犯した女たちが、死をえらばなかったからといって、あの女もまた自決はせぬ、と誰が断定できる？
「御坊――、あの女の様子を見て来てもらえるか？」
狂四郎は、たのんだ。
「うむ。見て参ろう」
天心坊は、気軽に腰を上げた。
やがて、戻って来た天心坊は、
「見当らぬぞ」
と、告げた。
――消えたか！
狂四郎は、憮然として、腕を組んだ。
「さがすか？」
「いや、それには及ぶまい」
狂四郎は、かぶりを振ってから、
「明朝、御坊に起してもらうことになるかも知れぬ」
と、云った。

「眠――」
ひそやかな天心坊の声で、起された時、狂四郎は、まだ、夢の中にいた。
なんの夢であったか、天心坊の呼び声で、霧消した。
「来たか？」
狂四郎が、目蓋を閉じたままで問うと、
「うむ。七人の」
という返辞であった。
搔巻をはねて、起き上ってみると、もう、炉火には、大鍋が自在からつるされてあり、粥が煮えていた。
東の空が、ようやくしらんだ時刻であろう。部屋の隅は、まだ闇であった。
「食うか。腹が空っては、いくさはできぬぞ」
「酒がよい」
狂四郎は、椀いっぱいの濁酒をひと息に飲み干しておいて、無想正宗を携げると、広縁へ出た。
昨夜のうちに、やはり、雪はすこし降っていて、境内をうっすらと化粧していた。
横列を敷いた七個の影が、その雪を踏んで、ゆっくりと近づいて来た。一人が、槍を持っていた。
凝っと見わたした狂四郎は、
――若すぎる。
と、胸のうちで、呟いた。いずれも二十歳を越したばかりの若ざむらいたちであった。少年のままの面差を、極度に緊張させている様子が、いじらしく、けなげに思われる者も二人ばかり交

っている。いちばん年長の者も、二十五歳を越えてはいまい。

広縁に、数歩の距離に近づくと、右端の者から、次つぎと名のりをあげた。

「田原藩近習・堀尾正之進」

「郡山藩小姓・加納忠三郎」

「大垣藩物頭・小泉弥一郎」

——この男か。

狂四郎は、まだ二十二三にしかならぬ、他の若者たちと比べて骨格の見劣りのする若者を、冷たく見下した。

——女房の方が年上か。

姉女房だからこそ、良人の生命を救おうと、おろかな勝気の振舞いに出たのか？

「長州藩徒士頭・佐藤利左衛門」

「岡山藩近習・横田右門」

「阿波藩厩支配・久米栄次郎」

「薩摩藩小納戸・東田主膳」

最後に名のった薩摩の若者が、一番の年長で、最も逞しく、技倆も秀でているように看てとれた。

これらの若者たちが仕える藩主は、いずれも、正月早々に帰国を願い出乍ら、急に、さきにのばした、という報告が、狂四郎にもたらされていた。狂四郎に、十三藩謀議の連判状を奪われたために、遽に、企図を変更したのである。

狂四郎が、沓石を踏んで、降り立つと、六人は、一斉に刀を抜きつれ、一人は槍を構えた。

「お主らの腕が、未熟だとは云わぬ」

狂四郎は、半円の陣にむかって、歩き出し乍ら、云った。

「しかし、正面から、立合ったのでは、お主らに、勝味はない。……お主らのうち、まだ、人を斬ったおぼえのある者は一人も居るまい。……せっかく、討手にえらばれて、寄せて来たからには、対手になるが、ふりかかる火の粉も、幾通りか払いかたがある。……わたしが、その石段を降りて行く。背後から、襲って来るがいい。こちらは、振り向かぬと約束する」

いまだ紅顔をのこし、一途の忠義心に燃えている若い生命を、まともに斬り伏せるのは、流石にこの無頼の男も、しのびなかった。

背中へ斬りかからせて、これを払って仆すならば、おのが冷酷な業念にも、三分の理が成立つであろう、と考えたのである。

狂四郎は、右へ三人、左へ四人と、半円陣を割らせておいて、まっすぐに境内を横切り、石段を、ゆっくりと降りはじめた。

「ええいっ！」

五級ばかり下ったところで、一番手が、懸声もろとも、突きかかって来た。

狂四郎は、わずかに身をひねっただけで、白刃を小脇から前方へ、空を突かせておいて、利腕を摑んだ。

次の刹那、摑まれた阿波藩久米栄次郎の口から、名状し難い悲鳴がほとばしった。その腕が折れたのである。

二番手は、さらに五級を下ったところで、大上段から拝み撃ちに、斬りおろして来た。

瞬間——。

狂四郎の双手が同時に動いた。左手は脇差を抜いて、敵の剣を頭上で受けとめ、右手は無想正宗を逆手抜きに、小脇から後方へ、電光の迅さで放っていた。

したたかに、脾腹をつらぬかれた長州藩佐藤利左衛門は、どっと狂四郎へ倒れかかって、石磴へころがった。

そのまま、狂四郎は、衂れた無想正宗を携げて降りて行く。

こちらの腕の冴えを示せば、もうこのあたりで、残りの者は居竦むことを期待した。斬りたくはなかった。

しかし、同じ家中で組んだ徒党ではなかった。自藩の面目にかけて、という必死に競う覚悟が、音にきこえた狂四郎の腕前にひるまず、躍起の襲撃を生ませた。

「ちぇすとおっ！」

薩摩隼人独特の懸声とともに、刃風が鳴った。

と同時に——。

狂四郎の身が、ひくく沈んだ。

薩摩藩東田主膳の撃ち下した白刃は、狂四郎の頭髪に紙一重のところで、ピタリと停った。主膳は、藩の師範から免許を受けた手練を十分に発揮したのだが、幾千回とない素振りの修業が、この場合は、狂四郎に逆に利用された。撃ち下した白刃がピタリと停る空間の、その位置まで、身を沈めておいて、狂四郎は、無想正宗を、後へ、びゅんと薙いだ。

東田主膳は、存分に胴を斬られて、横倒しに仆れた。

やおら立ち上った時、狂四郎は、無想正宗を腰に納めていた。

一歩、降りようとすると、けだものじみた叫びを噴かせて、四番手が、まっしぐらに、突撃し

て来た。

ぱっと、狂四郎が右脇へ躱(かわ)した——その空けられたところを、岡山藩横田右門は、勢いあまって、駆け抜けた。

六級ばかり、ダダダ……と降りてから、辛(かろ)うじて踏みとどまって向きなおるや、逆上の形相で、躍りあがって来た。

狂四郎の痩身(そうしん)と、交叉(こうさ)した、とみるや、右門の左腕は、上膊(じょうはく)から両断されて、血汐を噴水のように宙に撒(ま)いた。

狂四郎は、再び、無想正宗を鞘の中のものにして、こんどはすこし足早やに降りはじめた。

と——。

狂四郎の左右を——石段を避けて、老杉の木立の中を遠まわりして、二人が、狂四郎を追い越して、脱兎の勢いで駆け降りると、七八級の下方で向きなおった。

狂四郎は、足を停めて切っ先を揃(そろ)えた二人を、見下した。田原藩堀尾正之進と大垣藩小泉弥一郎であった。

背後には、一人だけ槍を構えた郡山藩加納忠三郎が、狙っている。

数秒の固着状態があった。

前面の者と背後の者が、呼吸を合せて、同時に気合を発した。

間髪の差で、狂四郎の五体が、羽毛の軽やかさで、宙へ飛び立った。

狂四郎は、頭上の高処(たかみ)にさし出た樹木の枝をつかんでいた。

その足の下で——。

無慚(むざん)な光景が現出した。

背後から奔って、槍をくり出した加納忠三郎と、前面から駆け上って、太刀を振った堀尾正之進が、未熟のゆえに、互いに避けるいとまもなく、そこに、まともに、衝突してしまったのである。堀尾正之進は、槍の穂先を胸に刺しつらぬかれ、加納忠三郎は、白刃の切っ先で咽喉を斬られ、倶仆(ともだお)れに、斃(たお)れる悲運に遭(お)うた。

狂四郎は、高枝から、跳び降りると、最後に一人のこった大垣藩小泉弥一郎へ、冷たい眼眸(まなざし)を当てた。

たった一人、生き残った。その心細さが、小泉弥一郎から、闘志を根こそぎ、奪っていた。

「手負うた者を扶けて帰るがよい。それが、お主の役目になった」

狂四郎は、云った。

偶然とはいえ、いとの願い通りに、その生命へ太刀を加えぬことになったのである。

狂四郎が、炉のある部屋へ帰って来ると、天心坊は、どこかの物蔭で、いまの血闘を見とどけていたに相違ないが、もう先に戻って座に就いていた。

「まことに、見事であったの。感服した」

「若い血汐をあびるのは、それだけ、業念が深まることだ」

「やむを得まい。……お主も、いつの間にやら、慈悲を知った、とみえる。ところで、いとの良人が、参ると思うていたが、弟が参ったの」

「なに?!」

狂四郎は、はっと、ききとがめた。

「あれは、弟か？」
「そうだ。いまにして思えば、いとは、弟が討手にえらばれたので、身を犠牲にする決意をしたのかも知れぬの。いまにして思えば、良人がえらばれたのであったら、参らなかったであろうな。小泉家は、姉一人弟一人であるからのう」

これをきいたとたん、狂四郎の脳裡を不吉な予感が走った。
「天心坊――。遺骸のしまつをたのむ」
「どこへ行く？」
天心坊の不審の視線に送られて、狂四郎は、いそいで、山を降りて行った。
予感は、的中した。
朝比奈切通の、ちょうど上の草地に――。
いとと弥一郎のむくろが、折り重なるようにして、仆れていた。
かたわらへ寄ってみて、弥一郎が、姉を斬って、自害したと、みとめられた。
おそらく、いとが、ここで待っていて、弟に、眠狂四郎がなぜ一人だけ、のこしてくれたか、その理由を告げたものであろう。
弥一郎は、姉のさし出た振舞いを激怒して、斬ったのだ。
しばらく、暗然として、ふたつのむくろを見下していた狂四郎は、切通を通って行く乗掛け馬の馬子唄を耳にして、われにかえると、そこをはなれた。
焦点をうしなった眼眸を宙に置いている蒼褪めた顔は、幽鬼にも似た陰惨な色をうかべていた。

藤沢童女

「な、なんでえ、てめえは？」

このあたりの地廻りらしい、ぞろっぺえに縞縮緬を着流して、長脇差を博多に落した博徒が、大仰に、身を反らせた。

泣きさけぶ三四歳の幼女を小脇にかかえて、ふらふらとやって来た職人に、あやうくぶつかりそうになって、その右手に掴まれた鑿から、血汐がしたたるのを、みとめたのである。

藤沢宿の入口——大鋸坂の、大きな鳥居が立っている往還上であった。

鳥居をくぐって、境川に架けられた小橋を渡れば、時宗総本山遊行寺への参詣道になる。

巨刹の大屋根が、宿の家波の彼方に、木の間がくれに、冬陽にひかって、そびえている。

「うるせえ！　どけっ！」

職人は、衂れた鑿を、振りまわして、ふうっと白い息を吐いた。したたかに酔っている気色である。

「どけったって、まっ昼間、人目にさらせるざまじゃねえや。いってえ、どうしたってんだ？」

「たったいま、嬶を突き殺して来たのよ。……へっ、間男をしてやがったのは、三年前から、知ってたんだぞ、いんだら饅頭め！」

「で——よう、その子を、どうしようってんだ？」

「人柱にするんだ、照手観音堂のよう……。観音堂は、おれが建てているんだぞっ！　いいから、

どけっ！」
もうこの時は、通行人がのこらず、足を停めて、なかば狂った様子の職人を、見まもっていた。
見物人の中に、眠狂四郎がいた。
これは、小橋の袂の出茶屋の落間に、腰を下していたのである。
かたわらに、品のいい、宗匠頭巾に手織の被布をまとった六十年配の老人がいた。無腰だが、隠居する前は、武家でも大身に属する身分だったように受けとれる。
「人柱、と申したが……」
老人は、山へ視線を遣って、
「長生院が、観音堂を建立して居るのかな」
と、独語した。
藤沢・遊行寺は、東海随一の巨刹であるとともに、小栗判官と照手姫の物語でもまた、有名であった。境内にある長生院に、判官と姫の墓が並んで居り、香華はいまも絶えることはない。
職人は、博徒が、子供を渡せ、と迫ろうとするや、鑿を幼女ののどに擬して、
「邪魔しやがると、この餓鬼も突き殺してくれるぞ！」
と喚きたてて、博徒をたじたじとならせておいて、ふらふらと鳥居をくぐって来た。
茶店の前に立つと、
「ばばあっ！　酒を持って来い！　どんぶりに盛って来やがれ」
と、呶鳴った。
婆さんが、おそるおそるさし出した手造り酒を、職人は、一息に飲み干した。
それを見まもっていた老人が、

「親方、幼児を、人柱にするならわしは、いまだ、きかぬが……」
と、声をかけた。
「うるせえや。ならわしがあろうがなかろうが、おれの知ったことけえ。なけりゃ、おれが、つくってやらア」
「わが子を人柱に立てるとは、鬼だの。照手姫が、よろこぶ道理があるまい」
「つべこべ、ほざくねえ！　どうせ、おれの子じゃねえや。嬶が間男して、ひり出しやがった餓鬼だあ！」
老人が、腰掛から立った。
「子供に罪はない！　止さぬか！」
鋭く叱咤した。
「おっ、爺っ！　下手に近づきやがると、餓鬼ののどが、ぱっくり口をあけるぞ！」
職人は、凄い形相で、睨みかえした。
老人は、橋を渡って行く職人を見送って、歎息すると、
「ご浪人、どうにかならぬであろうか？」
と、狂四郎に、たのみかけた。
終始黙然として、眺めていた狂四郎が、その呼びかけに、薄い笑みを、口辺に刻むと、
「子供をとりかえせば、ご老人、貴方がお預り下さるか？」
と、訊ねた。
「やむを得ますまい。引き受けましょう」
狂四郎は、それをきいて、やおら、腰を上げたが、小銭を受けとる婆さんに、あの大工はこの

近辺の者か、と訊ねた。

婆さんは、「このあたりでは見かけぬ職人でございます」とこたえた。それだけきいて、狂四郎は、茶店を出た。

泣きさけぶ幼女をかかえた職人は、なぜか、楼門へ達する百八級の石段を避けて、松林をへだてた脇の坂道をえらんで、登って行く。

ふところ手の狂四郎は、四五歩の間隔をとって、ゆっくりと、そのあとを歩いて行く。

と――。

職人が、足を停めて、頭をまわした。

「おれに、ついて来て、どうしようってんだ、おい、浪人？」

「人柱に立てるところを、見物しようと思ってな」

「なにをっ！」

「と、申したら、お前の方では、困るのではないのか」

「なんだと！」

「いい加減で、猿芝居は止したがいい」

「猿芝居だと！」

職人は、大きく目をひき剝いた。

「鑿から、血がしたたっていたが、お前は、この近辺の者ではないそうな。遠いところから歩いて来たとすれば、血はかたまって、黒くなっていなければならぬ。その血は、そこらあたりで、

犬か猫を突き殺したものだろう」

「………」

職人は、こたえる代りに、地べたへ胡坐をかいた。

「どうした。頭領？」

「図星だ、旦那、旦那――。おそれ入りやした。あっしゃ、小猫を一匹、殺したただけよ。……だがよ、旦那、嬶が間男しやがって、手飼いの小僧っ児と駆落ちしやがったら、誰だって、逆上するじゃねえか。この餓鬼を突き殺して、てめえ自身も首を縊ってやろう、というやけくそな気分にもなろうじゃねえか」

「そういうものかな」

「そうよ。おめえさんなんざ、女房に裏切られたことがねえだろう。あっしの気持が、わかってたまるけえ」

「気持はわからぬが、その子は預ろう」

「なにを？」

「殺すよりは、他人の手でも、育ててもらった方がよかろう」

狂四郎が、幼女を抱いて、戻って来ると、茶店で待っていた老人は、

「やあ、これは、忝けない。お手前ならば、と期待して居りましたぞ。どれ……」

両手をさしのべて、受けとると、

「怕かったであろうな。もう安心じゃ」

と、泪を拭いてやってから、供の小者に渡した。

狂四郎が一揖して、歩き出そうとすると、老人は、呼びとめて、
「この子を、まさか、この年寄が育てるわけにも参らぬ。この藤沢に、わたしが永年懇意にして居る郷士が居る。屋敷も広いし、使傭人も多い。こころよく預ってくれる、と存ずるゆえ、お手前ご同道ねがえまいか。一献、さし上げたい」
狂四郎は、ことわろうとした時、偶然、小者に抱かれた幼女と、視線が合った。
幼女のつぶらなまなざしは、必死に、じっと、自分を救ってくれた男を、瞶めていた。
「お邪魔いたそう」
狂四郎は、承諾した。

代官に永年貸してあったのを、近年にいたって返してもらったという家だけあって、その郷士の屋敷は、堂々たる構えであった。
主人も、その構えにふさわしい恰幅の、おっとりして、小事にはこだわらぬ人物と見えた。
不意の訪問にも拘らず、はこばれて来る料理が多種であったのは、この家の裕福と人手の多いのを物語るものであったろう。
狂四郎は、すすめられるままに、盃をかさねた。
人が多勢住んでいると思われるにも拘らず、屋内は、もの静かであった。給仕に出て来た女中たちも、きびしく躾られた作法をみせたし、何かの用事で、主人を呼びに来た下男の物腰も、渡り奉公の中間などとは比較にならぬものだった。
——ただの郷士ではないようだ。

狂四郎は、料理を盛った器ひとつにも、吟味がゆきとどいているのを知って、その素姓に興味をそそられたが、敢えて口に出しては訊ねなかった。

案内した老人も、語ろうとせず、主人も、旧家を誇るような言葉は、一句も口にしようとせず、鷹揚な態度を示していた。

夜の時刻が、かなりまわってから、厠に立った狂四郎は、座敷へ戻って来ると、

「ご造作になったついでに、泊めて頂くことにいたしたい」

と、たのんだ。

この男が、自分から、もてなしにあまえるのは、珍しいことだった。

主人は、三日でも、十日なりとも、とこころよく応じた。

寝所にあてられた別の座敷にみちびかれたのは、遠く、遊行寺の梵鐘が、乙夜を告げてからであった。

十五畳はあろう、広い立派な座敷であった。

夜具も立派であった。

この家の親切は、文字通りいたれりつくせりであった。

狂四郎をみちびいて、寝衣にきかえさせた器量のいい、まだういういしい二十歳前の女中が、牀に横になった客に対して、両手をつかえて、

「お伽つかまつります」

と、申し出たのである。

狂四郎は、女中の顔を視た。

目を伏せて、こちらの応諾を待つ風情に、可憐さがあった。

狂四郎は、わざと、沈黙をまもった。

女中は、しばらく待ってみてから、

「おゆるし下さいませ」

と、頭を下げておいて、立つと、夜具の裾に下って、仕着せの着物を脱ぎはじめた。

――どういうのだ？

客に対して女中を伽させるしきたりに対する疑惑ではなかった。ういういしい二十歳前の娘が、なんの抵抗もなく、主人の命令に順（したが）っているふしぎが、狂四郎を、とまどわせていた。

「ごめん下さいませ」

燃えるような緋（ひ）の長襦袢（ながじゅばん）姿になって、そっと、掛具を揚げて、入って来た娘は、そのまま、目蓋をふさいで、客の手がのびて来るのを、待つ。

肌の綺麗（きれい）な娘であった。しかし、頸（くび）すじは細く、肩にも肉はのっていなかった。胸が薄く、臀部（でんぶ）の肉叢（ししむら）も小さかったことは、牀に入って来る時に、みとめられた。

狂四郎は、手をのばさず、目蓋を閉じた。

およそ、四半刻（とき）が、寂寞（せきばく）の夜気の中で、過ぎた。

それまで、身じろぎもせず、じっと仰臥（ぎょうが）していた娘が、そっと細目をあけて、狂四郎の寝顔を窺（うかが）った。

――ねむった！

ほっとした面持になって、娘が、牀を抜け出るべく、そうっと起き上ろうとしたとたん、ねむっている筈の狂四郎の手が、のびた。

娘は、俯伏（うつぶ）せにさせられ、長襦袢と二布（こしまき）を、するすると、捲（まく）りあげられた。

狂四郎の一方の掌が、小さな臀部から、内股をすべり降りて、その膝にかけられた。
その時、障子が音もなく開いて、縁側から、一個の黒影が、すり足に入って来た。
手槍の穂先が、行灯のあかりに、煌とひかった。
狂四郎は、俯伏した娘をかかえたかたちで、目蓋を閉じている。娘のからだは、こまかく顫えている。侵入者があることを予期していた証拠である。
侵入者は、手槍に、満身の鋭気をそそぎ込むや、充分の狙いをさだめた。
「えいっ！」
電光の迅さで、穂先がくり出されるのと、掛具が大きくはねとんで、緋色をぱっと散らせて、白い肢体が躍るがごとく、逆立つのが同時だった。
名状し難い悲鳴が、ほとばしった。
突き手は、大きく双眼をひき剝いた。
その穂先が、存分につらぬいたのは、逆さに直立させられた娘の、あらわにされた下腹の、楚と浮きあがった秘毛のただ中だったのである。
血汐は噴いて、腹から胸へ、ぬらぬらとつたい落ちた。
狂四郎は、娘のほっそりとした足くび双つを摑んで、その逆さ裸身の後に佇立し、蹠の蔭から、冷然と、突き手を、見据え乍ら、
「人柱を立てるとは、これか、大工の頭領」
皮肉な言葉をあびせた。
侵入者は、意外にも、例の職人であった。
「うぬっ！」

あろうことか、おのが手練の一突きで、若い女の陰部をつらぬいた屈辱で、対手は、狂気の形相になると、手槍を抜き取りざまに、猛然と、襲いかかった。

狂四郎は、娘の死体を横たえると同時に、枕辺の無想正宗を掴んで、大きく畳の上を一廻転して、床の間に立った。

「お主が、武士であることは、遊行寺の坂を登って行く時に、判った。わたしに背中を見せたのが、不覚であった。熟練の大工は、高い梁の上を、角材をかついで渡ることに馴れているゆえ、直線を歩く足どりになって居る。あいにくだが、お主の足どりは、大工のものではなかった。……どういう事態になるか、その興味が、わたしに、この屋敷へ、足をはこばせた」

その言葉のおわらぬうちに、対手は、穂先をすりあげずに、狂四郎の咽喉を狙って、突いて来た。流星に似たその穂先を、耳朶すれすれに掠めさせておいて、狂四郎の右手が、無想正宗を、抜きつけに、敵の胴に送りつけた。

身を二つに折って、崩れ落ちた敵の屍を、跨ぎ越した狂四郎は、手ばやく衣服をきかえた。

「ご老人――」

狂四郎は、その座敷の前に立つと、声をかけておいて、襖を開いた。

老人は、宴席のままの姿で、そこにいた。

狂四郎は、入って、座に就くと、

「ご老人は、公儀大目付――名のある御仁とお見受けする」

と、云った。

老人は、こたえぬ。

隠身で江戸を出た大目付が、自身の口から、素姓を名のるべくもなかった。こちらが、看破したことを告げておけば、よいことだった。

「むだな手数をかけられた。猿智慧を働かせすぎて、はじめからボロが出た、と申上げてもよい。……そのために、若い女が犠牲になり、お手前様の輩下が一人、減った。この眠狂四郎を、消すには、もっと頭数を揃えて頂かねばならぬ」

「お主——」

老人は、冷然と狂四郎を見据えて、

「水野家の古狸にあやつられる傀儡になって、なにが、おもしろい？」

と、きめつけた。

狂四郎は、微笑をかえした。

「説法をうかがいに、ここへ参上したのではない」

「お主が、あくまで十三藩の大名を対手として、踊る、と申すなら、こちらにも致し様があるぞ」

「ご随意に——。妙な話だ。十三藩は、公儀に楯衝こうといたしている筈だが、それをむこうにまわした素浪人いっぴきを、公儀大目付が、邪魔扱いをされる。合点の参らぬことだが、もともと、幕府施政のしくみというやつは、矛盾に満ちているものゆえ、兎や角目くじら立てても、はじまらぬ」

「眠狂四郎、このたびの騒動からは、手を引け！」

「くどい御仁だ。問答に来たのではない、と申している。……ご老人に、うかがいたいのは、大工に化けたあの隠密が、つれていた幼女のことだ」

「…………」

「どこから、つれて来たか？　用済みになれば、両親（ふたおや）へ、かえすのか、ということだ」

「孤児であったら、どうする、と申すのだ？」

「まだういういしい娘を、伽に出すような屋敷には、預けられぬ、ということだな。育ててくれても、何年かのちには、あの娘のように、生贄（いけにえ）にされるおそれがある」

「お主が、貰って行く、と申すのか？」

「他に引きとり人がいなければ、やむを得ぬ。……それとも、ご老人が、育てて下さるか？」

「…………」

「やはり、この素浪人にお渡し下さる意嚮（いこう）のようだ。好むところではないが、そういう役まわりになった、とあきらめて、子供を頂戴して行こう」

狂四郎が、ねむっている幼女を背負って、藤沢宿のとある旅籠（はたご）に入ったのは、もう子刻（ねのこく）（午前零時）をまわった頃合であった。

狂四郎が、案内された部屋には、少年三吉が、ねむっていた。

今夜は、この旅籠で泊ることを、三吉に告げておいたので、三吉の方がさきに来て、待っていたのである。

「三吉――」

と、呼ぶと、すぐに、ぱっと目をさまして、起き上った。

「な、なんだや、小父さん、その餓鬼？」

「ひろって来た」

「ひろって来たって――。冗談じゃねえや、犬っころじゃあるめえし……」

三吉は、大あくびしてから、ねむっている幼女の顔を、覗き込んだ。

「器量は、わるくねえぜ。上玉に育てたら、左団扇だ」

ひとっぱし、きいた風な口をきいた。

狂四郎は、幼女を、牀に寝かせると、

「そういう料簡を持たぬ、善良な夫婦者に、育ててもらいたいが、お前、さがしてくれぬか。子無しの、小金持など、心当りはないか？」

「ばかくせえ」

三吉は、さもばかばかしそうに、かぶりを振った。

「なにが、ばかくさい？」

「いいかい、小父さん――。子無しの、小金を持っている夫婦なんてえのはな、それこそ、鼻持ちならねえ吝ん坊よ。そういう奴らに預けたら、可愛がってくれるだろう、なんて考えている小父さんは、甘いぜ。赤いべべを着せられて、踊りの稽古をさせられるのが、子供のしあわせってえものじゃねえんだぜ」

「………」

狂四郎は、少年の率直な言葉に打たれて、かえす言葉がなかった。

「餓鬼のしあわせはよう、九人も十人も、がちゃがちゃ、わんわん、ひっくりけえるような騒ぎをやらかしている貧乏人の子沢山の家へ、ほうり込むことさ。一人や二人、増えたって、なんてえこたアねえんだ。二分も付けてやりゃ、大よろこびよ。わかるかい、小父さん――」

「わかった。お前の意見に、したがおう」

「まかしとけ」
三吉は、胸をポンと叩いてみせた。
翌朝——。
狂四郎は、昨日幼女とはじめて出会った境川に架けられた小橋の袂で、三吉に手をひかれている幼女と、別れることになった。
優しい言葉をかけるのは、苦手な男であった。
「では、三吉、たのむ」
それだけ云いのこして、幼女には、ただ、ちょっと頷いてみせておいて、踵をまわした。
四五歩遠ざかると、
「小父ちゃん——」
と、呼ばれた。
振りかえると、幼女が、にこにこし乍ら、
「さようなら」
と云って、手を挙げた。
狂四郎は、微笑をかえした。
——しあわせになれ！
この無頼の男が、はじめて、他人の子のために、祈ってやったのである。

平塚浪人

「眠狂四郎殿とお見受けいたす」
平塚宿の手前——馬入川の舟渡し場の立場茶屋の中から、声がかかった。
榾の煤煙とともに、葭簀をくぐって、流れ出て来る手造り酒の香が、狂四郎の足を停めさせた。
江ノ島へまわって、下之宮の社務所で、旧知の禰宜にすすめられるままに、二十日あまりをすごして来た狂四郎であった。薩摩の島津をはじめ、謀議の諸大名が、帰国の行列をくり出して来るのを待っていたのである。
どうやら、かなりおくれる模様という通報が、武部仙十郎から返って来たので、月が越えるまで、江ノ島に腰をおちつけていたのである。
狂四郎は、葭簀の中へ入った。
自在鉤に燗鍋をかけた炉が、土間に切ってあり、腰掛には、客が一人、尾羽打ち枯らしたという形容は、この男のためにつくられたかとおぼしい浪人者が、
「やあ！　どうも、これは——」
と、無精髭の顔をほころばせて、狂四郎を迎えた。
「卒爾に、お呼びして、失礼つかまつった。それがしは、土佐出の浪人にて、鳥野辺平左衛門と申す者です。……深川の櫓下で、それがし懇意の者が、伏せ玉屋をひらいて居りましてな、そこへ、貴方がときどきおみえになるので、お顔をいつとなく、見おぼえて居り申した。……眠殿は、

上方へ、お出かけでござるか。それならば、それがしを、お供させて頂けませぬかな？　このように、うらぶれて居り申すと、つい、兎角、うさんくさく見られて、旅籠でも、ことわられることが、しばしばでござる。ご迷惑は、おかけいたさぬつもりでござる。路銀も所持いたして居ります。……いや、実は、斯様(かよう)になりふりかまわずに居るのも、国許(くにもと)の妻子に、見せてやる金子を蓄えるために、五年あまり、見栄(みえ)をすて、外聞を忘れて、爪に火をともすくらしをして参りましたのでな。……ははは、百両あまり、ここにござる」

鳥野辺平左衛門と名のる浪人者は、腹を叩いてみせた。

狂四郎は、べつに、返辞もせず、老婆がはこんで来た五郎八茶碗の酒を、飲み干しただけであった。

そして、船頭が客を呼ぶ声で、腰掛から立った。

渡し舟には、狂四郎と平左衛門のほかには、巡礼父娘(おやこ)が乗っただけであった。

「眠殿。馬入川のいわれをご存じですかな」

「いや——」

狂四郎は、晴れた空の下に、すっきりとそびえた富嶽(ふがく)を、望み乍ら、かぶりを振った。

ここから眺める富士は、谷文晁(ぶんちょう)が、東海道勝景のひとつにかぞえただけあって、水と林に調和して、温和な美しいすがたであった。

「知ったかぶりにおきかせ申そうか。……そのむかしは、この馬入川にも、橋が架けられて居り申した。建久九年師走、稲毛の城主稲毛重成が架けた、とみえて居り申す。その翌年——正治元年正月に、源頼朝公が、五十三歳で、薨(こう)じて居るのでござるが、実は、その死の原因は、この橋を渡ったためでござった。……稲毛重成の妻は、頼朝公の正室政子の実妹でござったが、偶々(たまたま)若

死したので、重成は、その供養のために、この橋を架けたのでござった。それまでは、橋は架けられていなかった、と思われ申す。……さて、この橋の供養に、頼朝公も、出御されたが、どうしたものか、橋を渡りかけた時、馬が突然狂って、棹立ち申した。頼朝公は、あわてて、馬腹を、双脚で締めて、渡りきろうとなされたが、間に合わず、馬はそのまま、流れへ、飛び込んでしまい申した。頼朝公は、辛じて、橋へ跳び降りて、濡れるのはまぬがれたが、欄干でひどく胸を打って、失神なされたそうでござる。そのために、鎌倉へ帰られると、高熱を発し、それが生命とりの原因になったと申す。……馬入川の名は、そこから起った、と申すが、それがしの調べたところでは、頼朝公の方が、さきに、馬上で、意識を喪われて、不覚の落馬をされたので、馬が、おどろいて、川面へ、飛んだのが、真実のようでござるな。つまり、頼朝公は、その日、鎌倉を出られる時から、気分が悪しかった。それを堪えて、供養に出御された。供養を了えて、いざ帰ろうと、馬にうち跨って、橋を渡りかけるや、遽に、烈しい眩暈におそわれて、落馬された、という次第でござろうな。死病で、すでに、からだがむしばまれて居ったのでござろう」

問わず語りの昔話を、相槌も打たずに、きいていた狂四郎は、舟から岸へあがった時、一言、

「お主、わたしに、跟いて来る目的は、ほかにあるようだな」

と、云った。

五六歩行って、狂四郎は、足を停めると、振りかえった。

鳥野辺平左衛門は、同じ地点に佇立していた。顔面が、蒼ざめ、こわばっていた。

「やはり……、看破なされたか？」

「わたしに声をかけて来る見知らぬ者で、合力のほかには、生命を狙うこんたんを抱いて居るのが、殆どといってよい」
「それがしも、その一人だ、と看てとられたのでござるな？」
「そうだとは、まだ、云わぬ」
狂四郎は、凝と、平左衛門を見据えた。
「お主は、剣を習ったことはないようだな？」
「お、おわかりでござるか」
「もし、手練者であって、それを、わたしに、気どらせないのであれば、よほどの達人であろうが、そうではなさそうだ」
「それがしは、生れてまだ一度も、道場へかよったおぼえのない者でござる。物心ついた頃から、紙蠹のように、書物にだけ、しがみついて、育ち申した。……それが、いまとなっては、仇となったのでござる」
「…………」
「それがしは、敵討をいたさねばならぬ身の上でござる。……都田水心、と申す兵法者が、目下、お手前をつけ狙って居ることを、それがしは、承知つかまつる。都田水心は、それがしの兄を、討ち果した者でござる」
そこまで、きくと、狂四郎は、歩き出した。
鳥野辺平左衛門は、あとに従い乍ら、言葉を継いだ。
兄は、松山藩久松定通に仕えた剣道師範であった。久松定通は、家中にきびしく文武両道を奨励し、心学道場六行舎を設けて、若ざむらいをのこらず、かよわせたが、平左衛門の兄平十郎は、

そこの教官であった。平左衛門の方は、武芸をきらって、二番町に創設された学明教館にかよって、儒学講筵の助手をつとめていた。

三年前、無双二刀流をとなえる都田水心という兵法者が、土佐を経て、松山城下へ、飄然として出現するや、小面憎くも、心学道場六行舎前の辻に、果し合いを挑む立札をかかげたのであった。

当然、鳥野辺平十郎が、重役の許可を得て、水心と、真剣の勝負をした。そして、二合と撃ち合わずに、一太刀で斬り倒され、三日後に、息をひきとった。

その弟の平左衛門が、生れてまだ一度も、しないも木太刀も握ったおぼえのないことは、衆知であった。

といって、重役も親類縁者も朋輩も、誰一人として、

「お前は、兄の讐を復たずともよい」

と、云ってくれる者は、いなかった。

平左衛門は、無言裡にさげすむ家中の冷たい目に居たたまれず、重役へ、敵討願いをさし出し、国を立出たのであった。

もとより、都田水心を討ちとることは、奇蹟でも起らぬ限り、叶わぬ夢であった。浪人したとあきらめて、江戸へ出て、本所の裏店で、手習い師匠をして、ほそぼそとくらしていた。

平左衛門は、正直なところ、都田水心に出会わないことを、願っていた。

「……皮肉なことでござった。当藩定府の一人が、両国橋の橋上で、都田水心を見かけて、それがしに、急報してくれたのでござる。もとより、その者も、それがしが討てる筈もない、と知っての上で、せきたてたものでござる。……で、やむなく、それがしは、都田水心を尾け狙う身に

相成り、水心が、お手前を討とうと企てていることも、知ったのでござる」
「………」
狂四郎は、相変らずのふところ手で、きいているのか、いないのか、一言もかえさずに、街道をひろって行く。

平塚宿に入った時、鳥野辺平左衛門は、狂四郎の二歩うしろで、
「眠殿──。それがしは、ここで、失礼つかまつる」
と、云った。
狂四郎は、視線をまわして、
「お主の話は、まだ、終っては居るまい」
「ききとどけてやる、と申されるのか？」
平左衛門の顔面に、一瞬、喜色が湧いた。
「つまり、お主は、読書子だから、古人の教えにならうことにした、というわけだろう。史記にあるな。両虎相与に闘い、而して、駑犬、その弊を受く──智者のやりかたはこれに限る、と思案した」
「ま、まことに……、卑劣でござるが、太刀を握るすべを知らぬそれがしとしては、やむを得ず、お手前が、都田水心と決闘されて、討ち果された時、乞うて、その首級を申し受けたならば、と……、まことに、あさはかな、猿智慧を働かせたのでござる。……お許し下され。おのが料簡のいやしさに、われ乍ら、つくづく、いやになり申した」

「それは、本音か？」

「八幡、誓い申す。……やはり、姑息(こそく)な、卑劣な手段は、嗤(わら)うべきでござった。……ここで、お別れいたす」

平左衛門は、頭を下げた。

狂四郎は、しかし、なんとも返辞をせずに、歩いて行く。

平左衛門は、やむなく、あとにしたがった。

狂四郎が、足を停めたのは、紅殻格子(べんがらごうし)の中から、嬌声(きょうせい)が招く家の前に来た時であった。

狂四郎は、冷たい眼眸(まなざし)を、平左衛門へくれると、

「女でも買うか」

と、云った。

「そ、それがしは……」

平左衛門は、当惑の色をうかべて、しりごみした。

「生きている証(あかし)をたてるには、女を抱くのが、最も手っとり早い。そうは思わぬか」

そう云いすてて、狂四郎が、入ったので、平左衛門も、しかたなく、曾我十郎・五郎討入りの夜景を染め抜いた青暖簾(のれん)をくぐった。

格子うちには、六七人の飯盛女(めしもり)が、放俗な姿態を竝べていたが、いずれも人三化七の面相に白壁のように厚化粧して、二人の浪人者を迎えた。

狂四郎は平然として、上ったが、平左衛門の方は、うんざりした様子で、立ちすくみ、女の一人に手をひっぱられなければ、そのまま、遁(に)げ出す気配を示したことだった。

狂四郎は、饐(す)えた臭気のこもった四畳半に通ると、酒を命じ、酒がはこばれると、

「陽気にさわいでもらおう」

と、所望した。

「あいよ」

敵娼は、客より先に、茶碗へなみなみと注いで、ひと息に飲み干しておいて、

「これでも、旦那、あたしゃ、吉原で、ちっとは知られた芸妓でござんしたよ。いえさ、面じゃなくって、芸でね」

と、云い乍ら、三味線の音締めをした。

「からだは売らずに、芸を売っていたが、そのうち、悪い虫に食いつかれ、行灯部屋で、ちょいちょいと、下紐を解くようになったか」

「あいな。挙句の果てが、とっつかまって、小伝馬町へ、拋り込まれて――その牢の中で唄った毬歌をひとつ」

敵娼は、かん高い声をあげて、朋輩を一人呼ぶと、

「踊っとくれ、ひとつとやあ――」

「おっと、合点」

片肌ぬいで、しなびた乳房をあらわにしたばかりか、尻端折りして、太股の奥までチラつかせ乍ら、「さあ、来た！」

ひとつとや、ひとつに捕られて肝つぶし、一緒にならんで数珠つなぎ
ふたつとや、ふた親たちは歎きつつ、百度参りやごまを焚く
みっつとや、南の番所へ駕籠で行き、晩には牢屋の提灯で
よっつとや、夜昼家では相談し、ご慈悲ねがいや、名主さん

いつつとや、いくら芸者のある中で、わたしらばかりが恥をかく
むっつとや、無性にころんだ罰あたり、ひやめし草履でばったばた
ななつとや、なにとぞお慈悲ですむように、妙見さまへ願かけて
突然、隣りの部屋から、女の呶鳴り声がほとばしって、踊り手も弾き手も、びっくりして、
「なんだろう？」
と、顔を見合せた。
「朴念仁野郎！　なに云ってやがんだ。だてに、天の岩戸をおっぴろげているんじゃねえや。禅寺じゃあるめえし、坐りっぱなしで、夜あかしするつもりかよ。飯盛にだって、意地があらあ。揚げ干しにされてたまるかよ」
毒吐くのをきいて、狂四郎は、踊り手に、「その唐紙を開けろ」と、命じた。
牀の上には、長襦袢と湯もじをひき捲って、胡坐をかいた飯盛が、眦をひきつらせていたし、鳥野辺平左衛門の方は、ややはなれた壁ぎわに、腕を組んで、黙然としていた。
狂四郎は、牀の上の股ぐらへ、小粒をひとつ投げておいて、
「おれが、わるかった。あやまる。実は、その御仁は、恋女房を頓死させるほど房事が過ぎて、三年前から腎虚になって居るので、旅枕でなおしてやろうと思って、江戸からつれ出したのだ。憤るな。……平左衛門、出直そう」
と、立ち上った。
狂四郎と平左衛門が、その夜の泊りにえらんだのは、宿はずれの、高麗山を右手に望む花水橋

際の旅籠であった。

平左衛門が、浪花講の看板をかかげてあるのをみとめて、

「この旅籠が、よろしゅうござる」

と、きめた。浪花講の看板をかかげた旅籠は、食売女をすすめなかったのである。

狂四郎が、風呂からあがって来ると、食膳が、はこばれていたが、平左衛門は、箸を把らずに、かしこまっていた。

狂四郎は、手酌で、盃を口にはこび乍ら、

「お主、女と酒は断って居るのか？」

「誓い断ちをしているわけではござらぬ。酒は不調法で一滴も飲め申さず、女は……一度、だまされて、懲り申した」

「一度だまされただけで、懲りたか」

「お嗤い下され。生来、何事に対しても臆病者でござる」

平左衛門は、俯向いて、こたえた。

狂四郎は、その殊勝げな姿を、嘘のないものと、看た。

やがて、銚子一本が、空になった。

狂四郎は、もう一本を追加しようとして、手をたたこうとした。

とたん——双手が、宙で、停止した。

次に、舌のしびれが来た。

——しまった！

眠狂四郎ともあろう者が、見事に、してやられたのである。

五つとかぞえぬうちに、全身が硬直し、倒れようとして、床柱が、背中を受けとめてくれた。眸子だけが、動かす自由をのこされた。

狂四郎は、その眸子を、平左衛門に向けて、まばたきもさせず、ひらいたままだった。

平左衛門は、至極無表情で、狂四郎がしびれ薬に、冒されるさまを、無言で、見戌った。

——どうする？

狂四郎は、目で問うた。

平左衛門は、口をひらいた。

「眠殿——。人間、誰しも、盲点を持って居り申す。お手前も、例外ではなかった。……都田水心は、それがしのかたきではなく、それがしをやとって、お手前を虜にせよ、と命じた男でござった。つまり、お手前の生命を狙う刺客は、なまじの腕前を持った者よりも、いっそ、兵法など全く習ったことのない者をえらんだ方が、お手前に油断させる可能の率が高い、と思案したのでござるな。この考えは、まさしく、図に当り申した。お手前は、それがしが、都田水心を敵と狙う者だと語った時には、まだ、それがしをなかばは疑って居られた。しかし、あの飯盛宿にあがって、それがしが、女からさんざんにのしられるのを、眺めてからは、警戒を解かれた。つまり、お手前は、それがしをためそうとして、あそこへ上って、逆に、それがしにだまされる、という結果を招いたのでござる。いや、それがしがだましたのではなく、お手前自身、おのが観察眼に自信があるために、一人相撲をとられた、ということに相成る。お気の毒であった、と申上げるよりほかはない」

そう云って、平左衛門が、会心の笑みを、うかべた時であった。

「ここか——」

と、いう声とともに、障子が開かれた。
姿をみせたのは、都田水心であった。
狂四郎を一瞥するや、にやりとして、
「ほう、仕止めたの」
と、云って、平左衛門の前に坐ると、
「ご苦労、ご苦労――。どうだな、稀代の魔剣使いを仕止めるには、やはり、剣ではなくて、虚を衝くことであったろうがな」
と、自身の思案を、自慢した。
「まさしく……。では、お約束の礼金を頂戴いたしとうござる」
「うむ」
水心は、懐中から、切餅をひとつ、とり出して、平左衛門の膝へ投げた。
平左衛門は、それをしまうと、自分の膳から盃を把って、水心にさし出した。
「首尾を祝うて、一献――」
「うむ」
水心は、平左衛門の酌を受けて、飲みはじめた。
狂四郎は、床柱に凭りかかって、凝っと瞶めているばかりである。
四五杯かさねてから、水心は、狂四郎へ視線を移し、
「眠殿――、それがし三度目の工夫は、如何でござったかな。こんどこそ、網にかかった、とあきらめて頂こうではないか」
と、嘲笑した。

と――。

狂四郎は、そのあざけりの表情が、不意に、こわばるのを、視た。

その右手から、盃が、ポロリと落ちた。

水心は、平左衛門へ、憤怒の視線を向けて、何か叫ぼうとしたが、声が出ないままに、畳へのめり伏して、それきり微動だにしなくなった。

平左衛門は、自分の膳の酒にも、しびれ薬を入れておいたのである。

「眠殿――」

平左衛門は、依然とした無表情で、狂四郎に云った。

「それがしは、都田水心に、お手前の生命を取る約束は、いたさなかったし、また、お手前を虜にしたあと、水心に斬らせる約束もいたさなかった。それがしは、お手前を、見事に虜にして、水心から礼金を貰い申した。そこまでで、それがしの任務はおわったのでござる。それがしが、水心をも、しびれさせてしまったのは、それがし自身の勝手でござる。……それがしは、殺戮は好み申さぬ」

そう云ってから、平左衛門は、立ち上った。

「それがしは、これで失礼いたすが……、水心の方へ嚥ませた薬の方が、少々強うござるゆえ、眠殿がさきに、四肢の自由をとりもどされることになり申す。では――」

平左衛門は、去った。

狂四郎は、指一本動かせぬまま、畳へ俯伏した都田水心を、眺めやり乍ら、なんとも押えがたいおかしさが、胸にこみあげていた。

声をたてることができれば、思いきり、哄笑するところであった。

——負けたのだ！

完膚なき敗北を喫し乍ら、この男が、こんなにもからりとした明るい気分になったのは、生れてはじめてのことであった。

大磯待ち

恋に狂えば、千里も一里
大磯、いそいそ、磯づたい
会いに来たこら、やっこらさ
千鳥泣かせて、波かきわけて
手に取りゃ、こいつが、磯巾着
と来らあ

やぞうをきめた金八が、陽気に唄い乍ら、雨もよいの空の下を大磯宿に入って来て、とある出茶屋の前で、

「おうおう、姐（ねえ）や」

と、大声で呼んだ。

緋縮緬（ひぢりめん）の前掛をつけた、十六七の愛くるしい娘が、小座敷前の上り框（かまち）で、所在なげに炒（い）り豆をかじっていたが、

「なんだい、金八？」

と、伝法な口をきいた。

金八は、この娘が、容子に似合わぬ莫連めいた態度をみせるのに、もう馴れていた。

「ご挨拶だ」

「どうだ、まだ通らねえか？」

金八は、皿の炒り豆を、手摑みに、口へほうり込んで、訊ねた。

「あたしゃ、馬糞女郎みたいに、通る男を、片っぱしから呼んでいるんじゃないのだからね。それに、御膳を喰べている時や、厠へ行っている時だって、あらアな。……知らない間に、通っちまったかも知れないやね」

云いかたは、いかにも、つっけんどんであったが、金八は、この娘を信頼していた。

眠狂四郎が、この茶屋の前を通ったら、すぐに、逗留している小磯の旅籠まで通報してくれる約束であった。

小きんというこの娘は、ついこのあいだまで、両国のならび茶屋のお茶汲みをしていて、狂四郎の顔を知っていたのである。

金八は、床几に腰を下すと、

「人を待たせるにも、程があらあ、眠狂四郎め。いってえ、どうしたってんだろうな」

「お前は、廊下鳶を知ってやがるとは、隅に置けねえぞ。さては、おめえ——、洟ったれの頃、吉原で、禿でもやっていたな？」

「止しやがれ。助平野郎の機嫌をとるおもちゃになるくらいなら、首を縊った方が、よっぽどい

いや。あたいの親爺が道楽者で、物心つくかつかぬ頃から、女郎買いの話をきかせるものだから、よけいなことをおぼえちゃったのさ。……親爺がさ、七つになったあたいに、本気になって、教えたものは、なんだと思う？　畳算さ」
「あきれた親爺だな」
「あっ！　そうだ！」
小きんは、急に眸子を光らせると、上り框から立った。
「ひとつ、畳算で占ってやろうか。眠狂四郎が、来るか来ないか」
云うがはやいか、小座敷にあがって、正座すると、あたまから、簪を抜いた。
「ほんとはさ、旅籠で、お前と一緒に待っている、理江様の簪の方がいいんだけどね。……理江様は、狂四郎旦那に惚れてんだろ？」
「惚れた思いを岩うつ波のわれから砕けて物想い、という風情だアな」
「恋って、そんなに、いいものなのかしらねえ」
小きんは、ふっと、あこがれる表情になった。
「そこで、一番、この金八に惚れてみるか」
「阿呆らしい。女子に惚れられる面かい」
「未通女にゃ、わからねえだろう。吉原で、七人の花魁が、この金八を間夫にしように、しのぎをけずった——そも、依って来る所以のものは、そもそもだ、男の魅力が、面じゃなくて、舌さきと臍下の三寸にあるって証拠だアな」
「畳算をやるよっ！」
小きんは、金八の饒舌を抑えておいて、簪を捧げもって、しばらく、一心に念じていたが、ポ

ンと落した。

簪は、畳へななめにぷすりと突きささった。

「あら、南へ向いちゃった」

「南へ向いちゃ、いけねえのか？」

金八が、訊ねた。

小きんは、返辞をせずに、簪の突きささったところから、畳縁まで、目の数をかぞえはじめた。偶数であれば、待ち人が来ることになる。

かぞえおわって、小きんは、金八に向うと、もったいぶった表情で、占いの結果を、おごそかな口調をつくって、告げた。

「南。おのが自身の心持にて、良くも悪しくもなるべし。待ち人、当てにならず。人の心はみな裏表あり。想い事、先に通らず。待ち人もし万が一、来らば大凶なり」

「置きやがれ！」

金八は、いまいましげに、首を振った。

「眠狂四郎って御仁はな、見かけはどうあれ、土性っ骨は、まっすぐ、孟宗竹のように、通っているんだ。忠臣蔵じゃあるめえし、裏表があってたまるもんけえ」

「だってさ、占いに出たからしようがあるまいよ」

「うるせえ！」

小きんは、金八の凄じい権幕に、はじめて、娘らしく、怯えの色をみせた。

「眠狂四郎は、三四日うちには、必ず、ここを通るんだ。通ったら、大吉じゃねえか。大凶だなんて、縁起のわるい占いをしやがるねえ！　てめえ、見のがしやがったら、その時は、有無を云

わせず、手ごめにして、今戸焼きの狸のように、孕ませてくれるから、覚悟しろい！」

江戸から十六里二十町、小田原へ四里――大磯は、曾我十郎の想い人虎御前で、名がある。

虎御前が、別れの涙をしぼった曾我兄弟討入りの日の雨は、虎が雨、として地下人に記憶されている。広重もまた、雨の大磯を写している。

小磯の旅籠の二階の出窓に、理江は凭って、いつの間にか音もなく降って来て、海原を烟らせはじめた早春の浜景色へ、じっと、眼眸を置いていた。

小磯は、鴫立沢ともいう。

松の木立のあわいに見える小さな堂宇は、西行堂である。西行法師の木像を安置してある。

　心なき身にもあはれは知られけり
　　鴫立沢の秋の夕暮

西行が、沢辺に鴫の立つを眺めて詠じた一首が、いつの間にか、小磯に、この別名を与えた。浜にもまた、海綾の磯、という優雅な名がつけられている。

東海道でも、明媚の風光は、屈指であった。

この一月あまり、その景色を眺めくらして来た理江は、晴れた日と曇り日と雨の日と、朝と午と夕と夜と――その日その時によって変化する美しさを知った。

尤も――。

狂四郎を待つのに、小田原ではなく、この大磯宿をえらんだのは、景色の美しさのためではなかった。

小田原では、人馬輻輳して、待ち人を見のがすおそれがあった。大磯か小磯か、また、大磯と小田原の間は、四里以上の距離をへだてているので、旅人は、大磯か小磯か、また間の宿の梅沢で、一度、休息する。

待ち人を、待つには、恰度地の利を得たところであった。

「主が、ためなら、わしゃどこまでも、と来た」

階段をのぼって来乍ら、大声で唄う金八の声に、理江は、われにかえった。

「たとえ野の末、山の中、エエ、虎伏す森の奥までも、コチャいとやせぬ、賤が伏家で、飯もたいたり、縫い針、手わざ」

ガラリと障子を開けて、

「へい、只今――」

金八は、ぺこんと頭を下げておいて、

「お嬢さん、男女の仲ってえやつは、妙なものでござんすねえ」

と、云った。

「そうですか」

「男が追うと女が逃げ、女が追うと男が逃げるしかけになっているのが、妙じゃござんせんか。一生添うとは男のくどき、いやじゃいやじゃは女の癖、相模女は、いやじゃ、と首を縦に振る――と云いやすが、そこんところのかけひきが、上手か下手かで、夫婦になれるかなれぬか、きまるんじゃありませんかい」

「わたくしのような女は、不調法で、かけひきなど、できませぬゆえ……」

「なに、お嬢さんを、そそのかしているわけじゃありませんや。ただ、どうも、あっしは、つら

つら、おもんみるに、眠狂四郎って野郎は、敵には背中を見せたことがねえくせに、女には、もっぱら、うしろを向いて、そ知らんふりをする悪い癖があるんでさ。そこで、ひとつ、どうでも、こんどは、あん畜生を追わせる番にまわすには、策を用いた方がいい、と思うんだが、どういうものでござんしょう?」
「策といいますと?」
「手っとり早く云や、お嬢さんが、どうでもこうでも、お父上の仇討をしたいと、殿様の生命を狙って、岸和田へ行っちまった、とあっしが報らせりゃ、眠狂四郎は、知らん顔をしていられる気性じゃ、ないんでさ」
「………」
「お嬢さんが、ここで、こうして、じっと待っている、ときくから、あん畜生は、そ知らんふりで、さっさと、通り過ぎて、行っちまうんでさ。……眠狂四郎に、お嬢さんを追わせるのは、この一手しかねえように思いやすが、いかがなものでござんしょう?」
「わたくしは、もう、殿様をおうらみする気持は、すこしもありませぬけど……」
「そこだ! 恨みがあろうがなかろうが、父親の敵にゃまちがいねえ。大義名分は、ありまさ。やってこまそ、と覚悟をきめて、たった一人で、岸和田へ行った、ときいたら、眠狂四郎は、とても、じっとしていられやしねえ。嘘も方便、という文句は、仏典にあると、いつか、あっしの懇意の講釈師の立川談亭って爺が、教えてくれましたぜ」
「わたくしは、嘘はつけませぬ。嘘というものは、いくら巧みについても、屹度わかります。まして、眠様のようなお方は、決して、だまされませぬ。わたくしは、たとえ、どのように、つれない仕打ちを蒙っても、自分の心をいつわらぬ振舞いをして、眠様を慕うて参ろうと存じます」

理江は、亡き母の形見として、十二歳の時から肌身につけていた金の十字架を、狂四郎によって、海へ投げ棄てられたが、かえって、これを契機として、狂四郎の妻になろうと誓ったのである。

露見すれば死罪となる禁制の宗門に帰依し、その恩寵をかたく信じているだけあって、一途に思い込んだならば、梃子でも動かぬ頑なな自分の性格を、理江はよく知っていた。

「へい。お嬢さんのお気持は、よくわかりました。それじゃ、あっしの申し上げたことは、すっぱりと、取り下げます。……しかし、お嬢さん、くどいと仰言るかも知れませんがね、眠狂四郎という野郎が、自分のそばへやって来てくれるのを、待つのは、辛抱の要ることでござんすよ。待って、待って、待ちぬかされて、挙句の果てが、とうとう、来てくれなかった、という場合だって、想像できるんでさ。お嬢さんにとっては、こいつは、底なしの泥沼へはまり込んだようなものかも知れませんや。どうか、覚悟をなすって下さいまし」

「わかって居ります」

理江は、微笑してみせた。

「わたくしは、眠様のようなお方を、慕うて参るように生れついた女かも知れませせぬ」

ところで――。

襖ひとつへだてた隣りの部屋で、理江と金八の会話を、きいていた者があった。

主従で、主人はもう六十歳を越えている白髪であった。家来は、まだ三十ばかりであった。

昨夜、おそく、この旅籠に着いた。

薩摩藩の調所（ずしょ）笑左衛門といえば、知る人ぞ知る。

五年前、当主島津斉興（なりおき）に起用され、薩摩藩が約百年間につくった借財五百万両を、一挙に整理し、藩内に極度の節約令を断行するとともに、砂糖専売をはじめとして、あらゆる物産を興して、たちまち、島津家の財政をたてなおした怪物であった。

島津家は、大坂の豪商から、五百万両を借り、その利息だけでも、一年に五十万両以上支払って居り、どうにもならぬ窮地に追い込まれていた。江戸詰の藩士たちは、一年以上も月俸をもらえず、藩主さえも参覲（さんきん）交代が不可能になって、病気を申したてて、江戸にとどまっていた。藩邸では、いろいろの買物の代金はもとより、駕籠（かご）人足の賃銀さえも滞っていた。厩番（うまやばん）は、邸内に草をはびこらせて、まぐさにしたくらいであるから、余は推して知れよう。

そこで、ついに、御側（おそば）用人の調所笑左衛門の起用になった。

しかし、笑左衛門は、茶坊主の出で、その利発をもって茶道役から本筋目の役目に転じて、御側用人にまで出世した人物であったが、全く財政のことを知らなかった。堅く辞したが、斉興は、

「そちが知らないからこそ、まかせるのじゃ」

と、免（ゆる）さなかった。

これは、斉興の慧眼（けいがん）であった。

財政を知らないからこそ、笑左衛門は、まことに思いきった方策を樹（た）て、断行することができたのである。

すなわち。

笑左衛門は、大坂へおもむき、あたらしく金を貸してくれる商人をもとめたが、五百万両の負債を背負っている藩に、応ずる者はなかった。笑左衛門は、いくたび、切腹を決意したか知れな

かった。ついに五人の新組銀主をつくって、金を借りるまでには、筆舌につくせぬ苦心をはらった。

それのみならず、笑左衛門が、次に打った手は、五百万両の古借証文を、商人たちの手からまきあげることであった。なみたいていの辣腕をもって、なし得るわざではなかった。笑左衛門は、商人一人一人に対して、それぞれ、ちがう策略をもって、二年のうちに、みごとに、五百万両の借用証文を、一枚のこらず、まきあげたのであった。

尋常一様の器量の持主ではなかった。

笑左衛門は、一年に一度ずつ、江戸と薩摩を往復していた。

しかし、決して、供揃いをなさず、部下として海老原清熙を一人だけ連れ、ほかには、護衛の役として、琉球生れの忍びの者で、十兵衛という者に、あとを見えかくれに歩かせているばかりであった。旅籠もまた、武家の泊らぬ家をえらび、つとめて、目立たぬようにしていた。

理江と金八の会話がきこえた時、笑左衛門は、点前をしていた。

喫しおわって、笑左衛門は、海老原清熙に、ひくい声音で、

「きいたかの」

と、云った。

「はい――」

清熙は、うなずいた。

「眠狂四郎と申す浪人者には、隼人党が十余名、斬られて居り、また、小納戸の東田主膳も斬られて居ります」

「生かしては、置けぬ浪人者じゃの」

「左様に存じますが、とても、これにまともに太刀打ちできる者は、見当りませぬ」
清熙にそう云われて、笑左衛門は、ちょっと、考えた。
実は、西国十三藩の大名たちを謀議させ、ひとつの異常の企てを実行すべく決意をかためさせたのは、この調所笑左衛門の頭脳より出た窮乏打開策なのであった。
ややあって、笑左衛門は、云った。
「どの程度の男か、ひとつ、ためしてみるかの。それによって、討ちとる手筈をととのえることにいたそう」

「あっ！」
小きんが、叫びをあげて、落間（おちま）から、駆け出た。
「旦那！　眠狂四郎の旦那！」
小雨の中を、どこでもとめたか、渋傘をさした狂四郎は、かん高い声に呼ばれて、視線を向けた。
「小きんか。ここに、つとめて居るのか？」
「あたいの家ですよ。素通りはさせませんよ、旦那――」
「あいにくだが、急ぐ。小田原で、今夜、人に会う約束がある」
「いやだっ！」
小きんは、路上へ走り出て来て、行手をふさいで両手をひろげた時、ふと、狂四郎の足もとに、野鳩が、ちょこんと、いるのに、気がついた。

「まあ、可愛い！　雨に降られて、迷ったのかしら」

「妙な鳩だ。化粧坂で、道のまん中にいたが、まるで、待っていたように、わたしが歩み寄ると、さきに立って、ちょこちょこと歩き出して、ここまで、やって来た」

「可愛いじゃござんせんか。野鳩は、なかなか人に馴れないんですよ。それがさ、旦那に一目惚れして、案内役をつとめるなんて、お伽噺みたい——」

「一目惚れしたのなら、肩にでも、とまったら、よさそうなものだが……」

「ただ、さきを歩くだけ？」

「そうだ。一度も、飛ぼうとはせずにだ」

「じゃ、旦那は、この雨の中を歩かせて、平気だったんですか？　薄情者！　羽根を痛めて、飛べないのかも知れないじゃありませんか。……かわいそうに——」

小きんは、しゃがんで、鳩へ手をさしのべた。

とたんに——。

鳩は、ぱっと、飛び立った。

すると、小きんが、急に、顔色を変え、苦しげに、「ああ、あっ、あ……」と、呻きをあげると、膝を折って、濡れた地面へ、崩れた。

瞬間——。

狂四郎の右手が躍って、空へ、小柄を放った。

野鳩は、いったん、茶屋の廂へ落ちてから、路上へころがった。

狂四郎は、小きんをかかえあげると、茶屋に入って、小座敷へ横たえておいて、おもてへ、ひきかえした。

そして、いつの間にか、姿を現して、数間はなれた地点に佇立（ちょりつ）している中間（ちゅうげん）ていの男へ、声をかけた。

「お主が、飼い主か。手塩にかけて馴らした鳥だろう。葬ってやるがよい」

男は、近づいて来ると、いんぎんに一礼して、

「この野鳩が、お手前様に害を加えるもの、とどうしてお判りでありましたか、うかがいたく存じます」

と、訊ねた。

「化粧坂下の道中道具を売る店が、わたしを呼びとめて、この傘をしつっこく売りつけたが、さして歩くうちに、これが、関東造りではなく、西国も西の、薩摩あたりのしろものと、判った。坂の中途で、その鳥が待ちうけていて、傘の下に入って来て、さきに歩きはじめれば、何かある、と感づくことだ。その鳥が、わたしに惚れたのではなく、この傘をさしている者の足もとを歩くように訓練されていることぐらいは、判る。……但し、その鳥が、羽根の蔭に、毒粉をかくしていて、飛び立つとたんに、撒（ま）きちらすことまでは、看破できずに、あたら、娘一人を殺した」

明快に云いあてられた男は、路上の野鳩のむくろをひろい取ると、再び、いんぎんに、一礼して、

「失礼つかまつります。いずれ、次の機会に、お生命（いのち）を頂戴つかまつることになるかと存じます」

と、云いのこすと、踵（きびす）をまわした。

狂四郎は、雨中を遠ざかる後影を見送り乍ら、

――琉球あたりの貌（かお）だが、薩摩がやしなう拳法忍びか。

と、思った。

調所笑左衛門が、夕餉の膳に向っている時、海老原清熙が、戻って来た。

「やはり、眠狂四郎は、冴えたカンを備えて居ります」

「十兵衛でも、仕損じたか？」

「はい。わが子のように可愛がって居りました野鳩を、眠狂四郎に殺されて、悄然といたして居ります」

十兵衛の報告によれば、まず、常人ならば、さしている傘の下に、鳥が入って来て、足もとを歩けば、つい可愛さで、手をさしのべて、抱きあげようとするのが、人情であろうが、眠狂四郎は、黙って、野鳩を、ものの三町も歩かせた、という。

「そうか」

笑左衛門は、重い面持でうなずくと、云った。

「近いうちに亡き者にせねば、このたびの企ては、あるいは、浪人者一人のために、瓦解いたすかも知れぬ」

小田原火矢

酒匂川。

「行程記」に謂う。三月より九月まで徒渉り、冬期は土橋を架ける。この川、左の方一丁ばかり

にて海に入る。追はぎ多し。

眠狂四郎が、そこへ到着したのは、よく晴れた日の昏れがたであった。

来月はじめまでは、土橋が架かっているものと思って、この時刻を歩いて来たのであったが、あいにく、橋は、去年の秋の颱風で、むざんに、なかばから、もぎとられていた。

狂四郎は、やむなく、すこし上手の堤上に建っている輦台小屋へ、歩いて行った。

大井川とともに、この川の輦台渡しは、名物となっている。

――この時刻では、人足はひきあげているかも知れぬ。

小屋へ寄ってみて、その予感はあたった。

狂四郎は、磧へ降りて、流れを視た。

雪解けで水嵩が増していて、徒渉りは不可能であった。

狂四郎は、舟をもとめて、上流へ向って歩き出した。

と――。

ゆっくりと、下って来る舟があった。夜釣りに海へ出て行く、とみえた。

「おい――」

狂四郎は、呼んだ。

「すまぬが、むこう岸へ送ってもらえぬか？」

「へい」

漕ぎ手は、すぐ、舟を寄せて来た。綿入れの頭巾をかぶり、厚司で着ぶくれて、海の上で夜明しする装であった。

「どうぞ――」

「忝けない」
狂四郎は、舳先に腰を下した。
漕ぎ手は、黙々として、川を横切って行く。
むこう岸で、磧人足らしい一団が、焚火をかこんでいたが、舟がすすめられて行くあいだに、その焔が急に鮮やかに浮きあがって来た。
昏れなずむ川景色に、狂四郎は、放心の眼眸を置いている。
漕ぎ手は、舟を、焚火をかこむ一団のすぐ近くへ、寄せて、艪を竿に代えると、舳先をまわした。
そこは、流れの中へ、石垣の突堤が出されていた。
漕ぎ手は、それへ、艫を寄せる、とみえた。
と——一瞬。
漕ぎ手は、おそるべき迅業を発揮した。
足もとに置いてあった錆朱の桶を、蹴倒して、ぱっと舟一面へ、油を撒きざま、おのれは、突き竿を利用して、二間の距離の宙を躍って、突堤へ跳び移った。
艫を蹴られた舟は、再び流れへ、すべり出た。
その時、焚火をかこんでいた一団が、一斉に、燃える薪を掴んで、磧を奔って、汀へ立つや、舟めがけて、投擲して来た。
狂四郎は、その一本を素手で受けとめて、水面へ抛りすてた。
あとの七八本は、いずれも狙いあやまたずに、舟中へ落ちた。そして、撒かれた油へ、焔を移した。

たちまち、舟は、火だるまになって、燃えあがった。

狂四郎は、艫へ奔って艪を把ることが叶わず、そのまま、舳先に佇立しているばかりであった。

あわてて、水へ飛び込まなかったのは、咄嗟の危機に遭うた時、おのれを失わないように、無数の死地を脱して来た者の沈着が、その不利を教えたからである。

敵がたは、当然、こちらが、水へ飛び込むことを予測して、その攻撃手段を講じているに相違ないのであった。

水に自由を奪われた身は、惨めである。

果して——。

紅蓮舌に足もとをなめられ乍ら、彫像のごとく動かずにいる狂四郎に向って、敵がたは、苛立った模様で、矢を射放って来た。

狂四郎は、その三本ばかりを、無想正宗で両断する目にもとまらぬ冴えを示した。

それから、

——よし！

と、うなずくところがあった。

漕ぎ手が、舳先に、舫綱をのこしておいたのは、不用意というべきであった。

恰度、燃える舟は、洪水で切断された土橋の、東側の残り桁のそばへ流れ寄っていた。

狂四郎は、すばやく、脇差を鞘ごと抜くと舫綱のさきにくくりつけて、橋桁めがけて、投げあげた。

ぐいと、綱を引いて、うまくひっかかった、と知るや、次の瞬間、狂四郎の五体は、舟からはなれていた。

すでに、宵闇は川面に落ちて居り、それが味方となって、炎上する舟から脱出した身を包んでくれた。
おかげで、綱をよじのぼり乍らも、飛来する矢から、まぬがれることができた。
橋桁の上に立った狂四郎は、小田原側の磧に竝ぶ敵がたへ、
「この礼は、いずれ、あとで、いたそう」
と、冴えた高声を送っておいた。
橋袂に来た狂四郎は、数間むこうの堤上に、人影がひとつ、彳んでいるのをみとめた。
女のようであった。
狂四郎が、近づいて行っても、遁げようとはしなかった。
まだ若かった。二十歳あまりの娘であった。
「そなた、この近くの者か？」
狂四郎が、訊ねると、黙って頷いた。
いまの凄じい光景を目撃していて、興奮で口がきけぬ様子であった。
「火傷をしている。薬があれば、欲しいが——」
そうたのむと、娘は、やっと、口をひらいた。
「家まで、お越しなされませ」
地下の土民の娘ではないことは、その言葉づかいで知れた。
娘が狂四郎をともなったのは、小八幡へひきかえし、そこから足柄道をすこし入ったところに

ある家であった。

竹藪を背負い、四尺ばかりの一文字瓦葺きの土塀をめぐらした風雅なたたずまいであった。狂四郎は、京の南禅寺道にある公卿の別荘を思い出した。

門を入ると、庭は、茶庭の露地のつくりであった。

織部形の灯籠に、灯が入っていて、そのかたわらに小さな音をたてている細流れに、影を映している。流れは、袈裟形のつくばいを濡らして、腰掛待合の縁の下へ消えていた。

母屋から、年寄りの下婢が出て来て、

「おもどりなさいませ」

と迎え、狂四郎に対しても、いんぎんに挨拶した。

「茶室に居ります」

娘は、下婢に告げておいて、狂四郎を、雁行の飛石にみちびいた。

「造作に相成る」

茶室の客座に就くと、狂四郎は、あらためて、挨拶した。

「ごゆるりとご休息なさいませ」

娘は、挨拶をかえしておいて、片隅の厨子棚から、七宝の小函をとり出した。

その中に、塗り薬が入っていた。

狂四郎が手当をしようとすると、娘は、これは女子のつとめでございます、と云って、足を出させて、塗ってくれた。

狂四郎は、手当をしてくれる娘の顔を、眺めた。

美貌ではないが、気品があり、愁いを含んだような目もとの優しさが、男心を惹いた。睫毛が

黒く長いせいか、それとも、心にさびしさがあるせいか——容子ぜんたいに、あわれの翳(かげ)があった。

手当がおわると、娘は、狂四郎の袂に突き刺さっている折れ矢を、そっと抜いた。舟上で、飛来したのを両断した時、袂を縫ったものであった。

娘は、そのまま、黙って、その折れ矢を、じっと、瞶(みつ)めた。

その鏃(やじり)は、鉄ではなく、獣骨であった。これは、珍しいものであった。やがらは、朱で塗られてあった。

狂四郎は、娘がいつまでも、矢を瞶めているので、

「その矢が、どうかいたしたか？」

と、訊ねた。

娘は、ちょっとためらっていたが、

「この矢で、父が、殺されました」

と、こたえた。

「……？」

「ふしぎなめぐりあわせでございます。今宵(こよい)が、父の殺された祥月命日にあたります。……恰度、去年の今宵、父は、酒匂川の河口で、夜釣りの舟を出したところを、同じ夜釣りの舟から、これと同じ矢で、射られたのでございます。……わたくしは、河口の岸に、父をとむらう塚をたてて、毎月、命日に詣(もう)でて居ります。今日も、花を供えて参り……、その戻りに、貴方(あなた)様が危難にお遭(あ)いなされるのを、拝見することになったのでございます」

「お父上は、この小田原藩のご家中であったか？」

「いえ。父は、箱根の関所奉行でございました」

箱根の関所奉行といえば、六街道（東海道・中仙道・日光道中・奥州道中・甲州路・水戸路）を支配する道中奉行に直属する最も権力を与えられた役職であった。

「お父上は、関所奉行として、大層きびしい御仁であったか？」

「いえ、父は、むしろ、事情によっては、掟をやぶって、庶民の衆に、便利をはかる寛大な仁でございました」

当時、箱根の関所の取締りは、厳重をきわめていた。

殊に、入り鉄砲に出女、といって、関東へ鉄砲を持込むことと、婦女子が、江戸を出て上方へ向うことに対しては、想像以上のきびしい取締りがなされていた。

婦女子が、関所を通るためには、武家の夫人や息女と雖も、手形が入用であった。その手形も、実に面倒な手続きを要して入手しなければならなかった。

徳川幕府の方針として、大名の家族は、江戸へ住まわせ、いわば人質のかたちをとっているために、このような掟ができたものであった。

婦女子は、手形を所持していても、いささかでも不備の箇所があれば、通関を拒否されるため、関所のてまえで、内見をするところに立寄って、いわゆる髪改めの老婆に、調べてもらわなければならなかった。その老婆の案内で、関所に入り、定番衆の前に手形を差し出すのであった。不備の箇所はなくても、すこしでも汚損があったり、文字に滲みでもあれば、突きかえされるのであった。さらに、髪改めの老婆が、役人の面前で、髪をほどいて毛先を改め、娘ならばその振袖をしらべた。

関所を越えて、他村へ嫁ぐ娘や、実家の親が病いが重いために、見舞いに行く女子に対しても、面倒な手続きが課せられていた。

恐れ乍ら書付を以て願い上げ奉り候このたび箱根宿小田原町何某娘何と申す女、二十歳に相成り申し候ところ、三島何某方へ女房として縁付き差し遣し申し候、御関所重ねて通行の儀お願い申し上げ候　以上

小田原年寄
何　某　㊞

御関所御定番中様

このような手形が、必要であった。

しかし、この五年あまり——去年の春までは、庶民にとって、通関は、楽であった。関所奉行五十嵐監物が、嫁入りとか病気見舞いが疑う余地のないものなら、手形改めをせずにすませてくれたからである。

親が急病で、一刻をあらそう場合などは、手形を貰うのが間に合わない。しかし、証人がつき添えば、監物は、許してやった。

そのように寛容の人徳者が、いかなる憎悪、怨恨を買って殺されたというのか？

「そなたには、もう、父上が殺された理由が、判って居るのか？」

狂四郎は、小夜という娘に、訊ねた。

「思い当るふしが、ひとつだけございます」

小夜は、狂四郎の視線を受けとめ乍ら、こたえた。

去年の正月元日の夜のことであった。

蘆の湖の湖上を、そっと渡ろうとする船を、遠見番所の番士が発見して、急報した。

正月元日は、関所を通る旅人は、皆無といってよかった。まして、関所破りをする者があろうとは、考えられなかった。

発見は、偶然であった。その番士は、下戸で、わずかに飲んだ屠蘇に酔い、その酔いをさますために、遠見楼にのぼったのであった。

監物は、直ちに、走舸五艘を出して、自ら指揮をとって、その船を拿捕した。

かなりの抵抗があったが、走舸から放つ鉄砲の威力の前に屈した。船中に積まれていたのは、おびただしいさまざまの南蛮製品であった。毛皮、衣料品、薬剤、時計、短銃、そして、南蛮金貨など、いずれも、日本にとっては珍奇の品ばかりであった。もとより、密貿易によってもたらされたことは、疑う余地がなかった。

監物が、走舸から船へのぼった時、責任者とみなされる三人の武士は、すでに切腹して果てて居り、人足と水主だけがのこっていたが、吟味を受けても、武士たちがいずれの藩であるか、知らなかった。

人足と水主は、召し上げた品とともに、江戸表へ送られたが、なぜか、これは、表沙汰にならなかった。

そして、一月後には、監物が、殺されたのである。

「で――そなたは、この矢を射たのが、何者か、つきとめたか？」

「しかとは、判りませぬが……、あるいは――と疑われる屋敷が、箱根路の登り口の、三枚橋ぎ

わにございます。その屋敷内で、弓を引く音が、よくきこえて参る、と噂(うわさ)にききましたゆえ……」

「その屋敷というのは？」

「薩摩の島津様のご隠居所と、うかがいました」

薩摩藩には、重豪(しげひで)、斉宣(なりのぶ)——二人の隠居がいたのである。湯治用に、その屋敷は、三年前に設けられた、という。

「そうか。それで、判った」

狂四郎は、合点した。

「わたしは、神とか仏のあやつる因果応報というやつは、信じない男だが、偶然のめぐりあわせが、そなたの父上の讐(あだ)を復(かえ)す役割を、この矢を射かけた敵の方で与えてくれたようだ。皮肉と云える」

そう云って、薄ら笑う狂四郎を、小夜は、大きく双眸(そうぼう)をひらいて、まばたきもせずに、瞶(みつ)めかえしていたが、一瞬、ふっと俯向(うつむ)くと、微(かす)かに肩をわななかせた。

ややあってから、小夜は、泪(なみだ)をぬぐうと、

「わたくしを、三枚橋の薩摩屋敷へ、おともさせて下さいましょうか？」

と、願い出た。

「わたしを、助太刀の側にまわしたい、と云うのか？」

「いささか、薙刀(なぎなた)を習うて居りますゆえ、手足まといにはならぬつもりでございます」

「あいにくだが、薩摩藩の隠居所は、仇討(あだうち)の場所としては、適して居らぬ。これまで、数多くの人を斬っているわたし自身が、生きて脱出できるかどうかも、おぼつかぬ。そなたには、遠慮して頂こう」

時刻は、二更（午後十時）をまわっていた。

小夜と老婢は、行灯をへだてて、ひっそりと対座していた。

小夜の膝には、物心ついたかつかぬ頃に亡くなった母の日記がひろげられていた。

老婢は、内職の縫物に、せっせと針をうごかしている。

小夜が読んでいるのは、母が十七歳の暮の日記であった。母は、十八歳の正月に、この五十嵐家に嫁いでいる。

頁をめくるうちに、小夜は、ある箇所に心を牽き寄せられた。

『昨夜、祖母様より、大磯の虎御前の話をうかがう。虎は、大磯の長者の女なりしが、家運衰えて、酒楼の妓となれり。姿色美にして、和歌の道に通じ、嬌名湘南に高く、諸豪きそうて、その一笑を買わんとすれども、なびかず。曾我十郎祐成、登楼し来りて、虎は、はじめて、心をうごかす。されど、十郎は、おのが生命の短きを知りて、虎とちぎらず。建久四年五月なかば、十郎、弟の五郎とともに、いよいよ父が讐を復たんとて、一夜、虎に別れに来る。虎、十郎が膝にすがりて、今生にて再びお目もじ叶わぬと知りたるいま、せめて、一夜のちぎりを賜いたまえ、ちぎりなき身は、妻として、貴方様の後生をとむらうこと叶わず、なにとぞ、女ごころをくみたまいて、のぞみを叶えてたもれ、とかきくどきぬ。十郎、その一途の慕情をあわれと思い、一夜を抱いて、立出でぬ。さて、兄弟が望みの遂げし日は、事おわれる日なり。ともに、富士の裾野の露と消えぬ。虎は、もはや誰がために容づくるべき、とみどりの黒髪を下しぬ。墨染めのころも姿となりて、箱根の山に詣で、さらに富士の裾野に向いて、讐を討ちたまえる

はここか、おん身の斬られたまえるはかしこか、と道なき道を辿りつつ、秋草に泪をそそぎぬ。
浮世ぞと思ひそめにし墨衣
　今また露の何とおくらん
露とのみ消えにし跡を来てみれば
　尾花がするに秋風ぞ吹く
去らんとして去る能わず、虫の音、鳥の声、ただ哀れとのみぞ啼ける、とか……。女子の心は、かくあるべしと、祖母様は仰せられ、じぶんも、うなずけり』

読みおわった時、小夜のおもてに、ひとつの決意の色が刷かれていた。
「ばあや、もう、やすむがよい」
小夜は、老婢をさがらせると、そっと立ち上った。
音をしのばせて、母屋を出た小夜は、その一歩一歩に、全身がかたくなるのをおぼえていた。
茶室の前に来た小夜は、そこで、しばし、息をつめて、佇立していた。
ようやく、熱く顫える ひと呼吸をしてから、そこに泊めた浪人者の名を呼んだ。
返辞はなかった。
「おねがいでございます！　眠様――この小夜を、一夜の妻にして頂けませぬか？……父の讐を復って頂くおかたを、わが良人として、明朝、お見送りさせて下さいませ。……お願いでございます！」
しかし、依然として、室内に、人の起きる気配もなく、返辞はなかった。
小夜は、思いきって、縁側へあがって、障子をひらいた。

「眠様――」

呼びかけて、両手を畳につかえた。

「おねがいでございます！　この小夜を、一夜の妻に……」

その悃願の声を、狂四郎は、躙り口の外で、きいていた。

小夜の跫音をきいた時、すばやく起きて、着かえて居り、おとずれた目的をきいた時、返辞をする代りに、音もなく、躙り口から、忍び出ていたのである。

露地を、足早に、跫音を消して歩き出し乍ら、狂四郎は、以前に、いつか、こういう夜があったような気がしていた。

しかし、その時は、平然として、女を迎えて、抱いたような気がする。

――おれも、どうやら、すこしずつ、人間らしゅうなって来たようだ。

おのれの振舞いを、苦笑しているもう一人のおのれがいた。

酒匂川上の凄じい光景を目撃した時、当然、父の横死を思い泛べ、その連想が、得体の知れぬ浪人者を、敢えて、わが家へともなわせたものであろうが、ともなわれた方は、その好意に感謝しなければならぬことであった。

おかげで、報復すべき敵の正体が判ったのである。

――あの娘は、もし今夜、おれに抱かれれば、生涯を有髪の尼として過すであろう。だが、抱かれなければ、あるいは、婿を迎える時節もおとずれよう。

夜道を辿り乍らの、胸中の呟きは、それであった。

箱根決闘

奇妙な部屋であった。
まず、目につくのは、中央の卓上に据えられた、ひとかかえもある巨きな地球儀であった。
勿論、日本で製られたものではないが、横文字の地名の下に、丹念に、平仮名が朱で書き込まれてあり、これはよほど、日時を費した仕事に相違ない。
次に、目に映るのは、壁一面に貼られた銅版着彩の、華麗をきわめた大画幅である。竪・横一丈はあろう。
標題に、
NOVA TOTIUS
TERRARUM ORBIS TABULA
と、記されてある。南半球図を中心に、中央の上部が太陽系図、下部が旧世界図と天動図、左右の上部が天球図、その下に、南極図と北極図。
これにもまた、地名にこまかく、平仮名が入れてある。
どうやら、これらは、寛文の頃、カピタンが持参した品のようであった。
苦心して、平仮名を書き加えたのは、天明から寛政にかけて、江戸城御典医として名のあった桂川甫周の仕事に相違ない。
桂川甫周は、長崎出島和蘭館長イサーク・チチングに蘭語を学び、おどろくべき語学力をそな

えた人物であった。

万国図説の翻訳刊行は、桂川甫周の生涯の夢であったが、ついに、はたされず、ただ、和蘭のヨハン・ブラア鏤刻の、この地球図に、平仮名を書き入れるにとどまったのである。

このふたつの貴重な品——地球儀と大画幅が、どのような経緯で、ここ箱根湯本の薩摩島津家の隠居所に、はこび込まれたか、不明である。

ただ——。

はこび込んだのが、いま、この部屋の南窓ぎわの机に向って、読書している一人の老人のしわざであることは、疑いを入れぬ。

この隠居所——といっても、総建坪二百坪以上の豪壮な構えだが——が建てられた目的が、島津家の両隠居（重豪・斉宣）の湯治にあるのではなく、実は、幕府禁制の密輸の品を、はこんで来て、ここにかくすことにあるのは、この部屋に置かれた時計や毛皮や酒瓶を、一瞥しただけで、明白である。

このような工作を為したのが、この老人——調所笑左衛門なのであった。

おそらく、北隅にある三棟の土蔵には、夥しい密輸の品が、かくされてあるに相違なかった。

調所笑左衛門が、窮迫した薩摩財政を整理して、藩庫をうるおした第一の手段は、砂糖専売である、と世間に知られている。

事実、笑左衛門は、大島・徳ノ島・喜界島の三島でつくられる砂糖を、精良し、これを藩役所の専売にし、五年間でその製産高六千万斤、代金百二十万両に上せたのである。さらに、笑左衛門は、砂糖のみならず、米、生蠟、菜種子、鬱金、朱粉、薬種、牛馬、鯨骨粉方、胡麻、雑紙、櫓木など、あらゆる物産を奨励し、これらを大坂にはこんで、大いに儲けるとともに、古借用証

文をまきあげて、憤怒させた大坂商人たちの信用をとりもどすことに努めたのである。

しかし、笑左衛門が、藩庫を満たすだけの莫大な金子をつかむには、藩内の物産を興すだけでは足らぬ、と考えたのは、改革の命令を受けて、数日沈思した時からであった。

藩内上下に節倹を励行させるとか、物産を興すとかの政策は、これまで、どの藩でも為したことである。

藩をして、百年不動の豊かさにみちびくには、さらに思いきった手段が必要であった。

九州南端に位置する薩摩藩の地形上の利を思えば、おのずから、笑左衛門の肚は、きまった。

国禁を犯すこと。

『密輸』

これであった。

笑左衛門は、琉球貿易に托して、諸外国と密貿易に乗り出し、おどろくべき利益をあげたのである。そして、目下も、あげつつある。

琉球貿易は、幕府へ願い出て、唐物方と名づけて、これをはこんで来ると、いったん長崎へ荷上げして、幕府の手で入札されることになる。これは、商法として、長崎の失費も多く、あまり利益にはならない。ただ、唐物交易に托せば、裏面で、密貿易をすることが、容易だったのである。

密輸の品は、鹿児島と大坂薩摩屋敷と、そして、この箱根湯本の隠居所に分散隠匿され、おもむろに、富有の豪商たちと取引されるしくみになっていた。

大坂江戸の商人たちが、いたずらに五百万両の借用証文をまきあげられて、泣き寝入りをする筈がなかった。見返りとして、密輸の品を取引きすると、笑左衛門が確約したからこそ、諒承して、証文を反古にさせたのである。

さらにまた――。

笑左衛門が、その密輸品を、江戸城大奥、老中筆頭水野出羽守忠成及びその腹心たち（若年寄・林肥後守、御側御用取次ぎ・水野美濃守、御納戸頭取・美濃部筑前守）に賄賂して、たとえ密貿易のことが露見しても、表沙汰にならぬように、万全の措置をとったことは、云うまでもなかった。

笑左衛門は、金を持つ者、地位のある者の弱点を看るに鋭利であった。

いま――。

笑左衛門が、机の上にひらいているのは、桂川甫周の実弟森島中良という多芸多才の人物が、天明の頃に編んだ「紅毛雑話」であった。

『和蘭の商船、東の方――じゃわ、日本の地へ渡海するに、アムステルダムより発船す。アムステルダムは、北極出地五十二度二十三分に当り、気候最も寒し。その地に河あり。アムステルという。この港口に、欧羅巴諸国の商船、輻輳して、繁華なり。紅毛人ここより船を出し、針路を西にもとめ（針路は、羅針の針先によって方角を定む）あんげりや海へ走らす。海上に、あんげりや、すこうしや、ひべりにやの三島あり、三島をあわせて、グレートブリタニヤという。東に、ふらんす国あり。あんげりやは、西洋中の大島にて、北極出地五十度より五十六度に及ぶ。国の都をロンドンとよび、自鳴鐘の細工世界第一なり。また、ふらんす国は、風俗秀で、人民学才あり、強勇にして軍略の事に長ぜり。その言語、能弁にして、聴くに堪えり。グレートブリタニヤを過ぎて、針路を西南にとり、いすぱにや海に出ず。これを大西洋という。

その東、いすぱにや国なり。形は、牛皮をひろげたるにたとう。海上を過ぐれば、東に、ぽるとがる国あり。この地赤道以北三十七度より四十二度の間にあり。この国、欧羅巴洲の中に於ては、大ならずといえども、人民強勇にして、古来より大西洋上に覇をとなう。都城のあるところを、リスボンという。

ぽるとがる国を過ぎて、さらに西南に下りて、亜仏利加洲にいたる。この間、海に沿いたる国多し。バルバレイン、ヒルドルゲリット、サーラ、ニギリシヤ、クワラダ、アルゴイン、ゴイネヤ、コンゴウ等なり。

亜仏利加洲は、赤道の直下に当り、気候きわめて酷熱なり。その中には、百余里の曠野あるいは渺々たる砂地のみ多くして、河水に乏しく、人民居住しがたき地あり。象、獅子、虎、ハンデルス、(豹の壮んなるもの也)、蛇、飛竜、猿、馬を産す。土人色黒くして、野鄙狰獰なり。亜仏利加の渚より西の方に十の島あり。総名をカポヘルデンという。紅毛の商船、東洋に渡るもの、ここより針路を東南に転じて、数百里の海上を経て、ホッテントッテンの地に至る。亜仏利加洲南の極の地にて、赤道以南三十六度に在り。土人色漆黒にして、人類を逸脱す。この地海風激しゅうして波浪最も大なり。激浪に遭うて破壊せる商船、数知れず。

この灘をすぎて、カープデグーデホープに至る。訳して喜望峰という。

アムステルダムを開帆して大西洋を過ぎ、亜仏利加の渚伝いに、この地に至る海路、二千百里、順風なれば凡そ四箇月を経る、という』

そこまで、読んだ時、部下の海老原清熙が、入って来た。

「十兵衛が、眠狂四郎の行方を追いもとめて居りますが、いまだ、つきとめて居りませぬ」

清熙は、報告した。

酒匂川の流れの上で、狂四郎を襲撃したのは、この隠居所の警備に当っている隼人隠密党であった。
狂四郎は、巧みに、火攻めからのがれて、姿をくらまし、そのまま、行方知れずになっていた。
「そのうちに、どこかに現れるであろう。あわてることはない」
笑左衛門は、こともなげに云いすてておいて、
「海老原、日本は狭いの」
「は――？」
「世界があまりに広すぎる、ということになるのであろうかな。……薩摩を出て、台湾までが三百三十余里、台湾から、じゃかわまでが三百七十余里、じゃかわからあふりかの喜望峰まで、千五百里、三箇月の航海じゃ。欧羅巴の国に至るには、それから、さらに四箇月、二千百里も船を走らせねばならぬ、という。なんと、世界は広いものではないか」
「まことに……」
清熈も、そう云われても、想像することもできなかった。
「この狭い日本が、国をとざして、外国と交易もせずにいて、金が足らぬ、米が足らぬとあくせくして居るなどということは、ばかげて居るとは思わぬか」
「左様でございますな」
「もし、公儀が国をひらいてくれるならば、日本人は、たちまちにして、世界中のいたるところに、交易船を走らせるであろうがの。……いま、外国へ船を走らせているのは、日本中を見渡して、このわしと、加賀の銭屋五兵衛だけではないか。なさけないものよ」
そう云いすてて、笑左衛門は、立ち上った。

「入浴でございますか？」
清熙は、訊ねた。
「うむ」
笑左衛門の唯一の愉しみは、この箱根で、温泉につかることであった。日課をきちんときめているので、湯に入る時刻も、ものの十分もちがわなかった。

浴場は、天然岩をたくみに組みあわせて造られていた。湯は、岩のあいだから、こんこんと湧き出て、四六時中、あふれている。
天井を張らず、屋根を大きく切りひらいて、瑠璃色の玻璃を張って陽光を採っているので、場内はまぶしいくらいあかるい。
笑左衛門は、湯に胸までつかって、岩に凭りかかり、瞑目して、下手な謡曲をうなる。
笑左衛門の脳裡が空になるのは、このひとときだけである。
いま、うなっているのは、「源氏供養」であった。
「……あだし世の、夢にうつらう、紫の……」
そこまでうたった時、不意に、身近で、これを受けた者があった。
「色ある花も一時――」
愕然として、笑左衛門は、まなこをひらいた。
いつの間にか――幽鬼に似た不気味さで、流しの畳岩の上に、黒の着流しの浪人者が一人、うっそりと立っていた。

笑左衛門は、息をのんだ。
屋根の玻璃が破られていて、侵入者は、そこから飛び降りて来たものであった。
岩から湧き落ちる湯の音が高いとはいうものの、屋根から飛び降りて来る気配を、こちらへさとらせなかったとは、よほど熟達の技をそなえている、といわねばならぬ。
笑左衛門は、咄嗟に、その無礼を咎める声が出なかった。
侵入者は、冷たい眼眸を、湯の中の首へ投げて、
「湯であたためられた老人の心臓に、衝撃を与えることはわるい、と知って居ったが、ほかに思案がないまま、斯様の面談に相成った。お許し頂こう」
と、云った。
「お主が、眠狂四郎か！」
「左様——。お手前のような勤勉無類の御仁から視れば、無為徒食の穀潰しだが、あいにくと、おのれの頭上に火の粉がふりかかって来ると、急に、闘志がわきたって来る男だ、とおぼえておいて頂く。但し、今日は、お手前の生命を頂戴しに参上したのではない」
「…………」
凝っと見上げているうちに、笑左衛門は、沈着をとりもどした。
——これは、清熈にきかされていた以上に、稀にみる独行力をそなえて居る！
そう感じた。
狂四郎は、言葉をつづけた。
「おそらく、お手前の下知によるものであろうが、五日前、酒匂川で、わたしを襲撃して来た徒党の中に、一人、わたしと果し合いをさせて頂きたい者がいる」

「一人？　なぜかな？」

「その者は、先年、箱根関所奉行を、酒匂川の河口で、射仆して居る。わたしは、関所奉行の女に、仇を討ってやろう、と約束して来た」

「その娘御に、お主、惚れて居るのか？」

「いや、行きずりの他人でしかない」

「妙な御仁だの、お主――。この調所笑左衛門の首を刎ねに、忍び入って参った、というのなら話がわからぬこともないが……、さして意味もない報復のために、この屋敷にどれほどの手練者が集められて居るか、知りつつ、押し入って参るとは――」

「そういう男だ、と思って頂こう。お手前の鶴の一声で、こちらの希望は叶えられることだ」

「果し合いで、さいわいお主が勝ったとしても、そのあと、無事にこの屋敷から出られるものかどうか――それを考えて、押し入って参ったかな？」

「無駄な問いは止して頂こう。これまでかぞえきれぬ死地をくぐっている」

「お主へ討手を遣した張本人のわしの生命を、なぜ取ろうとせぬ？」

「川柳に、金銀をのばして貧の錺職、というのがあるのをご存じか。お手前が、そうだ。……会ったのは、はじめてだが、噂にきいたお手前に対しては、敬意をはらって居る。わたしは、公儀の走狗でもなければ、金でやとわれた刺客でもない。おのれの心をいつわることをせぬし、生命を狙って来た者に対しても、単純に憎悪を燃やすほど、性分が熱して居らぬ。十三藩大名衆の何やらの企てを、邪魔しようとして居るわたしを、お手前が除こうとするのは、当然のことであり、この対立は、いまわたしが為そうとしていることとは、おのずから別に考えられねばなるまい」

「お主の口上、相判った」

笑左衛門は、微笑して、頷いてみせた。

楓をはじめ、楢とか欅とか椚とか、霜葉樹でとりかこまれた広い庭園であった。

庭園は、三尺の太鼓塀によって仕切られて居り、一方は枯流れに井筒伽藍石、石橋を配した書院庭になり、一方は、茶亭を持つ露地造りであった。

曇った寒空の下に、庭園上には、息詰まる静寂がつづいていた。

井筒伽藍石をへだてて、眠狂四郎と箱根関所奉行を射殺した隼人隠密党一方の組頭とが対峙してから、すでに小半刻が過ぎていた。

見成る人影といえば、書院の広縁上に、調所笑左衛門の猫背姿がひとつ、ぽつんと坐っているばかりであったが、物蔭からは、数十の目が、まばたきもせずに、この決闘を凝視している。

遠く単調な渓流の音だけが、つづいている。

眠狂四郎は、例によって、無想正宗を地摺りにとっていた。

それに対して、対手は、二刀を構えていた。しかも、同じ長さの、無反りの剛剣をえらんでいるのであった。

その構えも、また、尋常ではなかった。

左手に握った剣は、拳を額にあてて切っ先を天に直立させる自源流独特のものであった。そして、右手の剣を、その直立した左剣から一直線を引いたごとく、地に下げている。

この構えは、攻守いずれをも含むものであった。変幻自在の極意をひそめているものと判る。

さらに、眠狂四郎に、これだけの長い時間を置かせているのは、直立の剣も、地摺りに落した

剣も、いかにも静かなものにみせつつ、その静止がおそるべき獰猛な力を蓄えている、と視てとれたからであった。

と——。

不意に、厚い雲が割れて、薄ら陽が、そこに落ちた。

それを待っていたごとく、無想正宗が、地面から挙がりはじめた。

すると、敵の右剣もまた、静から動に移った。

それは、あたかも、無想正宗が生む独創絶妙の殺法を、完璧に写したごとくであった。ゆるやかに、なめらかに、空間を截って描く円月を、この敵は、みじんの狂いもなく、窃みとっているのである。

嘗て、狂四郎は、おのが円月殺法を、宿敵に写し奪られたことはある。

しかし、その宿敵は、一刀しか持たなかった。真贋の差は、一刹那の動きで明白にあらわれた。

ところが、いま、こちらの秘法を窃んだ敵は、さらにもう一刀を、頭上に直立させ、それに自源流の極意を罩めているのである。

敵は、円月殺法を、完全に写しとることによって、これを封じておいて、自源流の凄じい一撃を放たんとするものであった。

笑左衛門も、物蔭から凝視する数十の目も、狂四郎の白刃が、水平の線で、ピタリと停止するや、それを、絶望に近いものと、受けとった。

げんに、笑左衛門は、思わず、胸中で、

——眠狂四郎、敗れるか！

と、呟いたくらいであった。

次の瞬間――。

狂四郎の五体が棒と化したごとく、井筒伽藍石上に倒れるのと、対手の二刀が、刃風を生んで閃光と化すのが、同時だった。

「うむ！」

笑左衛門は、全身の骨が砕けるほど凝結しつつ、唸った。

井筒伽藍石上にのこったのは、太股から両断された一本の脚であった。

その脚をそこにのこした者は恰度、一瞬前まで、狂四郎が固着して佇立していた場所に、二刀を杖にして、突っ立っていた。

狂四郎の方は、敵が構えていた地点に、横たわっていた。

そして――。

狂四郎がやおら起き上るのと、敵が一本足に身を支えきれずに倒れ伏すのが、白日夢のような光景として、笑左衛門の双眸に映った。

狂四郎は、無想正宗を腰に納めると、笑左衛門に一礼しておいて、歩き出した。

隻脚にした敵に、とどめを刺す必要はなかった。隼人隠密党の面々は、片耳を殺がれただけでも、その恥辱に堪え得ず、切腹して果てる武辺の面目を持っていることを、狂四郎は、知っていたからである。

狂四郎が、太鼓塀の中門を抜けようとした時、物蔭に身をひそめていた党士らが、一斉に、動いた。

とたんに――、

「一同、そのままじゃ！　一騎討ちによって、本日のたたかいは終ったぞ！」

凛乎たる笑左衛門の声音が、ひびいた。
やがて、笑左衛門は、地球儀のある部屋へ戻った。
海老原清煕が、そっと入って来て、
「一党、不服の気色にございます」
と、告げた。
「たわけめらが――」
笑左衛門は、吐いた。
「あの男を討ち果すには、八方から一時に攻めかからねば、不可能じゃ。党士らが、小ざかしゅう、一騎討ちを厳法とする片意地を張って居る限り、手負わせることもおぼつかぬ。……あの男の剣は、ただの強さではない。面目とか意地とか、そのようなもののすらすこしも含めて居らぬ、いわば、流水に似た強さじゃ。敵わぬ」
そう云ってから、笑左衛門は、暗い視線を宙に置き、ほんのしばしの沈黙を置いてから、おのれに誓うように、云った。
「しかし、生かしてはおけぬ！」

三島試合

眠狂四郎は、裂帛の懸声で、目がさめた。
時刻は、夜明けて間もない頃であった。

ここ——箱根七湯のひとつ木賀ノ湯は、渓谷の底にあって、流れの音が高い。
その音に挑むかのように、懸声を発している。
かなり遠い距離であったが、懸声とともに、狂四郎の耳は、木太刀を振る音も、ききわけていた。
若い女が、素振りの稽古をしている。
しかし、狂四郎には、むだなまねに思われた。
懸声も刀音も、未熟を示していたからである。
にも拘らず、それは、おそろしい執念深さを思わせる長い時間を費されて、つづけられた。
ねむりをさまたげられた狂四郎は、早く発つことにして、起きた。
手水を使って、部屋にもどって来ても、その稽古は、まだつづけられていた。
狂四郎は、渓谷側の障子を開けてみた。
眼下の、白い泡を噛んで飛沫に濡れている広い畳岩の上に、その者は、いた。
黒髪を長く背中に散らし、刺子の稽古着に黒袴のももだちをとって、木太刀を、すぐ眼前の、虎嘯の形状の二重岩へ向って、構えて、一念をこらし、
「えいっ！」
と、打ち込んでは、さっと退っている。
道場稽古しか知らぬ者の目には、あるいは、鮮やかな素振りに映るかも知れぬ。
狂四郎のような、無数の修羅場を踏んで来た者の目には、しかし、それは、ただ見た目に美しい舞踊でしかなかった。
——あれでは、人を斬れぬ。

狂四郎が、胸のうちで呟きすてた時、女中が、食膳をはこんで来た。
「お客様は、あのお嬢様の懸声で、目をおさましになったのではございませんか？」
「うむ――」
「お嬢様は、これで、もう半年のあいだ、雨の朝も雪の朝も、ああして、欠かさずに、お稽古をなさっているのでございますよ」
「なにかの目的があるのか？」
「五日後に、三島神社の奉納試合をひかえているのでございます」
「あの娘が、奉納試合に出るのか？」
「はい。剣客のお娘御でございます」
「…………」
「小田原で道場をひらいておいでなさいました多志見祐見という剣客のお娘御で、須磨様とおっしゃいます。多志見祐見様は、三年前の奉納試合に、箱根臥竜軒に、敗けられて、その場で、息をひきとっておしまいになったのでございます。お嬢様は、その仇討をなさろうと、今年の奉納試合に、臥竜軒と組み合せておもらいになったのでございます」
「臥竜軒というのは、よほど強いとみえるな」
「わたしらは、まだ、顔も見たこともございませんが、兵法者のかたがたが、臥竜軒と立ち合うために、わざわざ箱根へ登って行かれますが、生きて戻った御仁の方が、尠のうございます。去年、胸を撃たれて、かつがれて、当宿へ戻られた御仁がございましたが、三日目に息をお引きとりでございました。……なんでも、臥竜軒の庵の裏手には、撃ち殺した兵法者の墓が、三十もつくられていると申します。……そりゃ、もう、ひどい変人で、滅多なことで、人には会わず、木

の実を喰べて、仙人のようなくらしをしている、ときいて居ります」
「…………」
「お客様は、失礼でございますが、武芸はお上手でございましょう。昨夜、おいでになった時、このご浪人衆も臥竜軒と立ち合いに、箱根へお登りになるのか、と思いましたもの――」
狂四郎は、それにはこたえず、箸を置いた時、沈黙を破った。
「須磨という、あの娘に、告げるがいい。試合を放棄して、嫁入り口でもさがした方がよかろう、とな」
この冷淡な言葉をきくや、女中は、薄い眉をひきつらせて、狂四郎を睨んだ。そして、さっと立って、出て行ってしまった。
どうやら、この湯宿は、挙げて、あの娘の復讐の成就を祈っている模様である。
狂四郎は、出発すべく、無想正宗を把って、立ち上った。
その時、
「卒爾乍ら――」
障子戸のむこうから、女の声がかかった。
「小田原浪人多志見祐見の女須磨と申します。只今、宿の者にたまわりましたお言葉につき、おうかがいいたしたき儀があり、罷り出ました」
狂四郎が、黙っていると、障子戸が開けられた。
須磨は、娘のすがたになっていた。
正座して、狂四郎へ、きつい眼眸を当てると、
「貴方様は、わたくしが、箱根臥竜軒の敵ではない、と仰せられますか？」

と、問うた。

「女には、女の生きかたがあろうと思うが……」

「人生訓をうかがいに参ったのではありませぬ」

「そなたの素振りを、遠見した限りでは、臥竜軒に、勝てるのぞみはない」

「臥竜軒と立ち合ったことがある、と仰せられますのか？」

「会ったこともない」

「それで、どうして、わたくしが敗れると、判断なさることが、できましょうか？」

「臥竜軒は知らぬが、そなたの父御とは、数年前、是非にと乞われて、江戸で、平山子竜道場で、立ち合ったことがある。そなたの父御は、一刀流浦波の業に於て、幻妙の極意を会得されていた、と思う」

その言葉をきいた須磨は、遽に、表情をあらためた。

「失礼乍ら、貴方様は、もしや……眠狂四郎、と申される御仁ではございませぬか？」

狂四郎は、旅籠では、別の名を用いることにしていたのである。

「わたくしは、あの年、江戸から立ち帰った父より、おのが生涯で、はじめて、おそろしい、と思う兵法者と立ち合って来た、ときかされたことを記憶いたします。その兵法者が、眠狂四郎というふしぎな変名を使っていた、と父は申して居りました」

「そなたは、父御が達人であったことを知って居り乍ら、その父御を破った強敵に、どうして勝てると思うのだ？」

「そのようなご忠告は、百人、いえそれ以上の人々の口から、きかされて居りまする。……口でとどめて頂くよりも、必殺の一撃を、太刀を取ってお教え頂きとう存じます」

「おのれよりまさった敵を、一太刀で仆す手などある筈がない。よしんば、あったとしても、それを一日や二日の稽古で会得することなど、不可能であろう」

「いえ！」

須磨は、かぶりを振った。

「一心不乱になれば、会得できまする。お教え下さいませ」

「ご免蒙ろう。そのような一太刀などあり得ない、と判りきっている以上、わたしは、無駄な振舞いをするのはきらいな男だ」

その日の午後、狂四郎は、箱根の関所を通った。

旅籠の竝んだ通りを抜けたところで、腰掛茶屋に憩うていた狂四郎は、猪をかるがるとかついで、旅籠の一軒へ入る男を視た。

蓬髪で、継ぎはぎの布子をまとい、跣であった。腰に三尺を越えた長剣を、一本だけ佩びていた。

異常に頬骨と鼻梁が突出しているのが、不気味な印象であった。背丈はむしろ小柄で、おそろしくがに股であった。

狂四郎の脳裡に、直感がひらめいた。

やがて、猪を売った男が、出て来て歩き出すと、狂四郎も、腰をあげていた。

男は、すぐに、杣道へ入った。

草地がひろがり、その原は、椀を伏せたような、樹木のない丸い山につづいていた。

まだ冬のままの枯草の中を、男と狂四郎は、一間あまりの距離を置いて、歩いた。狂四郎が、わざと、距離を縮めたのである。

と——。

男が、足を停めた。狂四郎も、立ちどまった。

「お主——」

男が、振り返りもせずに、云った。

「ひとつしかない生命(いのち)を、むざむざ、すてるには及ぶまい。わしの方も、もう無縁仏の墓を増(ふや)すのは、面倒になった」

その言葉に応えたのは、狂四郎の凄じい気合をこめた一声であった。

刹那——。

男は、風の早さで、横へ一間あまり跳んでいた。

降り立った時には、狂四郎に正対していた。

「お主、できるの」

そう云って、にやっとした。

狂四郎は、黙っている。

「お主ほどの業者(わざもの)ならば、立ち合い甲斐(がい)がある。……やろうか」

箱根臥竜軒は、云った。

狂四郎は、挑戦した者の作法に順(したが)って、さきに、無想正宗を抜くや、地摺りに構えた。

「ふむ！」

臥竜軒は、満足そうに軽く頷くや、長剣を鞘走(さやばし)らせた。

その構えは、かなり変ったものだった。

右足を大きくふみ出し、左手（ゆんで）を左腿（もも）にふれるほど下げて、右手（めて）を柄に添え、刀身を、切っ先が右方を指すように、横たえたのである。

すなわち——。

狂四郎の方から視れば、白刃の線が、その持主の身を、上下に截（き）っているあんばいであった。

右半身を空け乍ら、刀身によって、完全に防備しているのだ。

たしかに、見た目には、守勢であった。しかし、狂四郎ほどの使い手になると、その構えには、逆胴（さかどう）斬りのおそるべき迅業がひそめられている、と判る。この仙人化した兵法者には、けものにまさる跳躍力が、備わっているのだ。

これまで立ち合った者は、青眼あるいは上段の構えをとり、臥竜軒の守勢に対して、猛然と撃ち込んだに相違ない。臥竜軒が、当然、その撃ち込みの太刀を払うのを、予期して——。

ところが、撃ち込んだ早さよりも、逆胴斬りの迅さが、まさったのだ。

はからずも、狂四郎は、地摺りによって、臥竜軒の逆胴斬りを封じている。

ただ、この場合、臥竜軒の白刃は、こちらの頸（くび）を狙って、走って来ることが、予測されるのだ。

これを、地摺りの剣で、はね払うことが、はたして、可能かどうか。

はねあげる剣は、いかに達人と雖（いえど）も、速力が弱くなる。

まず、臥竜軒の逆撃ちの迅業には及ばぬ、と思いなす方が、自然の理（ことわり）であろう。

しかし——。

狂四郎は、敢えて、地摺りの剣を、そのまま、固着させて、じっと、対手へ、氷の冷たさの眼

眸を据えている。
円月殺法を使わぬのは、他に思案があってのことだった。
時刻が、移った。
その間に動いたのは、枯草に映した双方の影だけであった。
と——一瞬。
臥竜軒の長剣の切っ先が、浮子のように、ピクリと動いた。
とみるや、横たえられていた刀身が徐々に挙げられはじめた。
臥竜軒は、首刎ねの逆撃ちを使うことが、許されぬ、とさとったのだ。すなわち、逆撃ちを使うや、狂四郎が、身を沈めて、突きの業を放って来る、と合点したのだ。
やむなく、臥竜軒は、構えを青眼に転じようとした。
とたんに——。
狂四郎が、すっと、一歩退って、
「これまで——」
と、云った。
「なに？　なんとした？」
臥竜軒の眉間に、険しい色が刷かれた。
狂四郎は、無想正宗を、腰に納めると、
「お主と闘う者は、他に、居る」
と、云った。
「他に——？」

「五日後に、三島神社で――」

「ああ、奉納試合のことかな。あれは、くだらぬ。かよわい娘を、不具にせぬように、撃ち据えるには、どういう工夫をすればよいか。それだけの話だの」

狂四郎は、しかし、その言葉に対しては、なんともこたえず、一揖して、歩き出そうとして、ふっと気づいたように、

「失礼なことをおたずねするが、お主は、勿論、永年、禁欲されて居るのであろう？」

と、訊ねた。

唐突な質問に、臥竜軒は、ちょっと、とまどった面持になった。

「欲情の処理は、手淫で、事足りるの」

正直にこたえて、呵々と笑った。

当日――。

三島神社境内には、紅白の幔幕がはりめぐらされ、奉納試合見物のために、鳥居をくぐって、鯉が名物の池泉に架けられた太鼓橋を渡った兵法者の数は、百を超えていた。

試合は、二十七組であった。

そして、昼食直後の十八組めが、箱根臥竜軒と須磨の試合であった。

これが、遺恨試合であることは、すでに、蝟集した兵法者たちの間にも、知れわたっていて、双方の名が読みあげられると、波のようなざわめきが起った。

晴れてあたたかい日であった。

桜は満開であったし、椿(つばき)の花も、赤く美しかった。沈丁花の香もこぼれている。
西側の幔幕がかかげられて、臥竜軒の姿が、立ち出(いで)た。
常の姿に、白袴をつけただけで、鉢巻も襷(たすき)もしてはいなかった。
携(さ)げている黒光りする木太刀は、三尺三四寸はあろう。小柄なだけに、おそろしく長く感じられる。
ちょっとおくれて、東側の幔幕が、挙げられた。
とたんに、境内が、どよめいた。それは、おどろきあきれはてたどよめきであった。
出現した多志見祐見女(なすめ)須磨は、たかだかと高島田をゆいあげ、加賀友禅の花鳥もあでやかに、白砂に長く裾を引いていたのである。
これは、屋敷内で、祝日に装う武家娘の晴れ姿であった。
人々は、須磨が、気でも狂ったのではあるまいか、と疑った。
狂気ではない証拠は、その双眸から発している鋭い光で、明らかであった。
白い細身の木太刀を、左手に横たえていた。
見まもる目は、すべて、須磨が何故に、このような盛装をして、試合に臨むのか、納得しがたい疑惑の色をうかべた。
試合対手の臥竜軒が、眉宇(びう)をひそめたのは、云うまでもないことだった。
しかし、試合をするに当って、これこれの服装は罷りならぬ、という禁制はなかった。いかに奇怪ないでたちで現れようと、それは、当人の勝手であった。
試合対手が、その服装をきらって、試合を拒否する権利はない。
臥竜軒は、不快げに眉宇をひそめただけで、須磨が進んで来るのを、待った。

間隔がえらばれ、黒白二本の木太刀がさしのべられるや、場内は、水を打ったように、ひそ、としずまりかえった。

人々は、華やかな容姿が、一瞬後には、花が散るように、地に臥すのを想像して、固唾をのんだ。

人々は、ようやく、須磨が、敵わぬ対手に闘いを挑む以上、せめて、娘らしく、美しく装って、生命を散らそう、とけなげに思いさだめたのだ、と解釈したのであった。

臥竜軒は、五日前、狂四郎と立ち合った際の変則の構えはとらず、ただふつうの青眼をえらんでいた。

須磨も、青眼であった。

それなり……静止の時間が、流れた。

臥竜軒にとって、須磨の木太刀を、撃ち落すのは、なんの造作もないことだった。

ただ――。

臥竜軒は、須磨の容姿の美しさを、花でも観賞するように、眺めていたにすぎない。

仙人同様のくらしを、二十余年もつづけて来ている臥竜軒が、女の美しさに見惚れて、いたずらに時間を費した、としても、これは、むりのないことだった。

須磨が、撃ち込んで来れば、やむなく、その木太刀を払い落すだけのことだった。

やがて――。

須磨が、木太刀を、ゆっくりと、上段に移しはじめた。

額の前まで、木太刀を握ったこぶしを挙げて、ピタリと停めた、――その瞬間であった。

胸高に締めた帯が、生きものと化したように、ぱっと胴から離れて、後方へ躍った。

と同時に、衣裳の前が、さっと左右に散りひろがった。

からくりは、種を明かせば、かんたんであった。

須磨は、帯と裳裾から、馬毛を縒った天蚕糸を、地面にひきずって、幔幕から出て来たのであった。

そして、須磨が、木太刀を上段にふりかぶるのを合図に、天蚕糸は、幔幕の蔭から、引かれたのである。

衣裳が左右にはだけるや、胸の隆起も、下腹の秘処も、あらわになった。

その白い裸形を一瞥して、臥竜軒が、大きく瞠目した。

その隙を、須磨は、のがさなかった。

「えいっ！」

けんらんたる衣裳を宙に撒き乍ら、裸身は、地を蹴って、臥竜軒めがけて、襲った。

一念こめて撃ち込む一颯の太刀は、鋭かった。

これを払う臥竜軒の黒い木太刀の動きは、いかにも、のろいものであった。

したたかに、肩を撃たれて、臥竜軒は、よろめいた。

「勝負あり！」

審判人の声が、高く、懸けられた。

春の風に、土埃が舞う街道を、狂四郎は、相変らずのふところ手で、ひろって往く――。

八幡をすぎて、黄瀬川に架けられた橋が、むこうに見えていた。

馬蹄の音が、後ろで起ったので、狂四郎は、身を避けて、並木に寄った。

せわしく、馬をとばして来た者は、狂四郎のそばへ来て、たづなをひいた。

須磨であった。

総髪にして、手一束に杉原紙で結んで背中に散らし、若衆とみえる姿になっていた。

馬から降りると、狂四郎の前に立ち、

「お礼を申し上げなければなりませぬ」

と、云った。

「礼には及ばぬことだった。苦肉の策をえらんだが、巷には、いやしい好奇心をそそる話題をのこした。そなたの婿取りの邪魔になろう」

「いいえ。わたくしは、独り身を通しますゆえ、そのご懸念には及びませぬ。……それよりも、わたくしは、貴方様のお助太刀に、どのようなお礼をいたせば、よろしいのでございましょうか？」

「礼が欲しくて、思案をめぐらしたのではない」

「それでは、わたくしの気持が、すみませぬ」

狂四郎は、須磨にかまわず、歩き出した。

「眠様！」

須磨が、呼んで、跟いて来ようとした。

狂四郎は、小うるさげに、じろりと一瞥をくれると、

「おれが、若い女子を助ける時、いつも代償として要求するのは、その操だが……」

「さしあげまする！」

間髪を入れず、須磨は、こたえた。

すると、狂四郎は、その返辞を予想していたように、冷たく笑って、云った。

「あいにくだが、そなたには、呉(く)れ、とは云いかねる」

「なぜでございます？」

「そなたは、臥竜軒ほどの者が、敗れた理由が、まだわかって居らぬらしい。……おれに操を呉れるつもりなら、太刀を振りまわす稽古よりも、色香を身につけることを習うがいい」

その冷酷な言葉を、そこに、残した。

沼津狐

江戸から三十里、京へ九十五里。

黄瀬川を渡れば、沼津である。

松並木から人家の続く往還に入っても、ここは、他の宿駅のような雑多な音をあわただしくひびかせている賑(にぎわ)いはない。

水野出羽守五万石の城下であり、街道をはさんで、目路の果てまで長く家並がつらなっているために、旅人は、むしろひっそりとした路上をひろい乍ら、おのが泊りの旅籠(はたご)を、物色することになる。

城主の布令によるものか、沼津の旅籠は、かまびすしい呼び声をたてないのである。

女郎の宿は、横丁にかくれている。

静かな往還で、足拍子をとり乍(なが)ら、子守が唄う俚謡(りよう)も、なまめいている。

明日はお立ちか、お名残惜しや
送りましょうぞ、原までも
原をうち越し沼津の茶屋で
さすぞ盃、いとま乞い
暇乞いして、笠手に持てば
なぜか泪が、先に立つ

無心に唄いつづけていた子守が、何気なく視線をまわして、ふっと怯えの色を顔に刷いて、立ちすくんだ。

黒の着流しに、ふところ手で、城下に入って来た浪人者の、蒼白い風貌といい、痩せてとがった肩といい、この静かな往還に、一瞬、冷たい空気を流すものだった。

眠狂四郎は、怯えた子守へ一瞥を与えて、過ぎた。

無心な子供の目に、幽鬼に逢うたような恐怖を与えることには、馴れていた。

ものの二町も歩いたろうか。

小さな稲荷神社の前を過ぎようとして、

「あ――もし」

と、赤い鳥居をくぐって出て来た女に、呼びとめられた。

しぼりの手拭いを吹き流しにかぶり、黒繻子の襟もとに、白い素肌が映えて、右褄をとった姿態が、仇っぽく、地面からすっきりと抜け出ていた。

「旅の御仁でござんすか？」

道中を往く装ではないが、春の風が、黒羽二重に埃をつもらせていた。

「うむ――」

「この沼津で、宿をおとりでござんすね？」

「そういうことになろう」

「なら……、お願いの筋がござんすが、きいて頂けましょうか？」

「そのからだを売ろう、というのか？」

「のみ込みが早すぎます、旦那――」

手拭いの蔭で、にっこりしてみせた。さして佳い貌ではないが、媚をつくる神経が眉目にゆきとどいていて、男心を逸らさない自信を備えているようである。

「買って頂きたいのは、あたしの妹の方でござんす」

「おれは、いま、ついそこで、子守に怯えられた。そのような薄気味わるい素浪人を、わざわざ、客にえらぶのは、どうしたことだ？」

「旦那――、あたしゃ、ごらんの通り、堅気の内儀さんじゃありません。失礼でござんすが、旦那の目の光が、悪党のものか、そうでないかくらい、見わけがつかないほど間抜じゃありませんのさ」

「狐にたのんだら、この素浪人に出会させてくれた、とでも思っているのなら、話がわかるが……」

「当りました。白状いたします。たしかに、旦那は、ただのご浪人衆とは見えません。ひと目見たとたん、なにやら、どきっとさせる怕さをお持ちでござんす。だから、お稲荷さんが、呼び寄せて下すった、と思いたくなるのもむりはござんすまい」

女に誘われるままに、狭い横丁へ曲った狂四郎は、

「妹を食いものにしているのか？」
と、訊ねた。
「人ぎきのわるいことを、仰言らないで下さいまし。これは、あきないじゃございません。……旦那は、業の強い御仁とお見受けしましたので、お力添えをお願いしたいのでございます」
「おれを、何かの厄払い役にしようというのか？」
「おいやですか？」
「条件がひとつある」
「なんでござんしょう？」
「飲ませる地酒が、美味くなければならぬ、ということだ」
これをきくと、女は、声をたてて笑った。

案内された家は、想像していたよりも、ずっと構えが立派であった。
大きな商家の隠居所といったつくりで、木戸を入ると、沈丁花の香が、つよく、ただようた。
「庭から、おまわり下さいまし」
女は、云った。
柴折戸を開けて、置石をつたって行く狂四郎に、沈丁花の香が、まつわりついて、はなれなかった。
江戸の小旗本の屋敷では、奇妙に沈丁花を植えている家が多い。
したがって、

『人妻の琴の指南や沈丁花』

という句も、生れて来ている。

狂四郎は、しかし、この匂いは、きらいであった。

縁側に上って、障子を開いた狂四郎は、その座敷に、意外なものを見出した。

派手な衣裳の娘が、仰臥していた。

ただ仰臥しているのではなく、九尺柄の長槍へ、双手をまっすぐひきのばさせられて、細引でくくりつけられているのであった。

のみならず、猿ぐつわまで、かませられていた。

もがいたために、裳裾が乱れ、緋縮緬の蔭から、白い脛がのぞいていた。

娘は、狂四郎が入ると、薄目をひらいて、瞥と仰いだが、すぐに、目蓋をふさいだ。

狂四郎が、そこに立ったまま、見下していると、女が入って来た。

「どういうのだ、これは？」

「狐憑きになって居ります。あばれまわるので、しかたなく、こうさせて居ります」

「おれに、狐をおとせ、とたのむわけか」

「はい。……妹は、正真正銘の生娘でござんす。生娘から狐をおとすには、業の勝った殿御に抱いて頂くよりほかに、すべはござんせぬ」

「奇妙な据膳を食わされることになったな」

狂四郎は、苦笑した。

「まさか、いやだとは仰言いますまいね、旦那」

「生娘の据膳を食うのに、きらいだと云う男は居るまい」

「旦那！　おことわりしておきますけど、狐をおとして頂くために、泪をのんで、荒療治をして頂くのでござんす。弄んで頂いては、困ります」

女は、きっぱりとした口調で、念を押した。

狂四郎は、女を視た。

「おれの条件は、どうなる？」

「お酒は、あとで、おふるまいいたしましょう」

「素面で、犯せ、というのか」

「我慢して下さいまし」

女は、両手を畳に置くと、

「では、お願い申上げます」

と、頭を下げておいて、出て行った。

狂四郎は、しばらく、そこに坐って、腕組みしたなり、猿ぐつわをはめられた娘の寝顔へ、冷たい眼眸を当てていた。

狂四郎は、勿論、狐憑き、などというものを信じてはいなかった。

見知らぬ旅の浪人者を呼びとめて、わが家へともなって、生娘の妹を犯させて、憑いた狐を追い払わせる。

これが、まことならば、正気の沙汰ではない。

どうやら、これは、罠くさい。

この娘は、囮に相違ない。危険な据膳なのである。これは、これまでの経験が、狂四郎に教えている。

そうと看破すれば、据膳を食うのをひかえるのが、当然である。

だが——。

狂四郎という男は、毒と知りつつ、くらってみる無謀を敢えてする。

やがて——。

狂四郎は、胸から腕を解くと、仰臥の娘のそばへ寄った。

「とり憑いた狐めは、どこに、ひそんで居る？」

そう声をかけておいて、いきなり、裳裾を掴んで、ぱっとひき捲った。

太腿までが、あらわになり、反射的に、その腰がひねられ、吸いつけた膝を廻転させて、秘処を見せまいとした。

狂四郎は、残忍に、そうはさせなかった。

片膝で、ぐいと臑を押えつけると、

「ここか、ひそんで居るのは！」

と、云いざま、左手を、ひたと合せた股のつけ根へ——か黒い茂みの蔭へ、差し入れた。

娘は、ひくく呻いて、必死に身もだえた。

狂四郎は、そのまま、幾秒間か、そうしたなりで、動かなかった。

獣心を燃やしているのではなかった。全神経を、四方へ配って、見えぬ敵の気配を察知しようとしたのである。

鍛えぬかれたこの男の神経は、気配ともいえぬほどのどんな微かな気配でも、鋭く察知するこ

とができたのである。

しかし、神経につたわって来るものは、全くなかった。

敵は、どこにも、伏せては、いない。

こちらの残忍な仕打ちに対する若い女の肌の、烈しく抗議する顫(ふる)えだけが、指からつたわって来る。

――やはり、あの女のたのみ通りに、無智な狐おとしだけだったのか。

狂四郎は、ふっと、そうも思いかえしてみた。

まことに、この娘が、狂気しているのであれば、猿ぐつわをはずして、どんな声を発するか、きいてみれば、すぐに判ることだった。

狂四郎は、秘処から抜きとった左手を、口をしばりつけた白い布にかけた。

頤(おとがい)の下へ、引き下げようとしたが、むすびが、かたかった。やむなく、両手で、解くことにした。

娘は、声をたてる自由を、とりもどした。

その刹那(せつな)であった。

朱唇(しゅしん)から、煌(きら)っと光るものが噴いた。

「あっ！」

呻くと同時に、狂四郎は、はね退(の)いた。

両の掌で双眼を掩(おお)う代りに、畳へ置いた無想正宗を、さぐって、摑み把(と)ったのは、流石(さすが)であった。

かたく閉じられた双の目蓋には、数本ずつ、白く光る針が、突き刺さっていた。

眼球が、激しく痛んでいた。

狂四郎は、右手で、ゆっくりと無想正宗を、腰に戻しつつ、左手で、その針を、一本ずつ、抜きとった。

娘の方は、はね起きて、両手をしばりつけられた長槍を、頭上を越えさせるや、しっかと、握りしめて、身構えた。しばりつけられた、とみせかけただけで、実は、自在に使えるように工夫してあったのである。

穂先は、ピタリと、狂四郎の胸に狙いつけられた。

囮ではなかった。娘自身が、強敵であったのだ。

——おれとしたことが！

狂四郎は、自身をあざけった。

——とんだ不覚であった！

針はのこらず抜きすてたが、疼痛（とうつう）で目蓋をひらくことは不可能であった。

闇の中で、闘わねばならぬことになった。

狂四郎は、片膝を立てたままで、待った。

娘は、じりっじりっと、一寸きざみに、間隔を縮めて来る。

その肉薄を、狂四郎は、暗黒に置いた神経で、測っている。

突如——。

電光の速力で、穂先が、くり出された。

同時に、無想正宗が、鞘走（さやばし）って、閃光（せんこう）を描いた。

穂先は、刎（は）ねられて、天井へ突き立った。

次の瞬間、狂四郎は、ツッツ……と滑って、庭へ跳んだ。
「おのれっ——逃がすか！」
娘は、はじめて、鋭い声音を発して、次の間へ奔った。
玄関からとび出した娘の右手には、太刀が摑みしめられていた。
その時、狂四郎は、すでに、柴折戸を抜けていた。
盲目の狂四郎に味方してくれたのは、沈丁花であった。
その香が、位置を教えてくれたのである。
狂四郎は、沈丁花を背負うて立つと、瞑目の顔を俯向けて、無想正宗を地摺りにとった。
娘は、一撃必殺の直立剣をえらんだ。
対峙が定まるや、
「そなた、誰人の女だ？」
と、狂四郎が、問うた。
「隼人隠密党・梅津一郎太の妹千佐——」
娘は、名のった。
「梅津一郎太！」
狂四郎の眉宇が、ひそめられた。
「わたしは、梅津一郎太を、斬っては居らぬ」
「しらばくれまいぞ！」
「こういうことに、嘘は、つかぬ。……あの夜、高輪の大木戸を、普化僧に身を変えた十三人が出て来たのを、先手を打って、こちらが襲い、一人をのこして、十二人の耳朶を殺いだ。のこし

た一人が、梅津一郎太であった。常夜灯のあかりで、その貌を視て、左手くびを傷つけるにとどめた。……片耳を喪った十二人は、神奈川の浜辺で、切腹し、梅津一郎太が、その介錯をし、そこへ葬って、墓標を立てる役目をつとめた。……そなたの兄は、十二人の遺髪を持って、薩摩へ帰って行った筈だぞ」

そう説明した狂四郎は、娘の呼吸があきらかに、乱れるのを、さとった。

「兄は、鹿児島へは、戻っては居らぬ！」

「それは、わたしのかかわり知らぬことだ。……梅津一郎太は、竜堂寺八郎という男と一騎討ちして、これを斬って、帰途に就いた。わたしは、それは、見送って居る」

「そ、それは、まことか？」

千佐は、息せわしく、驚愕の顫えを声音に含ませた。

「そなたは、このような策を弄したからには、眠狂四郎が、どのような男か、くわしくしらべた筈だ。人を斬るが、人をだますことはせぬ男だ、と思ってもらおう」

「ああ……」

千佐は、悲痛な叫びをあげた。

「わたくしは、……あ、あやまちを、おかしたのか！」

狂四郎は、その言葉をきくと、冷やかに、

「こちらは、生命が惜しくて、弁解したのではない。そなたの方には、からだをけがされた憤りがあろう。憤りで、斬って来てもらっても、一向にさしつかえはないことだ。これまで、盲になって闘ったことは、一度ならず、ある者だ。遠慮をしてもらうまい」

と、云った。

千佐は、喘いだ。
狂四郎は、待っている。
ついに、千佐が、云った。
「その目の、手当をして、進ぜる」
「あいにくだが、仲なおりするには、お互いに、こだわりを消す時間が必要であろう。……手当をしてもらう代りに、この沈丁花の枝を頂いて行こう」
狂四郎は、太い枝をさぐって、両断すると、小枝をはらって、杖にした。
そして、一揖すると、おぼつかない足どりで歩き出した。
「あ、あの！」
千佐が、寄って来た。
「にわか盲で、一人歩きは、できませぬ。この家で、療養なさるがよい」
狂四郎は、しかし、返事をしなかった。

幾軒かの旅籠にことわられて、ようやく、一軒にたのみ込み、部屋へあがって、牀に倒れ込むと、急に、熱が出た。
――もしかすれば、これから先のおれの日々は、闇の手さぐりかも知れぬ。
その独語をさいごにして、意識は高熱の中に呑み込まれてしまった。
どれだけの時間を、中有の中に在ったろう。
狂四郎は、夢ともうつつともつかず、ふっと、枕もとに、亡き妻の美保代が、坐っているのを、

感じた。
美しく、薄倖の女であった。
殊に、この世を去る日が近づいた頃には、その美しさに人間ばなれした幽艶さをくわえた面差になっていた。
――おれを、迎えに来てくれたのか。
狂四郎は、そう思った。
そして、こういう日が、必ず来る予感があったような気がした。
美保代は、良人に看とられつつ逝くのを、ただひとつの願いにして、願い通りに、その腕の中で、息をひきとった女であった。
狂四郎の心の奥底には、あの日の思い出が、いつも、消えることなく、のこっている。
あの日――。
多数の敵と闘って、重傷を負うて戻りついた時、美保代は、臨終の牀に就いていた。
狂四郎が、枕元に坐ると、美保代は、その気配を感じて、まぶたをひらいた。
それなり……良人と妻は、互いの眸子を瞶めあったまま、いつまでも、そうして、じっと動かなかった。
異常な状態によってむすばれた夫婦であった。安息の家庭をいとなむ時は、ついになかった。
絶えざる暗い兆しによって、未来をうち消されつつ、四年の月日を経て、ついに、永遠の別離の一瞬を迎えたのであった。
美保代がひたすらに身うちに燃えつづけさせた純粋な思慕の炎も、それに応える、美保代にだけわかる燠のような狂四郎の愛情の火も、宿命という無慚な審判者の、冷酷な予言に吹き消され

て、ついに、全き情熱の昇華を生むことなく畢ったのである。
ただ、別離の一瞬を迎えて、二人にわかったのは、言葉も身振り仕草も必要とせぬまでに、瞶め合うことだけが、真実である、という心の一致であった。
そして――。
美保代は、美しく、静かな死を遂げた。
その日以来、狂四郎は、自分が臨終の時を迎えた時には、必ず、枕辺に、美保代が、現れて、優しく見戍ってくれるであろう、と信じていたのである。
いま――。
その時が来た。
そう感じて、狂四郎は、
「来てくれたな」
と、呟いた。
その呟きに応える声が、狂四郎を、現実にひきもどした。
「あ――お気がつかれたか！」
それは、梅津一郎太の妹千佐の声であった。
狂四郎は、双眼が湿布を当てられているのを知った。
「まだ、痛みが引きませせぬか？」
そう訊ねられて、狂四郎は、冷たく、
「わたしの目をひらかせるのは、また、多くの薩摩の士をあの世へ行かせることになる」
と、云った。

「人それぞれ、さだめられた寿命でありますれば……」

千佐は、こたえた。

「去って頂こう。……わたしは、こうして、しばらく、目蓋をふさいだまま、孤独でいたい」

狂四郎は、千佐に、こうして、立つように促した。

千佐は、何かを云いたげに、しばらく、ためらっている様子であったが、

「おん身、お大切に――」

と、云いのこして、そっと、しのびやかに、出て行った。

狂四郎は、動かず、闇の中に、亡き妻の俤をもとめた。

しかし、現実の世界へひきもどされたこの男の許へ、再び、美保代は、現れ出ようとはしなかった。

原の雲水

駿河路は、富士山が、ついてまわる。

三島へ下る箱根の坂路から眺める富嶽を絶景と称する人もあり、沼津城と対応する山容を賞する人もあり、そして、千本松原の浜辺から、松の梢の上にそびえるすがたを第一とする人もある。

広重は、愛鷹山を右手にかしずかせた浮島原の上の富士、松並木の彼方に浮きあがった吉原の富士、そして、東海道随一の峻坂である薩埵峠を左方にきりたたせた由井の富士を、描いている。

それぞれに、そのすがたは異っているのだが、広重は、そこまでは、描きわけてはいない。

地下の人々は、おらが里から眺める富士を、海道第一と自慢している。

膝栗毛で往く旅人たちは、自分たちについてまわってくれる霊峰が、あるいは優美に、あるいは精鋭に、時には柔和に、時には峭絶に——、時と場所によって、すがたを変え移してくれるのを、賞でることになるのである。

「あ！　富士山が、身ぶるいしているよ、お爺ちゃん」

街道を歩いて行く巡礼の子供が、声をたてた。

「お山の頂きは、風がつよいので、雪が舞うているのじゃ」

「お爺ちゃん、箱根で眺めたよりも、ここで見る方が、きれいだね」

「おもむきが、ただ、ちがっているだけなのじゃな」

「そうじゃないよ。ここの方が、十倍もいいよ。お爺ちゃんは、目がかすんで、よう見えないんじゃ」

子供の疳高い声音に、老いた巡礼は、あわてて、「しっ！」と制して、その手をひくと、いそぎ足になった。

つい、そこに——並木の松ぎわに、杖をついて、目蓋をかたく閉じた浪人者が、立っていたからである。

せっかくのみごとな景色を、賞でることのできぬ人を、気の毒に思う心もあったが、同時に、その浪人者の、幽鬼にも似た悽愴な姿影に、怯えもしたのである。

老爺に手をひっぱられた子供も、何気なく、そちらへ視線を向けて、びくっとなった。

眠狂四郎の方は、べつに、老爺と子供の会話を耳に入れた様子もなく、かれらが遠ざかった頃、杖さきで地面をさぐり乍ら、歩き出した。

沼津の旅籠を出た時から、いちども、目蓋をひらいていなかった。

この男としては、珍しく、ひとつの恐怖を心に抱いていた。

目蓋をひらいて、真昼の光を瞳孔にそそぎ入れさせたならば、忽ち、視力が全く喪われるのではあるまいか。

なんとはなしに、その恐怖が、旅籠を出る時に、起ったのである。

どこまで、盲目で辿れるか、ためしてみることにしたのであった。眼球には、まだ、疼痛があったのは、事実である。

旅人たちは、足早やに、かたわらを通り過ぎて行く。

目が見える、ということが、いかに大切なことか――いまさらに、感じられる。

やがて――。

左方に、松籟が鳴る地点に着いた。

千本松原に来た、と知った。

その時、狂四郎は、右手から流れ出る酒の香をかいだ。

――白馬か。

狂四郎は、そちらへ、足を向けた。

立場の居酒屋を「白馬」と謂う。跳ね馬を白抜きに染めた紺暖簾をかかげているからである。跳ね馬――すなわち、荒馬という意味をもじって、「あらうまい」と解した次第である。

紺暖簾をくぐった狂四郎は、杖で牀几をさぐって、腰を下した。

「旦那、熱燗になさいますか、それとも冷酒でおやりなさる？」

訊ねられて、狂四郎は、どんぶりに冷酒で、と所望した。

すると、

「目が不自由なので、銚子と猪口で飲むのが面倒ならば、酌をして進ぜるが――」

と、声をかけて来た者があった。

「他人に、造作は、かけたくない」

狂四郎は、こたえた。

「にわかめくらで、他人の世話になるまい、とするのは、むつかしかろうな」

対手は、遠慮なく、云った。声音で判断すれば、かなりの年配のようであった。

「にわかめくらと、どうしてわかる？」

入って来て、牀几に腰を下すまで、動作は、緩慢であったが、人目に、惨めなものには映さなかったつもりである。

「はは……、それぐらいのことは、わかるわさ。お手前、目蓋をふさいで居っても、明暗は判別できる模様じゃな。明るい方へ、未練たらしゅう、顔を向けたがって居るて。闇の世界に安住して居る者にとっては、なまじ明暗が判別できることなど、わずらわしいものじゃ。気にもかけぬ」

酒が、狂四郎の前に置かれた。

しかし、狂四郎は、お節介な人物に見戍られ乍ら、飲むのが、不快だったので、手をのばさず、

「お主、さむらいか？」

と、訊ねた。

「なんの……、坊主じゃ。破戒坊主――」

「雲水ならば、訊きたいことがある」
「なんじゃな？」
「たとえば……、山道を越えたり、野宿したりした時、あやまって、毒のある木の棘で、目を刺されると、どのような手当をする？　それに効く薬草を知っていたら、教えてもらえまいか？」
この乞いに対して、雲水は、ちょっと、沈黙をまもった。
「心得はないか？」
狂四郎に促されて、雲水は、ようやく、
「心得はある」
と、こたえた。
「但し、棘にも、いろいろあるの。……お手前の目を刺したのは、どんな棘であったかな？」
「吹針であった」
「吹針――やはり、そうであったか」
「やはり？」
「お手前が入って来た時、正直なところ、わしは、ぶるっと身顫いした。死神にとり憑かれた人間に出会ったのは、幾年ぶりのことかのう。……お手前のまなこが閉じられて居るのも、病いのためとは、思えなんだ」
「………」
「お手前は、よほど、多勢の人を斬ったのであろうな？」
「数は、おぼえて居らぬ。斬らねば、斬られるゆえ、斬っただけのことだ。わたしをのろう怨霊が多すぎて、ひしめきあいつつ、互いに牽制しあっているために、かえって、こっちは、いまだ、

生きのびているのかも知れぬ」

「はは……、おもしろいの、その言葉は――。お手前は、おそらく、わしの生涯で出会うた人間のうちで、最も、好奇心をそそる人物じゃな」

雲水は、云った。

「わたしは、見かけた通りの、ただの無頼の素浪人に、すぎぬ」

「いや、そうではない。もし鹿に似た馬が居ったならば、価千金は下らぬであろう。しかし、似られている鹿の方には、千金のねうちがあるやつなど天下あまねくさがしても居りはせぬ。お手前は、鹿に似た馬じゃの」

「…………」

「わしが看たところ、お手前は、まことに、自由な心で生きて居るらしい。海は水を辞せず、故に能くその大を成し、山は土を辞せず、故に能くその高を成す。お手前という人物は、死を辞せず、故に能くその敵に勝って来た。……人間は、千年も万年も生きようとしても、それは許されぬ。いかなる人間も、必ず、時を経て、死ぬ。どうせ、死ぬときまっている以上、じたばたしてもはじまらぬ。死神が、今日迎えに来ようと、明日来ようと、一向に平然としている。これは、見上げた性根と申すもの。……目の手当をして、進ぜよう」

雲水が、そう云った時、狂四郎は、冷たい自嘲の薄ら笑みを、口辺に刷いた。

「おそかったようだ」

「おそかった、とは？」

狂四郎が、説明するまでもなかった。

「お！」

雲水が、おどろきの声を、もらした。

この居酒屋の前に、深編笠の武士が八人、立ったのである。

狂四郎の鋭い神経は、渠らが敵であると察知していた。

狂四郎は、やおら、牀几から腰を上げた。

「お主は、わたしに死神がとり憑いている、と云い当てたが、どうやら、死場所がここらあたり、と定まったようだ。お主がいま云ったことを、引導がわりに、耳の底へのこしておいて、斬られることにしようか」

「むざと死ぬことはあるまいぞ！」

「にわかめくらが、どうして、生きのびられる？」

雲水は、こたえるかわりに、狂四郎よりさきに、おもてへ出ると、

「貴公らは、あの浪人の討手がたかな？」

と、問うた。

「左様――」

一人が、こたえた。

「にわかめくらになった者を、討ち果したとて、手柄にはなるまいが……」

「手柄にするために、討ち取りに参ったのではない」

「さりとて、目蓋をふさいだ者を、八人の白刃でとりかこむのは、剣を学んだ者として、忸怩たるものがあるのではあるまいかな」

「貴僧が助太刀すると申すなら、邪魔とは思わぬぞ」

「わしは、生涯、数珠以外に握ったことはない。生命も惜しい。……貴公らが、あの浪人の目が

「条件とは？」

治癒するまで待てぬ、と云われるなら、決闘に条件をひとつ、つける」

「場所じゃな。場所を、こちらで、えらばせてもらう」

「遁走させる策をめぐらすのでなければ、場所をそちらでえらぶのは勝手だ」

「疑いぶかい御仁たちだ。この乞食坊主に、にわかめくらを、貴公らの目の前から、かくすような名案など、思い泛ぶ筈があろうか。……ただ、にわかめくらに、いささか、利のある場所をえらんでやるまでの話じゃ」

千本松原――沼津の西南、五反田村の海浜に、二里もつづく松原である。

鴨長明の作と称せられる「東関紀行」には次のように記されている。

千本の松原という所あり。海のなぎさ遠からず、松はるかに生いわたりて、みどりのかげ、きわもなし。沖には舟ども行きちがいて、木の葉の浮けるように見む。かの、「千株の松下、双峰の寺、一葉の舟中、万里の身」と作れるに、かれもこれもはずれず、眺望いずくにもまさりたり。

見わたせば千本の松の末とおみ
　みどりはつづく波の上かな

しかし、鴨長明が賞でた松原は、天正の頃、武田勝頼が、合戦の妨げだ、といって伐りはらってしまった。

いまの林は、もっぱら防風の目的のために、後世植え継いだものであった。

したがって、これは、明石須磨あたりの松林とちがって、人が通ることも困難なくらいに、密

生させてあった。

鴨長明の頃には、千本あまりの、ゆっくりと逍遥できるたたずまいであったろうが、いまは、万本もの小松の密林であった。

雲水がえらんだ決闘場所は、そこであった。

すなわち。

いずれもえらばれた手練者に相違ない八人の討手が、盲目の狂四郎を包囲して、襲いかかるには、最も不便な場所であった。

無数の小松が、狂四郎の味方となってくれる。

身の動きがきわめて不自由になると同時に、刀を揮うことも制限されてしまう。極端にいえば、小松の幹と枝の隙間からの、突きの一手しかなかった。

もとより――。

狂四郎の方も、四方から突いて来る白刃を、避け躱す五体の自在な翻転は、完全に封じられてしまっている。

剣の業が使えぬ点では、双方同じ条件ではあった。

ただ、盲目の身にとっては、ひろい平地上に置かれたよりも、この密林中の方が、前後左右から迫って来る敵がたが音を消すことが不可能であるために、神経を配分する必要がなかったのである。

顔を伏せ、無想正宗を地摺りに下げた狂四郎に向って、討手がたは、文字通り、八方から、小松の幹をこすり乍ら、じりじりと、肉薄して来た。

幹と幹の間隔が、人一人通せぬほど狭いことは、たしかに、討手がたにとって、不利であった。

くりかえして云うが、音をたてずに、狂四郎に迫り寄ることは不可能なのであった。

狂四郎に、まなこは、必要なかった。

と――。

狂四郎は、無想正宗を、移して、すうっと、頭上に直立させた。

一瞬――。

八人は、ピタリと前進を停止して、音を絶った。狂四郎を刃圏内に、容(い)れたのである。

「ええいっ！」

熟達の剣士のみが発し得る懸声が、狂四郎の前後から――二人の討手の口から、ほとばしった。

二本の白刃が――前方からは胸を、後方からは背中を、刺しつらぬくべく、電光の迅(はや)さで、突き出された。

だが――結果は。

背後から突いた者は、狂四郎が後楯(うしろだて)にしていた松の幹を、刀身の半ばまで、刺しつらぬいていたし、前面から突いた者は、松の幹もろとも、脳天から唐竹割(からたけわ)りにされていた。

二秒と過ぎぬうちに。

さらに二人が、前の二人と、全く同じ結果をまねいた。

「うむっ！」

正面へまわった一人が、――そうか、とさとるや、白刃を頭上に直立させ、狂四郎と全く同じ構えをとった。

松の幹を、横へ薙(な)ぎ截(き)ることは不可能としても、一直線に白刃を振り下げ、縦に断ち割ることは可能である。

それを、狂四郎から、逆に教えられたのである。

狂四郎の方は、おのれの臨機の業をぬすまれた、とさとるや、直立させた無想正宗を、徐々に下げた。

とみた刹那――。

狂四郎の五体は、宙へ、躍りあがった。

目にもとまらぬ迅さで、片手片足で、松の幹を、摑み、蹴って、おのが身を宙のものにしたのである。

左様、頭上には、自在に動ける空間が在った。

正面の敵は、狂四郎が跳びあがったあとめがけて、虚しく、白刃を斬り下げた。

そして、頭上の梢に、鳥のごとく、とまった狂四郎によって、存分に、頸根を割りつけられて、血飛沫を、撒いていた。

他の討手たちは、あわてて、突き上げようと、構えを変えたが、もうその時は、狂四郎のからだは、大きく跳躍して、遠くの地面へ立っていた。

――おのれっ！

討手たちの眼光は、狂暴な野獣のそれと化した。

互いに、水ももらさぬ緊密な連繫を保って、肉薄する、という余裕を失ったのである。

にわかめくらに、翻弄された、という憤怒が、渠らに、躍起の動作をとらせた。

そこが、狂四郎の、つけ目であった。

ばらばらになって、遮二無二襲いかかって来る敵を、片づけるのは、目蓋を閉ざしていても、さまで、困難ではなかった。

直立刀を振り下すのも、水平に突き出すのも、狂四郎の方が、間髪の差で、迅かった。

狂四郎が、密林をくぐり抜けて、白浪の打ち寄せる砂浜側へ出た時、これを追って出て来たのは、わずか二人しかいなかった。

その一人は、すでに重傷を負うて居り、最後の気力をふりしぼって、

「やああっ！」

と、斬り込み、狂四郎に躱(かわ)されて、渚(なぎさ)ぎわまで砂地を泳いで、浪の中へ俯(う)っ伏すや、それなり、起たなかった。

生き残った最後の一人は、是が非でも、狂四郎を討ちとらねばならぬ悲痛な闘志をみなぎらせて、一撃を狙いつづける。

狂四郎は――狂四郎もまた、暗黒裡の決闘に、疲れはてていた。

もはや、動くのは、面倒であった。

敵が、背後へまわり込んで来る、とさとりつつ、狂四郎は、不動の佇立(ちょりつ)をみせたなりでいる。

と――一瞬。

「約束がちがうぞ、討手がた――」

不意に、その声が、かかった。

「場所は、林の中に限定する、と約束した筈じゃ」

雲水に云われた討手は、狂四郎に向けた白刃を、旋回させるや、野生の猛獣の咆哮(ほうこう)に似た懸声とともに、雲水めがけて、跳びかかった。

狂四郎は、一颯(いっさつ)の刃風の鋭さに、はっとなった。

――この雲水、できる！

胸の裡(うち)で、呟いた。

雲水が立っている方角へ、顔を向けた狂四郎は、

「貴僧のおかげで、どうやら、とり憑いていた死神が、ひとまず、退散してくれたらしい」

と、云った。

「はたして、そうであろうかな」

雲水が、こたえた。

その声音は、別人のように冷やかなものになっていた。

「……………？」

狂四郎は、小首をかしげた。

「眠狂四郎氏(うじ)――、この破戒坊主もまた、お手前の生命を狙う刺客であったとしたら、どうじゃな？」

「……………」

「お手前が、たとえにわかめくらになって居っても、一騎討ちには、勝味がうすい、と知って、討ち取る機会を辛抱づよく、うかがっていた、と思ってもらおうかな。……折よく、別の方面からの下知を受けた討手がたが、やって参った。そこで、一策を案じて、お手前の方に、利のある場所をえらんで進ぜた。……予想たがわず、お手前は、自身不測の臨機応変の秘技をもって、無類の強さを示した。しかし、お手前とて、超人ではあり得ぬ。……体力も気力も、まさに燃えつきようとしている熸火(しゃくび)じゃな。これを、討ち取るのは、さして、困難ではあるまいの」

「…………」

「卑怯と嗤うかな、眠狂四郎氏。当方の卑怯を嗤う前に、こうした策を採らなければ、命運が絶たれぬおのが自身の不敗の強さを、なぐさめとすべきであろうかな」

「雲水！」

「なんじゃな？」

「言葉がすこし、多すぎはせぬか。こちらには、生きていることに、さして未練も恐怖もないことだ。……生命を奪うのに、無駄な時間を費やすな」

「よろしかろう。……覚悟！」

雲水の凄じい剣気が、潮風に乗って、まっ向から、狂四郎の面へ、あびせかけられた。

地摺りに構えた狂四郎は、

――この攻撃をふせぐことは、叶わぬ。

と、さとった。

まなこをひらいていても、尋常の勝負で、五分と五分と思われる強敵のようであった。盲目の上に、疲労が骨までもしみ通ってしまっている身で、どうして、勝てるものであろう。

狂四郎は、ただ、斬られるのを待つばかりであった。

その悲壮な姿に、雲水は、せめてもの慈悲を示すがごとく、

「参る！」

と、予告した。

その刹那であった。

宙を截る鋭い矢唸りとともに、雲水が、

「うっ！」と呻いた。

にぶい音たてて、砂地へ仆(たお)れるのを、ききわけ乍ら、狂四郎は、

——おれに、助太刀する者が現れた！

と、信じがたい気持であった。

さく、さく、と砂を踏んで近づいて来た者は、

「その目の、手当を、してさしあげなければなりませぬ」

と、云った。

吹針で、狂四郎を盲目にした梅津一郎太の妹千佐の声に、まぎれもなかった。

吉原小坊主

草枕に、謂う。

『柏原新田、元吉原というところをうち過ぎ行く道のほど錦花緑草のたぐいはいとも見えず、白き砂のみありて雪の積れるに似たり』

富士を左手にまわす海道筋から、逸れて、磯馴(そな)れ松がまばらにちらばった浜辺には、たしかに、見渡す限りの白砂が、目路の果てまで、つづいている。

人の尠(すくな)い時代であった。

山部赤人(やまべのあかひと)の歌を慕うて、この田子の浦を徜徉(そぞろある)いてみようとする人が、年に幾人もいる次第ではない。

人影は、絶えて見当らぬ。
それをさいわいにして、異様な光景が起ったのは、午後の陽ざしに、松の影が白砂へ長くのびた頃あいであった。
風もなく、眩しい明るさには、汗ばむほどのあたたかさがあった。
大小ふたつの人影が、疎林の中を歩いて来たが、この取りあわせが、まず、異様であった。
大きい方は、長脇差を腰に落した博徒ていの若い男であり、小さい方は、青あたまの小坊主で、白衣をまとっていた。それが、桜の杖を携げている。
その貌だちの可愛さは、無類であった。大きく澄んだ双つの眸子は、くもりを知らぬ玻璃の美しさである。兎耳が、春の光に透けて、淡い。
「よし、ここらあたりでよかろう」
無職の若者は、足場を見さだめてから、小坊主に、
「さあ、抜いたり」
と、促した。
小坊主は、桜の杖から、一尺二寸あまりの仕込みの白刃を、抜きはなった。
「ようがすかい。この幹を、敵だと思うんだ。しっかり、にぎって、力一杯、突くんだ。そうだ、南無阿弥陀仏を、となえ乍ら、突くんだ。……一念こめりゃ、岩へ矢を射立てるためしもあるんですぜ。さあ、やったり！」
小坊主は、云われた通りに、身がまえて、必死に、二間むこうの松の幹を睨んだ。
それから、砂を蹴って、走った。
「えいっ！」

可憐な声音の懸声もろとも、白刃を突き出したが、手もとが狂って、切先は、わずかに、幹の皮を殺いだ。

「もう、一度だ。こんどは、ぶすっとやるんだぜ」

「はいっ!」

小坊主は、もとの位置に戻ると、再び身がまえて、息を詰めていたが、ぱっと、走り出した。

「えいっ!」

こんどは、まちがいなく、幹のまん中を突いたが、切先を刺し込むにはいたらなかった。どだい、そのかぼそい腕では、無理な話であろう。

「さあ、もう一度だ。へこたれちゃ、ならねえ。ぶっ倒れるまで、やっつけるんだ!」

無職者が、叱咤した折であった。

松の影かとみえていた黒いものが、数間さきで、やおら起き上った。

無職者は、ぎくっとなって、険しい視線を、それへ投じた。

黒の着流しの浪人者の姿影は、いかにも、薄気味わるいものに、見えた。

こちらへ、一瞥をくれたが、何も云わず、歩き出そうとした。

「旦那!」

無職者は、鋭い口調で呼びとめた。

「ことわっておきやすがね、他言は無用ですぜ。見なかったことにしてもらいてえ」

そう云われて、眠狂四郎は、ふりかえった。

「それが、口止めしなければならぬほどの、大切な修業なのか」

「なに!」

「おれは、また、このあたりでは、四月八日の花祭には、小坊主に、願人坊主の真似をさせて、走りまわらせるならわしがあって、その稽古をさせているのか、と思った」
「ふざけるねえ！　南無八幡と祈願をこめて、親の敵を討とうと、死にもの狂いになっている孝子に、土砂をかけやがるとは、目差し野郎っ、承知できねえっ！」
無職者は、吸鳴りたてて、長脇差をひとひねりすると、いかにも、剽悍な攻撃姿勢をとった。
狂四郎は、黙って、足をはこんで来た。
「やるかっ、野郎っ！」
無職者は、右手を長脇差の柄にかけた。
「たわけっ！」
狂四郎の口からほとばしった一喝は、無職者へ、落雷のような衝撃を与えた。
狂四郎は、棒立ちになった無職者をしり目に、小坊主の手から、仕込みの白刃を把りあげると、
「剣というものは、気合の会得がなくしては、綿も刺すことはできぬものだぞ。……お前は、やくざだからには、一人や二人、斬ったおぼえがあろうが、その程度の度胸兵法では、松の幹など、突き刺すことは叶うまい。やってみるがいい」
「なにをっ、くそっ！」
無職者は、狂四郎から白刃を渡されると、喚声を噴かせて、松の幹へ、突きかけた。
しかし、切先は、せいぜい五分も、くい込んだばかりであった。
無職者は、それを抜こうとしたが、容易ではなく、顔をまっ赤にした。

狂四郎は、無職者を押しのけて、無造作にひき抜くと、そのまま、片手摑みに、幹へ向って、水平にさしのべて、凝っと、眼眸を据えた。
無職者は、固唾をのんだ。
一瞬——無言の気合を発して、狂四郎は白刃を、突き出した。
刀身は、吸い込まれるように、幹をつらぬいた。
無職者は、切先が、反対側へ突き出るのを、視て、目を瞠った。
狂四郎は、ひくく、「むっ！」と声を発した。
刀身は、なんの造作もなく、するりと、幹から抜けて、狂四郎の手元に引かれた。
白刃は、桜の杖に納められて、小坊主に返された。
「旦那！　強うござんすねえ！」
無職者は、感嘆をこめて、云った。
「気合を会得すれば、造作もない。しかし、小児になせるわざではない。まして、女童には——」
無職者は、あっとなった。
小坊主は、青あたまにまるめて、男児とみせかけているが、少女にまぎれもなかったのである。
「旦那っ！　おねげえしやす！」
不意に、無職者は、その場へ、土下座した。
「どうか、助太刀して、おくんねえ。おねげえしやす！」
「………」
狂四郎は、小坊主と、視線を合せた。
小坊主の双眸には、祈りをこめるようないじらしい光が、湛えられていた。

「敵は、どこにいる?」
狂四郎は、無職者に、訊ねた。
「吉原から四里、十里木(じゅうりき)というところに、ひろい寺がありまさ。そこの住職めが、この子の敵なんでさ」
「僧侶(そうりょ)が、敵か? どういうのだ?」
「あっしも、仔細(しさい)は判らねえ。しかし、この子の父親の土岐嘉門(ときかもん)様が、その遺言状に、そう書いていたんだから、相違はねえんでさ。あっしゃ、餓鬼の頃、土岐館(やかた)にひろわれて、育てられた海山の恩があるんで、この嬢様に、どうでも、敵討をさせにゃならねえんでさ。……どうか、おねげえします」
無職者は、砂へ額をすりつけた。
狂四郎は、ちょっと沈黙を置いてから、
「お前の知っている限りのことを、きかせてもらおうか」
「旦那っ! 助太刀して下さるんで——」
無職者は、顔をぱっとかがやかした。
「お前の話をきいた上でのことだな」
「へ、へい——」
「土岐嘉門というこの子の父親は、そのひろい寺とやらの住職に、毒殺された、とでもいうのか?」
「そうじゃねえんで……。土岐嘉門様は、切腹なすったんでさ。江戸城の大手門の前でね」
「それはまた、大仰な最期をとげたものだな。なぜ、そのような場所をえらんだのかな?」

「あっしにゃ、わからねえ。ともかく、遺言状には、ひろい寺の住職によって、土岐家は、斯くのごとく滅ぶ、と書いてあったんでさ」
「その坊主の行状が、どのように不埒なものかきいて居るか？」
「それが、どうも、あっしにゃ、よく、わからねえ。なにしろ、そんじょ、そこいらの寺じゃねえんでさ。檀家なんか一軒もねえ……、つまり、その、ご公儀から知行をもらって、威張りかえっている寺でござんすからね。住職は、お上人様と呼ばれていてね、あっしも、一度、チラと見たことがあるが、大層立派なご人体で、つい頭を下げたくなるような……」
「どうして、ひろい寺と称ばれて居る？」
「酒乱の亭主からにげ出した嬶や、姑にいびり出された嫁や、宿場女郎や、瞽女や、心中のかたわれや、孤児が、頭をまるめて、救いをもとめりゃ、ちゃんと、養ってくれるんでさあ。そういう女を寝起きさせる家が、三棟も建っていまさ」
それをきくと、狂四郎は、小坊主へ視線を当てて、
「そなたの母者は、どうした？」
と、訊ねた。
小坊主は、まばたきもせずに、狂四郎を見返しつつ、
「この世には、在りませぬ」
と、こたえた。
「父御よりさきに、亡くなったのだな？」
「はい」
「旦那――」

無職者が、そっと、声をひくめて、

「雲がくれ——てえやつでさ。何処かへね。一月経って、屍骸になって、どこからか、戻って来た、という次第でござんすよ」

「………？」

「家の前に、夜のうちに、駕籠が置きすてられていて、中に、屍骸になっていた、というわけでさあ」

「それから、程なく、土岐嘉門は、江戸城の大手門前で、切腹したというのか？」

「へい——」

——妻女が、ひろい寺の住職に殺されるなにかのいきさつがあったか？

狂四郎は、歩き出し乍ら、

「お前に、目明しの真似をしてもらおう。おれは、吉原の旅籠で、待って居る」

古ぼけた旅籠をえらんだ狂四郎は、番頭に、名勝志のようなものがあれば、借りたい、と所望した。

それは、すぐ、部屋へ持参された。

狂四郎は、披いてみた。

『古は、足柄、清見、横走とて足柄をこえ、富士の麓を通り、清見ヶ関へ出る道に、横走の関とて、足高山の間にあり。按ずるに、富士、足高の間、今も尚通路あり。十里木越という。竹の下の南一里は、御殿場村あり。御殿場村一円は、公儀御鷹場にて、地下の者以外は、林へも

野へも入ることを禁じらる。此処北へ登れば富士の東口須走なり。是より甲州都留郡へ越ゆる。西へ行けば十里木越なり。御殿場村より西へ行くこと三里、印野村という。村の中に谷川あり謂ゆる土岐の小川なり。此所すなわち横走なりと土人いえり。古に関のありしは、此の地なるべし。相、甲、豆へ直ぐなる岐路なるゆえ、古は関ありしなるべし。十里木より吉原へ四里也』

一読して、

——そうか。

狂四郎は、合点するところがあった。

——読めて来たぞ。

勘太という無職の若者の話によれば、土岐嘉門は、この地方きっての名家であった、という。吉原から富士川まで、大小五十幾つかの石橋が架かっているが、これは、すべて、土岐家の寄付であった。富士の裾野一帯及び甲州身延山への参詣道の左右の山林が、土岐家の所有であった、ときけば頷ける。

先代の頃、幕府の強請によって、山林すべては献上され、土岐家は、衰えた。したがって、土岐嘉門は、幕府に対して、恨みを抱いていたに相違ない。

将軍家鷹場となった御殿場村の森林も、土岐家の所有であった、と思われる。

そこらあたりに、土岐嘉門が無念の切腹の原因が、かくされているのではあるまいか。

勘太が入って来たのは、夕餉の膳が、はこばれて来た時であった。

小坊主を、自分のお袋に預けておいて、吉原宿から蒲原宿まで、駆け巡って、ひろい寺のことを調べて来た、と額の汗をぬぐい乍ら、

「旦那——。きいてまわってみると、どうにも、いやはや、五里霧中ってところで、さっぱり、

わけがわかりませんや」
と、云った。
狂四郎は、黙って、盃を口にはこんでいる。
「つまり……、ひろい寺には、不幸な女子らばかりが、救いを求めて、入り込んじゃいねえんでさ。……ちゃんとした、大きな家の、何不足ねえ箱入娘が、両親に蝶よ花と可愛がられ、器量も上々なら、気だても優しいのが、なんの料簡で、浮世をすねたのか、頭をまるめて、ひろい寺へ、行っているんでさ」
「それで、その娘たちはどうした？」
「それが、なんとも、奇妙なことに、三月も経たねえうちに、また家へ舞い戻って来て、髪をのばして、何食わぬ顔をして嫁入りしてやがるんでさ。……それが、大きな家で、こっそり、やらかしたことなんで、世間には、洩れて居りやせん。あっしも、今日、はじめて、しつっこく、きまわってみて、やっと、知ったようなわけでござんす。……どういうんで、ござんしょうかね？　さっぱり、わけがわからねえ」
「幾年ぐらい以前から、そのようなことが、起っているか、調べたか？」
「十年も、いや、それ以前から、毎年、一人や二人、必ず、やらかしたらしゅうござんす」
それをきくと、狂四郎は、冷たい眼眸を宙に置いて、再び沈黙をまもった。
勘太は、じっと、その異相を、見戍っている。
やがて、狂四郎が、口をひらいた。
「押込みを、やらねばなるまい」
「え！　なんと仰言ったんで――？」

勘太は、びっくりして、ききかえした。

「押込み強盗を働く必要が起った、ということだ。なるべく、旧家で、大きな家がいい。さがしてもらおう」

広い庭であった。母屋も大きいし、土蔵も数多い。

春のおぼろ月を、痩身にあびて、狂四郎は、その庭の一隅に立っていた。

三更をまわった時刻で、物音は絶え、さきほど、泉水の鯉がはねる音があっただけである。

この屋敷は、沼津城主水野出羽守の仕置家老として、五万石の財政をとりしきっていた筈見新左衛門の隠居所であった。先年、大名道中のことで、水野家と近畿数藩との間に、抗争があり、筈見新左衛門は、その責を一身に負うて致仕し、この屋敷にひき籠った。

新左衛門は、二年あまり前に逝き、いまは、養嗣子新三郎が継いで、当主となっている。水野家からは、永代捨扶持が届けられ、また、酢造りの倉も経営していて、内証裕福の家であった。

狂四郎は、しばらく、月明りに、家の構造を測ってから、足をふみ出した。

雨戸を一枚はずして、忍び入ってからの行動に、逡巡はなかった。

宛然、勝手知った屋内を歩くように、進んで、とある部屋の前に来た。

いしんの闇であったが、目は利くし、こういう行動には馴れていた。

障子を音もなくひらいて、一歩入ってみて、つけた見当があやまっていなかったことを知った。

ただの押込み強盗とちがっていたのは、悠々と行灯に、灯をともしたことである。

牀が二つ。

当主とその妻に、まぎれもなかった。ともに、若く、品のいい寝顔をならべていた。

筈見新三郎は、狂四郎に視線を落されて、その冷たい光でねむりをさまされたごとく、ぱっと目蓋をひらいた。

「曲者っ！」

はね起きざま、ひと跳びに、床の間から、刀を摑んで、抜きはなった。

かなりできる腕前であったが、次の瞬間には、白刃をたたき落されていた。

「若い夫婦の寝所へ踏み込んだ無粋の振舞いは、好んでしたことではない、とことわっておく」

狂四郎は、新三郎を足下にひき敷き、たたき落した白刃をひろうと、

「たずねたいことが、ひとつ。白昼、玄関から案内を乞うて、書院できり出せる性質の問いではないゆえ、押込みの真似をいたした。正直に、こたえて頂こう。……お主が、去年秋にめとったこの若妻は、それより半年以前、十里木のひろい寺で、あたまをまるめて、三月あまり、すごしたことを、こちらは、承知して居る。かくすのは、無駄だ。……さて、お主は、それを知ってか知らずか、妻に迎えた。その時、はたして、生娘のままであったか、それとも、すでに、破られていたか、どうか――そのことだ、うかがいたいのは」

新三郎は、それにこたえるかわりに、

「はなせっ！」

と必死にもがいた。

狂四郎は、冷然として、

「では、まず妻女の口から、きこう。そなたは、生娘であったか、それとも、すでに破られていたか、どうだな？」

と、返辞を促した。

若妻は、おののくばかりであった。

瞬間――狂四郎は、白刃を、新三郎の頸根に擬した。

「正直にこたえねば、そなたの良人は、あの世へ送られるぞ！」

若妻は、色を喪った唇を顫わせた。しかし、声は出せず、代りに、わずかに、首を振ってみせた。

「生娘のままで、この家に嫁入った、というのだな？」

若妻は、頷いた。

「おい、当主――、それに、相違ないか？」

「く、くだらぬことを、な、なんのために……」

新三郎は、吐きすてた。

狂四郎は、再び若妻を見据えた。

「あたまをまるめて、ひろい寺に入ったのは、そなたの意志ではあるまい。何者の強請だ？　きこう」

「わ、わかりませぬ」

「わからぬ？　わからぬとは？」

狂四郎の語気が鋭くなるや、足下で、新三郎が、「知らぬのだ！　妻は、何も知らぬのだ！　ただ、な、ならわしにしたがって、そうした、までだ」と、こたえた。

「ならわし？　娘が髪をおろすのが、なんのならわしだ。……ごまかすのを許さぬために、おれは、こうして、お主を、押えつけているのだ」

「知らぬ！　知らぬものは、知らぬ！……知りたければ、蒲原の代官に、訊け！　わしらに、云えるのは、それだけだ！」

その言葉をきいて、狂四郎は、視線を若妻に移した。

若妻は、良人の云うことがまちがいない、という風に、頷いてみせた。

月明りの往還へ出た狂四郎は、いささか当惑の気持になっていた。

――乗りかかった舟だが、どうやら、泥舟のような気がする。

歩き出し乍ら、自分に云いきかせた。

――沈まぬうちに、向う岸に着くには、いそがねばなるまい。

蒲原代官

吉原から蒲原までは、わずか二里三十町の距離である。

街道は、坦々として、松並木の中をのびている。全容をあらわした富嶽は、しだいに、うしろへまわって来る。

膝栗毛の旅人には、しかし、この両宿のあいだに、きもをひやす難関が待っている。

そのむかし、その羽音で平維盛が率いる七万余騎を総崩れに敗走させた水鳥の棲む富士川である。

富士川は舟渡しであるが、屢々川止めになった。川止めのために、両岸の宿駅に、旅人が輻輳

して、食糧が欠乏をきたすことがあったので、この時代には、あらかじめ、糧食米が蓄えられていた。宿置き米といい、吉原宿に十石、蒲原宿に三十石、一年中用意されていた。

富士川の常水量を、正月から九月まで、八尺とさだめ、これを夏川と呼んでいた。十月から十二月までを六尺とさだめ、冬川と名づけていた。夏川でも冬川でも、水量が二尺増せば、馬を渡すことを止め、三尺増せば、旅人渡しを禁じた。

それほど、危険な水流であった。

『名所記』にも、

『富士川、舟に乗りて渡るに、渡し守力を出して棹をさし、櫓を押して出す。岸の上より見れば、あわやこの舟水底へずぶりと沈みけるよと思えど、さもなくて漕ぎ行く。舟の中にある人は、目まい肝きゆる心地して、腹は背につき手を握りて、ようよう岸に着く』

と、記されてある。

眠狂四郎は、花曇りの朝、その水切り舟に乗った。

隣りに坐った老爺が、土地の者らしく、渡り馴れた様子でいるのをみとめた狂四郎は、

「蒲原の代官邸は、どのあたりであろう？」

と、訊ねた。

「宿のてまえの七難坂にありまする。むかしは、こちら岸の水神森の丘にお屋敷があったそうでございますがな」

「代官は、お主がたにとって、どういう人物だ？」

その質問に対して、老爺は、いかにも誇らしげに、

「代官様は、わしらが在所では、水神様でござるわい」

「水神？」

「ご存じありませぬかのう。ご先祖は、古郡門太夫様でございますぞ。この富士川に、雁堤防をつくって下されて、沿岸の百姓の難渋を救うて下された――」

そう云われて、狂四郎は、以前なにかの道中行程記で読んだ記憶をよみがえらせた。

寛永の頃、大納言忠長に仕えた駿河代官に古郡門太夫重政という人物がいた。

その当時、富士川は、富士山麓の一峰明星ヶ嶽を廻って浮島沼に投流していたが、この沼と海の間の村落は、毎年、富士川氾濫のために、大損害を蒙っていた。

もし、明星ヶ嶽の麓で、富士川を堰止め、まっすぐに駿河湾に放流すれば、水害を防ぎ得る、ということは、何人でも考えるところであった。そして、堤防はしばしば築かれたが、その度毎に、激流で押し流されていた。

古郡門太夫は、おのが手で、この治水工事を完成すべく、毎年明星ヶ嶽に登り、富士川の水流を、眺めつづけた。

門太夫は、いかなる堤防を築いたならば、その凄じい水流に堪えることができるか、判らなかった。

たまたま、鉄牛禅師が、巡錫して来たときいて、門太夫は、わが屋敷に招き、座談のうちに、この苦心のことを語った。

すると、鉄牛禅師は、微笑し乍ら、

「水にさからわぬこと、つまり、水を遊ばせる堤防を、築きめされればよろしかろうな」

と、こたえた。

門太夫は、そう云われても、納得がいかなかった。

禅師は、下総の印旛沼の景色でも見てござれ、と云いのこした。

門太夫は、早速、印旛沼へ、おもむいた。そして、数日滞在のうちに、さとった。印旛沼が利根川の遊水池の役割を果していることに気がついたのである。

もし、印旛沼がなければ、利根川は、いかに堅固な堤防を築いても、これを突き破ってしまうに相違なかった。

――そうか、わかった！

門太夫は、富士川の水を遊ばせるためには、一直線に堤防を築かずして、雁行形に築けばよい、と会得したのである。

そして、その工事は、門太夫によって起工され、その子重高に受け継がれて、五十年の歳月を費やして、完成されたのであった。

雁堤防完成によって、沿岸の村が救われるとともに、あらたに十三箇村の村がうまれ、六千五百石の米を収穫し得るようになったのである。

まさしく、古郡門太夫重政とその子孫は、この地方の住民にとっては、水神にひとしい存在となっているのは、当然である。

老爺の話では、当主古郡孫太夫も、立派な人格の持主だ、という。

――それならば、夜半に、押込みのまねをせずに、玄関から訪問した方が、よさそうだ。

狂四郎は、思った。

半刻ほど後、狂四郎は、代官邸の書院に、坐って、腕を組んでいた。

二間の床の間に、『水心』と二字のみ記した掛物があるだけの、屏風もなければ、違い棚に置物ひとつない、簡素をきわめた二十畳の部屋であった。

『水心』の筆蹟は、雄渾である。鉄牛禅師の書きのこしたものであろうか。

障子が開き、一瞥儒者型の人物が入って来た。まだ三十前後で、眉宇に若々しさがある。

挨拶を交してから、古郡孫太夫は、微笑して、

「身共の実弟が、江戸の青山で、町道場をひらいて居る。お主の剣名は、弟より、しばしば、きかされて居る」

と、云った。

こちらの奇妙な仮名が、すぐにこの代官に通じて、書院に上げられたのは、そのおかげであった。

「早速乍ら、お伺いした用向きを、申上げます。富士山麓は、法華が勢威を誇り、他宗を寄せつけぬ筈にも拘らず、十里木に、天台の一寺が、隠然たる力をたくわえて、いまでは、この地方一円の日蓮信徒を、天台へ改宗させている由——。これは、お手前様が、後楯になられて居るためでありましょうか？」

まず、狂四郎は、そういう問いかたをした。

富士の裾野には、日蓮正宗の総本山大石寺をはじめ、法華五山がある。

大石寺は、正応三年、上野村の地頭・南条兵衛七郎時光が、日蓮門下六老僧の一人日興を開山として建立した。日興は、甲州鰍沢の出で、身延山とは最も縁故の深い人であったが、日蓮示寂後、身延山建立者の波木井実長と、布教上の意見が合わず、身延山にあった宝物一切を奪って、

富士山麓に、大石寺を建立したのである。

したがって、現在でも、日蓮の曼陀羅はじめ宝物は、大石寺に在って、身延山は、空巣である。

これにつづく五山第一は、北山村の本門寺、次が芝富村字西山に同じく本門寺、上野村下条に妙蓮寺、富士根村小泉に久遠寺。

さらに、五山の外に、駿東郡金岡村の光長寺、富士郡岩松村の実相寺など――。

富士山麓に於ては、日蓮宗と他宗との争いが、しばしば、血なまぐさい惨劇をも生んでいる。

富士下方熱原の熱原神四郎国重のごときは、改宗を迫られたが、これを肯かなかったために、公衆の面前で、矢で射殺されている。

日蓮宗は、こうした悲惨な殉教者の血汐の上に、その教義を、富士山麓にひろめたのである。

日蓮宗は、人が没後、極楽へ行けさえすればよい、というがごとき、なまぬるい宗教ではない。現世の業苦に対する闘争を説いている。

飢饉が襲うのも、疫病が流行るのも、地震や洪水が起るのも、内乱の勃発するのも、外敵の侵して来るのも、ことごとく、法華経信仰が行われていないことに帰する。

仏滅後三千年、世人は堕落して、所謂七難ならび起るが、東邦に上行菩薩出現して、これを救う――と法華経は記す。

日蓮は、ちょうど仏滅後三千年目に生れた。すなわち、日蓮は、上行菩薩の化身である、ということになる。

公卿も、武家も、百姓も、町人も、すべて法華経主義の実践者となってこそ、天地が浄化される。

この目的を遂げるためには、法華経の行者を教育して、試験する場所――本門戒壇を設ける必

要があった。大石寺はじめ、五山は、この計画実行のために出来た。日興によって承け継がれた日蓮の計画は、眼前に聳える富嶽よりも、巨大であった、といえる。斯かる闘争の権化のような五山が勢威を張る富士山麓に、たった一寺のみが、対抗して、しかも、駿河の住人たちを、次つぎに改宗せしめている事実は、瞠目にあたいする。これには、なにか、蔭に、大きな権勢が、動いている、と解釈してよいことだった。

狂四郎の目は、鋭かった。

これに対して、古郡孫太夫の態度は、すこしも変らなかった。

「お主、ひろい寺の住職に対して、何か含むところがあるのか？」

そう問いかえした。

「十歳の女童が、父母の敵として、狙って居ります」

「お主、その助太刀をたのまれたか？」

「袖すり合った縁で――」

「何人の娘かな？」

「吉原随一の名家ときこえていた土岐嘉門の娘とお思い頂きたい」

それをきいて、はじめて、孫太夫は、わずかに、眉宇をひそめた。

狂四郎は、孫太夫が、口を開くのを、冷やかな表情で、待った。

孫太夫は、代官という立場を守るために、容易に、かるがるしい言葉を吐けないようであった。

やがて、

「土岐嘉門の妻女が、死体となって自家へ戻り、それから、十日後、嘉門が千代田城大手門前で切腹して果てた——その理由を、お主は、知って居ると云うのか？」

「嘉門の書置きの中に、ひろい寺住職によって土岐家は、斯くのごとく滅ぶ、と記されていたことを、お手前様は、すでにご存じでありましょう」

「…………」

「事のついでに、てまえが調べてみると、当地の旧家や大店の、器量も気立ても佳い娘が、あたまをまるめて、ひろい寺に入り、長くて三月、殆どが一月ぐらいで、家へ戻り、再び頭髪をのばし、これに綿帽子をかぶって、嫁いで居る事実があります。……わたしごとき市井の無頼の徒の、下衆のかんぐりでは、ひろい寺住職が色好みで、功徳をほどこすと称して、娘を青あたまにしておびき寄せ、これを弄ぶのではあるまいか。と、それをたしかめるために、嫁いだ家に押し入って、問い糺したところ、いずれも生娘のままで、家へ戻っている。これは、むしろかえって、解せぬことに思われる。……土岐嘉門の妻女を死体にして戻したひろい寺住職が、娘たちを何故犯さずに戻したか——この疑問にも、蔭に曰くがある、と存じられる。……左様、ここまで探りを入れたこの眠狂四郎に対して、駿河代官であるお手前様が、どう出方をきめられるか、おうかがいつかまつる」

いわば、これは脅しにも似た談判であった。

孫太夫は、しばらく、こたえなかった。

狂四郎は、再び、かなりの時間を、待たなければならなかった。

孫太夫は、狂四郎の冷たい眼眸を受けとめていたが、

「代官たる者の口から、蔭にかくされた事柄を、吐けとせがむのは、無理な相談ではあるまいか」

と、云った。

すると、狂四郎は、にやりとした。

「お手前様が、語れぬと仰せになる——それが、てまえの想像したことを裏書きいたす」

「…………」

「そう断定いたすが、かまいますまいな」

「…………」

「では、これで、失礼つかまつる」

狂四郎が、起とうとすると、孫太夫は、あわてて、

「待て——」

と、とどめた。

「お主は、これから、ひろい寺へ押し入って、住職を斬る、と申すのだな?」

「土岐嘉門の娘に、仇を討たせてやることに、なるかと存じます」

「それは、ならぬ」

「代官の力をもって、住職を守護する、と云われるならば、それも職務でありましょう。こちらは、おそれはいたさぬ」

「ならぬ、と申すのは、仇討まかりならぬ、と禁ずるのではない。仇討の致し様に、工夫があろう、と申すのだ」

「成程——」

狂四郎は、薄ら笑った。

「てまえが、おうかがいいたしたのは、むだではなかったようです。駿河代官殿にご迷惑を、お

かけいたさぬような仇討を、工夫つかまつる」
狂四郎は頭を下げた。

人の姿が小さく見えるほど宏壮な本堂であった。
白昼ではあったが、檜戸が悉く閉じられ、隅ずみに立てられた百目蠟燭のあかりが、巨きな影を生んで、それを薄気味わるくゆらめかせている。
誦経は、もう四半刻もつづいている。
かなりの老僧であった。善知識と称するにふさわしい立派な面貌であり、誦経の声音も、荘重である。
ずっとさがった場所に、二個の人影が竝んで、おもてを伏せている。あおあおと頭を剃りあげて、綸子の白無垢をまとっているが、ういういしい美貌の娘たちなのであった。
いかにも、これから、生贄に供される、といった風情に、受けとれる。
やがて、誦しおわった老僧は、膝をまわして、娘たちに向うと、口のうちで、念仏を三度ばかりくりかえしてから、
「作法の儀、もう心得ておいでかと存ずる」
と、云った。
娘たちは、頭を下げた。
「今年、そなたらが、栄誉のお役目にえらばれたること、まことに、お目出度う存ずる。……では、吟味つかまつろう。お脱ぎなされ」

老僧に促されて、娘たちは、立ち上ると、白縮緬のしごきを解き、白無垢を肩からすべり落した。同じく純白の下着をまとっていたが、これを脱ぐのも、また、その下の肌襦袢と二布をすてるのも、なんの躊躇もみせなかった。

最も羞恥の強い年頃であったが、過去久遠の大悲の光がさしている場所で、見戍ってくれるのが摂受折伏の高僧であってみれば、おのずから、自分をだますこともできるのであろう。

口のうちで、南無帰命頂礼と唱え乍ら、一糸まとわぬ裸身を、法灯にさらすのも、いわば、これは、醍醐の法味をあじわうことになる、という次第か。

ふたつの裸身は、まことに、美しいものだった。いまだ一度も、浮世の冷たい風にあてられたことのない肌が、まろやかに描く線は、熟しきらぬ稚さをとどめ乍ら、哀しいほど清純な優しさを、湛えている。

老僧は、満足げに、いくども頷いてから、

「美しゅう育ったものよ。桜花ならば、七分咲き。愛でるのが、この老いぼれ一人ではもったいないと申すもの……。これも、み仏につかえる者の果報じゃな」

と、笑って、座を立った。

方丈には、客人があった。

駿河代官の紹介状を持参した浪人者であった。

老僧は、法衣をきかえて、座敷に入ると、

「お待たせいたした」

座に就き、何気ない眼眸を投げて、きり出される用談を待った。

眠狂四郎と名のった客は、挨拶を抜いて、

「地獄からの使者と、お思い頂こう」

その不吉の言葉を、最初に口にした。

「ほう……、地獄の使者、と云われる。なにか、ものものしい意見を携えて参られたかな？」

「左様――。御坊は、拝見いたすところ、ただの緇叟ではおありなさらぬように、思われるゆえ、用件を率直に申上げる。……この十里木を越えた御殿場村一帯は、公儀御鷹場であり、八代将軍家がはじめて、鷹狩りを催されて以来、代々の将軍家には、三年に一度の行事にされて来た。当代に至っては、これが、一年に一度の行事とされて来た。ところで、当代将軍家は、生来武芸を好まれず、鷹狩りなどいう合戦模倣の行事など、一向に熱を入れられなかった証拠には、江戸周辺にある駒場野では、十年に一度も、催されていないことであきらかである。しかるに、遠く御殿場村までは、毎年必ず、御場段切れの陣を布いて、大層派手な鷹狩りが、とり行われて居る。すくなくとも、六七年前までは、欠かされることはなかった。これには、将軍家ご自身が、当地を好まれる理由があった。このひろい寺住職である御坊が、将軍家の歓心を買う仕掛けをされたからではないのか」

狂四郎は、そこまで、一気に、しゃべった。

「…………」

老僧は、黙して、眉宇もうごかさなかった。

「すなわち――駿河一円の、由緒ある旧家や、うなるほど金を持った大町人の娘を、えらんで、にわか比丘尼にしたてあげて、将軍家に供する――という仕掛けがなされた。将軍家へ供する、ということであれば、その家も娘も、いやと首を横に振らぬし、また、振れもせぬ。おそらく、この生贄行事は、十数年もの間、つづいたに相違ない。将軍家が、老い込まれて、この六七年、

御殿場村の鷹狩りは沙汰止みになっているが、このひろい寺で、にわか比丘尼を仕立てて、将軍家の来駕を待つならわしだけは、つづけられて居る。げんに、御坊は、いまも、本堂で、青あまになった娘二人を、素はだかにして、吟味された」

「…………」

「さて——。恰度十年前、一人の娘が、にわか比丘尼にされて、将軍家の伽をつとめた。娘は、その時すでに、吉原の名家土岐嘉門に嫁ぐ約束が成っていたが、将軍家へ生贄として供される身にえらばれた上からは、やむを得ず、服した。その結果、娘が、土岐嘉門の妻になった時には、三月の妊婦であった」

「…………」

「生れた子は、女子であったが、将軍家落胤であることには、まぎれもない。母となった者が、ここで、わが子を、将軍家に、晴れて対面させ、大名の夫人にしたい、と野望を起したのは、女心のあさましさとばかりは、申せぬ。……将軍家対面にこぎつけるには、おのれを生贄にしたこのひろい寺住職にせがむのが、当然の人情であってみれば、御坊がどれだけ、迷惑な立場に置かれたか、これも想像できるところ——」

「…………」

「一途に思いつめた女心の執拗な歎願を、ほとほと、もてあました挙句、御坊は、ついに、思いきった非常の手段をとらざるを得なかった。……三年前の某日、またぞろ、歎願にやって来た妻女は、あわれにも、生きて、当寺を出ることは、できなかった」

「…………」

「御坊！　みとめられるか？」

狂四郎の鋭い眼光を受けとめた老僧は、
「貴殿は、土岐家とゆかりのある御仁であろうか？」
と、訊ねた。
「袖すり合っただけの者に、すぎ申さぬ。但し、明日のために今日を生きては居らぬ無頼の徒ゆえ、神仏や世間に気がねをするような料簡は、毛頭ない、とお思い頂こう」
老僧は、頷いた。
「では、貴殿の意のままに随い申そうかの」
淡々とした態度であった。
やがて、老僧の前に、抹茶の茶碗が、しずしずと、運ばれて来た。
運んで来たのは、可憐な小坊主であった。
老僧は、毒の入った茶碗を、無造作に把りあげて、小坊主へ、慈眼をそそぐと、微笑し乍ら、云ったことであった。
「愚僧が、人身御供によってこの世へ送り出した唯一人の子から、報いを受けるとは、まさしくこれは、因果と申すものじゃな」

由井やくざ

山と海にはさまれた由井の宿は、鰻の寝牀のように細長く、しかも、上れば下り、下れば上る傾斜の往還をうねらせている。

そのむかし、この宿の紺屋の伜が、忠臣楠木正成の末裔と詐称して、天下に満ちていた浪人衆を操ろうとして、失敗した故事が、語り伝えられているほかは、見るべきものもない貧しい駅であった。

「東海道名所記」にも――、

『ここは甚だ馬の不自由なる所なり。殊に乗りかけの旅人には宿を貸さず。たとい宿貸せども、旅籠銭余所より一倍高し。そのゆえは、宿の内に馬なし。若馬を借らんといえば、宿より宿の問屋に案内をいうて、問屋の手形を取り、一里も二里も脇在郷へ馬を借りにゆく故に、むつかしがるなり。これ問屋のあしき故なりと、所の者いうなり』

と、記してある。

人気の悪い評判は、当然、旅人の足を急いではこばせることになり、西へ向う者は、明るいうちに薩埵峠を越えてしまうのが、ならわしであった。

眠狂四郎が、そのならわしにそむいて、由井の宿の旅籠に入ったのは、薩摩島津家の行列が、沼津を出た、という報に接したからであった。

薩埵峠で、その行列を待ち伏せ、ひと波乱を起す肚をきめたのである。

「泊めてもらおう」

狂四郎が、たのむと、ひどい醜女の女中は、木で鼻をくくるような無愛想な態度で、

「相宿なら――」

と、二階をあごでしゃくってみせた。

人の気配もないくらい、ひっそりとしずまっていて、どの部屋も空いているように思われるにも拘らず、まるで迷惑そうな様子をみせるのは、どうしたことか。

狂四郎は、相宿を承知して、階段を昇った。

障子を開けた狂四郎は、男女一組の先客を見出した。

「相宿をお願いいたす」

「どうぞ――」

頭を下げたのは、女の方で、まだうら若かった。肌が蒼いほど白いせいか、睫毛の濃い目もとや細い項に、さびしげな翳を刷いていた。

男は、かなり年配の浪士ていで、これも、容姿に陰気な気配を漂わせている。父娘であることは、鼻梁の酷似で、判った。

父親の方は、狂四郎が、坐っても、べつに挨拶しようとしなかった。

娘は、長火鉢でたぎっている鉄瓶を把って、茶をいれると、まず狂四郎にすすめておいて、それから父親の目の前に、湯呑みを、捧げるようにさし出した。

父親の首が、まわされた。

狂四郎は、その双眼が、かたく閉じられているのを視て、

――盲目か。

と、知った。

奇妙だったのは、父娘のやりとりであった。

「距離は？」

父親が、訊ねた。

「二尺あります」

娘が、こたえた。父親の胸から湯呑みまでの距離のことであった。

父親は、すっと、右手をさし出し、まごつくことなく、湯呑みを受けとった。
——にわかめくらが、立居振舞いの稽古をして居るのか。
狂四郎は、そう思った。
渋茶を喫みおわってから、父親は、はじめて、
「相宿の御仁——」
と、呼びかけて来た。
「失礼乍ら、貴殿、剣を使われるか？」
その態度は、いささか傲慢なものに、受けとれた。
「べつに……」
狂四郎は、わざと、否定した。
浪士は、ちょっと小首をかしげた。
「かくされて居るのではないか？　貴殿が、入って参られると、この部屋の空気が、なにやら、変ったような気がいたした」
「…………」
「気のせい、とは申せぬような気がいたすが……」
「…………」
「仔細があって、腕前をかくして居られるのなら、敢えてきき申さんが、そうでなければ、謙遜無用にされい」
狂四郎は、しつっこすぎる、と感じた。
「べつに……」

同じ返辞を、くりかえした。

「貴殿！」

浪士は、なおも、おのれの直感力に自信を持った態度を更えようとせず、

「世をすねて居られるのか？」

「父上！」

娘が、たまりかねて、声をはさんだ。

「ご迷惑なされておいでです」

「いや、わしは、ただ……」

浪士が、云いはろうとしかけた折、にわかに、階下が、騒然となった。

二十人とも思われる人数が、どっと入って来たが、それも、ただの旅人ではなく、どうやら無職の手輩のようであった。

この旅籠が、旅人を泊めずに、部屋を空けていたのは、このためであった。

階段に、どやどやと跫音が起ったのは、それからいくばくも経っていなかった。

「へい――ごめんなすって」

障子が、乱暴にひき開けられた。

いずれも目つきのよくない、喧嘩仕度をした無職者が四人、入って来た。

一人が、先頭に出て、片膝をつくと、

「お控えなすって――」

と、左手を掌を上にして、さし出した。
狂四郎も、浪士も、なんの反応も示さなかった。
「ご浪人衆に、申し上げやす。斯様のぶざまで、失礼でござんすが、お控え下せえ。あっしらは、当地由井宿を縄張りとする町屋原一家でござんす。渡世につきやしての親分は、富五郎と申しやす。あっしらの名前の儀は、政太、仙助、鎌吉、丹次と発しまして、稼業、昨今かけ出しでござんす。お見知り置き下せえまして、有難う存じます」
仁義を切りおわると、急に、横道に肩をゆさぶりあげて、
「ご浪人衆、助っ人をたのみまさあ」
と、云った。
「…………」
浪士は、窓の方へ顔をそ向けているし、狂四郎も、壁に凭りかかって、腕を組み、黙然としているばかりである。
「あっしら十九人、今日の暮れ六つ、薩埵峠で、興津の寺下の勘八郎と、ひと合戦やらかそうとしているんでさ。勘八の野郎、あっしらの親分が中風になったのをいいことにしやがって、豊積神社の春と秋との祭礼に開く賭場を、横奪りしやがったのよ。親分が倒れた時、二年の約束で、縄張りを貸してやったのがよう、期限の切れた今年になっても、返そうとしやがらねえ。返せ、と談じ込んだら、八分二分でどうだ、とほざきやがるじゃねえか。去年は、六分四分で我慢してやったのを、くそっ、つけ上りやがって——こうまで、なめられちゃ、こっちも、黙ってすっ込んじゃ、いられねえんだ。そこで、果し状をつきつけてやったのよ。ところがよう、寺下一家にゃ、乾分が七十人もいやがるんだ。七十人に十九人じゃ、真正面から、ぶっつかりゃ、勝目はね

え。そこで、あの手この手の孫子の兵法ってやつを思案して、いっちょうやらかそう、ってえ次第だが、それにしても、助っ人は一人でも多い方がいいからよう、ご浪人衆が二階に泊っている、ときいて、おねげえに参った、というわけでさ。……旦那、五両はずみやす。ひと肌脱いでおくんねえ。おねげえしやす」
と、頭を下げると、あとの三人も、口をそろえて、
「おねげえ申しやす！」
と、頭を下げた。
狂四郎は、しかし、冷やかに、
「おれは、見かけは無頼だが、まだこの差料を抜いたことがない。あいにくだった」
と、ことわった。
「五両ですぜ、旦那——。欲しかねえんですかい？」
「のどから手が出るほど、欲しいな」
「旦那は、生命を惜しがる柄じゃなさそうだ。やってくんねえな」
「生命が二つ、あれば、やってもいいが……」
「おいっ！　旦那、対手と場所を見て、おどけてもらおうぜ」
一人が、かっと、殺気立つのを、かたわらの一人が、「よせ」と抑えておいて、
「そっちの旦那、五両の助っ人を、してもらえますかい？」
と、声をかけた。
すると、浪士は、依然として、窓の方を向いたままで、
「五両など欲しゅうはないが、やってもよい」

と、こたえた。

「父上！」

娘が、おどろいて、止めようとした。

「冴――、業をためすには、またとない機会だ。止めるな」

浪士は、きびしい声音で、云った。

その時、無職者の一人が、ずかずかと歩み寄って、浪士の顔をのぞき込み、

「冗談じゃねえ。めくらじゃねえかよう、旦那は……。莫迦っくせえ、めくらじゃ、屁の突っぱりにもならねえや」

と、口ぎたなく吐きすてた。

とたんに、

「たわけっ！」

凄じい一喝が、浪士の口から、ほとばしった。

「な、なんでえ！」

無職者たちは、気色ばんだ。

「たとえ、両眼をふさいで居っても、その方ら博徒風情を、十人や二十人、敵にまわして、おくれをとる庄司左源太ではないぞ。その証拠を、いま、見せてつかわす。誰でもよい、床の間の連翹の一枝を取って、それがしの前に、さし出してみよ」

浪士は、毅然として云った。

無職者たちは、顔を見合せた。

「冴――、連翹の枝を折って、渡してやれ」

浪士は、命じた。
冴という娘は、床の間から、黄金色の花を無数に咲かせた一枝を取って来ると、無職者の一人に、手渡した。
「大丈夫かよ。めくら滅法、ってえことがあるぜ。枝とまちがえられて、斬られたんじゃ、かなわねえからな」
枝を持たされた無職者は、ぶつぶつ云い乍ら、浪士の前へ出た。
庄司左源太は、冴から差料を受けとると、端座したままで、
「距離は？」
と、訊ねた。
「四尺」
冴がこたえるや――次の瞬間、白刃が閃き出た。
連翹の枝は、なかばを両断されていた。
無職者たちは、驚嘆の叫びをあげた。
「その腕前なら、寺下一家が、束になって、かかって来たって、造作はねえや。めくらと思って莫迦にしてかかって来やがるから、かえって、片づけやすいだろうぜ。旦那、ねげえやす」
「心得た」
「それにしてもよう、めくらが引受けてくれて、目あきがしり込みするたア、おさむれえの世界も、さかさまになったものよ」
無職者たちは、露骨に、狂四郎をあざけっておいて、階下へ去った。
冴は、不安をこめて、父親を見戍り、

「父上！　万が一のことも懸念されますゆえ……」

と、忠告しかけた。

「申すな！　対手は、雑兵（ぞうひょう）以下の博徒どもだ。ためし斬りには、恰好の生贄ではないか。父がこの半年間に苦心して会得した業を、よく見とどけておけ」

庄司左源太は、むしろ、偶然にころがり込んで来た機会に、よろこばしげな気色を示していた。

狂四郎にとっては、他人が為（な）すことであった。そ知らぬふりをしていればよかったのである。しかし、庄司左源太のあまりにも自信に満ちた態度を、眺めるうちに、その無謀をとどめたい気持が起きた。

狂四郎自身、つい、数日前まで、にわか盲目（めくら）であり、千本松原で、手練者（てだれ）八人と死闘している。生命があったのは、運がこちらについていただけのこと、と云えるのだ。

「お手前は、娘御を、おのが目として、たたかう、というわけか」

「左様――。只今の業、ごらんの通りだ」

「もし、娘御の目のとどかぬところから、敵の得物が襲って来たら、どうされる？」

「飛矢とか投げ槍に対して、防ぐすべがあるまい、と申されるのであろう」

庄司左源太は、冷笑した。

「貴公、こころみに、竹槍でも、投げつけてみられるか」

飛び来るものに対しては、目は必要ない。耳があれば、足りる。

それぐらいのことが、判らぬところをみると、やはり、剣を使ったおぼえのない男らしい、と左源太は、もう狂四郎を対手にせず、

「冴——。階下へ参って、博徒どもの孫子の兵法とやらを、きいてつかわそう」

と、腰を上げていた。

狂四郎には、敢えてとどめる義理はなかった。とどめたところで、思いかえすような人物とは思われなかった。

再び、旅籠が、ひっそりと、しずまった時、狂四郎は、一人で、酒を飲んでいることに、一種のうしろめたさをおぼえていた。

博徒どものけだものじみた乱闘場裡で、無慚に斬られて、仆れる庄司左源太の姿を、想像し乍ら、こうして、動かずにいるのは、苛立たしさに似たおちつかぬ気分であった。

むざと犬死をしに出かけて行った、としか思われないことだった。

兵法をもって身を立てて来た者が、突然、盲目になった悲惨に堪えて、なお闇の世界でおのが業をみがき、兎にも角にも、連翹の枝を両断するまでにこぎつけた不屈ぶりは、賞讃されなければなるまい。

虫けらのような下等な手輩の刃を受けて、死なせるには、惜しい人物なのだ。

狂四郎は、薩埵峠へ駆けつけて、庄司左源太を守ってやりたい衝動をおぼえつつ、黙然として、盃を口にはこびつづけた。

そして、ついに、起とうとはしなかった。

陽が落ちて、女中が行灯を持って来てから、半刻ばかり過ぎた頃あい、階下がさわがしくなった。博徒たちが、ひきあげて来たのである。

屍骸（しがい）や手負いをかついで、逃げ戻った惨めな様子は、二階に坐っていても、手にとるようにあきらかであった。
狂四郎は、無想正宗を携（さ）げると、階段を降りて行った。
想像した通りの光景が、階下に、あった。
満足な五体を持ちかえった者は一人もいなかった。
狂四郎は、顔や手足に、晒（さらし）を巻きつけて、ぐったりと、大黒柱に凭りかかっているのが、先刻威勢のいい仁義を切った男であるのをみとめて、近寄り、
「あの浪士は、どうした？」
と、訊ねた。
無職者は、血汐の滲（にじ）んだ晒の蔭から、片目を光らせて、
「どめくらは、やっぱり、どめくらだけの、働きしかできやしなかったぜ。くそっ、面白くもねえ！」
と、吐きすてた。
「どこに居る？」
「倉沢の茶畑のどこかに、ころがっていらあ」
狂四郎は、いそいで、おもてへ出た。
やがて、狂四郎が、庄司左源太の遺骸を発見したのは、峠の登り口近くの茶畑に建っている茶摘み小屋の中であった。
狂四郎が、土間に立つと、遺骸のかたわらに坐って、茫然と虚脱状態にあった娘の冴が、われにかえって、顔を擡（もた）げた。

「とむらいをしなければなるまい。手伝いをいたそう」

「有難う存じます」

冴は、礼をのべてから、微かに顫える手を、死顔へのばした。庄司左源太の両眼は、かっと、大きくひき剝かれていた。

「……？」

狂四郎は、一瞬、不審をおぼえた。

冴は、そっと、目蓋を撫でて、閉じさせ乍ら、狂四郎の不審にこたえて、

「父は、目あきでございました」

と、意外な告白をした。

それから三日後の朝のことであった。

狂四郎は、冴をともなって、薩埵山の北方二里ばかりの、小島という小さな藩に入って、藩主松平丹後守の屋敷を訪れていた。

庄司左源太は、去年までその小島藩の定府馬廻り役であった。

兵法一途に励んで来た庄司左源太は、狷介不屈な気象を、年齢とともに激しいものにして、兵法上の意見では、主君と雖も、一歩もゆずらなかった。

昨年秋の重陽の祝日に、家中一同列座の中で、左源太は、主君にさからって、兵法は心気が冴えれば眼光を喪っても、敵の動きを正確にとらえて、これを斬ることは至難ではない、と主張してはばからなかった。

その傲慢不遜な態度が、主君の眉宇をひそめさせた。

「では、その方に、半年の暇をつかわす故、今日より、まなこを閉じて、修業し、盲目をもって自在の業が使えるようになったならば、戻って参って、それをみせい」

松平丹後守は、温厚な人物であったが、その時ばかりは、激しい気色を示した。

左源太は、即座に、承知して、一人娘の冴をともなって、江戸屋敷を出て行った。

そして、半年間、ついに、一瞬間すらも、目蓋を開かぬおそるべき忍耐と克己をもって、闇の世界で使う剣に就いての苦心の工夫をつづけ、ついに、連翹の枝を両断するまでの業前に到達したのであったが……。

由井宿の旅籠に泊っていたのは、国許に在る主君に、いよいよ、その秘技を披露すべく、上方からの帰国の途次だったのである。

不運というほかはなかった。

主君にむかって、刻苦の修業の成果を示して、おのが主張の正しさを納得してもらう寸前で、むなしく生命を落し、代って、何処の何者とも知れぬ浪人者を、娘の冴に、国許へ案内させたのである。

「左源太の代人と称して居る由だが、左源太に代って、盲目で剣を使ってみせると申すのか？」

書院の広縁に立った松平丹後守は、庭さきに、冴と竝んで控えた異相の浪人者を、見据えた。

「御意――」

狂四郎は、こたえた。

「庄司左源太は、不幸にして、にわかの病いで斃れましたが、もはや起てぬとさとって、それがしに、会得した極意を、さずけ、殿に披露するように、遺言した、とお思い下さいますよう――」

「うむ。……その業を、見よう」

「披露いたしますにあたり、庄司左源太に代って、お願いがあります」

「なんだな？」

「これなる左源太の女冴(むすめ)に、ご家中より適当なる士をえらんで、婿入りさせ、庄司家が、元の知行にて、存続するよう、おとりはからい願わしゅう存じます」

「よし、ききとどけてつかわす。……但し、その方の業を見ての上でのことだぞ」

「もとよりのこと……、ごらん頂きましょう」

狂四郎は、起つと、庭を横切って行った。

貧しい小大名の屋敷らしく、南の一廓(いっかく)は、いちめんの苺(いちご)畑になっていた。

狂四郎は、そこへ行って、おらんだ苺を一箇、摘(つま)み取ると、元の場所へひきかえして来た。

そして――。

冴に、高島田を解かせ、洗い髪のかたちに梳(す)きおろさせると、その苺を、櫛目(くしめ)の美しい頭髪の上へ、のせた。

松平丹後守をはじめ、数十人の家臣たちが、固唾(かたず)をのんで、地べたに端座した冴に対して、三間の距離をとって、立った狂四郎を、見戍った。

狂四郎は、目蓋を閉じて、つと、足をふみ出した。

冴に向って、ゆっくりと近づく狂四郎の歩行は、あきらかに、にわかめくらのおぼつかなさであった。

しかし――。

あと二歩の距離に近づいた時――足を停めると同時に、狂四郎の右手は、目にもとまらぬ迅さで、腰の剣を鞘走(さやばし)らせていた。

一閃の白い光の下に——冴の頭から、苺が、まっ二つに断たれて、左右へころがり落ちるのを、人々は、視た。

興津橋

「何を見ていなさる？」

屏風を立てたような絶壁の、常人ならば足がじいんと鳴って、すくむような崖縁に佇立して、眼下に打ち寄せる高浪を見下している眠狂四郎に、不意に、背後から、声をかけて来た者がある。

振り返ってみると、弓矢を背負い、鉄砲を携げた猟師であった。松の皮のように陽焼けた皮膚、窪んだ眼窩に底光る鋭い視線、木瘤のような手。

「街道を眺めている」

狂四郎は、こたえた。

岫崎、という。薩埵山と海に挟まれた岸辺で、凪いだ日も、ここばかりは、高い波浪が、唸りをあげて、岩を噛んでいる。

いわゆる一騎打ちの道で、越後国糸魚川と同じく、この浪打ち際を、「親知らず子知らず」と呼ぶ。

そのむかしは、寄せ引く浪間をうかがって、嶮岳の下岩のはざまを、駆け抜けていたが、明暦年間に、朝鮮国から官使が渡来したのを機会に、嶮岳を殺いで、複道をつくり、行人を安堵させた。

しかし、巨きな波濤に洗われていることは、今も変りはない。
「街道を眺めて、どうなさる？」
猟師は、訊ねた。
このような絶壁上に立って、「親知らず子知らず」の景色を、見下しているのは、たしかに、不審を呼ぶ。
しかし、猟師の質問のしかたには、いささか疑惑を罩めすぎている。
狂四郎は、わざと、正直に、打明けてみることにした。
「単身で、千人の大名行列を襲うのは、恰好の場所ではないか、と考えているのだ」
猟師は、その言葉をきいて、驚愕すると思いのほか、
「無駄じゃのう」
言下に、こたえた。
「どうして、徒労ときめる？」
「五年ばかり前、やはり、一人のおさむらいが、ここに立って、しきりに地形を見測ってござったが、次の日、どこかのお大名の行列に、斬り込んで行きなされた。……わしが、助けて、小屋へかついで戻って来る途中、息が絶えてしもうた」
「………」
「わしに、もうひとつ、無縁墓をつくらせるのは、止しなされ」
猟師が、見咎めて、しきりに問いかけて来た理由は、それであった。
「成程——そうか。ここを通る時は、行列方が、警戒を厳重にする、というのだな」
「そういうわけじゃのう。……襲うなら、ここを通りすぎて、ほっと気がゆるんだ興津あたりが

よかろ」
「興津に、てごろの場所があるのか？　あるならば、教えてもらおう」
「ないこともないが、……ほんまに、おやりなさるか？」
「やる気があるから、こうして、ここに立って居る」
「おさむらいというものは、途方もない無謀をやらかすものよのう。お大名は、何様かな？」
「薩摩だ」
「ほう……島津様をのう。島津様なら、供揃いは、千人――いや、二千人も居るじゃろうに、これは、大変じゃ。したが、当節お前様のようなずんない御仁があらわれるのは、気持がええわい。ひとつ、手伝おうかのう」
　そう申し出られて、こんどは、狂四郎の方が、不審の目を向けた。
「ただの猟師ではないような、お主？」
「いや、見かけ通りの山者じゃ。ただ、大名という奴には、恨みがある」
「…………」
「わしの親爺は、府中の伝馬人足じゃったが、わしが餓鬼の頃、西国のある大名行列にやとわれた時、手洟をかんだところを、それが運わるく殿様の駕籠にひっかかって、手討ちにされた。阿呆らしい最期よのう。……お前様も、島津様に、怨みがあるのかな？」
「べつに、怨みはない。ただ、素浪人一人の力で、大大名の行列を、どれだけ、かきみだすことができるか、それをためしてみようとして居る」
「ほう……、これは、面白いのう。つまり、島津の殿様の首を狙うのじゃなくて、一丁へこましてくれよう、というわけじゃな」

「そういうことだ」

「やんなされ。わしは、よろこんで、手伝って進ぜるわい」

猟師は、わが意を得た、という笑顔をつくってみせた。

その日――。

薩摩藩島津家の行列は、吉原宿の本陣長谷川八郎兵衛で、休息していた。

当主島津斉興(なりおき)は、愛妾由羅(あいしょうゆら)の点前(てまえ)で、一服し、

「いくど往復しても、江戸から鹿児島は、遠いのう」

と、云っていた。

江戸、鹿児島間は、四百十一里、三十余日の行程である。まことに、うんざりする程、長い。

参覲(さんきん)交代は、三年に一回の制度であり、近国の大名にとっても、これはずいぶん苦しい課賦であった。まして、七十七万八百石の太守が、その格式をもって、上下数千人の行列を往来させる費用は、莫大なものであった。

大名にとって、参覲交代は、絶対の制度であった。元禄中に、熊本の細川侯が、庶母看病のために唯一回、免除されただけで、いまだ、これを休んだ例はきかない。

ところが、斉興は、十余年前、藩の財政をたてなおすに当り、幕府に対して、十年間参覲交代御免を願い出て、却下されている。

斉興の伯母は、十一代将軍家斉の御台所であったので、そのわがままも通る、と思っていたのである。

「このたび、帰国あそばしますれば、五年が程は、ご出府ではあるまい、と調所笑左衛門が申して居りましたが……」

由羅は、訊ねた。

「そのつもりだ。公儀の威光もおとろえたものだ。数年前までは、考えられなんだが……、もはや、法度をふりかざして、大名をおさえつけることなど、叶わぬ。遠慮は無用と相成ったわ」

斉興は、笑った。

斉興は、公儀に反抗するのを趣味とするようなところがあった。

そのために、ある年、帰国の挨拶をして登城して、将軍家斉から、かなりのいやみをあびせられた。

憤然となった斉興は、帰国したならば、二度と出府はせぬぞ、と家臣一同へ申し渡し、

「その方ら、江戸も今宵限りゆえ、うちそろって、吉原あたりで遊んで参れ」

と、遊興費を呉れたことだった。

次の朝、供揃いして、江戸を出発し、昏れがた神奈川に着いたところへ——。

三田屋敷の留守居が、狂気のごとく馬をとばして、追いついて来て、

「一大事にございます。西ノ丸、ご炎上にございます」

と、急報した。

斉興は、それをきくと、

「たわけ！　炎上という言葉は、京都の御所か、伊勢神宮の火事の時にのみ使うのだ。江戸城ならば、ただ、焼けた、と申せ、焼けた、と——」

と、叱りつけた。

留守居は、全く焼けてしまいました。と云いなおし、

「つきましては、御見舞いに、何か御献上に相成らねばならぬかと存じます」

とすすめた。

とたんに、また斉興の呶声が、留守居の頭上へ、落ちた。

「こやつ！　献上とは、なにごとか！　献上とは、天子にさし上げる時以外に、用いてはならぬ言葉ではないか。向後、左様な言葉遣いをいたすと、致し様があるぞ！」

矯々たる気骨を、売物にしているきらいがないでもなかったが、斉興は、三百諸侯の中では、相当な度胸の持主であった。

げんに――。

江戸屋敷から連れ出してはならぬ愛妾の由羅を、平然として、駕籠にかくして、箱根を越えて来ている。

斉興の夫人は、因州鳥取の城主池田相模守治道の女であったが、文政七年に享年三十三で逝去していた。その斉興は、正室を迎えようとせず、専ら側妾の由羅に、寵を誇らせていた。

由羅は、三田四国町の大工棟梁の娘であったが、美貌と才気にめぐまれ、薩摩屋敷に奉公に上ると間もなく、斉興の目にとまって、側妾になったが、文化十四年十月、庶子晋之進（のちの久光）を産んで、御部屋様になった。

夫人が逝去するや、由羅は、宛然正室に直ったような権勢をつかんだのである。

晋之進は、いまは、大隅国重富郷一万千四百八十石島津出雲忠公の養子になって、又次郎忠教と名のっていた。

由羅は、わが子に会いたいばかりに、斉興にせがんで、こっそり行列に加わっているのであっ

た。

数年前までは、このように、禁を犯して、正室同様の女性を、国許に連れかえるなど、夢にも考えられなかったことである。

将軍家斉が、老いて、政事を放棄している現状では、あらゆるところで、法度は破れている模様であった。

「申し上げます。調所笑左衛門殿、ご機嫌うかがいに参上つかまつりました」

近習の告げる声が、障子ごしに、ひびいた。

「笑左は、箱根の隠居所ではなかったのか？」

「はい。お上に申し上げたき儀これある由にて、急ぎ、あとを追って参った、と申されて……」

「通せ」

斉興は、許可しておいて、由羅に、

「そちを連れている、と知ると、笑左め、いい顔をせぬぞ」

と、云った。

由羅は、微笑をかえして、平然として動こうともしなかった。

調所笑左衛門は、座敷に入って来て、由羅がそこにいるのをみとめて、ちょっと怪訝な面持になったが、べつに何も云わず、斉興に挨拶してから、箱根の隠居所に密送されて来た南蛮物の品目を箇条書きにした書類をさし出した。

斉興は、一覧してから、

「また、儲(もう)けるの」
と、笑った。
「江戸の町人どもは、大坂の商人どもとちがい、珍奇好みの上に、見栄坊のため、金の出し様が甘うございますゆえ、これだけで、ざっと十七万両が程は、藩庫に入るかと存じます」
「大名が、商人対手に金儲けをいたすのは、その方が、はじめてじゃな。ははは……。ところで、その方の立案の計画は、進んで居るか？」
斉興は、問うた。
西国十三藩の大名が連盟し謀議した件に就いてであった。
一言で云えば、島津家が主謀者となって、十三藩に、密輸をさせることであった。
これに加わった大名衆は、いずれも、極度の窮迫状態にある。
岸和田の岡部、福知山の朽木などの貧乏ぶりは、既述したが、一味に加わった田原藩も、長州藩も阿波藩も、例外なく、大坂商人に、三年さき五年さきに穫(と)れるであろう米を抵当に入れて借金しているのであった。
薩摩藩が、財政をたてなおしたのは、表向きは黒砂糖専売であることになっているが、実は、唐物(からもの)南蛮物の密貿易であることは、大名衆のあいだには、すでに、公然の秘密になっている。
調所笑左衛門は、領内の開鉱を名目に幕府から五年賦で五万両を借りうけ、そのうちの一万両で、一応鉱山事業に手をつけ、あとの四万両を資本として、琉球から福建(ふっけん)へかけての沿岸貿易を開始し、これで得た利益を、さらに手広く、ヨーロッパ各国との貿易に投じたのである。
この事実を知っている窮迫の各藩が、調所笑左衛門の誘いに、易々として乗ったのは、当然であろう。

「各藩それぞれ、進めかたに差は生じて居りまするが、来年の末頃には、五十艘の交易船が、日本を出帆して居ることと存じられます」

「うむ。重畳じゃの。わしは、栄翁様（祖父重豪のこと）が、西洋かぶれをして、藩庫を空にされたために、至極の外国嫌いになって、異国調伏の祈禱などをいたしたが、思えば、わしの攘夷が、その方にとっては、かくれ蓑になったようじゃな」

「御意――」

笑左衛門は、頷いてから、

「さて、このたびの企てに対して、本丸御老中の妨害があることは、予想されましたところ。すでに、水野越州邸より放たれた間者は、われらが国許はじめ、十三藩の城下に、数人ずつ、入り込んで居る気配にございます」

「べつに、あわてるにも及ぶまい。ひそんだところを、いぶり出して、捕えればよかろう」

「もとより、各城代家老へ、密使を趨らせましたゆえ、詮議の網をくまなく張るものと存じます。……ただ、手前の懸念は、この帰国の道中にありまする」

「なんだな、それは？」

「水野越州には、武部仙十郎と申す側用人が付いて居りますが、これが、容易ならぬしたたか者にございます。この武部仙十郎が飼い馴らした浪人者が一人、目下、東海道を歩いて居ります」

「ふむ。そやつが、どうした？」

笑左衛門は、こたえて、隼人隠密党の手練者が、一団となって闘っても、ついに仕止めることができずにいることを語った。

「眠狂四郎と仮名を用いるこの浪人者め、必ず、この行列に向って、不埒の行為を仕掛けて参る

懸念がございます。万が一の場合も考えられまするゆえ、お上には、何卒、お乗物を空にあそばしますよう、願い上げまする」

乗物を空にする、というのは、行列から離れてしまう、という意味であった。すなわち、その乗物に替玉を乗せて、行列をさきに行かせ、自分自身は、ごく少人数の供で忍び道中をして行くことであった。

「素浪人いっぴきを、それほど、おそれねばならぬのか？」

「只者に非ざること、この笑左衛門がしかと見とどけて居りまする」

斉興は、もし他の者が忠告したのであれば、呶鳴りつけて、しりぞけたに相違ない。余人ではなく調所笑左衛門のたのみであった。

「その方が、申すのであれば……」

由羅が、口をはさんだ。

「お乗物には、わたくしが、替りまする」

肯かざるを得なかった。

と――その時。

ぶすっ、と障子を突き破って、一矢が飛来して、斉興の膝の前へ――畳へななめに、刺さった。

「…………」

「…………」

斉興と笑左衛門は、顔を見合せた。

笑左衛門は、膝行して、その矢を抜いた。矢には、結び文がついていた。

それを抜いてみた笑左衛門は、

「噂をすれば、影にございます」

と、云って、さし出した。

『一筆啓上。法度やぶりもほどほどになさるべく候。命あっての物種に御座候得ば、ここより、江戸へひきかえされるが、身の安全かと存じられ候。生命永ければ蓬萊をも見ることに御座候間、何卒ご要心の程を。

薩州公まいる

眠狂四郎謹呈

付けたり。若し、いやじゃと仰せの上は、興津辺にて、ご機嫌伺いに参上つかまつるべく、その時、見ぐるしき狼狽などおみせあるまじく、お覚悟の上にて、行列をお進めなさるべく候』

狂四郎が、矢文を、吉原宿の本陣へ、射込んでおいて、薩埵峠を越えて、興津へひきかえして来たのは、陽ざしがかげって来た頃あいであった。

奥津川に架けられた仮橋を渡りかけて、急に神経が働いた。

——来たな。

後方に、追手の気配があるのを、察知したのである。

早飛脚が一人、うしろから、とっとと駆けて来ているだけであった。

それが、追手であることを、狂四郎は、振り向きもせずに、さとったのである。この男独特のカンと云えた。

橋板を踏んで、中程まで渡った時、早飛脚は、七八歩の距離まで、近づいていた。

狂四郎の足が停った。
早飛脚の足も、ぴたりと停った。
狂四郎は、ゆっくりと向きなおった。
冷たく冴えた眼眸（まなざし）を送って、
「お主には、大磯で会ったな」
と、云いあてた。
早飛脚は、こたえるかわりに、笠をぬいだ。
まぎれもなく——それは、調所笑左衛門の護衛役をつとめる琉球忍者十兵衛であった。
狂四郎は、薄ら笑うと、
「あの折は、野鴫の羽根に、毒粉をかくして、飛び立つとたんに撒（ま）く、という趣向を見せてもらったが、こんどは、どんな趣向を見せてくれるのだ？」
と、問うた。
十兵衛は、いんぎんに、一礼した。
次の瞬間——。
十兵衛の手から、笠が放たれた。
笠は、凄じい迅（はや）さで廻転しつつ、その廻転によって白い烟（けむり）を噴き乍ら、狂四郎の頭上を翔（か）けすぎた。
一瞬、毒烟（どくえん）は、狂四郎の痩身（そうしん）を包んだ。
それが、散った時、狂四郎は、目蓋を閉じ、無想正宗を地摺りに構えていた。
それから、ゆっくりと、十兵衛に向って、足を運びはじめた。

毒烟が散るまでの時間、呼吸を止めていることは、この男にとって、さまでの至難ではなかった。

十兵衛は、すばやく、懐中から、手裏剣を七八本とり出すと、投げはじめた。

それらは、決して、狂四郎の五体の同じところを襲いはしなかった。

顔を、咽喉を、胸を、胴を、脚を狙って、そこへ電光の迅さで飛び来ったが、これを搏ち落す狂四郎の業も、正確無比であった。

悉くの手裏剣を、足もとへ落した時、狂四郎は、目蓋をひらいた。

十兵衛は、背負うた細長い荷から、直刀の剣を抜きとるや、ぴたっと青眼に構えた。

「趣向の手は尽きたか」

狂四郎は、冷然として、十兵衛の構えを見据えた。

「参る！」

十兵衛は、しずかに、その一言を吐いた。

「尋常の勝負では、おれには、勝てぬ。……戻って、調所笑左衛門に、このたびも仕損じた、と正直に報告することだ。……出直せ」

狂四郎は、云いすてると、無想正宗を腰に納めて、踵をまわした。

「お待ち下され」

十兵衛は、呼びとめた。

狂四郎は、立ちどまらず、振りかえりもしなかった。

次の刹那――。

けものが疾駆するに似た速力で、音もなく、十兵衛は、狂四郎の背後を襲った。

狂四郎が、向き直るのと、十兵衛の胸から、血飛沫が噴水のごとくほとばしるのが、殆ど同時であった。

欄干に、どさりと凭りかかった十兵衛は、じっと狂四郎を視た。

苦痛の色もなく、その双眸が、ふしぎに澄んで、少年のもののように、無心なつぶらなものであるのを、狂四郎は、みとめた。

「誰が、死ね、と云った！」

狂四郎は、腹立たしくあびせた。

十兵衛は、しかし、もはや、こたえる力はなく、徐々にうなだれると、そのまま、朽木のように橋板の上へ仆れた。

十兵衛の最後のまなざしは、狂四郎の脳裡に、永く残って、消えぬことになった。

江尻行列

薩摩藩千七百七十六名の長蛇の行列は、由井を過ぎて、薩埵峠を越えようとしていた。

藩主の乗物の中には、斉興に替って、側妾、由羅が坐っていた。

由羅は、女性としては、相当な度胸の持主であったが、もとより、死ぬことが怕くない道理がなかった。

斉興に替ったのは、理由があった。ただの忠義だてではなかったのである。

由羅は、眠狂四郎を知っていた。いや、眠狂四郎と名乗る浪人者に、まだ一度も出会ったこと

はない。しかし、由羅は、その浪人者が、自分の思い出の中に在る一人の青年の後身に相違ない、という確信があった。
眠狂四郎は、噂によれば、ころび伴天連の血を継いで、彫ふかい異相を持ち、その暗い出生の故か、気象が氷のように冷たく、薄気味わるい妖気を、その痩身にただよわせている、という。
由羅が知っている青年も、あきらかに、異邦人を親に持つ容貌であったし、陰惨なまでに暗い翳を眉目に刷いて、言辞にも挙措にも、尋常でない孤独のきびしさを罩めていたのである。
乗物の中で、目蓋を閉じている由羅は、十年前の記憶の中に自分を置いていた。
由羅は、三田四国町の、藤左衛門という大工の棟梁の娘であった。
藤左衛門は、利殖の道に長けていて、わが家の裏手の貧乏寺の境内を借り受けて、二十軒棟の裏店を、三つも建てていた。
その店子の一人に、松平主馬と名のる青年がいた。
当時、徳川家の原姓である「松平」を称するのは、大名旗本にとって、この上もない栄誉であった。松平氏の姓と将軍の偏諱を与えられる大名旗本は限られていたことであったし、代替りに所領安堵状を受け誓詞を捧げる時に、同時に、松平と称することも許されるのであった。
身分のひくい、小禄の士などが、松平氏の姓を名のることなど、あり得ないことであった。まして、尾羽打ち枯らした裏店住いの素浪人者が、自らそう称するのは、狂気沙汰といわざるを得なかった。
その青年は、しかし、平然として、「松平主馬」と名のった。
由羅の父藤左衛門は、胆っ玉の太い男であったが、流石に、その姓名をきいて、首をひねり、貸すのをためらったくらいであった。

「松平、ってえのは、ちとはれがましゅうござんすまいか。ご公儀をはばからぬところは、あっぱれだが、ご遠慮なすった方が、無難じゃござんせんかい」

そう忠告すると、青年は、無表情で、

「おれは、どうでもよいのだ。竹平でも、梅平でも——」

と、こたえたことだった。

由羅は、その時、唐紙の隙間から覗き見ていたが、十八歳の娘心に、生れてはじめて、にわかなときめきを起したのであった。

由羅は、青年が、もしかしたならば、どこか大きな大名の御落胤ではなかろうか、と想像したのであった。御落胤とみなしてもおかしくない品格をそなえていたからである。

青年が裏店に入って、間もなく、「あの浪人者には、どうも毛唐の血がまじっているらしい」というささやきが交されたが、由羅はそれをきいても、生れてはじめて起した思慕の情になんの動揺も起さなかった。

いや、かえって、好奇心を加えて、自分から進んで近づくのを、ためらわなかった。

勝気な由羅は、周囲の目やかげ口など一向に意に介さず、三日を明けずに、何かに事寄せ、口実をつくって、その家の格子戸を開けた。

青年は、由羅の親切をこばみもしないかわりに、礼も述べようとはしなかった。

青年は、家に在る時は、書物をひらいているか、さもなければ、仰臥して、じっと天井を仰いでいるか、どちらかであった。そして、ひとたび、ふらりと家を出て行くと、それなり、幾日も帰っては来なかった。

五日あまり、格子戸がかたく閉じられた日がつづいて、いい加減苛立たされた由羅が、朝はや

く、行ってみると、青年は、血まみれ姿で端座し、差料を抜きはなって、じっと刀身に見入りつつ、ひくく、歌のようなものを口にしていた。

かりごもの、乱れにみだれ
朝夕に、いくさだちして
城をとり、いのちを奪い
人ごころ、あらびゆきては
君をすら、傾くる世に
おみのこの、秘めたるものを
召しうばう、事しげければ
ともすれば、その罪ならで
身をさえに、失うことを
聞くからに、思いわずらい
もののふの、魂ともたのむ
そのたから、たからの太刀を
……………

それが、無想正宗と称するその太刀を、青年に与えた渠が恩師——名も知れぬ老剣客の自作の歌であることなど、知るべくもない由羅は、一瞬、あまりの悽愴な姿に、

汗だらけ

──この人、きちがいになった！
と、戦慄したことだった。
青年は、由羅が大いそぎで手当をしてくれるにまかせて、黙然としていた。
浅傷ではあったが、十数箇所もあり、手当を終った時、由羅は、春さきにも拘らず、汗だらけになっていた。
「いったい、何人を対手にして喧嘩なすったんですか？」
そう問うと、青年は、遠い眼眸を宙に置いて、
「十一人いた。そのうち、七人を斬り仆した。一太刀ずつで……よく斬れた」
と、こたえていた。
それから一月ばかり経ったある宵のことであった。
伊勢詣でをして来た兄の小藤次が、土産に持ちかえった灘の生一本を、こっそりくすねて、由羅がやって来てみると、留守ではあったが、戸が開いていた。
由羅は、すぐに、思いついて、掃除をはじめたが、あやまって、書棚の上に積んであった帙を落した。
すると、帙の中から、妙なものが、ころげ出た。
踏絵というものに智識のなかった由羅は、青銅の板に彫られてある磔柱に掛けられた裸形の人間像へ、
──なんだろ？
と、怪訝の視線を落した。
その時、いつの間にか、青年が、戻って、由羅のうしろに立っていた。

由羅は、ふりかえって、
「これ、なに？」
と、さし出した。
「これか――」
青年は、受けとると、暗い薄ら笑いを口辺に刷いて、
「おれの父親だ」
と、こたえた。
「うそ！」
「嘘ではない。おれの父親に相違ない」
青年は、それを、畳へ落すや、ゆっくりと、片足で踏みつけた。
「だから、こうして、くれる！」
そう吐きすてる青年に、由羅は、はじめて、恐怖をおぼえた。
すると、青年は、怯（おび）えた娘へ、鋭い眼眸を向け、
「おれが、怕いのか？」
「い、いいえ。怕くなんか……」
かぶりを振りつつも、由羅は、全身のおののきを抑えることができなかった。
不意に――。
青年の双手（もろて）がのばされ、由羅の肩を摑（つか）んだ。
由羅は、悲鳴こそあげなかったが、殺される、という恐怖で、必死に抵抗しようとした。
「さわぐな！　おれのものにするのだ。お前は、それをのぞんでいた筈だぞ！」

青年は、あびせておいて、由羅を、押し倒した。

由羅は、下肢のあいだに、男の膝が割り込んで来た時、抵抗を止めた。

硬直した強い力が、体内に加えられた瞬間、由羅は、思わず、夢中で男の肩を噛んだ。

しかし、青年は、呻きももらさず、娘の体内へ、その力を一杯に塡めた。

……十年前の、その宵の出来事が、乗物にゆられる由羅の、閉じた目蓋の裏に、まざまざとよみがえっている。

「松平主馬」は、その翌日、何処かへ姿を消したのであったが、もし、そのまま、裏店にとどまっていたならば、由羅は、薩摩屋敷に女中奉公に上りはしなかったであろう。したがって、藩主の側妾になることもなかったのである。

由羅が、斉興に替って、藩主の乗物に坐ったのは、おそらく松平主馬というあの青年の後身に相違ない眠狂四郎と、めぐり会ってみたい期待のためであった。

「うめえことを云やがるぜ、駿河っぽうは――」

大声で云い乍ら、金八が、階段をのぼって来た。

江尻の町はずれの旅籠に、金八は、理江の供をして、ここ数日滞在していた。

金八は、夕方になるとそわそわと落ちつかなくなり、理江が牀に就いた時刻、こっそり抜け出して行くのが、毎夜であった。

理江は、金八が、清水港までひとっ走りして、博奕に夢中になって来ることに気がついたが、知らぬふりをしていた。

のである。

駿河地方は、関八州とともに、博徒が最も多かった。博徒の親分は、大名の領地では生れない

たとえ一万石、三万石の小大名でも、博徒の跋扈（ばっこ）を禁ずるぐらいの兵力は、備えている。幕府の天領や旗本の知行所、あるいは大名の飛び地などは、代官所や陣屋のような小規模な造営物があるだけで、そこに詰めている少数の役人は、せいぜいコソ泥を捕えるのが、関の山であった。したがって、役人は、取締り方を、地下（じげ）の顔役にまかせている。顔役は、一種の社会政策上、必要な機関と看做（みな）される場合があったのである。

博徒が勢力を張っている地方といえば、関八州であった。関八州には、天領、旗本の知行所、大名の飛び地が多かったからである。甲州にいたっては、甲府勤番の配下に置かれ、大名の領地はひとつもなかった。したがって、名の通った博徒は、すべて、上州・甲州・野州あたりから現れていた。

東海道は、いたるところ大名の城地であったが、ただひとつ、府中だけは、公儀直轄であったので、博徒が、糞蝿（くそばえ）のように発生する余地があった。

そして、その中心地が、清水港であった。

名の通った親分がいない代りに、そこには、小粒の博徒が、ひしめき合っている。それが、かえって、賭場（とば）を活気のある面白いものにしているのであった。

金八が、毎晩、じっとしていられないのは、当然である。

今朝も、朝がえりの金八であった。

「蛙女房（かわず）、ってご存じですかい、お嬢さん？」

金八は、四度目の朝がえりの照れくささをかくすために、坐るといきなり、云った。

「存じませぬが……」

「女房が、亭主より年上を、云うんでさ。どうして、年上女房をそう云うか、お判りですかい？」

「いいえ。なぜですか？」

「蛙は、目玉が上にくっついていますぜ。……つまり、女が上、ってしゃれでさ」

「まあ！」

理江は、微笑した。

「上州でも、空っ風と嬶天下が名物だが、この駿河でも、どうやら、小うるせえ年上女房が、はばをきかせてやがるんでさ。昨夜、こういう唄をきかされましたぜ。ひとつ、おきかせいたしやすか」

滅入り勝ちな理江を笑わせるために、金八は、豆しぼりで向い鉢巻きして、尻からげをすると、身ぶりおかしく踊り乍ら、うたい出した。

蒲原ざんばら、髪ふりみだし
愚痴を由井出しゃ、やりきれねえ
思いあまって、三下り半を
薩埵峠の古女房、ヨイヨイ
一人になった気楽さは
寝てみつ興津、さっても
蚊帳のひろさかな、と来た
こんど迎える女房は

江尻出っ尻、こちゃ、かまやせぬ
府中で抱きつく、鞠子がよい
コラサ

理江が、そのおかしさに、怺えきれずに笑い出した時、
「金八！」
街道から、呼ぶ者があった。
金八がその声をききまちがえる筈はなかった。
「おっ！　きた、こりゃ、みなみろ、東西東西！　お嬢さん、眠狂四郎だあっ！」
金八は、出窓から首をつき出して、
「先生っ！　待ったの段じゃねえや！」
と、呶鳴った。
眠狂四郎は、冷たい表情で、
「降りて来い、金八。用がある」
「上って来てもらいましょうぜ。お嬢さんは、待ちこがれて、恋し恋しで目を泣きつぶし、物のあいろも水鳥の、くがにさまようかなしさは、朝顔日記の宿屋の段だあ」
「急ぐぞ、金八！　降りろ！」
狂四郎の鋭い語気に、金八は、首を縮めた。
「しかし、お嬢さんが……」
「すてておけ！」

金八は、しかたなく、旅籠をとび出した。

「なんです、先生？」

「お前が、この江尻に逗留しているからには、せっせと賭場へかよって居ろう」

「へえ――そりゃ、まあ……」

「お前の舌さき三寸で、博徒を集めろ。二百人が三百人でもかまわぬ。日当は、おれが、代官所で調達してやる」

「どうなさるんで？」

「薩摩七十七万石の行列と、喧嘩をするのだ」

薩摩藩の行列は、興津宿を通り越し、露払いは、やがて、清見関にさしかかった。

その時、行手に、異様な光景を見出した。

恰度、東海道を道中する者は必ず登る古刹清見寺の石段下のあたりから、磯辺側に、喧嘩仕度をした博徒が、数百人ともかぞえられる頭数を、二歩間隔に、竝べて、地べたにかしこまっているのであった。のみならず、三度笠を膝の前へ、仰向けて置いているのも、なにやら、こんたんありげで、薄気味わるかった。

直ちに、徒士目付が、後方へ奔った。

しかし、喧嘩仕度をした博徒の群が、路傍に居並んでいたところで、これを追い散らさなければならぬ理由はなかった。

旅家老の若年寄・碇山将曹は、急報を受けて、ちょっと思案していたが、

「博徒をおそれて、行列を引いたとあっては、天下の物嗤いになろう」

と、云い、乗物に近づき、

「お部屋――。行き先に、いささかの騒擾が起る懸念がござるが、如何なされる？」

と、訊ねた。

由羅のおちついた返辞は、

「進みまする。ただ、清見寺に詣でる時間だけ、行列を停めて欲しい」

それだった。

碇山将曹は、清見寺に詣でるのは中止して、そのまま、進まれては、と忠告したが、由羅は、肯かなかった。由羅は、斉輿に替って、乗物に入る時、将曹に、清見寺に詣でさせて欲しい、とたのんでおいたのである。

眠狂四郎が放って来た矢文には、「興津辺でご機嫌伺いに参上つかまつるべく」と記してあったのである。

由羅としては、乗物を出て、おのが姿を、眠狂四郎に見せる機会があるとすれば、それは、清見寺へ詣でた時であった。

やがて――。

乗物は、清見寺門前へ到着した。

由羅が乗物を出ると、二十余人の士が、すばやくその周囲に隙間なく垣をつくった。

渠らは、一騎当千の隼人隠密党の面々であった。渠らに守護された由羅の身は、鉄の壁にかこまれたほどの安全性があるようであった。

由羅は、磯辺沿いに竝んだ博徒の列には、一瞥をすることなく、しずかに、足をすすめた。

清見寺は、二百三十余の急勾配の石段の上に、在った。
石段は、三十余段の上で、いったん切れて、くの字に曲っていた。
由羅は、その曲った地点まで登り、手水舎に近づいた。
手水は、太い竹の懸樋から、刳りぬかれた自然石に、すこしずつ、落ちていた。その懸樋は、まっすぐに、二百余の石段わきを通されていた。
由羅が、手水舎に入ると、護衛の党士らは、その四方に立った。
由羅は、置石の上にあがって、柄杓を把った。
その瞬間であった。
ひゅっ、と鋭い音が、そこに起った。
党士らは、一斉に、向きなおって、由羅を視た。
由羅は、柄杓を握ったまま、呪文でもかけられたように、動かぬものとなっていた。
党士らは、一本の矢が由羅の衣裳の前をつらぬき、股間を刺しているのをみとめた。
その矢が、懸樋の中を飛来したことは、矢筈に、天蚕様の糸がむすびつけられ、それが、懸樋の中へ、びいんと張られているので、明らかであった。そのために、由羅のからだは、動けぬものとなったのである。
「おのれっ！」
「眠狂四郎かっ！」
党士群のうち、数名が、駆けあがろうとした——その石段の上から、
「動くなっ！　お主ら動けば、お部屋殿の身に怪我があるぞ！」
高らかにきめつける声音が、ひびいた。

「射手は、薩埵山で三十年、けものを獲って来た猟師だ。ただの腕前とはちがうぞ。第一矢は、狙いを一寸下げたゆえ、お部屋殿の股ぐらに傷はついて居らぬ筈だ。しかし、第二矢は、一寸上を狙って居る。薩州侯が愛でて居られる女人の大切なところが、こんどは、まともに、ぐさと、つらぬかれることに相成る。それが役立たずになっては、薩州侯も、お困りであろう」

眠狂四郎は、そう云いつつ、ゆっくりと、石段を降りて来た。

まことに、意表を衝いた襲撃であった。

懸樋の中を、矢を射通されては、いかに由羅の周囲を守っていても、徒労というほかはなかった。あらかじめ、その股間を的にするように、手水石の前の置石の高さを、あんばいしておいたのである。

狂四郎は、手水舎の前に、降り立った。

由羅は、その異相を瞶めて、

──おお！　やはり！

と、胸の裡で、叫んだ。

「松平主馬」は、その彫のふかい眉目から、若さを消したかわりに、人の世の表裏を知りつくした深みを一筋の皺の中にも湛えていた。

由羅は、なつかしさを、眼眸から、かくしきれずに、まばたきもせず、食い入るように、瞶めた。

しかし、その視線を受ける狂四郎の双眸は、島津斉興の側妾由羅を視る冷たい光しか湛えてはいなかった。

「矢文で予告申し上げた通り、勝負は、こちらの勝のようです。取引をして頂こう」

「………」

「行列の荷の中には、抜荷買いでしこたま儲けた金子がある筈。これを、おすそわけにあずかることになる。街道でごらんになったであろう。いやしいやからが、路傍にならんで、笠を前に置いて、ご報謝を待って居り申す。このあたりは、博徒が横行し、そのために、かたぎの者どもはかなりの迷惑を蒙って居るゆえ、せめて、博徒どもに、慈善など施させてやりたく存ずる。いかがであろうか、この取引は？」

そう申し出る狂四郎に対して、由羅は、ふっと、口もとをほころばせて、頷いてみせたことだった。

府中崩れ

桶鮨の味も吉田の立場茶屋

江尻から一里ばかり行った小吉田村の立場に、「桶すし」という看板をかかげた茶屋があった。道中有数の美味として、評判であった。

ふらりと入った眠狂四郎も、その評判を耳にしていたからであろう。

珍しく、この男が、酒も飲まずに、小形の桶の中を、空にして、小座敷の片隅に、手枕で午睡の夢をむさぼっていた。

夢の中に、由羅のすがたが、現れていた。

狂四郎が、生れてはじめて抱いた女が、由羅であった。二十一歳で、すでに、世間の明るいも

の、華やかなものに背を向けていた「松平主馬」も、まだ女は知らなかった。

由羅は、女を知るには、恰好の対手であった。「松平主馬」は、その機会を、ねらっていた、と云える。そして、その機会をとらえて、由羅を抱いた。由羅もまた、男に抱かれるのは、はじめてのようであった。

翌日、狂四郎は、由羅に一言の言葉ものこさずに、その裏店を去ったのであったが、それは、由羅に溺れそうになるおそれをおぼえたゆえであった。

めぐり会う日があろうなどとは、考えたこともなく、十年の歳月がうちすぎていた。

それが、ゆくりなくも、薩摩の太守島津斉興の側妾となった由羅と、奇妙な再会を持たねばならなくなったのである。

狂四郎は、この男独特の冷酷なやりかたで、由羅に、女性として堪えがたい侮辱を加えたが、その態度には、敵側に立った者の非情な気色しか示さなかった。

いま——。

午睡の夢の中で、はじめて、由羅に対して、狂四郎は、「松平主馬」に還っていた。

由羅は、うっとりと、身を凭りかけて来ている。

——おれは、この女によって、女を知り、この女は、おれによって、男を知った。

その感慨の中で、狂四郎は、豊満な女体の重さを感じていた。

「もし!……眠狂四郎の旦那——」

呼びかけられて、狂四郎は、浅い夢を破られた。

薄目をひらいて、落間を視た。

恰幅のいい、頬に凄い刀傷のある中年の博徒が、そこに立っていた。うしろに、四五人乾分を

したがえている。

「お初にお目にかかりやす。あっしは、草なぎの為蔵という者でござんす。お見知り置きの程をねげえやす」

かなり大風（おおふう）な態度で、挨拶してから、

「おうかがいしてえことがござんすが、場所をあらためさせて頂きやしょうか」

と、申し出た。

「ここでよかろう」

狂四郎は、起き上ると、

「なんだ、用件は？」

「旦那は、昨日、薩摩のお行列を、どうやって、脅しなすったか知らねえが、三千両もの大金をまきあげなすったそうでござんすね」

「うむ。たしかに、合力したが、それがどうした？」

「旦那は、その時、どういうつもりか知らねえが、府中中の渡世人を集めて、喧嘩仕度をさせ、街道へならばせておいて、一人一人へ、お行列から金をくれさせたのだそうでござんすね？」

三千両の金子は、たしかに、由羅自身が、路傍に竝んだ四百人の博徒の膝の前の三度笠へ、手ずから、投げ込みつつ、歩いたのであった。

「それが、どうしたな？」

「ふざけたまねをなさったものだが、それァまあ、それでいいとして、旦那は、渡世人を集める時、どうして、この草なぎの為蔵を、除きなすったのか、それが、うかがいとうござんす」

博徒を四百人も集めたのは、金八の働きであった。清水港に、くじら屋新七という親分が居り、

その男に、金八が話をつけたのであった。

「お前は、土地の評判がわるい博徒ではないのか？」

「あっしの悪口は、あっしの耳までは、とどいちゃ居りませんぜ」

「百や二百の金を扱うのではない。評判のわるい博徒を除いたのは、あたりまえであろう」

「それが、気に食わねえ。清水のくじら屋新七が、采配をまかせられた、ときいたんだが、新七は、むかしをただしゃ、網元だったあっしの親爺の店の網曳きだった野郎でさ。いわば、あっしは、新七にとっちゃ、親方筋だ。その新七に、仲間からはずされた、となりゃ、これァ、男一匹の面目が立たねえ。そうじゃござんせんかい、旦那――？」

睨みつけて来る為蔵を、冷やかに視かえした狂四郎は、

「それで――？」

と、さきを促した。

「顔に泥をぬられて、黙ってひっ込んでいちゃ、日本中の貸元衆の物嗤いの種になって、こん後、渡世も張れねえ。そこで、あっしは、新七になぐり込みをかける肚をきめたんでさ。ついては、これは、無職仲間の喧嘩だから、旦那のかかわり知らねえことに、して頂きてえんでさ。きけば、旦那は、滅法腕の立つ御仁だそうだが、新七の助っ人になんぞなられては、こっちは迷惑いたしやす」

「為蔵、と申したな」

「へい」

「お前は、島津家から合力した金の半分も、くじら屋が貰うのではあるまいか、と下種のかんぐりをしたのではないのか」

「………」
「そこで、なぐり込みをかけて、その金を、横奪りしてやろう、というこんたんを起した。そうではないのか？」
「見そこなってもらうめえ。金なんざ、欲しかねえ！」
「と喚いても、その顔には、欲しい、と書いてあるぞ」

狂四郎は、無想正宗を把って、立ち上ると、
「あいにくだった、為蔵。金は、くじら屋新七にも、一文も呉れはせぬ。集めた博徒には、ちゃんと日当を払ってある。……金は、いったん、久能山の東照宮へ納める。それから、東照宮の宮司の手から、当地方の貧しい人々へ施されることになろう」
「嘘じゃござんすまいね？」
「おのが料簡が小ずるいからとて、他人の心がすべて自身と同じだ、と思うな」
「旦那！　あっしの顔は、どうなるんでござんす？」
「それは、おのれ自身で、思案するがいい。おれの知ったことではあるまい」
「旦那！」
為蔵のまなこが光った。
「東照宮へはこび込まれるまでは、その金は、誰のものでもねえわけじゃござんせんかい？」
「語るに落ちたようだな、為蔵親分」
狂四郎は、薄ら笑った。

「これだけは、約束できる。金を久能山へはこぶ役目は、くじら屋だ」
意味ありげに云いすてて、狂四郎は、おもてへ出た。
その日の昏れがた——。
狂四郎は、府中の「二丁目」に入っていた。東海道の道中唯一の公許の遊廓が、ここであった。
街道の宿場には、必ず飯盛がいて、事実上春をひさいでいたが、公儀の許可を受けた営業ではなかった。
ただ、府中の「二丁目」だけが、なぜか、公許であった。しかし、公許であるために、かえって、さびれたものになっているのも、皮肉であった。酒肴代も安く、枕代も定められていて、貧しい人足や折助も、気軽に登楼できるために、散財する富有な商人たちが足を遠のかせたからであった。
暖簾をあげて、中に入った狂四郎は、籬に、いわゆる横見世にならんだ女郎たちを眺めた。
いずれも、ひどい面相の持主ばかりであった。鼻べちゃ、下り目、反っ歯、猪首、でぶ……。べちゃべちゃと喋りたてていて、狂四郎が土間に立っても、「おいでなんし」と一人が義理に口にしただけで、他はそ知らぬふりであった。
遣手に案内された部屋も、狭くてうすぎたなかった。
「はたものの娘がいたら、呼んでもらおう」
狂四郎は、遣手にたのんだ。
「一人、いるにはいますが、陰気で、口下手で、おまけに、床入りが馴れて居りませんですがな」
遣手は、心づけの多さにびっくりして、正直に云った。

「かまわぬ」

狂四郎は、牀を避けて、床柱に凭りかかると、腕を組んだ。

やがて、一人の女郎が入って来たが、遣手が云った通り、いかにも陰気で、狭いうすぎたない部屋を一層暗いものにした。器量はさほどでもなかったが、その陰気さは、救いがたい印象を与える。

はたものという存在は、府中では、普通の土着民と区別されていた。

府中の西北に聳えている丘陵を賤機山と呼ぶ。その東に、麻機という地名がある。賤機山から安倍川を越えて西へ行くと、服織、または羽鳥、服部という村がある。この地の郷社の祭神は、馬鳴大明神である。

すなわち。

養蚕と機織の工人として、そのむかし、秦人が多く渡来して、ここに、住みついた証左であった。

馬鳴というのは、中央亜細亜の地名である。蚕の原産地であるパミール高原にある。

蚕業は、そこから、支那、印度、波斯につたわり、更に朝鮮を経て、日本に伝わって来た。

支那でも印度でも、養蚕、機織に従事する人々は、原産地を神仏化し、偶像をつくり出した。馬鳴菩薩、馬鳴大明神がそれである。

これを信仰するのは、秦人の末裔である。

そして、かれらは、地下人たちと、いつまでも、別人種の区別をされ、はたものとして、さげすまれていた。

狂四郎は、女郎に、生い育った村を問い、服織村ときくと、

「いくら働いても、くらしが楽にならぬのは、なぜか、わかるか？」
と、訊ねた。
女郎は、かぶりを振った。
「はたものたちは、一方ではさげすまれ、一方では不平も云わずに、安い賃金で昼夜身を粉にして働きつづけて居る。府中の商人たちに、思うさまに、食いものにされて居るのだ。……一家中が、働きつづけても、なおくらしが苦しく、お前のように、娘を女郎に売らねばならぬ」
「………」
「はたものの村に、もし、千両の金が与えられたならば、府中の商人どもの苛酷の要求をはねのけて、蚕を飼うことも、機を織ることも、一年でも二年でも、休んでしまうことができよう」
「………？」
女郎は、そんな夢のような話が、実際に起る筈もない、と怪訝に、狂四郎を見返した。
狂四郎は、しかし、その話をさらにつづけようとはしなかった。
牀の中で、抱き乍ら、はたものがいかに極貧のくらしをしているか、重い口を割らせるのが、登楼の目的であった。

次の朝――。
その部屋に、狂四郎をたずねて来たのは、清水の貸元くじら屋新七であった。
くじら屋新七は、草なぎの為蔵とちがい、痩せこけて、貧相な男であった。
しかし、物腰は、商人のように、いんぎんで、鄭重であった。

「お預りした三千両を、一日もはやく、お返しいたしませんと、どうも、おちつきませぬ」
新七は、そう云って、狂四郎の返辞を待った。
狂四郎は、それにはすぐ返辞をせず、
「金八が申して居ったが、お主の先祖は、甲州浪人衆だそうだな？」
と、訊ねた。
「系図がのこっているわけではございませんが、じじばばの話では、そうらしゅうございます」
「お主のからだに、甲州浪人衆の血が流れているとすれば、ただの博徒としておわりたくない、という気概を持っているのは、領ける」
「いえ、てまえのようないやしい人間には、べつに、世間のお役に立とうというような、大それた志など、ある筈もございませぬ。ただ、旦那お一人で、島津様のお行列をむこうにまわす、と、うかがって、これは面白い、と存じたまででございます」
「お主のおかげで、みごとに、事は成功した。お主の先祖は、おそらく、物師であったであろう」
物師とは、軍師の別名であった。
徳川家康は、武田勝頼が天目山に滅びたのち、主家を喪った甲州浪人衆を、召抱えたいと、念願した。
武田家に仕えた武士たちは、気骨があり、武勇の者が多かったのである。武田家の軍法軍略の訓練は鳴りひびいて居り、いくさの駈引、隊伍の編制から、輜重、兵站の事にいたるまで心得たさむらいが、かぞえきれぬほど、いたのである。
次つぎに領土をひろげている家康にとって、それらの武士が欲しかった。しかし、甲州浪人は、

武田家が、織田・徳川の聯合軍によって滅された上からには、徳川家に仕えることをいさぎよしとしなかった。

そこで、家康は、婚姻政略によって、甲州浪人衆を招聘したいと考え、家臣らに対して、

「無妻の者は、相成るべく甲州浪人の嫁を貰え」

と、命じた、という。

井伊万千代丸は、家康の児小姓から立身した大名であったが、その赤備えは、甲州浪人を召抱えるために採用した手段であった。赤備えというのは、具足も太刀の鞘も槍も馬の鞍も、すべて赤塗りにしたことである。これは、武田家に、赤備え隊というのがあり、井伊万千代丸は、それをそっくり模倣したのである。それに惹かれて、甲州浪人衆は、井伊家にぞくぞくと随身した。つまり、甲州浪人衆は、おのが持ちものの赤い具足や太刀を携えて、井伊家に仕えればよかった次第である。おかげで、井伊万千代丸は、一躍して、天下無敵の強い軍勢を率いる幸運にめぐまれたのであった。

家康は、甲州浪人衆を多く召抱えることに成功すると、この中から、智略に秀れた者をえらんで、大将の左右に置かしめた。これを「物師」と称んだ。

戦闘の駈引は、必ず汐時があり、その機を外せば、勝つべきいくさも負になる。両軍相接して火花を散らしている間に、本陣から、いつ、関の声をあげてよいか、いつ、後備の兵をくり出すべきか、いつ、伏兵を起たして横槍を入れるべきか――その汐時を決定するのが、最も肝要のこととなる。その決定を為すのが、「物師」であった。

家康が、秀吉を向うにまわして、小牧に布陣し、長久手の役に、池田・森の諸将を討ち取って、凱歌を挙げ得たのも、甲州浪人衆を、おのが部下に擁していたおかげであった。家康は、長久手

の戦いでは、武田流得意の車掛けの戦法を用いて、豊臣勢を摧いている。
大将に采配を振らす「物師」こそ、戦場に於ける要であった、といえる。
「お主が、甲州浪人衆の末裔ならば、ひとつ、物師の働きをみせて欲しい、と思う」
狂四郎は、云った。
「なんでございましょう?」
「草なぎの為蔵、という男が居るな?」
「はい」
「この府中で、お主と縄張りを二つに分けているようだな?」
「いえ。為蔵の方が、てまえよりも、乾分を三倍も多く持って居りますし、縄張りもひろうございます」
新七は、こたえた。
ただ、新七には、駿府城代北条安房守に、妹を妾としてさし出している利があり、人間としても出来ていて、土地の人望があったのである。
「為蔵は、お主をねたんで居る。機会をうかがって、お主になぐり込みをかけて、わたしが合力した金を横奪りする肚を持って居る」
「眠様!　そういう心配がございますゆえ、てまえは、一日もはやく、お返しいたしたいのでございます」
「金は、はたものの村へ撒く」
「え?!」
新七は、愕然となった。

「その前に、お主に、物師の働きをみせてもらうことになる」

「為蔵と喧嘩をせよ、と申されますのか？」

「お主が、為蔵と争っている隙に、金を、はたものの村へはこぶ。これが、いちばん目立たぬやりかただ」

はたものへ、三千両の大金をほどこした、と世間に知れたならば、これは、ただごとではなくなる。いかなる騒擾（そうじょう）が起るか知れなかった。

ひそかに、ほどこさなければならなかった。狂四郎の苦心は、そこにあった。

秦人種の末裔というだけで、まるで、非人同様の扱いかたをされている惨めな人々を救おうとしているのは、この男の血の半分が、異邦からもたらされているからであろうか。

狂四郎は、さらに二日流連（いっづけ）て、午（ひる）ごろ、出て行くべく、酒くさい身を起した。その時、階段を駆けあがって来たのは、若紫という源氏名をつけられたはたものの女郎であった。

必死の表情で、息をはずませ乍ら、狂四郎の袖をつかんだ。

「さっきから、浪人者が三四人、おもてに、います。……今朝がた、お前様が、ここにいるのを、きいていました。待ち伏せているんです。出て行ったら、殺されます！」

狂四郎は、化粧をおとしたその素顔を美しいものに、視た。

——ただの民家に生れていたならば、いい女房になったであろうものを……。

「お前は、わたしが出て行ったら、家へ帰るしたくをするがいい」

「え？」
「わたしが、身請けして、証文は破っておいた。村へ帰るがいい」
若紫は、息をのみ、大きく双眸をひらいて、まばたきもせずに、狂四郎を瞶めていたが、みるみるうちに、泪を湧きあがらせた。
狂四郎は、階段をゆっくりと降りた。
若紫の方は、しばらく、茫然と自失のていであったが、はっとわれにかえると、悲鳴をあげて、狂四郎を追いかけて来て、しがみついた。
狂ったように慟哭する若紫を、横見世にならんだ女郎たちが、あっけにとられて、見まもった。
狂四郎は、若紫を突きはなすと、遣手に、三保の松原への道をたずねた。
おもてへ出ると、その道を歩き出した。
うしろから、三人の浪人者が、尾行して来はじめた。
追いかけて、とび出して来ようとした若紫が、ひきとめられ乍ら、泣き叫んでいる声を、後方にきき乍ら、狂四郎は、まっすぐに眼眸を前方に置いて、一度もふりかえらなかった。
やがて――。
東北に、すっきりと、青空を截りぬいてそびえる富嶽をのぞむ三保の松原の砂地に立った狂四郎は、おもむろに、見わたして、
「血汐を流すには、あまりに景色が美しすぎる」
と、呟いた。
それから、三間あまりへだてて立った三人の浪人者へ、視線を投げた。
「お主ら、草なぎの為蔵の用心棒か？」

返辞の代りに、浪人者たちは、一斉にひらいて、抜刀した。

「お主らにとっても、わたしにとっても、この松原は、決闘の場所としては、ふさわしくない。自然がつくった美の中で、人間の闘争本能が、あまりにあさましいものに思われる。そうは、思わぬか？」

三人は、無言で、じりじりと、迫って来た。

狂四郎は、なおふところ手のままであった。

「お主らに、この感傷が、判らぬ筈はなかろう。ただ、博徒からもらった二両か三両のはした金の方が、お主らにとっては、この景色よりも、大切なだけだ。ばからしいことだが、やむを得ぬ。……お主らにとって、気の毒だったのは、対手がすこしばかり強すぎたことだ。……死んでから、三人で、仲よく、ゆっくりと、この景色を愛でるがいい」

鞠子柴屋寺

久能山は、海岸に屹立した孤絶の山である。

永禄年間までは、補陀落山久能寺という古刹があったが、武田信玄が駿府を侵した時、この山を要害の地と看て、寺院を近くの北矢部に移して、山上に城砦を築き、久能城と称した。

天正十年、武田氏亡び、やがて、久能城は徳川家康のものとなった。

家康は、風光絶佳のこの山を愛し、老いるにつれて、この頂上を、おのが永遠に眠る墓所とさだめた。

元和二年四月十七日、駿府城で家康は逝ったが、遺言によって、屍骸は当夜のうちに、久能山に移された。

久能城は廃止され、紀州頼宣が総奉行となって、ここに、東照宮が造営された。

爾来、紀州宰相はじめ、東海道往復の諸大名は、その都度、この山に参拝するならわしになっている。

例大祭の四月十七日には、駿河代官をかしらにして、駿河町民が挙げて、進献の儀をとり行う。

その大祭をあと数日後に、ひかえた日の午前のことであった。

三挺の駕籠を擁した総勢二十人の、紋服に身なりをあらためた博徒の一団が、しずしずと、麓の鳥居をくぐって来た。

平常、東照宮へ参拝を許されるのは、公家・武家以外は、何かを奉納する者に限られる。

紋服に威儀を正さねばならぬし、勿論、無腰にならねばならぬ。博徒の一団は、鳥居脇の代官所の辻番所に、長脇差を預けた。

屹立した山につけられた道は、急勾配の斜面を九十九折になって居り、諸大名の寄進によって、すべて、石段であった。その石段は、千数百をかぞえる。

博徒の一団は、ゆっくりと、その石段をのぼって行った。

のぼるにつれて、眼下に駿河湾が、大きく弧を描き、東に伊豆半島、はるかな西方に御前崎が、春がすみの中に浮きあがって来る。

しかし、博徒たちは、その美しい景色へ視線をめぐらす者は一人もなく、私語も交さず、黙々として、石段を踏んであがって行った。

ほぼなかばまで、のぼった時であった。

そこに、およそ数十人の人足が、石段の清掃のためにちらばっていたが、駕籠の一行が達するや、一斉に立った。

笠の下の面相は、いずれも険しかった。のみならず、それぞれが摑んでいる竹杖は、あきらかに仕込みであった。

人足の一人が、一行の前へ、立ちはだかると、

「清水の貸元――。挨拶は抜きにするぜ。おらァ、草なぎの為蔵の代理の裾野の銀八という者だ」

と、云った。

くじら屋新七は、二番目の駕籠の脇にいたが、先頭へ出ると、

「草なぎの為蔵ともあろう者が、富士の裾野から、おめえのような駆け出しを、わざわざ呼んで、なんの真似をさせようというのだ？」

「知れたことよ。その駕籠を、もう一度、麓へもどしてもらいてえ。そして、とっくりと、談合してえ、という寸法だ」

「この駕籠の中のものは、東照宮への寄進物だ」

「だからよう、その寄進物が、渡世仲間としては少々気に食わねえから、もう一度、麓へもどしてもらいてえ、と云っているんだ。……おい、清水の貸元、これ以上は、問答は無用だぜ！」

「いやだ、と云ったら、どうする？」

裾野の銀八は、凄んだ。

「今年の秋は、海が荒れて、山崩れがありそうだからよう、ころばぬさきの杖で、道普請をしているんだ。それには、人柱が要らあな」

神域を血でけがす、となれば、それだけの口実を設けておかねばならぬ。人柱とは、いかにも、

草なぎの為蔵の思いつきそうな口実だ、とくじら屋新七は、苦笑した。
「どうした、おいっ！　駕籠をもどすか、もどさねえか――さっさと、返答しろい」
「こっちが無腰だからといって、そう威丈高に脅しかけて来てもらうまい。わしも、くじら屋新七だ。せっかく、ここまで、かついで来たものを、脅かされて、すごすごと、麓へもどした、となりゃ、こん後、貸元の座にゃ坐っていられねえ。……麓へもどしたけりゃ、おめえらが、勝手にそうしたらいいだろう。こっちは、明日にでも、喧嘩仕度をして、返してもらいに行こう」
「話がわかるぜ、清水の貸元。じゃ、遠慮なく、もらって行くことにすらあ」
裾野の銀八は、にやりとして、乾分たちに、頤をしゃくった。
くじら屋一家の者が、道わきへさがると、三挺の駕籠の中は、一斉にあらためられた。
白無垢に緋袴の、十四五歳の少女が、それぞれ乗っていて、膝の前に、千両箱を置いていた。
裾野の銀八は、駕籠をそのまま乾分たちにかつがせて、先に降りて行かせると、
「清水の貸元。念のために云っとくぜ。草なぎの為蔵は、八十人の乾分のほかに、百人ばかり、腕っぷしの強いのをそろえて、おめえさんのやって来るのを待っているぜ」
と、云いすてた。
くじら屋新七は、黙って見送っていたが、駕籠が恰度真下へ降りた時、
「裾野の――、おめえさんは、草なぎの為蔵にたのまれ甲斐のある男じゃなさそうだな」
と、あざけりの声をあびせた。
「なんだと？」
「駕籠の中には、たしかに、千両箱があった。しかし、千両箱の中に、千両の金子が、はたして、入っているかどうか、そこまで、ちゃんとたしかめるのが、代理のつとめじゃねえのか」

「野郎っ！　小判の代りに石ころでも詰めた、と云やがるのか！」

銀八は、かっとなると、乾分たちに、千両箱の蓋をぶち開けろ、と喚いた。

「おっと、裾野の——。千両箱の中には、化物がとじこめてあるのかも知れねえぜ。……その娘たちに、蓋を開けさせるがいい」

新七が、云うと、銀八は、娘たちに、

「早くしやがれ！」とせきたてた。

三箇の千両箱は、路上へ置かれた。

三人の娘は、その前に蹲って、錠前に鍵をさし入れた。娘たちの手は全く同時に、動作した。

銀八と、その乾分たちは、固唾をのんで、見戍っている。

蓋は、一斉に、開かれた。

とたんに——。

三箱の中から、生きもののように、黒いものが白い烟の尾を曳いて、空中へ翔けあがったかとみるや、ぱあっと、大輪の火の花を開いた。

同じ時刻——。

眠狂四郎は、深編笠に顔をかくして、相変らずのふところ手で、安倍川の畔を、賤機山へ向って、道をひろっていた。

誰が為ぞ賤機山の長き日に
声のあや織る春の鶯

古歌にうたわれたのどかな景色は、いまもなお、ここにある。

左手に長くつづく竹藪(たけやぶ)から、ようやく啼(な)き馴れた声が、きこえて来ていた。

菜畑は黄一色に彩られ、山麓(さんろく)はかげろうが燃え、牛の声は、遠く、物倦(ものう)げである。

狂四郎より百歩ばかり前方を、牛は、ぽくぽくと、歩いて行く。

麦藁(むぎわら)の大束を背負わされ、年老いた猫背の百姓に、曳かれている。

その麦藁の下に、千両箱が三箱、かくされている、などと、誰が気がつこう。

道は、やがて、川畔から、竹藪の中へ、曲った。

牛が通りすぎたあとに、不意に、ひとつの人影が、藪蔭から出現して、狂四郎に向い立った。

狂四郎は、編笠の窓から、すかし視て、

——この男、どういうのだ？

と、訝(いぶか)った。

それは、都田水心であった。

都田水心は、狂四郎を、二度罠(わな)にかけて、二度とも失敗している。

いずれ、また、罠をしかけて来るであろう、と狂四郎は考えてはいた。この男のやりかたは、おのれ自身、蔭にかくれていて、警戒心を起させぬような者をえらんで、手先に使うのである。

むしろ、狂四郎は、その巧妙な計略ぶりに興味さえおぼえていた。

水心自身、並の腕前ではない筈であったが、決して、まっ向から、闘いを挑んでは来ずに、ひどく念の入った罠を設けて、そこへ、こちらを誘い込んで来るのであった。

二度とも罠を遁(のが)れ得たのは、こちらの僥倖(ぎょうこう)であったといえる。水心自身の思案に、疎漏も齟齬(そご)もなかったのである。

——こんどは、どういう罠をしかけて来るか？
この道中の愉しみのひとつになっていた、と云えなくもないのである。
ところが……。
こんどは、罠をしかけずに、自身で、のこのこと、目の前へ、姿を現して来た。
「眠狂四郎殿、結構な日和(ひより)でござる」
水心は、挨拶した。
「今日は、手先を使わぬのか？」
「お手前に対して、いかなる策を弄(ろう)しても、無駄と知り申した」
「それで——？」
「このたびは、お手前と、堂々と、雌雄を決する強敵を、ともない申した。お手前もすでにご存じの箱根臥竜軒でござる」
「臥竜軒とおれを、闘わせようというのか」
「拒絶はなさるまい。お手前は、箱根山中で、臥竜軒と立ち合い、勝負止めをされて居り申す。なお、臥竜軒は、三島神社の奉納試合に、小田原の多志見祐見の女須磨(むすめすま)におくれをとったのは、お手前の策略に乗ったためであったと、すでに承知つかまつる」
「お主が、教えたか」
狂四郎は、冷やかに薄ら笑った。
水心は、平然として、
「これより、臥竜軒の待つところへ、案内つかまつる」
「どこに居る？」

「鞠子吐月峰の柴屋寺でござる」
柴屋寺は、連歌師柴屋軒宗長の隠遁したところとして、名がある。
「勝負止めにしたからといって、再度立ち合わねばならぬ義理はない」
狂四郎は、云った。
すると、水心は、急に、顔面に険しい色を刷いた。
「眠殿。身共は、お手前が、これより、何を為そうとして、服織村へ行こうとされているか、すでに承知つかまつる。……今朝がた、清水の博徒くじら屋新七が、薩摩行列より施された三千両を、久能山へ奉納する、と称して、行列をしたてて、登って行き申したが、あの駕籠の中の千両箱には、金子は入って居り申さぬ。千両箱は、別にかくされて、服織村へはこばれようとして居り申す。例えば、いま通りすぎて行った牛の背に、麦藁の下などに、ひそかに積まれているのではあるまいか、と想像されるのでござる。……いかがでござろうか、眠狂四郎殿。この推測、当って居るのではござるまいか」
「…………」
「いや、この都田水心も、兵法者のはしくれ、お手前が為さろうとしている慈善に対して、ふかく敬意を払いこそすれ、毛頭邪魔だてていたそうなどという邪念など持ち申さぬ。……身共がお手前の生命をつけ狙って居るのも、報酬の多きに目晦んだためであることは、かくしはつかまつらぬ。人一倍、欲は深い方でござる。但し、身共は、おのが智慧なり力なりを充分に発揮し、それによって、金子をもとめることはいたすが、濡れ手で粟の窃み取りなどは、恥と心得て居り申すゆえ、三千両によだれをたらして居る次第ではござらぬ。この儀、はっきりとお断り申上げる。……しかし、お手前が、臥竜軒との立ち合いを拒絶される上は、やむを得申さぬ。お手前が、はたも

のどもに、三千両をばらまいたと、ふれまわり、ひと騒動を起してごらんに入れ申す。それでも、よろしゅうござるか？」

「調べたものだな」

「執念深さに於ては、いささか自負つかまつる」

水心は、うそぶいた。

狂四郎は、ちょっと沈黙していたが、

「吐月峰へ案内してもらおう」

と、云った。

水心は、にやっとして、頭を下げた。

「身共も、剣を学んで、二十年に相成る者でござる。臥竜軒とお手前の勝負、おそらく、身共が生涯に眺める試合の中で、最大のものでござろう」

駿府から一里半——鞠子宿の西口六丁ばかり行くと、泉谷。

ここに天柱山柴屋軒寺がある。禅刹である。

これを建てた柴屋軒宗長は、文安五年、駿州島田邑に生れた。幼くして叡智を知られて、国主今川上総介義忠に愛され、左右に近侍すること三年、十六歳の春に上洛して、宗祇法師に会い、連歌を学んで、たちまち、異数の秀才ぶりを発揮した。

十八歳で薙髪し、醍醐普捨院で灌頂をとげ、紫野に一休和尚の禅扉をたたいて、修業にはげんだ。

永正九年、今川氏親の招請によって、この泉谷に卜居し、庵をむすび、みずから柴屋軒と号し、

風流をもっぱらとして、常に一節切を簫いて、老いを迎えた。
はじめて、この庵に住んだ時の句に、
　山桜おもふ色添ふかすみかな
という一句がある。
享禄五年春、八十五歳で、ここに寂している。
風雅を識る者は、東海道を旅する際、必ず、道を枉げて、ここに、古を慕う。
都田水心の案内で、山門をくぐった狂四郎は、宗長の英風を欽するために足をはこんで来たのではなく、血なまぐさい試合を行うためにやって来たおのれに、微かな自嘲をおぼえていた。
まさしく、閑居幽邃というのは、このような場所を指しているのであろう。
一樹ずつ吟味されたような枝ぶりの老松が境内をとりまき、心なしか、風の音も、濃かである。
松の梢の上に、西に天柱峰、東に吐月嶺がのぞいている。
庭前の風色は、これが、宗長の好みか、と偲ばせる清雅な趣きで、泉水が中心に湛えられていた。
七星池、と名づけられたその泉水のほとりに、狂四郎を待たせておいて、都田水心は、書院へ入って行った。
狂四郎は、深編笠を、かたわらの高麗塔へかけておいて、水面へ眼眸を落した。
大きな緋鯉が、ゆっくりと遊泳している。
その緋鯉の上へ、人影が投げられた。
石橋上へ出現した者へ、視線を挙げた狂四郎は、一瞬、
「………！」

息を呑んだ。
正気とは受けとれぬ異常な姿が、そこに在った。
一糸まとわぬ裸女を、おのが身に、ぴったりと吸いつかせていたのである。背負うているのならまだしも、胸へ胸を、腹へ腹を、ぴったりと密着させ、上肢を頸に巻きつかせ、下肢を大きく拡げさせて、おのが胴を挾ませているのであった。
裸女は、ぐったりと失神して、顔を肩にのせている。
白い豊かな肢体の上に、蓬髪を風にそよがせ、異常に頬骨と鼻梁を突出させた面貌がのぞいているのが、いよいよ不気味な印象であった。
右手に長剣を、左手に短剣を携げ、そのがに股の脚を、しかと石橋上にふまえて、じっと、狂四郎を見据えた。
「どういうのだ、それは？」
狂四郎は、問うた。
それに応えて、箱根臥竜軒は、肩をひとゆすりした。
裸女の首は、ぐらっとゆれて、がっくり仰向いた。それは、三島神社の奉納試合で、臥竜軒を撃ち据えた須磨にまぎれもなかった。
「そうか！」
狂四郎は、合点した。
その奉納試合に於て――。
須磨は、たかだかと高島田をゆいあげ、加賀友禅の花鳥もあでやかに、白砂に長く裾を引いた晴れ姿を、幔幕内へはこび入れたのであった。

箱根山中で、けもの対手にくらして来た臥竜軒は、当然、その美しさに、目を奪われた。

間合がきまるや、須磨は、突如、手妻のしかけで、衣裳を脱ぎすて、全裸になって、臥竜軒を襲ったのであった。

華やかな容姿に見惚れているところを、忽ち、若く美しい裸身を、明るい午の陽の下にさらされては、いかに臥竜軒といえども、痴呆のごとく、為すべもなく、その虚を衝かれて、敗北せざるを得なかったのである。

その無念が、奇人らしいひとつの決意をさせたのであった。

すなわち、裸女をおのが身にくくりつけつつ、欲情を起さぬ修練を為し、同時に、その不自由なかたちのままで、闘うこともできるように工夫したものであった。

「いざ——参ろう！」

臥竜軒は、云った。

狂四郎は、凝視するうちに、臥竜軒が、必ずしも、奇矯を衒っているのではない、とさとった。

裸女は、いわば、具足の代りになっているのだ。のみならず、この生きた具足には、狂四郎としては、白刃を加えるのを避けねばならない。

狂四郎が、絶対に須磨を斬らぬ、と知った上で、わざと、臥竜軒は、これを失神せしめて、具足代りにしたのである。

臥竜軒は、仙人化した兵法者であり、けものにまさる跳躍力を備えて居り、その構えには逆胴斬りの迅業をひそめていることは、すでに、この前、箱根山中での対峙に於て、狂四郎は、看てとっている。

臥竜軒は、裸女を身にくくりつけたために、その跳躍力と迅業をすて去っている。

た。
その代りに、須磨を斬れぬ狂四郎に対して、これ以上の身を守るに安全な具足はない、といえ
いわば、臥竜軒は、攻撃の業をすてた代りに、守勢の利をえらんだのである。
おのが首に来る狂四郎の剣をふせげば、それで足りるのであった。
石橋上に、地歩を占めたのは、そのためであった。
臥竜軒は、大小の白刃を、左右へ、翅（はね）のように大きく拡げて、
「眠狂四郎、いかに！」
と、叫んだ。
その薄よごれた小柄の身にまといついた須磨の裸身は——頸に巻いた腕、くびれた胴、開いた臀部（でんぶ）など、なめらかで白く美しいだけに、かえって、いやらしく、宛然（さながら）おのが意志でそうしているようにも思われる程、卑猥（ひわい）なものとなっていた。
白昼、人目にさらしてはならぬ姿態なのであった。
「…………」
狂四郎は、ゆっくりと、無想正宗を鞘走（さやばし）らせると、地摺りにとった。
そのまま……数秒かの静止を置いて、臥竜軒の眼光を、冷たく冴えた双眸に受けとめていたが、つと、一歩、踏み出した。
狂四郎の進むにつれて、臥竜軒の大小の剣は、しずかに、高く揚げられた。
間合が、きわまった。
そこで、また、さらに、数秒間かが、流れすぎた。
「たわけっ！」

懸声にかわるその一喝が、狂四郎の口から、ほとばしった。
同時に——。
凄じい血飛沫が、そこに、噴きあがった。
臥竜軒は、裸女もろとも、真二つに両断されて、泉水の中へ落ちた。
それを見とどける狂四郎の表情は、依然として非情の冷たさを湛えているばかりであった。
物蔭で固唾をのんでいた都田水心が、いそいで、近づいて来た。
「眠殿！　なぜ、須磨殿を斬ってしまわれたのでござる？」
詰るひびきを、その語気にこめた。
狂四郎は、そのかたわらを通り過ぎ乍ら、
「ねむり薬を嚥まされている間に、どのような屈辱を蒙ったか、それをあとで知って、おめおめと、生きているような娘かどうか、お主には、判らなかったか」
と、云いのこした。

岡部ごまの蠅

鞠子宿の旅籠「吐月屋」の結界の中で、算盤をはじいていた番頭は、
「出立いたすゆえ、提灯をたのむ」
と、声をかけられ、顔を擡げてみて、それが、昨日から泊っている浪人者であるのをみとめ、
「へえ？」

と、眉宇をひそめた。

旅賃は、二日分前払いしてもらってある。旅賃を前払いする客は、只者ではない、とみなせばよかった。急ぎの旅の凶状持ちなどは、必ず前払いをする。いずれ、この浪人者も、暗い翳を刷いた面貌を視ただけでも、曰くつきの人物と思っていたが、陽が落ちてから出立するとは、よほど変っている。

「これから、峠をお越えなさるので？」

「うむ」

番頭は、一泊分を払いもどさぬ代りに、新しい小田原提灯を函から出して提供することにした。

「峠は、物騒でございます。くれぐれも、ご要心なさいまし」

そう云い乍ら、番頭は、この浪人者の方がむしろ危険な人間に思えた。厄介払いという感がなくもない。

奇妙なことに、浪人者が出て行くとすぐに、もう一人、客が、出立を告げた。

これは、女芸人であった。

三味線をかかえた門付だが、宿場を流して歩く莫連にしては、きわだって姿の美しい女であった。貌だちはさして綺麗というのではなかったが、踊で謂う肢線の色っぽさは無類であった。

もともと、門付は、色里に育って芸を身につけた女でなければ、できないなりわいであった。三味線にのせて唄うのは、主として哀調をおびた二上り新内であったが、望まれれば、長唄、常磐津、清元、富本など、端物浄瑠璃までもきかせたのである。なまじの素人芸では、一文も包んではもらえなかった。

色里に育っただけあって、いでたちに工夫があった。まとっているのは木綿ものであったが、

半襟と袖口に緋縮緬をのぞかせ、菅の端折笠で顔をかくし、緋縮緬の紐を、あごでむすび、浅黄の手甲、といかにも色っぽい。

この門付に対しては、世間では、何かの事情でおちぶれた、という看かたをして、願人坊主や猿廻し、角兵衛獅子や葛西踊りなどとは、同じに扱わなかった。

雲助の輩も、門付だけは、たとえ夜道を一人辿っているのを見かけても、襲いかかって手ごめにするようなことはしなかった。不幸な、弱い者に対する同情心が、小悪党どもの間にもゆきわたっている――そういう秩序が、自然につくられていた時世であった。

「西へお行きなさるので？」

「あい――」

「お前さんは、江戸を流しておいでだったろうが、峠越えは、御府内の夜道を歩くのとは、ちがいますよ。東海道の中でも、この宇津谷が、いちばん、胡麻の蝿が多いところなんですがねえ」

番頭の忠告に、門付は、にこと微笑を返してみせた。

「あたしは、無宿者とか、胡麻の蝿とか――そんな連中に、唄ってきかせて、ほろりと泪を催させるのが、芸をみがくことになると思っているんですよ、番頭さん」

そう云いのこして、土間へ降りていた。

「お前さんが、そう云いなさるのなら、むりに止めはしませんが、姐さんのような佳い女が、峠を越えて行けば、どういうことになるか、思っただけで、身がすくむ」

鞠子宿の旅籠で、二十年も番頭をつとめていれば、宇津谷峠での旅人の災難話は、かぞえきれぬほど見聞きしている。

宇津谷峠は、上下わずか十六丁にすぎなかったが、道はすべてふかい樹林の中にあり、小悪党

が潜伏するには、恰好の場所であった。

　旅人たちは、鞠子宿か、岡部宿か、どちらかの旅籠で、相宿した者同士、数人ずつ連れになって、峠を越えるのを常にした。

　胡麻の蠅という小悪党は、東海道いたるところに出没していたが、殊に、この宇津谷峠が、一番の巣窟（そうくつ）になっていたのは、番頭の云った通りであった。

　胡麻の蠅は、「護摩の灰」から起っている。

　古来、高野山に参詣（さんけい）する者は、必ず、

「おん、あぼきゃあ、べいろしゃなあ、まかもだら、まにはんのま、じんばら、はら、ばりたや、うん」

　と、光明真言を唱え、弘法大師を念じて、寺僧から護摩を焚（た）いてもらい、一身の幸せを祈願したことであった。

　交通不便の時世であったので、あまりに遠方に在る者は、高野山参詣がおぼつかぬために、人の幸便に托（たく）して、その護摩の灰を少し分けてもらった。

　その灰施しがだんだん繁昌して、のちには、信者の希望によって、坊主が、東海道筋の賑（にぎ）やかな商業地に出張して、高野聖（ひじり）の護摩の灰を、旅人の護身用に、授けるようになった。そのうち、小ずるい世話人が、御祈禱（ごきとう）の御符紙に、むやみに、灰を包んで、往来の人々に売るようになった。

　やがては、無頼の小悪党どもが、そのまねをして、竈（かまど）の中の薪炭をかきあつめて、これを、無理やり押し売るようになったので、旅人たちは、ご利益を有難がる代りに、

「それ、護摩の灰が来居った」

　と、逃げまわることになった。

それが、のちには、灰も何も持たず、空手で、金をゆすり取る手輩が、道中うるさくつきまとうようになり、蝿のように追っても追ってもはなれぬところから、護摩の灰が、胡麻の蝿と云いかえられたのである。

「旦那――」

背後から声をかけられて、眠狂四郎は、頭をめぐらした。

うめ若菜まりこの宿のとろろ汁

芭蕉がうたった名物とろろ汁の茶屋が両側に七八軒、檐をならべた街道上であった。

「名物とろろ汁、御酒肴、いちぜんめし」と太文字に記した表障子も、灯が消されていて、人影はない。

空に、盈ちて来た月があって、提灯が不要なくらい明るいのであった。

あとを追って来た門付が、つくった笑顔の、歯の皓さも、見わけられるくらいであった。

「お供をさせて下さいましな、旦那」

「…………」

狂四郎は、黙って、提灯と月の明りの中に浮きあがった、すっきりとした仇姿を眺めやった。

それから、何も云わずに、足をはこび出した。

門付は、より添って、歩いて来る。

道は、しだいに爪先き上りとなった。田畑が切れて、さまで大きくはない松が、茂みを深くして来て、月光をさえぎった。

提灯の明りだけが、二人の足もとを照している。
「旦那、ふくろうの声って、いやですねえ」
門付が、長い沈黙をやぶって、そう云った。
凪が落ちていて、深い寂寞の夜気の中で、きこえるのは、その声だけだったのである。
「梟の声よりも、お前のからだから匂う香の方が、気になる」
狂四郎の返辞は、それだった。
「おいやですか?」
「以前、水野越前守邸の奥に忍び入った時、奥女中がただよわせていた」
「よくおぼえておいでございますね」
「おれは、その奥女中を犯した。のちに、妻にして居る。忘れる道理があるまい」
「…………」
「門付の分にすぎた香だな」
「おそれ入ります」
門付は、いささかも、わるびれずに、こたえた。
「お前は、おれを眠狂四郎と知って、跟いて来て居るのだろう」
「はい」
「なんの目的だ? 生命を狙っている者とも思えぬが……」
「申し上げれば、お嗤いになるだけでございます」
「では、きくまい。……できるようだな。おれが、抜きつけに、あびせれば、鳥のように飛んで遁げるだけの業をそなえて居ろう」

「女だてらに、こどもの頃から、武芸が好きでございましたゆえ——」
「無駄な修業をしたものだ」
「そうでございましょうか？」
「当人が、そう思って居らぬのなら、それでもよかろう」
「あたしは、多少の業を身につけたおかげで、こうして、貴方様のお供をすることもできる、とよろこんで居ります」
「おれが、胡麻の蝿よりもたちの悪い人間であることを承知の上でか？」
「どうする、と仰言います？」
「金品を奪う代りに、その操を奪うかも知れぬ。これまで、そうして来た男だ」
「あたしを手ごめにするひまなど、この峠では、ございますまい」
「おれが、わざと夜道をひろうのが、何のためであるか、知って居るようだな」
「どうして、わざわざ、ご自身で、好んで、おん身を危険にさらそうとなさいます？」
「白昼よりも、夜の方が、闇が味方してくれることを、これまでの経験が、おれに教えて呉れる」
山道は、さらに勾配が険しくなった。
重なり合った山を登るのであった。右に折れ、左に曲り、空にかかった月かげもそのたびに位置を転ずる。
谷を淙々として走る水の音が、しだいに、下方になった。
峠の頂上が近い、と感じた時、狂四郎は、門付に云った。
「はなれてもらおうか。修羅場が近づいたようだ」
宇津谷峠に、強敵が待ち伏せている、と報せてくれたのは、敵である筈の都田水心であった。

おのれ以外の者に、眠狂四郎を討ちとらせたくない、という気持が、時には、味方の側にまわらせるのであったろう。

とある曲り角に来て、狂四郎は、足を停めた。

馬のいななきを、行手にきいたのである。

鋭い直感は、この男独特のものであった。

——来るな！

と、さとると、心身が、それに応ずべく柔軟な変化を起した。しかし、べつに提灯をすてようともせず、そこを曲った。

同時に——。

馬蹄が高く鳴って、次の曲り角から、二騎、道幅いっぱいに、轡をならべて、出現した。

右側は、屛風の絶壁になり、左方は、樹林の梢がはるか下方に波うって光っている渓谷であった。

馬蹄にかけられるのをまぬかれようとすれば、その谷底めがけて身を躍らすよりほかにすべはない。

狂四郎は、そうする代りに、路上中央に佇立したまま、奔馬を迎えた。

二間の距離で、狂四郎の左手から、提灯が投げられた。

ただの投擲ではなく、凄じい気合とともに、唸りを生ずる迅さで飛ばされたのであった。

二頭の馬は、それに愕いて、棹立った。

刹那――狂四郎の五体は、疾風を起して、宙にはね上った前脚の下をくぐって、その馬腹下に馳せ入っていた。

骨を断つ刃唸りと、人馬の悲鳴と、そして一頭が谷底へ落ちる音と、一頭が路上へ横転する音が、そこに起った。

路上へ倒れた馬は、二三度はね起きようとこころみてから、そのまま、おとなしくあきらめて、動かなくなった。

乗り手は、三間あまり下方へ、ごろごろところがって、打ち身に呻き乍ら、のろのろと起き上った。

武士ではなかった。この峠に巣食う胡麻の蠅の一人と、看て取れた。

狂四郎は、二頭の馬の後脚一本ずつを、一閃裡に薙ぎ斬る迅業を発揮した無想正宗を、ゆっくりと鞘へ納めると、

「おい、糞蠅――。人間にたかるだけが能ではあるまい。その馬の息の根を止めて、楽にしてやる人情を持つがいい」

そう云いのこして、歩き出していた。

道は、さらに勾配が険しくなり、折れ曲りもせわしくなった。

峠の頂上に出ると、月の近さを思わせる明るさが、そこにひろがっていた。

狂四郎は、当然、そこに、待ち伏せの敵勢が湧き出るもの、と予想していたが、何事もなく、くろぐろとわだかまった腰掛茶屋の前を行き過ぎた。

下りの坂は、道幅が狭くなった。ここらあたりは、蔦の細道、と称ばれている。

幾曲りかして、左右が、のしかかるような高い絶壁になった切り通しにさしかかった時、狂四

郎は、べつに、なんの気配も察知したわけではなかったが、ふっと、危険な予感をおぼえた。
——罠が、あるようだ。
寂寞の夜気の奥にひそんだものがある。
しかし、立ち停るわけには行かなかった。通り過ぎて行くよりほかに、すべはない。
狂四郎は、疾駆を考えたが、思いなおして、同じ歩調で、その切り通しを降りかかった。
はたして——。
物凄い音響とともに、狂四郎の前面へ、空から落下した物があった。
はっ、と眸子をこらしてみると……。
夜目にも濛っと土煙りをあげて、路面に落ちたのは、太丸太を組んだ矢来であった。
次の瞬間——。
狂四郎の背後にも、同じ矢来が、落下して来た。
左右の絶壁が、刳られてあり、それにきっちりと嵌ったのである。高さは、一丈余もあろう。
忍び返しのように、鋭く削られた尖端が、生木の白さを月光に浮きあげた。
——考えたものだ！
矢来と絶壁の檻の中にとじこめられた狂四郎は、囚徒の狼狽をおぼえる代りに、この巧妙な仕掛けに感服した。
「眠狂四郎！」
絶壁上から、怒号が降って来た。
「袋の鼠だぞ！　刀をすてて、土下座しろい！　二十人が、鉄砲と矢で、てめえのからだを狙っているんだ！」

狂四郎は、仰いで、

「おのれらは、この峠の胡麻の蠅どもだな」

「そうよ。胡麻の蠅にも、孔明正成の軍略があらあ。どうだ！」

「たわけ！　おのれらをやとって、これをやらせた者は、どこに居る？」

狂四郎は、すでに、二騎に襲撃されて、その乗り手が胡麻の蠅であるのをみとめた時、敵は余人ではなく、都田水心であることを看破していた。

宇津谷峠には、強敵が待ち伏せして居る、と報せた都田水心自身が、その敵だったのである。

「都田の旦那は、岡部宿で、おれたちが、てめえをひっくくって、ひきたてて行くのを待っていらあ。……あばれやがったら、からだ中を芋刺しにしてもいい、と云われているんだ。野郎っ、愚図愚図しやがるねえ。刀をすてて、土下座しやがれ！」

咄嗟の間に、遁れる方法は全くない檻の中であった。

——このおれが、胡麻の蠅どもの捕虜になるのか！

狂四郎は、絶望の嗤いを、口辺にうかべた。

と——その時であった。

坂を駆け下って来る跫音が、ひびいた。

狂四郎が、ふりかえり、切り通しの端に出現した者が、門付であるのをみとめたとたん、その手から、三味線が、はなれて、高く、宙を飛んで来た。

三味線は、生きもののように、狂四郎の背後の矢来の上を越えるや、前方の矢来に、落下した。

一瞬——。

矢来は、轟然たる炸裂音とともに、丸太を四散させた。

その白煙の中を、狂四郎は、文字通り脱兎のごとく、奔り抜けた。

絶壁上の胡麻の蝿の徒党は、この思いがけぬ事態に、喚きたてつつ、鉄砲と矢を、狂四郎めがけて、放った。

矢の一本が、吸い込まれるように、速影を刺したようであったが、その場へころがすにはいたらなかった。

徒党は、密林を駆けて、街道上へとび出し、呶号を噴かせ乍ら、追った。

とある曲り角をまわったところで、胡麻の蝿どもは、足を釘づけにした。

幽鬼のごとく、そこに佇立して、待っている姿があったのである。

人命を奪うたびに眠狂四郎の心に生ずる業念は、この闘いに於ては、無用であった。対手は、庶民にきらわれた毛虫同様の破落戸どもであった。

無想正宗は、肉と骨と臓腑を断つ一颯一颯の迅業に、快い刃音をうたった。

明けがた、岡部の旅籠に入った狂四郎は、よごれた着流しのまま、牀へ倒れて、泥のごとくねむった。

のどかな馬子唄が、往還からひびいて来るのをきいて、目をさました時、陽ざしは、部屋に満ちていた。

こちらの目ざめるのを待っていたように、廊下から声がかかり、障子が開かれた。

入って来たのは、例の門付であった。

狂四郎は、起き上って、
「礼を云わねばならぬ」
と、頭を下げてから、
「おれの危急を救うために、連れになってくれた、と受けとれるが……」
と、見戍った。
門付は、微笑して、かぶりを振った。
「あたしは、貴方様の華々しい最期を、見とどけるために、お供をしたのでした」
「………？」
「お見通しの通り、あたしは、町者ではありませぬ。どこかの大名の屋敷にすまっていた者とお思い頂きます。その屋敷である騒動が起り、水野家の側頭役武部仙十郎殿の依頼で、貴方様が、その騒動のただ中に入って参られた。あたしは、貴方様が、十数人の手練者を対手にして、斬りあい、一人のこらず仆されるさまを、目撃いたしました。その時から、あたしは、貴方様に魅せられました」
「………」
「その直後、あたしは、屋敷から抜け出して、市井の女になりました。……自分に魅せられたならば、当然、会いに来る筈であろう、とお思いでありましょうが、あたしが魅せられたのは、剣を抜いた貴方様であり、ふところ手の貴方様ではなかったゆえ、わざと会おうとはしなかったのです」
「おれの最期を、期待したとは？」
「貴方様が、畳の上で、安らかな往生をする御仁とは思われませぬ。また、あたしにとって、貴

方様が、病み臥して、息をひきとるけしきなど、想像いたしただけでも、堪え難ぅ存じます。……貴方様には、やはり、剣を抜いた姿で、華々しい最期をとげて頂きたく、また、その運命にある御仁と存じて居りました。そして、それを、あたしは、自分の目で、しかと、見とどけておきたかったのです」

「…………」

「貴方様が、そのようにして、この世を終られたならば、あたしは、その時こそ、貴方様と、一心同体になることが、できるのです」

門付の相貌が、別人のごとく、妖しいまでに、異様な興奮の色をみなぎらせた。殊に、その眼眸の光は、尋常のものではなかった。

「一心同体とは？」

「ごらんに入れましょう」

門付は、すっと立って、うしろ向きになると、するすると、帯を解いた。

木綿の着物を肩からすべり落すと、燃えるような緋縮緬の長襦袢が浮きあがった。それを、襦袢もろとも、足もとへすてたとたん、狂四郎の視線は、その背中に、吸いつけられた。

肌理こまかな白い背中に、彫りあげられているのは――。

無想正宗を地摺りにとったこの眠狂四郎の像にまぎれもなかった。その面貌は、生けるがごとく、見事に、写されていた。

「あきれたものだ」

沈黙ののち、狂四郎は、吐きすてた。

門付は、頭をまわして、狂四郎へ、ぎらぎらと光る眸子を据えた。

「この世に、眠狂四郎という御仁は、二人と存在する必要はありますまい。現し身の方が消え去れば、この背の眠狂四郎殿は、完全に、あたし自身のものになります」

その言葉をきくと、狂四郎は、冷やかに笑った。

「おれの生命を狙う者が、もう一人増えたことだ。……狙ってもらおう」

藤枝本陣

「えっへん、おほん――時は、いつなんめり、元暦元年は、二月と七日――」

立川談亭は、張扇で、読み台を、ぴしゃっと、叩いて、反り身になった。

藤枝宿はずれの、俄か囲いの薄汚い小屋であった。

表に、幟が一本、

『軍談講釈・江戸初下り立川談亭』

と、赤く染めぬいてある。

板屋根の隙間からは、午後の陽ざしが、縞を織ってそそいでいたし、客が囲いの外でやった尿の臭気が流れ込んでいた。

土間には、三四十人、筵の上に、立膝をかかえたり、ふかし芋をかじったり、寝そべったりして、談亭のよくまわる舌を、見あげていた。

「……とうとう、とうと押し寄せたる軍勢は、と見てあれば、これぞ、さんざ苦労をした判官――源義経公その日のいでたちは、赤地錦の直垂に、桐の下金物打ったる唐糸おどしの鎧をまと

い、鍬形つきの星冑を一天高しと押し頂き、青貝打ったる三間柄、大身の槍をかいこんで、紅梅月毛の太く逞しきに、沃懸地の鞍置いて、燃え立つばかり紅の鞦置いて、乗ったりける」

「うめえぞ、千両！」

胴間声が、かけられ、つづいて、紙にひねった小銭が投げられた。

談亭は、それを、ひょいと受けとって、押し頂き、

「千両の声を張りあげて、貰った礼がたったの一文、そこが男の心意気、あアら有難や忝けなし——天運我をみそなわし、春の都を討って出で、平家を追って一ノ谷。義経公が率いる精鋭、実に嘘八百万、かぞえて実は三千騎、ひるがえしたる白旗は、京の御所にてぶん奪りし、千の女官のお腰巻——これを、上つ方では下裳と申し、下つ方ではゆもじと申しはべるな。またの名を、富士の白妙、と申してな、ぱっとひらけば、絶景かな絶景かな、原からつづく臍の下、裾野の樹林は、ぽちゃぽちゃと、いつ初花が、咲耶姫——。そのけしきは、と見てあれば、床へ出されてまだ寒そうにちぢむ風情の室の梅——散らしてこますに遠慮は無用。逆さにしてよい富士さえあれば、変る初夢苦にせまい。床に入れたら、こっちのもの、行儀作法もいつしか解けて、はずかしいほど胴顫い。じっとこらえて狂うな猪よ、此処が大事な花の山——花に嵐のたとえもござる、さよならだけが人生じゃ。処女と別れた十郎に、弟五郎がつき添うて、待つこと長し十八年、工藤祐経百年目——」

談亭は、羽織を脱ぎすて、ぴしゃっぴしゃっ、と読み台を、鳴らした。

その時、入口の暖簾をくぐって、黒の着流しの浪人姿が、ふらりと現れた。

一瞥して、談亭は、にやっとした。

眠狂四郎であった。

「……裾野の夜の討入りは、もう無我夢中に駿河湾、しっぽり濡れて、ついどくどくと、解けて流れる白雪は、あれ雨となり、雲となる」

談亭は、狂四郎にだけ判るように頷いてみせておいて、

「と申して居るうちに、総大将義経公におかせられては、はやくも、ひよどり越えの頂上に、到着せられ、小手をかざして、見てあれば、平家の軍勢には、遥かな海上へと遁れける。追い討つ道は、ただひとつ――この断崖の絶壁を、駆け下るよりほかなかるべし。きくならく、鹿が通れば、馬の通らぬためしなし、馬鹿と鋏は使いよう、無理が通れば道理がひっ込む。一丁、やってこまそと義経公、鞍をつけたる馬二疋をば、それ行けっ、とばかり、突き落せば、あわれや一疋は、中途で前脚を打って、まっさかさまにくたばったが、もう一疋はけなげにも、波打ち寄せる渚まで、タタタタッと駆け下り、ぶるんとたてがみ、うち振って、うまくやったといななきたりっ！　さて、源平、壇ノ浦の合戦は、また明日のお愉しみ――」

談亭が頭を下げると、場内は、「もっとやってくれえ」とか「義経が勝つにきまっていらア」とか、「壇ノ浦の合戦で、おらア、へんずりを覚えたでえ」とか、がやがや、さわいだ。

談亭は、さっさと、楽屋へ入って来て、狂四郎を待った。

狂四郎は、談亭の前に坐ると、

「上方へ招かれたのか、師匠？」

と、訊ねた。

「大坂の高津新地で、豆腐田楽が売れすぎて、浄瑠璃小屋や遠目鏡だけじゃ、能がねえと、立派な講釈場をつくったから、ひとつ、三国志を――とたのんで来やがったから、拙講は元来、贅六はきらいだが、季節はいいし、銭にはなるし……いや、それよりも、眠狂四郎ってえひねくれ浪

人が、東海道を道中しているると、ききやしてな、あとを慕うて、おお、そうじゃ」
「めぐり会ったところで、師匠の雑学をたのもうか」
「待ってました。はばかり乍ら、雪隠乍ら、この立川談亭に、和漢蘭ことひとつもない。なんです？」
「阿波の俚謡を教えてもらいたい。三味線に乗るのがいい」
「金比羅船ふね、じゃいけませんかね」
「陽気すぎるな。しんみりと、胸にしみ入るやつがいい」
「しんみり、とねえ。さアてと――」
談亭は、人差指で自分の頤を押しあげるようにして、考えはじめた。

それから、半刻あまり過ぎた頃あい――。
深編笠に顔をかくした狂四郎は、右手に扇子を持ち、三味線かかえた門付を、連れにして、藤枝宿の通りに入っていた。
おのが肖像を背中の彫物にした門付と連れになって、流しのまねをするとは、いかにもこの男らしい。
お登奈、というこの門付は、眠狂四郎が白刃の下で遂げる最期を、この目で見とどけたい、と願っている。
「おれの最期を目撃したければ、おれにしばらく跟いて来るが、よかろう」
狂四郎は、そう云って、岡部宿で、女に三味線を、自分には、深編笠と扇子を、買いもとめた

のであった。
どこから見ても、うらぶれた門付夫婦であった。
水守を過ぎて、藤枝の町なみをむこうにのぞむ地点まで来た時であった。
「あいや、そこのご浪士――」
腰掛茶屋から、声がかけられた。
風采のあがらぬ、小柄な、五十年配のどこかの藩士が、床几に就いていて、――
「たのみがござる。……お手前、失礼だが、俚謡は、いかがであろうかな？」
と、訊ねた。
「どこの俚謡をご所望でありましょうか？」
「阿波のな」
藩士は、阿波藩であった。
俄か流しに、俚謡はむりであった。
ことわろうとすると、藩士は、
「いや、身共がききたいのではない。今宵、藤枝の本陣の裏手に立って、唄ってもらいたい」
と、云った。
それをきいて、狂四郎の気がかわり、
「承知つかまつりました」
と、引き受けたのであった。
宿場、宿場には、小唄の師匠がいる筈であった。そこで仕入れることにして、藤枝宿へ来ると、偶然、粗末な小屋の前の幟が、立川談亭のいることを教えてくれたのであった。渡りに舟であっ

た。
阿波藩は、謀議十三藩のうちの一藩であった。
藩主斉昌の世子斉裕(なりひろ)が、はじめての国入りの道中と、すでに、狂四郎の耳に入っていた。
阿波の俚謡をきくのは、その藩主の世子であろうか?
——いや、そうではあるまい。
狂四郎は、否定した。
斉裕は、十二代斉昌の実子ではなく、将軍家斉の二十二番目の男子として、江戸城に生れた。
文政十年、幕命によって、阿波藩主の世子になり、江戸鍛冶(かじ)橋の藩邸に入っている。いまだ、十二歳にしかなって居らぬ。
阿波の国を知らぬ少年が、阿波の俚謡をききたがる筈があるまい。
すると、誰が、ききたがっているのか?
狂四郎の直感が、そこに、働いたのである。
藩士が、流しの大道芸の者をひろって、阿波の俚謡を唄わせようとする趣向は、あるいはただそれだけのことのように思われるが、その裏には何かがありそうだ、という狂四郎の直感力は、これまでの無数の経験から生れたものであるとすれば、狂四郎が足をはこんだ処に、必ず、騒動が起ることになる。

戌刻(いぬのこく)(午後八時)——。
狂四郎とお登奈は、丸に左まんじの蜂須賀(はちすか)家の家紋を浮かせた高張提灯と幔幕(まんまく)でかざられた本陣青嶋(あおしま)屋の前を、通りすぎ、高塀(たかべい)に沿うて、右へ折れ、狭い路を裏手へ抜けて行った。

本陣の構造は、それぞれの宿によってちがっている。この藤枝本陣は、いわゆる基本型であった。
普通の旅籠では禁止されている堂々たる門、玄関を構え、上段の間を設け、雨天にも馬荷の積みおろしに便利なように長く檐先をはり出し、長持、駕籠、荷駄の置場として、入口に、だだ広い板の間を造ってある。
部屋は、大広間を中心にして、およそ十数室あり、座敷構えの最も奥まった位置に、上段の間である書院が置かれてあった。
次の間を、控え入側、といい、畳敷き広縁をめぐらし、広い奥庭に面していた。
奥庭の一部には、非常時用の退口門が設けられてある。
本陣が基本型である以上、狂四郎のような男には、塀外を歩いただけで、内部構造は、手に把るように、瞭かであった。
勝手胁を過ぎ、土蔵、厩とつづく高い土壁に沿うて、裏手へ廻り、塀の上に鬱蒼と樹冠をひろげた樟の喬木を仰いだ狂四郎は、
「五百坪は、あろうな」
と、呟いた。
奥庭の広さのことであった。この広さでは、いかに声を張っても、書院まで、とどくかどうか、おぼつかぬ。
阿波藩定府目付・勝俣雅楽と名のった藩士は、戌刻すぎに、この樟の樹の下で、阿波の俚謡を唄ってくれるように、たのんだのである。
「この歌の礼は、もしかすれば、白刃かも知れぬ」

狂四郎は、お登奈に、云った。
お登奈は、黙って、三味線に音締めをくれて、撥をかまえた。

狂四郎は、唄い出した。

　花の十九のいでたちは、あかね木綿に茶の小袖、それに迷わぬ人はない
　いとし殿御が来る道は、黄金灯籠を八つさげて、それの光で来るがよい
　にくい殿御が来る道は、猿が酒盛りするがよい、それに見とれて来んがよい
　いとし殿御の水汲めば、桶も金桶、金柄杓、澄んだ清水の上水を
　にくい殿御の水汲まば、桶も割れ桶、割れ柄杓、にごった沼の底水を

これは、鼓踊の歌、と談亭に教えられたが、狂四郎は、投げ節にして、巧みに唄ってみせた。
お登奈の撥の音も冴えた。
唄いおわった時、裏門から、人影が三つ現れた。二人の腰元に提灯をかかげさせたかなりの年配の老女であった。
しずしずと、歩み寄って来ると、
「ただいまの鼓踊の歌は、まことに結構でありました。就いては、あらためて所望がありまする」
と、云った。狂四郎とお登奈は、黙って、頭を下げた。
「本陣の中に入って、唄うてもらえませぬか？」

「忝けないお言葉ですが、斯様のむさくるしい姿をして居りますゆえ、身分のあるお方の前に伺候いたすのは、遠慮いたさねばなりますまい」
「いいえ、書院へ案内いたすのではありませぬ。庭に茶亭があります。そこで、唄うて下さらぬか」
「かしこまりました」
老女は、二人を、泉水も築山もあるかなりみごとな庭へみちびいて、茶亭を指さした。
「あそこで、待たれるがよい。唄うてもらう時刻は、山寺の梵鐘が鳴る子刻を合図に――」
奇妙な注文であった。真夜中に、唄うてくれ、というのである。
「失礼乍ら、阿波の俚謡を、数多く唄える次第ではありません。こちらに、おまかせ下さるよう、お願いつかまつる」
「それは、どうぞ、随意に――」
老女は、去った。
茶亭は、久しく使用されていないらしく、かびくさい、湿った空気がこもっていた。
ひえびえとした畳に坐った時、
狂四郎は、お登奈に、笑ってみせた。
「妙なことになったな」
「貴方様のお供をすれば、このようなふしぎな出来事が、つぎつぎと起って参るのでございましょう」
お登奈は、微笑をかえし乍ら、云った。
「京の三条大橋に至るまでに、そなたの期待通りに、この眠狂四郎が、はたして、斃れるか、どうかだな」

「…………」
「これまでに、数知れず、無縁仏をつくって来たが、回向をしてくれる者を連れにした敵には、まだ出会って居らぬ。その意味では、そなたと連れ立ったわたしは、幸せな男、と云えるか——」
「…………」
「但し、常に孤身で歩いている男だ。跟いて来られるのが面倒になれば、あるいは、斬りすてるかも知れぬ」
「貴方様は、これまで、手向いせぬ者をお斬りになったことが、おありでしょうか？」
お登奈は、訊ねた。
「そなた自身は、わたしの生命を狙わぬ、と云うのか？」
「貴方様のお供をしているうちに、わたしは、自分が、女であったことに、気がつきました」
「…………」
こんどは、狂四郎が、沈黙する番だった。
「わたしは、剣を把った貴方様に魅せられた、と申し上げました。ところが、お供をしているうちに、ふところ手の貴方様、俚謡をお唄いになる貴方様にも、次第に、心が惹かれて参りました」
「…………」
「ご迷惑を承知で、このまま、なんとなく、京の都まで、お供をしたくなったのは、わたしも、女であった証拠でございます」
「止せ！」
狂四郎は、鋭く、さえぎった。
「おのれの生命を狙う女だ、と思うから、面白いと思って、連れ立ったのだ。……そなたに、女

心などを見せられても、はじまらぬ」
「かんにんして下さいまし」
狂四郎は、詫びるお登奈を、しり目にして、すっと立つや、外に人の気配がないことをたしかめて、影のように、出て行った。
お登奈は、そのまま、そこに、じっと坐って、畳の一点へ、眼眸を落していた。
狂四郎に告げた言葉に、いつわりはなかった。
これまでお登奈が、心の裡に描いていた眠狂四郎という人物は、文字通り氷のように冷たい、非情そのものの剣鬼であった。もし、抱かれたならば、こちらのからだまで、凍てついてしまうように思われていた。
そのような非情な剣鬼の肖像を、おのが背中に、刺青にしたことに、お登奈は、ひそかに、快感をおぼえていた。
彫ってくれたのは、江戸随一と称される名人で、狂四郎とは、かなりふるくからの知己であった。
宇之助というそのほりもの師は、お登奈の注文を引き受ける際、
「眠狂四郎の旦那は、姐さんが勝手に想像していなさるような、冷たい御仁じゃありませんぜ。あっしゃ、あの御仁のからだには、あたたかい血が流れていると思うんだが……」
と、云ったことだった。
その言葉が、いまにして、お登奈には、頷ける。
宇之助は、肖像を彫りあげた時、
「注文通りに、そこいらのぼんくらの目には、ぞっとするような姿に映るかも知れねえが、二年三年経つうちに、姐さんが背負っていなさるこの眠狂四郎が、なんとも云えねえさびしい孤独な

けしきを滲ませて来るようになったら……、それが、姐さんに判ったら、あっしの腕が冴えている、ということになりますぜ」
と、自信を持った微笑をうかべたものであった。
お登奈は、その言葉をよみがえらせ、胸で嚙みしめている。
連れ立って、わずか二日も経たぬうちに、お登奈は、眠狂四郎の眼眸、語調、挙措のほんの微細な動きにまで、隙なく配られている神経が、実は、自我の冷たい非情から発しられたものではなく、孤独を守る者の、おのれを崩れさせまいとする努力がつくったものであることを知った。
女の本能は、それが、いかに深い寂寞に堪えたものであるか、直感したようであった。
これまで想像していた冷酷無慚な剣鬼とは全く別の人間を、そこに見出して、お登奈は、うろたえ、そして、はじめて、たゆとうて来るこの感情に、哀しさというものを知らされた。
――泪が欲しい。
お登奈は、畳の一点を瞶める眸子が、かわいていることに、微かな辛い思いさえ、おぼえた。
狂四郎が、音もなく、戻って来た。
床柱に背中を寄せて、坐り、腕を組むと、
「二十五万石の太守の世子が道中するにしては、供揃いの頭数が足らぬ」
と、独語するように、云った。
お登奈は、狂四郎を、見戍った。
「二十五万石の格式ならば、四百人以上は、供をしていなければならぬ。ところが、せいぜい、百五六十人の人数だ。その供揃いにも拘らず、台所長持が三棹もあり、側女中の数が多い」
大名行列というものは、きわめて面倒で厄介であって、台所用の諸道具・七輪・鍋釜から、瓜

茄子(なす)の漬物桶まで石を押しのせたままで、長持に入れて、はこぶのであった。勿論(もちろん)、夜具を持参し、風呂桶まで用意している。宿宿(しゅく)の本陣に泊っても、一切を自身でまかなってしまうのであった。

「そなたは、大名屋敷に奥女中として奉公していた女だ。挟箱(はさみばこ)や具足や打物の足らぬ行列が、手道具預りや肴(さかな)洗いや台所働きや茶ノ間小使いの頭数を増しているのを、どう解釈する？」

「奥方様や姫君のお道中ならば、しぜんに、そうなりましょうが……」

お登奈の返辞に、狂四郎の双眸(そうぼう)が、急に光ったようであった。

やがて――。

遠く、山寺の梵鐘が、三更――子刻を告げて、月下の野を渡って、ひびいて来た。

「ご注文だ」

狂四郎は、お登奈に、薄ら笑ってみせた。

お登奈は、三味線を把りあげた。

深夜の静寂は、深い。

狂四郎が、えらんだ歌は、踏鞴(たたら)歌であった。

難波津(なにわづ)や、梅を慕うて、うぐいすの、声音もなまる法華経の、軒をさだめぬ旅ぞ憂き。
ふびんや、おつるただ一人、寄る辺なき身の、よる門も、只ふり心に、南無大師大慈大悲の観世音――
あいの道にひかるる順礼も、背(せな)に笈摺(おいずる)、前に札。

ふだらくや岸うつ波は、みくまのの……アイ順礼にご報捨と、云うに、、お弓が、しらげを、
そっと、見てやれば、稚き順礼の……

そこまで唄った時であった。
突如として、深い静寂をつらぬいて、女の鋭い悲鳴が起った。
お登奈は、はっとなって、撥をさばく手の動きを止めた。
狂四郎が、呟いた。
「こちらの出番は、先様の所望次第か」

島田雨夜

どういうことであったか。
深夜――三更を待って、眠狂四郎が唄い出した踏鞴歌を、まるで合図にしたごとく、女の鋭い悲鳴があがり、そして、それだけではおわらなかったのである。
つづいて、なにかが投げつけられて、障子が破れる音が起り、それを止めようとする数人の叫び声、悲鳴、さらに凄じい何かが壊れる物音――。
「姫様っ！」
叫び声の中に、そう呼ぶ声をききわけて、狂四郎が、
――狂っているのは、藩主のむすめか。

と、思っているうちに、騒ぎは一層ひどくなり、障子が突き倒される音響とともに、

「いやじゃっ！　いやっ！」

絶叫が、夜空をつらぬき、どうやら狂った者は、庭へ躍り出て来た模様である。

お登奈は、狂四郎を視た。

狂四郎は、床柱に凭りかかって、腕を組んだまま、動こうとせぬ。

追われる者が落ちたか、追った者が落ちたか、泉水に、高い水音が立った。

お登奈は、思わず、起って、障子を、二寸ばかり開いた。

月明りの中に、泉水の畔で、烈しく争うらしく、人影がもつれ合っていた。

と——。

一人が、悲鳴をあげて、よろめいた。

次の瞬間、ぱっと、そこから抜け出たひとつの影が、こちらへ向って、奔って来た。

手に、懐剣を摑んでいるようであった。

お登奈は、狂四郎を振りかえって、

「どうなさいます？」

と、訊ねた。

「どうもせぬ」

狂四郎は、冷やかに、こたえた。

乱心者は、ひくい結込垣を、破って、露地へ押し入って来た。

もう、その時には、それが、はっきりと、若い女性であることが、見分けられた。

長く曳いた裳裾で、砂や置石を掃きつつ、ツツツ……と、茶亭へ奔り寄るや、組井筒ぎわで、

何かにつまずいてよろけ、すがった拍子に、釣瓶をはねあげ、その水をかぶった。
しかし、水の冷たさになんの反応も示さず、ふらふらと、歩み寄って、亭前の縁先手水鉢のわきに、立った。
まだ、二十歳前であろう。切長な双眸の美しい、気品のある貌だちであった。
亭内から流れる灯かげに、その眸子が異常にきらきらと光っていたし、半びらきの口もとが、まさしく狂った痴呆の状態を示していた。
ひらり、と舞い立つような身軽さで、縁側にあがると、さっと障子を開いて、内部をきょろきょろ、と見まわしたのち、狂四郎に視線を据えた。
狂四郎は、依然とした腕組みの姿勢で、狂女の妖しく光る眼眸を受けとめた。
「莫迦！」
一瞬、狂女の口から、発しられると同時に、懐剣が飛ばされた。
狂四郎は、わずかに、首を傾けただけで、耳朶すれすれに、懐剣を床柱に突き立たせた。
狂女は、不意に、おかしそうに、かん高い声をたてて、笑った。
そこへ、藩士数人が、駆けつけて来て、とりおさえ、つれ去ろうとした。
狂女は、すこしばかりの反抗をみせたが、意外におとなしく、かかえあげられるなりに、身をまかせた。
再び、茶亭内に、静寂が来た。
「お茶でも、もらって参りましょうか」
お登奈が、起ちかけると、
「茶より、酒がいい」

狂四郎は、云った。
お登奈が、出て行って、すぐに、跫音が近づいた。
「ご免——」
障子を開けたのは、狂四郎に阿波の俚謡を依頼した阿波藩定府目付・勝俣雅楽であった。
風采のあがらぬ醜男の、口のききかたやら挙措やらは、どことなく、武部仙十郎に似ていた。
「粗相の光景を、お目にかけ申したな」
座に就くと、そう云って、にやにやしてみせた。
「…………」
狂四郎は、無言で、勝俣雅楽を見戌っている。
「これは、賭でござった」
「賭！」
「左様——、国許の俚謡が、はたして、姫君に発作を起させ申すか、否か——その賭をな」
「…………」
「屋敷内ならいざ知らず、道中の旅宿では、よもや、発作は起るまい、と思うて、ものはためしに、貴公にお願いしてみたところが、やはり、起り申したわい」
「…………」
「この責任は、身共が負うことに相成り申すが、さて、どういうものかな。どうも、姫君は、お膳立て通りに、発作を起された。物事と申すものは、あまり、つじつまが合いすぎると、つくりごとのにおいがして、兎角、小首をかしげたくなるものでござるよ。そうではござるまいかな、眠狂四郎氏？」

やはり、この人物は、只者ではなかったのである。うらぶれ果てた門付夫婦とみせかけていたこちらの正体を、ちゃんと看破って、やとったのである。

「あの姫君は、狂気を装っている、とお手前は疑われているのか？」

「三十年も目付を勤めて居り申すと、何事も一応疑ってみることに相成り申してな」

「姫君が、狂気を装わねばならぬ事情が、蜂須賀家には、おありとみえる」

「あるといえばあり、ないといえばない」

勝俣雅楽は、妙な返辞をした。

狂四郎は、薄ら笑って、

「お手前は、この眠狂四郎を、俚謡をうたわせるためにだけ、やとわれたとは思えぬ。目下、貴藩の敵にまわっているわたしを、どうして、やとわれたのか、それを、うかがっておこう」

と、訊ねた。

「身共個人の考えで、やとい申した。お手前を、眠狂四郎氏と知る者は、供の中に一人も居り申さぬ。……毒を以て、毒を制す、これでござろうかな。お手前以外に、荒療治のできる御仁は、他に見当り申さぬ。お願いいたしたい」

「…………」

姫君が、狂気を装っているのではないか、という疑惑を抱いているのは、どうやら、この目付ただ一人のようであった。

その事情は、問うても、おそらく、勝俣雅楽は、打明けまい。

狂四郎としては、想像してみるよりほかはなかった。

おそらく、藩主斉昌の世子が、将軍家の子であるところに、問題があるに相違ない。

将軍家斉は、あまりにも、子供をつくりすぎている。五十三人とも五十四人ともいわれている。その子供たちを、それぞれ、六十余州の大名圏内に納めるのは、容易なことではなかった。しかし、いやしくも、将軍家の子女を、大名以外の家へ配るわけにはいかなかった。

当然、そこに無理が生じ、表沙汰にはならぬまでも、各家に騒動が起った。

将軍家の若君を婿に、と押しつけられれば、その大名は、おのが実子を廃嫡しなければならなかった。藩主は泪をのんで、そうしなければならなかったし、若殿を守り育てた家臣たちは、密接な利害関係があるだけに、公儀の残酷な仕方に怨嗟の声もあげようというものである。

将軍家の姫君を嫁に押しつけられた大名も、ひどく迷惑する。これを迎えるには、莫大な費用を要し、ただでさえ内証窮迫した藩の財政は、さらに疲弊する。御守殿と称される夫人は、良人よりも頭が高く、また大奥より付いて来た女中たちは、家中の士を見下して、御本丸風を吹かせる。家風も藩制も、勝手にふみにじられてしまうのであった。

将軍家斉が、ただ好色の故に、二十一妾を蓄えたために、諸大名がいかに迷惑しているか、その例は挙げるにいとまがないくらいである。

将軍家斉の子女は、知能不足や虚弱児や不具が多かった故でもある。

諸大名が、いかに迷惑したか、二三の例を挙げれば――。

文政九年十一月、加賀・前田中将斉泰は、将軍家第二十四子の溶姫（十四歳）を妻に迎えた。迎えるにあたって、本郷の上屋敷に、正門のほかに、あらたに丹塗の門が設けられた。すなわち、後世の赤門であった。この赤門を設けるために、本郷五丁目の半分と六丁目全部に亘り、六百戸

の町家が取りはらわれた。

そして、その赤門の内に、壮麗無双の御主殿及び庭園が造られた。庭園を造るだけでも、半年間毎日百人の人足が働いた。そこは久しく廃地になり、草莱の茂るにまかせていた場所であったが、いざ庭園を造ろうとすると、三万余個の巨きな丸石が発掘された。その片づけだけでも、一石あたり銀二匁五分かかり、三万余個を片づけるために、千二百五十両を要した、という。

新築成ったこの御主殿に、溶姫がひきつれて来た人数は、大上臈一人、小女臈一人、介添二人、御年寄二人、中年寄三人、御中臈頭一人、御中臈八人、御小姓一人、表使い三人、御右筆三人、御次六人、呉服間五人、御三ノ間七人、御末頭二人、御中居三人、使番三人、小間使い三人、御半下（下女）二十人。これに加えて、御用人二人、御用達し一人、侍八人、医師一人という男子が付けられていた。

加賀百万石が、いかに裕福でも、この嫁取りによって、一挙に財政が傾いたのは、当然であろう。

それより一年前――文政八年七月、佐賀藩主鍋島斉直は、嗣子直丸に、将軍家第三十一子の盛姫を妻にもらった。その費用の莫大さに、鍋島家では、参覲道中の費用がなくなり、ついに、病気と称して、出府を半年のばしてしまった。九州の雄藩、三十五万七千石の大名が、その財力も尽きるほど、迷惑な嫁取りであったのである。

文化十五年、越前福井侯斉承は、将軍家第十九子浅姫を娶ったが、貧窮を訴えて、二万石を増封された。しかし、そのために、後年、ひどい迷惑を蒙った。浅姫が産んだ長子於義丸が、夭折するや、幕府では、すばやく、将軍家第四十八子の仙三郎を、養嗣子に押しつけた。斉承・浅姫は、まだ二十代の若い夫婦であったにも拘らず、実子を産むことを遠慮しなければならなかった。

惨めなことには、養嗣子にした仙三郎は、盲目であった。廃人を押しつけられた福井藩に、ひと騒動が起ったことは想像に難くない。ただ、養嗣子が将軍家の子である故に、その騒動を、表沙汰にしなかっただけである。それだけに、騒動はかえって陰惨なものであったろう。

阿波藩の世子となった斉裕も、智能の発達がおくれ、今年十二歳であるが、せいぜい七八歳のおろかさである、という噂がある。

藩主斉昌の実子としては、松之助という、斉裕より二歳下の少年がいた。実子であり、正常な頭脳をそなえ乍ら、松之助は、阿波二十五万石を継ぐことは許されないのであった。

狂女は、松之助の姉で、貴世といった。

「で——、わたしに、どのような仕事を、たのむ、と云われる？」

狂四郎が、訊ねた。

「姫君が、はたして狂気か、正気か——それを、貴公に、たしかめて頂けまいかな」

勝俣雅楽は、そう云って、頭を下げた。

狂四郎は、ややしばらく、沈黙を守ったが、口を開くと、別のことをなにげない口調で問うた。

「将軍家から下って来られた幼君は、すでに、国許入りをされているのであろうか？」

勝俣雅楽は、はじめて、顔面に鋭い色を刷いた。しかし、それは一瞬のことで、すぐに、無表情にかえり、

「左様、先月な」

と、こたえた。

狂四郎は、再び、沈黙を守った。

お登奈が、酒を容れた道具を携(さ)げて、戻って来たのは、その時であった。

狂四郎は、お登奈が、勝俣雅楽と自分の前に、盃(さかずき)を置くまで、口をひきむすんでいたが、やがて、

「お引き受けいたそう」

と、承諾した。

「忝けない」

雅楽は、ひくく頭を下げてから、

「明夜、島田宿の本陣にて――よろしいかな？」

「こちらは、何処の本陣でも、一向にさしつかえはない。……ところで、お引き受けいたすにあたって、ひとつだけ、条件をつけさせて頂く」

「なんなりとも――」

「場合によっては、姫君を拉致(らち)することもある。その際は、神かくしに遭うたことにして、さわがずにおいて頂こう」

流石(さすが)に、その言葉に、雅楽は、眉宇をひそめた。しかし、すぐ、にやっとして、

「承知つかまつった」

と頷いてみせた。

島田宿は、大井川を控えている。

当時、駿河と遠江(とおとうみ)の境であるこの大井川は、海道随一の難所とされていた。

難所であるだけに、上る者も下る者も、川を渡ると、心があらたまった、といわれる。
江戸を第二の故郷として、名残を惜しんで去って来た芭蕉は、
「野ざらしを心に風のしむ身かな」
と詠むほどの寂寥感を抱いて、大井川を渡り、
「道のべの木槿は馬にくはれけり」
という馬上の吟をのこしている。
ふと、目の前の小さな出来事から、遠く江戸へ心をやった句である。当時の人々が、大井川をどう考えていたかを、この句が示している。
雨が降れば、川止めになり、霖雨の頃は、五日でも七日でも、川を渡れないのであった。
したがって、大名の泊る本陣も脇本陣も、東海道の中では、最も構造が大きかった。
大名は、参覲道中に先だち、おそくも百日もしくは一年も前から、宿泊の日を定めて予約しておくのであったが、大井川が増水で川止めになれば、対岸の島田あるいは金谷に、長ければ十数日も滞留を余儀なくされるのであった。
そうなれば、つづいてやって来た他藩の行列は、一駅てまえに、休泊を臨時に取りかえる場合も起る。
いずれにせよ、大井川を控えた島田宿の本陣は、長逗留にさしつかえないように、造られていた。
これは、夜陰に乗じて、忍び入った眠狂四郎にとって、行動に都合のよい構造といえた。
午から降りはじめた雨が、夜に入って、強風をともない、烈しくなっていたので、行列の一行は、明日は川止めとあきらめて、のんびりと、気をゆるませていた。

狂四郎は、こんたんあって、お登奈をともなっていたが、悠々として、奥へ忍び入ることができた。

本陣は、後世の旅館とちがい、廊下によって各部屋をへだてて居らず、また、単独に使って女中に給仕させるのではなかった。

奥座敷、中坪その他外部に面した所のほかは、屋内に、板敷きの廊下はなく、通路は、幅一間半の畳敷きで、いつでも座敷になるのであった。そして、夜は、そこに従者たちが寝たのである。

したがって、奥へ忍び入るには、その通路を通ることは危険であった。

狂四郎とお登奈は、しかし、かまわずに、あちらこちらからいびきのひびくその通路を通った。

上段の間には、次の間、二の間、三の間が設けられ、そこに、老女をかしらに、十余人の女中が、やすんでいた。

上段の間の付(つけ)書院には、不寝番が二人、控えている筈であった。

お登奈は、たとえ、上段の間に忍び入ることができても、はたして、まわりに気どられずに、姫君の狂気か正気かを調べることができるものか、とあやぶんでいた。

狂四郎の行動は、しかし、大胆で、敏速であった。

ふみ込むや、なんのためらいもなく、掛具をはねのけ、貴世姫が、目をさまして、起き上るや、間髪(かんはつ)を入れず、鳩尾(みずおち)へ拳(こぶし)を入れて当ておとし、かるがるとかつぎあげた。

狂四郎が、貴世姫をはこんだのは、正面大床のかくし戸から通じている二階座敷であった。

これは、不意の襲撃を受けた時、すばやく、身をかくすために設けられた密室であった。大床に切られたかくし戸は、一瞥しただけでは、全く見分けられなかった。

のみならず、かくし戸を閉じれば、二階座敷で、かなりの物音をたてても、階下には、きこえ

なかった。

狂四郎が、おちつきはらっていたのは、このためであった。

狂四郎は、お登奈に、絹行灯にあかりを入れさせると、貴世姫を、畳の上に仰臥させ、手ばやく、その帯を解いた。

お登奈は、息をのんだ。

貴世姫は、みるみるうちに、白綸子の下着いちまいに剝かれた。

さらに、狂四郎の手が、容赦なく、その下着の前を捲り、白羽二重の脚布をはねて、すんなりとした下肢を、しろじろと、絹行灯のあかりの中に浮きあがらせるのを目撃して、お登奈は、思わず、

「なにを、なさるのです？」

と、咎めた。

「犯すのだ」

「えっ？！」

お登奈は、愕然となった。

あらわにされた下肢の、脛も腿も、まだその線は稚かった。

狂四郎は、ゆっくりと、その膝を左右に押しひろげた。

お登奈が、何か叫びかけると、狂四郎は、「さわぐな！　そなたは、そこで、黙って眺めているのが役目だ」と、抑えた。

次に為した狂四郎の行動は、残忍なものであった。

その左手の五指を、淡く茂った恥草へ当てておいて、一撃に活を入れて、意識をとりもどさせ

た。
　貴世姫が、自身がどのようなはずかしい姿態をとらされているか、さとるまでには、五つばかりかぞえる時間を要した。
　あっとなって、はね起きようとしたが、叶わなかった。大きく押し拡げられた双股は、狂四郎の膝で押えられていたし、右手はねじあげられていた。
　狂四郎は、じっと見下して、
「正気とお見受けしたが、どうであろうか。あくまで、狂気を装われるなら、この場で、犯してごらんに入れる。それを見とどける女も、こうして連れて参った。はじめて、肌を男に与えるさまを、同性に眺められる。若い女子として、これ以上の羞恥と屈辱はない」
　と、あびせた。
　貴世姫は、ひしと目蓋を閉じた。その睫毛を押しあげて、泪があふれた。
「ゆ、ゆるして！……ゆるしてたも！」
「正気であることを、みとめられるのだな？」
　貴世姫は、頷いた。
「貴女は、狂気を装うて、国許へ送り還され、隙をうかがって、世子となった将軍家若君を刺し殺す決意であった。そうですな？」
「……………」
　姫は、喘いだ。
「女子のあさはかさと申すものだ。弟を藩主の座に就けたいばかりに、浅智慧を働かせて、将軍家若君を殺そうと計った。たとえ、狂人の振舞いとみせかけても、公儀が、その凶事を看のがす

道理はない。阿波二十五万石は、即座にとりつぶされる。そこまで考え及ばなかったとは、おろかもきわまる。おわかりか？」

姫は、目蓋をひらいて、狂四郎を仰いだ。

狂四郎は、やおら身を退けると、お登奈に、姫に衣裳をまとわせるように、命じた。

身じまいがおわるのを待って、狂四郎は、云った。

「このかくし座敷に、三日ばかり、ひそんで居られることを、おすすめしよう。狂気がすぐに正気に還るのもおかしなものだし、貴女が気持を鎮められるには、それくらいの日数は必要であろう。神かくしに遭われたことになる。幸いに、貴藩には、勝俣雅楽という凡庸でない目付がいる。渠が、貴女のために、ひと働きをしてくれる筈だ」

金谷の死人

二日降りつづいた雨が、ようやくあがって、急に暑気の増した日であった。

大井川の水嵩が高くなり、このぶんでは、あと三日は川止めであろう、と噂され、島田宿は、ごったがえしていた。

おまけに、午後までは晴れわたっていた空が、遽に雲に掩われて、暗くなったか、と見るうちに、また、ざあっと降って来た。

尤も、これは、稲妻と遠雷をともなっていたので、また明日まで降りつづくものとは思われなかった。

その稲妻に追われるように、宿場へ駆け込んで来た旅人の中に、金八がいた。
阿弥陀堂を見つけて、檐下へ入り、胴顫いしてから、
「夕立や、と来やがら畜生っ、法華かけ込む阿弥陀堂、か。
　馬の背を割るいかずちに
　島田が濡れた雨やどり
　アレ
　稲妻の西東
　怕や、と抱きつきゃ、
　しめたもの
　頬すり寄せて、なんまいだ
　阿弥陀がとり持つ縁かいな
は、は、はっくしょいっ！　べらぼうめ、照ったり降ったり、いい加減にしやがれ。くそおもしろくもねえ」
ぶつぶつ云っていると、うしろの格子戸が開いて、女が出て来た。
「よく降りますこと――」
そう云って、うっとうしそうに街道を見やる横顔を、一瞥して金八は、
――佳い女だ！
と、思わずごくりと生唾をのみ下した。
もう三十に手がとどくかも知れない。頬から頤、項にかけての熟れきった水々しさ、胸と腰の豊かな肉盛り、加之すっきりとつやなし上田を着こなした粋な立姿――。

それでいて、これは、かたぎの女房なのであった。

「へえ、よく降りやすねえ。
降って、止まるが大井川
泊めて、振るのが、島田の女郎衆
旅籠は相宿
隣りは年増
つい、しっぽりと、濡れ合うて
てな、ことなら
雨の十日も、降ればよい」

女は、それに応えて、視線を向けて、にっこりしてみせた。

金八は、ぶるるっと身顫いした。

――こいつは、ちんちんかもかも……なんとか、なりそうだぜ。

そう思って、そばへ寄ろうとした時、雨の中を走って来た合羽の男が、

「あ――お内儀さん、ここでございましたか。お待たせして、申しわけございませんです。おゆるし下さいまし」

ぺこぺことあやまり乍ら、どこかで手に入れたらしい傘をひらいて、

「さ、どうぞ――」

と、促した。

大店の番頭ていの男の、菅笠の下の顔を、何気なく見やった金八が、

――はてな？

と、小首をかしげた。
——どこかで、見たことがある？
相合傘で遠ざかる後姿を、じっと見送っていた金八は、一瞬、
「あ——あん畜生っ！」
と、叫んだ。
「辰だ！　鴨辰だ、野郎っ！」
五年前、恐喝やら誘拐やら窃盗やらを重ねた挙句、捕えられて、島送りになった上州無宿の鴨川の辰次、という破落戸であった。
金八は、大名屋敷の中間部屋でひらかれる賭場で、顔見知りになり、辰次がイカサマをつかって、露見し、あやうく簀巻きにされて隅田川へ抛り込まれようとしたところを、助けてやったこともある。
赦免船で、いつ、江戸へ舞い戻って来たか——あきれたことに、唐桟留に花色繻子の帯を甲斐の口に結んだお店者になりすましているのであった。
しかも、滅法あか抜けた色年増を、お内儀さんとあがめて、供をしている。どうやら、お伊勢詣でか、金比羅詣でに出かけて来た、と思われる。
「あん畜生め、お店者に化けやがって、あの年増をたらし込んだ、ところまでは上出来だが、談亭師匠の張扇の流儀でやれば、天網恢恢疎にして漏らさず、この金八旦那に見つかったのが百年目、すこしも早う、おお、そうじゃ！」

その内儀と鴨川の辰次が泊った旅籠は、「かぶとや」という、島田では、本陣に次ぐ大きな構えの宿であった。

宿帳には、

『江戸京橋南伝馬町・飯田呉服店とく　番頭忠七』

と、記入された。

飯田呉服店といえば、江戸を知らぬ人々の耳にもきこえている老舗であった。七月七日の七夕祭に、その屋上に、百八本の笹つき青竹を立てて、五雲が棚びくような華やかな見物を飾るのでも有名であった。

宿では、武家でも大身が、不意に泊めてくれと入って来た時の用意に空けておいた上等の部屋に通し、女中二人をつけた。

流石は、日本屈指の大店の内儀らしく、おとくの態度は、折目正しく、仕草ひとつにも品があった。色香が匂う姿体であるだけに、よけいに、冴えてみえ、女中たちは、自分たちの作法不足に、全神経を配らねばならぬしまつで、部屋を出た時は、ほっと肩で溜息をもらしたくらいであった。

また、番頭の忠七の、こまかいところまで心を配る動きは、女中たちに、

「江戸のどまん中で、七八つから丁稚づとめをしてたたきあげられた番頭さんは、そこいらの埃っぽい店の使傭人とは、月とすっぽんだねえ」

と、ささやき交させた。

おとくと忠七は、二人きりになっても、決してすぐには、わりない仲になっている素振りなど

みせはしなかった。

五つ（午後八時）になると、忠七は、次の間にさがり、襖は閉められた。行灯のあかりもほそくされた。

そこから三部屋ばかりへだてた七八人が相宿している広い部屋で、

「さてと――酒を飲もうか、飯盛買おか、女は半刻、酒なら半日、同じ酔うなら、へへ……酒がよい、か」

と云い乍ら、立ち上ったのは、金八であった。

廊下へ出ると、尻っ端折りして、いかにも酔ったふりをすると、近くの三味線と太鼓の囃しに合せ乍ら、

テンテン、テレツク、テレツク、テン
小札の鎧に、星兜
持ったる槍は、三間柄
赤銅造りの太刀はいて
渡辺綱は、良い男
上意かしこみ
テレツク、テン
着いたところが、羅生門
雨は降る降る、風も吹く
鬼が、うしろで、
三つ指といで

綱さん来たか、待ってたほい
錣をつかんで
えい、と曳きゃ
綱も強者、力持ち
止しゃれ離しゃれ、錣が切れる
錣切れるは厭わぬが
いま結うた鬢が、乱れるぞえ

唄い乍ら、だんだん奥へ入って行った。
そして、とある曲り角に来て、急に、鋭く、前後を見やって、小声で、
「鬼は、どこかい、こっちかい。手の鳴る方へ、テレック、テン――」
ツツ……と、すべるように、進んで行った。

それから、ものの半刻も過ぎた頃あい――。
その部屋の襖が、そっと音しのばせつつ、開けられた。
忠七が、呼びかけて、忍び入って来た。
「お内儀さん――」
おとくは、牀の中で、ひそとして、動かぬ。
忠七が、そっと掛具をあげた――とたん、白い双腕がのびて、忠七の頸に巻きついた。
そのまま、忠七の顔が、おとくの顔にかぶさり、からだは牀の中へ吸い込まれるように、入った。

——やっぱり、そうか！

天井の片隅の、張りじまいの板が、二分ばかりずらされて、金八の目が、見下していたのである。

——ころんでも、ただでは起きねえ野郎だったが、どうやら、鴨辰め、一生一代のころびかたをしてやがるぜ！

掛具が、せわしく動くさまを、固唾をのんで見まもっていた金八は、

——こん畜生！　こっちの鬼の金棒が、むずむず、ぴいんとおっ立って来やがった！

と、臍の下に、ぐっと力をこめた。

蒸れた宵であった。やがて、掛具は、はねのけられた。

ぜいたくな明石を寝召にして、それから透ける緋縮緬を、いまは、あらわに捲き散らして、下肢は男の下で、一杯に拡げられ、蹠がじりじりと敷具を摺りつつ、指を曲げている。

——お目に毒やら、金棒にゃ気の毒だあ。

金八は、呶鳴りたてたい衝動を辛じて抑えた。

やがて、津波にもみ込まれるような凄じい官能の狂乱に、二個の裸身が、あさましくもだえ合い、痙攣し合った。

律動がおわり、死んだような瞬間が過ぎると、男の方は、すばやく起き上って、まずおのれの身をしまつする前に、女のからだをていねいにきよめ、緋縮緬で下肢を包み、明石の前を合せてやった。

——いい加減にしやがれ、糞ったれ！

金八は、むなくそわるさに、胸の裡で、喚きたてた。

「お内儀さん――」

忠七は、枕もとにかしこまってから、云いかけた。

「お悩りなすっちゃいけませぬが、江戸を出てから、お内儀さんのおからだが、だんだん、冷えて来ているのを、感じて居ります。お抱きしてみて、よく、わかるのでございます。小田原、三島、由井、そしてこの島田と、泊りを重ねるたびに、お内儀さんのからだが、前夜よりも今夜の方が、冷えて居ります。てまえにとって、この白いおからだは、一生に一度めぐり会うた、かけがえのない大切な宝でございます。それで、思いきって、申し上げるのでございますが、やはり、これは、二百両もの冷たい小判を、肌におつけになっているためじゃございますまいか」

「………」

おとくは、黙って、返辞をせぬ。

忠七は、つづけた。

「てまえも、五年ばかり前に、五百両を身につけて、大坂から江戸まで道中したおぼえがございますが、江戸へ着いて一月あまり、ずっと下痢がつづいて、それはもう難渋いたしました。……明日になるか明後日になるか、存じませぬが、大井川を渡る時は、せめて、てまえにお預け下さいますまいか。川渉りは、底冷えするものでございますし、この水嵩では、もし万が一、人足がこけでもいたしますと、金子の重みで、溺れる懸念だって、ないとは申せぬのでございます。お願いでございます。この忠七を、信じて頂きとう存じます」

いかにも誠意をこめて、くどいてみせたが、なお、しばらく、返辞がなかった。

「お内儀さん、お願いでございます。お身を案じて、申し上げていることでございます」

なお、しつっこく、くどきかけると、おとくは、はじめて、口をひらいた。

「忠七――」
「はい」
「お前の肚(はら)の裡は、割ってみせて、もらうわけにはいかないよ」
「そりゃ、まあそうでございますが……」
「金は、あたしに、嘘をつかないよ。抱いていればおとなしくじっとしているばかりか、ちゃんと、あたしが生きるのを守っていてくれるんだよ。こんなたより甲斐のある用心棒はいないのだからね。滅多なことで、お前なんぞに、まかせられないのさ。おわかりかい、おわかりなら、黙って、ひきさがって、あちらで、やすんどくれ」
「はい――」
忠七が、なお愚図愚図していると、おとくは、くるりと背を向けて、
「江戸を出る時、約束したのをお忘れかい。肌にふれても、分(ぶん)を越えない、ってね」
冷やかに、云いすてた。

「――という次第でさ」
金八は、昨夜の天井裏から目撃したことをつぶさに語って、対手(あいて)の言葉を待った。
眠狂四郎は、床の間に、ながながと寝そべって、肱(ひじ)を立てて、掌に頭をのせて、ずっと沈黙をまもって、金八の話をきいていた。
ここは、「かぶとや」の隣りの「紀伊国屋(きのくにや)」という旅籠の一室であった。
今日も川止めである。

狂四郎は、金八を、横目で見やって、
「お前、二百両が欲しくなったのか？」
「冗談じゃありませんや。ただ、鴨辰の野郎に、むざむざ持って行かれるのは、業っ腹でござんすからねえ、なんとか、ひとつ、野郎の鼻をあかしてやりてえ、と思っているんでさ。……どうも、あっしが、感ずりましましたところでは、野郎、この大井川を渡る時に、女をしまつするこんたんだったんでさ。ところが、女も、さるもの、ひっかくもの、どっこい、きかざる——で、この猿芝居、如何相成りやすか」
「お前の猿智慧では、鼻をあかしかねるか」
「まぜっかえさねえでおくんなさい。鴨辰の野郎、女が金を渡さねえ上は、しかたがねえから、正体をむき出して、殺っつけろ、と——」
「人足をやとって、川へ落して、溺れさせるか」
「そ、それだっ！」
金八が、叫んだ。
すると、狂四郎は、薄ら笑って、
「お前は、どうせ、今夜も、天井裏へ忍んで、ご見物だろう」
「飯盛を抱くよりゃ、よっぽど面白えんでね」
「そこで、ひとつ、猿智慧を働かせては、どうだな？」
「へえ？」
「江戸一番の巾着切が、黙って、指をくわえて見物してるだけでは、あまりに、能がなさすぎるのではないかな」

「弱ったね、先生。教えておくんなさいよ。ああすりゃ、こうなる、ヤレコリャ、どっこい――
金八、やれ！」
大井川の川止めが、ようやく解けたのは、それから三日後であった。
堤ぎわの川会所の檐下には、
「乳下水」
という札が、下げてあった。
大井川は、その水嵩によって、渡し代がちがっていた。乳下水、帯上通水、帯通水、帯下水、股通水、股下通水、膝上通水、膝通水、と八段階にわかれていて、一番下の膝通水の人足一人の渡し賃が四十文、それから一段階十文ずつ増すのであった。
水嵩が、乳の上に達すると、川止めになる。ちなみに、この大井川の川渡し人足は、七百人もいたのである。
ようやく、乳下水になって、川止めが解かれたこの日の朝――。
川会所の前には、川札をもらう旅人が、列をなした。
おとくと忠七は、その列に交っていた。
「お内儀さん、輦台になさいますね？」
忠七が、訊ねた。
「一人輦台になさいまし。てまえは、人足の肩で――」
「一緒にお乗り――」
「いえ。供は肩にきまって居ります」

忠七から、川札を渡された人足が、仲間に、「おーい、一人輦台だあ」と呶鳴った。

輦台を担いで来た四人の人足のうち、一人が、忠七にだけ判るように素早く目顔で、合点してみせた。

磧に、金八が立っていて、その輦台が、水に入るのを、眺め乍ら、

「てへんだ。心あり気に空をば見つめ濡れて欲しさの枝蛙、か」

と、小声で云った。

輦台のうしろを、忠七——鴨川の辰次が、人足の肩車に乗って行く。

ほかに、七八台の輦台が、川を渡っていた。肩車に乗った人の数は、胡麻を撒いたように、川面に散らばって、すこしずつ、動いていた。

おとくを乗せた輦台が、川の中央に出た時、忠七に目で合図した人足が、何かにつまずいたように、悲鳴をあげて、水に沈んだ。

輦台は、ぐらっと傾き、そのまま、おとくは、飛沫をあげて、落ち込んだ。

おとくの溺死体が、ひきあげられたのは、金谷側の磧であった。

川役人が、追っても、群衆は遠巻きにして、がやがや騒ぎたてた。

「佳い女だのう、濡れて色増す秋海棠って眺めだのう」

「ちぇっ、土左衛門を見て、興奮しやがる」

「何をこきやがる。土左衛門はおめえ、男だあ。女は、死んでも、化けても、風情があらあ。どうだ、あの緋縮緬がまつわりついた脛の白さは、こてえられねえ」

「すがりついてやがる野郎が邪魔だぞ。おーい、そのお店者、退きやがれ。ついでに、緋縮緬を、もっと捲くってくれえ」
「うるさいぞっ！　退れっ！」
川役人は、群衆を呶鳴りつけておいて、屍骸にすがりついて泣く男に、
「どうした、しっかりせぬか」
と、肩をたたいた。
「お内儀さんに、あれほど、お願いしたのに……、二百両もの大金を、肌身につけて、はなさずにいなさるから、こんなことになったのでございますよ」
鴨辰は、かきくどいた。
「二百両?!」
川役人は、ききとがめた。
「二百両も、所持していたと申すのか?」
「はい。金比羅様に寄進なさるために……」
「出してみせい」
「はい」
鴨辰は、わざと、指をわななかせ乍ら、おとくの帯を解いた。
「おい、裸にするぜ」
「南無、観世音菩薩！」
「おうおう、目の色が変ったのう」
「野郎の裸にはうんざりしているがのう、女の裸は、おめえ、滅多に拝めるもんじゃねえ」

「涎をたらすんじゃねえ、みっともねえ」
鴨辰は、屍体から、ずるずると胴巻きをひき出して、
「これでございます」
「よし――」
川役人自身も、二百両の大金など、まだ見たこともなかったので、好奇心に駆られつつ、濡れた胴巻きを小柄で切り裂いた。とたん、
「なんだ、これは！」
と、あきれ声をあげた。
鴨辰は、覗いてみて、あっとなった。
それは、小判の形をした鉄板であった。

「おーい、待っておくんなさい」
金谷の宿を、ふところ手で通り抜けて行く眠狂四郎を、金八が、大声で呼び乍ら、追いかけて来た。
「あっしを、置いてけ堀にするってえのは、ねえや、先生」
金八は、追いつくと、
「なにしろ、持ちつけねえものを持つと、重くっていけねえや。……ねえ、この二百両、どうしやしょうね」
「お前が、盗んで来た金だ。勝手にするがいい」
「合戦が終ったあと、女が睡りこけている隙に、小判と鉄板をすりかえろ、と教えてくれたのは、

先生ですぜ」
「教えただけだ。あとは知らぬ」
「そう云わねえで、どうすりゃいいか、教えておくんなさいよ」
「女は、金比羅宮へ寄進する筈であった、というのなら、お前が代参したら、どうだ」
そう云われて、金八は、うんざりした顔つきになった。
「大金を持って、途方にくれたのは、はじめてだあ。やっぱり、こちとら、せいぜい、十両ってところか。幕内にゃなれそうもねえや」

日坂（にっさか）夜泣き墓

大井川の川止めが解けたために、街道上に、人の往き来があわただしい。
馬子も駕籠昇（かごか）きも、活気づき、馬子は、大声をあげて、
「そこどけ、そこどけ、お馬が通る、だあ！」
と、鈴を鳴らしていたし、駕籠の方は、先棒後棒が、呼吸をあわせて、
ホイ、ホイ
ホイッ、ホイッ
と、通行人を突きとばさんばかりの勢いで、走っていた。
金谷宿を出ると、道は、上り坂になる。
西へ向って歩く眠狂四郎の足どりだけが、いかにも、のろいものに見えるのは、あとからあと

から、旅人に追い越されるにまかせているからである。
供をしている金八は、江戸っ子の気短さで、追い越されるたびに、不服げに首を振っていた。
「ちぇっ、どいつも、こいつも、親の死目に間に合わそうといったあんばいに、急ぎやがらあ。こちとら、急ぐのは、女に会いに行く時だけだあ。
　かたい約束
　白縮緬を
　この手で、解きたさ、ひろげたさ
　とんで行く夜の、その道の
　足の軽さよ、身の軽さ」
唄い乍ら、臀を振った。
また一人、商人が笑って、追い越して行った。
「金八」
「へい、なんです？」
「理江は、どうした？」
「と、きかれるのを、待ってやした。お嬢さんは、自分の手で、父上の仇討をしたい、と、殿様の生命を狙って、一人で、先に、岸和田へ行っちまった。と云ったら、先生、どうなさるんで？」
「お前の入智慧か。旅籠、旅籠で、ただじっとして、待っているから、対手は、そ知らぬ顔で、通り過ぎてしまう。眠狂四郎とは、そういう人間だから、こいつを追わせるには、ひと足さきに、岸和田へ行って、殿様の生命を狙っていれば、必ずあとから、やって来るに相違ない、と——」
「ご明察！　先生、お嬢さんは、本当に、たった一人で、岸和田へ行っちまったんでさ。すてて

おくわけには、いきませんぜ」

「冗談じゃねえや。対手は、いくら貧乏大名でも、城の中に住んでいるんだ。格子を蹴開けて、野郎、いるか——ってえわけにゃ、いかねえや。ここは一番、片肌ぬいでおくんなさい」

「気が向いたら——のことだ」

そうこたえた狂四郎の足が、その時、停められた。

初倉山の峠にさしかかっていて、松の木立が深くなった地点であった。

木立のむこうは、ゆるやかな斜面になり、いちめんの桑畑であった。そこを下ると、山峡の底が、菊川村である。

「墓に詣でて行くか」

狂四郎の口から、その呟きが洩らされた。

「どなたの？」

「餓鬼の頃、母と二人でとじこめられていた広尾町の祥雲寺という寺で、庭掃きをしていた下僕の故郷が、あの菊川村だ」

物心ついた頃から、母と二人きりの、その古刹の山内の小さな離れが住いであった。

狂四郎が、おのれの素姓を知らされたのは、母の口からではなかった。

弥助という、その古刹の下僕からであった。

「お坊っちゃまのお祖父さまは、松平主水正と申されて、大目付という、高い御身分の御旗本でございます」

そっと、ささやいてくれた時のことを、狂四郎は、ありありと思い泛べることができる。

大目付の旗本大身を祖父に持ち乍ら、なぜ、母と二人きりで、世間の目からかくれるようにして、くらさなければならないのか。狂四郎には、判らなかった。
狂四郎は、山門から、出ることさえ禁じられていたのである。
まして、遊び友達など、一人も持たなかった。母のほかに、話を交すことができるのは、弥助一人きりであった。
祥雲寺住職も、納所（なっしょ）も、狂四郎を見かけても声もかけてはくれなかったのである。
狂四郎が、自分がただの少年ではない、と知らされたのは、七歳の夏であった。
ある日の午後、庫裡（くり）の裏庭で、蟬（せみ）を追っていた狂四郎は、ふと、住職と納所の会話を、ききとがめた。
「因果の子と判って居り乍ら、生れて育っても幸せな生涯は送れぬ、と百もご承知の上で、なぜ、お産みになったのでございましょうな？」
「女心というものは、女人に接したことのないわしらには、一向に、理解できぬ」
「大目付様が、お産みになるのをお許しなされたことも、解（げ）しかねまする」
「いくたびも、手討ちにすると、脅（おど）しなされた由じゃが……、女子は、母になると、強いものよの」
「あの貌（かお）は、ひと目で、異人の血がまじっていると、知れますゆえ、将来、世間へ出て、どのような道を辿（たど）られるやら、これは、むつかしゅうございましょう」
この会話が、母と自分のことを語っているのだとさとった狂四郎は、全身がわなないた。
自分の立っている世界が、遽に、まっ暗になるような衝撃であった。
狂四郎は、墓地に入って、そのまま、日が昏（く）れるまで、じっと地べたにうずくまっていたこと

を、忘れぬ。

母を不幸にした秘密が、いかに、おそろしい、むごたらしいものであったか——まざまざと見せつけられる一夜を、狂四郎が持ったのは、十歳の冬であった。

真夜中、ふと目覚めた狂四郎は、奥座敷から、ひくい異様な声音がもれて来るのを、きいて、はっと身を起した。

「母上！」

隣りの臥床へ、手をのばしてみた。

母は、いなかった。

狂四郎は、床の間から、脇差を把って、そっと廊下へ忍び出て、奥座敷へ近づいて行った。

障子戸の隙間から、内部を覗き見た刹那、狂四郎は、くらくらと激しい眩暈に襲われた。十歳の少年が、わが手で口をふさいで、叫びを止めたのは、武士たる者の心得を、母から厳しく躾けられていたからであった。

だが——。

その母は、一糸まとわぬ素裸となって、床の間に仰臥しているではないか。のみならず、その額、その胸、その腕、その太腿に、蠟燭を立てられ、ゆらゆらと焔をゆらめかしていたのである。

壁には、口が耳まで裂けた凄じい形相の、黒衣の像を描いた掛物が、さげられてあった。それは、生けるがごとく、長く尖った爪をもった十指をかざして、母の裸形へ、つかみかかろうとしていた。

この奇怪な祭壇に向って、ひざまずいているのは、褐色の頭髪と、おそろしく高い鼻梁（びりょう）を備えた巨漢であった。

物心ついてまだ一度も街中へ出たことのない少年の目は、即座に、この巨漢を異人と断定する能力はなかった。しかし、それだけに、かえって、人間以外の化物と受け取る衝撃に堪えねばならなかった。

ひくく異様な声音は、その大男の口から呟かれていたのである。そして、その右手には、赤い液体を湛（たた）えたぎやまんの盃（さかずき）が、捧（ささ）げられていた。

狂四郎が、脇差を抜いて、とび込まなかったのは、恐怖の為ではなく、母のあさましい姿の故であった。

狂四郎は、衝撃とともに、目を隙間から離した。そして、必死の努力で、跫音（あしおと）を消して、寝間へ戻った。

夜具を噛（か）んで、嗚咽（おえつ）を殺し乍ら、小さな身を顫（ふる）わせているところへ、下僕の弥助が、そっと入って、

「お坊っちゃま！　我慢しなされ」

と、抱き起してくれた。

弥助が、双腕に力をこめて、しっかと、かかえ込んでくれ、

「母上様は、好んで、あのようなまねをなされているのでは、ございませぬぞ。……見なかったことに、されるのじゃ！　我慢をなされ、我慢をな！」

と、云いきかせてくれた――その声音が、いまも、狂四郎の耳の底にのこっている。

それから十年を経て、狂四郎は、おのれの血の半分が異邦人のものではないか、という疑惑を

解くために、長崎へ赴き、そこで、おのが父が、オランダから渡来して来た布教師ジュアン・ヘルナンドという人物であると知り、渠が、公儀の残忍無比な拷問によってころび、ついに、異端者になったことを、つきとめたのであった。

伴天連にあっては、ひとたび、ころんだからには、こんどは、ぜすす・きりすとにつかえる代りに、悪魔を信奉することによって、科の懊悩をふり払う、という。御主でうすを祭るべき壇上に、悪魔をまつり、裸女の生贄をそなえ、聖なる葡萄酒の代りに、月経の血と精液と犬猫の血をまぜた液体をあおって、神に反逆する呪文をとなえる、という。これが、海の彼方の異端者の行う黒弥撒であった。

まさしく――。

あの夜の光景は、その黒弥撒の行事であったのだ。巨漢は、ころび伴天連ジュアン・ヘルナンド――即ち、狂四郎の実父に、ほかならなかったのである。

思えば、狂四郎の少年期にあって、心からの同情と憐憫を寄せてくれたのは、老いた寺男ただ一人であった。

弥助は、狂四郎が、十五歳の日、母のなきがらを唯一人で葬るのを、見とどけておいて、祥雲寺を去り、故郷へ帰った。

その故郷が、いま、眼下にする山峡の村里であった。

弥助は、菊川村で、孫娘と二人きりの静かなくらしをすごしていて、その孫娘が、時おり、狂四郎が仮寓にしている押上村の古刹竜勝寺へ、便りを寄越していた。

弥助が、逝ったことを報らせて来たのは、三年前の秋であった。

狂四郎は、折返し、十両あまり、早飛脚に持たせてやった。しかし、手紙は添えなかった。

その孫娘が、気だてのやさしい、こまやかな心づかいの娘であることは、便りの文面から、受けとれていた。弥助は、平和な晩年を送ったに相違ないのであった。

狂四郎としては、弥助の死を知った時の、烈しい胸の疼きを、人には告げず、秘めたままにしておくのが、この男の生きかたなのであった。

したがって――。

ゆくりなくも、東海道を道中して、この土地を行き過ぎがてに、ふと、弥助の墓へ詣でようか、と思い立ったのは、この男らしからぬ菩提心といえた。尤も、あとになって思えば、それは菩提心ではなく、異変に向って無意識に身をはこんで行く宿命を背負わされた者の心の動きであったようである。

金八を連れて、松の木立をくぐった狂四郎は、桑畑の中を通じている小径のかたわらに、自然石の碑を、視た。

「馬に寝て残夢月遠し茶の煙」

芭蕉が、ここで詠った句である。

「伝説を籠めた詩歌紀行文が、多くのこされている里だが……」

狂四郎は、小径を下って行き乍ら、呟いた。

太平記の名文といわれる「片野の春の桜狩」の一節は、この菊川宿のためにつくられている。

また、俊基や宗行など、多数の有名な歌人が、とりたてて云うべきものも持たぬ山峡の小さな村里を、詩歌に詠んでいる。

これは、この宿が、大井川の右岸に在って、もし水嵩が増して、川止めになると、三日も五日も、永ければ十日も、旅人を滞在させたためであろう。文人墨客は、詩や歌か紀行文でもつくって、つれづれを慰やすよりほかに、することもなかったのであろう。

「ねえ、先生——。小夜の中山ってえのは、この先じゃござんせんか？」

「うむ——」

「そこに夜泣き石てえ石が、ころがっている、ときいたことがありますぜ」

「道のまん中に、置いてある。大名行列も、それを避けて、通る」

「石が、夜泣きするって、莫迦くせえ」

「石の地蔵に願かけする莫迦もいるぞ」

「固い約束したさのねがい——って、意味がありまさ、石の地蔵には。どだい、石の地蔵は、なんにも、口をきかねえところが、しゃれているんですぜ。石ころめが、夜中に、しくしく泣きやがるなんて、くそ面白くもねえ」

「木の葉が沈んで、石が浮くのが、浮世というものだろう。石も哭け母を恋う子は西東、か」

狂四郎は、洩らした。

夜泣き石の由来は——。

むかし、金谷の里に、女がいた。臨月の身重で、小夜の中山を越えて行こうとして、盗賊に遭い、殺された。そこへ、通りすがりの法師が、ふびんに思い、女の腹をさいて、嬰児をとり出してやった。その女が、息絶えて凭りかかっていた石が、子を想うて、夜毎、泣いた。

その子は、成年となって、ある家に奉公したが、起居の間に、常に、

「命なりけり小夜の中山」

と、口ずさんでいた。

主人がききとがめて、理由を訊くと、若者は、おのが出生の悲惨を語った。

主人は、しばらく、考えていたが、

「お前の母を殺したのは、隣家の男かも知れぬ。十五年前、どこからか、小袖を持って来たが、それに血汐がついていたのを見たことがある」

と、告げた。

若者は、その夜、隣家に押し入り、

「命なりけり」

という歌を唱えつつ、敵を討った、という。

この伝説は、狂四郎の胸を打つものがあったのである。

「弥助の家を、教えてくれぬか？」

小川に入って、小魚を獲っている十歳あまりの小児に、声をかけたとたんであった。

小児は、狂四郎をふり仰いで、みるみる恐怖の色を顔いちめんにあふらせると、流れへ、ざるを拋り出しておいて、むこう岸へ匍いあがり、脱兎のごとく逃げ出した。

「なんでえ、あの餓鬼は！」

金八が、あきれて、舌打ちした。

「おれの貌は、よほど陰惨とみえる」

狂四郎は、苦笑した。

しかし、おのが貌が小児を戦慄させたのではなかったことは、すぐあきらかになった。

竹の束をかついで、山から降りて来た農夫を呼びとめ、同じ問いを投げるや、その農夫もまた、顔面に、ひどい怯えを示し、無言であと退りすると、竹の束を路傍へ棄てておいて、一目散に駆け去ったのであった。

――何かが、起ったな。

狂四郎は、喚きたてる金八を制しておいて、村の景色を見渡した。

平地といえば、小川をはさんで、せいぜい二三町歩の田をひろげているばかりで、藁葺き家は、すべて、左右の山の斜面に、しがみつくように、点々とちらばっていた。目に入る限りでは、五十戸に足りぬ。

狂四郎は、孫娘の便りの中に、家の庭には、何百年もの楠の巨樹がある、と記されていたのを思い出した。

「あれらしいな」

狂四郎は、この村径が行手に消えている曲り角から右方へすこし登った斜面に、一本だけそびえている巨樹をみとめた。

そこへ到着してみて、金八が、

「なんでえ、これア！」

と、大声をあげた。

高い竹矢来が組まれて、その小さな古びた家を、包囲していたのである。

竹矢来をめぐらされるのは、武家が閉門を仰せつけられた場合に限ってのことである。百姓の家が、このように厳重な咎めのかこいをされるとは、絶えてきかぬことであった。

「おーい！　誰か、いねえかい？」
金八が、呼んだが、こだまがかえって来たばかりであった。
雨戸は閉じられ、それも、X形に竹が打ちつけられてあった。
「墓地へ行こう」狂四郎は、歩き出した。
「墓地って、どこにあるか、おわかりですかい？」
「たぶん、寺の墓地であろう」
狂四郎は、弥助から、自分の家は、ただの百姓ではなく、天正の頃、武田家の家臣で、武田家が滅びたのち、甲州から遁（のが）れて、菊川へ落ちて来た、ときかされた記憶があった。
それだけの由緒のある家ならば、そこいらの山かげではなく、寺の墓地に、代々の墓を並（なら）べているに相違ない、と思われた。
寺は、反対側の山腹に、かなり立派な屋根をそびえさせていた。
山門をくぐった時、どこかの物蔭で、こちらのやって来るのをうかがっていたらしく、バタバタと跫音が、奥へ駈け込んだ。
境内を横切ろうとすると、いかにも俗気たっぷりの顔つきをした住職が、行手をはばんだ。
「どちらへ、参られる？」
「弥助の墓へ詣でる」
「それは、おことわりつかまつる」
「何故だ？」
「理由は、其許（そこもと）の方で、すでにご承知の筈じゃ」
「あいにく、江戸から、いま、ここへ到着したばかりだ。何が起ったか、こちらは、何もきいて

居らぬ」

「ご存じないならば、それでもよい。ともかく、弥助の墓へ詣でることは、かたくおことわりつかまつる。早々に、この村から立ち退かれたい」

「弥助が、どのような罪科を蒙ったか知らぬが、こちらは縁故の者だ、墓詣でをするのをこばまれて、ひきさがるわけには参らぬ。いかなる悪人も、死に絶えてしまえば、それを回向してやるのが、貴僧のつとめであろう。縁故の者が、詣でて来たのを、拒絶するとは、解せぬことだ」

狂四郎としては、納得し難いのは、三年前、祖父の訃を報せて来た孫娘の便りには、きわめてやすらかな往生であったこと、名主はじめ村の主だった人々が、親切に、武家であった家の格式を尊重して、葬いを出してくれたのが有難かったことが記されてあったのである。

弥助の家が、遽に咎めを蒙ったのは、ごく近頃のことに相違ない。弥助自身は、知らぬことなのだ。

孫娘は、捕えられて、投獄されている、と想像される。

狂四郎の肚に怒りが生じていた。

住職は、狂四郎がまっすぐに進んで来るや、両手をひろげた。

「通ること罷りならぬ！」

しかし、次の瞬間、その法体は、あっけなく、地べたへ崩れ落ちていた。

墓地は、せまく、墓石の数もすくなかった。

弥助の家は、大須賀という姓をもっていたので、すぐに、最も広く地面を占めて、二十数基並んでいるのが、それと、判った。

狂四郎は、その列の一番端に、横倒しになっている肌の新しい墓石を、視た。

――弥助のだな。

直感した。

歩み寄ってみると、はたして、そうであった。

墓穴は、掘りかえされ、ぽっかりと大きくあいているばかりであった。

――どういうのだ？

狂四郎は、じっと、穴底を見下した。

「ひでえことをしやがる！」

金八が、唸った。

その時、山門の方が、雑然となった。多勢の村民が、押し寄せて来た模様である。

「先生、どうしやす？　百姓ども、一人のこらず、片づけやすか？」

「………………」

狂四郎は、なお、無言で、墓穴を見下しているばかりであった。

掛川梵鐘

百姓の群が、境内で、口々に何か叫びたてているのを、きき乍ら、金八は、墓穴をじっと見下して動かぬ狂四郎を、足もとに火のついた苛立たしさで、見戍った。

「金八――」

狂四郎が、ようやく、その姿勢のままで、呼んだ。

「へいっ？」
「その竹薮をくぐり抜けて、百姓たちに見つからぬようにして、庄屋の家へ、忍び込め」
「合点！　で、どうするんで？」
「庄屋の示唆によって、百姓たちが押し寄せて来たか、どうか——。まず、さぐってくれ。ついでに、なぜ、弥助の家が竹矢来で閉じられ、墓があばかれたか？　そして、わたしが、どうして、このように嫌悪されているのか？　いや、それよりも、おつうが何処へ拉致されたか——庄屋の様子をのぞき見していれば、見当がつくかも知れぬ」
「わかりやした！」
「行け！　わたしも、あとから行く」
金八は、身ごなし軽く、竹薮へとび込んで行き、たちまち、姿を消した。
狂四郎は、ゆっくりと踵をめぐらすと、墓地を出た。
本堂と庫裡とをつなぐ渡廊のむこうに、百姓の群は、ひしめいていた。
手に手に、得物を摑んでいた。
その中には、女や子供も交っていた。
狂四郎が、渡廊をへだてて、立つと、騒ぎたてていた群は、急に、ひそと口を緘み、目ばかり光らせて、睨みつけた。
狂四郎は、ほんのしばらく、沈黙をまもって、憎悪と嫌厭に燃えた視線をあびるにまかせていたが、急に、足をふみ出した。
百姓の群に、殺気がみなぎった。
渡廊の下をくぐり抜けた狂四郎は、

「誰でもよい、わたしの問いに答える者が、前へ出てもらおう」

と、もとめた。

しかし、誰一人出て来ようとせぬ。

狂四郎は、やむなく、数十人を対手として、話さねばならなかった。

「わたしは、むかし、江戸で、弥助の世話になった者だ。京へ上る途次、墓詣り（はかまいり）をしたくて、この里へ降りて来た。……それだけの目的で参った者に、お主ら、村ぐるみで、襲って来たのは、どうしたことか？　弥助の家を竹矢来でかこい、墓をあばいたのは、お主ら村人のしわざか？　何が故の、このむごたらしい仕打ちか？……こたえてもらおう」

その質問に対して、返答はなかった。

重苦しい無言の睨みあいののち、一人が、口火をきった。

「去（い）んでくれ！　すぐに、この村から出て行ってくれ！」

とたんに、一同が、一斉に口をひらいた。

いずれも、

「出て行け！」

「消え失せろ！」

「おまえらに来られては、迷惑じゃ！」

「はよう、去（い）んでしまえ！」

「疫病神（やくびょうがみ）じゃ、おまえは！」

と、叫びたてて、追いはらう理由を告げる者はいなかった。

狂四郎は、しばらく、吸声（どせい）をあびせられるにまかせた。

そのうち、少年の一人が、「ばてれんめ!」と叫ぶのを、ききとがめて、狂四郎の直感が働いた。
——この村人たちは、おれを伴天連と視たか。
たしかに、こちらの異相は尋常ではない。
この菊川宿は、山峡の寒村ではあっても、ただの僻邑ではない。大井川が川止めになれば、東海道を道中するあらゆる種類の人が泊る。あるいは、将軍家へ謁見するために、長崎のオランダ商館から、異邦人も道中して来て、泊ったであろう。
村人は、当然、その異邦人とこの眠狂四郎との貌の相似をみとめたに相違ない。
これは、この菊川宿の村人たちが、耶蘇教徒を極度に懼れなければならぬ出来事が、ごく近年に起った証左である。
その出来事が、弥助の家で起った、と推測できた。
——弥助が、耶蘇教徒であった筈はないが……。
祥雲寺の寺男を、三十年もつとめた弥助であった。庭を掃き乍らも、絶えず、「南無あみだぶつ」と唱えていたのを、狂四郎は、おぼえている。
しかし——。
あきらかに、弥助の家で、耶蘇教にまつわる何事かが起ったことを、狂四郎は、少年の叫んだ一語で、さとった。
狂四郎は、百姓の群に向って、まっすぐに進んだ。
百姓たちは、喚きたて乍らも、狂四郎の前から退いた。

一瞬――。

狂四郎は、「ばてれんめ！」と叫んだ少年の手くびを、左手に摑んだ。

少年は、悪鬼にでも捕えられたように、ひーっ、と悲鳴をあげ、蒼白になってわなないた。

そのまま、狂四郎が、少年をひきたてて行こうとすると、背後から、

「おどれがっ！」

逆上した喚きとともに、鍬が、振り下された。

一同は、狂四郎の身が、わずかにひねられた、とみとめたばかりで、鍬が、柄なかばから両断されて、宙へ飛ぶのを目撃しなければならなかった。

狂四郎は、無想正宗を、しずかに鞘に落すと、見まわして、

「無駄な反抗は止すがいい。この子供は、庄屋の家への案内役にする」

と、云った。

毅然とした狂四郎の態度に、百姓たちは、圧倒された。

狂四郎は、百姓たちの行列を従えるかたちで、村径を歩くことになった。

庄屋の屋敷は、弥助の家の前を通り越して、さらに二町ばかり、坂を登ったところに在った。

高い石垣を築き、門は設けずに、屋敷に出入する道をまっすぐに通して居り、庭さきに立てば、何者がやって来るか、一目で判るようになっていた。

狂四郎が、その一筋道に入って、半町の距離に近づくと、たっつけをはいた初老の男が現れて、鉄砲をかまえた。

狂四郎は、かまわずに、進んだ。

少年が悲鳴をあげて、もがいたので、狂四郎は、その手をはなした。少年は、哭きわめきつつ、

後方で足を停めた百姓の群へ、駆けた。
距離がさらに縮まり、およそ二十歩の近くになると、鉄砲を構えた者は、
「そこで、停まれ！　停まらぬと撃つぞ！」
と、叫んだ。
狂四郎は、しかし、平然として、進む。
「撃つぞっ！」
男は、絶叫した。
狂四郎は、無言である。
轟然、と銃口が火を噴いた。
狂四郎の姿は、依然として、地上に立っていた。
ただ、ちがっていたのは、左手で、腰の大刀を、鞘ごと二尺ばかり、さしのべていたことである。
飛来した弾丸を、その鍔で受けて、はじいたのである。鍔がわずかに歪んでいるので、明らかであった。
撃った方が、茫然となって、立ちすくんだ。
狂四郎は、近づくと、
「お主、庄屋だな」
と、たしかめておいて、そのわきを抜けると、さきに、母屋に入った。
いくつかの恐怖の目をあびつつ、座敷に通り、床柱を背にして、端座し、腕を組んだ。
庄屋は、なかなか入っては来なかった。門口で、さわぐ百姓たちの声が、きこえるばかりであ

った。

四半刻(とき)も、待たされたろうか。

ようやく、庄屋が姿を現わした。

襖を開くと、その敷居の上に立って、

「お前様は、何者じゃ？」

と、睨み据えた。

「無法に押し入っても、盗賊でもなければ、狼藉(ろうぜき)を働く者でもない。対座して談合できぬ筈はあるまい」

そう云われて、庄屋は、しぶしぶ、畳数をへだてて、坐った。

「わたしは、眠狂四郎という、江戸の素浪人にすぎぬ。伴天連が化けたのではない、と安心してもらおう」

「…………」

「つい先頃、弥助の家で、何事かが起った。それを、教えてもらおうか」

「わしらの口からは、申されぬ」

「口を割れば、祟(たた)りでもある、というのか？」

庄屋は、拒否した。

「…………」

「こたえぬ、というのであれば、やむを得ぬ。……弥助の家を、竹矢来でかこい、その墓をあばいたのは、庄屋たるお主のしわざか？」

「…………」

「これも、こたえぬのか」
「わしらがたのみは、お前様に、早々に、この村から立ち退いてもらうことじゃ！」
「追い立てられずとも、居すわる料簡など毛頭ない。但し、そちらが、こたえぬのであれば、三日が十日になっても、動かぬかも知れぬ」
「無体な！」
「そちらの出様ひとつで、こっちの態度がきまる、と申して居る。数知れず人を斬っている無頼の徒だ。いざとなれば、お主の口を割らせる方法も知って居る」
「わしらは……」
庄屋は、遽に、悲痛な面持になると、喘ぐように云った。
「お前様と争いを起したくないから、早う去んで欲しい、と願って居るのじゃ。お前様が、この菊川に現れなかったことにして、わしらは、忘れてしまいたいのじゃ」
「わが身を守りたいために、石地蔵のように口を緘みたい気持は、判らぬでもないが、こっちは、このまま、ひきさがるわけには、参らぬ。問うべきことは、問う！　金八――」
狂四郎が、呼んだ。
とたんに、
「ほい、来たっ！」
返辞が、天井から降って来て、庄屋を、愕然とさせた。
天井板をはずして、とんと跳び降りて来た金八は、にやっとして、
「庄屋の旦那、猟師を兼ねたところまでは上出来だが、鉄砲を撃ちゃ、仕損じるし、天井裏に狐がひそんでいるのも気がつかねえとは、お気の毒でござんした。あっしゃ、藤八――じゃねえ、

金八ってんで、拳は拳でも、これでさ」
と、こぶしを突き出し、人差指をひょいと曲げてみせた。
それから、ふところから、一枚の書状をとり出して、狂四郎に渡した。
「あっ！　そ、それは！」
狼狽した庄屋が、叫び乍ら、立ち上って、駆け寄ろうとするや、
「じたばたするねえ、庄屋！　往生際がわるいぜ。種はあがったんだ。度胸をきめて、腰を据えろい！」
江戸っ子独特の啖呵をあびせかけておいて、金八は、庄屋の前に、胡坐をかいた。
狂四郎は、書状を披いてみた。

切支丹類族改め致し様の事
此度、其方支配在所故弥助儀並びその孫つう儀、切支丹宗門徒たる旨訴え出たること殊勝の儀に候得共、永年之に気づかざる儀不届至極の事に候わば、向後懈怠なく相改め申候故を以て、もし御法度の切支丹宗門之者に疑わしき者、有之候節は、村中の者を召捕え厳しく吟味仕り候間、覚悟致す可く、詮議の沙汰仍而如件
太田摂津守
郡奉行

「そうか――」
狂四郎は、書状を巻くと、庄屋を見据えた。

「庄屋、もうかくしても、はじまるまい。弥助が、切支丹であったという証拠を、どうして発見した？　云えっ！」

すっと、立った狂四郎は、金八を退かせて、庄屋に迫った。

「云わぬと、首が胴から、離れるぞ！」

庄屋は、恐怖を全身にあふらせつつ、ついに語った。弥助が逝き、孫娘のおつう一人になったので、村の若者が、夜這いをしかけ、抵抗されて、もみ合ううちに、その頸にかけていた十字架を、偶然、手摑み、奪って逃げた。若者は、それが何を意味するか知らぬままに、大井川の人足をやり乍ら、その十字架を頸にかけていた。川役人が、これを発見して、大騒動になり、弥助の家は徹底した捜索を受け、墓もあばかれ、勿論、おつうは捕えられて、掛川城下へつれ去られた、という。

その話をきき乍ら、狂四郎の顔は、暗く沈んでいた。

――おれの母が、弥助に与えたのであったろうか？

しかし、そんな疑念に惑っているいとまはなかった。

「金八、参ろう」

狂四郎は、庄屋へ一揖しておいて、足早におもてへ出た。

さわぎたてていた百姓の群は、狂四郎の姿をみとめると、急に、ひっそりとなった。

固唾をのんで、凝視する百姓たちへ、一瞥もくれずに、通り過ぎた狂四郎は、野道へ出ると、金八に、

「おつうは、掛川の城下で、投獄されている、ときいたか？」

と、訊ねた。

「それが……、庄屋と女房の、せわしい会話をぬすみぎきしただけじゃ、どこへ連れて行かれたんだか……」

金八は、ちょっと、申しわけない面持になったが、急に、

「そうだ！　思い出した。庄屋の野郎、女房から鉄砲を受けとった時、妙なことを云やがったんでさ」

「なんと云った？」

「三尺坊へさしあげた人身御供だから、どうとかって——。それから、鐘が、百八つ鳴れば、それで万事、済むことだから、どうしても、あの浪人者めを——つまり、先生のことでさ——撃ち殺して、郡奉行には、知られないように、屍骸をかくしてしまわなければならん、と……。先生、この意味、わかりやすかい？」

「およそ、判った。三尺坊とは、秋葉権現の護神のことだろう」

前方へ据えた狂四郎の眼眸の光が、鋭く、冷たく、冴えたものとなっていた。

秋葉山。

その名は、大登山秋葉寺といい、曹洞宗であった。幽邃閑寂の山峰で、もとより女人結界の地であった。

掛川から麓までおよそ九里。但し、この一里は、五十一丁をいい、さらに、麓から山上まで五十丁あった。参詣道は、二筋あり、ひとつは山越えで、いまひとつは平地であったが、いずれも大層な悪路であった。

この山の護神を、三尺坊といい、神霊となる前は人間であった、という。

信州の生れで、その母親は観音信者で、普門品を読むこと数百巻に及び、某夜、大悲三十三身の中で迦楼羅身を現じ給う夢をみて、みごもった。そして、生れたのが三尺坊であった。長じて出家して、越後の蔵王堂十二坊中の三尺坊の住職となったので、そう称された。

不動三昧の法を行い、八千茎支木を焚く一座を八千座つとめ、その功徳によって霊相があらわれ、三尺坊は、ひそかに期していた飛行自在の神通力を得た。

某日、一匹の白狐が、何処からともなく現れたので、三尺坊が、これに乗るや、白狐の降りたのが、この秋葉山であった、という。

こういう伝説は、時世が下るにつれて、つぎつぎと奇怪な行事を生み出す。

境内北隅の鐘楼の大梵鐘を、彼岸会に、百八つうち鳴らすにあたり、人身御供をささげる行事も、そのひとつであった。

今日が、その日に当っていた。

行事が行事ゆえに、境内には、秋葉権現の関係者二十人あまりが、三尺坊が乗った白狐を摸して、白狐の面をかぶり、白い法衣をまとって、地べたに坐っているだけであった。

大梵鐘は、床上二尺まで、吊り下げられてあった。

撞木の太綱を握っているのは、掛川の城下からえらばれた二十歳の筋骨たくましい若者であった。

これは、褌ひとつの裸形であった。

鐘楼をとりまいた白狐たちが、一斉に、普門品を誦えはじめた。

はだかの撞き手は、ぐっと、綱を引いた。

最初の一打が、いんいんと、鳴りわたった——その時であった。

「うっ！」

撞き手が、悲鳴をあげて、その場へ、蹲（うずくま）った。その右手の甲には、小柄が、突き立っていた。

白狐たちが、愕然となって、総立ちになるや、境内の端から、

「騒ぐな！」

一喝が、とんで来た。

狂四郎は、さえぎろうとする二三人を、目にもとまらぬ迅（はや）さの手刀で、地に崩れ込ませておいて、鐘楼へ、とび上った。

あとに跟（つ）いて来た金八も、とび上るや、すばやく、梵鐘の中に、くくりつけられていた一人の娘を、ひき出した。

娘は、ぐったりと、死んだようになっていた。

「この娘は、おれが、もらって行く。文句がある手輩は、容赦なく、斬る！」

狂四郎は、冴えた声音をはなった。

白狐のうち、十数人が、得物を取りに奔（はし）った。

狂四郎は、金八におつうを背負わせて、さきに行かせ、悠々と境内を横切って、去ろうとした。

それに向って、鉄輪を嵌（は）めた六角棒をひっ摑んだ白狐の群が、殺到して来た。

しかし、白狐たちが、思い知らされたのは、後日の語り草ともなるべき異相の浪人者のおそるべき手練ぶりであった。

襲いかかった白狐たちは、いずれも、その六角棒を、右手で摑み締めたところから二寸とはなれぬあたりを、たったの一太刀で、両断されたのである。

その日の黄昏刻(たそがれどき)——。

狂四郎と金八は、おつうをともなって、四十八瀬の小川を越えて、参詣道から、掛川をむこうにのぞむ街道へ出、秋葉の常夜灯にあかりの入った茶屋へあがっていた。

ひっそりと俯向(うつむ)いたおつうへ、狂四郎は、ふびんの視線を呉れて、

「そなたに縁故の者が、どこかにいるのなら、この男に送らせるが……」

と、云った。

おつうは、かぶりを振った。

「弥助を喪(うしな)ってから、そなたは、天涯孤独になった、というのか？」

「はい——」

おつうは、うなずいた。

金八が、脚を組んで、首をひねった。

「弱ったね。これが、江戸なら、これほどの器量佳(よ)しは、引く手あまたなんだが——もったいねえや」

おつうは、顔を擡(もた)げて、狂四郎を視た。

「あの……、長崎へ参れば、ローマとやらへ行く便船がございましょうか？」

「どういうのだ？」

狂四郎は、眉宇(びう)をひそめた。

「爺(じじ)が十字架(くるす)とともにのこしてくれた書物に、ローマのことが、書いてございました」

「……？」

「そこへ、参りたく存じます」

それをきいて、狂四郎は、納得した。

おつうが、大梵鐘の中に入れられて、撞き殺されようとした理由が、判ったのである。

おつうは、郡奉行所で、踏絵を拒絶したに相違ない。

――たった一冊の書物に教えられて、この娘は、切支丹になったのか！

苦汁を嘗むに似たにがい思いが、狂四郎の胸にあふれた。

――この十年、おれは、無数の人命を奪い乍ら、なお、六道の巷にさまようて居るのに、この娘は、たった一冊の書物によって、遠くローマへ渡りたいと願うほどの志を得たとは！

袋井賭場

眩しい陽ざしをさけて、手拭いを吹き流しにかぶった女が、なにやら思案に沈んだていで、むこうから歩いて来て、肩をかるくぶっつけ、

「あ――ごめん下さいまし」

と、腰をかがめておいて、すれちがおうとした――その時、こちらは、もう、女の手くびを摑んでいた。

女のその手には、こちらの懐中から抜き取った革財布があったのである。

江戸から六十里――袋井宿の、埃をかむった椎茸を店さきにならべたうす穢い小見世の並んだ路上でのことであった。

人影は殆ど見当らぬ午さがりの、この暑気は、もうあともどりしないものと思われる陽光の中で、宿場は、ねむったようにひっそりとしていた。

「白魚お仙ともあろう名うてのぬきしも、江戸払いになると、こうも腕が落ちるものか」

眠狂四郎に、あざけられて、女は、そむけていた顔をまわして、手拭いの蔭から、視かえした。

並の顔だちだが、切長の眸子や薄い唇の端が、きりりと引き締っていて、これが鉄火な冴えた色香になっているのは、江戸育ち独特のものである。襟もとや、肩の線が、すっきりと際立っているのも、宿場から宿場を渡りあるく女道中師などの持たぬ婀娜っぽさであった。

「流石は眠狂四郎の旦那だねえ。とっつかまえたとたんに、あたしってことが、判っちまった」

両国の垢離場を縄張りにしたこの女掏摸とは、旧知であった。

三年ばかり前、捕えられて、江戸払いになった。江戸払いというのは、日本橋を中心にして、北の方へ二里、南の方へ二里、四里四方のあいだは住むことを許されぬことをいう。

尤も、江戸払いになっても、江戸に住むことは許されぬが、草鞋、脚絆、甲掛けの旅姿になっていれば、江戸市中を通り抜ける、という意味にとられ、見遁してもらえる。したがって、大方の江戸払い者は、平気で江戸へとどまるのを常とした。

しかし、この白魚お仙は、江戸払いになると、江戸から姿を消して、ついぞ、知り人の前には、舞い戻って来なかったのである。

狂四郎は、お仙の手をはなすと、

「欲しければ、呉れてやろう」

と、云いすてておいて、歩き出した。

「いえ、旦那——。どじを踏んだからには、頂くわけには参りません。お返し申します」

「江戸の巾着切の意気地だけは、まだすててはいないようだな」
薄ら笑っておいて、ふところ手になって、歩いて行く狂四郎に、お仙は、なんとなく、したがった。
俯向いて、足もとへ視線を落し乍ら、
「旦那をお見かけして、あたしは、なつかしかった」
呟くように、云った。
「それで、掏ってみることにしたか。ぬきしの挨拶か」
「いえ、そんな……」
お仙は、弁解しかけて、口ごもった。
——何やら、思案にあまる事情を背負っているようだ。
両国の垢離場で、水際立った腕の冴えをみせていた頃は、明るく陽気な女であった。
それが、江戸を追われて、いつの間にか、暗い翳を刷いた女になっている。
狂四郎は、白馬の暖簾を見かけると、すっと、入った。
お仙は、ちょっと、ためらっていたが、つづいて入って来た。
酒がはこばれると、お仙は、銚子を把って、酌をした。
狂四郎は、黙って、四五杯あけてから、お仙へ、冷たい眼眸を当てた。
「男か？」
唐突に、訊ねた。
「え——？」
お仙は、怯じるような顔色になった。

「お前を、江戸へ戻らせずに、苦労させているのは、男か、ときいている」
「苦労――している、と自分じゃ思っていません」
「三年前のお前とは、ちがうぞ」
ずばりとあびせられて、お仙は俯向いた。
それから、なげ出すように、
「旦那――。女って、男に惚れちまうと、からきし、めくらになるものなんですねえ」
と、云った。
「お前の男は、だにか毛虫のたぐいか？」
「いえ！」
お仙は、顔を擡げて、つよく、かぶりを振った。
「ちがいます！　そんな男じゃありません」
「ぬきしの情夫が、まさか、堅気のお店者や旅籠の番頭というわけでもあるまい。浪人か？」
「いいえ。無職です」
「兇状持ちの博徒なら、なるほど、ぬきしには、ふさわしい対手だ」
「旦那！」
お仙は、きっとなった。
「やくざにだって、こんな莫連を心底から惚れさせる男は居りますよ。……あたしゃ、惚れたんだ。死んでもいいくらい惚れたんだ！」
「………」
狂四郎は、女の必死な表情に、みじんのいつわりもない、一途に想いつめた美しいものを、看

た。

「情婦に、むかしの知り合いの懐中を抜かせて、みつがせるような男でも、惚れてしまうと、めくらになるか」

狂四郎は、冷笑した。

数年前、狂四郎は、この女と、たった一度、柳橋の船宿で、人目を忍んだことがある。その時、お仙が、「あたしは、一度や二度、肌身を許したからといって、惚れやしませんよ」と云いきったのを、狂四郎は、忘れてはいない。

「ちがうんです、旦那——。あたしが、旦那のふところを狙ったのは、あたし自身が、旦那をお見かけして、とっさに、思いついたことなんです」

「しかし、掏った金は、男の手に渡されるのだろう」

「それア……」

お仙は、がっくりと肩を落した。

「あの人、いまごろ、この袋井の賭場で、素っ裸になっている筈です」

「博奕の資金を、情婦が、他人の懐中から奪って来てやる。見上げた心掛けだ」

「旦那! 云っちまおう。あの人は、惚れた女が、ほかにいるんです。あの人の子供を育てています。その母子を救うために、金が要るんです」

「どういうのだ? それは、お前が、虚仮にされていることにはならぬのか?」

「なりませんさ。あたしゃ、承知の上で、あの人のために、なんとか、つくそうと思っているん

だから……。男に惚れた女心なんて、旦那のような冷たい御仁に、わかりやしないんだ」

「わかろうとも思わぬ」

「旦那！　お願いです！」

お仙は、両手を合せた。

「いくらでもいいんです。貸して下さいな。屹度お返しいたします。それとも、あたしのからだでよけりゃ、売ります！」

「たわけ――」

狂四郎は、女の手から銚子を取ると、盃についだ。

「事情をきいて下すったら、諾と云って下さるにちがいない」

「………」

お仙は、語りはじめた。

安五郎というその男は、ぐれてやくざになった生来の性悪ではなかった。

この袋井の奥の一宮村に、国幣小社の小国神社があり、遠州の一の宮となった由緒ある神社であるが、安五郎は、そこの御師の伜であった。

御師は、神宮・神社に属し、依頼を受けて代祈禱をなすもの、すなわち祈禱師であった。公儀から「師職」と公に呼ばれる御師は、霊符、守札、巻数などを持って、地方を巡り、米銭の寄進を受け、鞘をとって、神社へ届ける仕事もするし、代神楽もつとめ、また参詣人を泊める宿屋や、土産物店も経営することが許されていた。

小国神社は、遠州の一の宮といっても、ごく小さな神社であったので、そこの御師など、たかの知れたものであった。しかし、それなりの格式はそなえていた。

安五郎は、当然、御師を継ぐ身であったが、貧しさのために、少年の頃から神社の掃除人をつとめていた。

小国神社の神職には、美しい妹がいた。安五郎にとって、おつやというその美しい娘は、女神のような存在であった。

おつやが、十八歳の春に、浜松在の郷士の家へ嫁いだ時、安五郎は、絶望のあまり、七日間も絶食したものであった。

半年後、おつやが、何の理由か、離縁になって、もどされるや、安五郎の心は、再び、陽が当ったように明るさをとりもどした。

安五郎が、一夜、おつやの寝部屋へ忍び入ったのは、それから一年すぎてからであった。

おつやは、すでに安五郎の心を知っていて、こばまなかった。

ひそかな逢瀬は、半年つづいた。

おつやから懐妊したことを告げられた安五郎は、駆落ちを迫った。おつやは、しかし、気の弱い女であった。迷っているうちに、妊娠していることが、兄の神職に露見してしまった。

当然——騒動が起った。

抜刀して追った神職は、安五郎をかばおうとする父親の御師に、重傷を負わせた。逆上した安五郎は、その刀を奪って、神職を斬って、逃亡した。

しかし、この殺傷事件は、神社の面目にかかわる不祥事故に、表沙汰にされず、安五郎は、追われる身となることからはまぬがれた。

父親の御師も、神職も、その重傷がもとで、一月あまり後に相次いで逝った。

やがて、二の宮の神職の次男が、あたらしく、小国神社の禰宜に迎えられ、おつやの婿となっ

て、世間ていをとりつくろった。すなわち、生れた女児は、その禰宜の子にされたのである。

おつやの婿となった禰宜は、好人物であったが、ただひとつ、欠点があった。神に仕える身にも拘らず、無類の博奕好きだったことである。

袋井一円を縄張りとする博徒の親分が、この博奕好きを看過す筈はなかった。

「小国神社の大夫さんが、博奕のかたに、宝剣を取られたそうな」

と取沙汰された頃には、三百両の借金ができていた。

七年経って、袋井へ、こっそり舞い戻って来た安五郎が、まず耳にしたのは、

「小国神社の大夫さんが、借金を払うには、お嬢を、江戸の吉原へ売るよりほかにすべはないそうな。袋井の五郎蔵親分が、そうしてもらおう、と脅しているらしい」

その噂であった。

今年六つになるおつやの子は、人形のような可愛らしさと評判をとっていたのである。

安五郎は、おのが血をわけた子が、吉原へ女郎に売られるかも知れぬ、ときいて、かっとなった。

——よし！　おれが、三百両の金をつくってみせる！

そう決心したのであったが……。

袋井の五郎蔵の賭場は、袋井から半里ばかりはずれた、駿遠三の曹洞宗の惣禄である可睡斎という禅刹の裏手にある草庵であった。

そこはもと、座禅堂であったが、袋井の五郎蔵が、多額の寄進をして、ゆずり受け、賭場にし

たのである。
寺側としては、迷惑しているが、十手捕縄もあずかる二足草鞋の五郎蔵の威勢に押されて、見て見ぬふりをしているのであった。
この日も——。
盆蓙をかこんで、二十数人の町人、職人、無職者が入れ交って、二個の賽の目に、血走った視線を集中していた。
壺振りと中盆が、盆蓙をへだてて相対し、半を張る者たちが、壺振り側に、丁を張る者たちが、中盆側に、座を占めて、この金張りは、もう昨日の午から、休みなく、つづけられているのであった。
「壺っ！」
と叫ぶ中盆の声音も、しゃがれていたし、籐の壺皿に賽二個を投げ入れて、ぱっと伏せる壺振りの手つきも、かなりのろくさいものになっていた。
壺皿を伏せて、ツツ……と二三度、すべらせる刹那に、張り方は、思いきって張るか、見送るか、肚をきめる。この刹那のカンが狂うと、負けつづけることになる。
客の中に、丁側に褌ひとつになった男が、いた。
これが、安五郎であった。
その背中に、くりからもんもんはなく、ただ、左腕上膊に、崩し仮名で、
「つやいのち」と彫っているだけであった。
顔面は土色と化し、窪んだ眼窩に、憑かれたような狂気じみた光を据えていた。
「勝負っ！」

中盆の懸声とともに、壺振りが、ぱっと壺を挙げた。
ざわめきの中で、安五郎だけが、茫然と声もなく、遽に、双眸から光を失った。
夜半までは、七八十両も儲けていたのが、夜明け前から負けつづけ、ついに、長脇差をかたに、代貸から借りた五両も、この勝負で、失ってしまったのである。
「御師の――、出直すことだな」
代貸に云われて、われにかえったように、安五郎は、きょろきょろとなり、
「あ――ああ」
と、頷いて、腰を上げかけた。
すると――。
壺振りのうしろから、安五郎の膝の前へ、小判が音たてて、投げられた。
安五郎は、びっくりして、顔を擡げた。
異相の浪人者が、そこに立っていた。
「もう一度、やってみるがいい」
安五郎は、
――夢か？
と、せわしく、まばたきして、
「ど、どなたか存じませんが、有難う存じます。お借りしやす」
と、頭を下げた。
投げられた金は、十両あった。
安五郎は、それを摑んで、半側へ移った。

まず、半分の五両を張ろうとすると、
「けちけちするな」
背後から云われて、
「へいっ！」
と、十両ぜんぶを張った。
十両は、二十両になった。二十両は、忽ち四十両に増えた。
一刻が、過ぎた。
安五郎の前には、百二十両の金が、山となっていた。
袋井の五郎蔵が入って来たのは、その時であった。
安五郎の勝ちっぷりを、じろりと一瞥した五郎蔵は、代貸に目くばせした。
代貸は、チンと鉦を鳴らして、
「本日の盆蓙は、これまででござんす。いずれさんもご苦労さんでござんした」
と、挨拶した。
一同がぞろぞろと立つのを待って、五郎蔵が、
「御師の——、遠州の渡世定法を知っているだろうな」
「なんだ？」
「百両以上勝った客人とは、貸元が、その有金と、一回勝負をする」
「よしっ！」
安五郎は承知した。
五郎蔵は、壺振りの座を占めた。

代貸から新しい籐の壺皿と賽を受けとった五郎蔵は、それを、安五郎の前へ、置いた。
「あらためてもらおう」
安五郎は、壺皿が穴熊のような曲物でなく、また、賽が素盲でもないことをたしかめてから、
五郎蔵に、返した。
「振るぜ、御師の——」
「おう——」
安五郎は、首を肩へめり込ませて、野獣が獲物を狙うような気色をみなぎらせた。
眠狂四郎は、遠い場所をえらんで、壁に凭りかかったまま、その勝負を、冷やかに見戍っている。
五郎蔵は、ごく無造作な手つきで、二個の賽を壺皿へ投げ込むと、莚の上へ伏せて、ツツ……
と、すべらせた。
「勝負!」
これは、金張り銀張りとちがって、張りかたが、丁か半を、定める。
「半っ!」
安五郎が、叫んだ。
五郎蔵は、ぱっと壺皿を挙げようとした。
瞬間——鋭い唸りとともに飛んで来た小柄が、壺皿を、斜めに刺しつらぬいた。
「何をしやがるっ!」
睨みつける五郎蔵に、狂四郎は、冷笑をかえした。

「小博奕打ちにしては、鳴針入りの賽ころを使うのが、なかなか上手だ、とほめておく」

代貸ほか、乾分たちが、血相変えて突っ立ったが、狂四郎は、それらへは目もくれず、宙を唸って飛びまわるいっぴきの蝿を、視線で追った。

一同は、ちょっと気を抜かれた。

一瞬、無言の気合とともに、目にもとまらぬ迅さで、白刃が鞘走った。

蝿は、ま二つになって、盆蓙の上へ落ちた。

すべての視線が、それに集中した。

五郎蔵が、戦慄の顔を擡げた時には、すでに、無想正宗は、その腰におさまっていた。

「親分――取引きをいたそう。その壺皿の中を、こっちは覗かぬかわりに、小国神社の禰宜の借用証文を巻いてもらおう」

次の日の午後――。

袋井宿を出た狂四郎は、河合橋を渡りかけて、ふと橋袂にうずくまっている女の姿をみとめた。

狂四郎は、ゆっくりと、近づいて行った。

「どうした、姐御？」

声をかけられて、お仙は、顔を擡げると、さみしく、微笑した。

「浮世のことは、思い通りに、いかないものなんですね、旦那――」

「安五郎は、どうした？」

お仙は、すぐにこたえず、やおら立ち上ると、小石を蹴って、川へ落した。

波紋のひろがるのを、じっと瞶めるお仙の眸子から、泪が、わきあがって、ほろほろと、頬を

つたい落ちた。

それから、呟くように、

「死にました」

と、こたえた。

「死んだ？」

狂四郎は、眉宇をひそめた。

安五郎は、昨夜のうちに、小国神社へ、赴いた筈であった。五郎蔵から狂四郎が奪ってやった借用証文を持って――。

「間に合いませんでした」

「……？」

「あの人が、神社へ行った時、大夫さんは、女房と子供を殺して、自分も、咽喉を突いて、死んでいたのです」

「…………」

「あの人は、それを見て……」

云いかけて、お仙は、両手で顔を掩うた。

今朝はやく――。

お仙が、もどって来ない安五郎の身を案じて、神社へ行ってみると、境内端の松の枝に、細引をかけて、縊れているむざんな姿があった、という。

「そうか――」

狂四郎は、女をあわれなものに、眺めた。

こちらのしてやったことは、徒労であったのだ。所詮、人生とは、このように、無常で、侘しいものなのであろう。

「お仙——。江戸へ帰ったら、どうだ？」

「いいえ——」

お仙は、かぶりを振った。

「どこへ、行く？」

「さあ……」

お仙は、泪をぬぐうと、むりに笑顔をみせた。

「あたしは、ここで、旦那を見送らせて頂こうと……、お待ちしていたんです。見送らせて下さいまし」

生きる当てもない女が、そう云った。

「うむ——。では……」

狂四郎は、歩き出した。

女は、こちらの姿が見えなくなるまで、そこに、彳んでいるであろう。

しかし、一度も振りかえらないのが、この男らしいのであった。

見付の猛犬

東海道五十三次は、天竜川が、ほぼまん中にあたる。江戸からも、京からも、六十里の旅程で

ある。

この天竜川から、江戸寄りの宿を、見付という。京から下って来る旅人が、ここで、はじめて、富士を見つけるので、それが宿名になった。

宿の出はずれに、川が流れていて、鴨川という。

相変らずのふところ手で、板橋八間を渡りかけた眠狂四郎は、まん中をふさいで、悠々と寝そべっている巨きな白狗を、視た。

狂四郎が、五六歩の距離に近づいた時であった。

不意に、橋の下から、鋭い口笛が鳴った。

すると、狗は、むくっと起き上るや、狂四郎に、向って、ひくい唸りをあげて、牙をひき剥いた。

常人ならば、戦慄して、あと退ったに相違ない。その牙は、尋常のものではなかったのである。金色に光って、刃物のように鋭くとがり、異様な不気味さであった。

「……？」

狂四郎は、眉宇をひそめて、唸りをあげる狗を正視した。

こころみに、狂四郎が一歩ふみ出すのと、橋下から、再び、口笛が鳴らされるのが同時だった。

次の瞬間――。

狗は、狂四郎を襲った。

躱しざまに、手刀をくれるや、狗の巨軀は、欄干にぶっつかり、悲鳴をあげて、うずくまった。

狂四郎は、欄干から、下を覗いてみた。
水際を、反対側へ奔る黒影が、ちらと見えた。
小柄を投ずるいとまもなく、狂四郎は、口笛を吹いた男を、遁した。
狂四郎は、やむなく、狗をつかまえて、対手の出様を待つことにした。
橋上にも橋袂にも、人がいて、この突然の出来事を怯えた面持で、眺めていた。
「どなたか、縄をお借りしたいが……」
狂四郎が、たのむと、西側の橋袂に立っていた郷士ていの年寄が、
「その狗に、縄をかけられるのは、許されませんぞ」
と、云った。
「なぜだ？」
「天神平のいっぺい太郎でござるゆえ――」
こちらには、一向に意味の判らぬことを口にした。
「人間が、畜生に遠慮をすることはあるまい」
狂四郎は、狗の頸根を押えて、その金色の牙を調べようとした。
とたんに――。
したたかに、手刀をくらわされていた筈の狗が、狂四郎の手をふりきって、おそるべき速力で、疾駆して、忽ち、行方をくらましてしまった。
苦笑した狂四郎は、橋を渡りきると、その年寄に、
「狂犬に縄をかけてはいかぬ理由を、うかがおうか」
と云って、かたわらの立場茶屋に入った。

年寄は、緋毛氈をかけた腰掛に、狂四郎と竝ぶと、

「いまのことはお忘れになるのがよろしいかと存じますが……」

「ただの狂犬ではないようだし、橋の下から、わたしを襲わせた者が居る。故なくして、襲わせたとは、思えぬ」

「失礼乍ら、お手前様がその腰に所持なさる差料は、名刀ではありませぬかな？」

「犬を襲わせたのは、この刀を奪ろうという目的であった、といわれるか？」

「あるいは、天神平の県社の祭典に、奉納いたすためかと存じられます」

「……？」

狂四郎は、黙って、年寄を見戍った。

年寄は、説明しはじめた。

この見付の宿から北東にあたる丘陵を、天神平という。ここに、矢奈比売命と菅原道真を合祀した延喜式内の県社があった。

社内は広く、拝殿、本殿、幣殿、廻廊、神倉、社務所、接待所など、すべて備って居り、老樹鬱蒼として、幽邃のおもむきがある。

この県社が、有名なのは、毎年八月十日、十一の両日に行う祭典のためであった。

十日の宵、一発の花火をあげるのを合図に、見付の宿の男は、老若を問わず、のこらず、素裸になり、新調の腰簑をつけ、手拭いで鉢巻きをし、手に手に提灯を持って、家を出る。

各町内の万灯を先頭に、かけ声いさましく、ねりあるくのである。

これが宵祭で、やがて、三更子刻を過ぎると、別の趣向の夜半の祭に、移る。すなわち、三発の花火を合図に、町ぜんぶが灯火を消し、氏子の持った提灯や万灯のあかりも吹き消してしまうのである。

そのしんの闇の中を、烏帽子、白丁をつけた守護者に担がれた神輿が、しずしずと、御旅所へむかうのである。

暗夜に、灯火を滅して、祭事をとり行うのは、神の荘厳神秘を保つ、という口実によって、庶民が、一夜、思いのままに、痴態に興ずるためである。

小さな宿駅では、どこの家の猫が子を生んだ、ということさえも、一日で知れ渡るほど窮屈なくらしである。この縛られた鬱積をはらすために、年に一度、思うがままに、解放された行為をのぞむのは、人情というものであろう。

娘も寡婦も人の女房も、その夜だけは、家を一歩出たならば、闇の中で、男につかまっても、これを拒むことは許されない。路傍で、林の中で、丘のくさむらで、あたりはばからず、嬌声をあげて、男の弄ぶにまかせるのであった。

子のない女房などは、顔の知れない男との、この一夜の契りで、孕むことを、必死に願う、という。

兄と妹が抱き合ったり、息子が母親を犯す、という偶然も起ったが、祭事の上でのこととして、許され、後日の笑い話になるだけであった。

宇治の県祭、武蔵府中の六社祭など、闇夜無灯の祭は、日本全土いたるところにあった。封建の世に、儒教政策でしばりつけられた庶民が、せめて、年に一度、与えられる自由であった。幕府も、これを黙認していたのである。

ところで――。

暗闇の裸祭というのは、人身御供（ひとみごくう）の遺風であった。

そのむかし、祭礼が近づくと、年頃の娘を持った家の一軒に、いつの間にか、白羽の矢が、立てられる。その家では、娘を輿にのせて、県社へ供えなければならぬ。もし、それを拒めば、町内におそろしい災禍が来る、と信じられていたのである。

ある年の夏――。

廻国修業の六十六部が、たまたま、見付宿へやって来て、人身御供のことを、耳にした。

天神平の県社に人身御供にされた娘は、翌日、家へつれ戻された時は、全裸にされて、肌にはおそろしい傷を負い、もとより操はけがされていて、半死半生のていである、という。

六十六部は、庶民を救い給う神が、そのような残忍無慚（むざん）な振舞いをされる筈がない、と憤り、真相をつきとめるために、宵祭を待って、社殿へ忍び込んだ。

唐櫃（からびつ）に入れられた人身御供は、身に寸鉄も帯びない素裸の、腰蓑をつけただけの屈強の若衆に担がれて、はこばれて来た。もとより、途中の家々は灯火を点けることを許されず、社殿も真暗闇の中に沈んでいた。

担いで来た若衆連は、唐櫃を社殿の中へはこび入れると、後を振り向かずに、馳（は）せ去った。

そのうちに、社殿の奥から、妙な文句の歌声が、ひびいて来た。

　信濃（しなの）国の、しっぺい太郎に、このことを、きかせたもうな

いくども、くりかえし唄われるので、六十六部は、文句を覚え込んだ。

唐櫃は破られ、娘は、悲鳴をあげつつ、奥殿へ、連れ去られた。

六十六部は、この天神平の神殿を占領して神を詐称している怪物は、信濃のしっぺい太郎を、

ひどう恐れているのだ、と合点し、その足で、信州へ赴いた。

六十六部は、しっぺい太郎という手練の兵法者の在処をさがしまわった。しかし、そういう名の兵法者は、どこにも見当らなかった。

尋ねあぐねて、ある村に入った時、六十六部は、故老から、しっぺい太郎というのはここから数里奥の山中に住む山賤の飼っている白狗のことだ、と教えられた。

そこで、六十六部は、その山へわけ入って、山賤に会い、仔細を語って、白狗を貸してくれるように、たのんだ。

山賤は、心よく応じてくれた。

一年後、六十六部は、裸祭の夜、その白狗を連れて、見付宿へ姿を現した。

町内の宿老たちを説き伏せた六十六部は、人身御供の娘の代りに、しっぺい太郎を、唐櫃にひそませて、若衆連に、天神平へはこばせた。

やがて、社殿の奥から出て来た怪物は、唐櫃を破るや、巨きな狗にとびかかられ、凄じい争闘を、闇中にくりひろげた挙句、斃れた。

それは、世にも稀なる大狒狒であった、という。

人身御供は、その時から廃されたが、全町ことごとく灯火を消して、神輿を、裸男が担いでねり歩く、という風習だけは、のこされたのである。

「つまり……、わたしを襲った犬は、そのしっぺい太郎とやらの子孫だというのですな？」

狂四郎は、ばからしい伝説を黙ってききおわってから、語った年寄に訊ねた。

「左様です。神犬として、信州の山賤が、一匹ずつ、仔犬のうちに連れて来てくれるのでござる。祭礼には、神輿に乗せますゆえ、これに縄をかける無礼など、当地では、もってのほかのことでござる」

「あれを平常世話している者を、ご存じか？」

「存じませぬな。……しっぺい太郎が、街道筋を歩きまわることなど、絶えてありませなんだゆえ、何人が、世話して居るのか、一向に——」

「犬は、県社に飼われて居るのですな？」

「いや、ふだんは、出張り陣屋につながれて居ります」

「出張り陣屋？」

狂四郎は、眉宇をひそめた。

出張り陣屋とは、代官所の支庁のことを指す。

「代官の保護を受けているとは——」

「当地のお代官は、大層な犬好きでござる」

「………」

狂四郎は、腕を組んで、しばらく、無言でいたが、その腕を解くと、もうひとつだけ、うかがいたい、と云った。

「あの犬に、嚙み殺された御仁が、この近隣に、いたかどうか——。もし、いたならば、その家を、お教え願えまいか」

年寄は、ちょっと、逡巡っていたが、去年春に、中泉村で、二刀流の剣術道場をひらいていた佐分利嘉門という兵法者が、襲われて、相果てた旨を告げた。

「佐分利嘉門という兵法者は、稀代の名刀でも、所蔵して居りましたか？」
「しっぺい太郎が、刀をくわえて去るのを、見かけた者がありますゆえ、たぶん、それが名刀であったかと存じられます」
年寄は、そのことがあるので、この浪人者をしっぺい太郎が襲ったのは、差料を名刀と看てとったのが理由であろう、と推測したのである。
しっぺい太郎は、神輿に乗せられる時、その背に、奉納太刀を負うているのがならわしである、という。
去年の祭礼に、しっぺい太郎が背負うていた太刀は、佐分利嘉門から奪いとった品に相違ない、と考えられる。
狂四郎は、礼をのべて、立ち上った。
年寄は、不安の眼眸で、街道へ出る狂四郎を見送って、
「お手前様は、佐分利家へ参られるおつもりですか？」
と、問うた。
狂四郎は、ふりかえって、
「暗闇ならいざ知らず、白昼に、狒狒にされては、人間の面目がたたぬゆえ、黒白をあきらかにしておこうと存ずる」
とこたえた。
その家は、屋敷をとりかこむ松の老樹ぶりを一瞥しただけで、古い由緒をもつ家柄と、判った。

冠木門を入ると、広い庭であった。道場もかなりの構えで、母屋は、その蔭にかくれていた。主を喪った道場の玄関は閉ざされ、ひっそりして人の気配もない。
庭の半分が、菜園にされて、そこに姐さんかぶりの若い女の姿があった。
狂四郎は、ゆっくりと、歩み寄った。
立ち上って、こちらを視た手拭いの蔭の顔は、白く、面長で、気品があった。古い家に住むにふさわしい古風な美しさである。
「卒爾乍ら、おうかがいしたいことがあって、罷り越した者です。江戸の者と思って頂こう」
「………」
娘は、黙って、会釈すると、狂四郎を、母屋へみちびいた。
通された座敷も、立派なものであった。
狂四郎は、娘が、お茶をはこんで来て、座に就くのを待ってから、
「お父上が、非業の最期をとげられた、とうかがって、参った」
「………」
娘は、俯向いて、なにもこたえぬ。
「その最期の模様を、おきかせ願えまいか？」
「………」
「実は、先刻、わたしは、お父上を嚙んだ犬に、襲われた。なんの理由で、襲われたのか、納得がいかぬ。土地の故老は、わたしの差料を欲しいためであったろう、と申して居ったが、これは、こちらの納得できる理由にならぬ。お父上が襲われた理由が、貴女におわかりかどうかだ。うかがいたい」

「…………」

「それとも、上の力で、口止めにされて居られるのか？」

「い、いいえ……」

娘は、すこしあわてたそぶりを示した。

「口止めされていないのであれば、おきかせ願えまいか？」

「あの……」

娘は、顔を擡げて、狂四郎を視た。

「しっぺい太郎を、お斬りになるご所存でございますか？」

「場合によっては――」

「…………」

「金色の牙をひき剝いて、人をおどかすような畜生を、神犬にして神輿にのせるなど、当地の代官も、酔狂がすぎるようだ」

「父は、むくいを受けたのでございます」

「むくい？」

「むすめのわたくしから申すのは、はばかりあることでございますが、父は、傲慢な人でございました。二刀流の業にかけては、日本随一、と常に豪語いたして居りました。その自負もあって、どれだけ身分のあるお方に対しても、頭を下げることをいたしませんでした。……むくいであったと存じます」

突如、庭上を掠めて、一本の矢が、座敷へ飛来したのは、娘の言葉がおわるかおわらぬうちであった。

抜く手もみせず、それを畳へ、二つにして落した狂四郎は、次の刹那には、もう庭へ躍っていた。

凪の迅さで、庭を奔る狂四郎めがけて、二の矢が、来た。

これも、真二つにして、宙へはねとばした狂四郎は、老松の蔭に動く影へ向って、肉薄した。

その影は、猿の勢いで、老松をかけのぼると、大きく空を躍った。

とみるや――。

いつの間に馬蹄の音を消して馳せ着けていたか、そこにとどめていた馬へ、ひらとまたがって、馬腹を蹴っていた。

覆面をした男であった。

口笛を吹いて、白狗をあやつった男と、同一人とみなして、まちがいなさそうであった。

座敷へ戻って来た狂四郎は、何事もなかったような様子で、

「お父上は、当地の代官の怨みか憎しみを買われたか？」

と、訊ねた。

娘は、いまの出来事で、顔の色を蒼ざめさせていた。

「い、いえ……、心あたりはございませぬ」

「犬が出張り陣屋で飼われているとすれば、代官手下が、犬をけしかけて、お父上を嚙ませたとしか、考えられぬが……」

「………」

「それよりも、合点がいかぬのは、日本随一を自負されたお父上が、たかが犬一匹に襲われて、どうして不覚をとられたか。どういうのであろう？」

「………」

「のど笛でも、くいちぎられていたのであろうか？」

「いえ、肩を噛まれていただけでございました」

「ただ、それだけで、一命を落されたか？」

「はい――」

「どうも解せぬことだ」

「………」

狂四郎は、娘を、じっと、見据えた。

――生来口数が寡いのか、それとも、なにかを、かくそうとしているのか？

「貴女は、お父上の讐を復とうと、考えたことは、一度もないのであろうか？」

「………」

「性情が傲慢であったためのむくい、と考えているからには、仇討の念も起らぬのであろうか」

「貴方様は、何も、ご存じありませせぬ！」

突然、娘は、きっとなって、叫ぶように云った。

「知らぬから、知ろうとして、こうして、貴女の前に、しつっこく、坐りつづけて居る」

「………」

娘は、俯向いた。

長い沈黙があった。

やがて、娘は、視線を膝へ落したままで、ひくく、云った。
「わたくしは、父を憎んで居りました」
「…………？」
こんどは、狂四郎が、沈黙する番であった。
娘は、顔を擡げた。その双眸は、かわいて、強い光を宿していた。
「いったんは、父を憎んでいたわたくしも、父がむざんな最期をとげたあと、すべての原因は、わたくし自身にあったことに、気がつきました」
「…………」
「わたくしに、いささかの剣の才能があったために、不運を招いてしまいました」
「…………」
「父は、わたくしが男子でなかったのを、残念に思いつつ、小太刀の二刀流をさずけてくれました。わたくし自身は、好まずして、業が上達してしまいました。やがて、道場へかよう て参る門弟衆のうち、わたくしの小太刀に敵う人は、一人もいなくなったのでございます」
そこまで、語ってから、娘は、さらに顔色を一層沈んだものにして、
「貴方様に、お願いがございます」
「なにか？」
「わたくしと立ち合うて下さいませぬか。ただいまの、貴方様のお腕前を拝見して、このお方ならば、自分が互角に立ち合える、と存じました。わたくしは、父と立ち合っても、決して負けぬ自信を持って居りました。ただ、そうしなかっただけのことでございます。……立ち合って頂きとう存じます」

「理由は？」

「敗れたく存じます。敗れて、この無益のうぬぼれをすてたく存じます」

「その言葉の裏には、いかなる一流兵法者と試合をしても、敗れぬ、という自信があるようだ」

「たぶん、わたくしは、貴方様と立ち合っても、敗れまいと存じます」

「敗れた時は、うぬぼれをすてるだけか？」

「いえ。もし、ご所望ならば、操をさしあげまする」

娘は、きっぱりと云ってのけた。

狂四郎は、薄ら笑った。

「こちらは、据え膳をくらうことには馴れて居る。頂戴しようか」

浜松仇討

眠狂四郎は、佐分利嘉門の女築江にともなわれて、その道場に入った。

床は、美しく拭き込まれていて、鏡のように、二人の姿を映した。数年程度のみがきかたでは、このように、美しい艶が生じるものではない。二十年、あるいは、それ以上も、丹念に、拭き清められたに相違ない。

主を喪ったこの一年の間も、毎日、拭かれていたものであろう。

築江は、狂四郎が、壁から、手ごろの木太刀をえらぶのを待って、自身は、一尺二寸あまりの小太刀を二振り、把った。

同じ長さの小太刀を使う二刀流は、珍しい流儀であった。

「お願いつかまつります」

九尺の距離をとって、一礼した簗江は、小太刀をまっすぐに、平行してさしのべると、

「いざ！」

と、云った。

狂四郎は、例によって、地摺りにとった。

簗江は、「貴方様と立ち合っても、敗れまいと存じます」と高言したが、まさしく、その構えは、さわやかなまでに、自信の満ちたものであった。

六分か七分の力を備えてい乍ら、十の力があるごとく、自信満々に構えてみせる兵法者は、尠(すくな)くない。逆に、十の力を、かくしてしまって、敵をしてとまどわせる陰険な実戦者も多い。しかし、持てる力をそのまま、自信に示す使い手は、まれである。

簗江の腕前を看るだけならば、その構えを一瞥しただけで、狂四郎は、刀を引けばよいことであった。

簗江は、敗れることを、のぞんでいるのであった。不敵にも、おのが操を賭(か)けている。あるいは、簗江は、狂四郎を稀有(けう)の達人と看て、死をのぞんでいるのかも知れなかった。

狂四郎は、その乞いに応えて、簗江をやぶらなければならなかった。

持っているのは、木太刀とはいえ、真剣の勝負にひとしかった。

これだけの腕前の所有者の手から、小太刀をたたき落すことは、不可能であった。

からだのどこかを撃ち据えない限り、勝はこちらのものにならなかった。審判者はいないのである。

手負わせるのを避けるために、どのような業を用いればよいか——咄嗟に、狂四郎の心中に、思案はうかばなかった。
うかばないままに、じっと、冷たく冴えた眼眸を、築江に当てた。
築江もまた、大きく眸子をひらき、まばたきもせずに、狂四郎を、にらみすえていた。
築江の方は、狂四郎の伎倆をはかりかねている。地摺りにとった狂四郎の姿には、不気味な静けさが湛えられているばかりであった。十の力をかくしているわけではなかった。円月殺法の動きを起さぬ限り、狂四郎の構えは、仏像の佇立にも似ている。敵となった者次第で、どのようにも、受けとれるのであった。
隙だらけの構えとも見えるし、微塵の隙もない構えとも受けとれる。
築江ほどの腕前の所有者にして、はじめて、その静けさを、不気味なものに感じる。
築江は、地摺りの受太刀に、測り知れぬ迅業がひそめられている、とさとって、動けなかった。
そのまま……。
時刻は、移った。
狂四郎は、円月殺法の動きを起さなかった。起せば、当然、その妖気をはねかえして、築江は、撃ち込んで来るに相違ない。
その時、狂四郎は、手加減する余裕はなく、築江を撃ち倒すことになる。
不具にしてしまうか、死にいたらしめるか。いずれにしても、この美しい娘を、そのような目に遭わせることは、避けたかったのである。
「えいっ！」

た。

築江は、ついに、必殺の攻撃をしかけるべく、二本の小太刀を、同時に、徐々に、挙げはじめ

築江は、裂帛の懸声だけを、こころみて来た。狂四郎は、微動もせぬ。

そして、そのふたつの切尖が、天井を指した時、はじめて、狂四郎が、動いた。

地摺りの構えは、そのままに、築江に向って、つと、足をすべり出したのである。

一撃必殺の構えを示した対手に向って、地摺りの受太刀をとった者の方から、肉薄するのは、剣法には無い無謀である。

狂四郎は、敢えて、それを、採った。

築江は、そうしなかった。

並の使い手ならば、得たり、とばかり、撃ち込んだに相違ない。

狂四郎に、肉薄されるままに、あとへ退った。

狂四郎の胸から上は、全く空けられてしまっている。案山子でも叩くように、苦もなく撃ち込めるがごとく、みえる。それが、実は、誘いであることを、築江は、さとったのである。

ついに――。

築江は、背中が、羽目にふれるところまで、後退した。

狂四郎の口辺に、ふっと、薄ら笑いが刷かれた。

それまで、水のような冷静を保っていた築江が、その薄ら笑いを視て、一瞬、感情を噴かせた。

「えいっ！」

二本の小太刀が、狂四郎の頭上へ、電光となって落ちた。次の刹那――築江の顔は、信じ難い出来事に、おのが目を疑う表情をうかべた。

満身からの気合をこめて、振りおろした二本の小太刀は、狂四郎の頭上で——のびた月代すれすれで、停止していた。

すなわち、狂四郎は、その高さまで、正確無比に、ピタリと身を沈めていたのである。

そして、狂四郎の木太刀は、築江の着物の前をつらぬき、女性の大切な箇所を掠めて、うしろの羽目板をもつらぬいていたのである。

狂四郎は、黙って、木太刀を抜きとると、うしろへ、退った。

築江は、小太刀をダラリと下げて、俯向いた。

狂四郎が冷然と見戍る中で、築江は、小太刀を、壁にもどすと、よろめくような足どりで、道場を出て行った。

狂四郎は、わざと時間を置いて、その座敷へ入った。

予想たがわず、築江は、牀をのべて、長襦袢いちまいになり、しずかに仰臥して目蓋を閉じ、胸で手を組んでいた。

狂四郎は、立ったまま、じっと見下していたが、

「操を頂戴する代りに、別に所望がある」

と、云った。

築江は、起き上って、狂四郎を見上げた。魂の抜けたような、侘しい気色を湛えていた。

「そなたが、なぜ、父親のことを憎むのか、その理由をうかがおうか」

「…………」

築江は、目を伏せた。

「そなたが、自負する業を、このわたしに破らせて、据膳を食わせようとしたことも、その理由と、何かつながるところがあるのであろう」

狂四郎が、云うと、築江は、決心して、

「あちらの座敷で、お待ち下さいますよう――」

と、たのんだ。

やがて、衣裳(いしょう)をつけて、狂四郎の前に坐った築江は、

「わたくしは、この世でただ一人と思いきめた御仁(おひと)を、父に、殺されてしまいました」

と、云った。

「……？」

狂四郎は、腕を組んで、築江の語るのを、黙って、きいた。

築江が愛した男は、天竜川代官朝比奈(あさひな)源十郎の次男源次郎であった。

その代官所は、浜松城下に在った。

浜松城は、代々徳川家重臣によって守られ、現在では、本丸老中となった水野越前守忠邦(ただくに)があずかっている。

水野忠邦は、もとは、肥前唐津(からつ)城主であった。唐津は、公称六万石であったが、内実は二十六万石と唱えられ、物成(ものなり)の収入ゆたかな土地であった。

しかし、忠邦は、遠国大名であっては、閣老に加わることは叶(かな)わぬ、とさとって、自らすすんで、国替を、公儀に申請し、遠州浜松に移ったのである。

この申請に当っては、水野家の老臣たちが、大反対して、その不可を諫(いさ)めた。

六万石の大名が、六万石の知行を願うのは、べつに不都合はないようであったが、実際は、大変な差があった。

駿河、遠江、三河は、いたるところに幕府直轄領があり、これは、郡代あるいは代官が治めている。

五万石に一ヵ所の割あいで代官所が置かれてあり、この代官は、非常な権力を与えられているのであった。

浜松六万石といっても、所領は、代官支配の幕府直轄領と入れまじり、大名方と代官方とは、役人はもとより、領民までが、事あるごとに反目し、争いの絶え間がなかった。老臣たちが、忠邦の移封願いを反対したのは、それが理由であった。

朝比奈源十郎は、天竜川沿岸を支配する代官であるだけに、その権力は、なみなみならぬものがあった。

その次男源次郎は、築江の父佐分利嘉門の道場に入っているうちに、築江と相思の仲になった。

源次郎は、かなりの腕前に上達していたが、嘉門の目から看れば、でくのぼうにすぎなかった。

源次郎は、機会をとらえて、嘉門に、息女を嫁に申し受けたい、と願ったが、にべもなく拒否された。

「お主は、築江と立ち合って、三本のうち一本取るのさえおぼつかぬ腕前ではないか。女房に勝てぬ亭主など、世の嗤い者だ。築江が欲しければ、精進さっしゃい」

嘉門からきめつけられたものの、源次郎は、いかに精進しても、築江を撃ち込む達者になることは、絶望であった。

剣の業が劣っていては、夫婦になれぬ、という理窟は成立たぬ、と思えたが、狷介一徹な嘉門

を説き伏せることは、到底不可能であった。
思いあまって、源次郎は、父の源十郎に相談した。
この折、かたわらできいていた代官所手代の小森なにがしという智慧の働く人物が、一
「思案があります」
と、申し出た。
すなわち。
この年の天神平の県社の闇祭に、ひさしぶりに、人身御供の行事を復活させる。ついては、佐分利道場へ、白羽の矢を立てて、築江を、生贄にする。稀代の使い手である築江のことゆえ、かりに、大狒狒が襲って来ても、苦もなく撃退するであろう。
もとより、当節、大狒狒などが、娘を拉致するなどということを、信じる者は居らぬ。
いわば、これは、形式の行事であるから、嘉門も、拒絶はすまい。
こうして、築江を、人身御供として、唐櫃に入れて県社の社殿へはこぶ。そして、行方不明にしてしまうのである。嘉門が、憤激したところで、対手が、神様ならば、刀のふるい様もあるまい。
この手段が、最も巧妙なのではあるまいか。
「おもしろい。やってこまそう」
源十郎は、代官の息子の申込みをことわった嘉門に、腹を立てたので、その拉致方法を採りあげた。
しかし——。
その手段は、失敗であった。

築江をひそませた唐櫃を、社殿にかつぎ入れた時、嘉門は、すでに、奥殿に、身をひそめていたのである。

そして、源次郎が、現れて、唐櫃の蓋をひらこうとしたところへ、躍り出て、

「曲者っ！」

一喝しざま、源次郎の脳天を、木太刀で、砕いてしまったのである。

「それから、ほどなく、お父上は、白狗に襲われたか？」

「はい――」

「夜であったか、それとも、昼であったか？」

「夕餉のおわった時刻でございました。父は、毎夜、日課として、庭へ出ました。その時、しっぺい太郎に、襲われました」

「お父上は、肩を噛まれただけであった、と云われたな？」

「はい」

「一流の兵法者が、犬に肩を噛まれたぐらいで、相果てるものか」

「わたくしも、その時、そのことを感じました。けれど、父のからだには、犬の歯型しか、のこっては居りませんでした」

狂四郎は、立ち上った。

「お父上の自業自得、ということに相成ろうが、そなたを一流の手練者に添わせてやろうとした愛情は、みとめずばなるまい。若いのだ。世をすねるのは、まだ早かろう」

「わたくしを、すてて、お行きなさいますのか？」
「無頼者も、時には、据膳を食わぬこともある」
「いいえ！」
築江は、つよく、かぶりを振った。
「貴方様が、すててお行きなされば、わたくしは、二度と、肌身を許す男子に、めぐり会えますまい」
狂四郎は、振りかえって、築江を視た。
急に烈しい語気になって、
「そなたは、刀を把る男のみをのぞんで、鍬しか把ったことのない男など、さげすむのか！」
「…………」
「刀と鍬に、優劣があるのか？」
「…………」
築江は、目を膝へ落した。
「その料簡を変えぬ限り、この道場で、孤閨をまもるのは、やむを得まい。ものの三年もひとりですごしてみて、考えが変ったら、そこいらの百姓の次男でも、養子に迎えるがよい。なまじ二刀をたばさんだ男など、そなたには、無縁であろう」
そう云いのこした。

夜が、しらじらと明けそめた頃あい——。
浜松城下はずれの天竜川代官所の高塀を乗り越えて、ひらりと、庭へとび降りた人影があった。

眠狂四郎は、昨日のうちに、しっぺい太郎が、目付の出張り陣屋には戻らず、一人の男につれられて、天竜川を渡ったことを、つきとめたのである。

その男は、代官所の小者のようであった、という。

しっぺい太郎が、代官所へ、つれられたことにまちがいはなかった。

狂四郎は、無遠慮な足どりで、植込みから出て、広いいちめんの白砂の庭を横切ろうとした。

こちらの予測通り、一方の建物と建物のあいだから、白狗が、さっと、とび出して来た。

狂四郎は、白砂の中央に立って、待った。

白狗は、まっしぐらに、突進して来て、金色に光る刃物のような牙をひき剝いた。

しかし、狂四郎が、一歩出ると、じりじりと、あと退(ずさ)った。

鴨川橋で、狂四郎に欄干へたたきつけられたことを忘れてはいなかった。

このおそろしい敵には、容易にとびかかれぬ、と唸りつつも、後退しつづけた。

物蔭から、鋭い口笛が鳴った。

しかし、狗は、狂四郎に躍りかかろうとはしなかった。

狂四郎は、声をあげた。

「負け犬には、どうやら、その口笛も、効果はないようだな。……姿を見せろ、下忍(げにん)！」

ずばりと云いあてられて、物蔭から出て来たのは、なんとも名状しがたい陰気な男であった。

「佐分利嘉門を殺したのは、代官の命令か？」

狂四郎は、問うた。

男は、こたえぬ。

「返答できぬところをみると、源次郎の母親あたりから、はした金をもらって、殺(や)ったしわざで

あろう」
「ちがうっ！　わ、わしは、源次郎様の敵を、討ったまでだ」
「おのれ一人の志と申すのか。忠僕面をするな！」
男は、苛立って、もう一度、必死で口笛を吹いた。しかし、狗は、狂四郎にとびかかろうとはしなかった。
「貴様が、忠義である筈がない。いずれは、伊賀か甲賀の下忍の出であろうが、目くされ金でどうにも動く品性下等の乞食忍者ではないか。げんに、金を握らされて、このおれを、襲って居る。貴様に金を握らせた男を、あててやろう。都田水心という男であろう。どうだ！」
下忍は、それまで当てられて、逆上した。腰の忍び刀を、ぱっと抜きはなって、身構えた。
狗が、けたたましく、吠えたてはじめた。
「愚図愚図するな！　かかって来い」
狂四郎は、両手を空けたままで、あざけるように云いはなった。
「うぬっ！」
さしたる術も持たぬ下忍とはいえ、跳躍にかけては、見事な技を発揮した。
ぱっと、宙を躍りざま、狂四郎めがけて、忍び刀を、投げつけた。
狂四郎は、ひらと身をひねって、忍び刀を流した。
当然、むくいるに、抜きつけの一閃を送るところであったが、狂四郎は、そうしなかった。
代りに、ふところにかくし持っていた品を、下忍めがけて、投げていた。
「うっ！」
地へ降り立った時、下忍の顔は狒狒に化けていた。

狂四郎は、それを、県社の社殿から、ぬすんで来たのである。面の裏側へ、べったりと、鳥黐（とりもち）を塗りつけておいたのである。
狙いあやまたず、顔へ、狒狒面（めん）を貼（は）りつけておいて、狂四郎は、対手の口笛をまねて、鋭く、鳴らした。
とたん——。
巨狗（きょく）は、凄（すさま）じい勢いで、下忍めがけて、ぐぉん、と躍りかかった。
「う……うっ、うっ！」
ぶざまにもがいて、宙を泳いだ下忍は、だだだっと五六歩行って、白砂上へ崩れた。
狗は、狂ったように、下忍の肩に嚙みついたまま、はねまわった。
狂四郎は、ゆっくりと、近づくと、狗を足蹴（あしげ）にして、悲鳴をあげさせた。
もう、その時、下忍の方は、抵抗する力も失せていた。
狂四郎は、下忍の肩の歯型を、視た。
金色の牙が、狗の口からはずれて、そこへ刺さっていた。
この牙に、猛毒が、仕込んであったのである。
——日本一の兵法者も、この毒には、勝てなかったことだ。
狂四郎は、吐きすてた。
浜松城を、右方にのぞむ城下中央の辻を往（い）こうとしていると、
「眠狂四郎殿——」
背後から、呼ぶ者があった。

ふりかえるまでもなかった。
江戸から、ずっと、こちらの生命をつけ狙っている都田水心にまぎれもない。
「絶世の美女が、すすんで、肌身をくれようとするのを、拒否されたとは、眠狂四郎殿の振舞いともおぼえ申さぬ」
「惚れたからよ」
狂四郎は、ふところ手で、伝法な口調でこたえた。
「なんと申された？」
「おれは、あのような孤独な翳を持つ女には、弱い。だから、抱かずに、すてて来たまでのことだ」
「成程――」
「水心――。こんども、失敗したが、この次は、なにを使うつもりだ？」
「いや、もう、こんどこそ、すっぱりとあきらめ申した」
その言葉のおわらぬうちに、狂四郎は、頭をまわした。
反射的に、水心は、一間を跳び退った。
「うしろから、抜き討ちをあびせようと、卑劣なこんたんを起したところをみると、お主、ヤキがまわったな」
云いすてておいて、すたすたと遠ざかる後姿を、水心は、その場に立ちどまって、見送り乍ら、首を振った。
「参った！　なんとも、はや、参り申した」

舞（まい）坂（さか）初物

浜松の近郷——乾（いぬい）の方角一里ばかりに、万葉集にも詠（うた）われている引馬野（ひくまの）というところがある。この原野の北方いったいを、味方ヶ原と称す。のちに、三方ヶ原と呼びかえられたが、これは、和地村、祝田村、都田村の三つの牧場があったためであろう。

元亀三年十一月、武田信玄は、甲斐（かい）の国を出て、秋葉山に迫り、多々良・飯田の両城を攻めとり、久能の城を手中にし、袋井に陣どり、一休息ののち、三香野坂、一口坂を抜いて、二俣（ふたまた）城を陥入れ、十二月十二日に、この味方ヶ原に出陣した。

その本陣を、都田村の丸山に据えて、総勢四万三千騎を布陣せしめたのに対し、徳川家康は、わずか八千の兵を率いて出たのであった。

勝敗は、たたかわずして、明白であった。

霏霏（ひひ）として降りつのる雪の中を、家康は、身ひとつで、敗走した。

家康が九死に一生を得たこの合戦を記念して、浜松城下の全町が挙げて、凧（たこ）あげを競う風習ができたのは、いつの頃からであったろう。

この凧あげ合戦は、年毎に盛大になり、この時代には、味方ヶ原での行事がおわると、夜には、各町内の若衆連と子供たちが、底抜け屋台を曳（ひ）き出して、夜通し町内をねり歩くようになっていた。

のみならず、この凧あげ合戦は、五月一日から五日まで、五日間ぶっ通しで催され、江戸から

も上方からも、見物人が蝟集するのであった。

浜松城下は、二十八丁余、町数二十二、戸数三千五百軒。士屋敷の区域をのぞいて、各町すべてが、巨大な凧を所有し、これを、二十歳から三十歳までの若衆連が、揚げるのであった。

その凧の大きさは、三帖乃至八帖であった。一帖は、美濃紙十二枚である。すなわち八帖は、九十六枚張り、約二間四方になる。

尤も、八帖の大凧を持っているのは、浜松市中、御用商人の集った紺屋町一町内だけであった。他は、四帖五帖のものが多かった。

凧の構造は、女竹の径八分くらいのものを中央の親骨として、それに同じ太さの女竹を二本、中央で交叉せしめ、これに割竹を四五寸おきに横骨にしたもので、素人の細工ではなかった。浜松には、この凧を専門につくる際物師がいたのである。

各町とも、すくなくても七八枚、多いのは十数枚も、つくらせていた。合戦中、糸を切られると、即座に代りを揚げなければならなかったから、予備を充分必要としたのである。

天狗や達磨の絵凧、あるいは、天満町の「て」の字、紺屋町の「コ」の字を浮きあげた字凧、あるいはまた、大店の寄付によってつくられたものは、その家の紋を染めぬいた紋凧など、それぞれ、派手を競う。

その日——五月五日。

朔日から開始された凧あげ合戦も、なか三日雨が降りつづいたため中断され、今日はじめて、雲一片もとどめぬ快晴となったので、各町談合によって、予備凧まで一時に揚げたため、さしも広い味方ヶ原の空も、大小さまざまの凧によって、掩われた。

初夏の風に唸って、右へ左へ、上へ下へ、絶え間なく動く凧は、宛然生きもののごとく、競い

対手(あいて)の糸を切ろうと、狙いつづける。

糸を切るには、相当の熟練を要する。

糸を乗せかける方法もある。下から掬(すく)いあげる手段もある。絡み合ったとたん、風の強さを利用して、ぐんぐん糸を伸ばして、摩擦によって、敵の糸を切ろうとする。すこしでも風がゆるむと、忽ち(たちま)、糸をたぐる。糸を伸すのも、手繰(たぐ)るのも、風の加減、方向を視てとって、すばやくやらねばならぬ。

凧には、それぞれ、指揮の者がいて、糸をたぐる滑車(てき)を腰に縛りつけた者の前に立ち、風を視て、

「それ、引けっ！」

と号令すれば、十数人の若衆が、

「わっしょ！」と、懸声(かけごえ)を揃(そろ)えて、糸をたぐるのである。

二個の凧が、からみあって、くるくると廻転しはじめるや、若衆連は、血眼になって叫びたて、たぐったり、伸したり、汗だらけになる。万をかぞえる見物人も、いずれかに味方して、騒ぎたてる。

「おうおう！　鯉が、達磨にくらいつきやがった」

「あわれや、てめえのことだのう、あの達磨は――」

「なんだと？」

「恋女房にとっつかまって、手も足も出ねえざまだあ」

「置きやがれ。だるまは、てめえの嬶(かかあ)の前身だ。吉田の女郎屋で、棚ざらしになっていたのを、貰って来やがった」

「なにっ、もう一度、ぬかしてみろ！」
つかみかかったのを、隣りの者が、
「うるせえな、てめえら。……見ろい、鯉の方が切れたあ。達磨め、ふらふらと、でっかい鍾馗にっかかって行ってら」
「……しょうきの沙汰じゃねえ――ってのは、このことだのう」
珍事は、その時に、起った。
城下方面からの野道を、蹄の音を高く鳴らして、疾駆して来た一騎があった。
若い武士であったが、その胴に、糸を巻きつけて、十帖もあろう大凧を揚げ乍ら、駆けて来たのである。
武士が凧あげ合戦に参加した例は、いまだなかったことである。
空に大凧を唸らせ乍ら、馬をとばすのは、よほど馬責めの巧者でなければならなかった。
「退け！　退けっ！」
蝟集の見物人を、左右に散らしておいて、味方ヶ原へ、まっしぐらに突進した若ざむらいは、
「おれの首凧が、対手になってくれるぞ！　むかって参れ！」
と、大音で呼ばわった。
一斉に、その大凧をふり仰いだ人々は、
「ありゃっ――く、首じゃないか！」
と、文字通り仰天した。

大爪のまん中に、ぶらんぶらん、とつりさげられているのは、まぎれもなく、人間の生首であった。頭髪を、爪の骨に結びつけてあるのだ。

馬から降りた若ざむらいは、

「さあ、どいつでも、かかって来い！」

と、叫んだ。

「御城代の若だ！」

そのささやきが、たちまち、若衆のあいだにも、見物人のあいだにも、波のようにつたわった。

浜松城の城代家老水野監物（けんもつ）の嫡男大三郎は、膂力（りょりょく）も無敵、武技も秀れているが、手のつけられぬ無法者として、おそれられていた。

生きたうなぎを小刀で刺して、あたまからかじり乍ら、往還を歩いたり、町家の嫁入り行列を襲って花嫁を拉致（らち）し、その腹へ、南無妙法蓮華経と墨くろぐろと大書して、花聟（はなむこ）の許（もと）へ送りとどけたり——奇行は、かぞえるにいとまがないくらいであった。

それにしても、生首をぶらさげた大凧を揚げて、乗り込んで来るとは、途方もない振舞いといえた。

「こらあっ！　なんとした！　かかって来る奴は居らぬか！」

大三郎は、怯（おび）えた若衆たちを睨（にら）みまわして、「よし！　では、こっちから、かかって呉れるぞ！」

と、胴へしばりつけた滑車（てき）を、ぐるぐるまわして、糸を伸ばしはじめた。

折柄の風加減では、糸を伸ばすのは、無謀であった。

首凧は、たちまち、大きく、左右へゆれたかとみるや、まっさかさまに、落下しはじめた。

「若様、たぐられませい！」

見かねた若衆が二三人、糸にとびついたが、間に合わず、首凧は、紺屋町の八帖凧へひっかかった。

若衆たちは、必死で糸をたぐったが、その時、急に、風が強くなり、首凧は、せわしく旋回したかとみるや、糸を切って、ぱっと、飛んだ。

「こやつらっ！　邪魔だてし居ったな！」

大三郎は、若衆の一人を擲り倒し、もう一人を、足蹴にした。

同じ時刻――。

眠狂四郎は、浜松と舞坂のほぼ中ほどにあたる篠原という小さな立場の茶屋にいた。

狂四郎の向いに腰を下しているのは、城下から追いかけて来た田住十郎次という水野藩の御使番であった。

田住十郎次は、ごく近年までは、江戸屋敷に在って、武部仙十郎の腹心であった。

まだ三十を越えたばかりであったが、すでにひとかどの風格をそなえていた。武部老人は、自分の後継者にする肚をきめている模様であった。そのために、国許の事情に明るくさせておくべく、数年間を、浜松城に勤めさせているのであった。

田住十郎次は、この浜松を過ぎて、帰国して行った西国大名の行列に就いて、自身が調べたところを、手短かに、要領よく、狂四郎に、報らせた。

狂四郎は、その報告で、いままで、自分が気のつかなかったことを、多く明らかにされて、――老人の見込んだだけの器量を持っているようだ。

と、感心した。

「あらためて、おきするのも、なんでござるが、眠殿は、十三藩の謀議の内容については、すでに、およそ推測されて居られましょう？」

「いや――。わたしは、ただ、老人にたのまれただけの、大名衆にとって目ざわりになるように、道中しているに過ぎぬ」

狂四郎としては、推測できぬこともなかったが、おのれの口から、さかしげに喋る気持はなかった。興味もないことであった。

「ただ、主謀が、薩摩の調所笑左衛門であることは、疑いないようだ」

「それでござる。調所笑左衛門が、抱き込んだ十三藩は、岸和田にせよ、福知山にせよ、田原にせよ、長州にせよ、いずれも、下からかぞえた方が早い貧乏藩で、紙屑同様の藩札を乱発して、上下ともに、その難渋は底をついて居ります。この窮乏をきり抜けるためには、たった一手しかござらぬ。すなわち、密貿易――」

「…………」

「謀議は、これのことと存ずる。国禁を犯すからには、なみなみの決意ではござるまい。行列を探ってみて、その決意のほどが、窺え申した。……その決意を砕くすべは、ないと愚考つかまつる」

「…………」

「眠殿が、単身を以て、十三藩の行列を擾されるのは、ここらあたりで、止められてはいかがでありましょうか。無駄と存ずる。いかに不死身のお手前でも、やりすぎると、墓穴を掘ります。ここらあたりが、限度ではござるまいか」

「ご忠告は、うかがっておこう」

狂四郎は、笑って、こたえた。

「せっかく、五十三次を、三十次まで道中して来たのだ。ついでだから、あとの二十三次を、歩かせてもらうことにいたそう」

「左様ですか。そう申されるなら、これ以上、止めだてはでき申さぬが……」

田住十郎次は、眠狂四郎という人物に、深い好意を抱いていた。この異相の浪人者に、野ざらしにはなってもらいたくなかったのである。

京へ入るまでの何処かで、十三藩からえりすぐられた手練者が、大挙して、狂四郎を襲撃して来るであろうことを、田住十郎次は、見通していた。おそらく、その頭数は、二十人や三十人ではないであろう。

いかに稀有の腕前と無数の死地をくぐり抜けた経験を持っていても、狂四郎が、生きのびられるとは、とうてい考えられなかった。

田住十郎次は、狂四郎を、江戸へひきかえさせたかった。心から、そう願っていた。

しかし、拒否した狂四郎を、翻心させることの不可能であることも、十郎次は、知っていた。

狂四郎自身、曾て出会さなかったほどの凄じい修羅場が、待っているのを、予想していない筈はないのである。

予想し乍ら、平然と、西へ向って歩いて行こうとするこの異相の浪人者を、十郎次は、今更乍ら、心からの畏敬の念をこめて、見戍らずにはいられなかった。

「では――これで……」

狂四郎は、軽く一揖をのこして、立ち上った。

その時であった。

どさっ、と大きな、にぶい音がしたと思うと、茶屋の出廂へ、落下して来た物があった。
十帖はあろう大凧が、店さき一杯に、ふさがったのである。
のみならず――。
凧のまん中で、頭髪で吊られた生首が、がくりとゆれた。
「……？」
狂四郎は、その生首の額に入れられた十字の刺青を視た。
これは、極悪の囚徒のものである。
「はて……、味方ヶ原の催しに、このような不吉なものをつけた凧を、どこの町内が揚げたのであろう？」
田住十郎次は、眉宇をひそめて、近づき、その生首をしげしげと視入ってから、
「これは、先殺、捕えた、紺屋町の両替商に押し入って、一家十二人をみな殺しにした千里虎蔵と申す兇賊だが……、まだ、町奉行所で処刑にしたとは、きき申さなんだが――」
と、首をかしげた。
恰度、その折、馬蹄の音が、せわしく、街道を鳴って来た。
「おう……、首凧め、ここに落ちたたか」
そう云いのこして、またせわしく、駆け抜けて行く者を、凧の蔭からのぞいた十郎次は、
「そうであったか！」
と、にがにがしげに、吐き出した。
「何者なのか？」
狂四郎が問うと、十郎次は、

「御城代の後嗣ぎです。……悪戯も、程がすぎ申す」

と、云った。

四半刻の後、水野大三郎が、どかどかと上って行ったのは、舞坂宿の、荒井との舟渡し場のそばにある料亭であった。

水上へさし出された座敷に、どっかと胡坐をかいた大三郎は、

「初鰹を、食うぞ！」

と、三つ指ついた女将へ云った。

「ちゃんと用意して、お待ち申し上げて居りました」

女将は、笑顔で、こたえた。

女房や娘を質に入れても、初鰹を喰べる、といわれるほど珍重した時代であった。

その初鰹の食味を最も知っているのは、江戸っ子ではなく、土佐人と遠江人であった。

これは、土佐でも遠州でも、鰹船が日帰り出来る範囲内で、漁をしているからであった。土佐も遠州も、鰯を追って、陸地近くまで寄って来る鰹を獲ることができて、遠く外洋まで出漁するに及ばなかったのである。

この初鰹は、東海では、舞坂物と呼ばれて、珍重される。

舞坂物は、六月に入らねば、一般庶民の口には入らぬ。鰹の大群が、海岸近くに寄って来るのは、夏になってからなのである。

しかし、千金を投じても初鰹をもとめる者は、それまで待ってはいない。

その年、最初に釣りあげられた鰹が、まず将軍家へ献上され、つづいて、藩主の口に入るのを待って、金持たちは、他家よりも一日もはやく、食膳にのせようと、躍起になる。

水野大三郎は、この三年あまりの間、浜松城下では、主君の次に、自分が第一番に、初鰹を喰べるのを、自慢としていた。

そのために、この料亭へ、毎日、使いを趨らせて、

「まだか？　まだか？」

と、催促していたのである。

「今年も、おれが、一番だぞ！」

大三郎は、愉快そうに、高笑いした。

「若様。今年の初鰹は、特に、さる御仁が、若様に召上って頂きたい、とそれはもう大層な大ものを、はこんで参られました」

女将は、告げた。

「おれに贈ってくれる？　何者だ、それは？」

「なぜでございましょうか、わざと、お名前を伏せておいでございます。……ただいま、その初鰹を、ここへ、持参いたします」

やがて、大三郎の面前へはこばれて来たのは、大俎にのせられた五尺余りの初鰹であった。

「うむ！　見事だ！　贈り主へ、礼を申さねばならん。住いはどこだ？　姓名もきいて参れ」

「その必要はございませぬ。すぐ、これへ、挨拶に上られます」

女将と入れちがいに、のそりと入って来た黒の着流しの浪人者を、大三郎は、見やって、

「お主が、呉れた？……お主、何者だ？　おれに呉れる理由はなんだ？」

「その理由は、ただいま、ごらんに入れる」

浪人者は、大俎の前に坐ると、すでに裂いてある初鰹の腹の中へ、左手を、すっと、さし入れた。

そして、無造作に、ずるずると、ひきずり出したものを、どさりと、大三郎の膝の前へ、投げた。

それは、兇賊千里虎蔵の生首であった。

大三郎が、今朝、無断で、町奉行所の獄舎から、ひき出して、打首にして、大凧へくくりつけたのである。

「なんだ！……おのれっ！」

大三郎は、大刀をひっ摑んで、突っ立った。

「なんの存念だっ？　ぬかせ！」

激昂して、喚きたてる城代家老の嫡子を、冷然として見上げた狂四郎は、

「お主、生首を呑んで居る初鰹の刺身を、あじわう度胸はないのか？」

と云って、薄ら笑った。

「うぬがっ！」

大三郎は、抜きつけに、狂四郎めがけて、斬りつけた。

次の瞬間、大三郎自身、どうして奪われたのか判らぬほどの迅業で、白刃は、狂四郎の手に移っていた。

大三郎は、わけのわからぬ絶叫をほとばしらせると、脇差を抜いて、躍りかかった。

むなしく空を搏った無念をおぼえるいとまもなく、峰撃ちをくらった大三郎は、その場へ、崩れ落ちた。

意識をとりもどした時、大三郎は、高小手にしばりあげられ、胸まで水につけられている自分に、気がついた。
あわてて、動こうとして、思わず、
「うっ！」
と、呻いた。
細引が、頸にかけられ、それは、まっすぐに、頭上の料亭の座敷の出窓に、むすびつけられていたのである。
さらに、屈辱であったのは、細引の中ほどに、板札がつけられてあり、
『この初もの、一尾百文也』
と、記してあったのである。
「く、くそっ！」
大三郎は、口惜しさに、目玉がとび出さんばかりにひき剝いて、唸った。しかし、もがけば、細引が頸にくい込んで、縊れ死ぬおそれがあった。
渡し場から、一艘の借切り舟が、漕ぎ出されて来たので、大三郎は、思わず、
「お、おれを、解けっ！」
と、絶叫した。
絶叫したとたん、大三郎は、
「おっ！」
と息をのんだ。
舟に乗っていたのは、おのれをこのような目に遭わせた張本人ではないか。

「狂気を冷やすには、しばらく、そうして置かれた方がよかろう。鰹の代金は、お主の財布から支払っておいた。少々高かったが、人の財布のことだ。値切らずにおいた。ついでに、お主にも、値段をつけておいたが、百文で安いと思ったら、見物料を含めて、自身で、もうすこし値上げすることだ」

皮肉な言葉をのこしておいて、舟は、ゆっくりと、荒井へ向って、遠ざかって行った。

荒井切腹碑

舞坂から荒井の間の一里の渡海を、今切の渡しという。

そのむかし、浜名湖は、文字通りの淡水湖であった。

後土御門帝の時世に、大地震が起って、海とつづいたのである。今切という地名は、そこから起った。

湖水であった頃は、水が海へ流れ落ちるところに、橋が架っていた。

衣笠内大臣も詠んでいる。

　朝日うけ浜名の橋のとだえして霞と渡る春の旅人

しかし——。

「更科日記」には「下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、あとだに見えねば、舟にてわたる」とあり、すでに、橋はうしなわれていた。

この今切の渡しは、舟に弱い婦女子などは、これを避けて、陸路を迂回した。この道を姫街道

と称した。大層な廻り道であった。
「舞坂一里、舟に乗るも馬鹿、乗らぬも馬鹿」という諺がある。
舟をあがると、荒井の関所があった。
ここを境として、関東と関西と、人情風俗もおのずから異った。
荒井の関所が、箱根の番所に次いで、旅人の取調べにきびしかった故もあろう。
関所の前には、調べ待ちのための腰掛茶屋も、数軒並んでいた。
その一軒の店先に、初老の中間が一人、何やら思いつめた気色で、腰を下していた。
店のあるじが、
「手形でも落しなされたか?」
と、問いかけた程、その様子は、ただならぬものがあった。
「いえ、人を待っているのでございます」
中間が、実直な人柄を示す物腰で、こたえてから、はや半刻過ぎていた。
関所の門から、黒の着流しの浪人姿が、現れると、中間は、
「あ!」
と、声をたてて、立ち上った。
急いで、近づいて、
「眠狂四郎様とお見受け申しまする」
と、呼びかけた。
狂四郎は、黙って、中間を視かえした。
「お願い申し上げたい儀がございまして、ここで、お待ち申して居りました」

そう云いつつ、中間は、あたりをはばかるおちつきのない態度を、かくしきれないようであった。

路上には、黄昏の色が濃くなっていて、人影の行き交いも、なんとなくあわただしく、行手に竝んだ旅籠の店先で客の袖を引く女中たちの声が、風に乗って、つたわって来ていた。

狂四郎は、こたえず、歩き出した。

「眠狂四郎様――。お願いでございます！……是非おききとどけねがわしゅう存じまする。てまえのあるじの一命にかかわることでございます！」

中間は、必死に歎願した。

しかし、狂四郎は、無言のまま、歩きつづけて、やがて、旅籠の通りに入った。すると、中間の方は、狂四郎から、急に、はなれて、どこかへ、姿をかくした。

しかし、あきらめたのではなかった。

狂四郎が、旅籠をえらんで、部屋へ入ると、ほどなく、障子が開けられ、そこに、その中間が、平伏したのである。

往還で、歎願しているところを、誰かに目撃されるのを避けたに相違なかった。

「お願い申しまする！」

中間は、平伏したまま、肚裡からしぼりあげるような声音を出した。

「わたしは、見知らぬ他人のために、一臂を仮したり、片肌ぬいだりする義侠心は、一向に持ち合せて居らぬ。あきらめてもらおう」

狂四郎は、冷然として、拒否した。

中間は、顔を擡げた。

「いえ！」
烈しくかぶりを振って、
「てまえのあるじは、貴方様に、果し合いを挑むことを、命じられて居るのでございます」
「………」
「あるじは、長尾修之進と申し、まだ二十一歳でございまする。……貴方様と果し合いをして、到底勝てる腕前ではございませぬ。あるじもまた、それを、よく承知いたして居ります る」
「お前の主人は、いずれの家中だ？」
「藩名だけは、てまえの口からは、申し上げられませぬ。この儀ばかりはお許し下されませ。……身勝手なお願いであることは、重々承知の上で、お願い申しまする。何卒、てまえのあるじの一命だけは、おたすけ下さいますよう、この下僕一生のお願いでございまする！」
「お前の主人は、君命であればやむなく、未熟の腕前ではこの眠狂四郎に敗れると知りつつ、討手の役目を受けた。お前は、その苦しみを、見るに見かねて、こっそり、裏取引にやって来た――というわけか？」
「お願い申しまする！」
「あいにくだったな、爺さん。対手がわるかった。……この家来が、はたして眠狂四郎を討ち果せるかどうか、その腕前の程も判らぬ暗愚の殿様も気に食わぬし、そのような馬鹿殿様の命令を、黙って受けて、ひとつしかない生命をすてようとするお前の主人も気に食わぬ。そして、そうしたなさけない主人のために、忠義だてして、赤心を吐露すれば、眠狂四郎の心が動かせる、と考えたお前の忠僕面も、気に食わぬ。……爺さん、戻って、主人に進言してはどうだ。馬鹿殿様にさっさと見切りをつけて、二刀をすてて、町人におなりになって、長寿をまっとうされては、い

かがでございましょう、となｊ

翌朝――。

狂四郎は、旅籠を出たとたんに、尾けて来る者がいるのを、察知した。

そ知らぬふりで、街道をひろって行き、やがて、七十五里の遠州灘を一望のもとに見渡せる汐見坂への坂道にさしかかった時――。

不意に、路傍の観音堂の蔭から、五人の武士が、躍り出て来て、行手に三人、背後に二人、前後をさえぎった。

いずれも、二十歳前後の若ざむらいであった。

狂四郎は、ふところ手のまま、立ちどまって、

「どこやらの藩の討手の衆か？」

と、訊ねた。

「そこまで、ご同道ねがいたい」

一人が、云った。

「ここでは、通行人に迷惑をかける、という理由なら、こっちの方は、かえって、ここの方が都合がいいことだ。討ちかかって来るのは、そちらの方だし、身を守るこっちは申しひらきができる。また、見物衆の足を長く停めさせぬように、勝負をはやくつけることも、できる」

「われわれは、われらが殿の御前で、貴殿と果し合いをいたす」

そうこたえる声音は、極度の緊張で、顫えていた。

「……？」

狂四郎は、一人一人の顔を、見渡した。

いずれの顔にも、怯懦とか卑屈とか困惑とか絶望とか——そのような人間の弱さを滲ませる色は、みじんもなく、主君の命令を遂行する一途な決意を示す表情がかたく貼りついていた。

——若さか。

すでにおのれが永久に失ったものを、狂四郎は、渠らに看た。

——このような、疑うことを知らぬ、純真な若者たちを、むざと死に追いやる馬鹿殿の面を拝見するか。

狂四郎は、

「ご案内願おう」

と、云った。

歩き出してから、

「この中に、長尾修之進という御仁は、いるのか？」

と、訊ねた。

「それがしだが……」

前を行く三人のうち、左端の者が、こたえて、振りかえった。

「どうして、それがしの名前をご存じなのか？」

「こちらも、ただ一人で、物見遊山のために、ぶらぶら歩いているわけではない。行手に、何が待ち伏せているか、報せて呉れる者を持って居る」

狂四郎は、この若ざむらいの忠実な下僕をかばって、嘘をついた。

狂四郎の心中には、この五人が躍り出て来たとたんから、ひとつの疑惑が生じていた。
狂四郎ほどの者になれば、刀を抜き合わさずとも、一瞥しただけで、対手がどれほどの伎倆の所有者か、看て取れる。これまで、狂四郎に、決闘を挑んで来た敵は、例外なく、充分に兵法を修め、その自信もそなえた使い手ばかりであった。
この道中の途次、狂四郎は、鎌倉の朝比奈切通台上で、田原藩ほか七藩の家中からえらばれた若ざむらいたちを対手として、闘っているが――その中には少年のままの面差を持った者もいたが――いずれも、腕前はたしかであった。その藩では、麒麟児とか天才とか称された者であったに相違ない。
眠狂四郎という無数の人を斬った、剣魔ともいえる男を討つべく、さし向けて来たからには、各藩それぞれが、この若者こそは、と自信を持ってえらんだに相違あるまいし、また、当人も、われこそは、と気負い立っていたであろう。
ただ――。
いかに、道場稽古で抜群の手練を発揮した麒麟児と雖も、実戦に臨んでは、かぞえきれぬ人命を断った無想正宗の前には、ひとたまりもなく敗れ去らねばならなかった。渠らが、未熟の腕前であったという次第ではないのである。
ところが……。
いま、狂四郎に果し合いを挑んで来た五人の若ざむらいは、あの七藩の若ざむらいたちとは、比べもならぬ、未熟な腕前の持主なのであった。
このような未熟者たちを、どうして、この眠狂四郎に対して、闘わせようというのか。
しかも、その果し合いを、命令者自身、その目で見とどけようというのだ。

疑問といわざるを得なかった。

狂四郎が、みちびかれたのは、汐見坂の断崖上に建てられた荒井本陣引田八郎兵衛の別宅であった。

行列をここにとどめているのであれば、その大名の家紋を浮かせた高張提灯と幔幕でかざってある筈であったが、それは無く、ひっそりとしていた。

庭に立てば、視界いっぱいに、遠州灘が、初夏の眩しい朝陽をあびて海原を抱く壮大な弧線を、灰色に烟らせていた。

狂四郎は、その一望開豁の絶景には一瞥もくれずに、背を向けて、白砂上に立った。

広縁には、緋毛氈が敷かれ、上座が設けられ、すでに、左右には、近習らしい武士が数人ずつ控えていた。

狂四郎がそこに佇立すると、間を置かずに、五人の若ざむらいの命令者が、急ぎ足で出て来た。頭巾で、目ばかりに包んで、いずれの藩侯であるか、かくしていた。

狂四郎の興味をそそったのは、これに従って現れて、左右の座に就いた者たちであった。右は、側妾とみえた。これが、一瞬息をのませるばかりの美女だったのである。左は、稚児姓であったが、これもまた、はっとなるほどの美童であった。

その双つの白い貌が、頭巾の主人の両側で、そこにだけ別の光が映えているように、妖しく浮き立った。

「眠狂四郎、真剣試合を所望じゃ。その方の手の内、どれほどの冴えがあるか、見せてくれい」

「このご所望、合点が参らぬ」
「なんと申す――」
「えらんであるこの五人の衆は、未熟もきわまる御仁たちと見受け申したが、いかがであろう?」
「云うなっ！　どれも、必死の太刀を使うぞ。やれい！　一騎討ちじゃ」
「一騎討ち?」
五人が一挙にかかって来るもの、とばかり思っていた狂四郎は、唖然となった。
これでは、まるで、五人の若い家臣を、全くの犬死をさせることになるではないか。五人が一挙にかかって来るのでさえ、こちらは、ばかげた果し合いをすることになる、と考えていたのだ。
――そうか！　これには、仔細があるに相違ない。馬鹿殿ではない。なにか、この五人の家来に対して、憎しみを抱いているらしい。
「やれい！」
主君の叫びに応じて、一人が、
「それがし、一番に、お対手つかまつる！」
と、刀を抜きはなつや、青眼に構えて、じりじりと狂四郎に迫った。
狂四郎は、両手をダラリと下げたなりで、冷たい眼眸を当てているばかりであった。
「えいっ！」
懸声もろとも、斬り込んで来た。
その瞬間の狂四郎の動きは、いっそ、緩慢とも見えた。
すっと、一歩出て、振り下した対手の利腕を左手で押えておいて、ひょい、と右手で、その刀を奪い、峰をかえして、胴を薙ぐ。その業の連続が、どの目にも、はっきりと見てとれたのであ

る。
若ざむらいは、呻きもあげずに、その場に、昏倒した。
「不覚者っ！　次じゃ！　やれい！」
その叫び声は、異様に神経の昂った、苛立たしいものだった。
二番目の若ざむらいも、まことにあっけなく、白砂上に俯伏した。
「ええい！　おのれがっ！……眠狂四郎っ、なぜ、素手であしらうのじゃ！　どうして、斬らぬ？　果し合いじゃぞ！　わしが、許した果し合いじゃぞ！」
呶鳴り立て乍ら、思わずわれを忘れて、突っ立った命令者を、じっと、見やった狂四郎は、
「ひとつだけ、おうかがいしておく。もし、ご家来衆で、わたしを斬ることができた者には、何を褒美に、約束なされた？」
と、問うた。
「褒美か。褒美は、これじゃ！」
命令者は、右側の美女を、指さした。
「こ、これを、くれてやる、と約束したぞ！」
「成程――」
狂四郎は、頷いた。
命令者が、激昂して、突っ立った瞬間、狂四郎は、美女と美童が、他の者たちには気がつかれないように、チラと目と目を合せて、あきらかに、意味のある気持を交わしたのを、看のがさなかったのである。
狂四郎は、残った三人へ視線をまわすと、

「お主ら、まだ、わたしと立ち合う所存か？」
と、訊ねかけた。
三人がこたえるよりさきに、命令者が、怒号した。
「万作！　修之進！　吉右衛門！　一挙にかかれ！　一挙にじゃ！」
三人は、「はっ」と応じて、一斉に、抜刀した。
狂四郎は、三方から肉薄させておいて、なお、両手を空けたなりであった。
「やあっ！」
一人が、左方から、斬りつけ、あとの二人も、せい一杯の懸声をほとばしらせたが……。
ほんのまばたきするほどの短い間に、勝負は、ついてしまった。
三人とも、峰撃ちをくらって、地面に、その意識をすて去っていた。
「ふ、不覚者どもがっ！　切腹じゃ！　切腹申しつけるぞっ！」
命令者は、喚きたてた。
狂四郎は、薄ら笑うと、ゆっくりと、広縁に近づいた。
「殿——。切腹をお申しつけになるのは、この五人の若い衆ではなくて、別の者ではありますまいか」
「なに？」
命令者は、目を剝いた。
狂四郎の冷たい眼眸は、左側の稚児姓の顔へ、据えられていた。
美童の顔には、恐怖と狼狽の色がうかべられていた。
その表情を視て、狂四郎は、確信を持った。

次の刹那――。

広縁へ躍り上った狂四郎は、若ざむらいの一人から奪った刀を、一閃させた。

「あっ！」

魂消る悲鳴をあげて、美童は、のけぞった。

その衣服の前は、ま二つに截られていた。

狂四郎が、袴の一端を摑んで、引くや、美童は、宛然、寄居蟹が、巻き貝から抛り出されるあんばいに、下帯ひとつの素裸に、ひき剝かれた。

狂四郎は、その裸身を、広縁から、蹴落しておいて、こんどは、右側でおののく側妾へ向って、この男独特の迅業を送りつけた。

悲鳴もろとものけぞった美女の前は――帯も、衣裳も両断されて、ばらりとはだけた。

命令者も近習一同も、ただもう、狂四郎の鮮やかな措置に、気を呑まれて、茫然と、自失の態で、為すすべもないありさまであった。

狂四郎は、生きた心地もなくおののいている裸女と裸童を、白砂の上にならべておいて、命令者に、云った。

「お手前様は、寵愛している側妾が、どうやら、家中の若ざむらいと密通していることに感づかれた。だが――さて、証拠もないし、どの若ざむらいが密通男か、突きとめられぬ。そこで、側妾が惚れそうな者どもを、見当つけて、えらび出し、果し合いの名目で、この素浪人に、斬らせようとなされた。そうですな？」

「……う――」

命令者は、狂四郎の見事な図星に、ひくく、呻いた。

「とんだ見当ちがいであったことだ。……お手前様は、衆道趣味もおありなさる。その若衆に、側妾を寝取られていたとは、とんだお笑い草だが、それも、身から出た錆と申すもの。……ここは一番、翻然とわれにかえって、姦夫姦婦を、重ねて四つに、成敗されるのが、家中に忠義心をとりもどさせる唯一の手段でありましょうな」

皮肉な口調で、云いすてておいて、狂四郎は、一揖した。

「眠狂四郎！　わしを、侮辱するかっ！」

命令者は、顔面を朱にして、呶鳴った。

狂四郎は、かまわず、立ち去って行く――。

「誰かっ――あやつを、このまま、去なせてはならぬ！　追うて、討ち果せっ！　討ち果す者は居らぬかっ！　百石の加増じゃ！　百石だぞっ！」

絶叫をあび乍らも、近習たちは、一人のこらず俯向いて、動こうとはしなかった。

狂四郎が、立場茶屋で一刻をつぶして、汐見坂をすこし下ったところにある沖の船より目当の灯籠堂の前にさしかかったのは、午すぎていた。そして、そこに、土下座している者が、長尾修之進の中間であることを、みとめた。

狂四郎を仰ぐその双眼は、まっ赤に充血していた。

狂四郎は、ちょっと、立ちどまって、見下したが、そのまま、黙って、行き過ぎようとした。

「眠様――」

中間は、哭き涸れた声で、呼んだ。

狂四郎が、頭をまわすと、中間は、痴呆のようにうつろな表情で、

「あるじは……、切腹、つかまつりました」
「切腹！」
狂四郎は、眉宇をひそめた。
「他の四人もか？」
「は、はい——」
「………」
狂四郎は、何か云いかけたが、口にするのも無駄と知って、そのまま、歩き出していた。
——あの若ざむらいたちは、おのれらの生きる道が、別の世界にもあることを知らなかったのか！
苦汁が、胸もとにせりあげて来るような暗然たる思いであった。
「ばかな奴らだ！」
その一言を吐きすてたのは、数丁も辿ってからであった。

白須賀の母

なんの前ぶれもなく、急に、襲いかかって来た夕立であった。
街道が背負うた山を、押しつつんで、あたりを宵の暗さにすると、雨あしは、大きく揺れる幔幕のように、波うち乍ら、地面に落ちて、高い飛沫をあげた。
白須賀宿に入ったところで、眠狂四郎は、この夕立にあい、立場茶屋の落間から、その車軸を

流すもの凄い雨を眺めていた。

稲妻のあとから、雷が轟く。

落間には、数人が駆け込んでいたが、夕立のあまりの烈しさに、怯えたように、みな、押し黙っていた。

狂四郎のとなりには、宗匠頭巾をかぶり、竜紋の小紋に紗の単羽織をつけた初老の男が、腰かけていたが、これは、なにやら冥想にふけっているように、両眼を閉じている。

やがて――。

雨雲が切れて、陽ざしが、雨あしを縫って、あたりを明るくして来た。

灰色に烟っていた前方の遠州灘が、幕があげられるように、浮きあがって来る景色は、美しいものであった。

夕立は、西へ移って行った。

その時――。

隣りの男が、ひくく、しかし、はっきりと狂四郎にきこえるように、独語した。

「坎為水――。彖伝に曰く。習坎は重険なり。水流れて盈たず、険を行いてその信を失わず、維れ、心亨る。乃ち剛中を以てなり。行きて尚ばるるは、行きて功あるなり。天の険は升るべからざるなり。地の険は、山川丘陵なり。王公、険を設けて以てその国を守る。険の時用大なる哉」

――おれに向って、云って居るのか。

狂四郎にも、それが、筮竹によって占う易の文句であることが判った。

つまり、男は、大凶と出た占いを、口にしている。

狂四郎が、黙っていると、男は、さらにつづけた。

「上六。係ぐに徽纆を用う。叢棘に寘く。三歳得ず。大凶――」
「…………」
狂四郎は、わずらわしくなって、床几から腰を上げた。
とたんに、
「あいや――」
と、声をかけられた。
「失礼乍ら、西へ進まれるのは、止されたがよろしかろう」
男は、忠告した。
「雨があがるのを待つ間のつれづれに、お手前様に就いて、胸中で、筮竹を使ってみました。坎為水を、平らにしてご説明申そうなら、行手に大災難あり、漂泊の身の困窮に耐え得ずして詐為妄行、出会う対手の心中に毒あり……」
「…………」
狂四郎は、なんともこたえず、水たまりの光る路上へ出た。
すると、男は、すっと跟いて出て来て、
「それ――お手前様の、地上へ落した影の怪しさ！」
と、鋭く云った。
狂四郎は、苦笑して、
「相学には、人相、手相、骨相のほかに、影相というのもあるのか？」
「それがし三十年の発明によって、影相を知りました。先天運を観る上に、年、月、日、時の干支を根幹となすものなれば、当然、その空亡は、自己の影法師にも、顕れて居りまするぞ。影は、

人が生れた時から、死ぬまでつきまとうものでありますれば……」

空亡というのは、例えば甲子の日に生れた者は、戌と亥の年月日やその方角が空亡に当る、といった理窟である。

そんなものを、狂四郎という男が、塵ほども念頭に置いている次第ではない。

しかし、一喝して、しりぞけるには、この易者の態度は、いささか、しつっこすぎるようであった。

「影の中に、吉凶禍福を観るとは、おもしろい。……わたしのこの影には、死相が出て居るというのだな？」

「申すのをはばかりますが、敢えて指摘つかまつる。まさに、あきらかに！」

「結構だ。わたしは、背中に、この手で斬った何百人かの怨霊を負うて居る。おのが影法師に、死相が出ているのは、当然だろう」

そう云いすてた——刹那。

対手は、ぱっと、跳び退った。

こちらがわざと、痩身に殺気を発したのに対する、反射的な敏捷きわまる動作であった。

狂四郎は、冷やかな眼眸を、男へめぐらして、

「やはり、ただの易者ではなかったようだな。ついでに、訊いておこう。……わたしの行手に、どんな凶事が、待って居るのだ？」

「それは、それがしにも、判り申さぬ。ただ、その影の大凶を払うためには、これからお手前様が、百歩を往かれる間に、目にとめられるであろう何かの願いごと、訴えごとを、すすんで、引受けられるがよろしかろうと存ずる」

雨が去って、再び暑気の来た往還を、ふところ手で歩く狂四郎は、易者の忠告にしたがって、歩数をかぞえていた。

左右に、旅籠がならんでいたが、留女が客の袖をつかんで呼び込むには、まだ早い陽盛りの時刻で、宿はひっそりとしていた。

狂四郎は、百歩をかぞえおわった時、旅籠と旅籠にはさまれた小さな稲荷の祠の前に、ちょこんと蹲っている十一二歳の少年を、視た。

少年は、その胸に、木札をぶらさげていた。

それに記された奇妙な文句を読んで、狂四郎は、

——これか。

と、思った。

『わが母おやを売り申し候』

そう記されてあったのである。

狂四郎は、百歩目の足を停めた。

「母親を売るというのは、どういうことだ？」

訊ねると、少年は、顔を擡げて、なんのためらう気色もなく、

「母者が、春をひさぎまする」

と、こたえた。

ぼろをまとっているが、あきらかに、さむらいの子である。整った貌かたちも、町家のせがれ

とは自ら区別される、きりりとひきしまった気色を示していた。

「ひさいだ金で、くらして居るのか？」

「薬餌（やくじ）をもとめまする」

「……？」

「祖父がわずらって、臥（ふ）して居りまする」

「………」

「母者は、旅のおさむらい衆にしか、春をひさぎませぬ。……買（こ）うて下され」

「よかろう」

「忝（かたじ）けのう存じまする」

少年は、立ち上ると、ふところから、手拭いをとり出して、

「これで、目かくしをして下され。わしが、手をひいて、案内つかまつります」

「家を知られたくない、というのだな？」

「はい」

狂四郎は、手拭いで両眼をしばると、

「手をひかれずともよい。お前が先に立てば、その跫音（あしおと）に跟（つ）いて行く」

と、云った。

「はい。……では、そろそろとおいでなされませ」

狂四郎は、脇道に入った少年のうしろにしたがった。

「お前は、いつから、あの稲荷の前に、坐って居る？」

「十日ばかり前からでございます」

「幾人のさむらいが、お前の母親を買った？」
「まだ、一人も、買うて下さいませぬ」
「どうしてだろう。旅に出れば、好奇心は強くなるものだが……」
「家までは、参られた御仁は、五人や十人ではございませぬ。……でも——」
少年は、口をつぐんだ。
狂四郎は、敢えて、その理由を訊かぬことにした。少年の母親に会ってみれば、さむらいたちが、なぜ買わずにひきかえしたか、判る筈であった。
「あそこに坐っていれば、宿の評判になって居ろうな？」
「みな、見て見ぬふりをして居ります る」
「あわれんでくれる者もいなければ、さげすむ者も居らぬのか？」
「はい。知らぬ顔でございます」
これも、合点のいかぬことだった。
およそ、四丁も、辿ったであろう。夕立がのこした水滴が風でしたたる林の中に入ると、すぐに、少年が、
「ここから、石段になりますゆえ、ご要心なされませ」
と、注意した。
石段は、かなり急勾配で、数も多かった。
少年は、門から玄関、そして、一室にともなうまで、いちいちていねいに注意した。よほど出来た少年であるが、母親が身を売る手だすけをしている神経は尋常とは云えぬ。ほかに、くらしのてだてがない筈はあるまいに、平然として、好奇の視線をひく木札を胸にぶらさげて、宿のま

ん中に坐っているのは、どういうことなのか。
その態度が、きびしく躾られ、気象も能く生れついているように見えるだけに、これは、甚だ不審を呼ぶ。
――どうやら、これも、罠のようだな。そんなにおいがする。
みちびかれた座敷に坐って、手拭いをとりはずした狂四郎は、ふっと、予感が起った。
ごくありふれた座敷であった。襖も障子も閉じられ、暑気が、むっとこもっていた。
屋内は、しんとして、物音ひとつきこえなかった。

半刻あまり、その座敷で待たされた狂四郎は、入って来た少年から、
「用意ととのいましたゆえ、こちらへ、おいで下さいませ」
と、促された。
縁側から露地へ降りて、枝折戸をくぐると、そこに離れがあった。
郷士の構えで、しかも、由緒をもつ古い家と受けとれた。
陽がかげり、風が涼しい時刻になっていた。
離れは、あけはなたれ、簾の蔭で、萌黄の蚊帳が、籐筵の上で微かに、揺れていた。
蚊帳の外には、網のある伏籠が置かれ、その中の香炉から、ほのかに、伽羅の香がただよい出ていた。
狂四郎は、蚊帳の中に坐っている女を、すかし視た。
葦に水雁を染めた麻の浴衣に、繻子を前帯にしどけなく結んだ姿は、いかにもなまめいたもの

であったが、不粋なのは、頬かくし頭巾で、顔を目ばかりに包んでいることであった。
「おいでなされませ」
美しくひびく声音で、迎えられて、狂四郎が、伏籠のわきに上ると、少年の方は、一礼して、すたすたと、去って行った。
狂四郎が、そこに坐ると、女は、
「藪蚊がひどうございます。どうぞ、中へお入り下さいませ」
と、すすめた。
狂四郎は、蚊帳の中の短檠を指さして、
「それにあかりが入らねば、男女の睦ごとには、情緒が生れまい」
と、云った。
そのむかし――。
公卿が、姫君のもとに忍んで来た時、灯火が入るまでは、その牀に近づかぬのが、作法であったという。
それぐらいの心得は、狂四郎の方にもあった。
対手が、そこいらの売笑婦の春のひさぎぶりと同一視されまいために、風雅の雰囲気をつくって、客を迎えたのであれば、こちらも、それに応える必要があった。
「宵闇が落ちるまでには、まだ、一刻もございます。……どうぞ、お入り下さいませ」
かさねて、すすめられて、狂四郎は、蚊帳の中に入った。
ほんのしばらく、沈黙があってから、女は、俯向いて、云った。
「貴方様も、この頭巾をはずすように、お求めなさいましょうか？」

「これまで、ここへやって来たさむらいたちは、のこらず、所望したのか？」
「はい。お一人の例外もなく……」
「その頭巾をはずしたら、化物面を見せることになる、とでもいうのか？」
「かような不粋なかぶりもので顔をかくしているのは、それだけの仔細があることと、お察し下さいませ」
「脱ぎたくなければ、しいて脱げとは云わぬ」
「有難う存じまする」
「ひとつだけ、たずねておこう」
「なんでございましょう？」
「そなたの子どもが、母親を売る木札を胸にかけて、この白須賀宿の往来に坐っているにも拘らず、土地の者たちが、見て見ぬふりをしている由だが、何故であろうか？」
「…………」
女は、こたえなかった。
「当家が、武家の屋敷であることは、まぎれもない。由緒もあるように見受ける。この土地では、格式をそなえた何々家と称われて居るのであろう。そのような家の妻女が、公然と、春をひさぐ。評判にならぬ道理があるまい」
「…………」
「それが、何故、噂にならず、人々は、わざとそ知らぬふりをして居るのか。うかがいたいものだ」
「…………」
狂四郎は、腕を組み、じっと、女を見据えた。

こうした場合、対手が口をひらくまで、辛抱づよく、待っていることのできる男であった。

長い沈黙ののち、女が為（な）したのは、返辞をするかわりに、短檠に灯を入れることであった。

夕べの薄闇が、ようやく、庭に降りて来ていたのである。

女が、次に為したのは、その頬かくし頭巾を、そっと、脱ぐことであった。

狂四郎には、その横顔だけを見せたが、それは、はっとならせるほど、美しかった。

細く高く通った鼻梁（びりょう）のかたちのよさは、無類といえた。格式をそなえた家柄の、幾百年かの伝統の中からでなければ生れない気品が、匂うていた。

「貴方（あなた）様は、ふしぎな御仁でございます」

女が、長い沈黙を破って、まず口にしたのは、その言葉であった。

「わたくしに、とうとう、この頭巾を脱がせて、おしまいになりました。わたくしが、自分で、頭巾を脱いだのは、いまがはじめてでございます。これまで、かなりのおさむらい衆が、せがれの案内で、ここへおみえに相成り、その中には、わたくしがこばむのも肯（き）かずに、力ずくで、むりやり頭巾を脱がせようとなされた御仁も、一人や二人ではなかったのでございます。……貴方様は、脱ぎたくないものは、しいて脱げとは云わぬ、と仰せになりました。わたくしも、脱ぐ意志は毛頭なかったのでございます。……貴方様は、わたくしが、脱ぐまで、じっと、お待ちでございました」

「わたしの方は、白須賀宿の人々が、なぜ、見て見ぬふりをして居るのか、そのことを訊ねたまでだ」

「そのご返辞は、頭巾を脱ぐことでございます」

そう云って、女は、狂四郎へ、まっすぐに、顔を向けた。

――これは！
狂四郎は、息をのんだ。
かくされていた顔の半面は、無慚に、崩れていたのである。火傷の痕のような、ただ醜くひきつれて、かたまってしまったものではなく、肌が腐っているなまなましさを、その凸凹にも色にも示している不気味な崩れかたであった。
――癩か！
狂四郎は、非人乞食のたぐいの中に、業病で崩れた顔を、しばしば眺めたことがある。
「この顔をごらんなされては、いかな物好きの殿御も、わたくしを抱こうというお気持は消え失せましょう」
女は、挑みかかるような烈しい口調で、云った。
凝っと瞶めかえしていた狂四郎は、一瞬、ふっと、薄ら笑いを、口辺に刷いた。
「蓼食う虫が、やって来たと思ってもらおう」
「え?! わたくしを……このようなあさましい業病にとりつかれた女子を、敢えて、買おうと仰せられますのか？」
「左様――」
狂四郎は、平然として、頷いてみせた。
「…………」
女は、大きく目をみはって、狂四郎を瞶めた。
狂四郎の表情は、あくまでも冷たかった。
女は、口をひらいた。

「業病の兆候は、この顔のみならず、からだの各処にもあらわれて居ります。それでもかまわぬ、と仰せられますか？」

「一向に、気にならぬ。明日のために今日を生きては居らぬ男だ、と思ってもらおう。そのからだを抱いたからといって、こちらが、必ず業病にかかるとは、きまって居らぬし、かりに、かかったとしても、これは、わたしのような男が、野たれ死するにふさわしいやまいではないか」

そう云いはなち乍ら、狂四郎は、ふっと、

――この罠は、黒と云えば、白と云いかえすおれの気象を充分心得た上で、しかけて来ているのではないのか？

その疑惑をおぼえた。

とたんに、疑惑の中から、ひとつの直感がひらめき出た。

――そうか！　判った！

狂四郎は、おのれに頷いた。

「抱くぞ！」

一声あびせざま、狂四郎の片手は、女の浴衣の裾をつかんだ。

「あっ！」

悲鳴があがった時、もう、浴衣も緋の湯もじも、ぱっと捲りあげられ、宙に散って、豊かな白い下肢が、くまなく、あらわに、剥き出されていた。

狂四郎は、太腿に、ありありと浮いている癩の斑点を、視てとった。

その斑点へ、わざと、五指をかけた――瞬間、女は、修練したすばやい動きで、その手をはらうや、さっと蚊帳をはぐって、外へ遁れた。

狂四郎は、にやりとした。
わざと、いったん、遁したのである。
女は、外へ遁れ出るや、狂四郎が小柄をとばして来るのを警戒して、伏籠わきの縁柱を楯にすべく、くるっと、まわろうとした。
ところが、狂四郎の方は、女がそうするであろうと予想していた。
女が、縁柱に手をかけた刹那をはずさず、狂四郎は、小柄ならぬ、脇差を、抜く手もみせぬ迅さで、投げた。
脇差は、蚊帳を貫き、それを帆のように大きくふくらませつつ、女に飛んだ。
狂四郎が、しばしば、敵となった女性を、その場に立ち竦ませる残忍な業が、ここでも発揮された。
白刃は、刃を上にして、女の臀部の合せ目から、秘処の柔襞すれすれに、ぐさと、柱に突き刺さったのである。
女は、股間の柔肌にふれる白刃の冷たさに、悲鳴をあげ、次いで、動いたとたんに、秘処の柔襞を薄斬られて、呻いた。
白刃の峰が下になっているため、浴衣と湯もじを縫って、柱に突き刺さっているからには、女は、柱にとりすがったまま、動くことは許されないのであった。
「どうする？」
狂四郎は、冷やかに、問うた。
女は、喘いだ。
「からだを売るか？」

女は、うなずいた。
「う、売りまする」

二川の赤水

眠狂四郎は、やおら起つと、蚊帳を帆のようにふくらませて、女のからだを縁柱に縫いつけている脇差を、抜きとろうとした。
しかし、その柄に手をかけた瞬間、この男独特の鋭い直感力が働いた。
こちらは、蚊帳の中にいる。女は、蚊帳の外にいる。これは、警戒しなければならぬことであった。
おそらく、罠がしかけてあるとすれば、それは、こちらが一人、蚊帳の中に残された時に、起るであろう。
むかし——。
伊藤一刀斎が、小田原の妾宅に在った頃、酔いつぶれて、蚊帳の中にねむっている時、その妾の裏切りによって、私怨を持つ兵法者の群に襲撃され、蚊帳の釣手を切られ、文字通り袋の鼠になって、芋刺しにされようとしたことがある。一刀斎は、その危難を、夢中できり抜けたが、その型が、後日、一刀流の仏捨刀になった、という。
狂四郎は、この蚊帳が、古めかしく、乳が多くつけられ、それに紐が通されて、つるされていることに、気がついたのである。

伊藤一刀斎と同じ目に遭わされる危険が、充分にあった。
狂四郎は、蚊帳をはぐって、外へ出ると、女の股間から、脇差を抜きとった。
女は、うなだれて、しばらく、その場に、佇立していたが、思いあきらめた風情で、蚊帳の中に入ると、前帯を解いた。
狂四郎は、女が、仰臥するのを待ち乍ら、庭にひそむ者の有無に、鋭く、神経を配っていた。
月光の落ちた庭には、なんの気配もなかった。
ほんの微かな気配でもあれば、この男の異常にとぎすまされた神経に、ふれないですますことは不可能なのであった。
――そうか。
狂四郎は、思った。
――おれという人間を知っている奴が、罠をしかけている、と解釈してよさそうだ。
そうと判ってみれば、こちらは、その策略に、わざと乗ってみることである。そうしなければ、敵は、正体をあらわさぬのだ。
狂四郎は、蚊帳の中に入った。
女は、両手をまっすぐに、のばして、目蓋を閉じたまま、身じろぎもせぬ。
狂四郎は、ためらわずに、その浴衣の前を、左右に、はねのけた。そして、湯もじをめくるのにも、容赦のない手つきを示した。
短檠の灯に彩られた肌は、肉が盈ちて、泰山木の花弁のように、ぽってりと厚く、重かった。
その豊かな艶膚の、胸に、下腹に、癩のしるしが、点々と浮きあがっていた。
嫋々としげった恥毛の上には、ひときわ大きく、それは、ひろがっていた。

狂四郎は、女体を、ひと押しして、くるりと俯伏させた。

その背中には、どこにも、癩のしるしはみとめられなかった。

——ふむ！

狂四郎は、おのれの直感が、あやまっていなかったことを知った。

背後から、女を抱き——右手を腋下から胸の隆起へ、左手を臀部からさぐり入れる姿勢をとり乍ら、狂四郎の全神経は、あたりへ配られつづけていた。

左手が、柔襞の陰へ、入った——その瞬間。

女が、異様にひびく呻きをあげて、身もだえした。

同時に——。

蚊帳が、二人の上へ、ばさっと落ちた。

女が高い呻きをあげるのが、合図であった。

伊藤一刀斎が遭うた危難が、狂四郎に来た。

のみならず、対手は、庭のそこいらにひそんではいなかった。

襲って来たのは、矢であった。

月かげを縫って、つづけさまに、二人を掩うた蚊帳へ、飛び来って、ぐさ、ぐさ、と突き刺さった。

七本の矢が射込まれて、再び、静寂がおとずれた。

それから、ものの十もかぞえた頃、一斉に、多勢の人数が、遠くで、動いた。

と——その時。

蚊帳の中が、うごめいた。

とみるや、蚊帳は、風にあおられたように、籐筵とともに、はねあがって、その下から、狂四郎の姿が、すっくと立った。

縁側に出た狂四郎の左手には、奇妙なものが握られていた。

不意に、背後の、蚊帳に包まれていた短檠が、ぱっと、火を噴いた。

狂四郎の左手に握られていたものが、その火焔に、照らし出された。それは、女の顔の半面を無慚に崩れさせていた癩の皮膚であった。

魚のうろこで巧妙に造られた贋皮膚だったのである。

めらめらと燃えひろがる紅蓮舌を背にした狂四郎は、およそ四五十人もの群を率いて、奔り寄って来る少年を、眉宇をひそめて待ちかまえた。

少年は、眉も眦もつりあげて、

「眠狂四郎っ！　父の敵っ——覚悟！」

と、叫んだ。

その口上に対して、

「たわけっ！」

凄じい一喝が、あびせかえされた。

「生みの母親を、犠牲にして、なにが、父の敵だ。お前を示嗾した者は、およそ見当がついて居る。……たわけが！　せっかくの母子の静かなくらしを、地獄と化して、それが、お前の人生の上で、何になる！　なんの幸せ、なんの利を、もたらすというのだ？」

少年は、しかし、一矢さえも、この浪人者に射立てることができず、七本ことごとくを母親のからだに刺してしまった誤算に、完全に逆上してしまっていた。

おそらく、その手筈は、母親が、狂四郎一人を蚊帳の中へのこしておいて、合図することであったに相違ない。

合図とともに、蚊帳の釣手につないだ天蚕糸か何かの細い強靭な糸を、遠くから、引いて、蚊帳を落すしかけをつくっていたのだ。

近くに伏せていれば、狂四郎にさとられると思い、射手だけを、気配のとどかぬ距離にひそませておいて、少年はじめ一同は、ずっと遠方で、待機していたものである。

その射手も、距離の遠さゆえに、離れで起ったことは、しかと見分けられなかったのだ。

母親は、わが身を犠牲にして、合図の声をあげたのである。

狂四郎は、少年のうしろにむらがっている群を見わたし、武士を一人もまじえず、この白須賀宿の町家農家の住民ばかりであるのをみとめた。

宿ぐるみで、この少年の敵討を、応援したのである。

――この少年にとって、今宵の出来事は、悪夢となろう。

狂四郎は、遽に、どっと、室内に燃え狂いはじめた火焔に追われて、縁側から降りた。

「父の敵っ！」

少年は、絶叫して、刀をふりかぶった。

そのうしろの群衆が、一斉に、喚きたてた。

狂四郎は、少年に向って、まっすぐに、進んだ。

けなげにも――。

少年は、懸声もろとも、斬り込んで来た。

その小さなからだが、毬のように、はねとぶのを目撃した群衆は、あっと、悲鳴を渦にした。

しかし、狂四郎が依然として素手のままであるのをみとめて、ほっと、安堵を、波のようなざわめきにした。

狂四郎は、当て落した少年には、目もくれずに、群衆へ、突き進んだ。

人垣は、崩れて、ふたつに割れた。

狂四郎は、大股に、悠々と、その中を通った。

人々は、狂四郎を行き過ぎさせると、一時に、騒ぎたてた。

少年をたすけ起す者たちと、火事を離れだけにとどめようと躍起になる者たちに、わかれた。

狂四郎は、冠木門まで歩いて来て、そこに、夕立を避けた立場茶屋で、出会うた易者が、佇立しているのを、見出した。

「お主の忠告通り、わたしの影は、ごらんの通りの大凶だ」

「…………」

「しかし、この大凶は、いまに、はじまったことではない。こちらは、それを承知の上で、歩いて居る。……易者ならば、母子の敵討が、このような結果におわることを、どうして、占えなかったのだ？」

「…………」

「この眠狂四郎が、首尾よく仕止められる、と占ったお主の易は、甚だたよりにならぬものだ、ということになる。すなわち、お主は、もはや、この世では無用の存在となった。そうではないか」

それに対する返辞は、凄じい抜討ちの一撃であった。

易者は、撃ち込んだ姿勢のまま、固着した。
狂四郎が、四五歩行き過ぎた時、地面をひびかせて、仆れていた。

夜が明けそめた。
右方のひくい丘陵の稜線が、まず、浮きあがり、そこから、白い夜明けの大気が、田の面へ、人家へ、林へ、街道へ匍い降りて来るようであった。
白須賀宿から、深編笠の武士が、歩み出て来たのは、その時刻であった。
自然はまだねむりの中にあって、しろじろと通じている往還は、この武士に、はじめて踏まれるのであった。
武士の足どりは、早かった。
柏餅で名を売った猿ヶ馬場を越えて、境橋を渡る。遠江と三河の境である川なので、橋は、そう名づけられている。
そこから、次の宿までの二川までは、一里に足らぬ。
一里山という小さな部落を過ぎると、また川がある。二川宿は、そのむこうに、朝靄の中に、ひっそりとわだかまっていた。
深編笠の武士は、その橋袂に来て、足を停めた。
ぎくり、とした気色を、その肩のあたりに滲ませた。
むこうの橋袂に、地から湧き出たように、黒の着流しの浪人姿が、出現したからである。
「都田水心が、顔をかくして道中するとは、解せぬことだ」

眠狂四郎は、淡々とした大気の中で、薄ら笑ってみせた。

それに応えて、口をひらく代りに、素直に、編笠をとりはずしてみせたのは、一風変っている

この刺客らしい振舞いであった。

のそのそと、橋板を踏んで近づくと、

「おはようござる」

と、挨拶して、頭を下げた。

「お主の方に、待ち伏せされてばかりいるのも、どうかと思うので、こんどは、こちらが、待っていた」

「恐縮でござる」

水心は、いかにも殊勝げな態度であった。

「易学を生かじった男に、もったいらしく占わせてみたり、子供に奇妙な木札を胸にさげさせたり、旧家の後家を贋癩者にしたててみたり……趣向は凝っていたが、凝って思案のほか、という結果になったたな、刺客殿」

「このたびばかりは、成功疑いなし、と自信を持ち申したが、やはり、貴殿には敵わぬことでござった。真底、こんどこそは、兜をぬぎ申した」

「その言葉は、ききあきた。……あの子供の父親のことだが、わたしが斬った者の一人に相違ないのか？」

「貴殿の過去の行状については、貴殿ご自身が忘却されていることまで、それがしは、調べあげて居り申す。あの子供の父親は、まさしく、貴殿が、果し合いの挙句、あの世へ送られた」

「なんという人物であったろう？」

「もう三年も以前のことに相成る。貴殿は、この東海道の道中の途次、熱田神宮の初卯祭に於ける奉納試合に出場されたことがござろう」

「うむ――」

狂四郎の脳裡に、その日の記憶がよみがえった。

「対手の名を、いまだ、おぼえて居られようか？」

「たしか……、直心影流・北条弥九郎、といった――」

「左様、その通りでござる。北条弥九郎殿は、直心影流中興の達人藤川弥司郎右衛門殿の高弟にて、その極意韜の形の印可を受けた唯一人の剣客として、尾張一円に名をひびかせた御仁でござった」

直心影流には、左の順序の伝書があった。曰く、霊剣伝、窮理の巻、目録、免許、命剣伝。

北条弥九郎は、この伝書をすべて授与され、師より、その名を一字もらった一流兵法者であった。

その日の奉納試合に、この抜群の剣客が、加わったので、下馬評は、優勝者が誰になるか、意見を分ける余地はなかった。

ところが、意外にも、眠狂四郎という奇妙な仮名を持った浪人者が、北条弥九郎の前に立ちふさがり、ただの一太刀で、その脳天を砕いたのであった。

「北条弥九郎殿の素姓について、ご説明申す。……浜松城下には、古城と新城があることは、すでにご承知でござろう。新城は、徳川家康公の修築されたもの、古城の引間の城の方は、永禄の頃、飯尾豊前守致実殿が在られた。当時、駿遠三の支配者今川氏真は、飯尾豊前守が徳川家に内通したと誤解して、これをだまし討ちにいたした。豊前守の夫人は、婦人乍らも、良人をだまし討ちにされては、憤りをおさえがたく、かたく籠城を決意された。徳川家より、その城を明け渡

すならば、豊前守の嫡子はもとより一族郎党のこらず召抱え、扶助いたそう、との沙汰があったが、夫人は、これを固辞して受けなかったのでござる。徳川家としては、今川家への義理だてから、さらば、やむなし、と軍勢をくり出して、引間城を攻め落さんといたした。夫人は、城兵を指揮して、防戦おこたらず、寄手がはげしく攻めたてて、外廓まで押し入って参るや、いまはこれまでと、緋縅のよろいに、同じ毛の兜をいただき、薙刀をふるって、斬り込んだ次第でござる。侍女七人もまた、夫人と同じ装いに出立って、敵兵とわたりあい、一人のこらず、討死つかまつった。まさに、飯尾豊前守の夫人は、武勇は巴板額に劣らず、節操は細川夫人にも優った女丈夫でござった」

「その飯尾家が、北条弥九郎の先祖であった、というのか？」

「いかにも、左様――、世が世であれば、浜松城主でござる。……貴殿が、見とどけられた通り、北条弥九郎殿は、貴殿にやぶれ去ったとはいえ、稀代の兵法者でござったが、さらに、その妻たる婦人が、嫡男に父の敵を討たせるべく、おのが操、おのが生命をすてたけなげな働きぶりは、まことにあっぱれと申すべきでござった。白須賀宿に、永く、語り草として口伝えされることでござろう」

「水心！」

狂四郎の語気が、鋭いものになった。

「お主は、本気で、そう思って居るのか？」

「貴殿に対して、今更、胸中をいつわっても、はじまり申さぬ」

「そうか、本気か。本気ならば、この眠狂四郎も、致し様がある」

狂四郎の眼眸から、送り出される光が、内にひそめていた業念を、急にあらわにする鋭さをお

びた。
　その眼光をあびて、水心も、一瞬、顔面を蒼ざめさせた。
「致し様とは――？」
「あの試合は、私の恨みを後日にのこさぬ勝負であった。北条弥九郎は、冥土に行っても、わたしをうらみはしなかった筈だ。もとより、残った家族が復讐することなど、いささかものぞんでは居るまい。妻と子もまた、その無念をはらそうなどとは、すこしも、考えてはいなかった筈だ。すくなくとも、お主という男が、現れて、母子を示唆するまでは――」
「……………」
「お主は、この眠狂四郎を討つためには、手段をえらばず、あの母子を示唆し、復讐心をあおりたて、あのような罠をしかける智慧をさずけ、実行させた。母子の平和なくらしをかきみだし、子をして母親を殺させておいて、お主はなお、恬然として慚じるところなく、彼の女の行為を、先祖の豊前守夫人のいさおに比すのか！」
「……………」
「本気でそう思うと云ったぞ、水心！」
「……う！」
　水心は、ひくく呻いて、二歩ばかり、あと退った。
　狂四郎は、ゆっくりと、橋板を踏んで出た。
「水心――。どうやら、ここらあたりが、おれと貴様の間柄に、決着をつける時のようだ。そう思わぬか」
「……………」

水心は、さらに、二三歩、後退した。

すると、狂四郎は、ツツ……と数尺を、すべり出た。

反射的に、水心は、抜刀して、中段に構えた。

狂四郎は、その構えを視て、

――できるのだ、此奴は！

と、胸裡で、呟いた。

尋常一様の業前の持主ではないのであった。

この眠狂四郎と、充分に、互角に、闘い得るのだ。

にも拘らず、この男は、いまだ、ただ一度として、正々堂々と、勝負を挑んでは来なかった。こちらを油断させておいて、抜きつけに討とうと計り、それに失敗すると、意表を衝く巧妙な奸策を弄して、生捕ろうと企てたり、生命を奪おう、と執拗に狙いつづけて来た。

しかし、もはや、こちらとしては、この刺客を、いつまでものさばらしておく寛容を持たなかった。

斬るか、斬られるか――その時を、迎えたのである。

狂四郎は、ゆるゆると、無想正宗を抜くと、地摺り下段に、構えた。

「う――むっ！」

都田水心は、闘志を、異常な唸りにして、ぱっと、中段から上段の構えに移った。

別人と化したように、水心の面貌は、凄じい剣気をはらんで、血に飢えた獰猛な形相となっていた。

正体をあらわしたな。

そう見てとれたことである。

しかし、その凄じい剣気をあび乍らも、狂四郎は、みじんも、殺気をもって反撥はせぬ。意志と気色を完全にきりはなしたものにして、朝靄の中に、うっそりと、案山子同様に佇立しているばかりである。

ただ、その地摺りの白刃に、稀有の迅業がかくされていることを、知りすぎるほど知っている水心としては、痩身くまなく力を抜き去っているその姿の、どこへ撃ち込めばいいのか、見当もつかないのであった。

どれだけの時刻が、移ったろう。

水心は、無想正宗が、目に見えぬほどのゆるやかな動きを始めたのを、視た。のみならず、円月殺法の緒につくと同時に、狂四郎が、その剣をまわすと同じゆるやかさで、橋板の上を進んで来ようとするのを知った水心は、その上段の構えに、一毛のそよぎにも似た乱れを、チラとあらわした。

次の刹那——。

水心は、おのが心気の動揺をふりはらうためには、必殺の業を放つ以外にすべなし、とさとったに相違なく、ぱっと、橋の欄干に跳び上りざま、猛然と、宙を躍って、狂四郎を襲った。

空中から、どう斬り下したか。また、地上から、どう払ったか。

たとえ目撃者がいたとしても、網膜に映しのこすことは、叶わなかったであろう。

ただの一撃の闘いが終った時、橋上には、狂四郎の孤影しか残ってはいなかった。

その闘いの一瞬の迅さにくらべれば、橋の下の流れで、落ち込む者が立てた水音は、ずいぶん、長い時間の後の、間のびしたものに思われた。

狂四郎は、みるみる水面を染めてひろがる血汐を、一瞥しておいて、歩き出した。
「……水心か。やはり、人間らしく、赤い色をしている」
その独語を、そこに残した。

吉田通れば

真夏の陽光にさらされた白い街道は、目路の果てまで、まっすぐにつづいていて、それを辿って行く旅人をして、おのが歩幅の小ささにうんざりさせる。
並木の幹で鳴きしきるあぶら蟬が、午さがりの暑気を、さらに増す。
相変らずのふところ手で、歩いて行く眠狂四郎の着流し姿は、しかし、寒暑いずれにも一向に辛さを知らぬものと見受けられる。
生身ゆえ、この暑気がこたえぬわけはない。並木が落した影をえらんで踏んで行くのが、その証拠である。
ただ——。
この男は、こうして孤身を運ぶ時、禽獣にも似て、おのが脳裡から、一切の意識をはらいすてることができる。
いま——。
数丁を歩き乍ら、意識が動いたのは、彼方の入道雲のわきあがっている空に、とどろいている音をきいて、

──昼煙火か。

と、思ったことだけである。

吉田城下が、一里のさきにあった。

吉田の煙火は、日本一と称されている。江戸両国の川開きに打揚げられる、仕掛煙火も、実は、煙火師が、吉田から、その工夫を盗んだ、と云われている。

吉田の煙火は、煙火師によって揚げられるのではなかった。吉田城下八ヵ町の町民全員がこぞって、工夫をこらし、その成果を競う祭礼行事なのであった。

正徳二年、松平伊豆守信護が、この吉田城主になった時、幕府から、辺海防備の烽煙事務の主宰を命じられたのが、煙火を盛んにする起りとなった。伊豆守は、町民たちに、烽煙に関心を持たせるために、吉田神社の祇園会に、煙火を揚げる行事を設けた。

いまや、吉田の町民は、一種の煙火狂となっている。

城下の若衆は、煙火玉を入れた唐櫃に、〆縄を張って、これを現場まで担いで行く役にえらばれるのを、生涯の誉れとしている、という。

どうやら、今日は、七月十三日の祭礼定日を数日後にひかえて、小手しらべの打揚げの模様であった。

もとより──。

眠狂四郎が、そんなものに、なんの興味も抱く筈もない。

ただ、全くの無心状態で、街道を歩いて行くうちに、遠雷のようなその音をきいて、

──昼煙火か。

と、思っただけのことである。

城下に入るには、小さな川を越える。

いむれ橋、というなにやらいわれのありげな古びた橋に来て、狂四郎が、その袂の立場茶屋に入った時、土地者の故老と若衆が、声高に云い争っていた。

「……くりからもんもんの煙火なんて、千人が智慧をしぼったって、造れるものじゃないよ、お前」

故老が、ばかばかしげに、首を振った。

「だってよう、対手が、お姫様のご注文なら、造らなけりゃしようがねえじゃねえか。お姫様は、木葉つきの黄菊とか白菊とかは、もうあきあきした、とのたまい奉っているんだからよう――」

「早打ち、追打ちで、黄菊白菊が、黒い煙を幹にして、ぱあっ、と何本も、空にならぶのが、煙火というものの、醍醐味さ。……刺青は人間の背中にあって、死ぬまで消えないもの、煙火は空に開いて、あっという間に消えてしまうもの。どだい、まるっきり、これっぽっちも、似たところはないのだよ、お前。それよりも、なによりも、ご城主のご息女が、刺青をお好きだ、というのが、大まちがいだ。お前なんぞ、こっそり、背中に彫っているかも知れないがね、ありゃ、大むかしは、墨刑といって、刑罰さ。いまだって、入墨者は、一生無宿で、まっとうな道は、歩けないがね。そもそも、文身てえのは、魏志倭人伝という本によると、原始時代に、水にもぐって、魚貝を獲る時、鮫や鱶を近づけないための呪術用に考え出したしろものでね。それが、のちに、刑罰に利用されて、日本書紀にも、履中天皇紀に、阿曇連浜子が反逆した時……」

「わかったわかった。この暑いのに、小むつかしい故事来歴は、頭痛がすらあ。ここで、いくら、おやじさんが、ごたくをならべたって、対手はお姫様だ。敵いっこはねえんだ。お姫様は、どこかで、滅法綺麗な浮世絵か武者絵のいれずみをごらんなすってよう、こいつを、煙火にしたらさ

ぞかし、町民どもは、びっくり仰天、ひっくりけえるだろう、とお思いなすったにちげえねえのよ」

「ばかばかしい」

年寄の方の首の振りかたは、いかにも、ばかばかしそうであった。

狂四郎は、そのやりとりをきき流して、冷えた麦茶を飲みあけると、茶屋を出た。

――吉田城主の女は、相当なおきゃんらしい。

大名息女の奇妙な趣味が、やがて、こちらに、ひと肌脱がせることになろうなどとは、もとより、その時、予感すべくもなかった。

いむれ橋を渡りかけた狂四郎は、不意に、欄干の蔭から、ぴょんととび出して来た小さな生きものに、袂のはしを摑まれた。

視線を落した狂四郎は、

「小松か――」

と、微笑した。

赤い印絆纏をまとった小猿であった。

こちらが、旅に出ると、必ず、どこかでめぐり逢い、なんとなく連れになって、しばらく、道中をつづけ、また、なんとなく、左右へ別れる薬売りの松次郎という旧知がいたが、去年、水戸から矢吹へ至る棚倉街道で、ばったりぶっつかった折、松次郎の肩に、この小猿が、ちょこんとのっていたのである。

松次郎の話では、一年前、米沢へ行く途中、白部高湯で、渓流ぎわに落ちてこごえている生れて間もないこの小猿をひろって、湯宿の炬燵であたためてやっているうちに、可愛くなって、そのまま、育てることにしたのであった。

一人旅のつれづれに、いろいろ仕込んでいるうちに、三四歳の幼児ぐらいの智慧がまわるようになり、そうなると、わが子のように、手ばなせなくなった、という。

連れ立って歩くうちに、小猿は、奇妙に、狂四郎にもなついて、せっせと愛敬をふりまいたものであった。

あれから、一年が過ぎているが、小猿は、狂四郎を、忘れていなかったのである。

「おやじは、達者か、小松？」

狂四郎が、訊ねると、小猿は、キッキッキッと声をたてて、袂をひっぱった。

そのさまが、ひどく真剣なのに、狂四郎は、気づいた。

「おやじが、どうかしたか？」

その問いに応えて、小猿は、ぴょんと、トンボ返りを打ってから、橋板の上に寝そべってみせ、それから、また、袂を摑んで、しきりにひっぱった。

狂四郎は、そのしぐさを、松次郎が病臥していることを告げているのだ、と解釈した。

「おやじのところへ、つれて行け」

狂四郎が云うと、小猿は、心得て、欄干の上を、ツツツ……と走り、葱宝珠ぎわで、停って、待った。

狂四郎が、そこへ至ると、こんどは、橋袂から、右折する横道を、走り出した。

停っては、狂四郎の近づくのを待ち、また走り出すのをくりかえして、この小さな案内役は、

見渡す限り青田のひろがる野を、横切って行った。

途中、綺麗な水が流れる小川を過ぎる際、土橋の桁(けた)から、柱をするするとつたい降りて、腰に携(さ)げた竹筒に、その水を汲(く)んで、狂四郎の前に戻ると、両手で捧(ささ)げた。

主人にしばしばそうしているであろうその忠実な僕(しもべ)ぶりは、狂四郎の微笑をさそったことであった。

小猿が、およそ半里の距離を先導して、狂四郎を到着させたのは、かなり深い森の中の家であった。

ただの農家でないことは、森の入口の左右に、不気味なかたちの木像が、二基据えられているので、明らかであった。

首は犬であったが、軀(からだ)は僧形をしていた。狂四郎の知識にはない木像であった。

屋敷の構えは、かなり大きなもので、一瞥、寺院の食堂(じきどう)に似ていた。

前面の十字形をなす十字廊の階下に達すると、小猿は、しきりに、狂四郎に向って、お辞儀をした。

「よしよし、この家の中に、おやじはいるのだな」

狂四郎は、案内を乞うてみて、内部がしんと、しずまって、人の気配のないのを知ると、十字廊をまわって行った。

その時、狂四郎は、すでに、松次郎の身に、何か異変が起っているのだ、と合点していたのである。

狂四郎は、裏口から、屋内へ、踏み込んだ。

なんとも堪えがたい異臭が、暑気とともに、むっと、鼻を衝いて来た。

さまざまな家に忍び入った経験を持つ狂四郎も、この一風変った構えの内部は、勝手が判らず、松次郎の居どころに見当をつけかねた。

どの部屋も、すべて、板敷きであった。そして、調度も、見馴れない品ばかりであった。莫蓙（ござ）、衝立（ついたて）、床几（しょうぎ）、燭台（しょくだい）、櫃（ひつ）、厨子（ずし）――すべてが、古ぼけていたが、それらに浮かされた模様は、すべて支那風であった。

かなりの数の部屋は、のこらず壁で仕切られ、板戸に厳重に錠前がおろされている部屋もいくつかあった。

しかし、狂四郎は、この男独特の鋭い直感力を働かせて、やがて、旧知の薬売りがとじこめられている部屋を、さがしあてた。

松次郎は、平安期の倚子（いし）とも呼べそうな赤漆の剝（は）げかかった椅子に、両手をうしろのもたれに縛りつけられていた。

狂四郎は、驚きと悦（よろこ）びを一杯にあふらせる松次郎の眼眸に、黙って頷（うなず）いてみせておいて、自由の身にしてやった。

「旦那！」

松次郎は、感せまって、肩で喘（あえ）いだ。

「小松は、街道で、わたしを待っていたようであったが、おぬしは、わたしがこの東海道を旅していることを知っていて、小松に救いを求めさせたのか？」

「い、いいえ、そうではございません。旦那は、江戸においでだ、とばかり思って居りました。……そうでございましたか、小松が、旦那を――」

松次郎の両眼は、感動で潤んだ。

松次郎は、この家に、一昨日から、捕虜の身になっていた。

「小松の奴、旦那がお通りになるのを、予感して、まる二日も、街道で、お待ちしていたのでございますね」

「そういうことだな。こうなると、人間よりも、けものの方が、はるかに、霊感が発達していることになる。……どうして、こういう目に遭って居る？」

「それが……」

松次郎は、かぶりを振って、

「さっぱり、わけがわかりませぬ。恩を仇で返されたかたちなのでございます」

と、云った。

一昨日、吉田城下に入ろうとしたところを、一人の下男ていの男に呼びとめられた。

自分は、夕暮村の郷士の召使いだが、お嬢さんが、あやまって、竹の切株で足をふみ抜き、ささらが奥ふかく刺さり込んでしまった。旅の薬売りのお前様なら、刺を抜くすべをご存じであろうから、ご足労ねがえまいか。

そうたのまれて、松次郎は、お安いご用と引受けて、この家にやって来たのであった。

下男の云ったことに、まちがいはなかった。

十八九の器量の秀れた娘が、無慚に、右足の土ふまずに、ささらを刺して、牀に伏していた。

松次郎は、これを抜きとるのは、かなりの荒療治になるので、薬函から、津軽（阿片）のほか

まったのである。

そして、のこらず抜きとっておいて、さて、ひきあげようとしたところ、矢庭に捕えられてし

二三種類の麻酔剤をとり出して、娘にかがせた。

「全く、こんな腹の立つ話はございません。苦心して刺を抜いてやったその礼が、これでござい

ますからね」

尤も、扱いは鄭重で、はこばれる食膳には相当な料理が盛られてあるし、こうして身動きでき

ぬように縛られているのと、厠の中まで監視の目を注がれる苦痛を除けば、べつに、恐ろしい仕

事をするように脅迫されている次第ではない、という。

「この家のあるじが、何者か、見当がついて居るのか？」

狂四郎は、訊ねた。

「てまえの想像では、これは、秦族の頭領ではないか、と存じます。府中あたりでは、はたもの

と称んで居りますが、この豊川辺に住む秦族は、府中のはたものとちがって、幾人かの頭領が大

きな力を持っていて、土地者たちをすこしもおそれぬくらしをして居る、ときいて居ります」

「ふむ――」

狂四郎は、頷いた。

この道中の途次、狂四郎は、府中の「二丁目遊廓」で、はたものの娘を、その泥沼から救い出

してやっている。そして、賤機山の貧しいはたもの部落へ、千両箱を三つ、贈ってやっている。

同じ移植民の秦民族を先祖に持つ一団でも、府中辺に住んでいる者たちと、この豊川辺に住ん

でいる者たちとでは、その団結力に於て、また、一般庶民に対する対抗心に於て、比較にならぬ

差があったのである。

駿河では、はたものとさげすまれているが、ここ三河では、秦族と称ばれている――その差であった。

それは、豊川稲荷（いなり）が、秦民族によって祭られたということが、ものを云っている模様であった。

そのむかし――。

秦から、一族を率いて渡来した秦民族の族長、泰公伊侶具（たいこういろく）は、食保神なる秦民族の神を、京都稲荷山に祭った。これが、稲荷社のはじまりである。その後、三河へ移って来た秦民族は、額田（ぬかた）郡に、糟目（かすめ）犬頭社を建てて、養蚕の神とあがめた。糟目犬頭社の古伝では、犬の鼻から、蚕糸が出たことになっている。

豊川稲荷もまた、はじめ食保神を祭ったことは疑う余地はない。

僧空海が、吒枳尼天（たきにてん）を、支那より将来して、稲荷社の本家である京都稲荷山に祭ったため、食保神と吒枳尼天とが混同されるようになり、吒枳尼天は霊狐（れいこ）が随従して、さまざまの不思議な霊験を示すために、稲荷といえば、おきつね様ということになったのである。

稲荷の本体は、秦族の食保神であるから、狐ではないのである。三河の秦族たちは、むしろ、犬の方にしている。

いずれにせよ――。

稲荷社は自分たちの先祖が祭ったものであるという誇りが、三河の秦族たちの態度を高いものにして居り、それを土着民たちもみとめたのである。

「秦族か。成程――」

森の入口に、犬頭の木像が二基、立ててあったのは、自らを秦族と誇る目じるしなのであろう。

「ほかに、なにか、変ったことに、気がついて居るか？」

狂四郎は、松次郎に問うた。
「このいやな臭気でございます。これは、鹿や熊や牛の生皮を剝いで、かげ乾しにしていることでございます」
「皮剝ぎを稼業にして居るのか？」
「どうも、そうらしゅうございます。具足に用いる皮は、どうやら、ここの秦族が一手に引き受けている、とみえます」
「もしかすると、皮剝ぎに、おぬしを、なにかの役に使おうというこんたんかも知れぬ」
松次郎が、笑った。
「けものの生皮を剝ぐのに、薬など必要ございますまい」
その時――。
玄関の方で、人声が起った。
狂四郎は、ふと思いついて、
「お主に、何をさせるか、ひとつ、待ってみるか」
と、云った。
松次郎を、元のように、椅子に縛りつけておいて、狂四郎は、隣りの部屋に身を移すと、待ちかまえた。
跫音が、暗い廊下にひびいて来た。
狂四郎は、一挺の駕籠が、そのまま、担ぎ込まれて来るのを、板戸の蔭から、視た。
その駕籠のうしろから、一歩毎に大きく上半身を傾けて来る人影を、一瞥して、狂四郎の眉宇

がひそめられた。

――彫宇之ではないか。

江戸で屈指の刺青師の姿を、ゆくりなくも、この三河の秦族の頭領の屋敷に見出して、狂四郎の脳裡には、たちまち、ひとつの想像が泛んだ。

跛で傴僂の、前世からの業苦を、そのこぶに背負うて来たような刺青師宇之助を、江戸で知らぬ者はない、といっても過言ではない。

「彫宇之が彫った竜は、夜中に抜け出して、庭の泉水の水を飲む」

とか、

「何某という仕事師の背中に彫られた九郎判官に、出入りの大店の娘が、無我夢中に惚れて、とうとう、気が狂った」

とか、ばかげた噂が、髪結床の退屈しのぎに交される程の名人であったが、それというのも、醜い不具者らしい極端な偏窟ぶりが、恰好の話題になったからである。

深川八幡門前の、さる大きな廻船問屋が提供してくれた酒倉の中に住み、白昼も、陽光がさし込むのをきらって、一年中、蠟燭のあかりでくらしている。二十年間、飯は一粒も口にせず、目がさめてから寝るまで、酒気が抜けたことがない。たまに、外へ出るが、それは、おのれが彫りたい肌を持った男女を発見するためである。食指の動く対手を発見すれば、彫らせてもらえる人かどうか、思案するいともなく、執拗に、たのみ込む。そのために、旗本大身の嫡男から、あやうく、無礼討ちをくらいかかったこともある。また、ある時は、大きな商家の一人娘をさらって来ようとして、小伝馬町の牢に、半年近くも、抛り込まれたこともある。等々、世間に噂を提供するのに、事欠かぬ刺青師なのであった。

その変り者の名人が、どういう風の吹きまわしか、江戸を出て、秦族の頭領の屋敷にやって来たことは、興味を呼ぶことであった。

狂四郎は、がくん、がくん、と上半身を傾け乍ら、廊下を通り過ぎて行く彫宇之の姿を見送りつつ、ふと、先刻、いいむれ橋袂の立場茶屋で、老爺と若衆が交していた会話を、思い出した。

駕籠は、奥まった一室へ、はこび込まれた。

そこだけは、造りも立派で、畳敷きであった。

彫宇之は、駕籠の脇に坐ると、顔をしかめて、

「くさい！　たまらねえ！」

と、吐き出した。

襖が開けられた。入って来たのは、恰幅のいい、鼻梁の秀でた、五十がらみの人物であった。総髪で、白衣に白袴をつけ、鉄扇を持っていた。

座に就くと、破顔して、

「四年待たせたのう、宇之師」

と、云った。

彫宇之は、にこりともせず、

「お待たせしただけの仕事は、いたしやした」

と、こたえた。

「拝見しようか」

「へい」

彫宇之が、駕籠から、かかえるようにして出したのは、洗い髪の若い女であった。

さして美貌というのではないが、彫宇之がえらんだだけあって、無類に美しい白い餅肌の持主であった。
肌に彫宇之の簓（ささら）を入れられたためにそうなったのか、それとも生来の白痴なのか、その顔には表情がなく、眼眸はうつろであった。
彫宇之は、女を立たせると、帯を解き、明石（あかし）を脱がせ、緋縮緬（ひちりめん）の長襦袢（じゅばん）姿にしておいて、その伊達（だて）巻きも解いてやると、
「さ——寝な」
と、こわれものでも扱うように、そうっと、畳の上に仰臥させた。
それから、
「ごらんなすって——」
と、長襦袢の前を、さっと、左右へ捲（はぐ）った。

御油（ごゆ）の姫君

「ふむ！」
秦（しん）族の頭領は、仰臥させられた若い女の、胸から腹、そして陰部までがあらわにされるや、思わず、肚裡（とり）から、感動の呻きを発した。
絖（ぬめ）に似た、ぽってりと厚く白い肌に彫りあげられた刺青は、ただの図柄ではなかったのである。
戦場から離脱して来た惨たる姿の敗軍の将が、そこに、描かれていた。裾濃（すそご）の匂縅（においおどし）にも、篠籠（しのご）

手にも、敵の矢が射立てられ、刃こぼれの鈍れた陣太刀を、ダラリと下げて、馬上に、がっくりと前のめりになり、鹿角の兜も傾いて、顔も見えぬ喪神のていである。連銭葦毛の馬も、戦場疾駆に困憊し果てた様子で、いまようやく辿りついた泉の畔で、水を飲もうと、長い首をさしのべている。

女の羞恥の秘処の茂みを、水際の叢とみたてて、馬は、それをかきわけて、飲もうとしている構図なのであった。

武者が陣太刀を握った手の甲をしたたる血汐や、疲れ馬の琵琶股の槍傷など、細部にわたるゆきとどいた描きかたが、その悽惨な姿に、迫真力を持たせている。

「見事だな！」

秦族の頭領は、ようやく凝視の眼眸を擡げて、江戸随一の刺青師に、三嘆の言葉を送った。

「まさしく、四年待った甲斐があった。礼を云うぞ」

頭を下げられた彫宇之は、しかし、自分の腕前に対して賞讃されるのは、当然のことだとでも云いたげな傲慢な態度で、

「お約束の金子を、頂戴して、帰らせてもらいます」

と、云った。

すぐに、切餅（二十五両包み）が山と盛られた三方が、はこばれて来た。彫代としては、破天荒の値段である。

彫宇之は、それを、薄汚れた大風呂敷にくるんで、背負うと、頭領に向って、云った。

「うめえものを、たらふく、食わせてやっておくんなさい。なんだってそうだが、あとの手入れが大切でさ。いくら、あっしが、精魂こめて彫りあげておいても、肌に艶がなくなったらおしま

いでござんすからね。それじゃ、ごめんなすって――」
仰臥した女には、一瞥もくれずに立ち上った。
「宇之師――」
頭領が、呼びとめた。
「この女は、生れつきの白痴か？」
「へい。母親の乳を吸っている頃、脳をわずらったらしゅうござんす」
彫宇之が、出て行くと、頭領は、あらためて、その悽愴の武者を、凝視して、
「ふむ！　神技だ！」
と、嘆息を惜しまなかった。
そこへ、目つきの鋭い男が、入って来て、
「お館――、あの刺青師を、あのまま、行かせてはなりますまい」
と、申し出た。
「うむ。殺るがいい。……目立たぬようにな」
頭領は、視線を、なおそれへ落したなりで、こたえた。
「心得て居ります」
出て行こうとする男へ、頭領は、薬売りを、椅子から解いて、ここへ連れて来るように、と命じた。
ひとつひとつを丹念に観入っていた。
松次郎が、別の男にみちびかれて、入って来た時、頭領は、女のそばに寄って、天眼鏡で細部
松次郎は、その光景を一瞥して、息をのんだ。

天眼鏡から顔を擡げた頭領は、松次郎に、
「どうだな、この見事なほりものは――」
と、笑った。
「拝見つかまつります」
松次郎は、近づいて、首をのばし、しばらく、まばたきもせずに、凝視していたが、
「これア、江戸の深川八幡前に住んでいる彫宇之のしごとじゃございますまいか」
「その通りだ。よう判った。日本中のほりものの中で、これほどの作は、またとあるまい」
「まことに――。お館様が彫宇之に、ご注文なさいましたので？」
「四年間、待たされた。――さて、お前さんを、ここに、不自由なからだにして、ひきとめたのは、この女を、二日ばかり、ねむらせてもらいたいためだ」
「へえ……？」
「お前さんは、家の娘の足から、刺を抜く時、薬でねむらせてくれた。しかし、娘は、ねむり乍ら、痛さに呻いて居った。……どんな痛い目に遭わされても、なにもわからずに、ねむりつづける――そんな薬の調合は、できぬものか。相談は、このことだ。どうであろうな？」
「失礼でございますが、この女子衆を、どうなさろうと、仰言いますので？」
松次郎は、訊ねた。
頭領は、ちょっと沈黙を置いてから、ひくい声音で、
「このほりものを、剝ぎ取る」
と、こたえた。
「剝ぐ?! 生身から、剝ぎ取ると仰言いますのか？」

松次郎は、唖然として、頭領を瞶めた。

「死身から剝いだのでは、せっかくの天下一のほりものの艶が褪せる。また、痛みにのたうたせても、皮膚の色が変ろう。ねむって居る状態で、そっと剝がなければならぬ。……どうだ、そのような深いねむりに陥らせる薬が調合できるか？　できるであろう？」

松次郎を見据える頭領の眼光は、かぶりを振ることを許さぬ凄じいものだった。

彫宇之は、百両の重さに猫背になって、野道を、辿っていた。

西陽の暑さも、この偏窟な名人には、さまでこたえぬらしく、額に汗もにじませてはいない。

道が、雑木林に入った。

彫宇之は、不意に、自分の行手をさえぎる者の出現で、顔を擡げた。

殺気をみなぎらせた目つきの鋭い男に、睨みつけられて、彫宇之は、眉宇をひそめた。

「なんだね？」

「気の毒だが、生かして、江戸へは、かえせぬことになった」

「冗談じゃねえ！……おめえは、あの秦館の者だな。まさか、お館が、あっしのしごとが、気に入らなくなったわけでもあるめえ。百両を惜しがるケチな料簡を持っているとも思われねえが……、どんな理由で、あっしを殺そうというんだ？　きこうじゃねえか」

「もう、貴様には、用がなくなったからだ」

「あたりめえじゃねえか。しごとを仕上げて、礼をもらえば、縁切れだ。そのたびに、殺されていては、生命がいくつあっても、足りるものじゃねえ。ばかばかしい。そこを、退いてくれ。邪

魔だ！」
彫宇之は、やはり並の人間とは、聊かちがった神経を持っているとみえて、すこしも怯えずに、進もうとした。
とたん――男は、抜刀した。
「ふざけるねえ！」
彫宇之は、憤然となって、呶鳴った。しかし、道中差も、腰が重いのをきらって、帯びてはいなかったし、簓しか持ったことのない身では、かなり人を斬ったとおぼしい白刃をふせぎようはないかと、みえた。
彫宇之は、あとへあとへと退った。
対手は、じりじりと肉薄して来る。
身をひるがえして、遁走するには、彫宇之は、あまりにひどい跛であった。
対手は、人を斬る瞬間の嗜虐の快感に酔う悪性者らしく、白刃をふりかぶるや、にやりと悪鬼の相をむき出した。
「ち、畜生っ！」
彫宇之は、憤怒と無念で、全身をわななかせた。
「くたばれっ！」
怒号とともに、白刃が、彫宇之の脳天へ、振り降されようとした。
その刹那であった。
「あっ！」
悲鳴の中で、白刃が、その手からはなれて、彫宇之の頭上を、飛び越えて行った。

男の右手の甲には、小柄が突き刺さっていたのである。
数間はなれた地点に、たそがれの靄から湧き出たように、黒の着流し姿が、うっそりと佇立していた。
「く、くそっ！」
暗殺者は、あわてて、奔って、地べたにころがった白刃を、左手に、ひろい取ろうとした。
「無駄なまねは止せ！」
足早に寄って来た眠狂四郎は、叱咤した。肺腑にひびくその鋭い声音に、男は、びくっと、肩を顫わせたが、それでも、屈せず、白刃を摑みざま、喚きあげて、斬りかかった。
狂四郎は、躱しざまに、手刀をその頸根へくれて、昏倒させた。
路傍の草へ、へたりと臀もちをついていた彫宇之は、ふうっとひとつ吐息してから、
「旦那が、助けておくんなすった！」
まだ、信じ難い面持で、仰ぎ見た。
狂四郎と彫宇之は、五年来の昵懇の間柄であった。偏窟の名人は、やはり世間に背をそ向けて非情の孤独を守っている浪人者に対して、親近感を抱くのか、自ら足をはこんで、時折りその仮住いを訪れることがあったのである。
狂四郎は、冷やかに、彫宇之を見下すと、
「おぬし、あの秦館のあるじの注文は、四年待たせたそうだな」
「べつに、長いとは申せますまい」
「もし、わたしが、たのんだとしたらどうだ？」
「え？　旦那が、あっしに、おたのみなさる？」

「こっちは、気が短いのだ。せいぜい、期限は、四日だな」
「どういうんでございますかね？」
狂四郎は、しかし、すぐには、彫宇之の不審を解こうとせず、昏倒した暗殺者のそばへ、歩み寄った。

秦館の主人秦朱門は、部屋に、明りがともされても、それを、夢の中のことのように受けとって、目蓋をひらこうとはしなかった。
寅刻をまわった時刻であったろう。おもてが、そろそろ、しらんで来ている頃合であった。
突如――、枕を蹴られて、秦朱門は、叫びとともに、はね起きた。
はね起きざまに、敷具の下に置いた短銃へ、手をのばしたのは、流石は、不意を衝かれても動じない平常心を喪わぬ証左であったが、枕を蹴った者の方に、そうはさせぬ充分の心得があった。
「何者だ？」
短銃を遠くへはねとばされた朱門は、咄嗟に侵入者が只者ではない、とさとって、観念したおちつきを示した。
「彫宇之を殺そうとしたお主の腹心が、すべて、泥を吐いた、と思ってもらおう」
狂四郎は、冷然として、云った。
「何者なのだ、貴様は――？」
「行きずりの旅の素浪人にすぎぬ」
「何が欲しゅうて、わしを脅すぞ？」

「薬売りの松次郎は、わたしの懇意の男だ。松次郎の手飼いの小猿が、救いをもとめて来たので、案内させた。来てみると、世の中は狭いもので、これも、わたしが親しい彫宇之が、やって来た。あとは、こちらが、説明するまでもない。……こんどは、お主が、この素浪人の頤使にあまんじる番になった」

「よほど、腕におぼえがあるようだが……、わしを虜にするのは、無理な相談だろう」

「頭領の危急を知れば、たちまち、数百人が、馳せ集って来る——と、云いたいところだろう」

「生きて、この館を出られぬことは、明言できるぞ」

「忘れていることが、ひとつ、ありはせぬか？」

「なに？」

「松次郎が刺を抜いてやった娘は、お主が、目に入れても痛くないほど可愛がっている一人娘のようだな」

「…………」

一瞬、朱門の顔面が、蒼ざめた。

「他人の娘なら、生身から皮を剝いでも、一向に平気だが、おのれの娘なら、刺が刺さっても、いたましゅうて、ふびんでならぬ。親の立場に置かれると、お主のような冷酷な人間でも、ひどく弱いものに相成る」

「…………」

「松次郎は、いれずみされた白痴女をねむらせる代りに、お主の娘を、ねむらせた。すてておけば、三日ねむりつづけて、そのまま、あの世へ行く」

「貴様っ！」

「あわてても、無駄と知れば、いさぎよく、妥協するだけの余裕を、お主ほどの悪党が持たぬ筈はあるまい」

「わしに、どうせよ、と申すのだ？」

「お主が、彫宇之にたのんで、若い女の肌に、稀代の刺青を仕上げさせ、その皮を剝ぐのは、この吉田城主長沢伊豆守の息女の命令らしいが、そのきちがい姫に、とんだ趣味に淫した報いが、どういうものか、思い知らせてくれるのも、面白かろうと、思いついた」

「……………」

「きちがい姫は、城内ではなく、郊外の別邸に住っている由。お主の手引きで、どこへでも、出かけることが、できるのだろう。その拉致役を、引き受けてもらおう」

狂四郎は、冷然として、云ってのけた。

吉田城下から西へ二里半――御油に至る。

この宿は、飯盛女で有名で、二階の千本格子の蔭から、旅人を招く声は、朝からかまびすしい。

留女十六丁を損をさせ

川柳も、御油を写して妙である。次の宿赤坂までが、十六丁あったのである。

御油宿の並木の松原で、旅人がしばしば狐にだまされる、という噂が高かったが、これは、飯盛女の深情に溺れる、という意味もあったろう。

また、もうひとつの理由は、この宿に、城址があり、なぜか、ふるくから、狐屋敷と称ばれていたのである。

ぼうぼうたる雑草の生い茂った、つわものどもの夢の跡には、慶長頃に建てられたとおぼしい具足蔵が、屋根は破れ、壁は落ちたまま、なお三棟ばかり、残っていた。もとより、人は、おそれて、近づかなかった。

その具足蔵のひとつの高窓から、三日前から、ぼうっと、灯火が洩れ出たが、たとえ、これをみとめた者がいても、狐火と思い込んで、近づく度胸はない筈であった。

まして、それが、御油の旅籠に腰を据えた一人の浪人者の仕業だなどと、気づく者などあるべくもなかったのである。

三日目の宵、眠狂四郎は、旅籠をふらりと出ると、狐屋敷に向った。

途中で、尾行者があることに気づいたが、そ知らぬふりで、草径を踏んで行った。

具足蔵の鉄扉は、外から厳重に錠前がおろされていた。これをはずして、内部にふみ込んだ狂四郎は、梯子段下に立って、灯火のある上階を仰いだ。

「宇之――」

声をかけると、呻きに似たひくい返辞があった。

「上ってもいいか？」

「へい――どうぞ」

なかば腐った梯子段を、みしみしと軋ませて、昇った狂四郎は、こぶの背中をさらに丸くして蹲みかかった刺青師の前に、ながながと仰臥させせられている生贄へ、冷やかな眼眸を投げた。

一糸まとわぬ全裸にひき剝かれた若い女人は、さしのばさせられた両手を、柱にくくりつけられ、さらに、両肢を、大きく、裂けんばかりに八の字に拡げさせられて、両の足くびを、綱でひっぱられていた。

意識を喪ったその顔は、面高な、気品もある美しいものであった。脂肪もゆたかかな、肌理こまかな、むっちりとした白い柔肌は、偏窟の名人には、なお物足らぬかも知れぬが、まず申し分のない肢体というに足りた。

吉田城主松平（長沢）伊豆守息女文姫が、この裸女であった。

秦族の頭領秦朱門におびき出され、稀代の名人刺青師が彫りあげた奇抜のいれずみを眺めるべく、やって来た文姫は、途上でねむり薬をかがされ、それきり、この三日間、こんこんとねむりつづけているのであった。

したがって、衣裳を奪われたおのが裸身に、どのような残忍な仕置きが加えられているのか、夢にも知らずにいる。

やがて、目がさめて、おのが下腹を眺めたならば、おそらく、戦慄の悲鳴をあげて、再び、気絶してしまうのではあるまいか。

三昼夜、彫宇之の鑿が、肌を刺しつづけて、いまようやく、文様は完成しようとしていた。

それは、なんとも、おそろしい図柄であった。

およそ数十四のまむしが、くねくねと匍いずりつつ、恥毛で掩われた女の亀裂めがけて、腹から、太股から、迫っていたのである。その一匹は、すでに、柔襞の入口にまで匍い寄って、赤い細長い舌を出して、チロチロと、なめかかっていた。

「できたな」

狂四郎は、薄ら笑った。

……手の甲で額の汗をぬぐった彫宇之は、鑿をすてると、ほっとひと息ついた。

それから、じろりと、白い目をあげて、

「こんな、やっつけ仕事を、この彫宇之に、させるなんて、旦那も、人が悪い」
と、云った。
「どうして、なかなか、見事な出来ばえではないか。どいつも、いまに、ぞろぞろと、孔の中へもぐり込みそうにみえる」
「いいや、この中で、生きていやがるのは、せいぜい三匹だけだ。あとは、みんな、生気なんぞありやしねえ」
「三匹も、おぬしの満足のゆく奴がいれば、結構だ」
「旦那――、いってえ、この姫様を、どうなさろうというんですかい？」
「どうもせぬ。刺青好きの娘が、思いがけず、自分の肌に刺青してもらったのだ。しかも、彫り手は、江戸随一の名人だ。冥加につきると申すものだろう。これからは、わが身を眺めて、満足すればよい」
そう云いすててから、狂四郎は、ゆっくりと梯子段を、降りた。
おもてには、いつの間にか、およそ十人あまり、殺気をみなぎらせた者が、迫り寄っていたが、すでに、狂四郎には、その頭数も、ほぼ察知されていたのである。
鉄扉の蔭に立った狂四郎は、しばらく、そこで、敵の様子を窺っていてから、不意に、渠らの前へ、姿をあらわした。
雄叫びして、斬りつけて来た一人を、抜きつけの胴薙ぎで、仆した。
とみた刹那、狂四郎の孤影は、月明りの中に、凄じい勢いで、跳躍した。
絶鳴が絶鳴に重なりあい、よろめく者がぶっつかりあい、またたく裡に、地上に立つ者の影が、減じた。

それは、闘いというよりは、刺客たちは、まるで、斬られるためにやって来て、おのれが仆れる番を待つ、といった光景であった。

狂四郎は、二人をのこして、無想正宗を地に下げた。

「お主らがここへやって来た目的を、おれが変えてやろう。この蔵の中に、吉田城主の息女がいる。それをかついで、松平家別邸へはこぶがいい。それは、お主らの頭領のためにもなることだ」

申し渡しておいて、内部へ声をかけた。

「宇之――、そろそろひきあげ時だ。この礼は、わたしが、江戸へ舞い戻るまで、待っていてもらおう」

早朝――。

狂四郎は、薬売りの松次郎と、連れ立って旅籠を出ると、ゆるやかな上り勾配（こうばい）の街道を、西へ向って、歩き出した。

松次郎の肩には、主人の危急を救った小猿が、ちょこんと乗っていた。

「今日も、暑くなりそうだな」

狂四郎が、呟（つぶや）いた。

しばらく行ってから、松次郎が、訊ねた。

「旦那様。あのお姫様は、どうなるのでございましょう？」

「どうなるかな。当人が、おのが身の行末を、定（き）めることだ。大名の中には、案外物好きな人間がいて、よろこんで、嫁にもらってくれるかも知れぬ。わたし自身、明日のおのれの身がどうなるか判って居らぬのだ。他人の未来のことまで、考えてやる気持は起らぬ」

赤坂暮色

御油から赤坂までは、わずか十六丁。ゆるやかなのぼりの街道は、ところどころ人家が切れているだけで、同じ宿と云ってもよい。

のみならず、左右に同じ構えで竝ぶ店の殆どが、紅殻格子の蔭に、派手な長襦袢姿の白首を置いて、旅人を呼ばせているのであった。

当時――。

御油・赤坂には、七百人の女郎がいて、御蔭詣りの男たちは、次の御蔭詣りの連中に、

「御油の何屋のなにという女は、吉原にも見当らねえぐらいの別嬪だぜ」

とか、

「赤坂の何屋へあがってみな。泊りにきめたら、昼の敵娼と夜の敵娼を変えてくれらあ。こてえられねえぜ」

とか、申し送りをしたものであった。

御蔭詣りは、そのむかし伊勢踊が流行った際、遷宮が行われ、これによって参宮熱がたかまり、さらに、御祓いの降下という神秘的な信仰がむすびついたために起った。

これは、室町時代の某年を濫觴とし、慶長年間にその人数を増し、慶安に入ってからは、「天下の人民ことごとく群参」と記録されるようになった。

参詣者には、馬・駕籠・舟に無料で乗せ、笠・草鞋・鐚銭などの施行があり、つまり、他人の

おかげで参詣できたので、「御蔭詣り」と称された。
時代が下ったこの当時でも、無一文で詣でることも可能であった。諸国在所には必ず、御蔭詣りの施行宿が設けられていたし、分限者大尽は進んで止宿させたのである。大坂の鴻池家では、参詣者に札を出し、参宮が済むと、札と引替に一人に金一朱を施した、という。
しかし、参詣者は、必ずしも、信仰が深かったわけではなく、なかには、男女しめし合せて、恋の道行をする方便にしたし、また、男どもは、宿場女郎を買いあさる愉しみがあったのである。
御油・赤坂の女郎は、東海道五十三次の中でも、特にその名がひびいていて、ここを素通りする男は、よほどの朴念仁ということになっていた。
眠狂四郎と薬売りの松次郎が、連れ立って、通って行ったのは、まだ、朝陽がななめにさしそめた時刻であったが、もう、紅殻格子の蔭には、早発ちの客を送り出した女郎が、坐っていて、媚をこめた声をかけて来た。
松次郎は、この夥しい女郎屋の中に、幾軒かの贔屓を持っていて、
「てまえは、ひとまわりして参りますが、旦那様は、このまま、岡崎まで足をおのばしなさいますか？」
と、訊ねた。
「お主が、すすめる女郎がいれば、買ってもよい」
「そうでございますね」
松次郎は、ちょっと考えていたが、
「二丁ばかり参りますと、紅葉屋という店がございます。そこの咲耶という女は、気立もよく、渋皮がむけて居ります」

と、教えた。

「では、それを買おう。……今日も暑くなりそうだから、陽がかげった頃に、出て、夜道を歩くことにする」

「てまえも、お供いたします」

狂四郎は、松次郎に別れると、その紅葉屋という店の暖簾をくぐった。

遣手婆の案内で、頭が天井につかえるような二階の小部屋に入った狂四郎は、

「咲耶という女をたのむ」

と、云った。

「咲耶は、まだ、お客がいるのでございますが、ほかの女郎衆ではいけませんかね」

「べつに、いそいでは居らぬ。待とう。酒があれば、一刻や二刻は、すごせる」

「申しわけございません。なるべく早く、起して参りますです」

すぐに、酒がはこばれて来た。

銚子を二本ばかり空けたが、まだ、咲耶という女郎は、姿を現さなかった。

遣手婆が、退屈しのぎにと、卑猥なみだら絵の枕草紙を数冊持って来た。

肱枕で、横になった狂四郎は、その一冊をめくってみた。

それは、仇討綺譚と題のついた枕草紙で、曾我兄弟や忠臣蔵の中の、色模様のところだけを、あくどいみだら絵にしていた。例えば、曾我十郎と虎御前の最後の夜の契りとか、大石内蔵助とお軽の睦みあいの光景を、吉良家の間者が覗き込んでいる図とか――。

狂四郎は、めくっているうちに、数箇所に、いたずら書きがしてあるのを、みとめた。

それは、決して、卑猥な文句ではなかった。いや、立派な言葉が、走り書きされていたのであ

る。

　みつみつし、くめのこらが、かきもとに、
　　うゑしはじかみ、くちひびく、
　われはわすれじ、うちてしやまん

かなりの達筆で、そう書いてある。これは、神武帝が、東征の折、兄五瀬命が孔舎衛坂の戦いで仆れたのをいたんで、誓って敵を撃ち尽さんと決意されて詠まれた歌であった。

また、ある頁には、

『子夏問う。父母の仇に居る事、如何。孔子曰く。苫に寝ね、干を枕にし仕えず、天下を与にせざる也、これ市朝に遇えば、兵に反らずして闘う』

と、書いてある。

学のある者のいたずら書きであった。

曾我十郎が、虎御前を抱いている場面には、次のような文句が、書いてあった。

「色にそみ、花に馴れゆくあだしみは、はかなき物を花に飛ぶ、胡蝶の夢の戯れ——凡夫、女体におぼれ、大志を忘る。亡父、横死して七年、敵五曾木多十郎、何処にある？」

——どうやら、仇討のために国を出て来たさむらいが、ここに、流連し乍ら、書いたものらしい。

　やがて、咲耶という女が、姿を見せた。松次郎がすすめただけあって、宿場女郎には惜しい器量と、綺麗な肢体を持っていた。年齢もまだ、二十を出たばかりと思われた。

「おそうなって、かんにんして下さいまし」

両手をつかえて詫びる風情に、どこやら淋しい翳があり、

――松次郎の奴、おれが、こういう翳のある女を好むもの、とあたまからきめているらしい。

と、狂四郎を、苦笑させた。

咲耶が、牀をのべた時、番頭が入って来た。

「お客様、おそれ入りますが、この三河では、ご浪人衆には、お名前と生国をお教え願うように、代官所から命じられて居りますので、ひとつ、お願い申します」

筆と宿帳をさし出されて、狂四郎は、もとより、「眠狂四郎」などという奇異な仮名を記入するわけにいかず、ちょっと考えてから、

「五嘗木多十郎、江戸」

と、書いた。

枕草紙に書かれていた敵の姓名であった。

番頭は、宿帳を受けとって、

「お珍しいお名前でございます。いそぎ――とお読みするのでございますね」

「先祖に、短気な男がいたのであろうな」

狂四郎は、笑った。

同じ時刻――。

薬売りの松次郎は、赤坂宿から一里ばかりはずれた野道を、旅馴れた足どりでひろっていた。

左右は、見わたすかぎりの桑畑で、日盛りの中に、人影もない。

行手にこんもりとわだかまった森を視て、松次郎は、

「あれじゃな」

と、呟いた。

松次郎は、女郎屋をまわって、三年前に置いた古い薬を新しいのにとりかえ乍ら、

「菅沼新之助というご浪人衆が、この赤坂の近辺に、すまいを持たれた、ときいているが、知りなさらんか？」

と、尋ねているうちに、一里ばかり離れた松福寺という寺のはなれに、若い浪人者が、去年から居候している、ときかされ、たぶんその御仁に相違ない、と念のために、訪れてみることにしたのであった。

森は台地になって居り、松次郎は、坂をのぼって山門をくぐった。

境内は、蟬しぐれが降りしきっている。

松次郎は、方丈裏手の押しつぶされたような草庵の前に立って、案内を乞うた。

「誰だ？」

物倦げな声が、問うた。

「松次郎でございますよ、薬売りの——」

松次郎がこたえると、

「珍しいな。入ってくれ」

急に、声がはずんだ。

ガタガタの破れ戸を開けて、土間に入った松次郎は、内部の薄ぎたなさに、——これは！　といたましげに眉宇をひそめた。

土の落ちた壁、蜘蛛の糸のたれ下っている天井。襖も障子も破れ放題であり、調度らしいものは、ひとつも、見当らなかった。

片隅に、行灯がひとつ置いてあるきりであった。

——これが、三千石の旗本御番衆の御嫡男の、すまいなのか！

松次郎は、暗然となり乍ら、

「ごめん下さいまし」

鄭重に挨拶して、草履をぬいだ。

住人は、まだ二十二三であろう、眉青く、鼻梁秀でた、いかにも、幕府直参の番方の血統を正しく享けた風貌であったが、無精髭に、継ぎはぎの色あせた単衣を、胸はだけて、まとった姿は、なんともうら侘しい限りであった。

「よう訪ねてくれた。ここが、よく判ったな？」

「昨年の暮にお別れする時、三河へ戻ってみる、と仰言って居りましたので……。たしか、この赤坂が、貴方様のご先祖のご領地だった、とお話し下されたことがございます」

「そうであったな。尾羽打ち枯らして、祖宗の旧地へ舞い戻る、とは恥知らずなことだが……、実は、敵も、この三河に、住んで居るらしいのだ」

「まことでございますか？」

「変名いたして居るに相違ないし、どのようなくらしをしているのかも、見当もつかぬが、三河にいる、と報せてくれた者があった」

「では、もう、日本中をさがし歩くご苦労はないわけでございますね。三河にいる、と判れば、なに、もう、あとは、一月が二月にのびるだけのことでございますよ」

松次郎は、この青年とは、木曾街道で知り合ったのである。もう四年前になる。父の敵をさがし求めている、ときいて、自分も心がけようと、約束したのであったが、いまだに、役立たずであった。

不意に、菅沼新之助は、なげ出すように云った。

「嗤ってくれ、松次郎。……わしは、もう、仇討など、どうでもよくなって来た。江戸の親戚どもは、去年から、一文も送金してくれなくなった。七年経っても、敵にめぐり会えぬようでは、その腑甲斐なさに愛想がつきた、と無心の返辞に書いて来た伯父も居る。……わしがいま、なんで、その日の飢えをしのいで居るか、わかるか？」

「…………」

「御油・赤坂へ、百姓娘を買って来て女郎にする破落戸の親方の、用心棒だ。先月、藤川宿の博徒と喧嘩をした時、わしは、二人斬った。そのために、その博徒一家から、生命を狙われている。なんたるざまか！」

「菅沼様――。ご自分でご自身をさげすんでおしまいになっては、いけませぬ。破落戸の用心棒をなさるのも、お父上の敵を討つまでの方便でございますよ。そうお考えになれば、べつに、なんでもありますまい」

「松次郎――。わしが、敵討をするために、わが家を出たのは、十七歳だったのだぞ。それから、七年間、諸国をうろつきまわった。そうだ、ただ、うろつきまわっただけなのだ。全く無駄な歳

月だったのだ！」

「親御様のご無念をはらす、という大義をお持ちだったではございませんか」

「松次郎――。今更、かくしてもはじまらぬから、打明ける。わしの父が、殺されたのは、父の方に非があったからなのだ。いま、わしの継母になっている女性には、許婚者が居った。わしの父は、許婚者がいる、と知りつつ、強引に、その女性をめとった。許婚者が、わしの父を憎み、怨んだのは、当然ではないか。許婚者は、父の下役であった。いったんは、あきらめたものの、役目上の些細な事柄で、わしの父に罵倒されて、抑えていた憎しみと怨みが一時に、爆発したのだ。……松次郎、どうだ。わしの父が、若い娘を、むりやりに、後添えにしたばかりに、その息子のわしは、七年間も、日本中をうろつきまわり、挙句の果ては、こうして、乞食同然に尾羽打ち枯らして、女郎づくりの破落戸の用心棒になり下って、飢えをしのいで居るのだぞ！　こんなたわけた話があるか！」

「…………」

松次郎は、なんとも、返辞のしようがなかった。

菅沼新之助は、ごろりと仰臥すると、両手を後頭で組んで、目蓋を閉じた。

「わしは、ただ、いたずらに、心をすさませて居るのではないのだ。敵討に出発する時から、気持が重かった。……わしの父を殺した敵は、誰一人からも悪口を云われたことのない、廉潔な男であった、という。それにひきかえて、わしの父は、傲慢不遜で、多くの人から、きらわれていた人物だったのだ。……しかし、その息子であるがゆえに、わしは、敵を討たねばならぬ義務を背負わされた。なんという、ばかばかしい義務だ」

「菅沼様！」

松次郎は、きっとなった。

「なさけないことを仰言います！　たとえ、お父上がどのようなお方であったにせよ、また、敵が、いかに、立派な人格を持っているにせよ、子としての道は、踏まねばなりますまい。いやしい薬売り風情が、このようなご忠告を申し上げますのも、貴方様が、首尾よく敵討をなされて、三千石のお家をお継ぎになり、立派なお旗本におなりになるのを、お祈りするからでございます。敵をお討ちになれば、それが、叶うのではございませんか。……お父上の無念をはらす、とお考えになるよりも、三千石の旗本の身分になる、とお考えになって頂きましょう」

そう云われて、菅沼新之助は、のろのろと起き上った。

「すまぬ！　お主に、忠告されるまでもないことだった。……あまりに、貧窮すると、斯くの通りに、自棄になってしまう、近頃は、ろくなものを食わぬために、鳥目になって、日が暮れると、全くの盲目になってしまう、ていたらくなのだ」

吐きすてて、自嗤した。

その折――。

「へい――ごめんなさいよ」

地廻りていの若い男が、戸口から首をのぞけて、

「旦那――、手紙をことずかって来ました。へい――これで」

上り框へ、ぽんと投げた。

「誰からだ？」

「へへ……、知ってますぜ。旦那に首ったけの女郎衆からの、お目もじ叶わねば、飯ものどに通らずそろ、今夜にも来てたもれ、あらあらかしく、ってやつでさあ」

にやっとしておいて、若い男は、去った。

新之助は、上り框へ来て、その手紙をひろいあげ、披いてみた。

一読した瞬間、顔面が、かがやいた。

「松次郎！　敵が現れた！　赤坂の女郎屋に現れたぞっ！　わしの馴染の女郎が、報せてくれた」

紅葉屋の女郎咲耶は、異相の浪人者に添い臥し乍ら、その寝顔を、異常に緊張した面持で、瞶めていた。

客は、ねむっているのか、うつつなのか、もう半刻以上も、微動もせずにいる。

出窓からは、陽ざしが引いていた。

「お客様――」

咲耶は、ついに、しびれをきらして、そっと、客をゆすった。

「……む」

「陽がかげりましたぞえ。風が涼しゅうなったゆえ、もう、そろそろ、出発なされませ」

そう促す女を、狂四郎は、薄目をひらいて、視た。

「お前が、気に入った。いそぐ旅ではない。泊ろうか」

「え？」

咲耶の表情が、変った。

狂四郎は、本気で、そう云ったのではなかった。女をためしてみたのである。はたして、態度に不審なものを示した。

狂四郎は、この女郎の挙措に、なにか、あやしさをおぼえていた。
おちつきがない上に、こちらと視線を合せるのをつとめて避けたし、牀に就いてからも、からだをひらくのに、素人女が観念して身をまかせるような様子をみせたのである。
——おれに対して、なにか、含むところがあるらしい。
狂四郎は、やおら、身を起すと、
「茶漬けをもらおうか」
と、所望した。
「こんな家の茶漬けは、まずうて、江戸のお方の口に入りませぬ。次の藤川へお行きなさると、おいしい川魚を喰べさせる小料理屋がございますが……」
「素浪人の口は、おごって居らぬ」
狂四郎は、ひややかに、云った。
茶漬けを、ゆっくり時間をかけて、摂ってから、狂四郎は、立ち上った。
土間へ降りた時、狂四郎は、送って出て来た咲耶を、ふりかえり、
「お前には、惚れた男でも居るのか？」
と、訊ねた。
咲耶は、俯向いて、返辞をしなかった。
狂四郎は、街道へ出た。
暮れがたの女郎宿は、あわただしく、喧騒をきわめていた。
喧嘩になってとび出す客に向って、女郎が二階の肱突き窓から、口ぎたなく罵る光景も、日常の眺めのようであった。

狂四郎は、ふところ手になり、ゆっくりと、宿場を抜けて行った。
街道は、松並木に入ると、かなりの上り勾配になった。
松並木の左右は、竹藪になり、急にさびしくなる。街道は、丘陵に入るのであった。
ものの二丁ものぼると、樹木が影になり、枝葉のあわいの夕空が、灰色に沈みはじめた。
突然——。
背後に、せわしい跫音が、迫った。
「五曾木多十郎！　待て！」
鋭い声で、呼びとめられて、狂四郎は、振りかえった。
前後に、人影はなかった。
暮色の中に、身構えた若い男を、じっと眺めやった狂四郎は、
——やはり、そうであったか。
と、納得した。
紅葉屋の宿帳に、五曾木多十郎と署名したために、あの咲耶という女郎が、そうと信じ込み、この若い男に、報せたのだ。
この若い男は、五曾木多十郎という者を敵と狙っているのだ。
「菅沼新之助だ！　七年の間、さがしもとめたぞ！」
じりじりと迫り乍ら、叫ぶように、云った。
狂四郎は、とんだ人ちがいに苦笑した。人ちがいさせた罪は、こっちにある。
黙って、迫らせつつ、
——かなり出来るようだ。

と、看て取った。

藤川悲劇

「五曾木多十郎！　返答せいっ！」
菅沼新之助は、叫びざま、抜刀した。
「お主、敵の貌を、知らぬのか？」
眠狂四郎は、冷やかに、問うた。
「なにっ！」
「いまだ、見たことがないのであれば、敵と思い込むのも、やむを得まい」
「おのが手で、紅葉屋の宿帳に、五曾木多十郎と署名いたしたではないか！」
「いかにも、書いた。世間に通用させている名が、ふざけて居るので、あの女郎屋に置いてあった枕草紙のいたずら書きの中にあった姓名を借用したまでだ。あれは、お主が、書いたのであろう」
それに対する返答は、凄じい一撃であった。
身をひねって、耳朶すれすれに、これを、宙に流した狂四郎は、鼓膜にじんとのこる刃音で、対手のなみなみならぬ修業ぶりを知った。
菅沼新之助の方は、仕損じた無念を、あらたな闘志にすりかえて、大上段にふりかぶった。
「五曾木多十郎、来いっ！」

まだ、二十二三歳の若さが、その声音にも、長身にも、みなぎっていた。

凝っと見据えた狂四郎は、その眼眸が、こちらの視線をとらえていないことに、はじめて気がついた。

宵闇は、そこに落ちていたが、まだ、こちらの視線をとらえられぬ暗さではなかった。

「お主、めくらか？」

その質問は、新之助を、かっと逆上させた。

満身からの気力を、第二撃にこめて、新之助は、地を蹴った。

咄嗟に――。

狂四郎は、躱すいとまもなく、無想正宗を鞘走らせなければならなかった。

刃金が鏘然と鳴った――刹那、新之助の大刀は、その双手をしびれさせて、宙へ飛び去っていた。

その不覚に狼狽する代りに、脇差を抜きはなって、猛然と突きかけたのは、流石であった。

狂四郎は、その脇差をも、無想正宗の峰で、はねとばした。

新之助は、どさっと、地べたへ胡坐をかくと、

「斬れっ！」

と、叫んだ。

「わたしは、五會木多十郎ではない」

「そんなことは、どうでもよい。わしは、敗れたのだ、斬れ！」

「どうでもよい、とは――どういうのだ？」

「うるさいっ！」

新之助は、絶叫した。

狂四郎は、苦笑して、そこへ若者を見すてておいて、歩き出そうとした。

その時、赤坂宿の方から、「おーい！」と呼びかけ乍ら、奔って来る者があった。

その者よりも、さきに、小さなけものが、並木の松の枝を飛び移って来て、狂四郎の前に、ぴょんと降りた。

小猿は、しきりに、許しを乞うように、叩頭した。

「よしよし、わかった」

狂四郎は、そのあたまを撫でてやった。

薬売りの松次郎は、息せききって、馳せ寄って来ると、

「おお！　菅沼様、ご無事でございましたか。やれやれ——間に合うて、よかった」

と、手拭いで顔の汗を拭いた。

「知りあいか、松次郎？」

狂四郎に問われて、

「へい、四年ばかり前に、木曾の旅籠で、腹痛でお苦しみなされているのを、薬で鎮めてさしあげましてから……。菅沼様、この御仁は、貴方様の敵では、ございませぬ。眠狂四郎と仰言る、てまえが懇意にして頂いている御仁なのでございます。……眠様、この菅沼様は、鳥目におなりになっていて、貴方様が、別人であることを、見わけることができなかったのでございます」

松次郎は、息をはずませ乍ら、双方に、説明しておいて、また、ふき出る汗をぬぐった。

狂四郎は、もう歩き出していた。

松次郎が、追いついて来たのは、藤川宿の灯火がむこうに見える地点であった。

狂四郎は、松次郎が、追いつくと、菅沼新之助のことは、問わずに、
「松次郎、赤坂あたりの宿場女郎の身請代は、いくらぐらいだ？」
と、訊ねた。
「左様でございますね。せいぜい、二十両もあれば足りるかと存じますが……」
「………」
狂四郎は、ちょっと黙って、考えていたが、すっと、懐中から、片手を抜いた。
「ここに、二十両ある。……ご苦労だが、赤坂へひきかえして、紅葉屋の咲耶を、身請してくれぬか？」
「ど、どうなさいますので？　お連れなさるのでございますか？」
「あの若者のところへ、送りとどけてやってくれ」
「は、はあ――？」
「あの若者は、敵を捜しもとめる年月が延びて、貧窮も手伝って、自暴自棄になって居るのだろう。そういう時には、惚れた女の優しい心づかいが、役に立つ」
「旦那様！」
松次郎は、感動して、思わず、目がしらが熱くなった。
「仰言る通りなのでございます。菅沼様は、昼間、てまえがお訪ねした時、どうでもなれ、といったご様子でございましたが、咲耶の報せで、敵が現れた、と知ると、活きかえったように、勇みたって、奔って行かれたのでございます。ところが、人まちがいも、ことかいて、貴方様に、

斬りかかったのでございます。まるで、子供のようにあしらわれてしもうて、ご自身の腕前にすら絶望してしまわれたのでございます。あのすて鉢の有様では、もしかすると、今夜のうちにも、腹でもお切りになるのではなかろうか、と案じ乍ら、お別れして参ったのでございます。……よいところへ、お心づかい下さいました。忝けのう存じます。……菅沼様が、敵討に気が重い理由も、うかがって居ります」

松次郎は、菅沼新之助の父が、旗本御書院番組頭という地位を笠に着て、下役の許婚者であった娘を、強引に後妻に娶り、それが原因で、斬られたことを、語って、

「その上、敵の五曾木多十郎という人から悪口を云われたことのない人物であった、ということも、菅沼様には、おつらいのでございました。敵がこの三河にいる、という報せをお受けになり乍ら、すすんで、さがそうとなさらなかったらしゅうございますのも、その故でございましょう。……ともかく、旦那様のお心づかいには、てまえも、目がさめたような気がいたします。これからすぐに、赤坂へ引きかえして、咲耶を身請して、菅沼様の許へ、送りとどけて参ります」

松次郎は、藤川宿の旅籠のうちで、泊り心地のよい宿を教えておいて、闇の中へ消え去った。

――敵討か。

狂四郎は、明るい宿場町へ入って行き乍ら、自嘲の独語を、洩らしていた。

――おれが、これまでに斬った者の兄弟や息子が、おれを敵と狙うとしたら、この首は、百あっても足りはせぬ。

松次郎が教えてくれた立花屋という旅籠は、小さな宿場町には珍しく、綺麗な構えであった。

次の岡崎城下には、江戸吉原に比肩する華やかな廓があり、遊女の数では東海道随一と称され

ている。宿場女郎で名を売る御油・赤坂とともに、旅人を一泊させる備えがあり、そのあいだにはさまれた藤川宿が、素通りされるのは、当然であった。

狂四郎があがった立花屋も、他に客がないように、ひっそりとしていた。

夕餉（ゆうげ）の膳部とともに、宿帳が持参されたが、今夜の客の名は、わずか二人しか記されていなかった。

狂四郎は、筆を把（と）ると、

「五會木多十郎」

と、署名して、女中に渡した。

この男の不思議な予感が、筆を把った瞬間に、働いた、と云える。

赤坂の女郎屋で、枕草紙にいたずら書きされていたこの姓名を借用したところ、思いがけず、敵呼ばわりをされて、襲撃された。ついでに、今夜も、借用してみたら、また、なにかの反応が起るかも知れぬ。ふっと、そんな予感がしたのである。

はたして——。

食膳が下げられると、程なく、

「ごめん下さいまし」

と、声があって、障子が開けられた。

五十年配の男が、両手をつかえて、

「てまえ、あるじの佐治右衛門と申します」

と、鄭重に挨拶してから、

「まことに失礼なおうかがいをつかまつりまするが、先程、宿帳に、五會木多十郎とお書き下さ

いましたが、ご本名でございましょうか？」

と、じっと視線を据えて、問いかけて来た。

「五會木多十郎、などという名前は、日本中に二つとはなかろう」

「はい。左様でございます」

「なぜ、本名か、どうか、わざわざ、訊ねに来た？」

「御本人を、存じ上げて居ります」

「何処に住んで居る？」

「それは、かるがるしゅう、お教え出来ませぬ。……貴方様が、どうして、このお名前をお使いになっているのか、それをうかがいとう存じます」

「さがして居るのだ」

狂四郎は、こたえた。

「なぜ、おさがしになります？」

ただの旅籠のあるじにしては、その眼眸（まなざし）に、度胸のすわった光があった。射るように、こちらを見据えて、まばたきもせぬ。

「立花屋――」

「はい」

「菅沼新之助という若者が、五會木多十郎を、七年余も、敵としてさがしもとめていることを、知って居ろう」

「存ぜぬ、とは申しませぬ」

「わたしを、その菅沼新之助に味方する者ではないか、と疑って居るのか？」

狂四郎は、わざと、対手の強い眼光をはじきかえす冷たい表情になった。

すると、立花屋佐治右衛門は、

「貴方様は、てまえが、むかし、五曾木家の足軽をつとめていた、と知っていて、わざと、宿帳へお書きになった。そうではありませぬか？」

「…………」

「五曾木家は、そのむかし、この三河国額田（ぬかだ）郡の豪族でございました。そして、てまえの先祖は、五曾木家の家来でございました。そのご縁で、てまえは、十六の時、江戸へ出て、五曾木家の足軽にして頂きました。……多十郎様が、菅沼新左衛門様のあまりの非道のなされかたに、ついに、堪忍（かんにん）袋の緒を切って、刃傷に及ばれ、お家改易になったために、てまえは、ここへ戻って、旅籠のあるじに相成りましたが、いまだ、五曾木家の足軽としての忠義心は、失うては居りませぬ！」

狂四郎は、腕を組んで、しばらく、沈黙を置いた。

立花屋佐治右衛門も、畳二畳をへだてて、身じろぎもせぬ。

やがて、狂四郎は、口をひらいた。

「五曾木多十郎に伝えてもらおう。菅沼新之助は、赤坂宿はずれにいる。わずか三里をへだてているに過ぎぬ。いずれ、ここで、敵討が行われるであろう、とな」

五曾木多十郎が、この藤川近傍に住んでいる、と看て取った上での言葉であった。

「貴方様は、菅沼様の味方をなさる御仁ではないのでございますか？」

「その日の風次第で、どちらへでも味方ができる男だ、おれは——」

佐治右衛門は、頭を下げると、去った。

そのまま、狂四郎は、坐りつづけていたが、ふっと、おのれを嗤うように、

「いつのまにか、お節介やきになったようだな、このおれが……」

と、独語をもらすと、立ち上って、無想正宗を携げていた。

階段を降りて、結界のある板の間に姿をみせることは、避けた。

いつの間にか、闇の往還上に立っていた。

予想たがわず、佐治右衛門が、店から現れると、急ぎ足になった。

尾行し乍ら、いまだ、狂四郎には、どうするか、思案は成っていなかった。

佐治右衛門は、横丁へそれると、狭い裏通りを歩いて行った。

佐治右衛門が入って行った裏店の一軒の戸口には、その木札が、ぶら下げてあった。

『手習どころ』

——立花屋は、五曾木多十郎に、ここから、退去するように、すすめるであろうが、臆病者でない限り、今夜のうちに遁げるようなことはあるまい。

いったんは、そう思って、その足をめぐらして、戻りかけた狂四郎も、佐治右衛門という男の必死の説得に、五曾木多十郎が、負けるかも知れぬ、と考えなおした。

それから、一刻ばかり経って、佐治右衛門が、その家を出るのと入れかわりに、狂四郎は、格子戸を開いた。

わずか二間きりのぼろ家であった。

仕切りの破れ唐紙に、凭りかかるようにして、黙然として端座していた三十前後の男は、狂四郎が土間に立っても、べつに、気色ばむこともなく、静かな視線を向けた。

「どうされる？」

狂四郎は、挨拶を抜いて、いきなり、問うた。佐治右衛門が一刻もの長い時間を説得に努めた直後のことである。こちらが、重ねて述べるまでもなかった。

五曾木多十郎の方でも、狂四郎が何者か、すぐにさとって、淋しげな微笑をみせた。

「お手前なら、どうしたらよい、と思われるか？」

「菅沼新左衛門を斬ったのは、正当な理由があり、俯仰天地に愧じぬ。したがって、その伜に討たれてやる存念は、毛頭ない。しかし、世間のしくみに順えば、尋常の勝負をしなければならぬが、さりとて、その伜を、返り討ちにする気も起らぬ。……そのような愚直の迷いに対して、道学者めいた意見は持合わせぬ。お主自身が、態度をきめられるがよろしかろう。こちらは、その意見にしたがって、菅沼新之助に報せるなり、黙っているなり、どうでもいたそう」

「…………」

五曾木多十郎は、目蓋を閉じた。

沈黙は、長くつづいた。

やがて、狂四郎を視た多十郎は、再び、その淋しげな微笑を、顔に刷いた。

「尋常の勝負をつかまつろう。新之助殿に、左様お伝え下されい」

狂四郎は、じっと、見据えていたが、

「場所と日時を――」

と、促した。

「明朝、明け六つ――、これより正南五丁の丘にある八幡境内にて……」

「承知いたした」

狂四郎は、その家を、出た。

歩き出した時、なぜか、胸に重苦しいものがつかえるような、暗い気分が来た。

こちらが、訪れた上は、五曾木多十郎が、尋常の勝負を決意するのは、当然の思考の推移というものではなかろうか。

こちらの行為は、渠(かれ)に尋常の勝負を迫ったことになる。

そして、その結果が、どちらにころぼうとも——菅沼新之助が、本懐を遂げても、五曾木多十郎が返り討を為しても、この重い気分は、のこるに相違ない。

立花屋へ戻るまでの途中で、狂四郎は、五曾木多十郎との約束を破る気持に傾いていた。

菅沼新之助に、報らせぬことであった。

このまま、うちすてておいて、藤川宿を立去ることであった。

あとは、どうなろうと、こちらの知ったことではないのだ。五曾木多十郎は、明朝、八幡境内に、菅沼新之助が現れなかったならば、自ら進んで、赤坂宿へ足をはこび、勝負をするかも知れぬ。あるいは、新之助を訪ねずに、立去って、何処かの土地に、終(つい)の栖(すみか)を求めるかも知れぬ。いずれをえらぶにせよ、それは、当人の勝手であろう。

——おれの知ったことではない。

狂四郎は、屋根から、部屋へ、戻った。

ところが、障子を開けて、一歩入ったとたん、眉宇をひそませる者が、そこにいた。

松次郎の姿が、そこに在ったのは、当然としても、そのとなりに、赤坂の女郎咲耶が、悄然(しょうぜん)とうなだれていたのである。

狂四郎が、坐ると、松次郎は、ほっと深い歎息(たんそく)をもらして、

「旦那様のご好意も、無になりましてございます」
と、云った。
「……？」
松次郎は、料紙に包んだものを、狂四郎の前に置いた。披いて見るまでもなかった。それは、遺髪であった。
「てまえが、この咲耶を身請して、連れて参りますと……、お見事に、切腹なされて、相果てて居られました」
「……」
狂四郎は、口にすべき言葉がなかった。
「旦那様！」
松次郎は、当惑の面持で、狂四郎を視た。
「それで……、この女子の身柄を、いかが、いたせばよいものでございましょう？　旦那様が身請けして下されたからには、旦那様のお指図にしたがいたい、と申しますゆえ、つれて参りましたが……」
そう問われて、狂四郎は、眼眸を、咲耶に移した。
宿場女郎であったとは到底思えぬ素顔であった。
「そなたは、菅沼新之助に、心の底から、惚れていたか？」
「はい」
「新之助が亡き者になった今でも、新之助のためなら、なんでもすることができるか？」
「できまする！」

「よかろう。……では、新之助に代って、敵討をするがいい。菅沼新之助の妻としてだ。助太刀は、おれが、引き受ける」
「旦那様が、五曾木多十郎の行方をさがして下さいますので――?」
松次郎は、首をのばして、息せわしく、訊ねた。
「五曾木多十郎には、いま会って来た。敵討の日時と場所はすでにきまって居る」

早朝――。
狂四郎は、咲耶をつれて、野道を辿って行った。
まばらに小松のちらばった丘陵の、その頂上に、聳えている鴟尾のはねた大屋根を、望み乍ら、狂四郎は、うしろの咲耶に云った。
「懐剣を抜いたならば、目をつむって、まっすぐに突きかけることだ。それだけでよい」
「はい」
こたえる声音は、緊張で、顫えていた。
しかし――。
長いゆるやかな傾斜の石段を登って、境内に上った時、咲耶は、懐剣を抜く必要がなくなったことを、みとめなければならなかった。
「お!」
狂四郎は、思わず、声を発した。
広い境内の中で、その姿は、いかにも小さく、社殿の前で、石だたみの上に、俯伏していた。
左右へ流れ出た血汐が、目に痛いくらい鮮やかであった。

五曾木多十郎は、昨夜、狂四郎に、勝負を決意した、と告げた時、すでに、この覚悟をきめていたに相違ない。

凝然として、その場に立ちつくしていた狂四郎は、われにかえると、咲耶を振りかえった。

「そなたが、今日から、どうやって、生きるか。それは、そなた自身が、きめなければならなくなった」

眠狂四郎が、行きずりの女に、いたわりをこめた言葉を送ったのは、はじめてのことであった。

岡崎武士

「へへ……、きぬぎぬに、と来た。あけのむつ言いまさらに、うきな別れの袖の海、か」

真昼の陽ざしに、まっ赤になった酔い面をさらし乍ら、縞縮緬（しまちりめん）をだらしなくまとった地廻りていの若い男が、ふらふらと、一軒の甘酒茶屋へ、入って来た。

茶屋の落間（おちま）では、老若職業さまざまの男たちが、この陽盛りの一刻を、無駄な饒舌（じょうぜつ）で、つぶしていた。

「おや、源（げん）公、どうしたい、そのぞろっぺえな装（なり）は——」

「えっへん、おほん」

源公は、くるっと裾をまくって、緋縮緬のふんどしを締めた臀（しり）を、突き出して、ポンと叩いてみせた。

「花は折りたし、梢（こずえ）は高し、心づくしの身はひとつ、通うあらしの夜もすがら——、へっ、どう

だ、中から、外から絹ずくめだぞ」
「どこで、盗んで来やがった？」
「置きゃあがれ。年増女の仇情（あだなさけ）だあ。本町の二葉屋って、質屋の後家が、源さん、あたしの心づくしを受けてなもし、って……、きぬぎぬの贈りもの、ってえのは、このことだぞ。恐れ入ったか、野郎ども」
「ちょっ、質流れをまきあげて来て、うれしがってやがる」
「なにをぬかしやがる。本当に呉（く）れたんだぞ。そもそもだ、そもそもとくらあ、こん畜生——十三の年から、廓へかよって、四十八手の秘術を会得した源公様だぞ。ゆうべなんざ、おめえ、雀のちょんちょん駒返しでよう、質屋の後家め、花茣蓙（はなござ）一枚、ぼろぼろに破りやがったんだぞ。……一丁、教えてやろうか。口の吸いかたにも、十八手あらあ、知らねえだろう。てめえら、よだれをたらすだけが、能じゃねえや」
「うるせえな、しずかにしろい！」
一人が、呶鳴（どな）りつけておいて、かたわらの年寄に、
「隠居——、口を吸う、ってえわざは、むかしからありましたかい？」
「あったのう。史記にも、ちゃんと出て居る。遊仙窟（くつ）に口子を得、とな。土佐日記にも、おしあゆの口を吸う、と書いてある。源公の云う通り、口中の契りは、女子が悦ぶからのう」
「そうよ、きまってら。人間には、口と舌が、一番大切なんだぞ！」
源公が、叫んだ。
「質屋の後家を誑（たぶらか）したのも、その舌先三寸だからのう、源公」
「へへへ、舌先三寸で悦ばせて、臍（へそ）下三寸で泣かせてやってるんだ。捨てられたら、舌を嚙（か）みき

る、と云ってら。そねめそねめ」
「後家が嚙み切った舌は、宝飯郡の八幡村の財賀寺に埋めるかの」
隠居が、笑い乍ら、云った。
財賀寺は、一名力寿山舌根寺と称されている。そのむかし、三河守としてこの地に赴任して来た大江定基が、赤坂長者の娘力寿を愛した。任期満ちて、定基が都へ去ろうとすると、力寿は、別離を惜しんで、舌を嚙み切って果てた。その舌が、財賀寺に埋められたのである。
「おうおう、隠居――。この赤ふんどしはよう、犬糸だから、大切にしてくれ、って、後家の奴、云やがったが、犬糸って、なんでえ？」
源公は、褌の端を突き出してみせた。
「教えようかの。……むかし、この三河の国の郡司が、妻と妾に、それぞれ、蚕を飼わせたのだな。ところが、どうしたことか、妻の方の飼う蚕が、つぎつぎに死に絶えて、繭がつくれなくなった。良人の郡司は、これを落度として、妻の家へは、寄りつかぬようになったな」
「妻の家って、一緒に住んでいたんじゃねえんですかい？」
一人が、けげんそうに訊ねた。
「その頃は、夫婦は、別べつに住んでいたのだな。夜になると、良人が、妻の許にかよったのだ」
「うめえしかけをしやがったのう。夫婦が同じ家に住まなけりゃならねえ、なんて、くだらねえ掟を、いつ頃から、つくりやがったんだ。もういっぺん、むかしのしきたりに、もどしてもらいてえや。そうすりゃ、おれア、女房を、三人も貰ってくれら」
「廓の女郎を、全部てめえの女房と思ったら、いいじゃねんか」
「莫迦野郎。女房なら、亭主以外の男にゃ抱かれねえや」

「そういうおめえの嬶は、おめえの留守中、ちょいちょい、ほかの男をくわえ込んでいる、ってもっぱらの噂だぞ」
「なにっ！　もう一度、ぬかしてみろ！」
「くわえ込まれたこのおれが、云うんだからまちがいねえ」
「この野郎っ！」
つかみかかるのを、あわてて、制した隠居は、
「まあまあ、わしの話を、きき なされ。……ええと、どこまで、話したっけ。そうそう——、良人が寄りつかなくなって、しばらくするうちに、妻の手もとの蚕は、とうとう、たったいっぴきになってしもうた。妻は、せめて、そのいっぴきだけでも、繭をつくらせようと、せっせと桑の葉を呉れていたな。ところが、ある日、飼犬の白が、この蚕を、一口に喰べてしまったのだ。妻は、仰天したが、喰べられてしまったものを、どうすることもできず、さめざめと、泣いて居った。すると、不意に、飼犬め、大きなくしゃみをしたのだな。と——どうだ、鼻の孔から、するすると、白い絹糸が二筋、出て来た。妻は、怪しみ乍ら、こころみに、その絹糸を、ひっぱってみた。すると、二筋の絹糸は、切れもせずに、あとからあとから出て来るではないか。妻は、いそいで、それを、糸巻にまきつけた。いやはや、出るわ、出るわ、糸巻をいくらとりかえても、間に合わぬくらい出て来たな。……左様、いまの値段になおせば、四五千両がほどの絹糸が出て来た時、ようやく、糸が切れ、犬も斃れて、死んでしもうた。この絹糸は、並の絹糸よりも、色が白く、光沢があって、美しく、強かったな。この話をきいた郡司も、妻をすてておいたのを悔いて、その家へ毎晩やって来るようになって、万事めでたし、と相成った次第——」
一人の長身の藩士が、すっと、この甘酒茶屋に入って来たのは、その折であった。

「お前ら、チト遠慮してくれ」

眉秀で、彫のふかい、由緒正しい門閥をその相貌に示した藩士は、光の強い眼眸で、遊び人たちを見まわしてから、そう命じた。

「旦那。あっしどもは、矢矧に住んで居りますんでね。先刻から、どうしたわけか、矢矧橋が通行止めになりやしたので、しかたなく、こうして、油を売って居りますんで、へい」

一人が、小ずるい表情で、云った。

「わかって居る」

藩士は、財布をとり出すと、いくばくかの金子をとり出して、床几へ抛った。

「へい。有難う存じます。……おい、みんな、お礼を云え。隠居、おめえはどうする?」

「廓へ行って、すごせ」

「どれ、ひとつ、わしも行こうかの。二握り茶摘みは、まだまだ、どうして、これで、六十のむしろ破り」

一同が、ぞろぞろと、出て行くのを見送ってから、藩士は、奥の小部屋へ、歩み寄った。

破れ衝立の蔭から、寝そべった黒の着流しの足もとが、のぞいていた。

「卒爾乍ら、眠狂四郎殿に、折入ってお願い申したき儀があり、当本多藩家中物頭・土方万八郎、御意を得たく、お捜し申した」

火のない囲炉裏ばたに、手枕で横たわっていた狂四郎は、向い側に坐った藩士を、薄目で視やったが、

——これは、ただの男ではないようだ。
と、直感した。
対座しただけで、その者が湛えている気魄が、狂四郎の神経に、ふれて来る。
土方万八郎と名のる自分と同年配のこの男の気魄は、なみなみならぬものがあった。
狂四郎は、やおら、身を起すと、
「見知らぬ御仁から、ものをたのまれるのは、わたしという男の、最も嫌悪するところとご承知置き頂こう」
と、云った。
「それがし、江戸に在った頃、貴殿のお噂は、すすんで耳にいたし、どのような御仁か、心得て居るつもりでござる。その上で、敢えて、お願いつかまつる」
「…………」
「それがしは、仔細あって、本日中にも、切腹いたす存念でござる。就いては、貴殿に、介錯の儀、お願いいたしとうござる。曲げて、ご承認下さるまいか」
「…………」
狂四郎は、あらためて、対手の表情を、視なおした。
「お願いつかまつる」
土方万八郎は、両手を、畳につかえた。
「おことわりしよう」
狂四郎は、ひややかに、拒絶した。
「眠殿！」

頭を擡げた土方万八郎は、眼光をさらにはげしいものにした。

「それがしが、介錯をお願いいたすのは、貴殿が、道中されて居ることを、耳にして、急に思いついたのではござらぬ。……貴殿が、この茶屋で、時刻をすごして居られるのは、矢矧橋が、通行止めになって居る為でござろう。何故に、当藩家中によって、通行止めにされたか、それを、ご存じでござろうか？」

「………」

「貴殿を、討ち取るために、他の通行人を止め申した」

「わたしを、討ち取る？　本多家が、この眠狂四郎を殺す仕事を、どこからかたのまれた、と云われるのか？」

「さあ、そこまでは、それがしも、承知つかまつらぬ。ただ、重役方に於ては、家中より、選んだ二人の手練者を、貴殿に立ち合せようと企てて、矢矧橋を通行止めにいたして居り申す。すなわち、貴殿ただ一人が、矢矧橋へさしかかるのを、家中一統は、いまか、いまか、と待ち受けて居るのでござる」

「それが、お手前の切腹と、なんのかかわりがある、と云われる？」

「貴殿の討手を命じられるのは、当藩に於ては、それがし以外にはない、とそれがし自身、確信を持って居り申したところが、意外にも、それがしは、除外され、近習佐倉宗治と小姓組頭小松田嘉門が、えらばれ申した。佐倉、小松田は、ともに、抜群の使い手であることは、疑いのないところ。特に、城代の命を受けて、出府し、三年余を、柳生道場にかよって、修業を積んで居り申す。いずれに優劣をつけがたく、それぞれ、各藩の師範道場を巡って、いまだ、おくれを取ったことは、きき申さぬ。しかし乍ら、当藩に於ては、渠ら両名よりも、それがし土方万八郎の方

が、業前が一枚上であることは、知る人ぞ知り申す」
「そのお手前が、なぜ、討手から、はずされたのか？」
「重役方は、それがしの業前が、渠ら両名より劣ると、思いまちがいをして居るのでござる」
「………」
「成程――。それがしは、平素の振舞いが、いささか、奇矯にわたることは、自身みとめ申す。そのために、重役方の信頼が薄いことも、重々承知つかまつる。しかし、兵法の優劣を秤量する上で、平素の行為など参酌するのは、おろかもきわまり申す。兵法は、畢竟いずれが強いか、勝つか、それだけの話と存ずる。
それがしは、討手の役目をはずされた無念やみ難く、家中無敵と自他ともに許した面目がつぶれた以上、もはや、他にとるべき方法を知り申さぬ。いさぎよく、切腹して、面目をたてようと存ずる。それには、貴殿に介錯をお願いいたすが、最も、それがしの覚悟に叶うことと、考え及び申したのでござる」
――これは、相当の変り者と、家中から、みなされている男らしい。
討手の役目をはずされた口惜しさに、討つべき対手に介錯をたのんで切腹して、武士の面目を立てようと決意するなど、第三者からみれば、まことにばかばかしい話である。しかし、当人にとっては、のっぴきならぬ立場に置かれた者の覚悟に相違ない。
狂四郎は、この男を嗤うことはできなかった。
狂四郎自身、顧て、おのれのかずかずの行状は、他人の目には、ばかばかしいものに映ったに相違ないのだ。
「介錯の儀、承知いたした」

「お——、おききとどけ下さるか。忝けのう存ずる」
「但し、条件がひとつ」
「なんでござろうか？」
「お手前が、自負するほどの腕前かどうか、まず、それを、見とどけさせて頂こう」

岡崎は、本多中務大輔、五万石の城下であった。遊女、海道第一の所、と名所記にも記されてある通り、どこか、他の城下町とは、ちがった淫蕩の雰囲気があった。
家康は、庶民懐柔の政策のひとつに、公娼私娼をもって、城下・宿駅を賑わせることをみとめた。徳川氏創業の地である岡崎が、淫蕩の雰囲気につつまれているのは、当然であろう。
朝から矢矧橋が通行止めになったこの日、新町、伝馬町、本町、西町など、街道に沿うた町並のいたるところから、にぎやかな三味線の音や、歌声や、嬌声が、流れ出て来ている。
その中を、深編笠をかぶった黒の着流しの浪人姿が、左右のにぎわいには、耳目をくれずに、大股に進んで行く。
日吉丸と蜂須賀小六の出会いを、語り草にする矢矧橋は、城下はずれに架かっている。全長二百八間、日本一である。
橋の手前数間のところに詰めていた数人の藩士は、進んで来た黒の着流し姿をみとめて、
「来たぞ！」
と、緊張した気色で、叫び、一人が、橋袂へ奔って、そこの石段から舟着場へ、駆け降りて行った。

他の者たちは、その姿が近づくのを待って、

「眠狂四郎と申されるな？」

と、問い、編笠がうなずくと、

「通られい」

と、許可した。

ふところ手の着流し姿は、ゆっくりと、橋板を踏んだ。

下手の川面には、三艘ばかり、屋形舟が停められていたが、一斉に、障子が開けられ、いくつかの顔がのぞいて、橋上を仰いだ。

――あれが、眠狂四郎か！

どの眼眸も、好奇の色に光った。

いずれも、本多藩の重立った役職にある人々とみえる。

着流し姿が、恰度、なかばまで渡った時であった。

東西の橋袂に、一人ずつ、白の鉢巻きに、黒の紋服に襷をかけ、袴のももだちをとった藩士が、出現した。

着流し姿は、そこに立ち停って、行手をふさいだ者を、じっと視、それから、編笠をまわして、退路を断った者を、眺めた。

まず、行手をふさいだ者が、

「眠狂四郎殿、藩命によって、当藩近習佐倉宗治、尋常の勝負を所望つかまつる！」

と、云いはなった。

つづいて、後方の者が、

「同じく、小姓組頭小松田嘉門、二番手として、罷り在る！」

と、名のった。

編笠のかげからは、なんの応答もなかった。

二人の討手は、しずしずと、迫り寄る。

一間の距離にせばまってから、討手たちは、差料を抜きはなった。

佐倉宗治は、青眼に、小松田嘉門は、八双に、構えた。

と――。

着流し姿は、下手側の欄干ぎわへ、身を移すと、白刃をゆっくりと鞘走らせた。

欄干を後楯にして、切先が橋板にふれるばかりの地摺り下段の構えをとった。

佐倉宗治が、正面へまわり、上手側の欄干を背にして、やや猫背になり、一撃必殺の凄じい殺気を放射した。

小松田嘉門は、同じ地点を動かぬ。

それなり……三個の影は、橋上に、固着した。

空は、雲影一片もとどめず晴れわたり、彼方に望む岡崎城の天守閣の大屋根を、すっきりと浮きあげていた。

川面を渡って来る微風が涼しい。

遠近の三河の山波が、濃淡あざやかに、稜線を引いて、美しい背景を描いている。

すべてのものが、動かぬ。

いっそ、このまま、動かずに、陽ざしが去って、昏れて行くかと思われるほどの静寂が、つづく。

しかし、討手方としては、その使命を与えた人々が、屋形舟から見戍っている上からには、対

手に微塵の隙がなかろうとも、対峙の時間を一刻も二刻もひきのばすわけには、いかなかった。
佐倉宗治は、青眼の剣を、二三度、浮き沈みさせてから、
「やあっ！」
と、懸声を宙いっぱいに、迸らせた。
対手は、しかし、地摺りの構えを、微動もさせずに、待っている。
佐倉宗治にとって、対手が、編笠をかぶったままでいるのも、あなどられているようで、憎かった。
「やあっ！」
もう一度、佐倉宗治は、懸声を噴かせた。
とたんに、
「佐倉、なにを、ためらう！」
編笠の蔭から、そのあざけりの言葉が、発しられた。
ききおぼえのある声音であった。
眠狂四郎ではなかったのだ！
愕然として、瞠目した佐倉宗治は、次の刹那、眠狂四郎に化けた者に対する憤怒で、心気が擾されたまま、猛然と、橋板を蹴った。
二個の軀が、激突した、とみえた瞬間、贋狂四郎の横薙ぎの白刃から、一筋の紅の線が、宙へ、ぴゅーっとのびた。
と同時に、佐倉宗治の五体は、もんどり打って、欄干を越え、流れへ落下した。
高くはねあがった飛沫がおさまった時、水面は、みるみる赤く染まった。

その時、橋上では、贋狂四郎が、佐倉宗治にかけた同じ言葉を、小松田嘉門へも、あびせていた。

「小松田、なにを、ためらう！」

「う！」

小松田嘉門は、ひくく、肚の底からの呻きをもらした。

「土方！　き、貴様っ！」

「うろたえるな！　来いっ！」

贋狂四郎は、すっと、地摺りから中段に、移しかえた。

「ええいっ！」

小松田嘉門は、憤怒を、その一撃にこめて、襲った。刃と刃が噛んで、鋭い音が、宙をつらぬいた。

小松田嘉門は、おのが顔面を、対手の編笠へふれんばかりに近寄せて、渾身の力をこめた。そして、じりじりと、贋狂四郎を、欄干へ押しつけた。

贋狂四郎は、押されるままに、上半身を、弓なりに反らしていたが、突如、片脚をはねあげて、小松田嘉門の下腹を蹴りあげた。

「うっ！」

よろめいた嘉門が、構え直そうとした――その隙を、贋狂四郎の方が、見のがす筈がなかった。

肩から肋へ、存分に斬りさげられた嘉門は、欄干へぶっつかって、くるりと一廻転すると、橋板へ俯伏した。

贋狂四郎は、はじめて、編笠を、はずした。

昂然と胸を張って、屋形舟を見下すや、

「重役方へ、もの申す。土方万八郎の業前、ごらんなされたか！　それがしこそ、家中随一の手練者たることを、証明いたした！」

と、云いはなっておいて、その場へ、正座した。

脇差を抜いて、懐紙をまきつけ、着物の前を押しひろげるや、切先を、腹へ擬し、

「土方万八郎、武士の面目を立てるため、切腹つかまつる。ご一同、とくとお見とどけあれ！」

と、云いはなった時、東かたの往還上に、馬蹄の音が起った。

「うむっ！」

万八郎が、切先を、突き立て、ぎりぎりと引き切ったところへ、疾風の勢いで、橋上へ駆け入って来た一騎は、そのかたわらを、掠めざまに、白刃を一閃させた。

万八郎の首は、六尺余の高さに、刎ねあがっていた。

池鯉鮒くるす村

岡崎から三里三十丁、池鯉鮒宿は、見はるかす青田の中に、在る。

左方に、遠く、天守閣が、かすんでいるが、これは、土井大隅守・二万三千石の居城刈谷城である。

視線を、右方へ転ずれば、野を分けて細長く森が、のびている。檜ばかりの、喬木がそろっているので、濃い色にしっとりとおちついたおもむきがある。その森の中に狭奈岐大明神の社があ

る。

社の境内は、心字池があって、明神の使いということで、鯉と鮒がたくさん飼われていた。池鯉鮒の地名は、ここから起っている。

春の馬市には、馬の毛並を光らせるために、この池の水が汲まれる。池鯉鮒宿は、馬市が盛んなことで、日本全土に、名がひびいていた。その季節には、女衒に率いられて、十人二十人と、女郎が、各地から集って来て、市立ちの人々と契る、と名所記は、案内している。

凄じい嵐が、一夜、荒れ狂って過ぎて、嘘のように晴れあがった次の朝——。

眠狂四郎は、この森へ、足をはこんで来た。

参詣道の松の並木は、巨大な魔手で、ひき抜かれたように倒れていたり、幹の中ばからへし折られたりしていたが、流石に、檜の喬木は、ビクともせず、ただ、枝葉を地面や池の水面にいっぱいに散らしていた。

その枝葉に陽ざしをさえぎられたのをいやがるように、しきりに、鯉が、はねあがっている。

狂四郎が、その畔に足を停めて、宙にひるがえる鯉のはねかたを、眺めていると、本堂の縁側から、祝詞できたえた声が、

「魔性の兵法も、なお、工夫を怠らぬ心得が要るかの」

ずけずけと、あびせかけて来た。

狂四郎は、苦笑して、神官を仰いだ。

総髪は一本あまさず、純白になっているが、顔の色は、青年のように艶やかな老人であった。

春日部寛道というこの神官は、武部仙十郎とは旧知であり、寛道は出府のたびに、仙十郎の長屋に逗留していたので、狂四郎も、懇意であった。

狂四郎は、縁側へ近づくと、

「春日部殿、この近在に、俗に栗栖村と称ばれている里を、ご存じか？」

と、訊ねた。

「うむ。知らぬではないが……」

「どのあたりにあるか、お教え頂こう」

「三河と尾張を分ける境川を、さかのぼったところにあるが……、お主、そこに、何か用件があるのか？」

「いささか――」

「止したがよかろうな」

「止められるような重大な用件ではない。ただ、たのまれた品を、その村のある女に、届けるだけのことです」

「どっこい。お主の方は、そのつもりでも、お主が足をはこんで行くところには、必ず、騒動がまき起るおそれがある。まして、行先が、栗栖村となるとな」

「ただの村里ではない、と云われるのか？」

「まずな。ここらあたりの住人でも、栗栖村に入った者は、かぞえるほどしか居らぬ。べつに他所者を寄せつけぬ掟をつくっているわけでもあるまいが、いまだ曾つて、他所者と縁組が為されたことはきかぬし、村を出て住居を他村にもとめた者のあることも、きかぬ。奇妙な里と申すよりほかはない。……お主のような異相の浪人者が、入って行けば、ただの村でも、警戒しようまして、栗栖村の住民らが、どのような目で、お主を迎えるか、およその想像がつく」

それをきくと、狂四郎は、薄ら笑った。

「くだらぬ使いをひき受けた、と思っていたが、どうやら、面白い村らしい。興味が出て来た。――では」

一揖すると、狂四郎は、踵をめぐらした。

「眠――」

春日部寛道は、あわてて、止めようとしたが、止めても肯く男ではないと、思いかえした。

「眠――、栗栖村の住民らは、装は農夫だが、いずれも、武芸の修業を積んで居るぞ。それも、尋常一様の修業ではないらしい。要心するがよかろう」

陽ざしは、眩しかったが、峠を登って来た狂四郎を、べつに汗ばませてはいなかった。風が、秋のものだったのである。

峠の頂上は、まばらな小松がちらばっていた。

「あそこだな」

巨大な擂鉢のような地形の、底に、豆つぶのような人家が、点在していた。山の斜面は、桑と茶と、そして蜜柑の畠が、見事な区劃で、配分され、永年の自給自足の努力の成果と眺められる。田は、擂鉢の底で、わずかに、稲のみのりの色を、ひろげている。

この峠を越える一筋の山径だけが、その村を、外界とつなぐ唯一の交通路であった。

峠からの下りは、急勾配であった。途中までは、一面の茶畠であった。

そこを過ぎると、すこしばかりの赫土の空地が設けられ、地蔵堂が、片隅に建てられていた。

狂四郎は、供物を置く御影石に、腰を下した。格子戸の中の、赤いよだれ掛をつけた石地蔵に、

敬意をはらう料簡など、さらになかった。
山中は、静寂につつまれている。鳥のさえずりもない。
この空地を境にして、下の斜面は、蜜柑畠になっていた。青い実は、もうかなりの大きさになっていた。
狂四郎は、蜜柑の樹の下をくぐって、登って来る人影を、みとめた。
女であった。
足もとへ視線を落して登って来たため、畠を抜け出るまで、地蔵堂の供物石に、人がいるのに、気がつかなかった。
顔を擡げたとたん、
「あ――」
と、小さなおどろきの声を発して、立ち竦んだ。
狂四郎の方もまた、彫ったような美しく整った貌だちと、透けるような肌の白さに、
――これは！
と、眼眸を据えた。
文字通り鄙に稀なういういしい娘であった。気品もある。軽衫をはいているが、それからのぞいた足くびが白く浮きあがって、清潔ななまめかしさであった。
狂四郎は、立ち竦み乍らも、じっと、その場を動かぬ娘へ、しばらく、黙って、視線を当てていたが、ふと、気がついて、供物石から腰を上げた。
娘は、狂四郎が数歩はなれると、地蔵堂の前にすすみ、蹲って、携げて来た古風な黒塗りの重箱を膝に置き、まず、皿をとり出し、それに、白い団子を、箸でつまみ出し、きれいに盛った。

今日は、彼岸の中日なのであった。
狂四郎は、娘が合掌を終るのを待って、
「そなたは、栗栖村の者だな？」
「はい」
娘は、うなずいた。
「そなたの村に、桂という女性が居ろう。年齢頃は判らぬが……」
「…………」
娘は、顔をそ向けて、狂四郎に表情を見せなかった。
「その女性のところへ、案内してくれまいか？」
娘は、返辞をするかわりに、狂四郎を、視た。
その双眸には、あきらかに、恐怖の色をあふらせていた。
食い入るように、瞶めたが、次の瞬間、ぱっと奔り出し、たちまち、蜜柑の木立の中へ姿を消してしまった。
——桂という名が、どうして、あの娘を、あのように怯えさせたのか？
狂四郎は、訝った。
桂という女性に、狂四郎は、江戸で名人と称される職人がつくった、百両のねうちのある鼈甲利休形の光輪櫛を、贈るべく、持参して来たのであった。
——何か、かくされたことがありそうだ。
四半刻後、狂四郎は、擂鉢の底へ降り立っていた。

降りてみれば、意外に、人家は多く、小さな蓆をならべたように、幾段にも区切られている黄ばんだ陸田のあいだに、厚い茅葺きの切妻合掌造りの屋根が、梅や枇杷や李や柿や、実のなる樹木を配して、美しい傾斜と切角をみせていた。

太陽はすでに、覆輪をとりはらって、西の山の稜線を赤く染めていた。この孤村の昏れるのは、早い。

陽ざしは、一方の山襞のみに当って、村のたたずまいを明暗に分けている。

村の中央を流れる小さな川の堤を辿り乍ら、狂四郎は、この人影のない里が、宛然ひとつの砦になっていることをさとっていた。というのも、降りて来た斜面の裾にひろがる桑畠の中の畔径が、面倒に曲りくねり、しかも、しばしば、ふっと消えていて、そのたびに、引返さなければならなかったからである。これは、築城上の用語で、呂字の迷路といい、敵の侵入をふせぐための造りかただったのである。

狂四郎は、麓へ降り立った時から、物蔭からはなたれる鋭い目をも、感じていた。

狂四郎は、三叉路の辻に立つと、ゆっくりと、四方を見わたした。

この静寂は、不気味である。

夕鴉の啼き声が、さらに、ひそまりかえった景色の中に、何かが起りそうな、不吉な予告をしてくれているようである。

狂四郎は、近いところにある家を、訪れることにした。

庭さきで、老婆が一人、蓆に坐って、カタリカタリと車をまわして、干瓢を剝いていた。一寸幅の白い厚い生帯が、ゆるやかに、老婆の膝の前で、うねり乍ら、たまっていた。

「卒爾乍ら、尋ねたい」

狂四郎は、声をかけた。
老婆は、車をまわす手を休めて、見知らぬ浪人者を仰いだ。
ただの百姓家の年寄なら、二刀をたばさんでいる者に前に立たれたならば、両手をつかえるところだが、この老婆は、平然として、首を立てている。
この栗栖村の住人は、すべて、武家の末裔の誇りを、なお承け継いでいるのであろう。
「桂という女性に会いたい。どこの家か、教えてもらえまいか？」
「かつら？　そのような女子は、この村には、住んで居りませぬぞえ」
老婆は、即座に、かぶりを振った。
「いや、ここが栗栖村に相違なければ、必ず、住んで居る筈だ」
「お気の毒じゃが、名前をききまちがえられたのであろう。桂という女子は、居りませぬ」
老婆は、きっぱりと、否定した。
そこへ、家の中から、足早に、一人の若者が、出て来た。
「おばば、何人だ？」
狂四郎は、若者を、眺めた。年歯は二十歳にも満たないであろうが、六尺ゆたかの逞しい体軀を持っていた。
鋭い眼光と、おのずから備えのある姿勢を、一瞥しただけで、武芸を身につけていることが明らかであった。
「桂という女子は、居らぬか、とききなさる」

老婆が、告げると、若者は、
「他村とまちがえて居られるのだろう」
と、云った。
狂四郎は、若者の探るような視線を受けとめて、
「三年前、江戸に住むさる旗本の後室が、ここ栗栖村の桂という女性から、手紙を受けとってい る。……それより、一年前、一人の肺をわずらった若い武士が、この村に入って、桂という女性 の家に、世話になり、相果てた筈だ。お主らが、その事実を知らぬ筈はあるまい」
「ご浪人！」
若者は、内にみなぎる緊張感を、顔に出すまいと、つとめ乍らも、太い一文字眉を、ピクピク と痙攣させて、
「お手前は、その手紙を、ごらんなされたのか？」
「見た。差出人は、三河・栗栖村、桂とたしかに記してあった」
「なんということだ！　桂などという名の女子は、この村に居らぬことは、誰にきかれても、同 じ返辞をいたす。おそらく、その労咳のさむらいが、病没した村は、どこか、他の里に相違ない。 世話をした桂という女子は、なにかの事情で、わざと、村の名を変えて、この栗栖にしたのだ。 そうだ。屹度そうなのだ。当村としては、甚だ迷惑な話だ」
若者は、烈しい語気で、云いはった。
狂四郎の口辺に、冷たい微笑が刷かれた。
「お主――。たかがそれだけの事実を、否定するのに、なぜ、そのようにムキになるのだ？」
「なにっ！」

若者は、かっと、顔面に、血の色をみなぎらせた。

老婆が、あわてて、

「竜馬！」

と、制した。

若者は、しかし、短気の性格とみえて、身をひるがえして、家の中へ駆け込むや、手槍をひっ掴(つか)んで、縁側へ、とび出して来た。

「お主っ！　早々に立ち去るか。それとも、この場で、勝負するか！」

「妙なことになったものだ」

狂四郎は、冷やかに、仁王立った若者へ、目を当てていたが、ひとまず、ひきさがることにして、老婆に、

「村長(むらおさ)の屋敷を、教えてもらえぬか？」

と、たのんだ。

「教える必要はないっ！」

若者は、叫んだ。

老婆は、ちょっとためらっていたが、東南の山を背負うている家を、指さした。他の家と、べつにかわらぬ構えであった。

狂四郎は、若者へは一瞥もくれずに、庭をはなれた。

若者は、烈しい語気で、

「村長の家をたずねても、無駄だっ！　その足で立ち去るのが、身の為だぞっ！」

と、あびせかけて来た。

狂四郎は、別のことを考えていた。

——泊ることになるが、そのねぐらを、どこにするかだ。

たしかに、これは、妙な話であった。

こちらは、桂という女性をたずね、四年前に、この村に、病躯をはこんで来てそのまま寝ついて逝った宇佐美正哉という青年を看取ってくれた礼のしるしに、ねうちのある櫛を贈ろうとしているだけのことなのだ。

にも拘らず、一人の娘は、桂という名をきいただけで、恐怖の表情になって、遁げ去ったし、一人の若者は、激昂して、手槍を持ち出すや、果し合いを挑んで来た。

こちらは歓迎されない人間なのである。ということは、桂という女性がこの村にいることをかくさなければならぬ事情と、宇佐美正哉がこの村で逝った事実を否定しなければならぬ仔細があることになる。

宇佐美正哉は、江戸城留守居・宇佐美修理の嫡男であった。

宇佐美修理は、旗本最高の禄高八千石の大番頭で、永らく二条城定番であった。

水野忠邦は、西丸老中になるにあたり、宇佐美修理の人柄を買い、これを、西丸留守居にしたのであった。江戸城留守居は、大奥の総務を司り、武庫の出納を監督し、将軍家が他出の場合、残ってその留守をあずかる役職であった。慣例で、万石以上城主の格として遇されていた。与力十騎、同心五十人が配属されていた。

尤も、忠邦が、宇佐美修理をその役につけるまでは、留守居というのは、かなりの閑職であった。忠邦はしかし、宇佐美修理を留守居にするのを機会に、大奥監察の任務を命じ、長局の奢侈

を、厳しく取締らせたのであった。宇佐美修理は、忠邦の引き立てに能く応えて、小うるさい長局の女中たちのくらしぶりを、緩急自在に、ひきしめたり、ゆるめたりしつつ、無駄な費用をきりつめさせ、年三万余両を浮かせたものであった。

宇佐美修理には、正哉という継嗣がいたが、一風変った性格で、詩に興り礼に立ち楽に成るていの、父母や目上の者が奨める修養の道に反撥する育ちかたをした。

修学も武芸の稽古も、やれと命じられると、絶対にやらず、そのくせ、いつの間にやら、街の学者の門を叩いて、父母が知らぬ間に、湯島聖堂に於ける四書五経の素読の試験に合格していたり、剣道場にかようとみせかけて、玉川へ馬をとばして行き、竹槍で魚を突く修業にはげんだり、ことごとく、おのれが為たい様に、くらしたのである。そして、元服した頃から、しばしば、外泊するようになり、決して、父にも母にも、行先を告げなかった。修理が、いかに厳しく叱責しても、肯かなかった。

流石の修理も、匙を投げざるを得なかった。そうなると、正哉の所業は、愈々武家生活の埒外へはしり、手のつけられぬものとなった。

その挙句、正哉は、江戸を出奔してしまったのである。七年前のことである。

当時、旗本は、屋敷を放棄しただけでも、科条になった。まして、江戸から出奔することは、切腹の罪であった。一泊の旅行さえも許可を必要とした時代だったのである。

宇佐美家では、このことをかたく秘し、病臥の届出をして、ひたすら、正哉の帰宅を願っていた。

不幸だったのは、それから一年も経たぬうちに、修理が、心臓の発作で、城中で倒れ、そのまま、急逝したことであった。正哉の出奔は、露見し、継嗣のない宇佐美家は、改易になった。

正哉の母は、屋敷を公儀に返上して、小梅の里に、ひき移った。そこの別邸がのこったのは、

武部仙十郎の尽力によるものであった。

三河・栗栖村に住む桂なる女性から、手紙が届いたのは、修理の三周忌が済まされた頃であった。

その手紙には、遺髪と爪が添えてあった。正哉のものであった。

飄然として、三河・栗栖村に姿をあらわした時、宇佐美正哉は、肺を病んで、幽鬼のごとく痩せさらばえていたという。桂というその女性の家へ倒れ込み、約一年の病臥ののち、他界した、と記してあった。

正哉の母は、すぐに、礼状をしたため、飛脚へ托した。しかし、何故か、礼状は、別の飛脚によって、宛先不明で、持ちかえられたのであった。

正哉の母は、それなりに済ますことが心苦しく、こんどは、若い御家人を使者にたのんで、謝礼金十両を持たせてやった。ところが、どうしたのか、その御家人は、ついに、江戸へ帰って来なかったのである。信頼できる男と見込んだのであったが、十両を着服して、行方をくらましたとしか、考えられなかった。昨年の春のことである。

このたび――。

眠狂四郎が、東海道を往くに当って、武部仙十郎は、ふと思いついて、正哉の母を呼び寄せ、狂四郎に使いをたのみ、江戸で名人と称される職人がつくった、百両のねうちのある鼈甲利休形の光輪櫛を、預けたのであった。

狂四郎にとっては、まことに、つまらない依頼だったのである。

ところが、やって来てみて、この使者の任務が、意外に面倒なものと知らされた次第である。

おのれが、歓迎されるべき旅人である筈にも拘らず、非常な警戒心をそそって、白眼視されて

みると、
——どうやら、こういう迎えられかたをする方が、おれの性分に合っているようだ。
と、思わざるを得なかった。
老婆に教えられた村長の家を、目前にして立った狂四郎は、
——この家に入るか入らぬか、それで、無想正宗を抜くか抜かぬかが、きまるらしい。
と、おのれに、呟いたことだった。

鳴海非情

巨大な擂鉢の底のような池鯉鮒・栗栖村が、濃い靄の中に、昏れなずんだ頃あい——。
眠狂四郎は、村の一隅に、ねぐらを見つけていた。
それは、家でいえば鬼門にあたる、村の北方の竹藪の蔭に建てられた、厚い茅葺きの、一宇、舎利殿のような建物であった。
当時、庶民たちが、最もおそれたのは、重い課税や暴風雨や盗賊よりも、疫病であった。ひとたび、疫病におそわれると、これから逃れるのは、神仏に祈るよりほかにすべのなかった時代であった。
神の祟りとか、仏陀の所業とか——きわめて、素朴な恐怖しか持たなかった庶民は、さまざまのまじないを行って、許しを乞うばかりであった。そして、すでに疫病に罹った者は、隔離して、肉親と雖も、そばで看護してはならぬならわしをつくって、伝染をふせいだ。

どこの村里にも、その隔離病舎が、設けられてあった。

眠狂四郎が、今夜の泊りを、そこに思いついたのは、旅馴れた者の智慧(ちえ)であったが、常人の神経では、為(な)せぬことであった。

舎利殿を模した立派な建物にしてあるのも、これは、疫病が、仏陀の所業と信じているためであろう。

しかし、屋内に入って、燭台(しょくだい)を見つけ、あたりをあかるくしてみた狂四郎は、不審をおぼえた。

これまで、諸国を放浪した狂四郎は、幾度も、疫病患者を隔離する小屋に、ねぐらをもとめているが、どの小屋にも、例外なく、さまざまのまじないの品が夥(おびただ)しく置かれてあり、いかにも、薄気味わるい雰囲気(ふんいき)をつくっていたものである。

ところが、この建物の中は、きれいに掃除された板敷きが、ひろびろとひろがっているだけで、怪しげな祈禱(きとう)道具など、何ひとつ置かれてはいなかった。神棚もなければ、仏壇も設けられてはいなかった。柱にも天井にも、一枚の神札も貼(は)られては居らず、願掛けを示すようなものは、全くないのであった。

——この村だけが、一度も、疫病に襲われなかった筈はあるまいが……。

板敷きの中央に、腰を下した狂四郎は、旅人にとっては、まことにお誂(あつら)え向きの宿舎を、かえって、怪訝(けげん)の眼眸で、見まわさざるを得なかった。

——どうせ、間もなく、おれの対手(あいて)をしてくれる者が、やって来るだろうから、その者に、疑問を解いてもらうことになろう。

自分に呟くと、狂四郎は、横たわって、手枕した。

閉じた目蓋の裏に、ひとつの若く美しい娘の貌が、泛(うか)べられた。

捜した桂という女性が、その娘であることは、ほぼ確信を持てた。

狂四郎は、老婆に教えられた村長の家には、入らなかったのである。そのかわり、その家の裏手から、一人の娘が出て来るのを見つけて、そのあとを尾けたのであった。

それは、まちがいなく、村の入口の峠で、出会った、鄙に稀なういういしいあの娘に相違なかった。村長の娘だったのである。

桂という女性に会いたい、とこちらが申し入れたのに対して、娘は、恐怖の色を双眸にあふらせて、返辞もせずに、逃げ去っている。

その娘が、忍び出るようにして、裏手から姿をあらわして、裏山へ登って行くのを尾けるのは、疑惑の濃霧の中に立たされていたこちらにとって、解明の道すじを照らされたようなものであった。

尾け乍ら、

——もしかすると、娘は、わざと、おれをどこかへいざなうために、家を出て来たのかも知れぬ。

と、思った。

こちらは、べつに、こっそりと、村長の家を訪れようとしたのではなかった。平然として、夕陽に痩身をさらし乍ら、その家へ近づいて行ったのである。娘の方は、家の中から、こちらの姿を、みとめた。そこで、いそいで、裏手から出て、尾けさせることにした。そうなのかも知れなかった。

裏山は、中腹までたがやされた段畠になっていた。そこを過ぎると、赤松と栂の林になる。松茸が豊富に採れそうに、思われる。

この小さな村には、四季の食物を欠かさぬために、山も野も家の庭も、無駄なく利用されている。このようにほぼ完全な自給自足の体制をつくりあげたのは、おそらく、幾代か前に秀れた智能をそなえた人物がいたおかげに相違あるまいが、また、そうして、外界と孤絶して生きなければならぬ何かの理由があったのではあるまいか。

娘が、立ちどまったのは、その赤松と栂の林の中であった。

娘の前には、一本の白木が立てられていた。

見知らぬ者が、そこを通っても、それが墓標とは、気がつくまい。白木には、戒名も俗名も記されては居らず、その前に供物もなかったからである。娘が、その前に蹲って、合掌したので、それと、判った。

やがて——。

娘は、胸を圧した感情に怺えきれなくなったか、両手で顔を掩うた。微かな嗚咽の声が、洩れた。

狂四郎は、いつの間にか、その背後に、五歩とはなれず、うっそりと佇んでいた。

ようやく、哭きやめた娘は、そっと立ち上った。その背中が、すでに、狂四郎の佇立を知っていることを示していた。

しばらく、娘は、そうして、動かなかった。狂四郎も、沈黙を守った。

娘が、踵をまわして、一礼しておいて、歩き出そうとした時、狂四郎の口がひらいた。

「これが、宇佐美正哉の墓なのか？」
「………」
「そなたが、桂という女性であることは、いま、判った」
「いえ……、わたくしは、しのと申します」
娘は、小声で、否定した。
「しのというそなたが、桂という仮名で、宇佐美家へ、遺髪と爪を送りとどけた。そうであろう」
「………」
「そなたは、わたしが、おのが家へやって来るのを見て、家の中へ入れぬために、ここへ、みちびいた、そうではないのか？」
「どうぞ……、お願いでございます。このまま、この村から、おひきあげ下さいますよう、おたのみ申しまする」
娘の表情も語気も、必死なものをこめていた。
「こちらは、宇佐美家の後室から、桂という女性に贈ってくれと、たのまれた品を、渡すだけの役目なのだ。そなたが、桂という女性と判れば、渡して、役目はすむ」
狂四郎は、懐中から、鼈甲利休形の光輪櫛を入れた朱塗りの小函を、とり出して、さし出した。
「受けとってもらおう」
「い、いえ！」
娘は、かぶりを振って、あとずさった。
「わたくしは、ちがいます！　桂というひとは、どこか、ほかに、居られましょう。わたくしは、しの、と申すめでございます」

「これは、櫛だ。それを受けとるだけのことを、どうして、そのように、おそれるのだ？」
「お願いでございます！」
しのは、土下座すると、両手をつかえて、
「どうぞ、そのお品を持って、江戸へおかえり下さいませ！……この里を、さわがせるのを、おやめ下さいませ、お願いでございます！」
と、歎願した。
その時、狂四郎の後方から、呶声がとんで来た。
「嬢様っ！　止めなされっ！　阿呆なまねは止めなされっ！」
振りかえった狂四郎は、この村に降りてはじめて訪れた家にいた若者の姿を、視た。老婆から、竜馬と呼ばれた若者である。
手槍を摑んでいた。
「勝負っ！」
かっと、狂四郎を、睨みつけて、
と、叫びざま、ぴたっと、槍を構えた。
できる腕前である。
「竜馬！　いけません！」
しのが、おののき乍ら、制した。
「嬢様っ！　こやつを、村から出て行かせることは、できぬのじゃ！……おのれは、公儀隠密であろう。そうに、ちがいないのだ！　生かして、出ては行かせぬぞ！」
竜馬は、じりじりと、間合を詰めて来た。

「竜馬！　いけません！　殺生は、かたく禁じられているのを、お忘れか！」

しのは、身もだえして叱った。

しかし、若者は、もう、しのの声など耳に入らず、闘志を全身にみなぎらせて、

「抜けっ！」

と、喚いた。

狂四郎は、抜刀する代りに、櫛の入った小函を、しのへ拋った。しのは、反射的に、それを受けとってしまった。

次の瞬間――。

狂四郎は、すっと一歩、出た。

「やあっ！」

竜馬は、凄じい懸声もろとも、突きかけて来た。

と同時に、狂四郎は、体を右へひらきつつ、地上を滑った。

竜馬が宙を突いた体勢をたてなおすいとまも与えず、狂四郎は、そのかたわらを奔り抜けざまに、手刀で、頸根を搏った。

竜馬は、笛のような奇妙な悲鳴を発して、はねあがると、地面へ、ぶっ倒れた。

狂四郎は、立ち竦むしのへ、

「わたしは、公儀隠密ではない。ただの素浪人だ。これは、はっきりと、ことわっておく。……月があれば、山を越えて立去るが、あいにく、しんの暗闇だ。今夜は、この村に泊めてもらうことにする」

そう云いすてておいて、歩き出した。

「あ、あの……、これを――」
しのは、自分の手に、小函があることに気がついて、あわてて、返そうとしかけた。
狂四郎は、視線をまわして、
「そなたに看とられて逝った者の母親が、感謝をこめて贈る品だ。素直に受けとることだ」
と、云った。はじめて、この娘にあびせる鋭い語気であった。
狂四郎は、山を降りると、その足で、疫病患者の隔離病舎を、ねぐらにもとめたのであった。
それが、村のどのあたりに建っているか、見当をつけるのは、造作もなかった。

手枕で、横たわった狂四郎は、忍び寄って来る気配を、待ち乍ら、自分が使者になる前に、宇佐美家の後室にたのまれて、礼金十両を持参して、この村を訪れた御家人が、ついに、江戸へ帰って来なかったことを、考えていた。
――その御家人は、十両を着服して、行方をくらましたのでは、なかったろう。この村へ入って来て、公儀隠密と思いちがいされて、殺された。たぶん、そうであろう。
――公儀隠密をおそれなければならぬ秘密の事情が、この村には、あるのだ。
一瞬、狂四郎は、いままであたりを掩うていた濃霧が、あとかたもなく散って、明るい世界が眼前にひらけるように、直感を得た。
――そうか！　判ったぞ！
身を起して、鋭い視線を、何ひとつ置かれていない、柱も床も拭ききよめられた室内へまわした。

——ここには、疫病払いのまじないの、薄気味わるい祈禱の痕跡が、ひとつもないのだ。このことだけでも、この孤村が、どういう里であるか、想像がつくではないか。

にやりとした——その折であった。

人の気配が、おもてに近づいた。

「ご浪人——」

ひくいが、力のこもった声が、かかった。

「手前は、この村の長でござる。折入って、お話申したい儀があって、罷り出ましたが、よろしゅうござるか？」

「お待ちしていた」

狂四郎は、こたえた。

入って来たのは、総髪の、木綿の筒袖に、軽衫をはいた六十年配の人物であった。僻邑の土くさい庄屋名主とは、おのずから異る風格の持主であった。

重箱と瓢を携げていた。

北畠総右衛門、と名乗ってから、

「貴方様が、いかなる御仁であられるか、手前には、詮議の資格もござらぬゆえ、おたずねいたしますまい。ただ、このまま、手前の娘に、高価な品をお渡しなされただけで、立去られる御仁とは、到底おぼえ申さず……、いまは、覚悟をきめて、罷り出た次第でござる。……もはや、かくしはつかまつらぬ。宇佐美正哉殿は、当村にて、相果てられました」

「お主が、討ちとったのではないのか？」

狂四郎は、ずばりと云った。

北畠総右衛門は、ひるまずに、狂四郎の冷やかな眼眸を受けとめて、

「宇佐美正哉殿は、性情が尋常ではなく、時おり、瘧の発作のように、狂気じみた振舞いをなされたのでござる。手前の娘しのが、お世話を申上げて居りましたが、ある時、突然、もの狂おしい状態になられて、娘を手ごめにしようとなされたのでござる。それで、やむなく……、手前が、とりおさえようとして、あやまって、殺めてしまったのでござる」

「…………」

「旗本ご大身のご嫡男を殺めた罪は、浅からず、すぐに出府して、罰を受けようと覚悟いたしましたが、娘をはじめ、村の者たちが、手前を失うことをなげき悲しんで、けんめいにとどめましたため、つい、手前も、凡夫のあさましさで、心臆して、今日まで、うちすごしましたが……」

「桂という女性の名で、遺髪と爪を、宇佐美家へ送られたのは、お主であった、と云われるのだな？」

「左様でござる」

「で――、どうする、と云われる？」

「お願いの儀がござる。手前は、おのが犯した罪を、おのが手で、裁く決意をいたしました。ついては、お手前様に、介錯をお願いできますまいか」

「承知いたした」

狂四郎は、ちょっと、考えていたが、

と、頷いてみせた。

「忝けのう存じます。……では、お別れの一献をお汲み下さいましょうか？」

「…………」

狂四郎は、総右衛門が、重箱から盃を二つとり出すのを、黙って、眺めた。
総右衛門は、さきに、盃を把りあげると、
「毒見つかまつる」
と、さし出した。
狂四郎は、瓢の酒を、それに注いでやった。
総右衛門は、しずかに、盃を口にはこんだ。
盃が、唇にふれた——その刹那、狂四郎の腰の脇差が、灯火に閃いた。
盃は、ま二つになって、宙に酒を散らした。
「なにをなさる！」
総右衛門は、狂四郎を、睨み据えた。
狂四郎は、微笑した。
「お主が、自らを裁く覚悟をしたことは、まことであろう。このわたしを、冥土への道連れにしてな」
「なにを申されるか！」
「もはや、かくしてもはじまるまい。自らを裁く覚悟をしたことは、まことだが、遺憾なことに、おのが手でおのが生命を断つことは、お主らの信仰する天主から、許されて居らぬ」
狂四郎に云い当てられて、総右衛門の顔の色が一変した。
「しかし、他人の手で殺されるならば、これは殉教として、許される。そこで、お主は、わたしに、毒酒を注がせて、飲もうとした。考えたものだ。……ここが、隠れ切支丹村であることを、わたしが、気がついたのは、お主がやって来る直前だ。疫病の隔離舎とみせかけたこの建物が、

ひそかに集合する教会なのであろう。どこかの板壁の中に、きりすと像が、かくされて居ろう。栗栖とは、すなわち、十字架のことだ」

「………」

総右衛門は、烈しく喘いだ。

「宇佐美正哉が、乱心して、娘のしのを手ごめにしようとしたのは、嘘であろう。むしろ、しのの方が、正哉を慕うたのではないのか。……正哉は、たしかに、常軌を逸する行為の多かった男であった、ときく。それだけに、直感力は鋭かった。この村へ入って、すぐ、ここが隠れ切支丹村であった、と看破した。しかし、そ知らぬふりをして、住みつき、切支丹信仰の何たるかを、知ろうとした。そのために、お主ら村人に、公儀隠密ではないか、と疑惑を抱かれた。……正哉が、どのような死にかたをしたか、きいてもはじまらぬ。死んだ者は、しかたがない。……わたしは、お主の娘に云っておいたが、公儀隠密ではない。櫛を渡しに来ただけの者だ。暗闇の中を山を越えるのは、億劫なので、ここで一泊させてもらっているだけのことだ。ここが隠れ切支丹村だと、知っても、これを、鬼の首を取ったように、江戸への土産にはせぬ。安心してもらってよい。……ひきあげてもらおう。こちらは、疑問が解ければ、あとは、睡ることだけしか考えて居らぬ」

次の日の夕刻には、狂四郎は、次の宿——鳴海に入っていた。

竜馬という若者はじめ、栗栖村の住人が、追って襲って来なかったのは、村長北畠総右衛門のきびしい命令によるものであったろう。

こちらを信じたとは、考えられなかった。総右衛門は、そのむかし、幾万の信徒が、幕府の迫害に遭うて、よろこんで天国へ昇ったのにならって、栗栖村全員をして、殉教の覚悟をさせるべく、ほぞをかためたものであろう。

鳴海の旅籠にあがった狂四郎は、栗栖村で、無想正宗を血らせずに済んだことを、池鯉鮒の狭奈岐大明神社の神官春日部寛道へ、報せておくべく、筆を把った。

書きおわった時、廊下から、客の来訪を告げる女中の声がした。

入って来たのは、紙のように血の気のない顔を俯向けたしのであった。

「……？」

狂四郎は、黙って、しのを見戍った。

あとを追って来た目的は、判ったが、意地悪く、その口から云わせることにして、待った。

しのは、云った。

「わたくしを、お連れ下さいませ」

「………」

「お願い申します！」

しのは、平伏した。

「父親の命令か？」

「い、いえ……、わたくしだけの思案でございます」

「ことわる、と申したら、どうする？」

しのは、ちょっとためらっていたが、

「では……、せめて、今宵だけでも、ここに――おそばに、やすませて下さいませ」

と、云った。
「操をすてて、栗栖村の秘密を守ろう、というけなげな覚悟か。見上げたものだ。とほめたいところだが、その疑い深さが、気に食わぬ！」
「………」
「おのれの操よりも、信仰の方に重きを置く料簡も気に食わぬ。弄んで、そこいらの宿場女郎にたたき売るが、それでもよいか？　宿場女郎にされても、そなたは、なお信仰をすてぬ自信があるのか？」
「………」
「顔を擡げて、おれの貌を、能く視るがいい。……視るのだ！」
狂四郎は、声音を荒々しいものにして、命じた。
しのは、怯えた眸子を、狂四郎の顔へ当てた。
「この貌が、どのように、陰惨な因果によって、この世に生れたか、そなたに、きかせてやる。それをきいたあとで、なお、おれを疑いつづけるのなら、操をすてるがいい。こちらは、容赦なく、弄んで、明日は、宿場女郎に、売ってやろう」

宮の囚人

尾張中納言治下の名古屋城下町にある牢屋敷は、江戸小伝馬町にあるそれと、ほぼ構造が同じであった。

獄舎は、六種類に分れていた。五十石から三百石までの藩士、及び身分のある僧侶・神官を収容する揚座敷、五十石以下の藩士、浪人者、普通の僧、神主、山伏、医師、郷士などを容れる揚屋、商人職人を入れる大牢、無宿者を入れる二間牢、それから、百姓牢。女牢だけは設けられず、揚屋のうち、空いている棟を当てていた。

江戸小伝馬町の牢屋敷とちがっていることは、揚屋はもとより、大牢も、常にがらがらであったことである。

無宿者を入れる二間牢だけに、常に、三四十人がごろごろしていた。二間牢といっても、三間に四間――二十四畳の広さなので、一畳に五人平均の小伝馬町よりは、比較にならぬくらい楽であった。

晩秋のこぼれ陽の落ちた外囲いの外鞘と牢獄の格子の内鞘とのあいだの土間を、牢屋同心が二人、のんびりした会話を交し乍ら、歩いて来た。

二間牢の留め口の前で、

「上州無宿・多次郎、出ませい」

と、呼んだ。

永いあいだの入牢者が、こういうあらたまった呼びかたをされる時は、ここを出されて、二度と還って来ないことを意味した。

佐渡の金山へ送られる場合が、殆どであった。

多次郎は、永牢（無期懲役）の囚人で、すでに、三年ここへ入れられていた。名主の次の添役（病人その他の労り役）になっていた。

「多次！」

牢名主が、挨拶をすませて起ち上った多次郎を、同情をこめて、見戍った。
「からだだけは、大切にしな」
「へい」
多次郎は、皆の同情の視線が集められると、無宿者たちが一人のこらず、人の好い人間ばかりであったのを、感じた。
人一人、やっと出入できる留め口をくぐって出た多次郎は、前後を役人にはさまれて、歩き出し乍ら、
——佐渡の金山へ送られるのは、まっぴらだ！
と、自分に呟いた。
佐渡の金山が、生地獄であることは、噂できいていた。しかし、それがおそろしいのではなかった。多次郎は、放免になったら、やらなければならぬことがあった。男として、どうしても、やらなければならぬことであった。
もう半年も辛抱していれば、放免になる、と思っていた。これは、牢内でしぜんに得たカンであり、名主も、そう云っていたのである。
不意に、今日、呼び出されたのは、絶対に、放免ではない。
牢屋敷のしきたりとして、夜明けがた、囚人の中の五番役（食事を入れる盛相係）が、囚人の頭数をかぞえて、格子から、首を出して、大声で報告する。これを、朝声という。牢役人は、これをきいてから、昨夜のうちに決ったその日の死刑の執行と放免の有無を、教える。
今朝は、
「お沙汰はない」

と告げられていたのである。

多次郎は、白洲に据えられた。

吟味方与力が、畳敷きの上段へ出て来て、座に就くと、まず、

「多次郎、その方には、気の毒だが、観念してもらわねばならぬ」

と、云った。

「へい」

「本日、夕刻、大坂町奉行所より、二十人の囚人が、護送されて参る。当奉行所に於ては、これを受け取って、佐渡へ送るよう、公儀よりの御通達を受けた。就いては、囚人世話役として、当牢内から、一人えらび出し、佐渡へおもむかせることに相成った。その役を、その方に命ずる」

「へい」

「上州無宿・多次郎、その方を、本日、赦免し、牢屋下男といたす」

与力は、おごそかな口調で、命じた。

囚人からいきなり牢屋下男にされるのは、夢のような沙汰であったが、実は、大坂から送られて来た囚人の一団に付き添うて、佐渡へおもむけば、そのまま、その一団の頭にされて、再び、本土へは還って来られないのであった。

したがって、牢屋下男のうちで、その役を引き受ける者はいなかった。奉行所では、やむなく、囚人の中から、えらび出して、臨時に、牢屋下男にする措置を講じたのである。

多次郎は、最も真面目で、勤勉な囚人であったし、また、この尾張へ流れ込むまでは、上州の一匹やくざとして名を売り、十人以上も博徒を斬った兇状持ちだったのである。

その人柄と度胸が、かえって、いまは、わざわいとなった、といえる。

それから、小半刻過ぎて、牢屋下男の身装（みなり）になった多次郎は、空いている揚屋のだだ広い畳敷きに、坐っていた。

留め口は、錠前が、はずされてあって、多次郎は、その気になれば、自由に出入ができるのであった。

――どうする？

多次郎は、自分に問うていた。

――このまま、おめえは、あきらめて、佐渡へ行くのか？　やらなければならねえことを、すっぱりとあきらめてしまうのか？

多次郎は、迷った。

牢屋下男を支配する小頭の牢屋同心が、遠くで呼んだ。

「多次郎――」

「へい」

多次郎が、返辞をすると、初老の同心は、せかせかした足どりで、格子の前へやって来て、

「海が荒れてな、桑名からの船が、止った。佐屋廻りになるから、大坂の囚人どもは、明日も、おそく、こっちへ到着することになろう。左様、心得い」

「へい」

同心が、去った時、多次郎の肚（はら）がきまっていた。

牢屋敷を脱出することであった。

——明後日の朝までに、戻って来りゃ、いいのだ！

深更のくまなく晴れた空に、満月が、冴えていた。

牢屋敷から抜け出した多次郎は、熱田神宮の土用殿わきの杜の中を、抜けて行こうとしていた。

その左手には、長脇差が、摑みしめられていた。三年前、多次郎自身の手で奉納した刀であった。

熱田神宮の宝殿は、井楼組といい、あまたの名剣がその中の段棚に奉納されてあるが、もとより、やくざの、十数人もの生命を奪った刀など、たとえ名のある品でも、納められはしない。

ただ、草薙剣を神体とする土用殿を擁しているために、妖刀邪剣のたぐいを奉納する者が多いので、土用殿のうしろに、小さな祠が建てられ、それらは、ここへ納められていたのである。

呪いや祟りの因果を持った刀ばかりが納められている祠に、近づく人もいないので、多次郎は、やすやすと忍び込んで、自分が奉納した長脇差を、とりかえすことができたのであった。

その長脇差を、もう一度、閃らせる——その目的があって、多次郎は、牢屋敷を脱出して来たのであった。

熱田神宮の敷地は宏大で、木立の年老りた杜は深い。

多次郎は、正殿のうしろの雲見山を抜けて、浜の方へ奔るつもりで、木立の中を急いでいたが、あまりの深さに、ふと、方角を失ったのに、気がついた。

——いけねえ！

樹間をすかし視たが、雪が降りつもったように白く浮きあがった玉砂利の参詣道は、遠くかくれて、判らなくなっている。

——ままよ。

多次郎は、見当つかぬままに、やや下り勾配をつき進んで行った。
ものの一町も辿ると、急に、視界がひらけた。
とたんに、多次郎の足が、立ち竦んだ。
土肌が、しらじらと月光を吸い込む広い斜面に、四個の人影が、白刃を構えて、微動だにせず、そこに在ったのである。
一人に対して、三人が包囲陣をつくっていた。
三剣に狙われているのは、着流しの浪人者であった。地摺り下段にとっている。
包囲者たちは、いずれも、鉢巻に襷がけ、袴のももだちをとった試合装であった。三者一体となった攻撃を加えるべく、微塵のちがいもない青眼の構えであった。
剣術を知らぬ多次郎の目にも、これは、尋常一様の決闘ではない、と映った。
どれほどの対峙がつづいているのか――双方、睨みあったまま、不動の構えをつづけているのは、対手に兎の毛で突いたほどの隙もない証拠であった。
多次郎は、これまで度胸剣法で、いくたびとなく修羅場を駆けまわって、斬ったり斬られたりしているだけに、生れてはじめて目撃するさむらいの真剣試合に、われを忘れて、固唾をのんだ。
それなり――木立の中の多次郎自身も、石になったように動かずに、四半刻が過ぎた。多次郎にとって、胸の鼓動のひと打ちひと打ちを、はっきりと、かぞえつづけるほど、全神経を緊張させたのは、はじめてのことであった。憎い敵を斬り殺すべく、その家の庭へ忍び込んだ時も、これほどの緊張はしなかった。
多次郎は、息苦しくなり、溜めていた熱い息を吐いた。
と――。

包囲の三剣が、全く同時に、同じ動きを示した。
ゆっくりと上段の構えに移されたのである。
浪人者の方は、その動きに対して、構えを変えようとはしなかった。
三人の間隔が、徐々にひらいた。
――やるぞ！
多次郎は、息が詰まり、口腔内が、カラカラに干いた。
勝負は、一瞬にして、決した。
三人が、どう撃ちかかり、それを、浪人者が、どう斬りかえしたか――多次郎は、おのが眸子に、しかとみとめることはできなかった。
懸声も迸らず、刃と刃が嚙む音も起らなかった。月光を弾いて、白刃が閃いた――とみえた刹那には、もう、一人がよろめき、一人がのけぞり、そして、一人は、がくっと膝を折っていた。
地面へ仆れた三人は、ただの一太刀で生命を断たれて、もはや、ビクとも動かなかった。
「やったあっ！」
多次郎は、思わず、声をあげた。
浪人者は、その叫びにも、視線をくれようとせず、懐紙で刀身を拭うと、腰に納めて、歩き出した。
「旦那！」
多次郎は、夢中で、追いかけた。

ふところ手になった浪人者は、多次郎の牢屋下男姿を、みとめて、
「これは、試合だ。奉行所の検視は無用だ」
と、云った。
「いえ、あっしは、こんな装をして居りますが、牢屋敷から、遁(に)げ出して来た囚人なんで……」
「………？」
「旦那——。どうやって、あの三人のさむらいを、いっぺんに、斬りなすったのか、教えて頂くわけには参りますまいか？」
「…………」
浪人者は、黙って、歩き出した。
「おねげえ申します。教えておくんなさい。……実は、あっしも、これから、桑名へ渡って、ある家へ、斬り込むつもりで居りますので——」
浪人者は、しかし、なお、沈黙を守って、木立の中を、ゆっくりと歩きつづけた。
杜を抜けると、門が眼前に現れた。清雪門という。いま抜けたのは、中の杜であった。
清雪門の前に、小さな溜水(たまりみず)があった。泪川(なみだがわ)という。
それを越えた時、浪人者は、うしろを跟(つ)いて来る多次郎を、振りかえった。
「お前は、舟が漕(こ)げるか？」
「へい。餓鬼の頃、房州の海辺で、しばらく、くらして居りましたから……。どうなさるんで？」
「お前も、桑名へ渡りたいのなら、舟を都合して、漕いでくれぬか。風はおさまったから、渡れないことはなかろう」
宮・桑名の七里の渡しは、むかしは何時(いつ)でも、客があれば、舟が出されたが、由比正雪(ゆいしょうせつ)の乱よ

りこのかた、昼七つ（午後四時）以後は、渡しを禁じられていて、船頭はいくら舟賃をはずまれても、舟を出さなかった。

「まだ波は高いだろうと存じますし、餓鬼の頃におぼえただけの腕前では、心細うござんすが、やれと仰言るなら、やりますが……」

「やってもらおう。おれは、敵が多い男だ。どうやら、いまの勝負だけで、敵方は、ひきさがらぬらしい。この宮の渡し場にも、佐屋の渡し場にも、おれを待ち伏せている予感がする。襲って来るのは、海上であろうが、こちらは一向にかまわぬが、他の乗客が、迷惑する。……破牢の囚徒ならば、相棒には、恰度よい。舟がひっくりかえって、二人とも、海の藻屑になっても、お互い、世間から惜しまれる人間ではない、ということだ」

高浪であったが、追風で、多次郎の腕前でも、舟は、さしたる危険もなく、それを乗り切って進んだ。

眠狂四郎は、舳先に腰を下して、波間に砕け散る月光の破片を、美しいものに眺めていたし、多次郎の方も、狂四郎に、話しかける余裕があった。

「旦那――。旦那は、失礼でござんすが、女に惚れたことが、おありなさいますか？」

「死なれた女房に、死なれたあとで、惚れていたことが、判った」

狂四郎は、こたえた。

美保代が、逝って、すでに五年が過ぎていた。しかし、その俤は、なお、脳裡から薄れてはいない。いつでも、思い泛べようとすれば、その日その時の美保代の挙措振舞い、言葉も表情も、鮮やかに、記憶によみがえらせることができるのであった。

「あっしも、惚れた女には死なれました。惚れてくれた女も一人、桑名にまだ、いる筈でござんすが、牢内で、いつも、思い出すのは、死んだ女の方でございました。……妙なものでござんすねえ。死んだ女には、あっしの方から、惚れ抜きましたが、指一本触れなかった。惚れてくれた女には、こっちは惚れもしねえくせにさっさと手を出して、さんざひっくりかえしたり、四ン匐いにさせたりしておいて、思い出すのは、指一本触れなかった女の方でござんす」

「………」

「惚れてくれた女の方が、器量もいいし、若かったのに、忘れられねえのは、そっちじゃねえ、というのは、どういうんでござんしょうかねえ」

「どっちの女のために、お前は、牢に入れられたのだ？」

「惚れた女のためでさ」

きの、という女は、桑名城下で、屈指の質屋の後家であった。

多次郎が、兇状持ちであることを匿して、その店の番頭になったのは、六年前のことである。

きのは、それより一年ばかり前に、良人を喪っていた。良人が、桑名の船手の御用を一手にとりしきる朝日屋藤兵衛から、百五十年の伝統を誇る自家の将棋の歩を彫った看板を担保にして二百両の借金をしていたことを、きのは、すこしも知らなかった。それは、博奕の負けによるものであった。

きのが、朝日屋藤兵衛から、その借用証文をつきつけられたのは、多次郎を番頭にしてから、ほどなくであった。

その借用証文には、一年の期限が過ぎれば、看板をおろすか、さもなければ月一割の複利計算の高利を支払わねばならぬ苛酷な条件がつけられていた。

きのが、もしその時、多次郎に打明けて相談していたら、あるいは、ほかに解決方法があったかも知れない。三十歳の、あまり気丈夫ではない後家は、一人で苦しんで、他の同業者から、自宅を担保にして借金し、元金の半分を支払ったが、しかし、月一割の複利計算の魔術にかかっては、たちまちのうちに、元金がまた二百両にふくれかえるのを、骨身にしみて思い知らされた。店のかせぎだけでは、到底、高利を支払えるものではなかった。のみならず、自宅は、担保にした同業者から、狙われ出していた。

ついに——元金が倍の四百両になり、自宅もまた同業者に明け渡さなければならなくなって、きのは、ある夜、毒薬を仰いで、果てたのであった。

きのの書置きによって、すべてを知った多次郎は、二度と抜くまいと封印していた長脇差をひっ摑んで、朝日屋へ乗り込んで行った。その日、朝日屋には、桑名藩の船手頭が、訪れていた。船手頭は、家中でも、かなり重きをなす世襲職で、配下に同心二十人が居り、その組に擁している水主の数は三百人もいた。

多次郎は、朝日屋藤兵衛に、かなりの重傷を負わせたが、同時に、船手頭にも、微傷を負わせてしまった。

そのまま、逃亡して、名古屋城下に数日ひそんだ多次郎は、思いついて熱田神宮の土用殿裏手の祠に、その長脇差を奉納しておいて、江戸へ高飛びしようとしたところを、捕えられたのであった。

桑名城下で罪を犯したのであるから、当然、松平家の町奉行所へひき渡されなければならなかったが、尾張藩町奉行所の吟味方与力が、桑名方へひき渡せば、死罪はまぬがれまい、とあわれんで、自藩の牢屋敷へ入れてくれたのであった。

仁慈を持ったその吟味方与力は、去年逝っていた。

「旦那――。桑名のお城が、見えて来ました」

多次郎が、指さした。

東の空が、明けようとして、水平線から湧きあがった雲の動きが、巨きな生きもののうごめきのように、眺められた。

「お前は、桑名へ著くと、敵の家へ、斬り込むのか？」

「いえ、その前に、あっしに惚れてくれていた女に、ちょっと、会ってやりてえ、と思って居ります」

「…………」

「いけませんかね？」

「お前は、幾年牢に入っていたのだ？」

「三年でござんす」

「永牢で入れられていたのだな」

「へい」

「では、女は、もう、自分の許へ、お前が、帰って来ぬ、とあきらめたであろう」

「へえ、それア、まあ、そうでござんしょうね」

狂四郎は、女が小唄と踊の師匠、ときくと、ちょっと、沈黙を置いてから、

「まだ、お前のことを、忘れては居るまいが……、あるいは、もう男をつくって居るかも知れぬ」

と、云った。

「むごい易をおたてになります」
「物事は、なるべく、悪い方に、考えをはこんだ方がよかろう。おれの今日までの経験が、そう教える」
「やっぱり、会いに行っては、まずうござんしょうか？」
「心がのこるのが煩しければ、会いに行くがいい」
「へい」
舟は、渡し場から、かなりはなれた場所へ、そっと、横着けされた。
高い石垣の防波堤の下であった。
狂四郎と多次郎は、舟をすてて、身軽く、堤を越えた。
「お前に人を斬る業を教えるのを忘れていた」
狂四郎は、人家のならぶ道へ入り乍ら、云った。
「いえ、もう、よろしいんでさ。あんな迅業（はやわざ）は、口で教えて頂いたって、できるものじゃございません。……あっしの流儀で、やります」
多次郎は、男らしく、こたえてみせたことだった。

桑名の敵

朝陽がさしそめた頃あい、すでに、桑名の港は、浜辺も街中も、大層な賑（にぎわ）いである。
渡し場には、葵（あおい）の紋を染めた幕打ちの尾州藩船が、四半の幟（のぼり）をたてて、篙工（こうこう）六人漕（こ）ぎで、ゆっ

くりと入って来ていた。横満蔵あたりの洲には、近国からの米船が到着していて、これにむらがる売り舟が、かまびすしい。

「酒飲まっせんかいな」

「名物時雨蛤を、土産にどうきゃあも」

「団子よいかな」

「奈良漬で、飯食わせんかいな」

一人四十五文の乗合船も、宮へ向って、出て行こうとしている。

堤では、修理人夫が列をなして、大槌を振るのに合せて、わいざつな歌声をはりあげている。

渡し船から東街道に入る往還には、時雨蛤をはじめ、海老、鯛、鮑などを、ずらりと並べた市がたっている。

伊勢の海は、大変魚に恵まれている。

「蓬莱を聞かばや伊勢の初たより」

「めでたいに伊勢の浜荻折り敷きて」

尤も、それらの魚は、いずれも、志摩の海で獲れる。しかし、有田の陶器を伊万里焼きと唱え、波崎の縮織を銚子縮みと称すように、いつの間にか、伊勢の海の名が通ることになっていた。

但し——。

松かさを焚いて焼く時雨蛤は、桑名独特の名物であった。これは、秋から冬にかけての名物で、初時雨の頃が、特に美味といわれている。

表通りの賑いにひきかえて、横丁裏道は、ひっそりとして、まだ、ねむっていた。

その一廓は、色町で、賑いは午後から夜更けなのであった。

旅人を、旅籠にかえさぬ店がならんでいたし、居酒屋の数も多かった。

どこで身装をかえたか、渡世人ていになって、それを、坊主合羽で包み、三度笠で顔をかくした多次郎が、忍ぶような足どりで、入って行ったのは、その横丁であった。

三年前と同じたたずまいが、多次郎の胸をはずませた。

「うた・おどりどころ」

と記した小さな木札がさがっているしもたやの前に来て、よく拭き込まれた格子戸を、横目で見乍ら、いったん通りすぎた多次郎は、またひきかえして来たが、やはり、通りすぎた。

常磐津歌女という女とできて、この家へかよったのは、一年あまりであった。

質屋の番頭であった多次郎が、店を閉めて、こっそりと抜け出て、この家へやって来た頃、恰度、歌女の方も、稽古を終えていた。

多次郎は、間夫らしく、おもての格子戸を開けず、裏口へまわったものであった。

それを思い出して、多次郎は、この訪れも、裏口から入ることにした。

裏口へまわるには、三軒ばかりへだてた、茶屋と茶屋のあいだの狭い細道を入る。

――おれが、いきなり、すっと入って行ったら、歌女のやつ、どんな顔をしやがるだろう？

それを想像すると、多次郎は、一歩毎に、期待がふくれあがって来た。

多次郎が、惚れたのは、質屋の後家のきのであり、歌女の方は、いわば、据膳を食っただけのことであった。

しかし、きのが亡くなったいま、多次郎にとって、この広い世間に、会いに行ける女は、歌女ただ一人であった。

三年間の牢獄ぐらしは、いつの間にか、歌女を、惚れ合った女のように、無性になつかしいも

のに、心の中で、してしまっていた、といえる。
――ひとつ、びっくり仰天させてやるか。
多次郎は、自分に呟いて、にやりとした。
永牢の自分が、よもや、いま頃、娑婆へ現れようなどとは、歌女は、夢にも考えてはいない筈であった。
多次郎は、跫音をしのばせた。
裏口の戸も、音をたてないように、そっと開けた。
台所の土間に立った時、多次郎は、板敷きのむこうの障子をへだてて、茶の間から、男と女の話声を耳にした。
女の声は、歌女のものであった。鼻風邪をひいたような、すこししゃがれぎみの独特の声音なのであった。
男の声も、どこかできおぼえがあったが、すぐには思い出せそうもなかった。若い男のようであった。

「女心ってえやつは、おれには、さっぱり判らねえ」
男が、投げ出すように、云った。
「ごめんなさい。あたしも、自分で自分の気持が、判らなくなっているんです」
歌女が、こたえた。
「おめえは、おれとできた時、多次郎から、気持は、すっぱりと、はなれている、と云った筈だ

ぜ」

「ええ、云いました」

「ありゃ、嘘だったのか？」

「いいえ、あの時、あたしは、自分に、ちゃんと、そう云いきかせていました。そうでなけりゃ、どうして、お前さんと他人でなくなるものですか。……あたしは、多次さんが、朝日屋へなぐり込みをかけたのを、渡世人であった頃の任侠心が鎌首をもち擡げて、やむにやまれぬ気持になったからなのだ、と思い込んでいました。多次さんが、宮でつかまってしばらくしてから、あたしは、名古屋の牢屋敷へ、牢屋下男に袖の下を使って、お金を多次さんに渡してもらおう、と思いたって、出かけたんです。牢屋敷の中だって、地獄の沙汰も金次第で、持っていれば、ずいぶん楽になる、ときいていたものだから、なんとか、さし入れてあげよう、としたんです。その時、牢屋下男が、あたしを嗤ったのです。惚れた女のために罪を犯して、牢にぶち込まれた男に、達引くとは、お前は、よほど律義者だ、冥加があろう、とね。その言葉をきいたとたん、あたしは、はっと、目がさめたような気がしたんです。――そうだ、多次さんは、あの質屋のおかみさんに惚れていたんだ。そうと判ってみると、あたしは、自分がどんなにめくらつんぼの莫迦な立場に置かれていたのか……もう、くやしくて、いっぺんに、多次さんから気持がとび退いてしまった……」

「…………」

「嘘じゃないんです。当座、あたしは、自棄酒をあおっていたけど、その時期がすぎると、きれいさっぱりと、多次さんを忘れました」

「しかし、おめえは、実は、内心、さびしかった」

「…………」

「いちど、男に惚れた女は、その男と別れた時には、二度と男なんざまっぴらだ、と思うが、それきり男を断った女のいたためしはねえ、というぜ。一度、惚れると、また次に男をつくるのが、女というものだ、ときいたことがある」

「…………」

「おめえは、さびしかったんだ。……そこへ、このおれが――上州から、多次郎に親分を殺されたおれが、敵討をしに、さがしさがして、桑名へやって来た。そして、おめえが、多次郎の情婦だということをつきとめて、たずねて来て、多次郎の永牢をきかされて、がっかりした。立場は反対だが、多次郎を失って、がっかりした男と女が、むすびついたのも、これも、因果というやつだろうが……、やっぱり、おめえは、多次郎が、忘れられねえのだ、ということが、おれには、だんだん、はっきりして来た」

そこまで、きいた時、多次郎の脳裡に、その声を持っている者の貌が、泛んで来た。

――そうか！　こいつは、松井田の弥太だ！

五年ばかり前に、多次郎は、松井田宿一円を縄張りにする博徒の親分を、ごく些細な事のもつれから、斬り殺していた。その代貸に、弥太という若い男がいた。竹を割ったような、さっぱりした気っぷの持主で、多次郎とは、そのことがあるまで、兄弟分同様のつきあいをしていたのである。

「ごめんなさい」

歌女の声音が、泪ぐんだひびきを、含んだ。

「多次さんが、牢屋に入れられていなければ、あたしの気持は、こんなにも、滅入っては来ない、

と思います。……あの人が、どこか遠くへ行ってしまって、また元の渡世人に還っていてくれたら――と思うんです」

歌女は、江戸の深川に生れて、育った女であった。義理だて、ということが、どんなに大切か、ということを、骨の髄までしみ込まされていた。

「歌女――」

弥太の声音が、かなりトゲトゲしいものになった。

「多次郎は、もう、二度とは、おめえの前には、戻っては来ねえのだぜ。……どうするというんだ？　おれに、上州へ帰(けえ)れ、というのか？」

「い、いえ――。あたしゃ、いまは、お前さんが、いなくては、さびしくて、一日も、すごせやしない。ただ……」

「ただ、なんだ？」

「ただ、多次さんのことを、想い泛べると、なんとなく、気が重く、滅入(めい)るんです。ただ、それだけのことなんです」

「女の心の中に、前の男が、まだ腰を据えていやがるのは、こりゃ、たまらねえ話だ」

「だから、あやまっています」

「いくら、あやまられたって……」

「弥太さん！　もう、この話は、止(よ)して――。ね、あたしを、はなさないように、抱いて……。抱きしめておくれ！」

歌女が、男に、身を投げ込む気配に、多次郎は、もう、我慢がならなかった。

板敷きに、上ると、いきなり、障子をひき開けた。

多次郎は、はじかれたように、とびはなれた男と女の、驚愕と恐怖をあふらせた顔を、凝っと見戍っているうちに、急速に、昂奮がおさまり、心の底が冷えるのをおぼえた。

「野暮なまねをして、すまねえ」

まず、あやまっておいて、

「凡夫だ、かっとなってしまったからにゃ、黙ってひきさがるわけにはいかなかったぜ。かたをつけておいた方が、あとに、未練はのこるめえ。……そうだろう、弥太？」

「お、おめえ、ご赦免になったのか？」

「そんなことはどうでもいい。……この場を、どうおさめるか、お互いに、考えようじゃねえか」

「しかし――」

「しかしも、へちまもねえ。おめえは、親分の仇を討ちに、はるばる、桑名までやって来た。おれは、おめえに、女を寝取られた。お互いに、云い分は、五分と五分になったぜ」

「そ、そりゃ、そうだが……」

「かたをつける方法は、ひとつしかあるめえ」

「う、うむ！」

弥太は、頷いた。

「多次さん――」

歌女が、狂ったような勢いで、はねあがると、しがみついて来た。

「かんにんして！……あ、あたしが、わるかったんです！……かんにんして、下さい！……あた

しが、わるかった！　あ、あやまります」

哭(な)きむせび乍ら、かきくどく女を、多次郎は、

「うるせえな。……おめえに、あやまられたって、どうなるものでもねえや」

と、邪険に、押しのけようとした。

しかし、歌女は、必死に、しがみついて離れまいとした。

「いい加減にしろ！」

多次郎は、呶鳴(どな)りつけざま、歌女を突きとばした。

これを視た弥太が、表情を険しいものに一変させると、長脇差を掴(つか)んで、起った。

「多次郎！　かたをつけようぜ！」

「よし！　出ろ！」

多次郎は、にやりとしてみせた。

「ばかっ！」

歌女が、出て行こうとする二人に向って、吐きかけた。

「ばかっ！　男なんて、ばか、ばか、みんな、ばかだよ！　勝手におし！　二人とも、死んじまうがいい！」

やくざ二人の果し合い場は、城下はずれの無常寺という禅寺の境内であった。

ここを、えらんだのは、偶然ではなかった。

桑名は、木曾川、長良(ながら)川、揖斐(いび)川が放流して、伊勢湾に注ぐ要地であり、近国から米穀類の集まる商港であり、宮あるいは佐屋とを往来する舟渡しの着点でもあるため、当然、四季のうちに

は、さまざまの惨事も生じた。時化（しけ）をくらって難破した商い船の水主（かこ）の溺死体（できしたい）が流れついたり、また、ようやくここまで辿（たど）りついた持病になやむ旅人が、舟で渡る体力も気力も尽きて、旅籠で寝ついてしまって、そのまま亡くなるとか。あるいは、気の荒い水主や人足が多勢聚（あつ）まるために、喧嘩（けんか）沙汰が絶えず、生命を落す者も尠（すくな）くなかった。

そういう無縁仏を葬るために建てられた禅寺なのであった。そして、いつの間にか、喧嘩口論の挙句（あげく）、斬り合うことになった場合とか、果し状をつきつけたりする時、その場所が、ここにえらばれるようになったのである。

桑名藩も、これをみとめたかたちになり、年に一度、城代家老自らが参加して、施餓鬼を催すならわしもできていたのである。

多次郎は、山門をくぐった時、鋭い眼眸（まなざし）を、後方へ放った。

弥太を先にたてて、ここへやって来るまでのあいだ、多次郎は、誰かに、尾（つ）けられているような気がしていたのである。三度笠をかたむけて、顔をかくし、坊主合羽（ひきまわし）で身を包んでいたものの、やはり、目のある者から視れば、兇状（きょうじょう）持ちの険しい気色が、滲（にじ）み出ていて、注意を惹（ひ）いた筈であった。

弥太の方も、果し合いをやりに行く者の、ただならぬ顔つき、身ごなしをしていたし、数歩はなれて歩いていても、これは、一瞥（いちべつ）して、

——おや？

と、好奇の視線を招くことになった。

向っている方角が、無常寺だったからである。

多次郎が、鋭い視線を放った往還には、しかし、べつに、それらしい人影は見当らなかった。

境内のまん中で、対峙して、三度笠を抛ると、もう、たとえ尾行者がそこに現れようが、気を散らせる余裕は、なくなった。

しばらく、多次郎と弥太は、睨みあっていてから、同時に、長脇差を、ひき抜いた。

度胸剣法とはいえ、やはり、一騎討ちともなると、さむらい同士の闘いの場合と同じく、構えこそぶざまだが、そのまま、根生えたように、動けぬのであった。

時折り、弥太の切っ先が、ぴくっぴくっと痙攣するばかりで、多次郎の方は、身じろぎもしなかった。

いつの間にか、陽ざしは、建物や樹木の影を短くして、境内いっぱいに満ちていた。

と――。

多次郎の姿勢が、徐々に猫背になった。これは、斬り込む直前の多次郎独特の動きであった。

それを、弥太の方は、知っていた。弥太の顔面に、脂汗が滲んだ。

――殺られる！

恐怖感も、ちらと、脳裡を掠めた。

多次郎の表情が、残忍な色を加えたようにみえた。

瞬間――。

弥太は、多次郎に攻撃されるのに堪えられずに、自分の方から、けだものじみた叫びをあげて、斬りかかった。弥太の目に、多次郎の形相が、にやりと悪鬼のような変化をみせたように、映った。

刹那――、脾腹に、焼火箸でも突き通されたような衝撃をくらって、弥太は、悲鳴をあげると、よろめいた。

弥太が、地べたへころがるのと、突如として、山門に怒号があがるのが、全く同時であった。振りかえった多次郎は、喧嘩仕度をした朝日屋藤兵衛を先頭に、およそ三四十人もの乾分たちが、どっと境内へ雪崩れ入って来るのを見出して、総毛立てた。やはり、発見され、尾行されていたのだ。

「多次郎！」

朝日屋藤兵衛は、長脇差を抜きはなって、馳せ寄ると、

「牢を破って、わざわざ、この朝日屋に討たれに、桑名へ来やがったとは、殊勝な心掛けだとほめてやるぜ」

と、うそぶいた。

これに対して、多次郎は、一言も発せず、頬の筋肉をびくびくとひきつらせたとみるや、猛然と、地を蹴って、とびかかって行った。

あとはもう、本能のままに、跳びはねる野獣と化したばかりであった。

業を持たぬ人間が、数十人を対手にして、これほどまでに凄じい働きを発揮できる、ということを、多次郎は、証明した。

自身では、幾人斬ったか、もとよりかぞえもしなかった。ただ、朝日屋藤兵衛に、一太刀あびせることができれば、と躍起になり乍ら、白刃や竹槍にはばまれて、近づくことの叶わぬ無念さに、時どき、狂ったように、咆哮した。

からだ中を、すこしずつ斬られ乍らも、多次郎の体力は、すこしも、おとろえるとは思えなか

った。
しかし――。
やがて、鐘楼ぎわまで追いつめられた時、多次郎は、ふうっと火のような息を吐いたとたん、急速に襲いかかって来た眩暈に、ぐらぐらと、首を垂れた。
「野郎っ！」
「くたばれっ！」
怒号とともに、白刃が、槍が、あびせられて来た。
多次郎は、再び、狂ったように、抵抗しはじめたが、もうその跳躍には、前のように凄じい勢いはなかった。
滅茶滅茶に、長脇差をふりまわすに過ぎなかった。
そのうち――。
どうしたのか、急に、周囲から、敵影が散った。
血汐が流れ入って、なかば盲になった双眼を、かっとひき剝いた多次郎は、うろうろと見まわした。
ひとつの黒い影が、幽鬼のように、非常な迅さで、移動するのが、見わけられた。
――助けてくれる者が、現れた！
自分に呟いたとたん、気力が尽きた。
多次郎の意識は、のびやかな牛の鳴き声で、呼びさまされた。
はっ、と目蓋をひらいた多次郎は、高い松の梢から落ちて来る太陽の眩しさに、眉をしかめた。

閻魔堂らしい古ぼけた建物の濡縁に、仰臥させられていた。
見まわしたが、人影はなかった。
――どこなんだろう？
いたるところ疼痛を起している身を、起してみた。傷には、手当がしてあった。
――どうしたというのだろう？
天狗にでも救われたような気分で、多次郎は、しばらく、ぼんやりとしていた。
と――。
松の木立の中から、黒の着流し姿が、現れるのを、みとめて、多次郎は、あっ、となった。
「旦那！」
多次郎は、歓喜の声をあげた。
「旦那が、あっしを、たすけて下さったので――？」
「お前に、人を斬る業を教えるのを忘れていたので、舟を漕いでもらった礼を返したまでだ」
それが、眠狂四郎の返辞であった。
「あ、ありがとう存じました」
多次郎の目に、泪があふれた。
「お前は、無縁仏として、あの無常寺に葬られた。そう届出ておいた。……今日から、名を変えることだ。駕籠が通るのを、待って、どこへでも行くがよい」
そう云いのこして、狂四郎は、歩き出した。
「旦那！」
なろうことなら、供がしたい、と思って、呼んだが、そのふところ手の姿は、足をとめずに、

頭だけをまわして、
「弥太という男だが、生命に別条はなかった。いま頃は、歌女の看護を受けているだろう」

四日市の女

ひとつ、小さな身ぶるいが起って、女は、縫物の手を止めて、顔をあげた。
「風邪をひいたのかしら――」
肌にしのび入って来た夜気の冷たさに、はじめて気がついた表情であった。夕餉を済ませて、すぐ、この仕事をはじめて、いつの間に夜が更けていたのか、忘れていたのである。
擾がしかった外の騒音は、全く絶えていて、かたわらの行灯の、棉実の灯油にひたした二本の灯心が、微かに、ジジ……と鳴く音を、きくばかりであった。
きくというこの女の膝の上で、もう、紬の着物は、殆ど縫いあげられていた。
この着物一枚をつくりあげるのに、きくは、三年の歳月を費やしていた。一人で、伊勢の山を歩きまわって、山繭を採り集め、つむいで、染めて、こうして仕立てたのである。
誰に着せよう、というあてはなかった。しかし、鋏を入れる時、いつの間にやら、きくの脳裡には、一人の男の姿が、描かれていたのである。その男は、さむらいでなければならなかった。
年齢は三十前後。痩せて長身――五尺六七寸。着流しのよく似合う、すっきりとした男ぶりであった。別に美男子でなくてもよかった。渋味のある、男らしい風貌で、あまり口をきかず、ただ、より添っているだけで、たのもしさを感じさせてくれる……。

ひまな孤独な時間をかけて、勝手に想い描くのであったから、きくの理想像は、立居振舞いから、声音の色まで、ちゃんとできあがっていた。近頃では、こういう時には、どういう表情、態度をみせ、どんな口をきくか、きくには、いつでも、脳裡に泛べることができた。夢の中にも現れて来たし、台所で働いている折など、座敷に、その人が、寝そべっているような気がしていた。幼い頃から、空想することの好きな娘であったが、二十四歳になっても、こんな空想をしているのは、孤独でくらす運命にある証拠であった。

きくは、ふしぎなくらしを、送っている。

近隣の人々は、この家を妾宅と、思い込んでいる。事実、五十年配のでっぷりと肥えた、いかにも旦那衆らしい男が、三月にいっぺんぐらい、この家を訪れて、二三日泊ってゆくのである。江戸か大坂かの、大きな商家のあるじ、と受けとれた。

しかし、その男は、きくの旦那ではなかった。いや、かなりの金を投じて、この家を買って、きくを住まわせ、何ひとつ不自由させぬくらしをさせているのであるから、旦那には、まちがいなかった。

ただ、きくを、このようなくらしをさせるに当って、男は、

「妾にするわけじゃない。ちょっと仔細があって、そうしてもらうのだ」

と、約束し、今日で五年のあいだ、その約束を守っているのであった。三月に一度、泊りに来ても、男は、二階にやすみ、きくを呼びはしなかった。二階は、男の命令で、ずっと閉じられて居り、きくは、掃除に上ることも許されていなかった。

きくの前身は、伊勢神宮の巫子であった。父親は、飛騨の天領の山役人であった。きくが十歳の頃、なんの落度があったか、致仕して、きくをつれて、伊勢へ移り住んだ。母親は、きくを生

むと、すぐ逝っていた。

きくが、巫子になったのは、十六歳の春であった。半年ばかり患って逝った父親の遺言であった。

巫子のくらしは、きびしいものであったが、きくは、べつに辛いとも思わなかった。

五年前の冬、ある日、突然、宮司の部屋に呼ばれて、

「そなたを所望する御仁が現れたので、遣すことになった」

と、云われて、きくは、てっきり、嫁がせられるものと思った。

禰宜の一人にともなわれて、志摩の海辺の海賊の後裔らしい構えの大きな屋敷に行くと、きくを受けとったのは、花婿ではなく、その年配の男だったのである。

鹿右衛門と名のったその男は、きくのういういしい美しさに満足そうであった。

そして、妾にするのではない、と断って、数日後、この四日市へ、連れて来たのであった。この家は、すでに、用意されてあった。

それから五年……、きくにとっては、なんの波風も立たぬ平穏無事な明け暮れであった。五年のあいだに、きくに泪を流させたのは、飼い猫が死んだことだけであった。訪れる人もいなかった。

鹿右衛門が泊る二三日の間に、一人か二人か、べつに目立たぬ平凡な風貌の男が訪れて来るが、すぐ二階へ上ってしまい、きくは、お茶も酒もはこぶ必要はないのであった。

きくが、自分にとって理想の男を、脳裡に想い描いて、その男にきせる着物を仕立ててみよう、と思いついたのも、無為で退屈な平和のゆえであった、といえる。

鹿右衛門に対して、きくが秘密を持ったのは、このことだけであった。

きく自身、仕立てた紬は、そっと、箪笥の底にしまわれるだろう、と思っていた。

きくは、再び、縫う手をうごかしはじめた。仕立てあがった着物を、自分の敷布団の下に敷いて寝ることを、三年前から、きくは、愉しみにしていたのである。今夜、それが、できる。

やがて、半刻が過ぎた。

「できた！」

きくは、はずんだ声をあげて、紬の着物を、畳の上にひろげた。

それを、ゆっくりと、たたみかけた時であった。

廊下を、忍びやかに進んで来る跫音を、きくは、きいた。

咄嗟に――。

きくの手は、針函の一番下の抽斗を引いた。そこに、オランダ製の短銃が入れてあった。鹿右衛門が、女の一人ぐらしは物騒だから、と用意しておいてくれたのである。

勿論、きくが、それを手にするのは、いまが、はじめてであった。

跫音は、この居間の前で、停った。

やといの小女は、宵のうちに寝てしまっていて、この家で、灯があるのは、この居間だけであった。

障子が、すっと開かれた。

きくは、胸の鼓動を早鐘のように迅いものにし乍ら、両手でしっかと握りしめた短銃を、侵入者に向けて、

「入ると、射ちます！」
と、云った。
侵入者は、黒の着流しの浪人者であった。彫の深い、翳の濃い容貌であった。
飛び道具に怯じる気色もなく、冷やかな眼眸を、きくに当てて、
「そんなものを、使ったことがあるのか？」
と、訊ねた。
きくの返辞を待ちもせずに、一歩、居間へ踏み入って来た。
きくは、もう一度、
「射ちますよ！」
と、叫んだ。
対手は、平然として、さらに、二歩ばかり進んで来た。
きくは、無我夢中で、引金を引いた。
その轟音とともに、悲鳴をあげたのは、きくの方であった。自分で為したことのおそろしさに、反射的に、悲鳴が、口から迸ったのである。
対手は、依然として、そこに、平然として、佇立していた。
きくは、短銃を、畳の上へ、投げて、全身をすくめ、
「すみませぬ！　お、お許し下さいませ！」
と、詫びた。
「鹿右衛門という男に、会いたいが……」
対手は、何事もなかった口調で、云った。

きくは、肩を喘がせつつ、ここにはいないとこたえた。
「ここ数日うちに、現れるのではないのか？」
「存じませぬ」
「月に一度、現れる、ときいたが――」
「いえ、月に一度など……」
「警戒する必要はない。おれは、鹿右衛門に殺意を持って、押し入って来た者ではない。味方に近い立場にいる者だ、と思ってもらおう」
対手は、そうことわって坐ると、
「茶漬けを所望したい」
と、たのんだ。
名前も告げず、理由も云わずに、図々しく、きくを使おうとするのであった。
しかし、きくは、どうしたのか、おそれも消えていたし、反感もおぼえなかった。
味方に近い者だ、という言葉を信じたわけではなかったが、自分でもふしぎなくらい、一時の興奮が、しずまって来て、きくは、そうしなければいけないように、立ち上って、台所へ歩いて行った。
茶漬けの用意をしているうちに、きくの気持は、さらに、移った。宛然、ずっと以前から、今夜のことを待っていたような気がして来たのである。
流石に、きくは、自分の軽薄な気持の推移に、そっと、顔をあからめた。
――わたしが、待っていた御仁じゃない。
きくは、自分に、云いきかせてみた。

きくが、心に描いて来た理想の男は、あのように、ぞっとするような冷たい鋭い目つきはしていない。すずしい目もとをしているし、さわやかな印象を与えてくれる筈であった。

茶漬けを所望している侵入者は、妖気のような暗い、陰鬱な雰囲気を、きくの目の前へ、はこんで来たのである。

——わたしの仕立てた着物をおきせする御仁とは、ちがう！

もう一度、きくは、自分に、云いきかせた。

にも拘らず、きくは、今夜を、もう三年も前から、ひたすら、待ちつづけていたような気持を、払いのけられなかった。

やがて——。

きくが、食膳をはこんで、居間に入ってみると、侵入者は、手枕で、横たわっていた。

一瞬、きくは、その寝姿を見下して、微かな胸の痛みをおぼえた。

——疲れておいでになる。

その肩のあたりに、なにやら、さびしげな翳が刷かれているように、きくは、視た。

左様——眠狂四郎は、疲れていた。

桑名と四日市の、ほぼまん中にあたる八幡という村のはずれの野で、あきらかに、薩摩の隼人隠密党と知れる強敵十五名を対手に、凄じい血闘をくりひろげ、そのうち十二人までも斬り斃して来たのである。

それより前、狂四郎は、桑名から一里ばかりはなれた朝明川に架けられた土橋の袂にある立場

茶屋で、一人の男に会っていた。

それは、武部仙十郎の依頼によって、東海道を道中する狂四郎を、さがしていた尾州藩のお七里役人であった。

お七里役人の設置は、寛永のむかしにさかのぼる。

結城中納言秀康の三男左近少将直政が、出雲松江十八万石に封じられ、国入りをするに当り、遠方に在っても、将軍家（三代家光）に対して、日毎御機嫌伺いをいたしたい、と申し出て、街道七里毎に、特別の通信機関を設置することを許可された。これが、七里役所と称された。

これにならって、将軍親戚大名が、競って、七里役所を設けた。

東海道に於ては、尾州、紀州両家の七里役所が、目立った。日毎、東西からの御状箱を扱う持送り人足の訓練もゆきとどいていたし、頭数も揃っていた。

東海道にある尾州、紀州両家の七里役所は、神奈川、小和田、小田原、箱根、沼津、由井、鞠子、金谷、見付、荒井、大浜、御油、宮の十三箇所にあった。その一箇所ずつに、二人乃至三人の、本藩の足軽から抜擢された飛脚者がいた。いずれも、一昼夜に三十数里から四十里を歩く健脚の持主であった。

渠ら飛脚者は、七里役所には葵御紋の高張提灯をかかげていたし、将軍家御機嫌伺いの特別通信の御状箱を持参しているため、身分はひくいが、親藩の威勢を背負って、かなりの力を持っていた。

「お七里の通行を妨げる者があれば、斬り捨て御免」

という不文律もあるくらいであった。

「お七里」が威張り出したのは、七代将軍家継が七歳で薨去し、その後継ぎ問題が、紛糾し、よ

うやく、紀州から吉宗が八代の跡目に据った時、一日に二回も三回も、御状箱が往来して、その特別通信機関である七里役所が、大いに役立ったからであった。

近年にいたって、幕府大目付が、この七里役所を利用して、その役人に隠密活動をさせるようになったのは、当然、諸藩を監視する者の思いつくところといえた。

水野家側用人の武部仙十郎が、主君忠邦が老中主座に就いたのを機会に、この七里役所の中から、これはと見込んだ役人を、味方にひき入れたのも、巧妙な目のつけどころ、といえた。

狂四郎をさがし当てたそのお七里役人は、

「四日市に入られたならば、札の辻南の新町にある、きくという若い女が一人住いする家を訪ねて頂きたい。その女を世話している鹿右衛門という人物から、ある書類を受けとって頂く。鹿右衛門は、実は、老練の公儀お庭番でござって、ここ七八年、四日市の港に入る船舶の探索をつづけて居るのでござる」

と伝え、ごく最近になって、鹿右衛門が公儀隠密であることを、四日市の港を用いている諸藩の密偵たちがかぎつけた気配があり、身に危険が迫っていることも想像されるので、お七里役人である自身が、直接会ってその書類を受けとるのは避けねばならぬゆえ、お手前をわずらわしたい、と語ったのである。

狂四郎は、お七里役人と別れて、松寺、富田の間の宿を過ぎたところで、薩摩の隼人隠密党の面々に、行手をさえぎられたのであった。対手がたは、偶然、こちらを見かけて、討ち取ろうとしたのではなく、どうやら、四日市で鹿右衛門と会う、と看て取って、襲って来たものに相違なかった。

狂四郎は、そのために、要心して、夜半をえらんで、この家へ、盗賊のように忍び入ったので

ある。尾けられている予感があったが、これは、播いたつもりであった。
「お召し上り下さいませ」
きくに食膳を据えられて、狂四郎は、起き上った。
膳には、酒と肴がのせてあった。
空腹であった狂四郎は、茶漬けの方が欲しかったが、酒の香をかぐと、黙って、盃を把った。
きくは、銚子を持って、酌をした。その手つきは、ぎこちなかった。
「鹿右衛門の居どころを知らぬか？」
「石薬師に、家をお持ちなされて居ります」
「行ったことはあるのか？」
「いえ、まだ……」
それだけの短い会話のあと、長い沈黙が来た。
狂四郎は無言で、飲みつづけ、きくも無言で、酌をしつづけた。狂四郎が、盃を置いている時は、きくは、銚子を膝の上であたため乍ら、じっと俯向いていた。狂四郎は、銚子を三本空けた。
きくは、四本目の銚子を取りに、台所に入った時、
——あの御仁だったのかしら？
ふっと、そんな気持を湧かせていた。
きくが、銚子を持って、居間へ戻ってみると、狂四郎は、再び横になっていた。
「もう、召し上りませぬか？」
「うむ。……酔った」
狂四郎は、目蓋を閉じたまま、こたえた。

きくは、ちょっと、ためらったが、思いきって、たたんでおいた紬の着物を、そっと、狂四郎に、かけた。

かけたとたん、きくの心の中で、紬の着物は、この浪人者のために仕立てたのだ、という想いが定まった。

「しずかだな」

狂四郎が、独語するように、云った。

「はい――」

「この四日市は、夜中も、騒がしい、と思っていたが……」

船舶繋泊の港町として、四日市は、当時の日本では、堺、長崎とならぶ賑いをみせていたのである。

何日市、と名のついた場処は、全国いたるところにある。筑前陸中の二日市、越中越後の三日市、武蔵安芸の五日市、越後石見の六日市、上野、飛騨、羽後の七日市、近江、武蔵、下総、飛騨の八日市、大和信濃の十日市、安芸の二十日市、など。

これらは、むかし商いの市の立ったところである。江戸の中心地にも、四日市という地名があった。毎月三回、四の日に市がひらかれるからであった。

「そなたは、一人で、この家の留守居をして、何年になる？」

「五年になります」

「五年……あたら、花の盛りを、日蔭で、そっと、すごして来たか」

公儀隠密は、隠密目的のためにやとった女には、絶対に手をつけぬことを、狂四郎は知っていた。

「ひとりぐらしをし乍ら、何を考えていた？」

「………」

「何も考えずに、すごして来たわけではなかろう」

「はい」

この紬の着物をつくって参りました、とこたえかけて、きくは、急に、顔が火照るのをおぼえて、口ごもった。

その時であった。

不意に、

「眠狂四郎殿！」

冴えた高声が、庭から、ひびいた。

「隼人隠密党頭取・竜堂寺采女正、推参――。出られい！」

――やはり、尾けられていたか。

狂四郎は、苦笑して、起き上った。

隼人隠密党頭取の竜堂寺采女正の名は、すでに、狂四郎の耳にもとどいていた。自源流名手として、薩摩藩はもとより、九州一円に、無敵を誇っていたのである。

狂四郎は、この道中の途次、程ヶ谷宿てまえの柴生村の古刹の境内で、隼人隠密党の副頭取・竜堂寺八郎という手練者と梅津一郎太という若者との決闘を、視ている。

竜堂寺八郎は、狂四郎の助勢によって、梅津一郎太に斬られたが、その腕前は、おそるべきものであった。

苗字を同じくする竜堂寺采女正は、おそらく、それ以上の、その剣名にふさわしい使い手であろう。

その自信があればこそ、単身で、やって来たのである。

狂四郎は、疲労した五体にめぐっている酔いを払うすべもないままに、きくに、

「水」

と、所望した。

わななく手で、さし出された茶碗を、受けとって、ひと息に、飲み干した。

それから、必死なまなざしをすがりつかせるきくへ、冷たい微笑をかえしてみせた。明日の生命を思わぬこの男の不敵なおちつきであった。

「生きのこることができれば、明朝、鹿右衛門のところへ、案内してもらうことになろう」

そう云いのこした。

きくは、何か云わねばならぬ、と思ったが、顔もからだもこわばってしまい、唇は、膠づけになったように、開かなかった。

およそ、一刻の時間が過ぎた。

きくは、居間に、坐りつづけていた。この一刻のあいだ、身じろぎもしていなかった。

庭でもまた、なんの物音もしなかった。

白刃と白刃が、構えられ、それなり、微動もせずに、にらみ合っている光景を、きくは、想像するだけで、そっと窺い視る勇気は、なかった。

ただ、こうして、石になったように、全身をかたくして、待ちつづけているよりほかに、すべはなかった。

と——突如。

凄じい懸声が、深夜の寂寞をつんざいた。

それから……再び、しずけさがかえった。

きくは、唖の世界に置かれたように、一種の虚無状態に陥った。

われにかえったのは、障子が、しずかに開かれた時であった。

痴呆に近いうつろな視線をあげたきくは、出て行った時とすこしも変らぬ無表情を持った彫のふかい貌を、視た。

そして、着流した黒羽二重が、胸から帯ぎわまで、一直線に、截られているのをみとめて、咄嗟に、胸の裡で、叫んだ。

——やはり、この方だった、わたくしの縫いあげた着物を、着て頂く御仁は！

血の石薬師

きくは、目ざめた瞬間、はっとなって、起き上った。

まだ陽がさしていない時刻であったが、四日市の朝は、早かった。もう、往還に、人の往き来の跫音が、あわただしかった。

きくは、昨夜のままの着物で、仮寝していた。あれから、ずっと睡らずにいて、明けがたから、ほんの少時、とろとろとしたようである。

飼い猫が死んだという出来事のほかには、なんの波風も立たぬ、瀞の底のようなこの五年間のくらしが、一挙に暴風雨に吹きまくられたような一夜であった。

眠狂四郎と名のる浪人者は、二階にやすんでいた。きくは、自分の居間で、このまま、しずかに朝を迎えることができるとは思われず、どんな微かな物音も、ききのがすまいと、全神経を張りつめて、すごした。

眠狂四郎が、討ちすてた敵の屍体は、庭に横たわっている筈であった。その無慚な姿を想像しただけで、睡れるものではなかった。

しかし、その仲間が、襲って来る予感に怯えるよりは、その瞬間には、二階に睡っている狂四郎に告げなければならぬという必死な気持であった。

げんに、牀に就いてからほどなく、庭に忍び入って来る気配があるように思われて、はね起きたものであった。しかし、全神経を耳に集めて、じっとしていたが、それきり、なんの気配もなかった。

——あの御仁は、ねむっておいでなのだろうか？

身じまいをし、髪をなおしてから、きくは、天井を仰いだ。

三年の歳月を費やして仕立てあげた山繭の紬の着物を、きせてあげたが、その装で、睡っているのであろうか。

人を一人、斬り仆しておいて、悠々と睡れるものなのだろうか。

きくは、しばらく、ためらっていたが、思いきって、縁側へ出て、そっと、一枚雨戸を繰ってみた。

おそるおそる覗いてみた庭には、屍体はなかった。

——どうしたのかしら？　手負うたままで、起き上って、立ち去ったのであろうか？

怪訝の視線を、なおよく、庭の隅々へまわしてみようとしたとたん、背後に、声があった。

「作法を知っている敵だ。そなたをおどろかさぬように、音をたてずに、死人をはこび去った」
振りかえったきくは、自分が仕立てた紬を着流した狂四郎を、見出した。
居間へもどって、きくのさし出した朝の茶を飲んでから、狂四郎は、云った。
「鹿右衛門のところへ、案内してもらうつもりであったが、これは、止さねばならなくなった。わたし一人で、たずねて行く」
「どうしてでございますか？」
「敵が、屍体だけ引き取ったのは、こちらの行動を見張るためだ。わたしが、鹿右衛門と会うまで待つ――それであろう」
「…………」
「当然、わたしの歩いて行くところは、修羅場になる。そなたを、つれては行けぬ」
「…………」
きくは、俯向いた。
「鹿右衛門が、石薬師のどのあたりに住んでいるか、教えてもらおう。鹿右衛門から、きいて居らぬか？」
「石薬師寺の近く、とだけきいて居ります」
「そうか。行けば、判るであろう」
きくは、顔を擡げて、狂四郎を、瞶めた。
「敵がたは、多勢なのでございましょう？」
「うむ。十人以下ということはあるまい」
「では……、今日すぐ、お出ましにはなれないのでございますね？」

「二三日さきにのばしても、同じことだろう。対手は、目下、わたしの生命を狙うことだけしか、考えては居るまい。……日をのばせば、別の敵が、鹿右衛門の隠れ家を、かぎつけるおそれもある」

「それならば……、わたくしを、お連れ下さいませ。手足まといには、決してならぬ、とお約束いたします」

「一人で、この家にいるのが、怕いのか。そのことなら、心配は要らぬ。敵は、見境のない兇暴の徒党ではない。作法を心得て居る、そなたなどに、目も呉れぬ筈だ」

「いいえ、一人でいるのが、おそろしいのではございませぬ。これまで……五年あまりも、一人で、くらして参ったのでございますから、これからも、一人ですごせぬことはありませぬ。……ただ——」

「………？」

狂四郎に次の言葉を待たれたきくは、しかし、急に、顔が火照って、また俯向いてしまった。

いま狂四郎がまとっているその紬の着物を仕立てあげるまでの、胸の裡ではぐくんで来た想いを、きくは、到底はずかしくて、口にすることは叶わなかった。物心ついた頃から、実父と伊勢神宮の神官とそして鹿右衛門のほかには、若い男性と親しく語った経験を持たぬきくであった。いわば、狂四郎は、きくにとって、生れてはじめて接する異性といえた。

のみならず——。

一人で、伊勢の山を歩きまわって、山繭を採り集め、つむいで、染めて、仕立てあげる三年間、心に描いた異性が、この御仁であった、といまはかたく信じているきくとしては、そのことを、告げる勇気はなかった。

恰度、縫いあげたところへ、出現して、自身の着物を決闘対手に截られた偶然は、きくの気持をゆるがぬものにしてしまっていたのである。

この紬を着てくれる男は、自分の良人（おっと）になる運命にあるのだ。二十四歳とはいえ、その育ちのゆえに、まだ十代の稚（おさな）いはじらいを持つきくに、どうして、そのような自分の心を、打明けることができるものであったろう。

狂四郎は、きくが、俯向いて、口ごもったまま、じっとしているのを眺めていたが、やおら、起った。

「造作になった」

別れを告げられて、きくは、あっとなり、

「おねがいでございます！　わたくしを、お連れ下さいませ！」

と、畳へ両手をつかえた。

「好んで、修羅場へ入ることはあるまい」

「わたくしは、もう、一人でくらすのは、いやでございます」

「あいにくだが、こちらは、独歩を好む。わたしに跟（つ）いて来れば、せっかく別に幸せな世界が待っているかも知れぬにも拘らず、おのが運命を狂わせるようなものだ」

「い、いいえ！」

きくは、必死に、擡げた顔を振った。

「わたくしは、貴方様のお供がしとうございます。そのために、今日のうちに、生命を喪（うしな）っても、

悔いはいたしませぬ！」

「そう云って、わたしに跟いて来た女子(おなご)が、これまで幾人か、いた。それらの女子は、例外なく、不運に遭(お)うた」

「わたくしは、かまいませぬ！　悔いませぬ！」

「迷惑だと云うのだ、こちらが！」

狂四郎は、語気を殊更に冷たいものにして、打ちすてるように、云った。

きくは、びくっと肩を顫(ふる)わせて、息をのんだ。

狂四郎は、玄関へ出た。

送って来たきくを、格子戸を開ける前にふりかえって、何気なく、

「この着物は、わたしのために仕立ててくれたように、寸法もぴったりだし、着心地がよい。遠慮なく、貰って行く」

と云いのこした。

きくは、潤んだ双眸(そうぼう)を大きくひらいて、瞶めたままであった。

四日市から石薬師までは、二里二十七丁である。

途中、いくつかの小橋を渡って、日永村の追分へ出る。伊勢参宮道と都路との岐(わか)れ道である。石の大きな道しるべが建っていたし、参宮道には、神宮遥拝(ようはい)の鳥居も建っていた。御神灯や手洗(ちょうず)場(ば)もある。京へ、あるいは江戸へ、急ぐ人々は、ここで洗心して、はるかに、伊勢神宮を遥拝することになる。

追分を過ぎて、しばらく行くと、杖衝坂(つえつき)にさしかかる。

日本武尊が東征の帰途、足を患んで、杖を銜かれた、という伝説によって、この名がある。

このあたりは、ひくい丘陵が、いくつか起伏して居り、いかにも、疲労した者の足には、つらいと思われる。

芭蕉も、

「歩行ならば杖つき坂を落馬かな」

と、詠んでいる。

このあたりを、まがりヶ原、ともいうが、疲労のために足が曲ってしまった、と日本武尊が、愚痴をこぼされたためとか……。

狂四郎は、その杖衝坂の下の腰掛茶屋で、一人の町人と連れになって、坂をのぼり、まがりヶ原をつらぬく街道をひろって行った。

もとより、狂四郎が、それをのぞんだのではなく、四日市の蛤茶屋のあるじというその町人の方から、気軽に話しかけて来て、勝手に、連れになって来たのである。

町人は、狂四郎に行先をたずね、西へ向って歩く、ときくと、

「てまえは大坂まで参ります。旅は道連れ、世はなさけ――ひとつ、お供をいたしましょう」

と、一人合点で、肩を竝べたのである。

よくしゃべる男であった。

「……蛤というものは、焼きかたがございましてね。下手が焼くと、中貝三個の一皿を喰べただけで、いやになります。上手が焼くと、十皿でも二十皿でも、喰べられます。尤も、関東の御仁は、気前がいいので、少々まずいのでも、七八皿は召し上られますが、美濃尾張の者は、ケチでございますからね、十文の皿をひとつたいらげて、半刻も休んでゆくのでございます。気風のち

がい、と申すものでございますな。なに、てまえは、紀州の熊野で生れて、育って居りましてね、四日市に住んで、かれこれ二十年に相成りますが、いまだに、美濃尾張者とは、なじめませんですねえ。……蛤を焼くコッってえのを、ひとつ、おきかせいたしましょう。下手が焼きますと、パックリ口をあけて、汐を噴く、灰が入る、火が消える——お話になりませぬ。貝は、生焼けで、食えたものじゃございません。そのコツは……、まず、貝を火にかける、貝の番目を焼き切ります。そこを焼き切りますと、蛤は口を開きませぬ。うまく、むし焼きになります。新米が焼きますと、火の上に、貝を横にいたします。これが、いけませんな。横にすれば、すぐ口を開く道理でございますよ。焼くが松笠でございますからね。松笠を山のように積んで、渋団扇で、バタバタあおぐのでございますから、たちまち、松笠は火の玉になります。だから、貝を縦にしなければいけませんな。すると、貝の番目が焼けて、開かぬから、うまくむし焼きになる理窟でございます」

すてておけば、石薬師宿まで、しゃべりつづけそうであった。

狂四郎は、しかし、この男の口をつぐませる言葉を、黙ってきいているうちに、用意していた。

「お主にききたいことがある」

「なんでございましょう？」

「蛤は、女陰の隠語だな。川柳にも、蛤の出るまで捲る汐干狩、というのがある」

「よくご存じでございます」

「ところで、お主のような正体をかくした曲者のことを、薩摩の隠語で、何という？」

「…………」

男は、沈黙した。

「隼人隠密党、というのではないのか」

瞬間――、男は、一間を跳び退った。

だが、その時すでに、男の腹部には、無想正宗が、ふかぶかと、突き刺さっていた。

「う――、むっ！」

男は、海老のように上半身を曲げつつ、深傷に屈せず、白刃を腹から抜きとると、

「無念！」

と、呻きざま、狂四郎めがけて、投げつけた。

狂四郎は、わずかに身をひねって、飛んで来たおのが愛刀の柄を摑んだ。

「お主は、いささか、この眠狂四郎を見くびったようだ。さいわい、生命をとりとめたら、この次からは、町人に化けるのは、止すがいい。武士は、大小をたばさむゆえ、知らず知らずのうちに、左足に力をこめる歩きかたをする。たとえ無腰になっても、そのくせは、習い性となって、なおらぬ。歩きかたを見れば、お主が武士であることは、すぐ判る。いや、お主も隠密なら、町人の歩きかたも修練して居ったであろう。あいにく、しゃべる方が忙しくて、つい、町人の歩きかたを忘れたようだ」

冷やかに、云いすてておいて、狂四郎は、踵をまわしていた。

石薬師――西福寺。

古刹であった。神亀年間、聖武帝の頃、越の泰澄という僧侶が、ここを通った時、たまたま、

藪の中に、霊光を放つ奇石を発見して、堂宇を創てて、これを祀ったという。
その後、空海が、この奇石に医王尊像を刻んだので、有名になった。
地下の者にきけば、本尊石像は、七寸五分というが、古史には、七尺五寸とある。
この薬師の霊験は、乳のない婦人に、乳を出させる、という。家を出る時、女房にたのまれた旅人の参詣する姿が多いのである。
本尊が石像であるため、石地蔵の寄進が多く、参詣道の左右には、無数の石地蔵尊が、よだれ掛けをして、竝んでいる。
きくが、必死の面持で、その参詣道の敷石を踏んで、山門をくぐって来たのは、その日の午であった。
きくは、狂四郎が去ってすぐ、あとを追って、出て来たのであった。
途中、ついに、狂四郎に追いつくことは叶わなかった。その姿を見つけられないままに、道を急いで、石薬師宿に到着したのである。
きくは、いつぞや、鹿右衛門が、石薬師寺の住職と語らった、ときかされたおぼえがあった。
その庫裡をたずねれば、鹿右衛門の隠れ家を教えてもらえるかも知れなかった。
きくは、そのことを、狂四郎に教えるのを忘れたのに気づいて、急いで、あとを追って来たのであった。
きくは、もう、四日市へ戻る気持はなかった。
木立のふかい、古刹にふさわしい山ふところの境内は、いかにも、狩野法眼が描いた絵馬が、夜半に抜け出して、その敷石を疾駆したという伝説も頷けそうな寂寞の山気を湛えていた。
きくは、庫裡の戸口に立った。

「ごめん下さいませ」
二三度呼んだが、返辞はなかった。
中庭へまわってみることにして、木戸を通ったとたん、きくは、はっと、動悸をおぼえて、明るい陽ざしに浮きあがった縁側の障子へ、眸子を釘づけた。
その一枚に、鮮やかな紅の色が、紅葉を貼ったように、散っていたのである。
——血汐！
きくは、夢中で、奔って、縁側へあがると、その障子を開けた。
きくを、四日市に家を与えて、五年間住まわせた人物が、そこにいた。
床柱に凭りかかって、死相濃い顔を仰向けていた。
衣服は、血まみれであった。
「旦那様っ！」
きくに馳せ寄られて、鹿右衛門は、薄目をひらいた。
「そなたか……。なにか、不吉の、予感でもしたかな？」
無常の鬼に身を責められ乍ら、流石は熟練の公儀庭番であった。声音は、まだ、しっかりしていた。
「こ、これは……？」
「うむ。本尊の、罰があたった」
「……？」
「罰の当ることを、覚悟で、したことだが、……やはり、罰が当った。……いや、寝かせてくれぬ方が、よい」

　鹿右衛門は、きくのさしのべた手をこばんだ。

「こうしている方が、楽なのだ。……そなたには、気の毒であった。四日市の、あの、うすぐらい家で、あたら、花の盛りを、一人ぼっちで、すごさせた。相済まぬ。……しかし、これからは、自分で、自由に、幸せを、見つけるが、よい」

「旦那様――」

「なんだ?」

「眠狂四郎と申される御仁が、たずねては、参られませなんだか?」

「うむ。……たずねて、来た」

「で、では……?」

　もしや、この惨劇を演じたのは、あの御仁ではないのか、という疑惑が、きくの全身を、ゆさぶった。

「すぐに、去って、もらった。……その、直後に、襲われた」

　その言葉に、きくは、ほっとした。

「しかし……、あの御仁も、もしかすると、ここから近いところで、わしと同様に、血にまみれて、冥土（めいど）からの迎えを、待っているのかも、知れぬ」

「えっ!」

　きくは、再び、烈しい動悸に襲われた。

「そうだ。そなたに、たのもうか。……あの、眠狂四郎殿が、斃れた、とすると、そなたに、代って、勤めて、もらおう。……やって、くれるか?」

「は、はい。……どんな、ご用を?」

「宮の、七里役所へ、行き——、鹿右衛門は、石薬師寺の、ご本尊に、孔をあけました、と伝えて、くれぬか？」
「はい」
「それだけ、云えば、判る」
鹿右衛門は、眠狂四郎にも、同じことをたのんだのである。
鹿右衛門は、この七年間、四日市の港に於ける西国諸藩の密貿易の実状をさぐり、それをくわしくしたためた調書を、この石薬師寺の尊い本尊の石を刳り抜いて、その中に、かくしたのであった。
鹿右衛門は、その調書を、狂四郎に渡そうとしたのであったが、
「わたしに対しても、敵は執拗に襲いかかって参るゆえ、万が一、奪われては相成らぬ。ただ、その隠し場所だけ、お教え頂こう。後日、別の者が、受け取りに参ることになろう」
と云われて、本尊の腹中、と告げておいたのである。
きくが、訪れたのをさいわいに、きくにも、それをたのんでおいて、鹿右衛門は、再び、顔を仰向けた。
もう、苦しい喘ぎをかくさなかった。
きくは、ただ、泪をあふらせつつ、おろおろと、見戍っているよりほかに、為すすべもなかった。
不意に——。
鹿右衛門は、なにかを求めるように、天井へ放った眼眸に、焦躁の色をうかべて、口をひらいて、何か云おうとした。

しかし、それを思いとどまった――それが、この公儀隠密のこの世にのこした最後のしぐさであった。

きくが、哭き伏して、どれくらい経ったろう。

「やはり、そうであったか」

不意に、その声が、縁側で、きこえて、きくは、ぱっと、身を起した。

眠狂四郎が、ひきかえして来て、そこに、佇んでいた。

寺を出て、ものの一丁も行かぬうちに、十人以上の強敵に包囲された時、ふと、鹿右衛門も襲われるであろうという予感がしたのであった。

狂四郎は、五人を斬り、残りの者に追わせて、四日市の方角へ奔り、途中で、巧みに、姿をくらまして、遠まわりすると、ここへひきかえして来たのであった。

狂四郎は、きくに牀を延べさせて、遺骸を寝かせると、

「参ろう」

と、促した。

「わたくしを、お連れ下さいますか？」

きくは、胸をはずませて、訊ねた。

「山門をくぐるまでに、連れるか、別れるか、きめよう」

狂四郎の口調は、相変らず冷やかであった。

庄野の美僧

石薬師から、一望の野の中を辿って、二十七丁。
庄野宿は、東海道の宿駅でも、最も小さい。
大むかしは、荘園であったが、天正年間、勢陽の乱に、民家すべて兵火に罹り、住民は離散した。その後、ぼつぼつと帰郷した住民は、鈴鹿川の畔に、聚落をつくった。その復興地の選択は、あやまった。鈴鹿川が氾濫するたびに、家は流され、田畑は砂と石塊で埋もれた。
寛永に入って、三代家光が、ここに、新しく宿駅を定めて、近在の家を、移した。しかし、なんの取柄もない土地では、人家の増えようはなかった。
この時代に至って、本陣・脇本陣はそれぞれ一軒ずつあり、旅籠も十数軒ならんでいたが、ひっそりと、さびれて、旅人の足は、さっさと通りすぎてしまうのであった。
幕府の調べにも、
『この宿、男は往還稼ぎをいたし、女は木綿を織るほか、仕馴れたる手業なし』
と、ある。
それでも、宿駅であるからには、ささやかな名物はあった。
宿に入ってみると、どの家の檐下にも、握りこぶし大の小さな俵が、ずらりとならべてある。
中身は、焼米であった。青い緒で編んで、口を強く締めてあるので、恰度未熟の倫子の形に似ていた。旅人は、これを買い求めて、国許の息子や孫に土産にするのであった。

焼米を名物にしなければならなかったとは、いかにもさびれた宿場であることを示している。
尤も——。
ここ数年は、もうひとつ、庄野には、名物があった。
腰掛茶屋のひとつに、「おこん茶屋」という店があり、そのおこんという看板娘が、江戸にも京にも滅多に見受けられないくらいの美女であった。
西国の大名衆は、参覲の途次は、おこんの美貌に惹かれて、必ず行列を停めて、おこんのさし出す渋茶を喫んだことであった。
そのおこんも、美人薄命のさだめ通りに、去年逝って、大名衆をはじめ、旅人たちをがっかりさせている。
「おこんちやや」と染めぬいた幟だけが、侘しく立ちのこっているばかりであった。おこんの祖父がただ一人、冥土の迎えの来るまでの短い月日を、ほそぼそと、茶釜の湯をわかしつづけている。
眠狂四郎が、その「おこん茶屋」の店さきの床几に腰を下したのは、木枯しかとも思わせる冷たい風が街道を吹き抜けて行く黄昏間近の頃あいであった。
渋茶の湯呑みを把りあげた時であった。
杖にすがって、一歩毎に上半身を傾け乍ら、歩いて来た、みすぼらしい身装の少年が、ふと、狂四郎へ目をとめて、じっと、まばたきもしなかったが、
「ご浪人衆——」
と呼びかけた。
「……?」

視かえす狂四郎の冷たい眼眸に、少年は、怯じもせず、一歩寄って、

「失礼なことを、お訊ね申しまする。お手前様は、お腕前の程、並秀れておいでとお見受けつかまつりましたが、ちがって居りましょうか？」

と、云った。

まだ十二三であろうが、折目正しい言葉遣いと態度であった。

歩行もおぼつかぬ程の足萎えは、生来のものであろう。顔の色は、少年のものとは思えぬ、不気味な蒼白さである。

こうした不幸な子供は、かえって、異常な鋭い直感力をそなえているものである。

「そう、見るか？」

「はい」

「わたしの剣を、何かに役立たせようと、たのみたいのか？」

「はい。魔女を退治して、頂きとう存じます」

「魔女？」

「はい。この土地に、魔女が一人、居りまする。それを、退治して下さいませ」

少年が、そう願った時、奥から、老爺が出て来て、

「これこれ、仙美殿、見知らぬ御仁に、身勝手なお願いをするものでない」

と、たしなめた。

「おやじ――、この庄野の名物は、焼米と、お前の孫娘だけだ、と思っていたが、ほかに、もうひとつ、あるのか？」

狂四郎は、薄ら笑い乍ら、訊ねた。

「いえ、その……、名物だ、なんて、とんでもございませぬ。魔女だなどと、この子供が、自分で、勝手に、そう称(よ)んでいるだけのことでございます」
「どんな女だ、それは？」
「はい……、それは——」
老爺は、口ごもった。
すると、少年が、ひきとって、
「能褒野(のぼの)屋敷の、戻り姫でございます」
と、云った。
そのむかし、日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征の帰途、薨去(こうきょ)したのが、能褒野という。この宿から、東十丁ばかり、高宮の辺を指す。

「戻り姫？　姫というところをみると、どこかの大名の息女か？」
「はい。亀山ご城主石川主殿頭(とのものかみ)様のおん姉君にございます」
少年は、こたえた。
「どこかへ嫁いで、不縁になって出戻って来たので、戻り姫といわれているのだな？」
「はい。お戻りなされて、能褒野にお屋敷をお構えになり、ずっと住んで居られまする」
「それを、どうして、そなたは、魔女と称しているのだ？」
「わたくしの父が、戻り姫のために、殺されました」
少年は、はっきりと、云った。

すると、かたわらで、はらはらしていた老爺が、あわてて、
「旦那様、この子は、思いちがいをして居るのでございます。この子の父親は、決して、殺されたのではございませぬ。……仙美殿、さ――もう、つがもないことを、願うのを止めにして、絵の修業にもどりなされ」
と、なだめた。
少年は、しかし、はげしく、かぶりを振った。
「わたくしは、父が正しかった、と申しているのではありませぬ。けれど、魔女に迷うたために殺されたことは、疑いの余地はありませぬ。……ご浪人衆、浄念寺のご住持におきき下されば、おわかりになります」
「………」
狂四郎は、少年の澄みきった双眸の美しさを、見戍った。
これは、孤独に堪えている者のみが湛えている光であった。余人は知らず、狂四郎には、はっきりと判った。
狂四郎は、やおら、腰を上げると、云った。
「その浄念寺とやらへ、案内してもらおう」
「あ、ありがとう存じます！」
少年は、顔をかがやかして、頭を下げた。
老爺が、かぶりを振って、歩き出した狂四郎の後姿へ、
「さわらぬ神に祟りなしでございますぞ」
と、忠告した。

狂四郎は、薄ら笑い乍ら、少年に、
「年寄をあのように、おそれさせているところをみれば、やはり、戻り姫は魔女のようだな」
と、云った。
「はい、魔女です。男という男を物狂わせてしまう魔女なのです！」
東へ——草道を辿り乍ら、狂四郎は、昏れなずむ野を、足のわるい少年と連れになって歩いていることに、幾年か前にも、同じ経験をしたような錯覚をおぼえた。
「おこん茶屋の爺さんは、そなたに、家へ戻って、絵の修業をするようにすすめていたが、絵師になるつもりか？」
狂四郎は、訊ねた。
「父が絵師でございました」
「成程、それで、そなたは、折目正しく躾られているのか。……何を描いている？」
「鮎を描いて居ります。父も、生涯、鮎だけを描きました。わたくしも、一生、鮎だけを描こうと思います」
狂四郎は、少年の表情が、急に、いきいきと生色を帯びるのを、みとめた。
一歩毎に大きく上半身を傾けなければならぬからだの不自由さも忘れて、少年は、語りはじめた。
「父は、鮎を描くために、鵜を飼って、鮎を獲りました。……わたくしの家には、わたくしが生れる前からの、よく飼い馴らされた鵜が居りました。父は、鵜もつかまえます。わたくしを連れて、知多半島の沖にある島へ行き、鵜をつかまえました。鵜をつかまえるのは、造作はありませ

ぬ。岩の上に、団子のようにまるめた黐をまいて置きます。鵜が、そこにとまって、動けなくなったところを、つかまえます。これを、家へ、つれもどってから、生きた魚を呉れて養成するのは、容易ではありませぬ。わたくしは、物心ついた頃より、鵜と一緒にくらしました。鵜は、利巧な鳥です。……ご浪人衆、鵜飼いをなされたことが、おありですか？」

「いや、まだ――」

「鵜を使うのは、鵜の首の縄のしめ加減が、むつかしいのです。鵜縄は、檜の甘皮を薄く削ったものをよりあわせてつくります。かたくむすんではなりませぬが、あまりゆるく結ぶと、鵜は、鮎を嚥み下してしもうて、もう働かなくなります。といって、あまりかたく結んでおくと、鵜は疲れてしまいます。小さな鮎がのどに通る程度に縄を結ぶのが、コツであります。父は、この結びかたが、上手でありました。それで、父の鵜は、ひともぐりのたびに、大きな鮎を獲りました。……鵜飼いは、月夜には、やりませぬ。闇夜または、上弦の月夜に、宵からはじめます。下弦の月の時は、沈むのを待ちます。鵜舟は、篝を焚きます。闇夜に、篝火で照らせば、鵜の姿が、川底にまで映りますゆえ、鮎はおどろいて、かくれ場所からとび出します。それを、鵜が、獲ります。月夜は、川底がどこも明るいゆえ、篝を焚いても、利きめがありませぬ。鵜は、三四寸の鮎ならば、十尾以上も、のどに溜めおいて、舟へあがって参ります。……父は、鵜が獲った鮎だけを、描きました」

問わず語りに、少年が、話すのを、狂四郎は、黙ってきき乍ら、

――父親が、戻り姫に迷うて殺された、というのは、戻り姫を描きに行って、迷うたのであろうが、鮎だけ描いていた絵師が、なぜ、女を描こうとしたのか？

その疑問をわかせていた。

闇が、下界をすっかり閉ざした頃、狂四郎は、仙美という少年の案内で、浄念寺という寺院へ、着いた。
古刹であった。
納所の案内で、方丈の書院で、待ち乍ら、狂四郎は、いかにも善知識そのものの風姿をもった老僧と対座する窮屈さを思って、すこしばかり、悔いはじめていた。
かたわらで、仙美少年は、身じろぎもせぬ。
広縁に跫音がして、
「お待たせつかまつった」
意外に若々しい声音とともに、障子が開かれた。
一瞥して、
——これは！
と、思わず、息をのんだことであった。
まだ三十ばかりの、匂うような美僧だったのである。眉目のさわやかなすずしさ、鼻梁、口もとのかたちの良さ、そして、法衣がすっきりとよく似合った気品は、無類といえた。
「当寺住職知蓮、お見知りおきを——」
名乗ってから、少年へ、微笑を投げ、
「仙美、とうとう、父御の仇を討って下さる御仁を見つけたとみえるな」
と、云った。

「はい」

少年は、大きく頷いてみせた。

「いや、助太刀をするか、どうか――、貴僧のお話をうかがってから、考えることにいたす」

狂四郎は、云った。

「ご尤もに存ずる。能褒野屋敷の戻り姫が、亀山城主石川主殿頭殿の姉君であることは、もう、おきき及びでござろう。当年三十歳、まさに、女盛りでござる。美しい。それは、それは、美しい女性でござる。妖冶、と申すのは、あのような女性を指すのでござろう。その気象もまた、ただの烈しさではござらぬ。歩々金蓮花を生じ、風にも堪えぬ優姿が、突如、生を断つ斧をふるうおそろしさを、あの戻り姫によって、知らされ申した」

「貴僧ご自身が、それを、目撃されたか？」

「左様――」

知蓮は、まず、自身の経験を語った。

某日――。

知蓮は、能褒野屋敷へ、招かれた。

亡母十三回忌、ということであったが、屋敷へ入ってみると、そのような気配はなく、ひっそりと、しずまっていた。

書院で、しばらく待たされたのち、侍女にみちびかれて、入った広間には、異様な光景があった。

畳一杯に、緋毛氈が敷きつめられ、四隅に、凄じい形相の仁王が、佇立していた。

知蓮は、一歩入ったとたんには、よもや、それが生きた人間とは思わなかった。

座に就いた時、一基の仁王の片手がすこし動いたのに、はっとなって、視線をまわしてみて、それが、逞しい若衆の裸形とみとめて、あきれたことであった。

どういう趣向か、見当もつかぬままに、緋毛氈に坐っていると、やがて、戻り姫が現れて、上座に坐った。

知蓮が、戻り姫に会うのは、その時が、はじめてであった。

知蓮は、戻り姫の妖美に打たれて息をのんだし、姫の方も、かねて噂にきいていた知蓮の際立った美僧ぶりに、食い入るように、眸子を据えつけたことだった。

知蓮が、はっとわれにかえって、

「これが、御母上のご回向でございますか？」

と、皮肉をあびせると、戻り姫は、にっこりして、

「高僧のみが、涅槃に入るのは、片手落ちと存じ、女人のわたしも、わたし流儀で、涅槃に入ってみようと存じますゆえ、引導なと、渡して欲しいと思います」

と云うや、上座から、緋毛氈の上へ降りて来て、さっと、打掛を脱ぎすてた。

知蓮が、固唾をのむうちに、姫は、緞子の丸帯を解きすて、薄紅梅大紋綸子の小袖を、肩からすべり落した。

白羽二重の下着の裾をさばいて、ツツツ……と、知蓮の前に進み寄った姫は、

「よいな、知蓮殿。わたし流儀の涅槃入りとは、これじゃ」

と、云いはなっておいて、その下着をも、脱ぎすてた。

さらに――。

燃えたつような緋縮緬の長襦袢をも、肌から剝ぎすてておいて、下裳いちまいの、むっちりと肉の盈ちた肢体を、しずかに、緋毛氈の上に仰臥させると、

「知蓮殿、近う寄られて、引導をお渡しあれ」

と、誘ったものであった。

知蓮は、ひしと目蓋を閉じて、一心に、経文を誦しはじめていた。

一瞬――。

姫は、豊腰を一捻させると、はね起きて、知蓮にすがりつき、顔へ顔を近寄せ、火のように熱い息を吐きかけて来た。

その熱い息で、男を、癡のように酔わせる自信があるようであった。

知蓮は、無我夢中で、姫をはねのけると、文字通り脱兎になって、逃げ出したのであった。

「……もし、あの際、生きた仁王どもが、見戍っていたのでなかったならば――、そう思うと、いまも、顫えが起るのでござる。身を守るのと、破戒は、紙一重にて、拙僧と雖も、男にかわりはござらぬ」

知蓮は、笑ってみせてから、

「拙僧が、逃げ去ったあと、どのような光景が現出いたしたか、お手前は、容易に、想像がつくことと存ずる。姫が、四人の仁王どもに、どのような奉仕をさせたか……」

と、云った。

狂四郎は、腕を組んで、眉宇もうごかさずに、沈黙をまもった。

「拙僧の次に、招かれたのが、この少年の父親でござった。京の都では、屈指の狩野派でござっ

たが、思うところあって、家風をすてて、当地へ参られ、鮎のみを描くようになった名人でござったが……。やはり、人間の弱さ、男の本能には克てずに、魔女めに迷われ申した。能褒野屋敷へ入ると、そのまま十日が二十日過ぎても、戻る気配がないゆえ、使いを遣すと、まるで、物の怪にとり憑かれたように、姫の姿を写している由。いずれ、描き上げれば、戻るであろう、とこの仙美にも申しきかせて居ったところ、恰度、一月経って、遺体となって、戻って参られたのでござる。仙崖殿は、姫の姿を写しあげた時、突如、物狂ったていになり、姫に挑みかかったため、成敗を蒙った。それが、遺体をはこんで参った者の口上でござった」

語りおわって、知蓮は、狂四郎が、口をひらくのを、待った。

狂四郎は、なお、しばらく、沈黙をつづけていてから、ふと、独語するように、

「この少年の父親は、自身で、墓穴を掘ったことになるようだ。倅が仇を討つ名目は立たぬ。貴僧のように、さっさと、逃げ還れば、生命を落さずに、済んだ」

「助太刀を、いなまれるか？」

「さあ……」

狂四郎は、薄ら笑った。

「眠狂四郎殿。拙僧は、数年前までは、江戸に在り申した」

知蓮は、云った。

「只今もそうであろうが、あの当時も、お手前は、多くの敵を持たれて居った。そして、襲って参る対手は、悉く斬られた模様であった。……因縁と申すものでござった。拙僧がいた寺院に、ふしぎと、お手前の剣で生命の絶えた遺骸が、つぎつぎとはこび込まれて来て、拙僧が葬ったことでござる。さあ、十五体も、かぞえ申したか」

「…………」

「そのお手前を、仙美がともなって参ったのを知って、拙僧は、内心、なんとも、名状しがたいほどの感慨をおぼえたのでござる。……何卒、曲げて、助太刀の儀、ご承諾願えませぬか？　能褒野屋敷へ呼び込まれて、死体となって戻って参ったのは、仙崖殿一人ではなく、すでに、七人もかぞえるのでござる」

美貌の僧侶は、そう語って、頭を下げた。

「お願いつかまつる」

狂四郎は、しかし、さらに、それからまた、しばらく、口を緘んでいた。

ようやく、肚をきめた時、狂四郎は、少年に、云いかけた。

「そなたは、鮎が描けるであろうな？」

「はい。未熟ではございますが――」

少年は、こたえた。その態度には、しかし、天賦を与えられた者の自信があった。

「眠殿――、この子は、父親の域を抜く名人に相成る、と思い申す」

知蓮が、口を添えた。

狂四郎は、頷いてから、こんどは、知蓮に向って、

「仇討にあたっては、貴僧にも、ひとつ、手だすけをお願いいたしたそうか」

と、云った。

「なんなりとも――」

「貴僧には、破戒を、お願いいたしたい」

狂四郎は、冷然として、そう云った。

亀山の鮎

庄野・浄念寺の美僧知蓮が、能褒野屋敷を、訪れたのは、それから、数日後の黄昏刻であった。

知蓮は、戻り姫から涅槃入りを強請されたことのある広間で、およそ、一刻半を、待たされた。瞑目して、身じろぎもせずに待ちつづけ乍ら、知蓮は、しかし、このまま待ち呆けをくわされたまま、追いかえされるであろう不安は、おぼえていなかった。

この屋敷の門前まで、肩をならべて来た眠狂四郎から、

「たぶん、姫は、貴僧を、一刻以上も待たせるに相違ない。おのが流儀の涅槃入りとやらを、貴僧から拒否され、誇りを傷つけられた心奢った女ならば、貴僧の方が、頭を下げて来ても、容易に、許す気色は示すまい。しかし、それは、あくまで、虚飾の態度に過ぎぬ。貴僧の訪れは、姫を、とび立つばかりに悦ばせるに相違ない。ただ、心奢った女は、その態度を、見せまい。……わたしが、予想するに、姫は、貴僧に対して、相当苛酷で、残忍な奉仕を、要求するであろう。貴僧は、決して、その要求に、さからわず、唯唯諾諾と従って頂こう」

と、云われていたのである。

自分の訪問をきいて、どのような趣向を、戻り姫が思いつくか、見当もつかぬが、知蓮には、覚悟ができていた。

戻り姫が、おのが烈しい気象のおもむくままのくらしをしていることは、この広間を、一瞥し

ただけで、瞭然としている。
この前、知蓮が招かれた時は、三十畳一杯に、燃えるような緋毛氈が敷きつめられてあった。
今日は、それはとりはらわれ、白いけものの毛皮がひろげてある。
「お入り――」
腰元の声が、かかって、襖が左右にひらかれた。
入って来たのは、戻り姫ただ一人であった。
なんの考えか、黒衣であった。あたまも、市井の莫連女のように洗い髪にして、肩に散らしていた。
この装いを考え、実現するために、一刻半という長い時間を必要としたのであろう。
そして、この装いは、たしかに、その妖冶な容子をさらに一段と際立たせるのに、効果があった。
姫自身、黒羽二重の衣裳につつんだおのが姿を、鏡にうつしてみて、神秘なまでに、妖しく映えた美しさが、必ず、憎い美男僧の魂を惹き込んでしまうに相違ない、とにんまりしたに相違ない。
仏典に、
『旗が動くのでもなければ、風が旗を動かすのでもなく、見る者の心が動くのである』
という言葉がある。
知蓮の心は、まさしく、その黒い姿に、動いた。
姫は、上座に就くと、冷やかな語気で、
「なんの存念があって、たずねて参られた？」

と、訊ねた。

知蓮は、うやうやしく頭を下げると、

「菩提は水に澄める月、手に取るに取られず、煩悩は家の犬、打てど門を去らぬ、という言葉がありまするが、拙僧も、若年にして、いまだ修行が足らず、紅粉青蛾の美しさに迷うてしまいました」

と、云った。

姫は、それをきくと、「ほほほ……」と、高笑いしてから、

「御坊が心変りをなされても、もはや、わたしには、涅槃入りの気は失せましたぞえ」

と、云った。

「人、生れて静かなるは天の欲、物に感じて動くは性の欲、と礼記にありまする。性の欲を抑えるのが、聖になるための修業でありましょう。拙僧は、その修業をすて、地獄に堕ちても悔いぬ美しいものに、生れてはじめて、迷うたのでございます。姫君のおん前で、愚者となることを、いまは、こいねがう次第にございまする」

「巧言を使うものよの。地獄に堕ちても、かまわぬとか？」

「はい」

「ほほほ……」

姫は、高い声で、笑った。

「鳥は、高い山でも、ひくいと思うて、その頂きの大樹の梢に、巣をつくる。また、魚は、深い淵でもまだ浅いと思うて、穴をその底に掘る。でも、鳥も魚も、餌を投げてやれば、なんの造作もなく、獲れるものよ」

「姫様——なにとぞ！」

知蓮は、毛皮の上へ、両手をつかえた。

「泥人形めが、水遊びをしたい、と申して居るかえ？」

「溺れ死すとも、露いささかも、悔いはつかまつりませぬ」

これをきくと、姫は、片手をのばして、床柱に沿うて垂れている赤い紐を、引いた。

遠くで、鈴が鳴った。

すぐに、襖が開かれ、四人の腰元によって、水を湛えた盥と床几が、はこび込まれて来た。

「さ、泥人形めに、水遊びをさせて進ぜましょうか」

姫は、やおら立つと、上座から降りて来て、床几に腰をおろした。腰元が、左右から、裳裾を引いて、前をひらいた。

姫は、脛をあらわにすると、白いかたちのいい両足を、盥の縁にかけた。

「近う——」

促されて、知蓮は、膝行すると、うやうやしく両手をさしのべた。姫は、その掌の上へ、蹠をのせた。

「有難き幸せ……」

知蓮は、珍宝を扱うように、ぬるまにされた水の中へ、嫩かな両足を漬けさせると、そろそろと洗いはじめた。

姫は、腰元たちを退らせておいて、冷やかな眼眸を、青年僧の秀麗な貌へ、当てて、洗わせるにまかせていたが、そのうちに、徐々に、膝を開いた。それにつれて、富士見西行の高裾模様の衣裳の前が、両脇へ滑り落ち、つづいて、白綸子の下着が、燃える緋縮緬が、微かな衣ずれの音

ともに、畳へ落ち、滑石のような豊かな膝が、あらわになった。

そして、内腿の奥まで、緋縮緬の翳を妖しく刷き乍ら、仄かな肌の匂いを漂わせて、燭台の光を、容れた。

知蓮の視線が、そこへ、吸い寄せられるように、投げられた――とたん。

姫の片足が水をはねあげ、知蓮の顔は、したたかに、濡れた。

「ほほほ……」

驕りに満ちた笑い声が、高く、ほとばしった。

しかし、その笑い声は、不意に、中断した。

知蓮は、ぐらぐらと上半身を崩して、あやうく盥に落ち込もうとする姫を、あわてて、支えた。

姫の背後には、いつの間にか、眠狂四郎が、うっそりと立っていたのである。

庄野宿から二里――。広い坦々とした平野の中の街道が、やがて、丘陵に沿うて、曲折して、深い木立の松林をくぐると、亀山に入る。

石川主殿頭・六万石の城下であった。

街道を、裾を曳いたかたちに、山麓をまわして、亀山城は、小高い台地の上にそびえている。

城下の町は、その下に、ひとかたまりになって、在った。

天守閣と対応する彼方に、城下にかぶさるように、鈴鹿の山波が、空を截って、黒い。

亀山は、古い町である。

安芸守関宗一が、関の城を此処に移した以前から、町として栄えている。

室町時代、すでに、慈恩寺、新福寺、阿弥陀寺、長福寺など、神院の七堂が見え、おのおの宿所を持って、その東西に市をひらいていた。

天正十五年、豊臣秀吉は、岡本下野守重政を、亀山に封じたが、その時、

「要衝の地ゆえ、城下に迷路をつくれ」

と、命じた。

このため、町中の道は、道幅はせばめられ、すべて、曲りくねり、上下してしまった。この道は、そのまま、徳川の時代になっても、のこされ、東海道の中で最も不便な往還になっている。

奇妙なとりあわせの一行が、朝もまだ早い、路上が綺麗に掃ききよめられた頃合、しずかに、通り過ぎて行った。

一挺の駕籠をはさんで、水もしたたる美貌の僧侶と杖にすがった顔面蒼白の足萎えの少年と、そして異相の浪人者の三人であった。

西町に入ってから、右へ折れ、迷路というにふさわしい狭い、曲りくねった道をしばらく辿ってから、一行が到着したのは、神院七堂のひとつ長福寺という古刹であった。

ここは、城主石川氏の菩提寺であった。

広い境内の片隅で、落葉を集めて燃やしていた納所が、一行をみとめて、

「お——知蓮様」

と、鄭重に挨拶した。

知蓮は、この長福寺の住持仏蓮の一の弟子だったのである。

知蓮は、納所に近づくと、

「ご城主の行事は、いまも変らぬのであろうな？」

と、訊ねた。

「はい、変りませぬ。本日は、ご生母の命日にあたられますゆえ、巳の刻には、必ずご参詣に相成ります」

「やはり、お忍びの供数であろうな？」

「はい、近習のかた、六七人に限られて居ります」

城主石川主殿頭は、在城するかぎり、先祖諸精霊の命日には、欠かさずに、お忍びで、当寺へ参詣するならわしだったのである。

尤も、住持仏蓮が手ずからつくってさし出す斎が、大層美味で、それを摂る愉しみもあった。

主殿頭は、まだ二十四歳であったが、風流の道を心得た、頭脳の冴えた大名であった。

知蓮は、庫裡に至ると、人足たちに、駕籠をそのまま、屋内にかつぎ込ませて、納所に怪訝の思いをさせた。

狂四郎は、わざと、知蓮に従って庫裡には入らず、焚かれる落葉のそばに、ふところ手で、立った。

この古刹のたたずまいは、狂四郎が幼い時代をすごした江戸郊外の広尾町の祥雲寺のそれと似かよっていたのである。

下僕の弥助が、こうして落葉を焚いて、その中で、芋を焼いてくれたものであった。その芋のうまさは、いまも、忘れぬ。

仙美少年が、近寄って来た。

「眠様――」

真剣な眼眸を、狂四郎の顔へ当てて、云った。

「このお寺で、騒動を起されるのでございますね？」
「騒動になるか、ならぬか——こちらも、まだ、予測できぬ」
「ご城主様は、屹度お怒りなさいます」
「かまわぬことだ」
「でも……」
「怕くなったか、絵師殿？」
「いえ、怕くはありませぬ。でも、ご住持がたに、迷惑をおかけするのではないかと……」
「すでに、迷惑は、かけて居る。そのような心配は、無用にするがよい。それより、そなたは、絵の修業をするために、京か江戸へ出たい気持はないか？」
「ございます」
「その機会を、今日、つくってやろう、とこちらは、考えているところだ」
「……？」
仙美少年は、狂四郎の横顔を、じっと瞶めていたが、
「したれど……、もし、騒動になったならば、わたくしどもは、生きて、この亀山から出られますまい」
と、云った。
「そなただけは、出られる」
狂四郎は、焚火の煙を見戍り乍ら、云った。
痩せた長身に、湛えられている静かな冷たい気色は、鋭い感覚を天性の中に与えられた少年に、ある強い感動を与えた。

石川主殿頭は、紅梅月毛を駆って、長福寺に到着した。

本堂に於ける回向ののち、墓地に入って、自身で、閼伽井から水を汲んで、生母の墓碑へそそいだ主殿頭は、斎の座に就くべく、足早やに、露地を抜けて行こうとした。近習たちは、境内で待って居り、主殿頭は、ただ一人であった。

ふと——。

主殿頭は、心字池に架けられた石造りの太鼓橋の上で、数羽の鵜が、いささか滑稽な身ぶりで、濡れた羽根を拡げて、バタバタやっているのを、みとめて、眉宇をひそめた。

鵜縄をにぎっているのは、橋袂の高麗塔のかたわらに立つ一人の少年であった。

主殿頭は、池畔へ近づいた。

「その方は、殺生禁断の聖地で、鵜飼いの稽古をいたして居るのか？」

咎められた少年は、黙って、ふかく頭を下げた。

主殿頭は、笑い乍ら、

「この池では、鮎は獲れまい。鯉を嚥ませるのか？」

と、訊ねた。

すると、背後から、

「獲ったのは、落ち鮎でございます」

こたえた者がある。

主殿頭は、振りかえって、はっとなるほどの美貌の僧を、見出した。

「落ち鮎？　この池へ、鈴鹿川から、季節はずれな生き残りが、流れ込んで来た、と申すのか？」
知蓮は、微笑して、
「斎の膳部に、活きたままの落ち鮎をお添えつかまつりますれば、ご賞美を願わしゅう存じまする」
と、云った。
主殿頭は、カンの鋭い青年であった。
——何かあるな？
と、直感すると、
「あのわっぱは、何者のせがれだ？」
と、訊ねた。
「父親は、狩野仙崖と申す、京都の絵師でございました。思うところあり、家風をすてて、当地へ参り、鮎のみを十年あまり描いて居りました」
「きいて居る。……いや、その鮎の絵を、わしは、観たおぼえもある」
「名人でございました。ところが、狩野仙崖も、所詮（しょせん）は、煩悩の徒でございました。去年の春、能褒野にあるさるお屋敷に招かれて、そこに住まわれる美しい女性（にょしょう）の姿を描くことを、求められると、忽（たちま）ち、鮎のみを描くというおのが誓いを破ってしまいました」
「うむ。判った。……で、その仙崖と申す絵師は、もはや、生存いたさぬのだな？」
主殿頭の表情には、苦渋の色があった。
「はい。そのお屋敷に在ること一月あまりで、ある日、遺体となって、家へ戻って参りました。遺体をはこんで参った者の口上によれば、その女性の姿を写すうちに、仙崖は、物狂いのていに

相成り、挑みかかって、成敗を蒙った由にございます」

　それをきいて、主殿頭の眉間が、微かに、痙攣（けいれん）した。

　知蓮の方は、無表情を保って、言葉を継いだ。

「さいわいに、仙崖の才分は、あれに在りまする伜が、享（う）けて居り、将来は、父以上の絵師になるかと存じまするゆえ、ご記憶たまわりますれば、この上の幸甚（こうじん）はございませぬ」

「うむ。おぼえておこう」

　主殿頭は、頷いて、歩き出した。

　やがて、斎の座に就いた時、主殿頭の面持は、暗いものであった。常ならば、近習を相伴（しょうばん）させるのであったが、この日だけは、主殿頭自身が、遠ざけて、ただ一人で、座に就いた。

　斎の膳をはこんで来たのは、知蓮であった。

「落ち鮎を見よう」

　主殿頭は、知蓮を睨（にら）むように見据えて、催促した。

「ただいま、すぐに――」

　知蓮は、退（さが）って行った。

　主殿頭は、四人の納所によって、はこび込まれて来た一畳大の白木の台を、固唾をのんで、見戍った。

　白木の台は、白布で掩（おお）われていた。

　それが、主殿頭の前に据えられると、知蓮が、

「何卒（なにとぞ）、ご賞美を――」

と云って、白布の端をつまんで、するすると、手もとへ引いた。
台上には、一糸まとわぬ、豊かに肉の盈ちた白い裸身が、仰臥させられていた。
猿ぐつわをかまされ、四肢は、台に荒縄でくくりつけられ、身うごきできないようにされていた。
主殿頭は、絖にも似た肌理なめらかな腹部へ、視線を釘づけた。
そこには、胸の隆起から、下腹のかぐろい茂みにかけて、十数尾とかぞえられる鮎の群が、泳いでいたのである。
見事な図であった。但し、それは、ただの構図ではなかった。
それらの鮎は、急湍をさかのぼる肉に香気を持った初鮎ではなく、産卵を終えて、流れを下って来る、疲れはてた惨めな落ち鮎だったのである。なかには、すでに、命を喪って、腹をかえしたのもいた。乳房を岩と見たてて、それに鼻づらをぶちつけて、ぐったりとなったのもいたし、また、下腹の茂みを岸辺からさし出た茨棘と見たてて、それにひっかかって、バタバタと苦しがっているのもいた。
「…………」
主殿頭は、凝然と、まばたきもせずに、眸子を据えつづけている。
裸女は、猿ぐつわの下から、ひくい呻きをあげて、頸に食い込む荒縄の苦しさを、額の皺に示し乍ら、必死に、この屈辱から遁れたい眼眸を、弟である亀山城主へ、すがりつかせた。
「……む……、う、む、む……」
主殿頭は、しかし、実姉の苦しみなど無視して、落ち鮎のあわれな生態を、凝視しつづけていたが、ふと、われにかえったように、知蓮へ、視線を移した。

「この落ち鮎を、あの小せがれが、獲ったと申すのか？」
「左様にございます」
「幾歳だ？」
「十二歳でございます」
「天才だな」
「まさしく――」
「ところで、この趣向は、御坊の思いつきか？」
「いえ――」
知蓮は、若い大名の心がすこしも荒れも乱れもしていないのを看て取って、微笑した。
「一人の浪人者の思案にございます」
「何者だな？」
「眠狂四郎という仮名を用う稀代の兵法者にございます」
知蓮は、眠狂四郎がいかなるおそるべき使い手であるか、おのが見聞するところを、述べた。
黙ってききおわった主殿頭は、
「いま、その者は当寺に、罷り在るか？」
と、訊ねた。
知蓮は、狂四郎を呼びに、座を立った。
しかし、もうその時は、狂四郎の姿は、消えていた。
着流しのふところ手姿は、折れ曲った城下の街道を、ゆっくりと、西へ向って、歩いていた。

「眠様っ！」
後方から、必死の呼び声が、追って来た。
振りかえった狂四郎は、杖にすがって、上半身を大きく傾けつつ、急いで来るいたましい姿を、視た。
追いついて来るのを待って、狂四郎は、云った。
「この城のあるじは、わたしの知る大名のうちでは、頭を下げてもいい数尠い人物の一人と思われる」
池の畔に於ける、主殿頭と知蓮の問答を、物蔭できいた狂四郎は、そうさとったのである。
「そなたが、仕えてよい大名であろう。知蓮殿から、そなたを、江戸か京で、修業させて頂きたい、とたのむ筈だ。まちがいなく、どちらかの屋敷内に、一室を与えられると思う。……精進するがよい」
そう云われると、少年は、みるみる双眸を潤ませた。
「忝けのう存じました。ご恩のほど、生涯忘却つかまつりませぬ」
ふかく下げた頭を、少年が擡げた時、狂四郎は、もう後姿をみせて、数歩の先に在った。
「忝けのう存じました」
少年は、もう一度、ふかく、頭を下げた。

関の茶屋

関の宿。

昔、鈴鹿峠(すずかとうげ)を越えて来る旅人を征する鈴鹿の関所が、ここにあった。いまは、山頭に、関守屋敷の古跡をのこすばかりであるが、その殷賑(いんしん)は、かえってむかしにまさり、となりの亀山城下をしのぐばかりであった。

上下十二丁に、川北本陣と伊藤脇本陣を中心として、六百余の旅籠が竝(なら)んでいる。

箱根と比肩する鈴鹿の険路を越えて来た者、これから越える者は、どうしても、この関の宿で一泊しなければならないからである。

ひとつには、ここは、近江路と伊勢路との分岐点でもあり、右へ折れると、伊賀・大和へ辿る加太(かぶと)越えになるのであった。

また、旅人の足をとどめさせる「関の地蔵さん」で名を売っている九関山宝蔵寺地蔵院も、ここにはある。

寺記に謂(い)う。

聖武(しょうむ)帝の頃、海内(かいだい)に痘(もがさ)が流行して、幾万の人民が、死に、あるいは化物面になった。僧正行基は、この病難を救うべく、身長三尺六寸の地蔵尊を手刻して、病悩除滅の加持を為した。延長五年に、別当阿闍梨(あじゃり)宥応(ゆうおう)によって、尊像は、この関に移された。中古、盗賊に奪われ、やっと、とりもどされると、火災に遭(お)うて、堂とともに、烏有(うゆう)に帰した。文明四年に、再び尊像が興され、

本堂も建営された。開眼は、一休和尚であった。

一休噺に依れば――。

尊像は、永い歳月のあいだ、路傍に放置されていて、馬蹄の塵によごれはてていた。里人数人が、もったいないと思い、きれいにあらい、毀れた部分を修補して、僧侶が往来する姿をみとめたならば、呼びとめて、開眼供養をしてもらおう、と待っていた。

そこへ、通りかかったのが、一休和尚であった。

開眼をたのまれた一休は、気軽に請けあって、地蔵に向うと、経を誦むかわりに、

　釈迦は過ぎ弥勒はいまだ出でぬ間の
　　かかるうき世に目あかしめ地蔵

と歌って、衣の前をまくると、じゃあじゃあと、小便をひっかけた。

里人たちは、憤激して、一休を追いはらって、もう一度、尊像をあらい清め、在所の寺院の僧侶をやとって、あらためて、開眼供養をしてもらった。

ところが、その夜、その里人の一人に、地蔵尊が、とりついて、

「名僧の供養で目を開いたにも拘らず、それにあきたらず、在所の俗悪坊主に供養させるとは、何事であろうか」

と、きめつけ、高熱を出させた。

他の里人たちは、あわてて、去んだ一休和尚の行方をさがしもとめ、やっと桑名城下で発見して、「もう一度お戻り下されて、ご供養の儀を――」と乞うた。

一休は、高笑いして、自分がかいていた犢鼻褌をはずすと、

「拙僧が詠んだ歌を三べんとなえて、このふんどしを、地蔵さんの襟まきにかけるとよい」

と教えた。
里人は、半信半疑で、それを持ちかえって、教えられた通りにすると、たちまち、高熱を煩っていた者が快癒した。
爾来、関の地蔵尊は、ふんどしを襟くびにかけられている。
この卑俗ならわしは、いつの間にか、別の意味にすりかえられた。
そして、六百余の旅籠が、ことごとく、数人ずつ飯盛女を置いて、地蔵尊をおがんだ旅人を牀にさそい入れて、その精力を試させる、という次第になったのである。
当時、飯盛の枕代は、わずか八文から十二文の安さであった。関の宿に泊って、飯盛も買わないのは、世にも稀な吝嗇坊と、嗤われた、という。
関の飯盛は、なぜか、出女房、と称ばれ、三年年期で、一両で売られて来た百姓娘ばかりであった。その年期証文には、必ず、「年貢上納のために、やむなく売り申し候」という一条が記されてあった。他の名目では、幕府が、身売を許さなかったからである。
税金を納めるためならば、娘を売ってもよろしい、と認める程、徳川幕府の政策は徹底した中央集権主義だったのである。
ともあれ、「関の宿は、千軒出女房」といわれたのは、誇張ではなかった。
ただ――。
関の宿で、一箇処だけ、旅人がいかに躍起になって口説いてもなびかぬ女がいる場所があった。
地蔵院門前に竝ぶ十軒の休み茶屋の茶汲み女たちであった。
この茶汲み女は、年貢上納のために飯盛に売られて来た者たちであったが、器量佳しのために、宿の年寄たちからえらばれて、みがきあげられ、作法を仕込まれた娘なのであった。いわば、関

の宿の看板娘たちであった。

面白いことには、茶汲み女は、一軒に二人と限られ、しかも、すべて、「小まん」と呼ばれていた。

関の小まんが、亀山がよい
　月に雪駄が二十五足

この俚謡は、日本全土でうたわれている。

関の小まんの仇討譚は、あまりにも有名であった。

長州藩家中なにがしの寡婦は、身ごもり乍らも、良人の仇敵を追って、関まで来て、山田屋という旅籠で、娘を生んだが、産後がわるく、亡くなった。旅籠のあるじは、娘を養女として、小まんと名づけて、育てあげ、母の遺志を継がせた。小まんは、文武両道を学び、十八歳で、見事亡父の敵を討った、という。

小まんを誇りとする関の宿では、その名を永久にとどめるために、地蔵院門前の竝び茶屋の美しい娘たちに、のこらず、小まんを名のらせたのであった。したがって、この娘たちには、宿の若者はもとより、旅人にも、絶対に手をつけさせない、という禁忌をつくっていた。

きくが、一人欠けていた七の茶屋に、やとわれたのは、五日前からであったが、その優しい姿は、たちまち大層な評判を呼んでいた。

紺地木綿のこまかな縞合の着物に、緋縮緬の襷、前垂をつける いでたちが、門前茶屋の女たちの揃い姿であったが、きくが現れると、その面差と肌の白さとすらりとした姿態は、ひときわ目

立って、美しく、その装を映えさせた。

きくが、この七の茶屋の茶汲みになったのは、偶然ではなかった。

四日市の家に、鹿右衛門が、最後に泊ったのは、この夏の終りであったが、その時、鹿右衛門は、何気ない口調で、

「わしも、もう年齢ゆえ、いつ、万が一ということがあるやも知れぬ。その時は、そなたは、この家をひきはらうがよい。この家に、一人ぼっちですごしていては、幸せを見つける機会はめぐっては来ないゆえ、世間へ出て行った方がよい。といって、身寄りもないそなたには、行く先のあてもない。もし、そなたが、いやでなければ、そなたの綺麗な姿を、世間へひろく披露するのも、わるくない、と思う。関の地蔵さんの門前茶屋の一軒――七の茶屋は、わしが懇意にしている。そなたが、行って、わしの名を告げれば、よろこんで、茶汲みにしてくれるだろう」

と云い、関の宿は、飯盛が千人もいる淫靡な町だが、その十軒の門前茶屋の「小まん」と名のる茶汲み女たちだけは、宿の人々からも、大切にされ、また旅人たちも、その心得で扱ってくれて、これまで、多くの娘が、玉の輿に乗る幸運をつかんだ、ときいて居る、と説明してくれたことであった。

公儀隠密であった鹿右衛門は、すでに、その時、わが身に危険が迫っていることを、察知していたに相違ない。

石薬師で、鹿右衛門の非業の最期を見とどけて、眠狂四郎とともに、その寺を出た時、きくは、狂四郎から、

「やはり、そなたを連れるわけにはいかぬ」

冷たく宣言されて、ふと、鹿右衛門の遺言となったその言葉を思い出したのであった。

そして、きくは、駕籠で、この関の宿にやって来た。
七の茶屋のあるじは、もう古稀を迎えた老爺であった。
鹿右衛門にそう云われた、ときくから告げられると、老爺は、ひとつ深く歎息して、
「あの御仁も、とうとう、この世を去られたか」
と、独語をもらしたものであった。
老爺は、むかし、江戸八丁堀で、岡っ引をつとめた男であった。この茶屋のあるじになったのは、べつに、道中見張りの隠密手先になるためではなく、もともと、ここが生家だったのである。ただ、鹿右衛門のような公儀隠密にとっては、おのが素姓を打明けて、街道を通って行く者を見覚えさせておく役目をつとめさせるには、最も信頼できる男だったのである。事実また、この老爺は、鹿右衛門の探索行動上に、大いに役に立った。
そのような間柄であったので、鹿右衛門は、きくを安心して、預けることができたのである。
ところで――。
きくが、茶汲みになったのは、眠狂四郎が、ここを通るのを待っている、という目的があった。
眠狂四郎は、石薬師できくと別れると、いったん、宮までひきかえして行った。宮のお七里役人に、鹿右衛門が生命を賭けて探索して記しとめた、桑名港に於ける西国諸藩の密貿易に関する調書が、石薬師本尊の体内にかくされてある、と報せるためであった。
それを報せたならば、狂四郎は、再び、西へ向って、歩いて来る筈であった。
狂四郎が、庄野、亀山を経て、いつ、関の宿へ入って来るか――きくは、その姿を見出すのを生甲斐にして、七の茶屋で働くことにしたのである。
――今日は、きっと、お見えになる！

その期待に胸をはずませて、きくは、この五日間をすごしていた。店へ出ているあいだ、視線は、絶えず、街道の東の方角へ、向けられていた。

朝は、どの店よりもはやくひらいたし、夕は、いちばんおそく閉じた。門前茶屋は、ふつう、辰刻（午前八時）になってからでなければ、茶汲み女は姿を見せないならわしであったが、きくは、明け六つには、もう店に出ていた。もう一人いる「小まん」には、人を待つための勝手な早起きゆえ、気にかけないで欲しい、とことわっておいてある。店をはやくひらき、おそく閉じれば、それだけ、茶汲みに負担がかかる道理であったが、きくは一人でひき受け、労力などすこしも惜しまなかった。

ところで――。

当時は、早発ちの旅人は、夜が明けきらぬうちに家や旅籠を出たものであった。関の宿も例外ではなく、いまだ闇の消え去らぬ街道に、ひとしきり跫音がひびいた。敵娼の飯盛は、二階の千本格子窓から、黙って見送るだけであった。

夜がすっかり明けはなたれて、きくが店をひらいた頃合は、かえって、路上に人影は、ほんのちらほら程度になっていた。

卯の下刻（七時）頃から、急に、さわがしくなるのであった。

きくが、店の前の路面へ、きれいに打ち水を終えた折であった。

一人の虚無僧が、ゆっくりと歩み寄った。

「よろしいかな？」

「はい、どうぞ、おかけ下さいまし」
虚無僧は、甘酒を所望した。
朱塗りの盆にそれをのせて、きくが出て来た時、檐下から一羽の雀が降りて来て、床几の端に、ちょこんと、とまった。
チチチ……
その啼き声をきいて、きくは、「あ——忘れていた」と、微笑した。
きいた風に首をのばして啼く雀へ、きくは、跼みかかって、
「ごめんなさい。すぐに、持って来ますよ」
と、云いのこしておいて、奥へ入って、昨日の売れ残りの蕎麦饅頭をひとつ、掌にのせて来た。
雀は、饅頭をつついて、かけらをくわえると、飛びあがって行った。
七の茶屋に、数年前から飼われている六助と名づけられた雀であった。一年のうち、幾回か、檐下に巣をつくって、卵を生み、雛にかえして育てている。
雛が巣立ったあと、六助は、再び店へ降りて来て、あるじや茶汲み女や客に愛敬をふりまくのであった。
七の茶屋の雀、といえば、この関の宿でも有名であった。
きくは、床几の饅頭と檐の棰の巣とのあいだを、いくども往き来する六助を、微笑で見戍った。
巣の中の雛たちは、もうすっかり大きくなって、飛び立てるばかりになってい乍ら、黄色な嘴をいっぱいにひらけて、餌をせがんでいる。
「六ちゃん、もう、お止しなさい。くたびれてしまいますよ」
きくが云いきかせた——瞬間、飛び立った六助が、バタバタともがいて、地べたへ落下した。

きくは、あっとなって、馳せ寄ると、六助を、両手にすくいあげてみた。
銀色に光る長い針が、その胸に突き刺さっていた。
きくは、屹となって、背後の虚無僧をふりかえった。
「お、お手前様の仕業でございますね？」
「…………」
虚無僧は、黙然として、身じろぎもせぬ。
その無言が、肯定を意味していた。
「なんというむごいことを！……なにが、お気に召さずに、このような残忍な振舞いを、なされましたのか！」
きくは、必死になって、なじった。
すると――。
その非難に対して、こたえる代りに、虚無僧の口からもらされたのは、
「恋しい男の来るのを待って居る風情は、よいものだ」
その言葉であった。
きくは、はっと息をのんだ。
虚無僧の声音は、肌寒くなるような冷たさであった。
「眠狂四郎は、たぶん、今日の午すぎ、ここを通るであろう」
「…………」
きくの全身が、わなないた。
「しかし、あわれや、そなたは、眠狂四郎に、もう、めぐり会えまい」

「…………」

「そなたは、どうやら、眠狂四郎に、しんそこから惚れた模様だな。……当方で調べたところ、そなたは、三年の歳月をついやして、山繭の紬の着物を、一枚つくりあげた。いま、眠狂四郎がきて居る小袖が、それだ。そなたは、おそらく、生涯ただ一人の男、と思いきめた者に、きせるつもりであったろう。そして、それを、眠狂四郎にきせた。もはや、そなたの心中では、眠狂四郎こそ、おのが身を捧げるこの世で唯一の男、となっているに相違ない。いかがだな？」

虚無僧は、見事に、云い当てた。

「お、お手前様は、何人です？」

「きかせてもはじまらぬ。……ただ、いささか卑劣な手段を弄しても、眠狂四郎を討ち取らねばならぬ使命を帯びた者と、心得ておいてもらおう」

そう云って、虚無僧は、やおら、床几から腰を上げた。

きくは、反射的に身をひるがえそうとしたが、そのいとまを与えられず、鳩尾へ拳をくらって、その場へ崩れ落ちた。

その時すでに、店さきには、音もなく、一挺の駕籠が寄せられていて、きくをのせるべく、待ちかまえていたのである。

眠狂四郎は、虚無僧の予言たがわず、午すぎに、地蔵院門前へ、その痩身をはこんで来た。

七の茶屋の前を、ゆっくりと行き過ぎようとしたとたん、

「お待ち下さいまし！」

呼びとめられた。狂四郎は、急いで出て来た茶屋のあるじらしい老爺が、異様に緊張している

様子を、みとめた。

「眠様でございますね？」

「お主は？」

狂四郎は、ただの茶屋のあるじではない、と看てとった。

「六兵衛と申します。石薬師の鹿右衛門殿とは、懇意にして頂いて居りました。八丁堀の御用聞きのなれの果てでございます」

「ふむ。それで……？」

「きくという娘を、ご存じでございますね？」

「知って居る」

「今朝がた、さらわれましてございます」

「……？」

狂四郎は、眉宇をひそめた。

「きくは、貴方様をおびき寄せる囮（おとり）にされる模様でございます」

六兵衛は、告げておいて、奥へいざなった。

居間で対座すると、六兵衛は、長火鉢の猫板にのせてあった一枚の紙を、狂四郎に手渡した。

『眠狂四郎殿。夫子（ふうし）、借衣の着心地は如何（いかが）？　さだめし、よろしかるべし、と推測仕（つかまつ）り候。なんとなれば、男を知らぬ女が、三年の歳月を費やし、心魂をこめて、仕立てあげたる着物なれば也。女心のあわれと申すべし。白紗（はくしゃ）を泥中に入れて、之（これ）と与（とも）に黒くなることを、さらに悔いず、むしろ生涯の希求とす。夫子、一片の義心あらば、すみやかに、新服を脱ぎすてて、敝（やぶ）れたる古服にもどり、柔婉（にゅうえん）にして心美（うる）わしき婦女子の生命を救うべし』

六兵衛は、狂四郎が読み了るのを待って、仏壇から、一羽の雀のむくろをとりおろして、
「これが、その手紙の上にのせてあったのでございます」
と、云った。
六助と名づけたこの可憐な愛敬者が、この七の茶屋の名物になっていたことを、六兵衛が、語るのを、黙ってきいた狂四郎は、そのむくろを手に把って、鋭く突き刺さった二寸あまりの吹針を、抜きとってみた。
——薩摩の隼人隠密党ならば、このような卑劣なまねはすまい。
また一人、どこからか、残忍冷酷な刺客が、行手にたちふさがって来たことになる。
狂四郎は、六兵衛へ、視線をかえした。
「きくは、この店で、わたしの来るのを待っていたのか？」
「左様でございます。他の店よりも、一刻はやく、店をあけたのも、そのためでございました。それが、かえって、仇となったのでございます。きくさんは、貴方様のことを、寝ても、さめても、想いつづけていたに相違ございませぬ。てまえにも、貴方様のことばかり、語って居ったのでございます、そのおかげで、通りかかられた貴方様を一目見て、——あ、このおかただ、とてまえには、判ったのでございます」
「………」
「お願いいたします。きくさんを、どうぞ、救い出して下さいまし」
「………」
狂四郎は、すぐには、返辞をせず、おのが身にまとっている紬の着物を眺めた。
——うかつであった。

微かな悔いが、胸を疼かせた。

こちらは、隼人隠密党頭取の竜堂寺釆女正との決闘で、着流した黒羽二重を、胸から帯ぎわまで截られたので、きくの前にたたまれていた紬の小袖を、恰度さいわいとして、着たままであった。

——きくは、五年のあいだ、たった一人で、あの家で、留守居をしていた、という。

その孤独の淋しさに堪えているうちに、見知らぬ男を一人、心に描いて、その男に着せる小袖をつくりあげてみようと、思い立ち、それを実現したのだ。

たまたま、仕立てあがったところへ、この眠狂四郎が現れた。

——きくは、このことを、偶然とは、考えられなくなった。

——そうか、あのように、けんめいになって、おれに連れて行って欲しい、とせがんだのは、そのためであったのか。

狂四郎は、無想正宗を把ると、腰を上げた。

「造作になった。失礼する」

「眠様！」

六兵衛は、必死の面持で、

「きくさんを、お救い下さいましょうか？」

眠眸をすがりつかせた。

狂四郎は、薄ら笑った。そして、こたえた言葉は、

「借りた着物は、返さねばなるまい」

それであった。

復讐坂の下

関の宿から、鈴鹿峠の坂の下までの一里半は、すべて、坂である。その中には、八分ノ一という急勾配も含まれていて、旅人に、いよいよこれから険しい鈴鹿峠を越える覚悟をさせることになる。

観音山を右手に眺め乍ら、坂をのぼっているうちに、山がしだいに、目の前に迫る。

一の瀬という第一の峠に至ると、右手に、筆捨山が、屹立する。

山頂まで、いかめしい巌が重畳した中から、枝葉屈曲して作り松のような古松が、それぞれの風情を誇りあった山容を、狩野法眼元信が、写そうとして、思わず、

「絵にも描けず」

と、心に逮ばぬことをなげいて、筆をすてた、という逸話から、筆捨山と称ばれるようになった。

眠狂四郎は、相変らずのふところ手で、坂をのぼって来ると、その筆捨山と対峙する一の瀬峠の休み茶屋の床几に、腰を下した。

自分を待ち伏せている敵が、どのあたりで出現するか――これは、見当のつかぬことであった。

ただ、敵は、当然、こちらが鈴鹿峠へ至る時刻をさとっているであろうし、きくという虜を用意した上からは、不意を衝く卑劣な罠を備えたとは思われない。

――坂の下の前後のあたりで、おれを、決闘の場所へ誘うであろう。

そう考えて、のぼって来た狂四郎であった。

茶屋には、三度飛脚が一人憩うていた。

狂四郎が、湯呑みを把りあげた時、うしろの床几にいるその飛脚が、三度笠の蔭から、ひくいが、よく通る声音で、云った。

「もう、そろそろ、このあたりから、飲みものにも、ご要心なさいまし」

「………」

狂四郎は、その忠告をきいても、すぐ、振りかえることはしなかった。

そのかわり、床几のわきの、草鞋や皮籠や桐油の紙合羽や杖などをならべた売台の端の陽溜りに、まるくなって寝ている三毛猫へ、湯呑みの渋茶を、ふりかけた。

猫は、びっくりして、起きあがると、大いそぎで顔を、前脚で撫でまわし、それから、濡れたからだを、なめはじめた。

とたんに、よろついて、売台からころげ落ちた。いったん立ちあがって、二三歩よたよたと歩きかけたが、力尽きて、地面を匐い、四肢を痙攣させたかとみるや、息絶えてしまった。

渋茶に混じられたのは、よほどの猛毒であったらしい。

狂四郎が、はじめて、振りかえって、何か、云いかけようとすると、飛脚は、

「ちょっと、お待ちなすって――」

と、ことわっておいて、奥へ入って行った。

狂四郎は、眸子を、前方にそびえる筆捨山に当てた。恰度、その時、陽ざしが引いて、古松を配した巌が、なにやらの物の怪の集団のように、不気味なものに感じられた。

とたんに――、狂四郎の脳裡に、ふっと、ひとつの直感がひらめいた。

――こんどの刺客は、おれに怨恨を抱いている男かも知れぬ。
やりかたが、あくどいのである。西国諸藩から依頼されて、討手となった手練者ならば、関の茶屋の名物であった可憐な愛敬者を、吹針で殺したり、きくを拉致したり、また、こうして渋茶に毒を混じたり――こちらを不快にさせるいやがらせをしないであろう。不快にさせて、おびき寄せる手段としては、いささか陋劣である。
――おれが、会ったことのある男か？
狂四郎は、胸の裡で呟いたが、記憶の糸をたぐってみる気も起らなかった。
飛脚が、奥からもどって来た。
「やはり、そうでございました。この店の親爺は、猿ぐつわをかまされて、居間の押入れに入れられて居りました。茶をはこんで来た男は、敵がたの手先でございました」
「お主は、何者だ？」
「へい。武部の旦那に命じられまして、江戸から、天狗を、ずっと尾けて参りました者で……、安五郎と申します」
「天狗？」
「へい。三田の薩摩屋敷が、やとった――筑波天狗、と名のる妖術使いでございます。貴方様を討ち取るために、やとわれて、江戸を出て行くのを、武部の旦那が、お知りになって、あっしに、尾けて行け、とお命じになったのでございます。つまり、貴方様に、筑波天狗がやって来るから、くれぐれもご要心をなさるように、とお報せするために……」
「その筑波天狗とやらが、どうして、この鈴鹿峠で待ち伏せる、とお主は、察知した？」
「関の茶屋で、茶汲み女をかどわかすのを、見とどけたのでございます。それで、この鈴鹿峠を、

勝負場所に定めたな、とカンを働かせました」

「どのあたりで待ち伏せているか――そこまでは、つきとめては居るまいな？」

「坂の下の、小竹屋という脇本陣へ、駕籠をかつぎ込んだところまでは、見とどけて居ります」

安五郎という男は、こたえた。

狂四郎は、床几から、腰を上げた。

一の瀬から坂の下宿までは、鈴鹿川があるいは左に流れ、あるいは右に移って、旅人はいくつかの小橋を渡って行くことになる。

坂道はかえって、緩かになるが、いよいよ山ふところに入るという印象は深くなる。

狂四郎は、ふところ手で、ゆっくりと歩き乍ら、安五郎に、訊ねた。

「江戸で、何をしていた？」

「小伝馬町の牢に五年居りました。――どうせ、永牢（無期懲役）でございますから、二度と娑婆へ出られようなどとは、夢にも思っていなかったところを、武部の旦那に出して頂きました。……お縄を受ける前は、盗人でございました」

狂四郎は、それに対しては、何ともこたえなかった。

最後の小橋を渡って、大竹屋小竹屋という、東海道各宿の中でも屈指の大きな本陣脇本陣をむこうに見出した時、

「安五郎――」

「へい」

「筑波天狗は、かどわかした茶汲み女を、あの脇本陣へ、かつぎ込んだ、と申したな？」
「左様で——。たしかに、見とどけました」
「お前は、盗人であった。忍び込むのは得意の筈だ。……なぜ、忍び込んで、女が、どの部屋へ監禁されたか、そこまで、見とどけてはおかなかった？」
「へ、へえ——それが……」
「かつぎ込まれるところだけを、眺めておいて、一の瀬までひきかえして来たのは、どうした間抜けか？」
「…………」
一瞬——。
狂四郎の五体がひるがえるのに、安五郎は、あっとなって、跳び退ろうとしたが、電光の迅さで、白刃が宙を奔って、鋩子の冷たい触感を、頸根におぼえるや、足がすくみ、息がとまった。
「お前が、小伝馬町の牢に五年いたのは、まことだろう。しかし、お前を、娑婆に出して呉れたのは、水野越州邸の側頭役ではない。筑波天狗とやら称す男だろう」
狂四郎は、薄ら笑っておいて、無想正宗を、すうっと引くと、腰に納めた。
「筑波天狗は、小細工をしすぎるようだ。……武部仙十郎という老人は、この眠狂四郎の生命が危機にさらされる、とさとっても、絶対に、そのことを警告してくれたりはせぬ。まして、わざわざ、助勢者などは、送ってはくれぬ。こちらも、そんなことをのぞんで居らぬことを、老人は、知って居る。……どうだ、鼠賊、正体を看破されたら、ここは、一番、思案どころだぞ！」
鋭い眼光を射込まれて、安五郎という男は、思わず、ぶるっとひとつ、身顫いしたことだった。

しばらくして、狂四郎は、坂の下宿を通り抜け、小橋二つを越えて、坂口を左へ折れた。

そこに、鈴鹿神社が在った。

鳥居をくぐって、石段を仰ぎ見た狂四郎は、恰度その中段に、一人の虚無僧が佇立（ちょりつ）しているのをみとめた。

「眠狂四郎殿。お待ちして居った」

「…………」

狂四郎は、黙って、石段をのぼりはじめた。

虚無僧は、すばやく、踵（きびす）をまわすと、摂社のある境内へのぼって、待ち受けた。

そこには、頓宮（とんぐう）殿が右方にそびえ、本殿は、そこからさらに、急勾配の石段をのぼることになる。

虚無僧は、狂四郎が、そこに立つや、

「こちらへ、おいで頂こうか」

と、左方へ誘った。

そちらは、二十歩も行けば、断崖（だんがい）になって居り、瀑布（ばくふ）の音がひびいていた。

虚無僧は、断崖をうしろにして、その縁（ふち）に身を置いた。

そのわきに、数百年を経た杉の巨樹が、中天を掩（おお）うて、そびえていた。

幹の五尺ばかりの高さのところを、太い縄が、注連（しめ）のようにまわされ、そして、それは、一直線に、宙高く、ぴんとひきしぼられていた。

「勝負つかまつろうか、眠狂四郎殿」

「…………」

「但し、尋常の勝負ではござらぬ。おそらく、尋常の勝負ならば、それがしの方に、勝味はござるまい」

「………」

虚無僧は、腰の脇差を抜いて、左手に持つと、

「貴公が、それがしを斬るのが早いか、それとも、それがしが、この老杉にくりつけた縄を両断するのが早いか――その勝負でござるよ」

狂四郎は、すでに、宙高くひきしぼられた縄が、いかなる仕掛けか、さとっていた。

三歩ばかり、左の方へ身を移してみると、はたして、はるかな高処の太枝にかけられた縄は、瀑布の落下する渓谷上へ、まっすぐに降りて、その端に、高小手に縛られたきくが、吊されていた。

「さあ、勝負つかまつろう」

虚無僧は、促した。

その左手の脇差は、縄から三尺もはなれてはいない。狂四郎との距離は、九尺以上ある。

いかに、狂四郎に飛鳥の早業があっても、九尺を奔って襲う間には、縄を両断されてしまうことは、目に見えている。

縄を切らせずに、虚無僧を斬るのは、不可能であった。

のみならず、虚無僧が、わざと左手に脇差を摑んで、右手を空けているのは、その掌の中に、幾本かの吹針をかくして居り、たとえ狂四郎が、女を見殺しにして襲って来ても、充分におのれ

を守る術をそこにひそめていることなのだ。右手を、おのが頤にかけているのは、吹針をすばやく口に含むためである。

「お主は、わたしに私怨を抱く者とみたが、ちがうであろうか？」

「まさに、その通り――。但し、どのような怨恨か、申したところで、数知れぬ人命を断った貴公には、思い出すこともできまい。……貴公に、思い知らせたいのは、おのれの剣が、おのれを慕う女子の生命を、ついに救うことができぬ――それだ。貴公は、表面はいかにも、冷酷そうにみえるが、心の底には、人間の弱さを持っている。きく女を、断崖の底へ落せば、死ぬまで、胸の疼きと相成ろう」

「わたしに、どうせよ、と云うのだ？」

「数知れぬ人命を断ったその無想正宗を、この場で、真二つに折ってもらいたい」

「刀を折れば、直ちに、吹針が飛んで来るのではないかな。お主の卑劣なわざは、目にみえる」

「それでは、勝負つかまつろうではないか。いざ！」

「待て！」

狂四郎は、一歩出ようとした。

「そこを動いてはならぬ！」

虚無僧は、叫んだ。

「お主が、どのような私怨を抱くか、それをききたい。その理由如何によって、刀を折ろう」

「よし、きかせよう。貴公は、三年前、日光山の門戸にあたる今市に、常陸鹿島の松林左馬之助を流祖とする願流の道場を開いて居った奥村光典に、死にまさる屈辱を与えたであろう」

「そのようなこともあった」

狂四郎の脳裡には、その時の記憶がすぐよみがえった。

奥村光典は、松林左馬之助の再来と称せられる達人であった。願流の奥義を会得したのち、さらに、燕帰燕迎の陰陽二剣の迅業を使う山口流（山口右馬之亮家利始祖）を学んで、これに加える工夫を成して、日光流という一派を樹てていた。

光典は、達人に往々見られる奇矯の言行の多い兵法者であった。例えば、中禅寺湖の奥に棲む猿を、つぎつぎと生捕って来て、武芸を仕込んでいることも、そのひとつであった。

また、屋敷の中に、「天狗校」なる塾をひらいて、十数名の少年をえらんで住まわせ、凄じい修業を課していた。起居は板の間でなされ、食事は、粟を炊いて水漬けにしてふやかしたものだけであり、未明に起きて、五里を駆け、戻って、木太刀の素振りを千回、おわって、坐禅を組む。それから、兵学、儒学、武芸を学ぶ時間が、深更まで、ぎっしりと詰められ、その間、居睡りでもしようものなら、骨が砕けるばかりに撃ち据えられる。就寝したとたんに、大喝をあびせられて、はね起き、寒中ならば、冷水をかぶり、暑中ならば、篝火を焚いて、面座する。

このような言語に絶する苛酷惨烈な修業に堪えられずに、脱走する少年は、半ばに達した。

室木参之助という少年がいた。

この少年は、その修業に、能く堪えていた。幼くして父を喪い、母の手ひとつで育てられたが、その母が、わが子を、家門の名を挙げる立派な武士に仕立てあげようと一途に、その教育にわれを忘れて、奥村光典の「天狗校」をえらんだのである。参之助は、その期待にこたえなければならなかった。

しかし、参之助も、ついに、修業の苛酷に堪えられずに、逃げ出さないわけにいかなかった。鉄砲廻しの度胸試しを受けようとしたからであった。

弾丸ごめして、火縄をつけた鉄砲を、道場の天井から吊りさげて、その下に、少年たちは、円座をつくる。吊りさげた綱に、撚りをかけ、撚りつめて、火をつけると同時に、手を放す。銃は、音たてて転回しはじめる。あらかじめ吊った綱の寸法を測って、円座した各自の胸のところを、廻転する銃口が、狙い射てるようにしてあるので、少年たちは、生命の危機にさらされて、極度の恐怖に堪えねばならない。

参之助は、ついに、その恐怖に克てずに、「天狗校」を脱走したのであった。

すると、その母が、わが子の臆病に激怒して、亡父の墓前で、女乍らも、切腹して、その最期を見せつけておいて参之助の性根をなおそうとしたのであった。

たまたま、そこの古い寺院に身を寄せていた狂四郎が、その光景を目撃して、切腹をとどめ、母子に、奥村光典と雖も、臆病心はある、と云い、それを見せてやろう、と道場へともなった。

狂四郎は、光典と、真剣勝負をし、峰撃ちで、悶絶させたのち、次のような拷問を課したのであった。

光典を身動きできぬようにしばりあげておいて、道場の中央に仰臥させ、顔の上に、わずか一寸あまりの空間をあけて、ひと抱えもある庭の青石を、梁から、綱で吊り下げ、その綱を、光典の両手にくくりつけたのである。

すなわち、光典は、両手を、必死に、ひきしぼることによって、その巨石に顔を潰されるのを辛うじて、まぬがれていたのである。もし、力尽きて、巨石の重みに堪えられずに、双の腕をのばせば、顔は、無慚に、ぐさっと、潰されてしまうことになるのであった。

狂四郎は、鬼面のようにみにくく歪んで、脂汗を噴き出す光典の顔を見下して、

「たった一言、もらせば、この苦業から解放されるぞ、許せ、と一言——」

と、云ったものであった。
光典は、この苦痛に、よく堪えた。
すると、狂四郎は、冷酷にも、蠟燭に火をともして、光典の拳を焼いたのである。
ついに、光典の恐怖の忍耐の限界が来て、その口から、
「許せ！」
その一言が、しぼり出されたのであった。

「それがしは、貴公が、死にまさるあの屈辱を与えた奥村光典の実弟弁次郎と申す。兄は、あの屈辱を蒙った翌日、切腹して相果てた。その無念をはらすべく、それがしは、三年間、機会をうかがいつづけ、ついに、今日を迎えた」
虚無僧は、そう云いはなって、天蓋を、うしろへ、はねのけた。
奥村光典の風貌は、なお、狂四郎の脳裡に、つよい印象をのこしていたので、それに似かようた精悍な面相を、そこに視た。
「どうだ、眠狂四郎！　それがしが、貴公を慕う女子を、敢えて、渓谷上の宙に吊した理由が、判ったであろう！」
「報復の手段としては、あまり、ほめたものではないが……、やむを得ぬ。勝負する！」
「なに！　勝負するか！　それがしが、縄を両断するよりも、貴公が、それがしを斬る業の方が迅い、と自負するのか！」
「自負はせぬ。しかし、刀を折るわけには、いかぬ」

「よし！　来い！」

奥村弁次郎は、吹針を口に含むや、身構えた。

狂四郎は、やおら、すらりと、無想正宗を外気にあてて、白く光らせつつ、地摺りにとった。

弁次郎の双眸は、狂四郎がすこしずつ迫るにつれて、炬となって燃えた。

距離は、ついに、一間に縮まった。

狂四郎の足が、ぴたりと停止した。

次の刹那――。

狂四郎の五体が地に沈むのと、弁次郎の口から吹針が、光芒となって宙を飛ぶのと、そして、その左手の脇差が、老杉の幹をしばった縄めがけて、一閃するのが、同時だった。

縄は、真二つに切断された。

その瞬間には、弁次郎もまた、血煙りをあげて、大きくのけぞり、その断崖縁から消えた。

切断された縄は、吊られたきくのからだの重みで、宙へはねあがっている筈であった。ところが、だらんと垂れているばかりであった。きくは、依然として、渓谷の上に、いたのである。

狂四郎は、老杉の幹を仰いだ。

およそ二間の高さのところで、一本の腕が出て、その縄をしっかと摑んでいた。

「ご苦労――」

狂四郎が、縄の端を摑んで、ひきしぼりつつ、声をかけると、

「へい！」

と、応えて、幹のむこう側から、ひょいと、ひとつの顔が、のぞいた。

安五郎にまぎれもなかった。

これは、狂四郎にとって、危険きわまりない賭であった。
奥村弁次郎がやとった盗賊を、こちらに寝がえらせて、助手に使ったのである。はたして、安五郎が、まちがいなく寝がえってくれるかどうか――それに、狂四郎は、賭けてみたのである。
賭は、成功した。
狂四郎は、意識を失っているきくを、無事に、地面へ横たえてから、安五郎へ眼眸を送り、
「わたしは、お前が、この杉の樹にのぼってくれるか、どうか――五分の可能しかない、と思っていたが、礼をのべねばならぬ」
と、云った。
「旦那――」
安五郎は、ちょっと照れた表情で、見かえすと、
「旦那には、これまで、生命を投げ出しても、尽したい、と惚れ込んで来た男は、居りませんでしたかい？　あっしは、たしかに、いたにちげえねえ、と思いやす。……どうも、旦那は、そういう御仁らしい」

雨の土山

鈴鹿峠は、坂路二十六町、最も険しいところが八町、二十七曲であった。
箱根に次いでの、海道の難所であり、むかしから、さまざまの妖怪譚が、のこされている。
今昔物語には――。

三人の男が、この峠を越えて、夕立に出会い、詮方なく、鬼が住むという噂で人の宿らぬ堂に、泊った。そのうちの二人が、胆だめしに、昼の内に見つけておいた横死の屍骸を取りに行く、という話が、出ている。

むかし、この山には、鈴鹿御前という鬼女が棲んでいた。これを坂上田村麻呂が、征伐して、ついに、これと夫婦になった、という古伝説も、御伽草紙に作られている。

謡曲の「田村」にも――。

去程に山河を動かす鬼神のこえ、天にひびき地にみちて、万木千草動揺せり。「いかに鬼神まさに聞くらん。千方といつしげきしんに、仕えし鬼も王地を犯す天罰にて、ちかたをすつればたちまちほろびうせしぞかし。増てやまぢかき鈴鹿山、ふりさけみれば伊せの海、〳〵、あのの、松原むら立ちきたつて、鬼神は、黒雲、鉄火をふらしつつ、数千騎に身をへんじて、山の、ごとくに見えたる所に、「あれをみよふしぎやな、〳〵。味方の、軍兵の旗のうえに、千手観音の、ひかりをはなつて虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、智恵の矢をはげて、一たび放せば千の矢さき、雨あられと降りかかつて、きじんの勢に乱れおつれば、ことごとく矢さきにかかつて、鬼神は残らずうたれにけり。

こうした因果話は、語り継がれて、いまもなお、「多津加美坂は、陽が落ちる時刻の後には、決して越えてはならぬ」とされていた。

実際には、白昼でも、追剝ぎが出没して、旅人にとっては、危険な山越えだったのである。

坂路のほぼ中程にあたり、古道と新道との分岐点にあたる山中というところに、どうしたことか、妖怪も盗賊もおそれずに、一軒の旅籠が、建っていた。

おそらく、山越えの途中、急病で動けなくなった旅人しか、泊るまい、と思われ、どうしてな

りわいが立つものか、といぶかられる。

きくを連れた眠狂四郎が、「鈴鹿屋」というこの旅籠に泊った時、もとより、他に客はなかった。

狂四郎が、「鈴鹿屋」にあがったのは、気まぐれではなかった。

ここまでは、きくのほかに、安五郎という、昨日までは敵の手先であった江戸の盗賊をともなっていたが、狂四郎は、ふと、足を停めて、

「ここから、土山までが、くさいな」

と、呟いたことであった。

すると、安五郎が、打てば響くように、

「あっしが、ひとっ走りして、嗅いで参ります。この旅籠で、お待ちなすって下さいまし」

と、物見役を引受けたのであった。

狂四郎ときくは、土間からすぐ上った黒光りする板敷きに切られた囲炉裏のそばで、夕餉をすませた。

安五郎は、一刻すぎても、まだひきかえしては来なかったのである。

このぶんでは、ここに泊ることになりそうであった。

跛の老爺と、ふた目と見られぬほどひどい疱瘡痕のある小女と二人だけの住む、うすよごれた旅籠であったが、狂四郎は、べつに気にもせず、きくもまた、小女が膳部をはこんで来ただけで、台所にひっ込んでしまったのをさいわいに、自在鉤にかけられた釜から、豆腐汁を椀によそったり、濁酒のお代りをすすめたり、狂四郎に給仕することに、ささやかな女の悦びをあじわってい る様子であった。

山中の夜気は冷えたが、焚く粗朶は豊富で、あかあかと燃える焔に、きくの顔は、美しく上気

していた。
狂四郎もきくも、その粗朶火へ、じっと眸子を落して、沈黙をつづける時が、過ぎた。
そのうち——。
台所で、水仕事をし乍ら、小女が唄う宿歌が、きこえて来た。
上り下りの、札つづら馬よ
さっても見事な手綱染かいな
馬子衆のくせか高声で
鈴をたよりに小室節
坂は照る照る、鈴鹿はくもる
あいの土山、雨が降る
器量に似合わぬ佳い声であった。
きくは、俯向いて、微笑し乍ら、きいていたが、ふと、狂四郎の視線を感じて、顔を擡げた。
「そなたが、三年の歳月を費やして仕立てあげたこの紬の小袖は、最も暗い業を背負うた男に着られた」
狂四郎は、云った。
「いいえ！　わたくしは、貴方様に着て頂くために仕立てたのでございます」
きくは、こたえた。
「惚れた男を夢に見るために、衣の袖を裏返して寝る、という風習は、むかし、あった。小野小

町も、いとせめて恋しき時はむば玉のよるの衣を返してぞ着る、とうたっている。それは、想う男がいる上での振舞いだ。……しかし、そなたは、想う男もないままに、この紬を織った。そなたは、三年のあいだに、心の裡に、一人の理想の男の姿をつくりあげたに相違あるまい。その男は、おそらく、わたしとは、似ても似つかぬ素姓と姿を持っていたであろう」

「………」

きくは、何か云わねばならぬ、と思った、しかし咄嗟に、言葉が見つからなかった。

狂四郎は、つづけた。

「たまたま、わたしという男が現れて、そなたが仕立てあげたばかりのこの紬を着た。すると、そなたは、心の裡に抱きつづけて来た夢をこわされまいとして、自分は、この男に着せるために、縫いあげたのだ、と自身に云いきかせた。そうなると、女は、自分自身をいつわることに、いのちまでも賭ける」

——いいえ！　ちがいます！

きくは、胸の中で、叫んだ。

——自分自身を、いつわっては居りませぬ！　わたくしは、貴方様がなくては、もう、生きてはゆけませぬ！

きくは、そう云いたかった。どうして、それを口にできないのか、もどかしかった。

いまの自分の気持を打明けて、知ってもらわなければ、永久に、その機会は来ないような気がした。きくは、焦躁した。

しかし、きくには、口にすることができなかった。

「わたしは、そなたに、この紬を返さなければならぬ、と思う」

「いいえ！」
きくは、烈しく、かぶりを振った。
「おいやでなければ、どうぞ、お召しになって下さいませ」
ようやく、それだけ云った。
きくは、こんな他人行儀な言葉ではなく、想いをこめた言葉を、口にしたかった。この紬を返されたならば、自分は生きる希望をうしなって死んでしまう――そういう烈しい言葉を、狂四郎に、きいてもらいたかった。
なぜ、云えないのか。どうして、訴え、乞うことができないのであろう。
きくは、心でもだえつつも、ただ、俯向いて、泪ぐんだ。
狂四郎がつづける声音が、なんという遠いものにきこえることだろう。
「だが、あいにく、しばらくのあいだは、着換えがない。借りておかねばならぬが……、わたしがこれを着ている限り、そなたは、跟いて来るだろう。わたしに跟いて来る道が長くなれば、なるだけ、そなたの運命は、狂って来よう。そなたから、幸せが、一歩一歩、遠ざかる。……そう思う」
きくは、泪に濡れた顔を擡げた。
「わたくしが、おいやなのでございますか？」
「この前、わたしは、いまと同じことを云って、そなたを、四日市の家にすてて来たが、本心と思ってきいてもらおう。これまで、わたしに跟いて来た女子は、一人のこらず、不幸になって、儚い生涯を閉じた。その暗い思い出ばかりが、いたずらに、わたしの心中で重なり合って居る。その上へ、またひとつ、暗い思い出を重ねたくない、と考えるのは、こちらの勝手ではなかろう」

「わたくしに、死ね、と仰せられますか？」

ついに、きくは、云った。

その必死な眼眸を、ひたと当てられて、狂四郎は、一途に想い詰めた女心に、こちらの言葉を送り込んで、納得させることの無駄を、知った。

「死ね、と云って、そなたをすてて行くか」

狂四郎は、笑った。

安五郎が、土間へとび込んで来たのは、その時であった。

炉端にかしこまると、ぶるっと身顫いして、きくがさし出した濁酒を、ひと息に飲み干してから、

「旦那、いけませんや！」

と、首を振ってみせた。

「いたか？」

「へい。それも、五人や六人じゃありませんね。二十人以上と見やした」

「どこにいた？」

「田尻野というところを降りると、田村川が流れて居りますが、そこからすこし入った森の中に、田村大明神てえのがございます。そこに――」

「お前の目には、どういう刺客たちと映った？」

「あれは、薩摩じゃござんすまいか。あっしにも、尋常一様の手輩じゃねえ、と判りやした。……旦那、こいつは、ひとまず、ひきかえして、名古屋から大垣へまわって、中仙道から草津へお出になった方が、無難じゃござんすまいか」

「中仙道へ出れば、敵は、関ヶ原あたりで、待ち伏せるであろう」
「だって、旦那、一騎当千てえ強そうな連中が、二十人以上も待ち伏せている、と判り乍ら、なにも、無理して、通ることはない、と思いやすが……」
「べつに、死ぬとは限るまい」
「死なぬとも、請け合えませんぜ」
「通ってみることだな」
狂四郎は、口辺に、微笑を刷いた。
きくは、その横顔を瞶めているうちに、
――この方は、屹度生きのびられる！
と、自分に云いきかせた。
とたんに、きくは、勇気が出た。
「貴方様が、是非でも、通ってお行きになるのなら、お願いがございます！」
「……？」
狂四郎は、視線を、きくに移した。
安五郎は、江戸っ児の敏感さで、合点すると、ひょいと立って、
「おい、ねえや！　ねえやはいねえか。御膳をたのまあ」
と、云い乍ら、奥へ入って行った。
きくは、祈りをこめるような眼眸を、狂四郎に当てて、
「わたくしに、この紬の小袖を着てお行きになるお方を、良人として、見送らせて下さいませ」
と、願った。

「…………」
「お願いでございます！」
きくは、両手をつかえた。
「…………」
狂四郎は、これと同じ悃願を、この道中の途次に、一度、されたことを思い出した。
小田原のてまえの、酒匂川の上流に住む元箱根関所奉行の娘小夜に、やはり、
「父の讐を復って頂くおかたを、わが良人として、明朝、お見送りさせて下さいませ」
と、申し出られたのである。
その時は、そうする代りに、そっとその屋敷を抜け出て、立去ったことであった。
小夜というその娘を、もし、その夜、抱けば、生涯を有髪の尼として過すに相違ない、と思ったからである。
しかし――。
いまのきくの立場は、小夜のそれとは、全くちがっている。
きくは、住む家もなければ、行くあてもない天涯孤独の娘であった。いま、この眠狂四郎に見すてられたならば、生きて行く目処を失ってしまうのだ。
きくを、明日から生きて行かせるためには、たとえ、この眠狂四郎が相果てても、眠狂四郎の妻となった、という心の支えを与えておいてやらねばなるまい。
「お願いでございます！　このきくに、おなさけを――」
平伏して、悃願しつづける娘へ、冷たく光る眸子を投げて、
――ころび伴天連の余殃を受け、無数の悪業を積んだこの無頼者が、無垢の娘から、操を提供

されようとしている！
狂四郎の胸中に、自嘲が、重い泥のように澱んだ。
しばらく、沈黙を置いてから、狂四郎は、きくに云った。
「二階で、待つがよい」

夜が明けるまでには、あとどれくらいの時刻があるのであろう。
きくは、闇の中で、眸子を薄くひらいて、そのことを考えていた。
このまま、時刻というものが停ってしまえばよい、と思う。
狂四郎の片腕は、頸にまわされ、もうひとつの手を、きくは、しっかと握っていた。長襦袢も二布も乱れたままになり、下肢の間には、狂四郎の下肢の一方が置かれていて、ぴったりと触れた肌は、しっとりと汗ばんでいた。
こうした姿勢で、きくは、指一本動かすのもおそれて、もう一刻以上も、じっとしているのであった。女の部分に、強いかたい力を加えられた形跡が、痛みをともなって、のこっていた。
きくは、その瞬間を、思い出しては、ひとりひそかに、闇の中で、羞恥の色を、頬に染めていた。
きくは、男女の営みに対しては、全く無智だったのである。ただ、ひとつ衾の中で、肌と肌を合せて一夜をすごせば、それで、夫婦になれるもの、とばかり思っていたのであった。
男女の営みは、それがはじめての娘にとっては、残酷なものであった。下肢を弓のように大きく拡げさせられ、それが加えられた瞬間のおそれとはずかしさは、たとえようもなかった。

きくは、ついに、知らされた。

そして、いまは――。

おそれとはずかしさが、たとえようもないくらい大きかっただけに、きくの心も身も、全く狂四郎のものになっていた。

きくは、幸せであった。ただ、悲しいことに、この幸せは、夜が明けるまでの、ほんの短いあいだのものであった。

――ねむらないで、こうして、夜明けを迎えよう。

きくは、そう思っていた。ほんのすこしでも、身じろぎすれば、狂四郎のねむりをさましてしまうのではないか、とおそれて、こうして、じっとしていることに――一人で目ざめていることに、ひそやかなよろこびをあじわっていたのである。

そのうちに……睡魔が、いつの間にか、そっと忍び寄って来て、きくを、うとうととさせた。

ねむるまい、とさからいつつ、睡魔にとらえられたきくは、やがて、はっと、わが身の傍の空虚さに、目をさました。

狂四郎のからだが、そこから消えていた。あわてて、身を起したきくは、破れ雨戸からさし込む夜明けの白い明りに、どきっとなった。

いつの間にか、かなりの時間を、ねむってしまっていたのである。

――出かけておしまいになった！

きくは、なにものかに、地底へひき込まれるような眩暈をおぼえた。

――どうして、見送らせては下さらなかったのだろう？

きくは、哭き伏した。ねむってしまったくやしさに堪え難く、声をあげて、身もだえた。

狂四郎は、夜明けの濃霧の中を、ゆっくりと、坂路を下っていた。

古道の方をえらび、幾曲りかして、猪鼻（いのはな）という立場（たてば）らしい草餅の看板をかかげた茶屋が三四軒竝（なら）んだ前を通りすぎたから、もうほどなく田尻野であろう。

狂四郎は、無心であった。

「鈴鹿屋」へのこして来たきくのことは忘れていたし、行手に待ち伏せる薩摩の隼人（はやと）隠密党に対する闘志もみじんも湧（わ）いてはいなかった。

死地に向ってわが身を運んで行く時、この男は、不思議なほどの全き無心状態に自分を置く修練を積んでいた。濃霧は、六尺の前方をも、とざしていた。

と――。

狂四郎は、足を停めた。白い闇の中で、人の動く気配をさとったのである。

「旦那で――」

むこうの方から、呼びかけて来た。

「お前か。先に来ていたのか」

「へい。夜明けには、降りて来なさるだろう、と思いやしてね」

「ご苦労だった」

「田尻野まで、お供させて下さいまし。べつに、あっしなんざ、なんのお役にも立ちやしませんが……」

「骨をひろってもらうだけでも、役に立つ」

「冗談じゃねえ。旦那に、さきに逝(ゆ)かれちゃ、やりきれませんや。第一、あのおきくさんが、可哀そうだ」
「お前は、女に惚れられたことはあるか？」
「惚れたことは、ありますが、まだ、惚れられたことは、ありませんや。浮世は、うまくいかねえもので、惚れる男には、女は惚れかえしてはくれませんね。……もう、金輪際(こんりんざい)、女には惚れねえ、とてめえに云いきかせても、この誓いは、一月も保(も)たねえんだから、だらしがありませんや。惚れつづけて、とうとう、四十の坂を越えちまった。……せめて、他人(ひと)様に生命がけで惚れている女子(おなご)衆に、味方になってさしあげたい、と存じて居ります。旦那、かまいませんね？」
「たのんでおこう」
しばらく、沈黙があってから、安五郎が、
「旦那――、うかがいやすが、旦那は、まさか、おきくさんが、ねむっているあいだに、抜け出しておいでたんじゃございますまいね？」
と、訊ねた。
「いま頃、目をさまして居ろう」
「いけねえ！　そいつは、いけねえ！　殺生だ！　むごすぎますぜ」
「惚れられたことのないお前には、わたしの仕打ちは、判るまい」
「ああ、判りませんね」
安五郎は、つと前へ出て、立ちはだかった。
「旦那！　ひきかえして頂きてえ！　このまま、行かせるわけには参りませんぜ」
「よけいなお節介だ」

「いいや、そうじゃねえ。同じ泣かせるにしても、泣かせかたがありまさ。……旦那、おねげえだ。ひきかえしておくんなさい。敵の野郎どもを、一刻や二刻待たせたって、義理を欠くわけじゃねえ。……ね、おねげえでござんす！　ひきかえしておくんなさい」

安五郎は、地べたへ膝を折り込むと、両手をついた。

「もうおそいな」

狂四郎は、云った。

「おそくはねえ！」

「おそいのだ。お前には、きこえなかったろうが、こちらの降りて来るのを見張っていた者が、報せに奔った。跫音を消していたので、お前には、きこえなかった」

「畜生！　薩摩っぽうめ、夜っぴて、見張っていやがったか！」

安五郎は、舌打ちした。狂四郎は、何事もないかのように、歩き出した。安五郎は、しかたなく、跟いて来た。

田尻野の人家を抜けると、霧は、はれた。しかし、小雨が降って来た。

「宿歌通りだな。鈴鹿が烟っていれば、土山は、雨だ」

狂四郎は、云った。

「旦那！」

安五郎は、万感をこめて、呼んだ。

狂四郎は、しかし、こたえず、小雨の中を、しずかに、痩身を運んで行った。

水口(みなくち)占い

まだ斧鉞(ふえつ)を入れられたことがない、とおぼしい杉の密林の中をひらいたゆるやかな勾配の街道を、眠狂四郎は、ゆっくりと降りて行き乍ら、ひくく、端唄を口ずさんでいた。

行く末に
誰肌(たが)ふれん紅粉(べに)の花
身じまい部屋の、爪弾きに
つとめのうさを忘れ草
アレ、鈴が鳴る、昼見世に
籬(まがき)へ出て来て、もの案じ

小雨は、音もなく、降っていた。時折り、高い梢(こずえ)から飛び立つ鳥の羽音と、そのためにゆれた枝葉が落す水滴の音のほか、まだ、鈴鹿峠は、ねむっていて、静寂は深かった。

やがて——。

田村川の流れの音が、近くなった。

坂路は、そこに架けられた板橋にむかって、まっすぐに降りていた。

狂四郎の足は、その板橋のてまえ三間の距離で、停った。

橋の両袂(たもと)、そして、橋上中央に、一人ずつ、佇立している人影を、視たのである。

さらに、その後方に、木間がくれに、人影が、あった。

すなわち——。

一定の距離——二間と看てとれたが——を置いて、敵は、一列に、路上を占めて、こちらの到着を待ちかまえていたのである。

薩摩藩が、百年の長きに亙って、組織を完備した隼人隠密党が、薩摩隼人の面目にかけて、一騎討ちを厳法として、一人が斃れれば、あとの一人が、その屍を乗り越えて、襲って来ることは、すでに、狂四郎も、経験済みである。

隼人隠密党は、狂四郎が江戸を発って以来、この一騎討ち戦法を以て、すでに、十名以上を、東海道の路上に、喪っている。しかもなお、渠らは、その一騎討ちの戦法を変えようとはしていない。

四日市のきくの家へは、頭取の竜堂寺采女正が単身、乗り込んで来て、決闘を挑み、相果てた。しかし、その時、党の面々は、采女正の屍体を、黙々として、引き取って去っただけであった。采女正から、もし自分が敗れたならば、むくろだけを引き取って、決して一挙に襲ってはならぬ、と命じられていたものであろう。

いかにも、薩摩隼人の士風といえた。

薩摩の士風は、元寇の役に、三代島津久経が、筑前箱崎の海に奮戦して以来、連綿として受け継がれ、その面目ぶりを物語る例は、枚挙にいとまがない。

その士風は、島津義弘によって、決定された、といってよい。

義弘は、勇猛の武将であるとともに、また士たる者が備えるべき面目を常に心掛けた大名であった。義弘は、陣中に在っても、古今集、千載集、拾遺集、また論語などの書を繙いて、読み耽っていた、という。

天正九年、相良義陽を水俣城に攻めた時、かぶら矢に和歌の上句をしたためた紙をむすんで、城中へ放った。

秋風に水股落つる木の葉かな

これを受けとった相良義陽も、直ちに応じて、下句を送りかえして来た。

寄せ来て沈む浦波の月

こうした風流を心得た義弘は、関ヶ原に敗北して、退却するに際しても、いささかも、薩摩隼人の面目を失わなかった。

義弘は、その敗北にひとたびは討死を決意したが、阿多長寿院入道盛淳に、大将は千騎が一騎になるまで死せずして、後日の謀をめぐらすものでござる、ととどめられ、一方に血路を開いて突破する覚悟にかえた。

いずれの方角に進むべきかを、定めるのは、瞬間の問題であった。

その時、後醍院喜兵衛宗重が、

「いまに、家康が本陣を進めて来るは必定でござれば、その陣頭を切り破って、伊勢路をめざすのが、薩摩武士の面目でござる」

と進言した。

義弘は、さればと、敗軍の中にも、陣を整えて、一糸乱さず、粛々として、関東勢の前を通過した。一陣の殺気、天を衝く威勢に、東軍兵は、思わず気を呑まれて、見送った、という。

この折、義弘は、川上四郎兵衛を、家康の本陣に遣わして、「島津某、今度よんどころなき故を以て大坂に属し、只今本国に帰参つかまつる。委細は帰国の上、申述ぶべし」と、一言礼を尽し、挨拶して、去った。

この主君をいただいた薩摩隼人は、いずれも、武士たる者の吟味を忘れなかった。

北原掃部介は、東軍のために生擒されて、まさに首を刎ねられようとした時、最後の小閑を乞うて、腰に帯びた天吹（短い尺八）を把って、心しずかに吹奏した。音節劉喨として、きく者の心を打った。死に臨んで、この清爽は、まさしく、武士の心懐と申すべきであろう、と許されて、掃部介は、故国に還るを得た。

また——。

春日主左衛門は、武勇のほまれ高い武士であったが、奇行が多く、羽織の背中に「喧嘩有売人可買」と大書して、のし歩いたりした。客気の壮士たるを標榜している猛者なので、この主左衛門が、優にやさしい謡曲の名人であることなど、誰も知らなかった。ついに、不行跡の咎を蒙って、切腹を命じられた主左衛門は、その場所を、美景を称われた渓谷の断崖上にして頂きたい、と上司に乞うた。

許されて、そこに端座した主左衛門は、謡曲「邯鄲」を、うたった。音声清喨、平日に幾倍して冴え、しかも、その表情には、将に死のうとする気色などみじんもなかった。死席に臨んだ家老以下の藩士らは、感きわまって、泪を呑んだ。うたいおわった主左衛門は、にっこりして、「これにて、心のこりはござらぬ。おさきにごめん」と云い置き、従容として腹を真一文字にかっさばいて、相果てた。この地は、謡い谷と称されて、後世に永く、伝えられた。

まさに——。

狂四郎の行手をはばんだこの一党は、ただの刺客陣ではなかったのである。

一列、二間の間隔をとって、整然と佇立して、待ちかまえたその静かな陣形は、前者が斃れれば、後者がその屍を乗り越える文字通り決死の覚悟の程を示している。

狂四郎自身、

——この田村川が、づいに、おれの死場所になるのか。

と、自分に云いきかせざるを得なかった。

狂四郎は、口をひらいた。

「お手前がた、総勢何人であろうか？」

「二十七名でござる」

先頭の者が、こたえた。

——二十七試合を、この場で、やらねばならぬことか。

狂四郎は、自嘲の笑みを口辺に刷いた。

——幾試合を勝てるか？

狂四郎は、ふところから、両手を抜き出すと、前進を開始した。

四歩の距離に縮まるや、先頭の覚士は、すらりと抜刀し、左拳を額に当てて、切っ先を天に直立させる自源流独特の構えをとり、

「鹿児島一番隊副頭取・竹内小助」

と、名のった。

四日市で斬った竜堂寺朵女正は、江戸一番隊の頭取であった。

この眠狂四郎を討ち取るために、江戸と薩摩の各隊の頭取、副頭取、それに准ずる手練者が、動員されたことが、これで明らかとなった。

狂四郎は、なお両手を空けたままで、しずかに、草履をうしろにぬぎすてた。
対峙の時間は、わずかであった。
竹内小助が、一歩出るのに合せて、狂四郎もまた、一歩出た。
両者が疾風を起すのに、ものの五秒も置かれなかった。
竹内小助が、よろめいて、刀を杖にした時、すでに、狂四郎は、橋上に入って、衂(ちぬ)らせた無想正宗を、地摺りにとっていた。
二番に立った党士は、その凄じい迅業を視ても、眉宇も動かさず、
「江戸二番隊頭取・指宿勘解由(いぶすきかげゆ)」
と名のった。
その自源流構えは、やや変則であった。天を指した刀身が、かなり前へ傾いていた。
狂四郎は、一撃の突きを放って来るもの、と看てとった。それに応ずるために、円月殺法の刀身運行を開始すると同時に、すこしずつ、身を移して、欄干ぎわへ、寄った。
指宿勘解由は、じりっじりっと迫りつつ、すこしずつ、傾けた刀身の角度を、深くした。
汐合(しおあい)がきわまった。
「とおっ！」
無想正宗をして半円を描かせた狂四郎の、ひろくひらいた胸間めがけて、稲妻に似た迅さで、突きが襲った。
勘解由の懸声(かけごえ)が、こだまになってかえって来た時には、勘解由の姿は、そこにはなく、そのこだまに合せるかのように、下方の渓流に水音が立っていた。
狂四郎は、橋板の上に、ひくく沈めた身を、やおら起すと、第三の敵へ向って、緩かな前進を

続行した。

「鹿児島二番隊頭取・伊集院司」

橋袂に在った三番手は、六尺にあまる巨軀から、四方にひびき渡る名のりをあげるや、対峙の秒刻を惜しむように、大きく踏み出して来た。

なんの闘志の色も刷かぬ無表情で、無想正宗を同じ速度で旋回させる狂四郎の、頤から頸すじにかけて、皮膚が破れ、血汐が、したたり落ちていた。

伊集院司は、狂四郎の右手と刀身が一直線に、水平の高さにあがった瞬間、

「えいっ！」

山谷を聳動させるほどの懸声もろとも、斬り込んで来た。

血煙りが、そこに、噴きあがった。

無想正宗の逆薙ぎの一閃をあびた伊集院司の顔面は、頤から眉間まで、ま二つに断たれたのである。

無慚な真紅の形相と化し乍ら、伊集院司は、なお、しばし、その場に、仁王立ちに立っていた。

その巨軀が、地ひびきたてて、仆れた時、その上へ、胡蝶のように、ヒラヒラと舞い落ちて来たものがあった。伊集院司が截った狂四郎の紬の袖の一片であった。

狂四郎は、屍を跨ぎ越えると、四番目の敵と、相対した。

いかにも薩摩隼人らしい美丈夫は、

「江戸三番隊副頭取・東郷蔵之助」

と、名のるや、双眼を閉じた。

円月殺法の何たるかを知って、心眼をもって撃つ業をえらんだのである。

東郷蔵之助の戦法は、決して無謀なものではなかった。狂四郎の左腕上膊は、伊集院司の一太刀で、袖の一部とともに、皮膚を殺がれていて、血汐が、腕をつたって、手の甲から、地面へ、ぽたりぽたりとしたたっていたのである。

そのほんの微かな音で、狂四郎の立つ地歩が、蔵之助には、はっきりと知れたのである。

間合を取った瞬間、狂四郎は、そのことに気がついた。

そっと、刀の柄から左手をはなして、それをまっすぐにたらすや、血汐は急に多量に、ぼたぼたと地面を搏った。

蔵之助は、そのために、思わず、かっと双眼をみひらいた。

刹那——。

狂四郎は、地を蹴った。

「うっ！……むっ！」

呻きとともに、身をよじった蔵之助は、おのが胸を風の迅さですり抜けた狂四郎の背中へ向って、むなしく、一颯の刃風を送っておいて、崩れた。

「鹿児島三番隊頭取・久保民部」

そう名のった五番手は、あきらかに琉球人の血が混っていると判る骨格風貌であった。

右の一手のみで、太刀を頭上にかざし、左手は、五指をのばして、いわゆる貫き手にして胸前に構えたのは、琉球拳法を、自源流に合せたものと、みえた。他の党士らと異って、素跣であるのも、それの証拠であった。

狂四郎の剣を、左手で払いざまに、地を蹴って、蹴上げを放ち、瞬間、まっ向から、自源流の一太刀をあびせる——その戦法と受けとれた。

もとより、その貫き手は防禦の死手であるが、狂四郎の用いる技によっては、意外の変手を生み、どのような凄じい活手攻撃を放って来るか、予測しがたかった。

「闘いは奇正の間にあり、奇変じて正となり、正変じて奇となすに非ずんば、何ぞ勝を制するを得んや」という古人の教えは、拳法も、それを妙とするところである。

白刃と手と足と――この三つが一如の働きを為す異常の業前に対して、狂四郎の方は、咄嗟に思案が生ずべくもない。

狂四郎の不敵さは、いかなる意外の兵法に対しても、無心のままに、臨むところにあった。

狂四郎は、わが身を刃圏内に容れると、青眼の敵に対するのと全く変らぬ地摺り下段の構えをとり、それなり、微塵の動きも止めた。

円月殺法を発すべきか否か――その迷いが、ちらと脳裡を掠めたのは、ものの五十もかぞえる時間が移ってからであった。

やはり――。

狂四郎は、無想正宗の切っ先を、緩かにまわしはじめた。

鍔が、双眸と一線に竝んだ――その刹那、久保民部は、拳法独特の一喝とともに、死手を活手に一変させて、猛然と襲って来た。

もとより、この闘いも、まばたきをする程の一瞬間裡に、畢った。

狂四郎と民部が、飛び交ったあとの、地上には、一本の手が、肱から両断されて、落ちていた。

隻腕となって、静止した民部は、しかし、苦悶の表情のかわりに、信じ難い茫然たる面持で、おのが右手が握りしめている剣へ、視線を当てていた。白刃は、はばきから三寸あまりのところで、両断されていたのである。

民部と二間はなれて、すでに六番目の敵に正対していた狂四郎は、いつの間にか、左手に脇差を抜き持っていた。

その脇差で、民部の左腕を両断し、無想正宗で、まっ向から振り下された白刃を二つに折ったのである。

「無念っ！」

民部の悲痛な叫びを、後方にききつつ、狂四郎は、六番目の敵が名のるのを、待った。

「鹿児島四番隊副頭取・生駒喜左衛門」

凜と冴える声音をききつつ、狂四郎は、この男としたことが、珍しくも、大きく肩をひと喘がせた。

狂四郎は、脳裡が思案を閃かせるいとまもないほどの迅業をもって、拳法を合せた自源流を破ったものの、民部が蹴上げた石火の足技を躱すことまでは叶わず、したたかに胸を搏たれていたのである。

——この生駒喜左衛門が、ついに、おれの生命を奪うことになるのか！

狂四郎の脳裡を、その予感が掠めた。

同じ時刻——。

土山から二里半さきの水口城下（加藤越中守・二万五千石）の脇本陣の奥の一室で、調所笑左衛門は、朝餉の座に就いていた。相伴は、いつもの通り、海老原清熙であった。

あれから——。

笑左衛門は、大坂の蔵屋敷へ入り、多忙な日々を送ってから、再び出府の途にあったのである。
「海老原――」
「はい」
「ここの日野や八幡は、近江商人の本場であったの」
「左様に、きいて居ります」
「大坂も江戸も、近江商人が、商業のなかばは、制して居るというが、そうであろうかな」
「さあ、どうでありましょうか。たしかに、江戸日本橋の近江店など、大名屋敷の御用をうけたまわらぬ店は一軒もない由にございますゆえ、大層な勢いであることはまちがいございますまい」
「いずれにしても、これからは、商人の天下じゃの。武士という存在は、無意味に相成った」
「………」
「わしも、もし商家に生れていたなら、鴻池ぐらいの大店を持って居ったかも知れぬ」
「お疲れになりましたか？」
清煕は、同情をもって、この秀れた才腕の持主を見まもった。
「いささかのう。しかし、疲れた、とは申しては居れぬ。この夏は、砂糖の下落で、二万両の損をした。これを、とりかえさねばならぬ」
「しかし、江戸のお屋敷にも、大坂の蔵にも、もう充分すぎるほどの金子は、たくわえられて居りますが……」
「ははは……、足らん、足らん。江戸、大坂、鹿児島に、それぞれ、二百万両ずつたくわえてみせる肚で居るのだ」

「それは、あまりに……」

「海老原——。お主は、わしが、これ以上、大がかりに抜荷買いをやるのを、不安に思って居るのであろう」

「水野越州殿が、本丸老中の座に就かれて以来、薩摩に潜入して参る公儀隠密の数が、にわかに増して居りますゆえ……」

「知って居るわさ。しかし、わしは、越州の肚の裡は、読めて居る。越州はの、わしが抜荷買いの証拠を押えて、これを島津藩の罪にしようとするのではない。わしの儲けを、そっくり、吸い上げるこんたんなのだ。つまり、日光御修築とか、天領道路工事とか、名目をつけて、まきあげようという計略をめぐらして居る。……宝暦治水工事では、公儀は、わが藩をさんざいためつけ、二百万両を使わせ、総奉行以下七十余人を切腹させた。あの折も、公儀は、わが藩が、琉球貿易で大儲けをした、と思い込んで、あのような大工事を押しつけた。……こんどは、そうは参らぬ。いかに、越州が、わが藩から、金を吐き出させようとしても、このわしの目の黒いうちは、一文たりとも出しはせぬ」

たしかに、宝暦年間に、濃尾平野に流れる揖斐川、長良川、木曾川の氾濫をふせぐための大規模な治水工事を、幕府から一手に担当させられた薩摩藩は、想像を絶する苦難をなめさせられたのであった。

木曾川、揖斐川の相会する水流の激しい油島の洗堰の築造と、長良川の水を揖斐川に導く大榑川の洗堰の築造にあてた予算三十万両は、あっという間に、消えうせ、薩摩藩では、大坂商人からさらに五万両、十万両と借り受け、その元利が、ついに二百七十余万両の巨額になり、そのために、財政は殆ど破滅状態をまねいたものであった。

って、工事総奉行となった平田靱負をはじめ、七十余人の薩摩隼人が、さまざまの理由で、責任を負って、工事完了間際に、切腹して相果てた。

この怨恨は、深い。

調所笑左衛門は、再び、このような大きな負担を課せられないために、このたび、西国十三藩を抱き込み、同盟を結んで、いざとなった場合、幕府に対抗する決意をかためているのであった。

「しかし、御家老――、水野越州という人物は、よほどの曲者でありますれば、いささかの証拠でもつかまれないように、くれぐれもご要心なさいませぬと……」

「桑名の港の抜荷のことか。心配は無用じゃ。公儀庭番に、調べあげられたのを、江戸家老たちは、ひどう気に病んで居るが、そんな調書は、証拠にはならぬ」

「…………」

「それよりも、わしが、しだいに気にかかって来たのは、あの眠狂四郎という男だ」

「はい――」

「あの男は、油断がならぬ。もしかすれば、京都の留守屋敷や、大坂の蔵屋敷へ、忍び込んで来る懸念がある。……早いところ、始末しておかねばならぬ」

「隼人らが、頭取、副頭取ばかりで、討ち取りに参りましたゆえ、今明日うちにも、吉報をもたらすとは存じますが……」

「どうであろうかの。わしが会うた印象では、あれほど陰惨な業を背負うて居り乍ら、その業力で、神力をねじ伏せ、不死身になって居る男は、滅多に居らぬぞ」

笑左衛門は、宙へ、眼眸を置いて、さらに、一語をつけ加えた。

「あの男を殺すことは、わしの運を試すことにも相成る」

石部に泣く

ねんねんよう、おころりよ
ねんねの里の、三上山
むかし、むかし、大むかし
山の主には、大百足
子供を喰べて、棲んでたぞ
泣く子を喰べて、棲んでたぞ
やれ、おそろしや、ねんころり
ねんねんころりよ、おころりよ
泣くのを止めたごほうびに
俵藤太というさむらいに、
　百足を退治してもろた

唄い乍ら、少年が、広い磧で、石塊の下をさがして、孫太郎虫を獲っていた。

鈴鹿山脈から流れ落ちて、水口あたりで平地に出たこの横田川は、山裾で扇状にひらき、石礫を川底から盛りあげている。

この涸れた砂と石の帯が、長くうねって、三雲、なつみ、針村、平松、こうじ袋などの村々を過ぎて、石部を越えて行く。

しだいに、川底は、民家の屋根よりも高くなっている。

その行手に、俵藤太が百足を退治した三上山が、まだ雨雲ののこっている空に、すっきりと聳えている。

三上山が見えると、旅人は、京都が近い、とほっとするのであった。

晴れた日には、山波のあわいに、比叡山も、その山嶺をのぞかせる。

京へ九里十三丁——石部は、旅人が急ぎ足で過ぎ去る宿であった。

そのむかし、付近に鉱山があって、銀と銅を産出した頃は、石部も、殷賑をきわめたが、いまは、掘りつくして、あとかたもなくなった。ところが、近年にいたって、白い山の石灰が、肥料となるとわかって、百姓たちは、痩せた田畑をすてて、その採掘に出かけるようになっていた。

そのために、村は、足腰立たぬ年寄と子供たちだけがのこされた。

赤児を背負って、孫太郎虫を獲る少年も、夜が明けてから、陽が落ちるまで、ずっと、一人ぼっちであった。

赤児は、少年の背中で、がくっと首を仰のけて、ねむりこけている。

何気なく、土手へ視線を向けた少年は、

「あれ?」

と、怪訝な面持になった。

一頭の馬が、ぽくぽくと、駆けて来ているのだが、その背に、人が俯伏せになっていた。

「なんだろ?」

少年は、いそいで、磧を駆けて、土手の斜面をのぼった。

馬が近づくや、少年は、ひえーっ、と悲鳴をあげて、立ち竦んだ。

馬上に俯伏した人間は、血まみれだったのである。

着物は、ずたずたになり、だらりと垂らされた手足からは、まだ血汐が、したたっていた。のみならず、その左手には、なお、鈍れた白刃が握られていた。

息をのんで、眸子をいっぱいに瞠いて凝視していた少年は、しかし、勇気を出すと、馬の口を把った。

馬も、幾箇所か傷ついていた。

「どう……どう……どう――」

少年は、たづなを曳いて、土手から畦径へ降りた。

わが家は、すぐ近くにあった。

東海道に沿うた家に生れた少年は、物心ついた頃から、大名行列を眺めさせられ、武士と町人の厳しい区分を知らされていたので、おのずと、山間僻邑の子供とは、武士に対する考えかたがちがっていた。

佐吉という、まだ九歳の少年は、恐怖を抑えて、傷ついたさむらいを助けなければならぬ、と決心したのであった。

まず、馬を、わが家の土間まで曳き入れておき、次に、背負った赤児をおろして、奥の納戸へ寝かせておくと、必死の力をふりしぼって、喪神の負傷者を、囲炉裏のある板の間へ、ひきおろした。

それから、父親が毎晩チビリチビリ飲んでいる焼酎を持って来て、手拭いに染ませると、傷口を拭きはじめた。いつぞや、父親が、鎌で足を切った時、そうしていたのを、佐吉は、見ていたのである。

からだ中いたるところに、傷があった。佐吉は、そのために、父親が大切にしている焼酎をのこらず使わなければならなかった。

手当をおわると、こんどは、なお右手に握りしめられている刀を、その指からはずさせる作業にとりかかった。

一本一本、指をひらかせるのに、佐吉は、歯をくいしばって、渾身の力をこめなければならなかった。

眠狂四郎が、意識をとりもどしたのは、その時であった。

急に——。

負傷者が、むくっと起きあがったので、佐吉は、仰天して、弾かれたように、跳びはなれた。

身を起した狂四郎は、そのまま、しばらく、眼眸を宙に据えて、疲労と疼痛でわがものではないような五体を、微動もさせずにいた。

かなりのあいだ、脳裡は、痴呆のように空白であった。

その空白を、とりもどすために、

「生きていた」

ひくく、呟いてみた。

それから、目の前の土間に立っているおのれが乗って来た馬を眺め、その視線を、固唾をのんで、石のようになっている少年へ移した。

「お前が、たすけてくれたのか？」

「はい」
佐吉は、こっくりと頷いた。
狂四郎は、傷の手当もされているのに、はじめて気がついた。
「すまなかったな」
「ううん……」
佐吉は、かぶりを振った。
「ここは、どこだ?」
「石部でございます」
「石部か」
すると、水口城下を通り抜けて、およそ五里の道程を、疾駆して来たことになる。
馬上で、意識を失ったのは、どのあたりであったか、記憶にはない。
「この石部には、大藤棚のある茶屋があったな?」
「はい、いせやでございます」
「そこへひと走りしてくれぬか」
狂四郎は、金を渡し、道中用の品一式が入れてある丹波行李を買って来てくれるように、たのんだ。その中には、切傷薬も晒も入っていたのである。
「それから……、お前が、平常欲しいと思っているものを、なんでも買うがよい」
「はいっ!」
佐吉は、金を握りしめて、とび出して行った。
狂四郎は、いざって、炉端に寄ると、粗朶を燃えあがらせておいて、仰臥した。

「……生きていた」

もう一度、呟いてみた。

生きているのが、奇蹟といえた。

狂四郎は、田村川沿いの街道上で、隼人隠密党の鹿児島隊・江戸隊の頭取・副頭取と、つぎつぎに一騎討ちして、十五人まで斬った。

いずれ劣らず、一騎当千の気魄と、秀れた業前の持主揃いであった。

狂四郎自身、十人とは斬れまい、と考えていたのである。

待ちかまえていた敵勢は、二十七名であった。

無数の修羅場を経て来ている狂四郎と雖も、曾てこれほどの強敵陣と決闘した経験はなかった。

十五人までも斬れた、ということは、おのれ自身、思いかえしても、信じ難いくらいであった。

業で勝った、という記憶がのこる勝負は、ほんのふたつ、みつであった。あとは、なぜ勝てたのか、おのれにも判らぬ。その刹那の、魔がのりうったような、本能の動きが、おのれを生かし、対手を斃れさせたことであった。

十六人目に相対した時、狂四郎は、

――これで、おのれの生命も、消える！

そう思った。

事実、四肢は、もはや、敵の迅業に応じて働く機能を喪失してしまっていた。

また――。

「江戸八番隊頭取・海蔵院匡」

と名乗った敵の構えには、心気を内にひそめた、すがすがしいまでの美しさが湛えられて居り、

一瞥（いちべつ）した瞬間、狂四郎は、技倆（ぎりょう）随一と看てとったのである。

闘志をみなぎらせた敵に対しては、その闘志を、無想正宗に吸いとることによって、円月殺法の秘奥を、使う余裕が生ずる。

しかし、心と気を、ともに内に秘めかくしてしまって、無音無息の静謐（せいひつ）の中に五体を置く敵に対しては、それと同じく、波しずまった鏡のような水面にさした影のように、おのれをして無心の状態を保たしめなければならなかった。

すなわち、対手が技は無きにひとしい神秘の境に立つ限り、こちらも、全く同じ真空の中に在る姿を示さなければ、到底互角に闘えるものではなかった。そのためには、身体に、無限の力をふるう可能を持たせなければならなかった。わずかの疲労感があってもならなかった。

手負い、困憊（こんぱい）しつくした身で、どうして、そのような敵との均衡が保てるものであったろう。

敵の構えを看て、

——これで、おれの生命も消える！

そう思ったのは、当然である。

そう思う目の正しさを、まだのこしていたのがふしぎなくらいなのであった。

もし、それから、四半刻（とき）の対峙（たいじ）の時間があったならば、こうして、生きのびて、農家の炉端に仰臥していることはできなかったであろう。

突如として、馬蹄（ばてい）の音が、狂四郎の後方で起ったのは、海蔵院匡と対峙して、数秒も過ぎないうちであった。

田村橋を、渡って来た一頭の馬は、人を乗せてはいなかった。そのかわり、橋を駆け抜けた瞬間、どのような仕掛けがなされていたものか、その鞍（くら）から、濛（もう）っと、白煙を噴かせたのであった。

ただの煙ではなく、凄じく火の粉を散らしたし、臭気も甚しかった。
馬が駆け抜けたあとは、全くの白い闇につつまれた。
あきらかに、誰かが、この決闘を邪魔し、中止させようとして、この馬を放って来たものであった。
その者が、狂四郎の味方であることは、その白い闇の中へ、さらに、三頭の馬を送り込んで来たので、あきらかであった。
狂四郎は、その一頭にとび乗って、まっしぐらに、白い闇を突破したのである。

――あれだけの智慧が、盗人の安五郎の頭の中で湧いたとは思えぬが……？
たとえ、思いついたとしても、四頭もの馬を、短い時間に、用意することは、ただの旅人の安五郎には、できない相談であろう。
――誰かが、安五郎のたのみを引き受けたに相違ない。
「人の帰するところは、天の与するところ、人の畔くところは、天の去つるところ――。しかし、おれに、天が与してくれる道理がない以上、与してくれたのは、やはり、人間か」
狂四郎は、目蓋を閉じた。
やがて、跫音が、近づいて来た。一人だけの跫音ではなかった。
さきに駆け込んで来た佐吉が、息をはずませ乍ら、
「おさむらい様、お客さんじゃ」
と云って、丹波行李を、そばへ置いた。

狂四郎は、土間に立った安五郎ときくを、視た。

安五郎は、きくに、

「手当は、お前様の役目ですよ」

と、云った。

「はい——」

きくは、いそいで上って来て、丹波行李の中から、薬と晒をとり出した。

狂四郎は、きくを見上げて、

「そなたが、三年間、丹精こめて仕立てあげたこの着物は、この通り、ぼろになった。返すことができなくなった」

と、云った。

きくは、潤んだ双眸(そうぼう)に、むりに微笑をうかべて、かぶりを振ってみせた。

「この紬(つむぎ)は、着て頂く御仁(おひと)がないままに、つくりましたものでございます。こうして、破れてしまったのは、わたくしに、また、新しい着物を仕立てよ、ということでございます。……こんどは、貴方様に着て頂くために、つくります。うれしゅうございます」

昨日までのきくならば、このように、思ったことを、そのまま、口にすることはできなかったであろう。

一夜にして、女は、このように変るものか。

きくの心をこめた手当がおわると、狂四郎は、安五郎が水口城下の古着屋からもとめて来た黒羽二重を身につけて、炉端に坐った。

「お横に——」

きくがすすめたが、狂四郎は、
「不死身にできている」
と、こたえておいて、安五郎に訊ねた。
「救ってくれたのは、お主だったか？」
「いえ、ちがうんで……。旦那は、鈴鹿峠の山中の、あの鈴鹿屋という旅籠の跛の爺さんを、おぼえていなさるでしょう？」
「うむ」
「あれは、ただのおいぼれじゃありませんでした。むかしは、伊賀衆だったのでござんすよ」
「そうか、助け馬の智慧は、あの爺さんであったか」
「とても、あっしの才覚で、あんな離れ業はやれるものじゃありませんや。腐っても鯛で、忍者ってえ者は、全く、うめえ方法を知って居りやす」
「お主が、気前よく、路銀全部を投げ出して、たのんだからではないのか」
「へへへ……、盗っ人が、珍しく、すこしばかり余分に持ちすぎて居りましたのでね。おかげで、胴巻が軽くなって、歩きよくなりました。ところでと、旦那が、しばらく静養なさるところを、さがして来なけりゃならねえ」
安五郎は、佐吉の肩を、ポンとたたくと、
「さあ、小さな兄哥、案内してくんな」
「どこへ？」
「寺があるだろう、寺が――」
「金勝寺があるよ。それから、東寺と西寺が……」

「よし、行こう」
安五郎は、佐吉を連れて出て行った。
二人きりになると、きくは、遽に、胸に熱いものがあふれた。
——生きていて下さった！
夢ではないのだ。
この人は、ここにこうして、いるのだ。
めぐり会う運命にあり、そして、めぐり会い、昨夜、このからだを与えた——その人が、ここに、こうして、生きていてくれるのだ。
きくの双眸に、泪があふれた。
「そなたと、こうして、昨夜も、炉火を、眺めていたな」
狂四郎が、云った。
「はい」
「今日また、こうしていられるとは、……ふしぎだ」
「貴方様は、決して、逝かれはしない、と信じて居りました」
「あの爺さんがいなければ、いま頃は、三途の川を渡って居る。わたしが斬った数知れぬ亡者たちが、一挙に押し寄せていたろう」
そう云ってから、狂四郎は、坐っている苦しさに堪えられなくなって、仰臥した。
きくは、自分の膝を、枕にしてあげたい、と思ったが、まだ、その勇気はなかった。
その時であった。
ものしずかであったが、かなりの人数が、この家へ近づいて来る跫音が、つたわって来て、狂

四郎は、さっと起き上った。
「きく──」
「は、はい！」
「気の毒だが、やはり、そなたとは、別れることになるらしい」
「えっ！　あ、あれは……？」
「敵は、追って来た。十二名が、残っていたのだ」
「ああっ！」
きくは、悲鳴をあげた。
「うろたえるな！　わたしの女房になったのであれば、覚悟をきめてもらおう」
「は、はい──」
狂四郎は、無想正宗を把った。
刺客勢は、庭へ入って来た。
──ぶざまな死にかたはすまい！
狂四郎は、自分に云いきかせた。
「ごめん！」
声があった。
「眠狂四郎は、ここに在る」
狂四郎は、こたえた。
一人が、すっと、土間に入って来た。
狂四郎は、立つと、

「ここは、われわれ殺伐の徒とは無縁の者が住む家だ。神社仏閣をけがすことは、一向にためらわぬが、われわれに米を食わせてくれる家を、血で汚すことは、好まぬ。場所をえらんで頂こう」

と、云った。

入って来た者は、狂四郎が、田村川畔で相対した十六番目の隼人隠密党江戸八番隊頭取・海蔵院匡であった。

「いや——」

海蔵院匡は、微笑して、かぶりを振った。

「われら一同、お手前と、ここで、戦いに、参ったのではない」

「どういうのだ？」

「お手前は、ただ一人にて、能く闘われた。われら党士が十五名も、あえなく敗れたのは、薩摩隼人として、面目を失ったことでござる。ふかく、慙じ入って居り申す。いかに、お手前が稀世の使い手であろうとも、われら隼人隠密党が十五試合を敗れたのは、末代までの不覚。もし、これが、世間に知れ申さば、薩摩藩の士風は、嘲罵の的に相成り申そう」

「…………」

「このたびの戦いは、われら隼人隠密党の敗北と、いさぎよく、みとめ申す。……お手前は、すでに、手負われて、われら残りの者と、雌雄を決しられる力を失われて居る。そのような御仁を、衆をたのんで、討ったとて、なんの自慢にも相成り申さぬ。……このまま、お手前を討たずして、ひきあげて、報告いたせば、おそらく、調所笑左衛門殿の叱責を蒙ること、目に見えて居り申すが、薩摩隼人の面目として、手負いの敵を討つことはでき申さぬ。お手前が、恢復されたあかつきに、あらためて、挑戦つかまつる」

口上をおわると、海蔵院匡は、鄭重に頭を下げて、

「養生専一に、祈り申す」

云いのこして、去った。

狂四郎は、茫然として、その場に、立ちつくした。

やはり、ただの刺客陣ではなかった。薩摩隼人は、これまで狂四郎が出会った敵とは、質を異にした気骨ある武辺であった。

敵に向って、

「あっぱれ！」

と、大声で賞讃を送りたい気持になったのは、はじめてのことであった。

——この無頼者を、武士として扱ってくれたか。

狂四郎が、炉端へもどって、腰を下すと、不意に、きくは、それまで怺えに怺えていた衝動をあらわにして、その胸にすがりつくと、わっと、うれし泣きの声をあげた。

狂四郎は、泣きじゃくられるままに、身を倒した。

きくは、うれしさを、言葉にすることはできなかった。

狂四郎の手を、把って、頰ずりし乍ら、泣きつづけた。

これほどまでに、惜しみなく泪を流して、女のよろこびにひたることのできるこの瞬間が、おそらく、きくの生涯で、最も幸せな思い出となろう。

程なく——。

安五郎と佐吉の笑い声が、おもてにきこえた。

草津姥が餅

眠狂四郎が、甲賀郡西寺村の古刹西寺（阿星山常楽寺）の坊舎で、傷の癒えるのを待って、再び、東海道の往還へ、その姿を現したのは、年が明けてから、程なくの寒気はきびしいが、よく晴れた日であった。

療養のあいだ、きくと安五郎の、わが身をいとわぬ奉仕を受けたことを、狂四郎は、生涯忘れないであろう。

そのきくには、武部仙十郎に宛てた手紙を持たせて、安五郎の供で、江戸へ往かせ、再び、狂四郎は孤身にかえっていた。

一月余のあいだに、年があらたまるとともに、街道の景色も変っていた。

遠山は純白の装いをしていたし、近山もさむざむとはだかになって、地肌にところどころ雪をのこしていた。霜柱を立てた田面は、人影もなくひろがり、人家も、陽蔭の場所に消えのこった雪を配して、ひっそりとしている。

明るい陽ざしが、凍てついた路上に匍わせる影法師も、いかにも冷たげであった。

冬の街道は、旅人の姿も稀であった。

石部を出て、金山、伊勢落、高野と過ぎて行くあいだ、狂四郎の前後には、まったく人影はなかった。

梅木（六地蔵村）に入って、狂四郎が、立寄ったのは、和中散の本家「是斎」であった。

この薬舗の名は、日本中に知られている。当時、和中散は、旅人の用心薬として、欠かせないものであった。

狂四郎の傷が、思ったよりはやく癒えたのも、安五郎が、この「是斎」に特にたのんで、良い薬を練ってもらったおかげであった。

狂四郎が、店さきに立つと、番頭がすぐ奥へ入って、あるじを呼んで来た。

あるじは、商人には珍しく刀剣の蒐集を唯一の趣味にして居り、江戸へもしばしばおもむいていて、眠狂四郎という稀有の使い手の名をきいていたのである。

安五郎から事情をきくと、あるじは、どうしても、薬代を取らなかったので、狂四郎は、礼を述べに立寄らざるを得なかった。

五十前後の、福相のあるじは、顔をかがやかして出て来ると、

「お待ち申して居りました。さ、どうぞ」

土間へ降りて、店と竝んだ檜皮葺きの門から、座敷へ招じた。

対座して、礼を述べてから、狂四郎は、是非薬代を取ってくれるように、申し入れた。

「いえ、貴方様の傷を癒やすのに、てまえどもの薬が、すこしでもお役に立てたのなら、もうそれだけで、鼻が高いのでございます。お代を頂戴するなど、滅相もない」

「こちらは、なるべく恩を蒙らずに生きてゆきたい性分なのだ」

狂四郎が云うと、あるじは、微笑して、

「実は、白状いたしますと、お代を頂戴いたさなかったのは、てまえにこんたんがあったのでございます」

「なんであろうか？」

「貴方様がお立寄り下さいました時、是非とも拝見いたしたい、と思い、それで、わざと……」
「これか」
狂四郎は、かたわらに置いた無想正宗を把って、さし出した。
「有難う存じます。拝見させて頂きます。てまえ、一生の願いが、叶えられて、こんなうれしいことはございませぬ」
あるじは、それを押しいただいてから、懐紙を口にくわえ、柄を下にして直立させると、鞘をするりと抜き上げた。
刀剣蒐集を唯一の趣味にしているだけあって、観賞作法に一分の狂いもみせなかった。白刃に視入る眼眸は、憑かれたような色を湛えた。
やがて、刀身を鞘に納めて、狂四郎にかえしたあるじは、ほっと大きく吐息した。
「てまえは、これで、三百本あまり、名工と称せられる人々のきたえた業物を集めて居りますが、その無想正宗の前では、ただの一本も、ごらんに入れるものはございませぬ。ガラクタと申しても、はばかりませぬ」
「わたしが所持したために、あたら名刀も、魔剣と化した。のりうつった業念と、これに斬られた無数の人々の怨恨は、砕かぬ限り、消えはすまい」
「なんの、剣は人を斬るためにあるものでございます。それがさだめならば、その無想正宗こそ、天下の名刀に相違ございませぬ」
そうこたえてから、あるじは、あらためて狂四郎をじっと瞶めて、
「ところで、京へお入りになる由、とうかがいましたが……」
「うむ」

「それまでの道中に、まだまだ、貴方様のお生命を狙う敵は、待ち伏せているのでございましょうね？」
「たぶん……」
「くれぐれも、ご要心なさいまし。貴方様に襲いかかる敵は、刀や槍などの得物だけではなく、意外の武器を使うかも知れませぬ。……と申しますのは、つい、十日あまり前のことでございます。さる西国のお大名のご家中で――てまえも、以前から存じ上げているおさむらいでございますが、帰国の途次だと申されてお立寄りになり、熊退治の毒玉をつくってくれ、とおたのみでございました。けもの獲りの毒玉は、これまでにも、お大名衆のご依頼に限って、つくってさし上げて居りましたので、お引受けいたしました」
その毒玉は、当って砕けると、猛毒の液体が散り、目をつぶし、口に入れば生命を奪うし、もし対手が人間ならば、皮膚を無慚にただらせてしまうのであった。
あるじは、それから三日後、草津の脇本陣で待っている依頼主へ、自身でその毒玉を届けた。
その時、その藩士がふともらした言葉が、あとまで耳にのこった。
「尋常の剣では到底敵わぬ対手には、こいつを投げつけるに限るな」
そう云って、薄ら笑うのを視て、あるじはおどろき、
「人間に対してお使いになるなど、もってのほかでございます」
と、咎めた。
依頼主は、あわてて、
「たとえば、人間の種類にもいろいろある。豺狼よりもおそろしい奴がな。そういう敵に対しては、手段はえらんで居れぬ、という話だ。べつに、これを、そのおそろしい敵に対して使おうと

思って、つくってもらったわけではない」

と、ごまかしたが……。

あるじは、くどいほど、念を押して、辞去したが、ずっと、気がかりだったのである。

「もしや――という懸念がございます。どうぞ、くれぐれも、ご要心下さいますように」

あるじは、狂四郎を真剣に瞶め乍ら、忠告した。

「易の文句にあるな。霜を履んで堅氷至る。こちらは、霜を履んで薄氷を渡る」

笑って、狂四郎は、無想正宗を把ると、立ち上っていた。

梅木からものの三町を行くと、てはらみ村に至る。

手孕と書く。むかし、この村の某という男が、他国へ出かせぎに行かなければならなくなった。その妻は、まだ年が若く、美しかったので、男は、幼い時からの唯一の友達に、妻を預けておいた。三年経ったが、男は、還って来なかった。友達は、預った女を人に盗まれてはならぬと、夜は必ず、女の腹の上に手を置いて、やすんだ。ところが、女の方は、しだいに、その男に対して恋心をおぼえるようになった。その想いがつのって、男と交りもせぬのに、みごもってしまった。そして、十月が過ぎて、女は、出産した。しかし、それは、一個の手であった。爾来、この村は、手孕村と呼ばれるようになった。

現在では、てばら（手腹）とも、呼ばれている。

村のはずれに、女が産んだ手をすてたという川が流れていた。

その土橋の袂に来た時、狂四郎は、一人の雲水に出会うた。

すれちがいがけに、雲水は、笠をあげて、狂四郎の貌を眺めた。
「南無！　お手前の背後に、墓が傾いて居り申す」
――これも、おれを狙う敵の一味か。
これまで、たびたび、そういう手輩に、不吉の予言をあびせられて来た狂四郎であった。
「死神が迎えに来るのは、いつであろうか？」
狂四郎は、すかさず、問うた。
「左様――早ければ、今日、おそくとも明日までには……」
雲水は、おごそかな口調で、こたえた。
「防ぎのてだてがあろうか？」
「その腰の剣では、防ぐことは叶いますまいのう」
「仏の弟子ならば、防ぎのてだてくらいご存じであろう」
「もとより、存じ申す。教えて進ぜる。……お手前が、一瞬、不吉の予感が起ったならば、南無帰命頂礼とくりかえし唱えつつ、百歩あまり、道をひきかえされるがよろしかろう。そうすれば、災厄をまぬがれることができ申そう」
「ご忠告にしたがうことにする」
狂四郎は、雲水と別れて、橋を渡った。
雲水が、もし敵のまわし者ならば、その忠告そのものが、危険をはらんでいる筈であった。忠告ではなく、罠と知るべきであった。
――仕掛は、おもしろそうだ。
狂四郎の胸中には、その不敵な呟きがあった。

やがて、ふところ手の着流し姿は、草津宿に入った。

ここは、東海道と中仙道とが分岐するところである。町内の札の辻が、すなわち、その別れ道にあたる。

したがって、ここには、上り下りの旅人の荷物を厳重に取調べる貫目改所があった。

名物「姥が餅」は、そのとなりにあった。

俚諺に、「名物にうまいものなし」と云うが、この姥が餅だけは名実相副っていた。

狂四郎は、人馬継立で賑っている店に入った。

視るともない眼眸をまわしたが、こちらの神経に触れる旅人の姿は、見当らなかった。

喫みおわった玉露の茶碗を、朱塗りの盆へもどした——その折であった。

突如、往還上で——店からは、かなりはなれた距離であったが——怒号と悲鳴があがった。

店さきにいた馬子が、そちらへのびあがってみて、

「あっ！　抜いたっ！」

と叫んで、走り出した。

争いは、一瞬裡に熄んだ。

その直後、一人の武士が、疾駆して来るや、

「馬だっ！」

と、叫んで、店わきにつないであった馬から、荷駄をはねおとしておいて、

「借りるぞ！」

云いのこしざま、はだかの背へとび乗って、忽ち馳せ去った。

馬子が、血相変えて、

「こん畜生っ！　おらの馬を、盗みやがって！……野郎っ、町人を、犬っころみてえに斬りやがって、さむれえが、逃げるとは、卑怯だぞっ！」

と、地だんだ踏みつつ、喚きたてた。

あっという間の出来事であった。

改所から、役人が、急いで近寄って、しらべたが、路傍に仆れた商人ていの男は、すでに事切れていた。

馬で遁走した武士に、商人が、なにが理由で、斬られたのか、あまりに一瞬のことなので、目撃者がいなかった。

茶代を置いて、店を出た狂四郎が、歩いて行くと、死骸には、莚がかむせてあり、両足だけが、のぞいていた。

地面には、まだ、じくじくと血汐が流れ出ていた。

馬子や駕籠舁きや旅人が、七八人、とりかこんで、がやがやと喋りたてているばかりで、死骸はそのまま、しばらく、そこへ放置されたままになる模様であった。

狂四郎は、一瞥をくれておいて、立ち停らずに、行き過ぎた。

「ご浪人さんようっ！」

馬子が呼んで、追って来たのは、二十歩ばかり遠ざかってからであった。

狂四郎が振りかえると、馬子は、息をはずませ乍ら、

「すまねえけど、お前様、証人になって下せえ……。代官所から、お役人が出張って来たら、お

らどもじゃ、証人になれねえ。たしかに、馬を盗んで逃げたさむれえが、殺したちゅうことを、お前様に、云うてもらったら、ありがてえ。どうか、たのみます」

と、ぺこぺこと、頭を下げた。

すげなくことわろう、としたとたん、狂四郎の脳裡に、ひとつの直感がひらめいた。

手孕村ですれちがった雲水の言葉が、よみがえったのである。

「不吉の予感が起ったたならば、南無帰命頂礼とくりかえし唱えつつ、百歩あまり、道をひきかえされるがよろしかろう」

雲水は、そう云ったのである。

――このことか。

その時は、こちらがそんな臆病なまねをする筈もないと判って居り乍ら、なぜ、云うのか、と合点がいかなかったのである。

敵の方で、ひきかえさせるように仕組んでくれたのだ。

ひきかえさないわけには、いくまい。

「お前にたのみがある」

狂四郎は、馬子に云った。

「へえ？」

「大声で、南無帰命頂礼と唱え乍ら、わたしの後からついて来てくれ」

「へえ、お安いご用で――」

馬子は、声を張りあげ乍ら、狂四郎の背後に従った。

死骸に、数歩の距離に近づいてから、狂四郎は、ちょっと、足を停めた。

次の刹那——。

疾風を起して、狂四郎の速影がそこを掠め過ぎるのと、莚がはね飛ばされて、死人の手から、黒い玉が投げられるのが、同時であった。

黒い玉は、狂四郎に当らず、路傍に立つ石地蔵尊のあたまに当り、ぱっと砕けたとみるや、その慈顔を、みるみる、毒液で、どす黒く塗りつぶしてしまった。

狂四郎は、二間のむこうに立ち停ると、冷やかな視線を、偽死人へ当てた。

「あいにくだった。仕掛は巧妙だったが、ひとつだけ、無理があったようだ」

「なに！」

偽死人は、懐中から、一尺二三寸の小刀を抜き放って身がまえた。

狂四郎は、薄ら笑って、

「生きている人間が、屍に化けることの無理だ」

「…………」

対手が、じりじりと肉薄して来るにまかせつつ、狂四郎は、つづけた。

「莚の下からのぞいていたお主の両足だが、わたしが行き過ぎた時と、ひきかえして来た時とでは、ほんのわずかだが、置きかたが、ちがっていた。生きている人間ならば、動くのは当然だが、この場合は、それが、とりかえしのつかぬ失敗となった。お主は、ほんのわずかばかり足を動かしたために、本当に屍になることになった。気の毒だと申さねばならぬ」

狂四郎の言葉がおわらぬうちに、対手は、凄じい懸声もろとも、地を蹴って、五体を宙のものにした。

狂四郎は、その地点を一歩も動かなかった。

尋常の兵法者ならば、意外の飛翔術に対して、周章るところであったろうが、狂四郎は、これまで、このような攻撃には、数多く出会っていたのである。

狂四郎の頭上を翔け越えた敵は、地上に降り立ったとたん、くるりと一廻転して、膝を折った。いったんは、立ち上って、狂四郎に向って、小刀をさしのべたものの、それがこの世での最後の、文字通り必死の動作であった。地ひびきたてた時には、すでに、生命は、体内から抜け去っていた。

「馬子衆――」

狂四郎は、無想正宗を腰に納めてから、呼んだ。

「へ、へい――」

腰を抜かして、べったりと坐り込んでいた馬子は、いくども起とうとして、叶わなかった。

「せっかくのたのみであったが、生き還った死人を斬ったわたしは、証人にはなれぬ。他の者にたのむことだ」

云いのこして、しずかに踵をまわした。

それから、小半刻すぎて、一人の雲水が、あわただしい足どりで、大津へ舟の出る矢橋の浦の渡し場へ、到着した。

笠をあげて、鋭くあたりを見まわし、眠狂四郎の姿がないことをたしかめてから、船頭小屋へ寄った。

「船頭衆、一艘たのみたい。渡し賃は、はずみ申す」

そう云って、小屋の中を、ひょいと覗き込んでから、反射的に、一間を跳び下った。

土間に切った囲炉裏端の床几に、腰かけていたのは、ほかならぬ眠狂四郎だったからである。

やおら、腰を上げた狂四郎は、

「死人に襲わせる才覚は、お主の脳味噌から、しぼり出されたものか、雲水殿」

と、云い乍ら、小屋の外へ、出た。

雲水は、すこしずつ、退った。

狂四郎は、その歩幅だけ、進んだ。

「その様子では、お主は、どうやら、遁走を企てているらしい。……風が出て来たので、矢橋からの舟は出ない、と思い、この眠狂四郎が瀬田をまわるもの、と判断したのであろう」

矢橋舟は危険だ、ということは、旅人によく知られていることであった。比叡山から吹きおろす疾風――すなわち、比叡颪のために、しばしば、矢橋舟は、転覆するのであった。どんなに、凪いだ良い日和でも、比叡颪は、突如として、湖上に襲って来るのであった。

『もののふの矢橋のわたり近くとも、いそがばまわれ瀬田の長橋』

そんな歌もあるくらいであった。

雲水は、狂四郎に指摘された通り、狂四郎が、瀬田の長橋を渡って行ったものと推測して、転覆の危険を承知で、矢橋舟をえらぼうとしたのであった。

「何藩の家中か、それは、訊くまい。ただ、こちらは、熊のかわりに退治されようとしたことは、いささか、肚に据えかねるので、ここで待っていた。逃げようとした卑怯も、許せぬ」

珍しく、この男が、自ら進んで、討ちはたす肚をきめて、待ち伏せていたのである。

と――。

雲水が、笠をはねすてると、その場へ、土下座した。

「お、お許し下され！　それがしの腕では、到底、お手前に、敵い申さぬ」
両手を土につけて、哀願した。
四十すぎた年配で、かなり立派な風貌の持主であった。
隼人隠密党の面々とは、あまりにちがう腰抜けぶりであった。
「生命が惜しい理由は――？」
「国許に、妻子が……、子供が、六人、待って、居り申す」
「……………」
「十三歳をかしらに、六人、待って居り申す。……もし、ここで、それがしが相果てたならば、家は改易となり、六人の子らが、路頭に迷い申す。……何卒、お見逭し下され。お願いつかまつる！」
額を土にすりつけて、平伏した。
そして、そのまま、頭を擡げなかった。
しばらく、沈黙が置かれた。
突然、一颯の刃風が、頭上に鳴った。
西国藩士は、はっと、首を立てた。
地べたに、ころりと落ちたのは、おのれの髷であった。
一言も云わずに、狂四郎は、そこを歩み去って行く。
その後姿を見送って、西国藩士は、
「忝けのうござる！　有難うござる！」
と、くりかえしつつ、いくども頭を下げつづけた。

たとえ、肚の裡で、赤い舌を出して居ろうとも、土下座して生命乞いをする敵を斬る刀を、狂四郎は持たなかった。それが、この男の長所でもあり、弱点でもあった。

大津の死霊

眠狂四郎が、瀬田の長橋を渡って、大津に入ったのは、戌刻（午後八時）をだいぶまわった時刻であった。

そのためか、あるいは暗い異相のせいか、近江屋、海老屋、井筒屋など、名の通った旅籠からは、

「あいにく、本日は、部屋がぜんぶ、ふさがって居りまする」

と、きまり文句で、ことわられた。

ようやく、部屋へ通してくれたのは、宿をはずれて、逢坂山にかかろうとするところにある走井茶屋が持つ小さな旅籠であった。

走井茶屋の茶汲み女が、二年前、ここを通った狂四郎をおぼえていてくれたのである。その時、泥酔したどこかの藩士が、抜刀してあばれるのを、狂四郎は、手刀で地に匐わせ、店さきの噴水のようにあふれている井戸水へ首を突っ込んでおいて、立去ったのである。

「あ――あの折のご浪人衆」

茶汲み女は、すぐに思い出し、旅籠を世話してくれぬか、というたのみに、すぐ頷いた。

案内されたのは、むしろ大きな旅籠よりも、たたずまいが凝っていて、部屋も居心地がよかっ

た。

ただ――。

この地の名物である大津絵を一面に貼りつけた屏風が、いささか、部屋を陰気くさくしていた。藤娘や槍持奴は、べつになんということもないが、一念発起した鬼の念仏や、瓢箪鯰、犬追座頭、雷公のたぐいは、線の無駄をなくして面白いものになってはいるものの、所詮泥くさい戯画であった。

右肩に、

　大津絵の筆の始は何仏

という一句が記されてあったが、おそらく、それが芭蕉の真筆として、この旅籠の自慢なのであろう。

狂四郎は、一月余の療養の間、一滴も酒を口にしなかったので、膳に添えられた銚子を一本空にすると、ほろ酔うて、すぐ、牀に入って、睡った。

石部から、草津を越えて、この大津まで、六里に近い距離を、歩いて来た疲れも出ていた。

まだ、からだの各所の傷が、痛みをのこしていたのである。

どれくらいの時間を、睡ったであろうか。

急に――。

胸苦しくなって、狂四郎は、呻いた。

なかば目覚め、なかば睡っているようであった。

なにか、生きものらしいものが、胸にのしかかっていた。

――これは、夢らしい。

そう思いつつ、押しのけようとしたが、のしかかって来たものは、ビクともしなかった。
——怨霊か。
これまでにも、無想正宗の贄にした者が、枕辺に現れたことは、一度や二度ではない。しかし、それで、うなされたことは、なかった狂四郎である。
目覚めている時と同様、冷然として眺めているうちに、怨霊は、いつとなく消え去ったのである。
いま、胸を押しつけて来ているものは、これまで枕辺に現れた怨霊とは、ちがったたぐいのようであった。
こちらを冷然とさせて置かぬ魔力を加えて来た。
その重さに、呼吸がせわしくなり、このままでは、胸が押しつぶされてしまう恐怖感が起った。
そして、その苦しさが限度に来て、狂四郎は、ぱっと目蓋をひらいた。
全身に、汗が滲んでいた。
湖のまん中に仰向けになって漂うているような、背の下に空虚なものを感じつつ、狂四郎は、闇の中を、じっと凝視して、動かなかった。
——これは、どういうことだ？
殺気をひそめた敵が、忍び寄って来るのに対しては、この男の神経は、むしろ、刃物のように冷たく冴えるのである。得体の知れぬ怪しい気配であっても、それが、正体のあるものである限り、きわめて鋭い心気の働きで、対応できるように、五感をきたえてあるのである。
ところが——。
目覚めてみれば、あとかたもない——そんな他愛のないものに、胸を押しつぶされそうになっ

て、全身に汗を滲ませたことは、この男の誇りを甚しく傷つけた。
五臓の疲れが怪異を呼ぶ、などということは信じない男なのであった。
ものの四半刻も、闇へ、眸子を送っているうちに、やがて、睡魔に襲われた。
ねむったとたんであった。
再び、おそろしい力が胸を圧して来て、こんどは、同時に、目覚めた。
——おれを、ねむらせぬのか。
憤りが来た。
その時であった。
脳裡に、ひとつの記憶が、よみがえった。
——そうか。あのことかも知れぬ。

二年前の晩秋のことであった。
江戸への帰途に就いた狂四郎が、矢橋舟に乗るべく、渡し場へ出て来た時、御影石の常夜灯の蔭にかくれるようにして佇んでいた一人の女が、つと、小走りに出て来て、
「卒爾乍ら——」
と、呼びかけて来た。
かたぎではなかった。みがいて一皮むいた滑らかな肌と、すっきりと際立った婀娜っぽい着つけに、色香が匂うていた。
美貌というほどではないが、目もとと口もとに、男好きのする優しさがあった。年齢頃は、二

十四五であった。
狂四郎が、視線をかえすと、女は、念珠を持った手を胸で組み合せた。
「折入ってお願い申し上げたいことがございます。おききとどけ下さいまし」
「抹香くさいたのみなら、えらぶ対手をまちがえているようだ」
狂四郎が、ひややかに云うと、女はせわしくかぶりを振って、
「いいえ。失礼でございますが、あたしは、ここで、三日のあいだ、据膳を召上って頂く御仁を、お待ち申して居りました」
意外な言葉を、口にした。
「このおれが、据膳を食いそうな男に見えたのか」
狂四郎は、苦笑した。
「お怒りにならないで下さいまし。……こうして、念珠まで持って、いのちがけで、お願い申し上げて居ります」
「ことわろう。据膳を押し売りされたのは、はじめてだが、どうやら木偶扱いされているらしいのが、気に食わぬ」
云いすてておいて、狂四郎は、矢橋舟に乗った。
すると、女も、あとから、乗って来た。
勝手に乗って来た者を、追いかえすわけにもいかず、狂四郎は、そ知らぬふりをしていた。
急に、舟がひと揺れして、乗客たちの驚愕の叫びがあがったので、狂四郎が、ふりかえると、高い飛沫の中に、女の沈むのがみとめられた。
あわてて、女をひきあげて、水を吐かせた船頭は、狂四郎を睨みつけて、

「旦那、男嫌いで通した常磐津梅春を、おめえさんは、土左衛門にしようとしたんですぜ。まさか、このまま、すてて行く、とは云いなさるめえ。もし、すてて行く、と云いなさるのなら、こっちも覚悟がある。比叡颪できたえたこの声で、呼べば、たちどころに、矢橋舟は、五十艘も集まらあ。こんどは、おめえ様が、土左衛門になる番ですぜ」

と、脅した。

どうやら、船頭は、こちらを、女が恋いこがれて幾年も待ちつづけていた男とでも、思いちがいをした様子であった。

狂四郎は、騒動を起すのも面倒なので、黙って、腕を組んだなりでいた。

船頭は、舟をかえすと、駕籠を呼んで女を乗せ、狂四郎につき添わせ、

「ようがすかい、旦那。師匠が納得しねえ限り、矢橋舟にゃ乗せねえし、瀬田の長橋も渡らせませんぜ」

と、侠気の程を示したものであった。

妙ななりゆきであった。

とある横丁の小ぢんまりしたしもたやに、女を送って行き、船頭から耳打ちされていた駕籠舁きに見張られるまま、やむなく、入って、茶の間の、神棚の下にある長火鉢の前に坐った。

着換えて、姿をみせた女は、血の気の失せた顔を俯向けて、

「かんにんして下さいまし」

と、詫びた。

「なぜ、わたしに、据膳を食わせようとするのか、事情をきこうか？」

狂四郎は、訊ねた。

すると、女は、両手を畳につかえて、
「どうぞ……、何もおきき下さらずに——お願いでございます」
と、乞うた。
こちらの生命を狙う者のまわし者であるとか、女自身が殺意を抱いているとか——そうしたこんたんある芝居ならば、こちらは、看破する目を持っているのであった。
どんな仔細があって、からだを与えようとしているのか、見当がつかぬが、すくなくとも、こちらに害意を持っていないことだけは、たしかなようであった。
晩秋とはいえ、琵琶湖の水は、三百尺の深さを持っていて、冷たいのであった。そして、それに、飛び込んだ女のもがきかたは、あきらかに泳ぎを知らぬ者のそれであった。船頭がひきあげるのがおそかったならば、あえなくなっていたかも知れない。
芝居ではなかった、と信じてよさそうであった。
「お前を一夜だけ抱く——それだけで、よいと云うのか？」
「はい」
「わたしに、からだを与えれば、お前の、その——なにかの悩みごとが、消える——そうなのか？」
「はい。……どうぞ、お願いでございます！」
「ばかげた振舞い、とは思わぬのか？」
「思案のあげく、きめた覚悟でございます」
「覚悟——か」
狂四郎は、ある種の不快さをおぼえた。

「もし、わたしが、据膳を食わずに、このまま、立去ったならば、どうする？　また、湖水へ身を投げるか？　それとも、別の男をさがすか？」

返答次第では、遠慮なく、腰を上げるつもりであった。

女は、ただ、当惑の面持で、畳の一点へ、眼眸を落した。

「どうなるか……、あたしにも、わかりません」

その言葉を、狂四郎は、本音ときいた。

夜を迎えて、狂四郎は、女をじらせるように、長い時間をかけて、盃の数をかさねた。

女は、こちらの一語、一挙動にも、気をつかって、いたいたしいほどであった。

やがて、狂四郎がさきに牀に就き、女は湯上りの肢体を緋の長襦袢に包んで、そっとかたわらに入って来たが、その動作には、はじらいを知っている者のつつましさがあった。

流行歌の師匠をしているくらいであるから、男を知らぬ身でもなかったろうが、狂四郎を受け容れる態度には、稚さがあった。

——まるで、人身御供だ。

狂四郎は、その瞬間にさえも、脳裡の片隅に自嘲をのこした。

女は、全く無反応だったのである。

終って、牀を抜け出た女は、熱湯でしぼった手拭いを持って来て、枕もとへ置くと、

「有難う存じました」

と、礼をのべた。

眠狂四郎が、はじめて照れたことであった。

女は、次の間に、牀をとって、やすんだ。

「わたしという男を、なぜ、えらんだのだ？」
狂四郎が、訊ねたのは、翌朝、食膳に就いた時であった。
「貴方様を、お見かけしたとたん、この御仁だ、と感じたのでございます。うそではございませんし」
女は、こたえた。
狂四郎は、昨日とうってかわって、女の眸子に明るい色が刷かれているのをみとめた。
矢橋舟の渡し場へ、送って来た女は、くどいほど、くりかえして礼をのべてから、ちょっとためらっていたが、
「いつかは、また、この大津をお通りなさいますと存じますが、お願いがございます」
「二度と立寄ってくれるな、というたのみなら、安心していてもらおう」
「いいえ。お立寄り下さいましても、かまいませんが、どうか、この大津には、お泊りになることだけは、お止め下さいますように、お願い申し上げます」
「旅籠にも泊るな、と云うのか？」
「はい、どうぞ、お願い申し上げます」
「なにか、不都合が、あるのか？」
「もしも、貴方様のお身の上に、おそろしいことが起りましては、申しわけございませぬゆえ……」
「…………？」
女は、狂四郎の視線を受けとめかねて、顔を伏せると、
「ただ、なんとなく、そんな気がいたすのでございます」

と、つけ加えたことだった。

あれから、二年の歳月が、過ぎている。

女の忠告を忘れて、旅籠に泊った狂四郎は、奇妙な怪異に遭うたのである。

朝陽がさしそめた頃あい、狂四郎は、おのが長い影法師を踏んで、その横丁に入って行った。

その家は、二年前とすこしも変らぬたたずまいを、そこにみせていた。

路面もきれいに掃かれ、格子戸も拭きあげられて、ところどころ濡れのこっていた。

狂四郎は、黙って、格子戸を開けて、土間に立った。

「どなた？」

ききおぼえのある声が、問うた。

「二年前の男が来た」

「え？」

すぐに、障子が開けられた。

「まあ、旦那！」

常磐津梅春は、おどろきの目を瞠った。

「まだ一人ぐらしならば、上らせてもらうが……」

「どうぞ、お上り下さいまし」

茶の間の様子も、二年前と全く同じであった。

「お前のくらしぶりには、なんの変ったところもないようだな？」

「はい。旦那の方は、いかがでございましたか？　お変りございませんか？」
「昨夜までは、変ってはいなかった」
「え？」
「お前の忠告を忘れていて、走井茶屋の裏手の旅籠に泊った」
「まあ！」
梅春は、おそれの色を顔にうかべると、狂四郎をまじまじと瞶めかえした。
「それで、昨夜、どんなことが……？」
「うなされた」
一言こたえておいて、狂四郎は、冷たく冴えた視線で、梅春の眸子をとらえた。
梅春は、頷き、そして、俯向いてしまった。
「お前は、わたしが、この大津に泊れば、おそろしいことが起る、と予言した。予言通りに、怪異――というほどでもないが、奇妙なものが、わたしの胸へのしかかって来た。……お前が、どうして、このことを予言できたのか、きかせてもらおう」
「…………」
「わたしが、お前の据膳を食ったことと、どういうつながりがあるのか？　打明けてもらおうか」
「…………」
「それが、どのようなことであろうとも、こちらは、悩らぬ、と約束しよう」
「いえ――」
梅春は、顔を擡げると、かぶりを振った。
「おききになれば、貴方様は、屹度お怒りでございます。あたしを、許しては下さいません」

「約束は守る男だ、と思ってもらおう。お前がえらんだのだ。信用してもらわねばなるまい」

狂四郎は、促した。

梅春は、なおしばらく、俯向いていたが、そのあいだに、心を決めて、狂四郎の眼眸を受けとめると、

「申し上げます」

と、云った。

「……二年前の夏でございました」

梅春は、江戸で常磐津の修業をおわって、師匠の生れ故郷であるこの大津へやって来た。この家は、師匠の持ちものであった。

師匠は、年に二度ばかり、大津に帰って来て、弟子を取るならわしであった。梅春は、いわば、留守番がわりの代稽古になったのである。

耳の遠い六十すぎたばあやがいて、その日からでも、稽古ができた。

おそろしいことが起ったのは、三日目の夜からであった。

ぐっすりとねむっていた梅春は、不意に、なにか重いものが胸にのしかかって来るのをおぼえた。押しのけようとしたが、それは、おそろしい重さであった。どんなにもがこうとしても、手も足も動かなかった。思わず、悲鳴をあげて、自分の声で目がさめた。全身がぐっしょりと汗に濡れていた。おそろしさで、ついに、朝まで、ねむれなかった。

次の日も、その次の日も――怪異は、つづけさまに起った。

梅春は、この家になにかのろいがかけられているのだと思い、真言寺から護符をもらって来たり、撫物（なでもの）をつくって名越祓（ばら）いをしてみたり、山伏や巫女（みこ）や陰陽師を招いて厄払いをしてもらった

りしたが、なんの効目もなかった。

梅春は、この家に住むことに堪えられなくなり、京都へ逃げて、知りあいの常磐津師匠の家へ、身を寄せることにした。しかし、その家に泊ってから五日も過ぎないうちに、またもや、同じ怪異が深夜に起った。

その家の師匠が、同情して、八方をあたってくれて、八坂神社の御師の女房が、鋭い神経の持主で、公卿の依頼で、時折り霊媒をつとめるが、依頼者がのぞむがままの死者に憑かれてみせることを、きいて来た。

梅春は、その御師の女房をたずねて行き、事情を打明けて、霊媒を乞うた。

深更を待ってそれがはじめられるや、女房に憑いて、その口を借りて、現れたのは、二十年あまり前に、大津のこの家がまだ建っていなかった空地で、男からむごたらしい殺されかたをした祇園の芸妓であった。

その屍体は、琵琶湖へ投げ込まれたという。

白骨となった身が、ひきあげられる希望もないままに、芸妓は、中有の闇にさまよいつづけて、怨霊のあわれを、だれかに知って欲しい、と願って来た。

そして、ついに、梅春に、おのが霊魂の存在をつたえる機会にめぐり会うた、という次第であった。

御師の女房は、梅春に云った。

「人の五感はさまざまであって、いくら死霊がとり憑こうとしても、一向に感じない人も居り、遠い距離があっても、それをさとる人が居ります。貴女は、後者にあたる女子衆と存じます。……貴女が、死霊からまぬがれる方法は、ただひとつ。死霊を感ずる五感をそなえた男子をさが

のであった。

そして、梅春自身は、こん後、三年間、神仏に対して一切祈るのを止めるように、申し渡した

して、夫婦（めおと）のちぎりをむすぶことであろうか、と思います」

「貴女に代って、このわたくしが、子刻（ねのこく）を待って、一刻あまり、祈禱（きとう）して進ぜましょう」

御師の女房は、そう云ってくれた。

つまり——。

梅春は、眠狂四郎に据膳を摂らせることによって、死霊を、移したわけであった。

話をききおわった狂四郎は、苦笑して、

「お前は、わたしが、死霊にとり憑かれやすい男と、看てとったのか」

「申しわけございません」

梅春は、畳に両手をついて、詫びた。

「信じがたい話だが、げんに、昨夜、こっちは、迷惑を蒙ったからには、死霊がこの世に在る、

ということを、否定もできまい」

狂四郎は、そう云って、腰を上げた。

「あの……、あたしを、お許し下さいますか？」

梅春は、狂四郎を見上げた。

「移された死霊を、また、お前にかえすわけにもいくまい。こんどは、わたしが、とり憑かれそうな女子をさがして、枕を交して、移してやることになる」

それが、狂四郎の去りがてらの言葉であった。

三条大橋

大津を過ぎて、京師に入る道は、すべて山の中である。

大谷、追分、横木、四の宮を通り、奴茶屋、藪の下、日の岡を過ぎて、京の町なかへ入り、蹴上げ、粟田口から白川橋を経て、三条大橋に至る。

——京に入る。

その気分のせいか、渓谷を流れる水音も、ふかい山嶽の彩りも、おのずから趣きをあらためるように思える。

知識が深ければ、通り過ぎてゆく景色の中に、いにしえの逸事を思い泛べ、その人々を偲ぶことができる。

四の宮を過ぎれば、この道を、天和のむかし、異相の道人真慶法印が、襤褸をまとって、牛に乗って、ぽくぽくと参内して行ったか、と偲ばれる。山科に至れば、当然、大石内蔵助を想起する。大石の断食石、花山稲荷、梅本寺、阿弥陀堂、元慶寺、僧正遍昭の墳、東山寺、瀋谷小町寺など、すべて、京師へ出る路傍にある。

山科からは、五条橋へ出る下街道が岐れている。

その岐れ道の北側に、奴茶屋がある。

この茶屋の先祖は、片岡丑兵衛という射術の達人であった、という。

店の内には、無数の箭鏃が、飾ってある。」

その落間の、緋毛氈の床几に、一組の男女が、腰かけていた。
男は、尾羽打ち枯らした、という形容そのままの浪人者で、時折、とがった肩を顫わせて、空咳をしているのは、胸を患っていることを示していた。凡庸な容貌だが、ふっと双眸を細めて遠くを視る表情に、飄乎としたものが漂うて、尋常の男ではない片鱗をうかがわせる。もう四十を過ぎているように見受けられるが、実際にはまだ若いのかも知れない。
女の方は、三十に手がとどく年増だが、京女らしい肌理のこまかな美しさをまだそなえている。莫連ともいえる崩れた姿に、一抹の愁いの色をとどめているのは、気質に哀しさを持っている証左であろうか。
「ほんまに、よろしゅうおすのか、そのからだで――勝てるのやろか？」
「わからん。勝負は、時の運だろうな」
浪人者は、他人事のように、こたえた。
「変った御仁どすな、東閑さんも――」
「近江の人間は、変り者が多いようだ。大むかしの学者に小野妹子が居る。北村季吟、山崎宗鑑。俳句では、其角もそうだし、許六も居れば、丈草も居る。芭蕉が、遺言して、遺骸を葬らした男たちだ。絵では、鳥羽僧正か。比叡山延暦寺の座主になったが、三日で止めた変り者だ。坊主などは、挙げればきりがない。最澄をはじめとして、慈覚、良弁。武将もまた多いな。蒲生氏郷、片桐且元、藤堂高虎、石田三成、木村重成……」
東閑というこの浪人者は、刺客を引受けて、強敵の来るのを、ここで待っているのであった。
その緊張は、みじんも、ないようである。
女には、それが訝しかった。

「おせんさん、わしは、時どき、自分の先祖が、猿丸太夫ではなかったか、と思うことがある」
「どうしてどす？」
「なんとなくだな。前々太平記という本に、猿丸太夫が、弓削道鏡だった、と書いてあるのを読んで以来、そんな気がして来た。孝謙女帝の寵を専にして、ついに帝位に望みをかけていることが露見して、下野の薬師寺へ流されることになった。そこまでは、大悪党だが、それからの振舞いが、面白いのだ。薬師寺へ流されるのをこばんで、田上の別業で、三年間、女帝の喪に服したが、そのあいだに、髪をのばして、名も猿丸太夫と変えている。崩御の後の弔いをするのだ。並の人間でも坊主になるところを、逆に、髪をのばして俗人になっている。面白い人間ではないか」
「東閑さん！」
おせんが、声音を顫わせて、袖をひっぱった。
「来ましたえ、あいつどす！　黒の着流し、異人面――まちがいはない」
「ふむ」
東閑は、床几から、やおら腰を上げた。
往還上へ立った東閑の前へ、ふところ手の着流し姿が、ゆっくりと近づいて来た。
「眠狂四郎殿と、お見受けつかまつる」
「刺客か、お主――」
狂四郎は、無造作に立った東閑の姿勢に、兵法の奥旨をさとった者の、微塵の隙もないのを看てとって、云った。
「その通りでござる。薩摩の京都留守屋敷へ呼ばれて、調所笑左衛門殿から、依頼され申した」

そう告げてから、東閑は、力のない咳を洩らした。

狂四郎は、冷たい眼眸を当てて、

「病んでいる御仁との立合いは、ご免を蒙ろう」

と、云った。

「いや、拒絶されるな。拒絶されると、それがしが困る。すでに、調所笑左衛門殿より、前金二十両を受け取って居り申す。貴殿を討ち果して、佩びられて居るその無想正宗を持参いたせば、あとの八十両を頂戴できるのでござる」

「それは、お手前の勝手な算段であろう。こちらには、病人を斬る存念は起らぬ」

「余命いくばくもない身だからこそ、敢えて、あさましゅう、刺客を引受けたのでござる。それがし、甚だ不運な男でござってな。五年前に喀血して以来、寝たり起きたりの穀つぶしの身になり、今年七歳になる娘は、栄養不足でにわか盲に相成り、やむなく、女房め、三年前に、島原に身を沈めて、亭主と娘の飢えを凌がせ申したが、前借金だけでは、薬餌料が足らず、その後も借金を重ねて、年期は明日で明け申すが、自由の身にはならず、土佐の廓の方へ売られようといたして居り申す。されば、それがしは、病軀に最後の働きをさせて、百両を手中にしなければなり申さぬ。七十両を女房の前借代に当て、三十両を薬餌代に当てる――こういう次第でござれば、何卒、立合いの儀、ご承知下されい」

奴茶屋から北へ入って、数町を辿ると、俗に高野堂と称ばれる古刹安祥寺がある。

眠狂四郎と東閑の決闘は、その境内で行われた。

東閑は、狂四郎がこれまで出会った多くの強敵に比べて、優るとも劣らぬ腕前の持主であった。

狂四郎は地摺りに、東閑は青眼に構えて――一刻以上の不動の対峙が為された。

ところどころに雪の消え残った境内は、鳥も啼かず、風も落ち、全くの静寂が占めていた。冬の木漏れ陽が、目に見えぬ速度で、両者の影法師を、移動させたばかりであった。

勝負は、一瞬にして、決した。

天と地をつんざく凄じい懸声とともに、東閑が、猛然と撃ち込み、同時に、狂四郎の長身は斜横に奔った。

そして、両者は、その位置をとり換えて、再び、対峙した。

しかし、その対峙は、数秒とはつづかなかった。

東閑が、ゆらっと上半身をゆらめかせると、咽喉奥から押し出すように、

「や、やぶれ、申した」

と、呟くように云った。

狂四郎は、がくっと膝を折って地面へ蹲る東閑を、凝っと見戍った。

東閑は、身を支えていた白刃をすてると、片手で両断された腹を押さえ乍ら、徐々に顔を擡げて、狂四郎の視線を受けとめた。

狂四郎は、刺客としては、あまりに飄逸な風格をそなえた敵に対して、次の言葉を与えざるを得なかった。

「お手前が、調所笑左衛門から受け取る筈であった残りの金子八十両、わたしが調達いたそう」

「か、忝けない」

東閑は、微笑しようとしたが、その力はすでに失せていた。

おせんという女が馳せ寄って、
「東閑さん！」
と、抱きかかえた。
「おせんさん……やっぱり、あんたの、云うた通り……、こ、このからだでは、勝てなんだ」
東閑は、云った。
「東閑さん！」
おせんの双眸から、泪があふれた。
狂四郎は、東閑が息をひき取るのを見とどけてから、おせんに、
「この御仁は、家内が、明日、島原の年期が明けて、土佐の廓へ売られる、と申していたな？」
「はい」
「今夜のうちに、金を調達しなければならぬことだな？」
「はい」
「では、今夜ぎりぎり……子刻（午前零時）、三条大橋の上で、待っていてもらおう。あとの八十両を、そなたに渡す」
「……？」
おせんは、なかば疑惑の眸子で、狂四郎を仰いだ。
「わたしは、ほかに取柄のない男だが、約束は守る」
狂四郎は、そう云いのこした。

三条大橋。

京のみやびは、山のたたずまいと、川の流れに、現れている。東海道は、この三条大橋でおわる。一立斎広重も、ここで、筆をおさめている。

この日、京は、小雨であった。

蕪村の句にもある。

　春雨や四条五条の橋の上

視界は濡れて、京の円やかな山々は、ぼうっと烟っていた。賀茂の流れに架けられたいくつかの橋の、やわらかな曲線も、音もなく落ちる銀糸のような雨脚の中に、霞んでいた。

雨もまた、みやびをつくる美しい作業をつとめている。

尤も――。

旅先にある気短かな江戸っ子にとっては、そんな風雅の趣きに心を惹かれる余裕はなく、底冷える雨にうたれて、無粋なくしゃみを、橋から川面へとばした。

「こん畜生っ！　臍の裏側が、じんじん鳴りやがるぜ」

金八は、もう一度くしゃみをしてから、胴顫いした。

金八は、今日でもう一月以上も、この三条大橋の上で、眠狂四郎の到着を待ち受けている。狂四郎が、亀山城下を通り過ぎたところまでは、金八の耳にもとどいていたが、それからあとは、消息が絶えていたのである。

掛川宿で別れる時、

「どこでお待ちして居りやしょう？」

と、訊ねると、

「さきに、京へ行ってくれ。三条大橋に、午頃立っていれば、いずれ、現れる」

その返辞だったのである。

で——、金八は、毎日、午から半刻あまり、ここに立って、待ち呆けをくらいつづけていたのである。

「来ぬか雨、って、このことだあ。いってえ、どうしたってんだ。冗談じゃねえや、全くの話——」

ぶつぶつ云って、首を振る金八を、顔馴染になっている橋袂の茶屋の女が、かたわらを通りかかって、

「雨の中を、ご苦労どすな」

「へっ、今の苦労の泪の雨が、川という字になるを待つ、って——待ちかたにもいろいろ、あらァな。くそ面白くもねえ」

もう一度、くしゃみしかけて、金八は、そのくしゃみを、途中で止めると、

「わあっ、わあっだ。来た——こりゃ、みな見ろ、東西東西!」

と、走った。

眠狂四郎の姿が、橋袂に現れたのである。

「先生っ! ひでえや! 女なら、人目厭わず、胸ぐらとって——」

「待ったうらみをつい云いすぎて、胸で詫びさす憎い人、か」

狂四郎は、笑って、

「理江は、どうした?」

「どうしたもこうしたもありませんや。お嬢さんは、岸和田へ行って、殿様の生命を狙っている

うちに、とっ捕って、あわれや、花の生命を散らしましたぜ」
「そうか」
——また一人、おれに会ったために、不幸な運命にあまんじた。
暗然となった狂四郎は、しかし、すぐに、理江の俤をはらいのけると、
「使いをたのむ、金八」
「へい、待ってやした」
「薩摩の留守屋敷へ、わたしの手紙を届けてくれ、調所笑左衛門という狸爺さんに渡すのだ」
「返辞は？」
「要らぬ」
金八は、封書を受けとると、歩き出そうとして、あわてて首をまわし、
「また、このまま、どこかへ消えるんじゃございますまいね？」
「今夜子刻——この橋の上で、用がある」
狂四郎は、こたえた。

薩摩藩京都留守屋敷に、二十日あまり逗留している調所笑左衛門は、暗い気分の日々をすごしていた。
西国十三藩を語らって、密貿易の盟約をむすび、愈々、実行に移す間際になって、公儀をおそれた各藩が、つぎつぎと、脱落したのである。
今日までに、すでに、八藩が、離れ去っていた。
のこり、四藩も、脱落するであろうことは、目に見えていた。

「所詮、二百年の泰平で、大名は、腰抜けになった」
笑左衛門は、絶望した。
今日も――。
大坂蔵屋敷から戻って来た海老原清熙が、暗い報告をもたらした。
岸和田藩の岡部長慎が、百姓一揆、逃散の責任をとって、隠居願いを、さし出した、という。
「岡部長慎までが、腰が抜けたか」
笑左衛門は、吐き出した。
岡部長慎は、まだ三十歳の男盛りで、笑左衛門が会った大名の中では、たのもしい人物と思われたのである。
智能も豊かで、神経も鋭く、度胸もそなわっているように見受けられたことだった。
その大名までが、怯じ気づいて、隠居する、という。
「海老原、もう、いかん！」
「は――？」
「薩摩一藩だけで、公儀と太刀打ちせねばならぬ時態が、やがて参るであろう。その時、さいわい、この笑左一人の生命をすてて、事が済めばよいがの……」
「…………」
「茶坊主あがりのこのわしに比肩する度胸を持った大名が一人もいなかったとは、なさけないのう」
そう云った時、留守居下役が、一通の封書を持って入って来た。
「眠狂四郎の使いと申し、町人が、これを持参いたしました」

「そうか。東閑ほどの手練者でも、眠狂四郎を討ち取れなかったとみえる」
笑左衛門は、手紙を披いた。
清熈は、読み流す笑左衛門を、見戍った。
笑左衛門は、読みおわると、
「海老原、この京に、東閑に優る剣客は居るかな？」
「さあ？」
「留守居を呼んで、至急に、さがしてもらおう」
「どうなさいます？」
「眠狂四郎の奴、挑戦して参った。……東閑が、勝ったあかつき、八十両を受け取る筈であった由、その金は、島原の遊女となって居る東閑の妻の身請け代に当てなければならぬゆえ、この眠狂四郎が東閑に代って所望したい、そこで、あらたに、刺客をやとって、それに八十両を与えて、今夜子刻、三条大橋まで、さし向けられたい、この眠狂四郎が、立合いの後、頂戴いたす——どうだ、見事な申し入れではないか」
「はあ——」
「十三藩の中に、これほど、堂々たる態度を示した者が、一人でもいたか。敵にまわった素浪人ただ一人に、こちらは、束になっても、及ばぬ。……最後の運だめしだの。眠狂四郎を、三条大橋の上で、斬ることができれば、わしの運がのびるかも知れぬ、さし向けた刺客の方が仆れれば、わしの運も尽きた、とあきらめよう。……海老原、強い奴をさがしてもらわねばならぬぞ」

やがて、丙夜を報らせる梵鐘が、東山から鳴りはじめる頃あいであった。

雨はあがっていたが、地上のすべてを凍てつかせる寒気が、雲間からさす月明の中に、びいんと張りつめていた。

霜の降りた往還に、駒下駄の音が、高くひびく。

賀茂川に沿うた往還で、三条大橋に向って近づいて行くその孤影のほかは、もう往き来する者は見当らぬ。

おせんは、今年七歳になる東閑の娘を背負うて、やって来たのである。

「小母ちゃん……」

ねむっているものとばかり思っていた子供から、不意に呼ばれて、自分の影法師へ視線を落してなかば放心していたおせんは、びっくりして、

「あれ……、目をさましていたのかえ？」

と、首をまわした。

「どこへ、行かはるの？」

「あそこの三条大橋へ行くのどす」

「あそこで、なにしやはるの？」

「おさむらいに会うて……、お金を頂戴して——そうしたら、お嬢ちゃんのところへ、母様がもどって来やはるのどすえ」

「そう……」

子供は、おせんの背中へ顔をつけて、それきり、口をつぐんだ。

——ほんまに、あの眠狂四郎という浪人者は、八十両もの大金を調達して、現れるのであろう

か？

おせんは、信じ難かった。

約束の時刻が来たので、やって来たものの、寒気の中で、梵鐘の音をききおわったら、むなしくひきかえすことになるのであろう、という気がしていた。

橋袂に来て、おせんは、立ちどまった。

じっと立っていると、全身がこのまま氷と化してしまうようであった。

——人を平気で斬りすてるような男の約束など、どうしてあてにできるものだろうか？

幾度もくりかえした独語を、また、胸のうちで、もらした時、

ぼおん——

と、夜空に、梵鐘の音が、鳴り渡って来た。

と——。

むこうの橋袂にある白馬（居酒屋）から、ふらりと、一個の黒影が、現れるのを、おせんは、みとめた。

——あれだ！

おせんの胸が、はずんだ。

その黒影が、ゆっくりと、橋の中ほどまで進んで来た時、もうひとつの跫音が、おせんの背後からひびいた。

かたわらを、足早やに過ぎて、橋を渡って行ったのは、恰幅のいい大兵の武士であった。

武士は、むこうから歩いて来た黒影と、橋上で、二間あまりの距離を置いて、対峙した。

「眠狂四郎殿だな？」

「左様――」
「無念流・大河内東馬！」
名乗るや、羽織と下駄をすてて、すでに襷がけしている身を、構えざま、抜刀するさまを、おせんは、固唾をのんで、見戍った。
眠狂四郎も、それに応じて、腰から白刃を鞘走らせた。
その地摺りの構えを眺めて、おせんは、思わず、ぶるっと身顫いした。東閑を斬った憎しみが、あらたに、わきあがった。
人影も物音も絶えた橋上に於けるその対峙の時間は、高野堂の決闘とちがって、ほんの短いものにすぎなかった。
おせんは、眠狂四郎の剣が、ゆっくりと円月を描くのを、目撃した。
そして、その切先が、天を指した瞬間、対手が、橋板を蹴って、斬りつけ、狂四郎の姿は沈んで欄干にかくれた。
武士もまた、一間あまり奔って、仆れると、欄干の蔭に見えなくなった。
立ち上ったのは、狂四郎の方であった。
討ち果した敵のそばへ寄ると、身を跼めて、なにやら、さぐっている様子であったが、こちらへ向って、ゆっくりと、橋を渡って来た。
おせんは、大きく吐息して、背中の子供へまわした両手へ、力をこめた。

解説

尾崎秀樹

眠狂四郎は昭和三十一年五月から「週刊新潮」誌上に登場した。この奇妙な名前をもつ戦後派のニヒル剣士は、異人の血をひいた独得なマスクに加えて、剣を凶器として用い、平然として女を犯すなど、ユニークなキャラクターで人気をよび、以後ながく大衆のアイドルとしてその風貌を印象づけてきた。

この眠狂四郎の登場は、いくつかの点で昭和三十年代の状況を反映しており、時代の象徴ともいえるものだった。二十年代の末に「週刊朝日」が百万部突破を記録したあとをうけて、三十一年二月から「週刊新潮」が創刊され、以後、新しい週刊誌の創刊があいつぎ、週刊誌時代を迎えるが、これは戦後の大衆社会状況の深化をしめす現象のひとつでもあった。週刊誌は特集記事と小説の二つの柱をもつが、出版社系の週刊誌は新聞社系の週刊誌にくらべ、機動性のとぼしさをカバーするために、読物の興味的な内容に力を入れ、それが小説の読切り連載という形式をうみ出した。柴田錬三郎の『眠狂四郎無頼控』は、その形式にぴったりの作品だったのだ。

「週刊新潮」には創刊以来、五味康祐の『柳生武芸帳』が連載され、柳生一族を組織的な隠密集団としてとらえる解釈で、同じく五味の『柳生連也斎』における西部劇的な処理とともに、チャンバラ小説に現代性をもりこみ、この時期の剣豪ブームをひらいたが、眠狂四郎の活躍もまたそのブームに大きな影響を与えた。剣豪ブームはその後、忍法ブームへ移行するが、それをもふく

めて、大衆文学の正統である伝奇小説の戦後における復活が、これらの作品によってなされたといえよう。

『柳生武芸帳』や『眠狂四郎無頼控』の連載以後、大衆の剣豪イメージが一変したといわれる。週刊誌のあいつぐ創刊は、テレビ時代における電波文化にたいして、活字文化が巻き返しを策したものだが、そのヒーローである新しい剣豪たちは、時代にふさわしいロマンをもとめる大衆の志向に応じて、まず週刊誌上で活躍し、まもなく映像の方にも舞台をうつし、それがさらに原作の人気をあおるといったマスコミ文化の立体化法則に従って、アイドルとしての地位をたかめていく。そして円月殺法のニヒル剣をふるう眠狂四郎はその代表選手であった。

こうした圧倒的な人気にこたえて、作者である柴田錬三郎は、以来えんえんと眠狂四郎シリーズを書きつぐことになった。はじめは二十話で終る予定だったのが、『眠狂四郎無頼控』だけで昭和三十三年三月までに百話を連載、翌年一月から七月まで続三十話を書き、「独歩行」「殺法帖」「孤剣五十三次」「虚無日誌」「無情控」「異端状」とつづくほかに、週刊誌の読切連作と関係なく発表した狂四郎ものもある。

柴田錬三郎は『柴錬巻談』の中の「時代小説について」というエッセイで、実作者の楽屋話を述べているが、それによると眠狂四郎とはもう十数年のつきあいだが、時にはうんざりして、いいかげんで絶交したくなることもあるそうだ。

「私は、週刊誌に眠狂四郎を連載しはじめた時、百話で、渠(かれ)を死なせるつもりであった。こういう人物が、そんなに長く生きられる筈はないのである。

百話目には、悽愴(せいそう)無比な斬死をしてしまう人物だ、と思いきめていた。

それが、週刊誌ならびに読者の希望によって、ついに、今日まで生きのびてしまった。私自身、

やりきれぬ思いにかられる時があるのも、しかたがあるまい」

その述懐のあとに「但し――」とつづけ、「自慢できるとすれば、ただのひとつも、同じような話を書いていないことであろう」と彼はいう。原稿用紙二十枚たらずの一話ごとに趣向をこらし、しかも一週間で一話をつくりあげるのは、作者の告白をよむまでもなく、容易な努力ではないことがわかる。「先週号は、あまり面白くなかったですね」などと読者はいうが、作者としてみれば休載しなかっただけでほめられたいくらいだ。「はじめのうちは、テンポが早くおもしろかったが、最近はマンネリ化してつまらなくなった」という批判も、作者の側からいえば、最近のほうがむしろ趣向をこらしているのだが、読者が読み狎れてしまったためであり、「作者たるもの、ますます、つらい」ということになる。これは「虚無日誌」を書き終えた昭和四十四年頃の文章だから、同様な苦労がその後もくり返されたわけだ。

『眠狂四郎孤剣五十三次』は「週刊新潮」の昭和四十一年一月十五日号から四十二年三月四日号へかけて連載された。眠狂四郎が水野越前守忠邦の側用人武部仙十郎につながる影の男であり、その依頼で危険な仕事に専念するという設定は変らないが、この編では忠邦は西丸老中から本丸老中へと昇進している。「独歩行」では風魔一族と隠密黒指党の戦いが背景となり、「殺法帖」では本丸老中と西丸老中一派の幕閣内での政権争いが遠景に据えられていたが、『孤剣五十三次』の場合は、幕府にたいする西国十三藩の謀議を探るために、狂四郎が東海道を西上するといった構図により、宿駅ごとの事件が語られる。したがって東海道五十三次のほかに、出発点の江戸日本橋と、到着地の京都三条大橋を加えた五十五話で構成されており、道中記仕立てになっているのが特徴だ。

薩摩をはじめとする十三藩の大名が、一斉に正月に帰国を願い出たことから、謀議を感づいた

武部仙十郎は、狂四郎にそれらの藩の相手をしてほしいと言い、まず元旦早々に帰国する岸和田藩主岡部美濃守の懐中から、連判状をまきあげるように命じた。狂四郎は主君に手討ちにされた藩士の娘理江に、日本橋の上で切腹の場面を演じさせて行列をおどし、巾着切(きんちゃくきり)の金八の協力でそれに成功するのが第一話だ。だがそれ以後、理江は狂四郎を慕い、狂四郎の道中のあとさきになって東海道を上り、彼女と同行する金八をやきもきさせるのだ。

当然のことに、謀議に加わった各藩は、さまざまな形で狂四郎の旅を妨害し、その生命を狙う。すでに水野邸へ向う前にあらわれた大目付の附人・都田水心(みやこだすいしん)は、何度か彼の周辺に姿をみせ、各種の策を弄して狂四郎をおとし入れようとし、いまひとつの強敵は、隼人(はやと)隠密党と称する薩摩の暗殺団だった。品川でその隠密党と戦って十二人の耳をそいだ狂四郎は、川崎では都田水心の仕組んだワナにはまりかけ、つぎの神奈川ではふたたび隠密党と出会う。といった具合に、この両者との対決は、五十五話のうちでもかなりな数をしめるが、そのありかたはことなり、自源流の手練者(てだれ)で構成された隠密党が、つねに一騎討ちの厳法をまもって一人ずつ狂四郎と勝負し、凄絶な斬りあいがかさねられるのに反して、都田水心は謀略戦を挑み、たくみに狂四郎の弱点をついてくる。

西国十三藩の謀議とは、財政窮迫に悩む各藩が、薩摩の島津家の誘いに応じて密貿易を行うための連盟を結んだものだったが、その挫折(ざせつ)の経過は物語の遠景におかれるだけだ。ただ中心人物の調所(ずしょ)笑左衛門が狂四郎をマークし、彼を倒すために隠密党や琉球(りゅうきゅう)忍者十兵衛、その他の刺客をつぎつぎと送りこみ、その人間関係が二次的な事件をもよんで、狂四郎はそのつど危機にさらされる。沼津では彼を兄の仇(かたき)と誤解する娘千佐の吹針を目にうけて、しばらくは盲目で旅をつづけたこともある。

こうした対決とは別に、狂四郎の腕をみこんで助けをもとめられるケースもあり、好んで、あるいは知らずにまきこまれた事件も少なくない。島津斉興(なりおき)の側妾由羅(ゆら)が十年前に狂四郎がはじめて知った女であったことや、少年時代の思い出につながる下僕弥助の墓を訪ねようとして、村の騒動にかかわるといった、彼の過去が影をおとす話も入っている。

道中で狂四郎と関係をもち、愛を抱く女性の数も多く、冒頭に登場した理江をはじめ、小田原での小夜、藤枝でのお登奈、浜松での築江、四日市から石部にかけて出てくるきくなどがいるが、中でもお登奈は背中に狂四郎の像を彫り、彼の華々しい最後をみとどけたいと語り、またきくは三年かかって仕立てた小袖を狂四郎に着せたことから、彼が待っていた男だと一途(いちず)に思いこむ。おなじみの脇役、立川談亭や金八が独特な持ち味をみせるくだりもあり、江戸で旧知の彫宇之を救う話もからむが、二川(ふたがわ)で都田水心を倒した後、彼をおそう最大の危機は、鈴鹿峠における隼人隠密党の襲撃であろう。狂四郎はそこで二十七名中十五名を斬ってかろうじて生きのび、さらに京都へ入ってからも二人の強敵を倒す。

このように作者はさまざまな趣向をこらして多彩な人間模様を展開し、随所で狂四郎に無想正宗の冴(さ)えを発揮させながら、五十三次の旅を終らせる。彼の孤独と虚無は依然としてふかいが、その人間的な肌合いは亡き妻美保代をしのぶ感情や、築江について「おれは、あのような孤独な翳(かげ)を持つ女には、弱い」と告白する言葉、まえは主君の命で彼にたち向い、敗れて死んだ若侍たちに、「おのれらの生きる道が、別の世界にもあることを知らなかったのか」と暗然とした思いを抱くシーンなどからもうかがえる。むしろ彼の虚無感が殺しをかさねることでかえってふかまるのは、作者のもつ近代的な意識の投影であろうか。

東海道の道中記は十返舎一九の『東海道中膝栗毛』をはじめ数多いが、作者はその風物を描く

にあたって、昭和七年に出版された村田峯次郎の『東海道旅行物語』に負うところが多かったと、エッセイ集『どうでもいい事ばかり』で述べていた。「胡麻の蝿」が「護摩の灰」から出たという知識などは、そこから得たらしい。作者自身、五十三次を丹念に歩き、「その気になれば、五十三次を一日も欠かさず、女を抱くことができたのである」とかつての様相をしのんでいる。宿駅ごとの風物、人情を背景に、多彩な物語を描き出す道中ものの特徴をたくみに織りこみ、ニヒル剣士の活躍に地理的な興趣を添えるこころみが『孤剣五十三次』にはつらぬかれているが、どの一話も同じパターンにおち入らぬよう心がけたところに、作者の苦心と空想力がよみとれる。それにしても、その師佐藤春夫が、小説とは「花も実もある絵そらごと」だと言った言葉を、柴田錬三郎はここでもまたみごとに実証してくれたのだ。

（昭和五十三年五月）

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には当用漢字以外の漢字も使用し、音訓表以外の音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

この作品は昭和四十二年四月新潮社より刊行された。

眠狂四郎孤剣五十三次
（ねむりきょうしろう こけん ごじゆうさんつぎ）

新潮文庫　草150＝21

昭和五十三年七月二十五日　発　行
昭和五十九年九月十五日　十五刷

著　者　柴田錬三郎（しばたれんざぶろう）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部（〇三）二六六―五一一一
編集部（〇三）二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㈱　印刷・東洋印刷株式会社　製本・有限会社加藤新栄社

ISBN4-10-115021-4　C0193